

平成 30 年度 課程博士学位論文

東京藝術大学大学院音楽研究科 音楽専攻

学籍番号 2315905 崎谷明弘

21 世紀のピアノコンクールにおける、
日本出身ピアニスト・コンテストについて

目次

序章	5
1. 研究動機	5
2. 研究目的と各章の概要	6
3. 先行研究の概要と用語の説明	10
第1章：マコーミックの先行研究とそれを踏まえた本研究のポリシー	11
1. マコーミックによる先行研究論文についての詳説	11
2. マコーミックの功績と研究への批判	23
3. 本研究のポリシー	27
第2章：WFIMC 加盟国際コンクール・入賞者の分析と、日本人入賞者の動向	30
1. WFIMC の概要と特別複数入賞者の定義	30
2. 21 世紀における WFIMC 加盟、準 WFIMC コンクール入賞者のコンクールごとの推移	37
2-1. 概要	37
2-2. ヨーロッパ諸国 1. イギリス・アイルランドのコンクール	39
2-3. ヨーロッパ諸国 2. ドイツ・オーストリアのコンクール	42
2-4. ヨーロッパ諸国 3. スイスのコンクール	47
2-5. ヨーロッパ諸国 4. フランスのコンクール	51
2-6. ヨーロッパ諸国 5. イタリアのコンクール	54
2-7. ヨーロッパ諸国 6. スペイン・ポルトガルのコンクール	57
2-8. ヨーロッパ諸国 7. ベルギー・オランダのコンクール	63
2-9. ヨーロッパ諸国 8. フィンランド・ノルウェーのコンクール	65
2-10. ヨーロッパ諸国 9. ギリシャ・トルコのコンクール	66
2-11. 旧ソ連諸国（ロシア・ウクライナ・ジョージア・リトアニア・アルメニア）のコンクール	68
2-12. ヨーロッパ旧東側諸国（ポーランド・ハンガリー・チェコ・スロバキア・ルーマニア・セルビア・クロアチア）のコンクール	72
2-13. 北アメリカ（アメリカ合衆国・カナダ）のコンクール	77
2-14. 東アジア（日本・韓国・中国・香港）のコンクール	81
2-15. その他の地域（イスラエル・オーストラリア・南アフリカ・チリ・ブラジル）のコンクール	86
3. 入賞傾向とコンクールの役割分析（他コンクール入賞・独自上位入賞・既入賞・積入賞から）	88
4. 入賞者国籍の推移	97
4-1. 入賞者ポイントの基準と国・地域別データ	97
4-2. 入賞占有率と代表的入賞者の国別考察（トップ 10 諸国以外）	103
4-3. 入賞占有率の地域圏別・トップ 10 諸国の考察	108
5. 特別複数入賞者の動向	114
5-1. データと男女比	114
5-2. トップ 10 諸国の特別複数入賞者	126
5-3. 特別複数入賞者の入賞時年齢	129

6. 日本人入賞者の分析	130
6-1. 21世紀におけるWFIMC日本人入賞者とその分析	130
6-2. 日本人コンテストの得意なコンクール・不得意なコンクール	137
6-3. 日本人入賞者の国内コンクール実績と学歴・留学経験	142
7. 日本人審査員と日本人入賞	147
第3章：アンケート・インタビュー調査から見る日本出身コンテストの特徴と性質	150
1. アンケート・インタビュー調査の手法	150
1-1. 概要	150
1-2. アンケート回答者の属性	151
1-3. インタビュイーの紹介	154
2. アンケートの集計と分析・インタビューを交えた考察	156
2-1. コンクールは好きですか	156
2-2. コンクールの申し込みに関する質問と学校での情報教育	156
2-3. レパートリー選択についての質問	168
2-4. 練習に関する質問	179
2-5. コンクールの参加環境についての質問	181
2-6. コンクール本番の演奏についての質問	184
2-7. 他者から受ける影響についての質問	190
2-8. 子供時代のコンクールについての質問	195
2-9. キャリアにつながるコンクール受験意識についての質問	197
2-10. 具体的なキャリア形成への意識とコンクールの役割	202
2-11. コンクールで勝つことと芸術性を深めることへの葛藤	208
2-12. 日本人入賞者の減少についての質問（インタビュー調査から）	212
第4章：周辺環境（聴衆・市場・メディア）のコンクール入賞への意識	217
1. 聴衆のコンクールに関する意識調査	217
1-1. 回答者の属性と分類	217
1-2. ピアノコンサートに来場する頻度について	219
1-3. 演奏会选择と受賞歴との関わりについて	220
1-4. コンクール参加への直接的な支援について	226
1-5. 一般聴衆とコンテストとの意識差	228
2. オーケストラ招聘ピアニストから見る日本市場における入賞者の扱い	232
2-1. 招聘者調査	232
2-2. 分析と考察	251
3. コンクール入賞の新聞報道	254
3-1. 入賞記事の掲載の仕組み	254
3-2. 全国紙の掲載基準	259
4. 周辺環境に関する入賞者の思い	264

第5章：研究結果からの提言	267
1. WFIMC 加盟コンクールでの日本人入賞者減少を食い止めるために	267
1-1. 概要と要因	267
1-2. 提言	268
2. 周辺環境のコンクール入賞への理解を深めるために	272
2-1. 概要と要因	272
2-2. 提言	273
3. コンクールをさらに活かす	278
結章	280
1. 各章のまとめと結果	280
1-1. 第1章のまとめ	280
1-2. 第2章のまとめと結果	281
1-3. 第3章のまとめと結果	282
1-4. 第4章のまとめと結果	284
1-5. 第5章のまとめ	285
2. 結論	286
3. 今後の課題	286
謝辞	287
参考文献	289
1. 学位論文	289
2. 和書	289
参考 Web サイト	291
1. 引用したり、内容を論文に反映したりしたサイト	291
1-1. 洋文サイト	291
1-2. 和文サイト	295
2. 事実の確認目的に閲覧したサイト（一覧のみ）	302

序章

—— コンクールの結果はいつも予測不可能なものですが、才能を披露し、知られるようになるための最も良い方法であると私は信じています。¹ (BNDES リオデジャネイロ国際ピアノコンクール芸術監督：リリアン・バレット)

1. 研究動機

日本がコンクール大国と言われて久しい。かくいう筆者も 7 歳で地元のコンクールに出場して以来 22 年間、毎年欠かすことなく出場を果たしてきたが、ここ数年は指導や審査を行う立場に変わりつつある。

1890 年に帝政ロシア・サンクトペテルブルクのルビンシテイン国際コンクールが、初めてピアノ部門を持つ国際コンクールとして開催されてから早 128 年、コンクールは今やほとんどのピアニストにとって演奏家キャリアへの履歴書として、あるいは日々の研鑽と学習のために欠かせない、世界中で定着した制度となったが、未だその学術的な研究はほとんどなされていない。

時にコンクールの結果は、人生を大きく左右する。それゆえ多くの若手ピアニストが入賞を必死に目指して努力しているにもかかわらず、その実践について智慧を絞ることは、参加者本人と指導者に一任されている。筆者は幸運にも迫昭嘉先生と出会い、その導きにより大きな賞をいくつかいただいたが、出会いの相性は如何ともし難いものであり、ただ天命に任せるしかない。

世界的な国際コンクールの現状についても印象論で語られるのみである。インターネットの急速な発達に伴い、情報入手が容易になり、申し込み手続きも簡素化されたことで、競争はますます激しくなった。特に国際コンクール世界連盟 (WFIMC) に加盟する格式あるコンクールのレベル差は、拮抗するようになってきたと思われるのに、日本では一部の超有名なものが取り上げられるのみである。また近年、しきりにアジア人が強いと言われるが、果たして実際はどれほどの割合で入賞者を出しているのだろうか。アジア人と一口に言っても国籍別に見た場合の比率はどうか、クラシック音楽の本場であるヨーロッパ系の入賞者は本当にいなくなってしまったのか、何より世界的に見てこの日本はどこに位置する

¹ 2015 年 8 月 11 日の筆者宛メールにて。

のか。そういった疑問に対して、データに裏付けられた考察は行われてこなかった。

かたや日本の音楽市場では、聴く人に対して演奏する人が多すぎると嘆かれ、聴衆の獲得に汲々とし、裾野を広げるといった言葉がスローガンのように叫ばれ続けている。たとえ非常に難しいコンクールで成功を収めたとしても、好きな音楽を極めるだけで十分な収入を得られる訳ではない。そして、優秀な成果をあげた日本人入賞者はどのような経歴を辿ってきたのか、現代のコンテストたちは何を考え、何を想い、何を目的にコンクールを目指すのか…その全体像は不明瞭で、アーティストのプロフィールや時折行われる新聞や専門誌のインタビューなどから、一部分を垣間見るのみである。

筆者がこの研究を志したのは、単にコンクールに勝つための方法を論じたいがためではない。今せつかくあるコンクールというリソースを、音楽家自身もその周辺環境も、もっともとうまく活用することができれば、特効薬とはならずとも、厳しい状況を好転させる一助になるのでは、少なくとも今は開かれてもいない議論の端緒になるのでは、という痛切な思いからである。

2. 研究の目的と各章の概要

本論文では、21 世紀における日本人コンテストや彼らの国際コンクール入賞の現状を把握すると共に、その水準や価値が広く認識されているかどうかを明らかにすることを主な目的とし、以下のような問いを立てて、検証・解明を行う。

1. WFIMC に加盟、またはそれに準ずるピアノ部門のあるコンクールにおいて、2001 年から 2017 年までの入賞を統計した時、世界的に見て日本が位置するのはどこか。
2. それらのコンクールで入賞を果たした日本人コンテストは、どのような経歴を辿ってきたのか。
3. 日本の音楽専門教育を受けたことのある現役、または引退して間もない日本出身コンテストが、コンクールやその後のキャリアについてどのように考え、実際にコンクール受験に臨んで来たのか。またコンクールでの成功者と位置付けられる WFIMC・準 WFIMC 入賞を果たした者に、特有性は見られるか。
4. 聴衆・市場・メディアに代表されるピアニストの周辺環境において、コンクール入賞の認識や反応、扱いはどのようなものであるか。

5. 1.-4.を調査する上で浮き彫りとなった、コンクールを受ける・受験をサポートする側と周辺環境側それぞれの問題点と、それを解消するための方策とは何か。

次に、各章の概要について記す。まず第1章では、L. L. H. マコーミックが2008年に発表した、米イェール大学博士論文、*Playing to Win: A Cultural Sociology of the International Music Competition* について、日本ではほとんど知られていない先行研究論文であるため内容を詳説し、功績と批判を述べた上で、本研究におけるポリシーをまとめる。

第2章の主要な目的は、世界中の難易度が高いコンクール群が軒並み加盟する国際音楽コンクール世界連盟 (WFIMC) の加盟コンクールやその入賞者について、21世紀の世界的な傾向と実情を把握すると同時に、日本人入賞者の特質や辿った経歴について調査することである。主な手法は、各コンクールの公式ホームページやアーリンク・アルゲリッチ基金 (AAF) が公式に公開している2001年から2017年のWFIMC加盟・それに準ずるコンクールの結果について取りまとめ、更に入賞者本人のホームページや出演コンサート・CDのプロフィールから年齢や学歴等の情報を新しくデータに付け加えて、コンクール別や入賞年代別、国・地域別等の集計から分析を行うものである。具体的な問いは以下に記載する。

1. WFIMC加盟コンクール（または加盟履歴のあるコンクール）において、各コンクールの入賞者が他コンクールで入賞している割合はどのようなものか。そのコンクールを入賞する前に入賞している割合が高いのか、そのコンクールを入賞した後に入賞する割合が高いのか、あるいは入賞者の独自性が高いのか。
2. 各コンクールが輩出した入賞者に、どのような地域・国籍の傾向があるのか。
3. 1. 2. について、コンクール開催国や地域で複数のコンクールをまとめた場合、全体の傾向や特質はどのようなものか。
4. 1. について、全ての該当するコンクールを比較した場合、キャリアスタート・エンド向けのコンクールという位置付けはあるのか。
5. 2. について集計を行なった場合、入賞国の世界ランキングは年・期間ごとにどのような推移を示すのか。各国を代表するコンテストにはどのような者がいるのか。
6. コンテストの中で特に優秀な成績を残した者たちには、どのような国籍・年齢・性別の傾向があるのか。

7. 日本人 WFIMC 入賞者の年齢・性別傾向や、年ごと・期間ごとの入賞数推移はどのようなものか。また、どのコンクールで数多く入賞してきたのか。
8. 日本人 WFIMC 入賞者が、国内を代表するコンクール（学生向け・一般向けの両者）でどのような成績を収めているか。
9. 日本人 WFIMC 入賞者の中でも特に複数コンクールで良い成績を収めた、または第 1 位を獲得した経験のある者は、どのような学習進路を経てきたのか。
10. 日本人審査員招聘と、日本人入賞との相関はどのようなものか。

第 3 章では、日本でピアノ学習経験のあるコンテストが、コンクールや自身のキャリアに対してどのように考えているのか、またその実態や問題意識を探ることが最も重要な目的である。具体的内容については下表を参照のこと。まとまった数の日本出身コンテストを対象にアンケート調査を実施し、男女別・年代別・入賞歴別の集計から行う分析・考察に加え、WFIMC 加盟コンクールの入賞者 4 人にインタビュー調査し、コンクールで成功を収めたピアニストの視点から、アンケート結果を交えた諸問題を論じたい。

1. コンクールの申し込み計画や、それに伴う困難についてどのような意識があるか。また、日本出身コンテストがコンクールを受ける動機や目的は何か。
2. 大学などの教育機関からコンクールへの情報は得られるものなのか。
3. レパートリー選択の重要性や具体的な選択に関して、どのような意識を持っているか。それについて入賞者と未入賞者とで違いはあるか。
4. コンクールに向けての練習は、競争のない演奏会等に向けての場合と違いはあるか。
5. コンクールの参加に対する楽しみや困難について、どのような意識を持っているか。本番の演奏については競争のない本番と比較してどのような変化があるか。入賞時と落選時を比較した場合に、どのような違いがあったと入賞者は認識しているか。
6. コンクールという特殊な環境下で、他の参加者や審査員といった他者から受ける影響はどのようなものか。

7. 子供時代のコンクール経験は、役立つものであるのか。また日本社会におけるコンクール受験への心理的負担の有無や認識はどうか。
8. 音楽家としてのキャリアについて、どこでどのような活動をすることを目指し、コンクール入賞はそこに役立つものであるか。
9. 競争性のあるコンクールの存在が、音楽を芸術から引き離していると考えられるか。

続いて第4章では、コンクール入賞者を取り巻く聴衆や市場・メディアといった周辺環境が、入賞をどのように捉え、入賞者をどう扱っているのかについて考察する。聴衆に関しては筆者のリサイタルの来場者に対するアンケート調査を、市場については在京・在関西に拠点を置くオーケストラに招聘されるピアニストの統計的な分類、そしてメディアには神戸新聞文化部の現役記者にインタビューを行って概略を把握した上で、それに基づいた質問事項を全国五大紙に問い合わせる手法をとる。前章に引き続き、入賞者4人のインタビューも交えながら、現状と改善が望まれる諸問題について論じる。問いについては以下の通り。

1. 一般聴衆にとってコンクール入賞は、演奏会に足を運ぶ積極的な理由となるのか。
2. 一般聴衆は、若手のコンクール挑戦について支援制度を設けることに賛成か。
3. 一般聴衆とコンテストとのコンクールに対する認識差はどのようなものがあるのか。また、コンクールの特色や水準等に、広く理解があるか。
4. コンクール入賞が、多くの聴衆の獲得に繋がると入賞者は認識しているか。
5. 在京と在関西のオーケストラがキャスティングしているピアニストは誰か。そこにコンクールの成果や音楽事務所の影響はどのくらいあるか。
6. 新聞は何を基準にコンクールを取り上げているのか。取り上げ方は、現代のコンクール事情に即しているか。それについて入賞者はどう感じているか。
7. 入賞者から見た周辺環境の問題点は何か。またそれを解消するために、コンクールを活用してできることは何か。

そして第5章では、これらの調査結果や考察を踏まえて明らかとなった二つの大きな課

題、WFIMC 加盟コンクールでの日本人入賞者減少を食い止めることと、周辺環境にコンクール入賞への理解を深めることに対し、原因を整理した上で考察し、今後実現可能な施策の提案や提言を行う。

結章では各章についてまとめと結果を記し、結論と今後の課題を述べるものとする。

3. 先行研究の概要と用語の説明

ジャーナリスティックな個々のコンクールについてのレポートや審査報告等は一定数存在するものの、複数のコンクールを渡り歩く日本人コンテストについて学術研究が行われた例は、筆者の調査の限り、これまでのところ見られない。先述したマコーミックの博士論文が、コンクールの存在やそこで行われる演奏の基本的な定義に加え、参加者・聴衆・メディアといった多岐にわたる観点から、その分類や論争を扱った最も重要な先行研究であると考えられる。実際に幾つものコンクールに同行し、その成果がまとめられている点も普遍的にコンクールを論じるに不可欠なものである。内容については第1章を参照のこと。

また本研究を論文にまとめるにあたって、いくつかの用語を新しく提唱したい。本文中初出時にも下線太字で強調し、必要に応じて説明を加えるものとする。

本論文で提唱する新用語

用語	説明
準 WFIMC	WFIMC 加盟経験のあるコンクールが加盟前・または脱退後で WFIMC 加盟していない状態の場合、この呼称を使う。
既入賞者(きに入賞しや)	既に他のコンクールで入賞経験のある、当該コンクールの入賞者。本論文ではほぼ WFIMC/準 WFIMC のコンクールに限定して使用する。
積入賞者(せきに入賞しや)	当該コンクールの入賞後、他コンクールで入賞を果たした入賞者。本論文ではほぼ WFIMC/準 WFIMC のコンクールに限定して使用する。
独自入賞者	当該コンクールのみで入賞している入賞者。本論文ではほぼ WFIMC/準 WFIMC のコンクールに限定して使用する。
入賞ポイント	入賞順位に応じたポイントを振り分け、国・地域別に集計したもの。詳しい基準は 97 頁を参照のこと。
入賞占有率	入賞ポイントをその国・地域が占める割合。年毎や期間毎の変遷を観察するのに使用する。
特別複数入賞者	WFIMC/準 WFIMC のコンクールを複数入賞している者で、次の条件のいずれかまたは両方を満たす者。 1. 1 位を獲得した上に他コンクールでも入賞しているケース 2. 3 位以上の入賞を複数回記録しているケース
スナイパー型コンテスト	一つのコンクールに絞って計画を立て、申し込み・受験を行うコンテスト。
もぐら叩き型コンテスト	受験可能なコンクールに複数エントリーし、合格したものを受けるコンテスト。
ライト層の聴衆	アイドル性やストーリー性を重視し、耳なじみの良い作品を求める聴衆。演奏以外の付加価値や流行に関心が高い。
コア層の聴衆	本格的なプログラムを愛好し、質の高さや個性を楽しみに音楽を聴きに來る聴衆。程度差はあるが、作曲家や作品・歴史についての見識を持つ。

第1章：マコーミックの先行研究とそれを踏まえた本研究のポリシー

1. マコーミックによる先行研究論文についての詳説

国際コンクールの出現から 125 年以上が経つというのに、コンクールを対象とする研究は、最近までほとんどなされてこなかった。第二次大戦後は雨後の筍のように世界各地で新しいコンクールが生まれ、数々の名演奏家を輩出してきたにもかかわらず、学術の世界ではその役割や、挑戦し続けるコンテスタントにスポットライトが当たることは少ない。そこに風穴を開けたのが、2008 年にリサ・ロレイン・ヘレン・マコーミックがイェール大の博士論文として発表した、*Playing to Win: A Cultural Sociology of the International Music Competition* (筆者訳；勝つために奏する：国際音楽コンクールの文化社会学)² である。日本では知られていないこの論文について、概要をまとめ、考察を行いたい。

以下特に断りのない場合は、27 頁まで引用は全てこの論文からである。原文は引用せず、「」または字下げのまとまりで筆者の抄訳のみを記し、引用元のページ数を付記する。この章ではマコーミックのことを<マコーミック>または<彼女>・<著者>と表記し、<筆者>は本論文の筆者（崎谷）を意味する。

「第1章：導入」では、音楽を演奏する上での演者の役割や作曲家の意図を正確に再現する指示について語った上で、既存の音楽文化学・社会学上の研究は「原典としての音楽」・「社会的な世界や産業の製品としての音楽」・「社会的行動への資源としての音楽」の3つのカテゴリーに分類されているが、それでは「音楽の遂行性」について不十分であると指摘し、第4のカテゴリーとして、演奏そのものを社会学的意味や文化的意義として考える「音楽演奏を社会的パフォーマンスとして捉える」ことを提起している。

著者の考えでは、音楽の文化研究は効力のある精細度に基づいた3つのカテゴリーから構成されている、原典としての音楽、社会的な世界や産業の製品としての音楽、そして社会的行動への資源としての音楽である。(22 頁)

これら3つすべてのアプローチが価値ある分析的な見識を提供しているとはいっても、どれもが音楽の遂行性について充分にあつかうことはできない。なぜならテキストに縛られているからであり、第一区分の研究は、演奏の実現性への身振り手振りに過ぎず、それは音楽学者が痛感している限界である。(26 頁)

² McCormick, Lisa Lorraine Helen. "Playing to Win: A Cultural Sociology of the International Music Competition." Ph. D. diss., Yale University, 2008.

著者は、これら社会的過程の重要性や音楽が果たす役割を否定しない第4の категориを提案したい。より正確には、次の論理的段階をとるには、音楽の演奏そのものが社会学的重要性や文化的な意義を有するものとしてみられるべきであるとの提唱である。言い換えれば、音楽の演奏を社会的パフォーマンスとして私たちが認知することを提案する。(32頁)

「第2章：国際コンクール：事例・理論・方法」の前半は、クラシック音楽のコンクールとはどのようなイベントであるのかを社会学的に定義したもので、今後のコンクール研究における指針となり得るものである。

19世紀の音楽文化が公共のコンサートであると定義されるなら、私たちの今の時代は、間違いなくコンクールの時代と記憶されるであろう。(37頁)

コンクールの急増や基準化よりむしろ意義深いのは、音楽の世界と幅広い文化領域で果たすようになった役割である。音楽コンクールは重要な制度である。世に出ること・コンサートの契約・高い質の録音などを含む名声あるタイトルや賞を称することによって、激しく競争する業界において若いプロフェッショナルがキャリアを確立する大きな手助けをコンクールは提供している。(50頁)

マコーミックは、コンクールの経歴は現代の音楽業界においては必要不可欠なものであった上で、社会学者がコンクールについて取り上げてこなかった理由については、

おそらく、コンクールは公共のリサイタルと間違われているのではないであろうか。一見すると両者には違いがそれほどないからである。似たようなレパトリーが、コンサート形式にて同じような開催場所で演奏されるからであり、聴衆のエチケットでさえ同様である。(39頁)

と推察し、

音楽コンクールを分析することを通して、私たちは社会的パフォーマンスと市民社会に支持される芸術の役割をより理解することが出来る。(39頁)

と述べている。また著名なコンクール(チャイコフスキー・クライバーン・リーズ・ショパン・ARD・パガニーニ・ブゾーニが挙げられている)のほとんどが1957年に創設された国際音楽コンクール世界連盟(WFIMC)の加盟コンクールであり、コンクールの歴史の中で、その選抜方法がオーディション形式からリサイタル形式へと変遷してきたと指摘し、課題曲や選曲がとりわけ重要であると主張する。

課題曲リストの作品を通して、コンクールはどのタイプの演奏家を探しているのか伝えており、参加者が比べられ査定されることを通して基準の決定がなされる。(48頁)

課題曲リストを放棄したコンクールもまた、選考ラウンドが構築される方法によって芸術的価値を伝達することができる。(48 頁、注釈 6)

同章の「社会学的思考によるコンクール」の項では、「生産展望の縮小が過度にコンクールの機械論的見方へと導いている」(53 頁)とした上で、

より可能性のある代案はパフォーマンス展望であり、それは制度的状況や物質的関心、または権力の重要性を減らしたり拒否したりしないということが意味の中心として認識される。(中略) このモデルにおいて社会的パフォーマンスは、6つの独立した要素から構成されている：集団的表現のシステム・演者・聴衆とオブザーバー・象徴的生産の手段・ミザンセーン(演出)そして社会的権力である。演奏に説得力を持たせるため、あるいは形式の相互主観性を達成する社会的相互作用のためには、これら全ての要素が整列し、融合と言われる状態にならなければならない。(53 頁)

と述べる。マコーミックは更に音楽コンクールにおいて、上記 6 要素のそれぞれを当てはめた時に生じる特徴を挙げる。一つ目の「集団的表現のシステム」では、大きなコンクールが「音楽のオリンピックとして述べられ」(56 頁) スポーツ大会に例えられることを指摘し、「音楽的天才の文化的概念」に見合ったパフォーマンスをすることが、賞賛や表彰に不可欠であるとする。二つ目の「演者」では、「音楽コンクールにおいて中心となる演者は、能力における最良の演奏をし、演奏の理想を表現しようと努力するコンクール参加者たちである」(57 頁) と定義するが、重大な指摘は、「これがすべてのライブパフォーマンスの状況であるとしても、コンクールにおいては特に違ってくる」(57 頁) という一文であろう。審査選考がない一般的な演奏会とコンクールにおける演奏は、異なる性質を持つと主張する。三つ目の「聴衆とオブザーバーについて」は第 5 章でも詳しく述べられるが、コンクールの聴衆について「相当に違った動機によって参加し、違った解釈の力量を持つセグメントによって成り立つ」(60 頁) と言及し、下表のように分類している。四つ目の「象徴的生産

マコーミックによるコンクール聴衆の分類 (筆者作成)

専門的な知識のあるグループ	審査員・コンサートパートナー・エージェント
音楽的バックグラウンドのあるグループ	批評家・ジャーナリスト
専門的な知識のないグループ	コンクールのパトロン・ボランティア・ホストファミリー等
実際に(現地で)参加していないグループ	新聞・ラジオ・インターネット視聴・ブログ

の手段」では、広告から入賞者のプロモーションに至るまで、主催者を中心とする情報発信について、コンクールを構成する大切な要素の一つとして挙げる。五つ目の「ミザンセーン(演出)」は、「あらゆる音楽的状況において、聴衆の予測と演者の演奏的技術の間で複雑に相互作用する」(63 頁) とし、

この意味で、あらゆる演奏にはリスクが計算されている。ところが音楽コンクールの環境はこのリスクをひどくし、その上大変に注目されることで、演出をわかりにくくする。これに関して、演者のセルフプレゼンテーションの成功は、聴衆の特定区分（審査員）が、音楽的台本の実現によって作られた審美的選択を認めるかどうかによるのである。（63 頁）

と述べた。コンクール参加者の演奏が成功したか否かは、審査員（とその結果）によって決められるという指摘は、音楽を競争主義的文脈に置く一步踏み込んだものと言える。六つ目の「社会的権力」でも重ねて「聴衆の一つの区分である審査員には、順位づけと勝者の宣言によってどの演奏が成功しているのかを言明する権威を授けられている」（64-65 頁）と言及し、「音楽コンクールの最も魅了される面の一つは、その権力構造である」「イベントそのものが普通ではない権力構造によって特徴付けされている」（いずれも 64 頁）としながらも

コンクールのやり方と目的は、しょっちゅう音楽の世界で議論されており、あらゆる音楽監督が痛いほど気付いているように、各々の組織の正当性は審査員と受賞者によって蓄積された名声に基づくものである。（64 頁）

と述べている。コンクールの権威が、イベントとして成功を収めるかではなく、入賞者のその後のキャリアや審査員が積み重ねてきた功績によって決められるという指摘も重要なものである。

第 2 章の後半は、マコーミックの論文の肝となる事例研究の手法についての詳細が述べられ、彼女が実際に訪れて観察し、インタビューを行った各コンクール（下表参照）について解説している。これらの選定理由について、「ピアノコンクールは最も大量にコンテスト

マコーミックが実地調査を行なったコンクール（66 頁、表 2.1 より）

コンクール名	設立年	開催頻度	開催場所
ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール	1958 年	4 年に 1 度	フォートワース、アメリカ合衆国
ホーンズ国際ピアノコンクール	1991 年	3 年に 1 度	カルガリー、カナダ
ロストロポーヴィチ国際チェロコンクール	1977 年	3-5 年に 1 度	パリ、フランス
マイケル・ヒル国際ヴァイオリンコンクール	2001 年	2 年に 1 度	クイーンズタウン・オークランド、 ニュージーランド
バンフ国際弦楽四重奏コンクール	1983 年	3 年に 1 度	バンフ、カナダ

によって支配されている部門である」ゆえに二つ、ソロ超絶技巧楽器としてピアノに「惜しくも続く」ヴァイオリン、マコーミック自身の専攻楽器であり「曖昧な地位」から「ソロ楽器として独自の権利を確立し」、「超絶技巧的な展示が有利に働く音楽環境において、どのようにヴィルトゥオーソ・レパトリーの相対的希少性に対処するのか、見ることに興味があった」チェロ、「奏者がヴィルトゥオーソ精神を避けているがゆえに、この様式（※筆者註

室内楽のことに興味を惹かれ」、どのように「競争の環境に適合したのか」（ここまで引用は 65-66 頁から）という疑問から、室内合奏の弦楽四重奏を取り上げたと述べている。また前提条件として、「観察した全てのコンクールが、WFIMC のメンバーである」（65 頁）ことに加えて、

著者のサンプルは、三つの大陸からの事例を含むことが計画されている。なぜなら、コンクールはよくグローバリゼーションの仕組みとして証明されるので、実際に成し遂げられている標準化や均質化の度合いを評価するためのグローバルサンプルを目指すことが重要である。(66 頁)

と述べ、水準を高く統一することと地域が偏らないことに配慮している。

各コンクールについての仔細な調査がまとめられたのち、インタビューの手法とその困難について記述されている。インタビュー調査は、音楽監督 7 名・審査員とピアノ教師 15 名・コンテスト 16 名・その他の参加者（主催者やコンクールスタッフ、聴衆）6 名の総勢 45 名に対して、2 件の例外を除き、それぞれ単発で 45-90 分間行われているが、「コンクール期間中というのは、コンクール参加者・審査員・音楽監督と話をするのに最悪の時間であるという落胆する発見をした」「私がインタビューのためにアプローチした大多数のコンクール出場者は、丁重に、コンクールが終わってからもう一度コンタクトしてくれるように提案した」（それぞれ 96 頁）と述べられている通り、協力が得られにくかったようである。他にも審査員や音楽監督に接触することの難しさや、回答が実際のコンクールの結果に影響を及ぼすのではないか、匿名であっても回答の情報から回答者がわかってしまうのではないかとといったコンテストの不安など、調査への障壁について述べられている。また、出場者からは率直に回答することへの抵抗も感じられたという。

職業性を確立する過程にいる音楽家たちは、特にコンクールについて率直に話すことに気が進まない。なぜなら彼らは、彼らのコンクールの運命がいかようであってもその言葉が自分を傷つけると知っているからである。彼らが賞を獲得したとしたら、刺々しい批判は不誠実に思われる。しかし成功しない場合にも、ネガティブな意見の声は、酸っぱい葡萄の苦い色合いを得る。(98 頁)

そこで、特定のコンクールに偏らない全般的な質問に変更し、回答率の改善を図ったようである。更に、コンクール主催者が作成する宣伝物やメディアの報道、そしてインターネットサイト・双方向ブログなどから情報を収集し考察することで、「参加者がどのように、この制度的領域における様々な文化構造を頼り、一変させ、拒絶するのかを分析する」（103 頁）

としている。

「第3章：国際音楽コンクールの描写」では、主にヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールの実例を通して、コンクールやコンテストが社会でどのように描かれるのかが述べられる。最初にマコーミックは、コンクールについて「音楽演奏の通常ではない環境」（104頁）であるとし、その理由を三つ（以下に引用）挙げ、

第一にコンクールとは、審査し、効果的な音楽演奏を褒め称える行事だからである。
（中略）リサイタル形式にとてもよく似ている舞台設定の中で、演奏者は多層的な演奏の上演による演奏コミュニティの理想の具現化と同時に、寸断された聴衆へ異なる意義を示すように要求される。（104頁）

音楽コンクールはまた、演奏者が種々の挑戦を与えられる一連のステージ（典型的には3つ）を通して展開する公共の、そして公表されたイベントである。（104頁）

音楽コンクールの第三の代表的な特徴は、普通ではなく大きな賭けである音楽演奏の行事であるにもかかわらず、結局最終的にごくわずかのこゝろしか変えられないということである。（105頁）

それゆえに、「音楽コンクールは文化的枠組みであり、それは音楽的・社会的演奏が具現化され解釈される範囲の状況で構築される」（105頁）と定義付けている。

またコンクールを取り巻く論議を、神聖（≡儀式的形状）と世俗（≡競技的形状）という表現を使って、それぞれが相反する「物語」に分類している。

マコーミックによる国際コンクールにおける物語の分類（132頁 表3.1より）

	神聖（儀式的形状）	世俗（競技的形状）
コンクールイベント	卓越した“純粋な”音楽経験の儀式	“最も良い”ものを選び分けるための民主的なメカニズム
そのメタファー	フェスティバル・聖地	コンクール、面接、試験、テスト
演奏者	音楽的意義を解釈し、“不変の真実”を音楽の中から音楽を通して伝達する。 <u>芸術家</u> は理想的な音楽家を体現	<u>ライバル</u> は、打ち負かすことを決意している；非凡な身体的芸当が可能で、最高の状態の <u>コンテスト</u> アント
そのメタファー	（ベートーヴェン信奉者）音楽的天才、かつての神童が名声を博す	コンクール出場者、熟練した職人
例（筆者註：新聞等の媒体でどのような表現が使われているのかの例）	めでたいフェスティバルは音楽と、世界の最も素晴らしい若いピアニストを発見することに献身する。	コンクールは、大コンクールでの勝利が国際キャリアの出発を告げる驚異的推進力となる、生き証人の役割を果たす。 コンクールは、コンクール出場者それぞれの音楽性と技術的熟達のあるゆる面における厳しく、包括的な試験である。

マコーミックはコンクールへの否定的意見についても言及し、1970年代からクライバーン等の大コンクールが評論家から活発に批判されるようになった要因について、三つ指摘している。第一の理由はコンクール審査の欠点について大きく踏み込んだものであり、少し

長くなるが該当箇所を全て引用したい。

第一に評論家たちは、音楽コンクールがもともと独断的で不公平なものであると論じた。クライバーンのように、民主性に努力しているであろう組織であっても、芸術的秀逸さを構成するものは何であるのか一致することの無い審査員団の問題を、解消することが出来ない。それゆえどんなに慎重に審議したとしても、結果は常に独断的である；コンクールのどの回でも、違った審査員団が違った評決を下す。公平さへの要求から、審査員団は、演奏の客観的側面に集中することにしばしば頼る。それは、速度や、音量のような非常に簡単に選り分けたり一致させたりすることのできるものである。しかし、ミュージシャンシップの質が最重要視されることはほとんどない。芸術的手腕は、定量化することも客観視することも出来ず、その理由から、コンクールで使われているランキングのシステムは意味をなさない。それは、能力の違いが、本当はスタイルの違いであることを暗示している。

そのうえ投票の手順は、頻繁に最も価値のある芸術家に報いることに失敗する。クライバーンでも初期に使われ、他の沢山のコンクールで使われている yes-no の投票システムは、リスクを冒す演奏者が審査員を分裂させ、早くふり落とされる傾向にあった。結果として最も勝ちそうな演奏者は、単純に最も少ない異議しかなかった者というようになった。(114-115 頁)

第二は、多くの入賞者のキャリアが芳しくないことである。

第二にコンクールは、次世代の偉大な芸術家を発見することに失敗していると批判されている。(中略) 変わらない失望と共に、世界中の大コンクールが、馴染みの名前になることの無い入賞者を生産し続けていた。(115-116 頁)

第三に、コンクールが若手奏者に与えるプレッシャーの悪影響と、コンクールでのコンテストの演奏を舌鋒鋭く論じている。

三番目の罪状は、コンクールは実際良い点よりも有害な点が多いということである。演奏者にとって良くない。なぜなら繊細な奏者はプレッシャーの元で崩れがちであるからである。より傲慢な音楽家のみが、大力無双のきわめて仰々しいようなレパートリーを奏することができるのである。(中略) 若手ピアニストは、一握りの第 1 位のタイトルを 25 歳になるまでに集めなければ、キャリアが終わってしまうと考えている。言い換えれば、音楽コンクールは若い才能を育てているのではなく壊しており、その主張と違って明らかに音楽の助けになっていない。(中略) その上コンクールは、内容や表現よりも、空っぽのテクニックとヴィルトゥオジティを表彰するシステムの硬直により、クラシック音楽を衰退に陥らせている。コンクールイベントは、儀式的演奏と融合した**真実**の音楽的経験を促進しているのでは無い；音楽をスポーツに変えることで、音楽を貶めている。全体の勝者を発表することを通して、究極的にコンクールは、コンサートプロモーターが、ホールを一杯にすることが確実な勝者を出演契約することにしか興味のない、腐敗する製品化の維持を助けている。このことがクラシック音楽のより広い聴衆を惹き付けることに成功したとしても、それは間違った理由からである。(116-117 頁)

加えてこの章では、コンテストのジェンダーや国籍の影響についても触れている。クライバーン（2001年）の女性優勝者、オルガ・カーンの例を挙げ、その優勝理由を女性らしさよりも男性的な超絶技巧の披露や力強さが評価されたからとし、女性ピアニストがより評価されるにはその性を超越する必要があると論じる。また国籍については、アジア人・アジア系が増えたことにより、コンクールの複雑化が進んだと分析する。ただ、それらの認識は、クライバーンコンクールに付随する批評や出版物のみをソースとしているため、いささか根拠に欠けるところがある。

「第4章：音楽的自己のプレゼンテーション」では、冒頭「コンクールは、おそらく音楽の芸術世界の中で最もゴフマン的施設である」（137頁）と述べている。似た境遇の演奏家が、一般的社会（または音楽業界）と隔絶され、コンクールの制度に従って一定期間同じ空間で過ごすという意味合いであろう。そこでコンテストに求められる役割とは、「素晴らしい才能の一人として、彼らの世代の中で世に知らしめられる良い奏者である、と一般聴衆にシグナルを送る」入賞者と、「評価と、芸術家としてのアイデンティティを傷つける」（いずれも137頁）落選者、の二つであると表している。その上で、

良くも悪くも、それぞれのコンクールの参加者に授けられるレッテルは、一次的なものに過ぎない。入賞タイトルを受けるに足る程幸運だった者は、コンクールが次のサイクルに入るとすぐに、それが半減すると知っている。これらの短い年月は、彼らにもたらされる権限の不安定さの象徴であり、演奏者はまったく異なる音楽の環境で、正しい印象を伝え続けなければならない。そして、たくさんの入賞者が厳しい道を学ぶように、コンクールの賞はしばしば、聴衆に非現実的に高い期待をいだかせ、批評家の期待は不公平に低いのである。（137-138頁）

と、受賞後の演奏・キャリアについて問題提起を行う。

さらに論争的となってきた音楽的天才の概念が、コンクール下において「聴衆と音楽家両者へ、奏者の役割を明確にし続ける集団的表現を明らかにする」（141頁）ことに有用であるとし、コンテストのタイプを下表のような4つのカルチュラル・スクリプトに分類した上で、それぞれについて、演奏の説得力の有無による違いを形容している。

マコーミックによる、コンクール下における音楽的天才のカルチュラル・スクリプト分類の記述まとめ

分類	特徴	説得力のある(賞賛)	説得力に欠ける(批判)
神童	演奏するためにうまれてきた	超人的な演奏による荘嚴な確さ	親との共生のやりすぎ、猿、ネジ巻かれた人形
ヴィルトゥオーソの炎の息	超人的な超絶技巧	最も懐疑的な批評家さえも忘れがたい演奏と認める	ペテン師の安いトリック
征服の英雄	楽器を支配、聴衆を自由に	崇高な芸術、聴衆の琴線に直接触れる高貴な精神	無謀なエゴイスト、思い込みの激しい主役
知識人	音楽自身に語る	輝かしい知性として歓迎	乾燥し、感情がない

マコーミックはこれらに完全に分類される演奏家はおらず、長い演奏家人生において相互、

または順番に現れるものであると述べている。またコンクール期間中においても、

コンクールの状況では、期間中に単一の天才の比喩のみを携えることは、必ずしも演奏者の優位とはならない。特定の一つのスクリプトに完全な説得力があったとしても、一次元的であるとの烙印を押される危険性がある。(152 頁)

と指摘し、様々なスタイルで演奏することが望ましいと示唆している。

次に「最も考えられる象徴的意味はレパートリーの選択である」とし、「弾き古されてきているか」「容易に**お手の物とする**演奏レベルか」「技術的・音楽的強みの何を目玉にするのが最も良いか」「最も広い能力の範囲を見せることができるものは何か」(いずれも 155-156 頁)に加えて、「演者の比喩(筆者註:前頁表のスクリプトのこと)を効果的に具現化するために、演奏される曲は、望まれるイメージや、融合した適切な意味を演者へ供給することをサポートするものでなくてはならない」(156 頁)と述べ、コンテスタントが望むスタイルのカルチュラル・スクリプトに即したレパートリー選択をすべきであると主張する。ただ「完全にこのような意味でレパートリー選択について述べることは、戦略面を誇張し、コンクールで何を演奏するかを決断することに伴う複雑な意図を減少させる」(156 頁)とやや後退した記述もあり、「レパートリー選択よりもむしろ本質を明らかにするのは、しかしながら、どのように演奏するかである」(158 頁)とも弁明している。

続いて「国際コンクールは、今日では目隠しされた状態で行われることはない」(160 頁)のに、「演奏者は危険にもビジュアルの重要性を無視している」(162 頁)と指摘する。

視覚要素はつまらなくされ、工夫が禁止されているところであり、コンクール参加者は、彼らが音楽そのものを最も優先する真剣な音楽家であることを見せようとしている。(中略)たとえ堅固な純正主義者であっても、そうあるべきかどうかは別にして、聴衆がある程度のジェスチャーや顔の表現を音楽的解釈のあてにしていることを渋々認めるであろう。(162 頁)

さらに、コンテスタントに対するインタビューを引き合いに出しながら、カルチュラル・スクリプトのイメージに対応した外見の表現方法があると説く。

172 頁からの「ジェンダーと音楽的天才」においては、クラシック音楽を取り巻く論議は「性差と人種の影響を避けることができない」(172 頁)と指摘し、女性音楽家は、男性演奏家に比べて外見の要素が重視されるため、「女性コンテスタントは、彼らの性が聴衆にとって明らかであるというだけでなく、身体的な魅力が聴衆の経験に考慮されることを良くわかっている」(173 頁)一方で、女性的な魅力に頼りすぎると、本格的な演奏家と見られ

ない傾向にあると述べる。またレパートリーにも、女性が立ち入り禁止であるかのような印象の作品があると主張している。

続く 178 頁からの「不適切な環境」の項では、まず著者の指導者であるジェフリー・C. アレクサンダーが主張する、「融合された演奏」という概念について説明され（以下引用）、

融合された演奏（アレクサンダー 2004 年）は、演奏の全ての要素が一直線になり、意味が解釈されたものと同様に楽々と伝わる時に起こる珍しい機会である。音楽演奏において、融合は相互的な二つの過程を得る：音楽テキストの文化的拡張と聴衆に向けての音楽家、そして舞台上の演奏家と聴衆の心理的一体感である。（179 頁）

その文脈において、様々な事象が論じられている。まず、レパートリー選択の工夫が、コンテストのインタビューを引用して具体的に述べられ、主に、何回も舞台経験を積み重ねて慣れた作品を弾く点、同じレパートリーを何度も繰り返し複数のコンクールで用いる点、繰り返し演奏するレパートリーは常に新鮮で自然な状態になるように心がける点が挙げられている。

次に、コンクール演奏への他者からの影響について論じている。普段は「原典との融合に加えて、演奏者は聴衆との接続を確立することを心がける。この目標を達成するために、彼らは、聴衆の反応への感性を高めている」（180 頁）が、コンクールの状況下では「演奏者ではない審査員が、状況を定義する力を持つ」（181 頁）ため、しばしば融合された演奏を妨げる大きな要因になっていると指摘している。コンテストへのインタビューも、

コンクールの雰囲気は、「審査されている。私を好いて欲しい、私は好かれたいと思っている」と考えさせます。すべての音が聴かれています。もし何かが起こったら、例えば間違った音を弾いてしまったら、落とされてしまうと考えます。これら思考の全てがあなたの精神に入ります。（コンクール参加者 4 へのインタビューより、183 頁）

のように、審査されることで演奏家は重圧を感じ、それが演奏内容にも大きく影響しているとの主張が並べられている。また審査員から「優越を取り戻す」（184 頁）ために、レパートリーの工夫を行うとも述べている。技術的な側面のみが重視される作品を多用することや、現代曲や滅多に演奏されない曲を弾き、「もし審査員が作品をよく知らないなら、演奏ぶりの詳細に焦点を当てるよりも、作品そのものをより聴きそうである」（184-185 頁）という戦略を挙げ、そのリスクについても論じている。

更に審査の公平性については、糾弾といっても良いほどの論調で、コンクール参加者は不当性を感じたとしても非力で、批判できない立場におかれていると訴えている。

演奏者に無力感を一層植え付ける要因は、コンクール組織の透明性の不足である。(中略) 審査員にとって最も一般的な状況は、コンクール内に生徒がいることである。何故ならコンクールを審査するのにふさわしい人々は、大抵先生として最も追い求められているからであり、コンクール参加者と関係の全くない公平な審査員を集合させるのは不可能に近いのである。(185 頁)

公への説明責任や不平を解明する手段がないため、汚職やえこひいきの噂は反証することは絶対にできない。それらについて参加者は、政治が彼らのために働く、または彼らに対して働くことを十分に理解している。(185-186 頁)

コンテスタントが組織を公然と批判することは絶対にできない。あらゆる汚職の告発は自身の業績の正当性を失わせ、現在の職業的関係を危険に晒す、または嫉妬している・無礼であるといった望ましくない評判を確立してしまうであろう。(186 頁)

しかしそれでも尚、ピアニストがコンクールに挑戦する理由は、渡米すれば即キャリアをやることのできたホロヴィッツやルービンシュタインの時代とは違って、世に出るにはその方法しかないからであると、ピエール・ブルデューの用語を引いて述べている。

進んで蓄積された象徴資本を抵当として提供する興行主や指揮者といった伝統的な**象徴的銀行家**の喪失を伴い、プロフェッショナル志望は、象徴資本を得るために、コンクールのような新しい源の方へ向かう。(187 頁)

その上で「1950 年代からのコンクールの急速な増加に伴い、賞典は象徴的流通の価値を下げている」、「コンテスタントにとってこの資格証明は衰えているだけでなく、あらゆる象徴的価値を持つことをほとんど保証しないということである。」(いずれも 187 頁) と指摘し、コンクール数が多いため、コンクールでの賞典が演奏機会の創出に必ずしも繋がらない点、より安全なキャリアのために優勝したとしてもコンクールを受け続ける点を、インタビューを用いて指摘している。そして、コンクールは単純にキャリアのために受けざるを得ないものであり、芸術そのものを追求することとは乖離しているというインタビューイの意見を引用している。

私はたくさんのコンクールサーキットが、芸術としての音楽に大して興味を持たないプレイヤーを対象にするものであると思います。(中略) 作品の本当に興味深い側面を探るように、芸術のことを本当に気にする人々は、しなければならない故にいくつかのコンクールを受けます、それはあなたの演奏の基準を上げることに役立つからです。(後略) (コンクール参加者 10 へのインタビュー、188 頁)

加えて、コンクール入賞の有無で聴衆やマネジメントの注目が変わり、またたとえ入賞歴があっても何も仕事につながらない可能性もあるというインタビュー回答を交え、厳しい現

実に触れている。

そのような「不適切な環境」の中で、「コンテストは、参加目標の再定義によってコンクールの世俗的な事情を超越する」（190 頁）ことで、純粋に勝つことから、例えばレパートリーの準備や音楽的自己の披露、そして自身のレベルアップといった自己研鑽を目的にコンクールを使っていること挙げ、

審査の厳しい調査、そして拒否の経験はまた、音楽的なアイデンティティを構築する上で重要な役割を果たす。（中略）理想的に言えば、音楽コンクールの結果は余分なものであるべきである。賞またはタイトルを授けることによって、既に説得力のある社会的演奏を単に補強するだけのものであるべきである。（中略）コンクールは自然を破壊する音楽の演奏試験をもたらし、（筆者註：音楽の演奏にとって）より適切な状況が当然と思われる事を確認するものである（191 頁）

と締めくくっている。

「第 5 章：音楽的公衆」では、私的な領域に隠れて受動的な聴き手とされる聴衆 (audience) と、公的な領域に作用する公衆 (public) という従来の二分法は、「経験的レベルで失敗している」（192 頁）とし、「音楽コンクールにおける聴衆の役割を観察することによって、**音楽的公衆**のコンセプトを発達させる」（193 頁）ため、現在では批判的な評価を受けるテオドール・アドルノが提唱した聴き手の類型論を改良する形で、下表のように分類を行うなど、コンクールとその聴衆の役割について述べている。

マコーミックによるアドルノの聴衆に対する類型学の再考：コンクールにおける音楽的行動の流儀（205 頁、表 5.2）

聴衆のタイプ	説明
構造的な／良い聴き手	作品志向；音楽的なテキストの解読に重点を置く
娯楽としての音楽	ゲーム形式志向；競争的側面と結果の不測に重点を置く
立腹した聴き手	特定の奏者の周りに集結し、他者の演奏を楽しむことを拒否する
文化消費者	パフォーマンス志向；上演、奏者と楽器に重点を置く
学ぶために聴く	異なるスタイルや音楽へのアプローチに触れることでの芸術的発達
審判する聴き手	コンクールを判断するためのパフォーマンス志向、または審査員

聴き手は一つのタイプにとどまるとは限らず、条件によって複数を行き来することもある。

そして聴衆が見聴きした音楽について話し議論する時、聴衆は公衆となるとした上で、コンクールという状況が、特にたくさんの音楽的公衆を産み出すことに寄与していると指摘している。

だが、コンクールの聴衆は聴く以上のことをしている。彼らは喋る。そして、彼らの会話は、時に見たものや聴いたものの長所や、随行した音楽的イベントの手段に関する論争となる。これが、聴衆が公衆になる時である。（212 頁）

この章の結論では、「コンクールには最も理想を具体化させ、最も音楽芸術を前進させるであろう演奏者を発掘することが期待されている」（221 頁）が、他にも公平性や審査の透明性など求められることが多く、その全てを実現することはできないと論じた上で、

コンクールの妥当性は、究極的には、聴衆の音楽的経験と、審査員が生産したランキングの調和性に左右される。聴衆は、もし納得しなければ、コンクールへの信望を排除すると同様に、もし納得すれば、彼らのコンクール運営への信頼や音楽への愛は回復するであろう（221-222 頁）

献身的な聴衆にとって大変不満なのは、彼らが行なっている公の論議のような場において、審査員とは意見を戦わせることが決してできないことである。真偽は永遠に封印され、審査員は決して責任を問われない。コンクールが論争の種になり、また 100 年以上前に最初に導入された時から、音楽界の論争となり続けていることは明らかである。コンクールは、批判的な音楽的公衆の出現の状況を作り出しただけではない；（筆者註：フォーラムの）参加者が、彼らの矛盾する文化的な理想を取り決める場所としてのフォーラムをもまた提供しているのである。（222 頁）

と結んでいる。

2. マコーミックの功績と研究への批判

まずは功績についてまとめたい。やはりこれまでほとんど学術のフィールドで論じられて来なかった音楽コンクールを、民族誌的調査を行い、音楽社会学的見地から論文にまとめた点は特筆に値する。コンクールは公共のリサイタルとの形式の類似性から、特有の研究材料として取り上げられる機会が少なかったとマコーミックは指摘しているが、それに加えて、優れた演奏家を世の中に送り出すツールに過ぎず、その評価は入賞者が後年形成したキャリアの結果に大きく左右されるということ、各コンクールの水準や役割が時代を経ると変化すること、近年まで世界各地で行われる国際コンクールについて統計的に情報を集める手段が少なかったことなども、研究が積極的になされてこなかった理由であると考えられる。現在は、数十年前に国際コンクール入賞を果たした出身演奏家の評価が確立されたことに加え、インターネット普及が大きな変化をもたらし、移動手段の手配や申し込みが簡便になり、優秀な若手がおしなべて複数のコンクールを渡り歩くようになったことや、たとえ開催時に現地を訪れなくても、コンクールの公式ホームページや SNS、国際音楽コンクール世界連盟（WFIMC）やアーリンク・アルゲリッチ基金（AAF）のサイトから、要項や結果について容易に情報を入手することができるようになったことで、コンクール研究の土

壤が醸成されたと言える。そうした背景の中でマコーミックの論文は、コンクールを定義付けるにとどまらず、コンテスト・メディアの表現・そして聴衆に至るまで多岐に渡る調査と分類が行われており、今後のコンクール研究の指針となるものである。

また、コンクールは通常の演奏環境ではない、あるいはコンクール状況下の演奏は特殊なものとなる、と明言した点も大いに評価されるべきである。これについては演奏家の間でも意見は二分されており、コンクールであろうがコンサートであろうが、演奏もそれに対する準備も特に何も変わらないという主張も根強く聞かれる。しかし、本人の意識がそうであっても、演奏会としてはイレギュラーな要素が少なからず演奏者に影響を与え、演奏に作用すると明らかにしたことは、コンクールを研究する意義を知らしめたものである。ただ、コンテストの演奏の成功が、審査員とその結果によって決められるという主張は、議論を呼ぶものであろう。

細かな項目を見ると、コンクールに向けてのレパートリー選択は通常のコンサートとは違った観点から行われる点や、奏者のジェンダー・人種と演奏内容との結びつきが、コンクールの結果をも左右する点を、いずれも今まで推測されてきたことではあるが、民族誌的調査で明確にし、また審査の公平性・透明性について厳しい指摘を行っていることにも大きな価値がある。筆者も含めた演奏家は、受験・指導・審査等、大なり小なり生涯コンクールと関わり続けるため、不正と感ずることがあっても口をつぐんでしまうが、そのようなジレンマをも含めて学術論文で取り上げたことは、大変勇気があると言える。演奏家がコンクールに取り組むにあたっての弊害についても、芸術性豊かで繊細な奏者が、プレッシャーにさらされるコンクールの場で日の目を見ることは困難であることや、ヴィルトゥオジティの偏重が音楽の空疎化をもたらし、クラシック音楽を衰退に招くことに強く警鐘を鳴らしている。しかしながら後者については、後述するが、マコーミックの考えが先にありきである印象も伴う。

一方でこの論文には多くの問題点も存在する。まずは、マコーミックが研究の対象としたコンクールについてである。音楽コンクールという大きな枠組みの中で、広範性を重視するためなのであろう、WFIMC加盟のものの中からピアノ2、チェロ1、ヴァイオリン1、室内楽1の各コンクールをピックアップし、大陸が偏らないように配慮したとするが、その選定基準には疑問が残る。例えば代表的なピアノコンクールとして取り上げられているヴァン・クライバーン、ホーンズは両方とも北米で開催され、マコーミック自身が指摘するようにライバル関係で、賞金額の大きさや褒賞演奏会・マネジメントの充実など、商業的な色が

濃いといった共通点を持つ。折角ピアノコンクールから2つ採用するのであれば、1つはもっと毛色の違うものを選ぶべきであろう。

ではその毛色の違いとは具体的に何か。筆者は修士論文『国際ピアノコンクールの成り立ちと変遷、その現在』(2015)において、WFIMC加盟の国際ピアノコンクールの中で、特定の作曲家の作品のみを要求されるコンクールを除いた、課題曲・自由曲でプログラムを構成するもの全ての要項を比較して調査を行なった。レパートリーについては、完全自由選択であるもの、ほぼ自由だが一部に課題が決められているもの、そしてほぼ全部を課題曲の中から選択しなければならないものに分かれ、個々のコンクールの意図を反映している点を指摘した。例えば2015年に開催されたクララ・ハスキル国際ピアノコンクールのレパートリー(下表)では、リストやロシア系作曲家の作品は意図的に排除されていることがわかる。

2015年のクララ・ハスキル国際ピアノコンクールの課題曲

一次予選 45分まで	準決勝 時間制限なし	決勝
◆15分以上20分以内のプログラムを以下のa. b. c.より選択する a. J. S. バッハの作品1曲 b. ハイドンのソナタ1曲 c. スカルラッチェのソナタ3曲 ◆ショパンの練習曲作品10から2曲 ◆バルトーク・ドビュッシー・ブーランク・ラヴェルの作品から15-20分	◆T. アデスの作品5分程度 ◆モーツァルトのヴァイオリンソナタ K. 301, K. 304, K. 376から1曲を選択し、審査員のA. デュメイと共演する ◆ベートーヴェン・ブラームス・シューベルト・シューマンの30分程度の作品	◆以下のモーツァルトの協奏曲から1曲 K. 175, K. 238, K. 246, K. 271, K. 413, K. 414, K. 415, K. 449, K. 450, K. 451, K. 453, K. 456, K. 459, K. 466, K. 467, K. 482, K. 488, K. 491, K. 503, K. 537, K. 595 ◆シューマン:序奏とアレグロアパシオナート、または序奏と協奏的アレグロのどちらか1曲

また、決勝のコンチェルトは、ヴィルトゥオジティやダイナミズムとは無縁の選択をしなければならない。このように課題曲で演奏家の傾向を絞るコンクールは、他にもロン＝ティボーなどが挙げられる。

ピアニズムもピアニストも多様化著しい21世紀において、個々の能力の可能性を最大限発揮させずに運営が方向性を決めてしまうのは時代遅れで排他的であるという見方も、コンクールがあふれ、それぞれの価値基準が曖昧になっている時代であるからこそ差別化が特長を生み出すという考え方もあるであろう。

また旅費や滞在費の支給について、ヨーロッパのコンクールは少額であるのに対し、アメリカ・東アジアでは多額となる傾向が判明した。どちらも基本的にヨーロッパ滞在者が受験することを想定しているためであるが、最近ではアジアやアメリカから受験しに行くパターンも増えているだけに、未だヨーロッパ中心主義的であると言える。年齢制限も、時代の流れやコンクールの意図を感じさせる大きな要素で、例えば、制限が低いことで知られていたエリザベト王妃や浜松といった国際コンクールは、2010年代にその引き上げを行った。他にもシューベルトやウィーン・ベートーヴェン、エネスクといったコンクールは30歳を

過ぎても受験資格があるのに対し、プラハの春、クララ・ハスキルや仙台といったコンクールでは30歳未満を上限としている。その理由が明確に公表されることはないが、年齢制限が低く設定されていればフレッシュな顔ぶれに期待し、高ければコンテスタントに音楽的成熟を求めていることは容易に推察できる。

これらの事実からも、マコーミックが選定したピアノコンクールの少なさや偏りが改めて浮き彫りになる。網羅的にというのであれば、ピアノ・ヴァイオリン・チェロ・室内楽の分野に絞った根拠も弱く、管楽器や声楽、そしてコンクールで最も古い歴史のある作曲のジャンルが欠けていることは、参加者や聴衆の分類を行う上でも情報に不足があると言わざるを得ない。加えて、複数の専攻部門が行われる音楽コンクールも取り上げられていない。

メディアの描写について取り上げた分析資料や、インターネットフォーラムの引用が、ほとんどヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールに偏っているのも要注意である。繰り返されるがクライバーンはメディアと密接につながり、また市民との交流を重視する商業的且つ大きな文化イベントであり、ジュニアやアマチュア向けの部門も開催されるなど、国際コンクールの中で特殊な事例であることは疑いの余地がない。

インタビューについても問題がある。コンテスタントに対するものでは、回答者への配慮から匿名性を重視し、単にナンバリングを行って発言を記述するにとどめている。これでは、その意見がどの楽器を専攻している者によるものかさえわからない。性別や賞歴、学習環境も不明で、信頼性を損なっている。彼女がコンクールにおけるジェンダーや人種の問題について果敢に取り上げているだけに、コンテスタントの背景と結びつけた視点での分析がなされていない点は残念である。また回答の内容についても、もともとの論立てに合致する意見のみを引用する場面が多く、同じ設問に広く意見を募って適切に考察を行なったのか、疑問が残る。例えば、コンクールでヴィルトゥオーソ作品が多用されることを強く批判するにあたって、引用されている回答は以下のようなものとなる。

それこそが、沢山のピアニストが、世界中で最もゴミな作品、イスラメイを弾く理由です。しかし、みんなが第一ラウンドにそれを配置します。なぜならば、今までで書かれた最も難しい作品だからです。それは、ただのゴミくずの曲ですが、本当に印象的なのです。(後略) (コンクール参加者10へのインタビュー、156頁)

このようにヴィルトゥオーソ作品は芸術的ではないが、コンクールには有利なために(しぶしぶ)選ばれるといった論調は、マコーミックが、彼女曰くヴィルトゥオジティをあまり重視しないチェロ出身ということも関係しているであろうが、あまりにも技巧の披露に対す

る偏見が過ぎる。入賞が期待されるレベルにある参加者は、そのような作品を積極的に取り上げる場合にも、単にコンクールに勝つ目的ではなく、曲を芸術的に昇華させる術を知っているものである。そもそもモーツァルトの曲芸をはじめ、コンクールの原型であるピアノの決闘、パガニーニやリストのエピソードにしても、クラシック音楽演奏の歴史においてヴィルトゥオジティの披露は切っても切り離せないものであり、コンクールという文脈で批判を行うことは、的外れである。

他にも、コンクールで落ちることは個人的な拒絶の経験であるとし、

演奏する時には、個性と私が何者かを披露するような感覚です。それはとても私であり、とても正直なものなのです。だから、演奏が嫌いであれば、私にとっては、彼らが私のことを嫌いということなのです。だから、私はとても個人的に受け取ります。
(コンクール参加者6へのインタビュー、160頁)

という回答が引用されている。コンクールの弊害を主張したいのであろうが、内容が個人的意見の範疇を超えていない。たとえ少数意見であっても、多角的な見解を集約する中で引き合いに出されれば説得力が増すものであるのに、一方通行的であるため、マコーミックの主張ありきという印象が拭えない。

もっともコンテスタントへのインタビューは16人とどまり、部外者である彼女が、時に不愉快にさせる可能性もあるような質問を多数ぶつけることは、コンクール中という状況を考えると難しいであろう。また、コンクールを学問の世界で取り上げるには前例が少なく、インタビューは論を補強するフィールドワークという位置付けになるのは致し方ないのかもしれない。

3. 本研究のポリシー

マコーミックの研究の弱点を考えると、様々な楽器のコンクールを同列に扱うのは無理がある。優れた若手演奏家の紹介と顕彰という共通の目的はあれども、楽器ごとの流儀も違えば、市場の大きさ、将来従事する職業の種類も異なる。コンクールに参加する目的は、短期的に見れば入賞しトップを目指すことであっても、本質的には長い音楽家人生のキャリア形成に役立てることである。その道筋を包括的に論じるにあたって、たとえ類似性があるとしても、複数の専攻をまとめて扱うのは乱暴である。またコンクールと一口に言っても実にバラエティに富み、考察・研究を行うにあたって特定のものをいくつかピックアップして

調査する手法は不適切である。しかし、数多く直接に訪問することは、費用や時間の困難を極める。また毎年行われるコンクールもあれば、2～5年周期で行われるものもある。その全てを継続的に観察することは、いくらインターネットが発達した現代とはいえ、不可能に近い。

この二点を踏まえて本研究では、コンクールではなくコンテストや入賞者を中心軸に据えて調査を展開する。複数の国際コンクールを渡り歩くことは、その寡多はあっても、殆どの若手ピアニストにとって避けられないものであるため、その方がコンクールとピアニストとの関係についてより明らかにできると考えられる。加えてマコーミックの指摘にあるように、人種やジェンダーといった要因がコンクールの結果や演奏家キャリアに影響を及ぼすならば、対象は似たような環境で育った集団に区切ることが重要であるため、日本出身者・日本人³に絞りたい。資料が集めやすいというだけでなく、筆者自身も7歳から国内外で20年以上コンクールを受け続けてきたキャリアがあり、経験的な蓄積からの探求が期待できる。また日本は各種コンクールが非常に発達しており、大手メディアや指導者団体、楽器会社が主催するもの、自治体や地方紙が運営するもの、作曲家名を冠した全国コンクール、音楽ホールが主催する音楽賞など、あらゆる種別・水準のものが存在するため、殆どのピアノ学習者にとってそれらへの参加が当たり前となっていることも、追い風となる。権威ある全国規模のコンクールの代表的存在は、世界的に見ても現存する最古のコンクールの一つで、第二次大戦中も途切れることなく続けられた日本音楽コンクール、戦後間もなく発足した全日本学生音楽コンクール、あらゆる年齢層を対象にしたクラスが設けられ、世界で最も受験者数の多いピティナ・ピアノコンペティションが挙げられる。

最後に一つ断っておきたいのは、本論文ではコンテストの現状や入賞者を取り巻く周辺環境について実践者の目線で考察し、その中でより効果的にコンクールを活用する手段を論じるため、コンクールの透明性や審査の不平等性などを殊更に取り上げて批判に終始することは避けたい。芸術のランク付けをするという、その基準が審査員の良心に委ねられている曖昧な世界に不公平感につきもので、受ける側にはどうすることもできない部分である。日本人審査員の存在が日本人入賞に与える影響については統計的な調査を行うが、マコーミックが言及しているように、批判一つがキャリアに影響を与えかねず、そのリスク

³ 日本出身という言葉の中には日本出身の外国籍ピアニストについても含まれ、外国育ちの日本人ピアニストについては含まれない。国籍そのものよりも、育った環境こそが考えや行動に大きな影響を及ぼすものであり、本論文でも重視するところである。ただ国籍で分類されているデータベースの調査などでは、日本人という括りも使用する。ただ日本人ピアニストは、その多くが日本出身であり、日本出身と日本人という表現には殆ど違いはないと考える。

を研究協力者に負わせるわけにはいかない。ただ筆者の体験を記すことは誰も傷つけないので、いくつかここで挙げておくことは意義深いかもしれない。

ある国内コンクールを受けて入賞した際、受賞発表後にある審査員から「本当に素晴らしい演奏でした。(高順位ではなく)あまり助けてあげられず残念、これからも頑張る」とエールを受けたが、後日発表された点数では、その審査員は筆者に唯一最下位の点数をつけ、講評で演奏を酷評していた。またある国際コンクールのファイナルでは、協奏曲作品がたまたま開催国出身のコンテストと被ってしまった。ファイナリストは3人。セミファイナルまでの演奏順を踏襲すると、1. 開催国のコンテスト 2. 筆者 3. もう一人のコンテスト となるはずであったが、同じ曲を続けないようにするという名目で、1. 筆者 2. もう一人のコンテスト、3. 開催国のコンテストという順番に変えられた。筆者は、「同じ曲が続くことで順番を変えるなら、なぜ開催国のコンテストが最後に演奏するのか」と尋ねたが、「運営側に権限がある」「開催国のコンテストはどうもコンチェルトがさらえてないようだから、別にいいじゃないか」と回答された。確かにルール上問題は無いのであろうが、釈然とはしない。またまたある全国規模のコンクールの本選では、筆者ともう一人のファイナリストとで票が割れ、一票差で筆者が勝つことができたが、その年は筆者の出身地域から審査員を招くことになっており、その先生が筆者に投票したと後日別の審査員から聞かされた。

このように審査員の振る舞いや運営に不愉快な思いをすることも、わずかな差で勝利が滑り込むこともあり得る。受験者としてはただ受け入れるしかない。結果に不平不満を述べるよりも、それまでの取り組みや本番の演奏について反省し、上達を目指す方がはるかに建設的である。

第2章：WFIMC 加盟国際コンクール・入賞者の分析と、日本人入賞者の動向

1. WFIMC の概要と特別複数入賞者の定義

WFIMC（国際音楽コンクール世界連盟）については、筆者の修士論文⁴においても詳細に取り上げたが、その記述を元にもう一度まとめておきたい。

WFIMC は、1957 年に下表に上げられている 11 のコンクールによってジュネーヴで設立され、1966 年からはユネスコの国際音楽評議会のメンバーに加わった。現在では 122 コンクールの加盟を数える、最も権威のある国際コンクールネットワークである。

WFIMC 創設メンバー一覧表（筆者の修士論文から抜粋）

WFIMC 創設メンバー一覧

コンクール名	開催国／都市	開催部門
ARD ミュンヘン国際音楽コンクール	ドイツ／ミュンヘン	ピアノ、声楽、室内楽 弦楽器全般、管楽器全般 他
ブダペスト国際音楽コンクール	ハンガリー／ブダペスト	ピアノ、ヴァイオリン、指揮 他
F. ブゾーニ国際ピアノコンクール	イタリア／ボルツァーノ	ピアノ
F. ショパン国際ピアノコンクール	ポーランド／ワルシャワ	ピアノ
ジュネーヴ国際音楽コンクール	スイス／ジュネーヴ	ピアノ、声楽、フルート 他
G. B. ヴィオッティ国際音楽コンクール	イタリア／ヴェルチェッリ	ピアノ、オペラ声楽
H. ヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクール	ポーランド／ポズナン	ヴァイオリン
ロン＝ティボー＝クレスパン国際音楽コンクール	フランス／パリ	ピアノ、ヴァイオリン、声楽
N. パガニーニ国際ヴァイオリンコンクール	イタリア／ジェノア	ヴァイオリン
プラハの春国際音楽コンクール	チェコ／プラハ	ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、 チェロ、トランペット、オーボエ、 ファゴット、声楽、指揮 他
エリザベート王妃国際音楽コンクール	ベルギー／ブリュッセル	ピアノ、ヴァイオリン、声楽、作曲

最新 2018 年の Web 公開冊子⁵によれば、半分以上の 62 のコンクールがピアノコンクール、またはピアノ部門を含む音楽コンクールであり、そのうちの 44 がヨーロッパ地域で開催されている。WFIMC 加盟の歴史において、ヨーロッパ外のピアノコンクールが初めて登場するのは 1975 年、イスラエル・テルアヴィヴで開催されるアルトゥール・ルービンシュタイン国際ピアノマスターコンクールにさかのぼる。1977 年には、アメリカ合衆国フォートワース開催のヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール、1978 年にはオーストラリアのシドニー国際ピアノコンクールが加盟し、大陸の広がりを見せた。次頁・次々頁にわたって、2018 年現在の WFIMC 加盟ピアノコンクールとピアノ部門のある音楽コンクールについて、一覧を掲載する。

⁴ 崎谷明弘『国際ピアノコンクールの成り立ちと変遷、その現在』、東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、2015 年。

⁵ WFIMC Annual Book 2018. https://issuu.com/wfimc/docs/wfimc_ab2018/1?ff=true&e=25003934/60772697, accessed on 2 August, 2018.

2018 年版 WFIMC 加盟コンクールリスト(ピアノ)

国	都市	コンクール名(WFIMC 冊子の名称に準拠)	本論文での略記例
イギリス	グラスゴー	スコットランド国際ピアノコンクール	スコットランド
イギリス	リーズ	リーズ国際ピアノコンクール	リーズ
イギリス	マンチェスター	RNCM モットラム国際ピアノコンクール	RNCM マンチェスター
アイルランド	ダブリン	ダブリン国際ピアノコンクール	ダブリン
ドイツ	ボン	テレコム・ボン・ベートーヴェン国際コンクール	ボン・ベートーヴェン
ドイツ	ケルン	ケルン国際音楽コンクール	ケルン
ドイツ	ドルトムント	ドルトムント・シューベルト国際コンクール	シューベルト
ドイツ	ライプツィヒ	ヨハン・セバスチャン・バッハ国際コンクール	バッハ
ドイツ	ミュンヘン	ARD 国際音楽コンクール	ARD
ドイツ	ワイマール	フランツ・リスト国際ピアノコンクール	ワイマール・リスト
ドイツ	ツヴィッカウ	ロベルト・シューマン国際ピアノ・声楽コンクール	シューマン
オーストリア	ザルツブルク	ザルツブルク・モーツァルト国際コンクール	モーツァルト
オーストリア	ウィーン	ウィーン・ベートーヴェン国際ピアノコンクール	ウィーン・ベートーヴェン
スイス	ジュネーヴ	ジュネーヴ国際コンクール	ジュネーヴ
スイス	ヴヴェイ	クララ・ハスキル国際ピアノコンクール	クララ・ハスキル
スイス	チューリッヒ	ゲザ・アンダコンクール	ゲザ・アンダ
フランス	エピナル	エピナル国際ピアノコンクール	エピナル
フランス	オルレアン	オルレアン国際ピアノコンクール	オルレアン
フランス	パリ	ロン＝ティボー＝クレスパンコンクール	ロン＝ティボー
イタリア	ボルツァーノ	フェルッチョ・ブゾーニ国際ピアノコンクール	ブゾーニ
イタリア	モンツァ	リナ・サラ・ガッロ国際ピアノコンクール	リナ・サラ・ガッロ
イタリア	ヴェルチェッリ	ジャン・パッティスタ・ヴィオッティ国際音楽コンクール	ヴィオッティ
スペイン	バルセロナ	マリア・カナルス国際ピアノコンクール	マリア・カナルス
スペイン	ハエン	ハエン賞国際ピアノコンクール	ハエン賞
スペイン	サンタンデル	パロマ・オシェイ・サンタンデル国際ピアノコンクール	サンタンデル
スペイン	ヴァレンシア	ホセ・イトゥルビ国際ピアノコンクール	ホセ・イトゥルビ
ギリシャ	テッサロニキ	ジオルゴス・ティミス国際ピアノコンクール	ティミス
オランダ	ユトレヒト	フランツ・リスト国際ピアノコンクール	ユトレヒト・リスト
ベルギー	ブリュッセル	エリザベート王妃国際音楽コンクール	エリザベート王妃
ポーランド	ビドゴシュチ	パデレフスキ国際ピアノコンクール	パデレフスキ
ポーランド	ワルシャワ	フレデリック・ショパン国際ピアノコンクール	ショパン
チェコ	プラハ	プラハの春国際音楽コンクール	プラハの春
スロヴァキア	ブラティスラヴァ	J.N.フンメル国際ピアノコンクール	フンメル
セルビア	ベオグラード	若き音楽家のための国際コンクール	若き音楽家
ルーマニア	ブカレスト	ジョルジュ・エネスク国際音楽コンクール	エネスク
ハンガリー	ブダペスト	ブダペスト国際音楽コンクール	ブダペスト・リスト
ロシア	モスクワ	チャイコフスキー国際コンクール	チャイコフスキー
ウクライナ	キエフ	若いピアニストのためのホロヴィッツ記念国際コンクール	ホロヴィッツ
ジョージア	トビリシ	トビリシ国際ピアノコンクール	トビリシ
リトアニア	ヴァイニユス	M.K.チュルリョーニス国際ピアノ・オルガンコンクール	チュルリョーニス
アルメニア	イエレヴァン	ハチャトゥリアン国際コンクール	ハチャトゥリアン
ノルウェー	ベルゲン	エドワード・グリーグ国際ピアノコンクール	グリーグ

ノルウェー	トロムソ	トップ・オブ・ザ・ワールド国際ピアノコンクール	TOW
フィンランド	ヘルシンキ	マイ・リンド国際ピアノコンクール	マイリンド
イスラエル	テルアヴィヴ	アルトゥール・ルービンシュタイン国際ピアノマスターコンクール	ルービンシュタイン
トルコ	イスタンブール	イスタンブール・オーケストラシオン国際ピアノコンクール	オーケストラシオン
カナダ	カルガリー	ホーンズ国際ピアノコンクール	ホーンズ
カナダ	モントリオール	モントリオール国際音楽コンクール	モントリオール
アメリカ合衆国	クリーヴランド	クリーヴランド国際ピアノコンクール	クリーヴランド
アメリカ合衆国	フォートワース	ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール	ヴァン・クライバーン
日本	浜松	浜松国際ピアノコンクール	浜松
日本	仙台	仙台国際ピアノコンクール	仙台
日本	高松	高松国際ピアノコンクール	高松
中国	シンセン	中国シンセン国際ピアノ協奏曲コンクール	シンセン
中国	アモイ	中国国際ピアノコンクール	中国
香港	香港	香港国際ピアノコンクール	香港
韓国	ソウル	ソウル国際音楽コンクール	ソウル
韓国	トンヨン	イサンユンコンクール	イサンユン
オーストラリア	シドニー	シドニー国際ピアノコンクール	シドニー
南アフリカ	プレトリア	UNISA 国際音楽コンクール	UNISA
ブラジル	リオデジャネイロ	BNDES リオデジャネイロ国際ピアノコンクール	BNDES
チリ	ヴィニャデルマル	ルイス・シガール博士国際音楽コンクール	ルイス・シガール

WFIMC が提唱するコンクールの定義は、ホームページ上に掲載されている『国際音楽コンクールへのすすめ』⁶ の、「1. 全般」に掲載されている。冒頭を翻訳すると、

1.1 国際音楽コンクールは、特定の分野、または音楽の分野に特化した祭典であり、意欲的な若手演奏者または作曲家を世界中から紹介するために、定期的に行われるものである。大抵は、予選・セミファイナル・ファイナルの各ステージによって構成され、そのコンクールにおける国際コンクールの賞典が、審査員によって選ばれた最も優れたコンクール参加者達に授けられ、受賞者の認知の広がりをもたらすことで、彼らのキャリアをなお一層助けるものとなる。

1.2 加えて、コンクールは、レパトリーの理解、演奏の伝統や歴史、そして特定の分野、または音楽の分野の文化を高めるための、音楽家、一般大衆、そしてメディアを結びつけるフォーラムである。

となる。連盟に加盟するコンクールは、その運営においてガイドラインが厳しく定められ、その項目は、コンクール参加者について・申し込み・審査員・レパトリーリスト・滞在場所と移動・演奏のコンディション・裁定・賞典・外部影響・作曲コンクールへのすすめ、と

⁶ Recommendation for an International Piano Competition,
<https://wfimc-fmcim.org/wp-content/uploads/2018/02/RECOMMENDATIONS-ENG.pdf>,
 accessed on 2 August, 2018.

10 項目にわたり、それぞれに細則がある。重要な内容は下表参照のこと。

WFIMC が提唱する主なコンクールガイドラインの抜粋

項目	詳細の要約
コンクール参加者について	<p>2.2 年齢制限についての提案 上限: ソリストは 35 歳以下、アンサンブル・四重奏は平均年齢が 35 歳以下、作曲家は 40 歳以下 下限: 15 歳</p> <p>2.3 コンクールに参加が認められるために故意に書類を偽った者は、失格処分の上、連盟に報告</p>
申し込み	<p>3.2 申し込み要項は、WFIMC の公式言語である英語・フランス語では必ず出版されなければならない</p> <p>3.3 コンクールのルールはできるだけ早くに出版され、頒布されなければならない</p>
審査員	<p>4.1 審査員は、音楽家か音楽の職業に従事する人物で、その専門性、技量、整合性と公平性により、国際的に認知されている人物で構成されなければならない</p> <p>4.3 加盟コンクールは同じ分野の他のコンクールから、2 人以上の音楽監督、またはいつも決まって審査員長を務める人物(2 回かそれ以上連続して同じ加盟コンクールの審査員長を務めた人物)を招聘してはならない</p> <p>4.4 審査員は、あらゆる日の連続したセッションにおいて、合計で約 7 時間を超えてコンクール参加者の演奏を判断することを要求されない</p>
レポーターリスト	<p>5.1 レポーターリストは、ホストコンクールの特定の性格を反映しても良いが、コンクールの部門においての最高の達成を世に知らしめるものであるべきである</p> <p>5.3 レポーターリストは、もし可能ならば、そのコンクール分野のレポーター拡充のために、委嘱作品を含む方が良い</p>
滞在場所と移動	<p>6.1 コンクールは、すべての参加者にコンクールの期間中、ホストの町が提供できる最も高い水準のホスピタリティが反映された滞在場所を提供するであろう</p> <p>6.3 コンクールは、何人か、または全てのコンクール参加者の交通経費と滞在経費を支払う可能性を吟味するべきである</p>
演奏のコンディション	<p>7.2 予備予選を除いて、あるいは、時には予備選考においても、すべてのステージが大衆に公開されるであろう</p> <p>7.3 一次予選のライブパフォーマンスは、20 分より短いものにならないように。ただし、声楽と管楽器のコンクールにおいては短くなくても良い</p> <p>7.4 審査員は、コンクール参加者の演奏を中断してはならない、ただし参加者が制限時間を超過しているときは除く</p>

<p style="text-align: center;">裁定</p>	<p>8.2 音楽的でない面の判断は、裁定課程に含まれるべきでない</p> <p>8.3 予備予選ステージを除くすべてのコンクールのステージでは、同じ審査員によって裁定されるべきである</p> <p>8.4 あらゆる審査員は、親戚または生徒のコンクール参加者について投票できず、また他の審査員メンバーとの議論もすることができない</p> <p>8.5 すべての審査員による議論は厳格に部外秘でなくてはならない</p>
<p style="text-align: center;">賞典</p>	<p>9.1 すべてのコンクールによって与えられる賞典は、事前に発表されていなければならない</p> <p>9.3 賞金に加え、職業的に報酬を伴った演奏会、または芸術的な利点のあるリサイタルが、優勝者または入賞者にオファーされるべきである</p>
<p style="text-align: center;">外部影響</p>	<p>10.2 それぞれのコンクールは、コンクール、その入賞者、WFIMCそして音楽全般への強い注目を維持する助けにするために、メディアと良好な関係を築くべきである</p> <p>10.3 それぞれのコンクールは、開催地のコミュニティにおける文化生活の必要不可欠な部分とならなければならない</p>
<p style="text-align: center;">作曲コンクールへのすすめ</p>	<p>11.4 優勝作品は、適切なリハーサルを受けた公共のパフォーマンスをされるべきであり、もし可能なら録音されるべきである</p>

このような指針は加盟コンクールの質や公平性が担保されるように努力を促すものであり、信頼性や権威を高めることにつながっている。また、加盟コンクール入賞者が他のコンクールで優遇を受ける場合もある。例を挙げると、2015年のショパン国際ピアノコンクールでは、コンクールが指定する複数の加盟コンクールで2位以上を受賞した者が予備予選を免除された。また、香港国際ピアノコンクールは伝統的に、加盟コンクール1位受賞者の予備予選と本大会第一次予選を免除している。ブゾーニ国際ピアノコンクールでは、予備予選で選ばれたコンテストとは別に、加盟コンクール1位受賞者の応募を受け付け、書類審査を経た3名が本大会一次予選に追加で参加する仕組みとなっている。2014年のBNDESリオデジャネイロ国際ピアノコンクールにおいては、加盟コンクール1位受賞者が居住地から開催地までの航空券代金を支給された。以上のような例は、コンクール運営側が手っ取り早く優秀な参加者を集めるために、既に入賞した者が参加をしやすい状況を作っていると言える。

WFIMCは、入賞者にとっても、自身の質の高さを保証してくれるものである。もちろん個々のコンクールの個々の回をつぶさに見ていけば、レベルの上下はあるであろうし、コンクールキャリアの序盤に受験する者が多いコンクール、あるいは中盤・終盤に受験する者が多いコンクールというなんとなくの雰囲気があることも確かであるが、WFIMC加盟コンク

ールの入賞者が、世界中の 10 代後半から 30 代前半までの若手ピアニストで最も高い水準にある者たちであることに疑いの余地はない。

マコーミックの論文でも指摘されていたことだが、世界的に見れば、一つの入賞では上級のキャリアを目指すには不十分であり、多くのピアニストが入賞したとしても、次のコンクールへと向かわざるを得ない。これが皮肉にも、21 世紀における WFIMC コンクールのレベルを押し上げ、均衡をもたらしている。音楽コンクールには、スポーツでいう世界選手権やオリンピックのように、絶対的な価値を持つ大会がないからである。

それが最高峰とされているショパンコンクールやチャイコフスキーコンクール等の超有名コンクールであっても、入賞して尚、他コンクールを受け続ける人も少なくない。そして、必ずしも良い結果が出るとも限らないのである。〇〇で入賞したのに××では落ちたという情報は個人の名誉のために残されるべきでないが、事実、そのどちらかのコンクールで入賞歴のある素晴らしいピアニストが、筆者も受験していたある著名コンクールの一次予選で落ちてしまったことがあった。こうした現象は、現在の WFIMC 加盟コンクールにおける各々のレベルの高さを考えれば、なんら不思議ではない。

また、同じ出場メンバーでもう一度別の期間にコンクールを行ったとして、同じ結果が出るとは到底考えられない。もちろん本大会に出場した全ての参加者が、入賞にふさわしいレベルに達しているかどうかは疑問であるが、厳しい予備選考をくぐり抜けてきたコンテストのレベル差はそれほど大きくないものであると考えられるし、ピアニスト・審査員、そしてピアノのコンディション、順番や天気の違いの巡り合わせまで、あらゆる事象が繊細に作用して一つのコンクールの結果は出るものであり、まさに入賞には運も必要と言われる所以である。

運の偏りは、コンクールに複数回チャレンジすることで補うことができる。コンクールの知名度やアフターフォローの充実加減により、市場の反応は左右されてしまうかもしれないが、メジャーなコンクールで入賞できるポテンシャルを持つ人であれば、何度か失敗をしたとしても、いつの日かレベルの高いコンクールで頭角を表すことができるはずである。

入賞にふさわしい実力を持ち本番で発揮すること。これがピアニストにとって可能な唯一の努力であり、それ以上は何も自分ではコントロールすることができない。そして、これもまた至極当然であるが、コンクールで成果を残せたからといって、その先の活躍が約束されるとは限らない。特に、商業的な面においては、残念ながら実力主義ともいえないことは言わずもがなである。

この先の分析では 2001 年から 2017 年までの WFIMC 加盟コンクールに加え、加盟していたが脱退したコンクール、そしてもともと加盟していなかったがこの期間中に加盟したコンクール（便宜上、本論文では後者 2 つを準 WFIMC 加盟コンクールと称する）の全入賞者についてリストアップし、国籍別の推移や、コンクールごとの傾向について調査を行う。加えて、それらのコンクールで複数入賞している入賞者については、年齢・性別についての情報も加える。対象とする複数入賞者には、次のような基準を設けたい。

1. WFIMC 加盟・準 WFIMC の国際コンクールにおいて 1 位を獲得し、かつ他の WFIMC・準 WFIMC の国際コンクールで入賞（決勝における 6 人までのファイナリストを含む）しているピアニスト
2. WFIMC 加盟・準 WFIMC の国際コンクールにおいて、2 位・3 位の上位入賞を 2 回以上果たしているピアニスト

この二つの条件のいずれか、または両方を満たしているピアニストを、本論文では特別複数入賞者と呼称する。特別複数入賞者は、21 世紀のコンクールにおいて最高水準のキャリアを持つと位置付けることができる。

運が良いだけでは 2 つ以上の上位入賞は難しい。また 1 位を獲って他のコンクールで入賞を果たしている人物は、当該のコンクールの時だけ良かった、あるいはそのコンクールのその回のレベルが低かっただけという批判を一蹴できるため、この基準は、ピアニストとしての将来のキャリアを考える上でも参考になるものである。

若くしてコンクールで成功し、華々しくデビューしたのに、演奏が荒れて行く一方である・育成が失敗してしまった、と囁かれている演奏家も少なくない。たった一度きりの入賞でスターのレッテルが貼られるのは、長い間現役生活を送るピアニストにとっては本来好ましくないであろう。もちろん、たくさん入賞歴があるからといって、素晴らしい演奏家になるとは限らないが、複数の入賞歴は、少なくともその演奏家が複数の場所で高い実力を発揮し、評価されている証明である。

2. 21世紀における WFIMC 加盟、準 WFIMC コンクール入賞者のコンクールごとの推移

2-1. 概要

この項では、データベースを元にコンクールごとの入賞者を列記し、近い地域ごとにまとめて状況を整理する。各コンクール入賞者の国籍別・地域別傾向を見ると同時に、日本人コンテストの成果についても取り上げる。また、当該コンクールの入賞者が、他 WFIMC 加盟または準 WFIMC コンクールで入賞している割合についても調査する。

31-32 頁表には記されていない準 WFIMC コンクールや、例外については以下に記す通り。

1. エドワルド・グリーグ国際ピアノコンクール（ノルウェー、ベルゲン）に関しては、2018 年の最新回から WFIMC に加盟することとなったため、調査対象から外れている。
2. ジーナ・バックアワー国際ピアノコンクール（アメリカ合衆国、ソルトレイクシティ）は 2010 年に WFIMC から脱退したが、現在も続いているコンクールである。2010 年までは加盟コンクール、それ以降は準加盟コンクールとして扱う。マリア・カラス・グランプリも同様の理由で、2010 年までは加盟コンクール、それ以降は準加盟コンクール扱いとする。
3. EPTAS.スタニチッチ国際ピアノコンクール（クロアチア、ザグレブ）は、過去の資料から 2011 年の開催回では加盟していたと考えられるが、それ以外は非加盟である。今回の研究では 2011 年のみ加盟コンクール、それ以外は準 WFIMC コンクールの扱いとした。
4. ホアキン・ロドリゴ国際音楽コンクール（スペイン、マドリッド）のピアノ部門は、以前 WFIMC に加盟していたと推察されるが、2000 年代初頭に廃止され、入賞者についての資料を入手することができなかったため、調査に含めることができなかった。
5. リーズ国際ピアノコンクール（イギリス、リーズ）は、2015 年の開催回のみ WFIMC から脱退していたが、現在は復帰しており、その回のみ準 WFIMC コンクール扱いとした。

6. カサグランデ国際ピアノコンクール（イタリア、テルニ）は、2019年に次回が予定されているものの、2018年のWFIMC公式加盟コンクールリストには掲載されていない。2014年の前回までは確実にWFIMC加盟コンクールであったため、ここでは加盟コンクールとして扱う。
7. 残念ながら廃止されてしまった、あるいはそう推測されるコンクールも、WFIMC加盟コンクールであれば対象とした。ピラール・バヨナ国際ピアノコンクール（スペイン、サラゴサ、最終回は2001年）、メシアン国際コンクール（フランス、パリ、最終回は2007年）、ロンドン国際ピアノコンクール（イギリス、ロンドン、最終回は2009年）、ポルト市国際ピアノコンクール（ポルトガル、ポルト、最終回は2010年）、ヴィアンナ・ダ・モッタ国際ピアノコンクール（ポルトガル、リスボン、最終回は2010年）、ウィリアム・カペル国際ピアノコンクール（アメリカ合衆国、カレッジパーク、最終回は2012年）、セルゲイ・プロコフィエフ国際ピアニスト・指揮者コンクール（ロシア、サンクトペテルブルク、最終回は2013年）。

地域・国順に並べたコンクール毎に、コンクールの公式ホームページや、アーリンク・アルゲリッチ基金（AAF）公式のコンクール結果ページ⁷からの検索を元に、コンクール名・2001年から2017年までの入賞者一覧表・入賞者の国籍集計表を記載する。一覧表中、入賞者欄の○印は、このコンクールで入賞する以前に他のWFIMCまたは準WFIMCコンクールで入賞歴がある場合（2000年のデータまでさかのぼって採用）、☆印は、このコンクール以降に他のWFIMCまたは準WFIMCコンクールでの入賞歴がある場合（2017年に行われたコンクールまで採用）につけた。本論文では、前者を**既入賞者**、後者を**積入賞者**、両者に当てはまらない場合は、**独自入賞者**と呼称する。

これらの情報から国籍や他コンクールでの入賞歴について分析を行うと共に、既入賞者・積入賞者・独自上位入賞者の割合を算出した上で、コンクール毎の特徴や国・地域別に見た場合の傾向等を考察するものとする。

⁷ <https://www.alink-argerich.org/result>にある、国際ピアノコンクールの結果データベースから、年月やコンクール名・開催都市名を指定し、検索した。

2-2. ヨーロッパ諸国 1. イギリス・アイルランドのコンクール

【スコットランド国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位
2001	Chenyin Li ☆ ニュージーランド	Marina Nadiradze ジョージア	木村綾子 ○☆ 日本	Albert Mamriev ☆ イスラエル
2004	Tanya Gabrielian ☆ アメリカ合衆国	Evgeny Brakhman ☆ ロシア	Amir Tebenikhin ○☆ カザフスタン	Dmitry Kaprin ロシア
2007	Tom Poster ○ イギリス	Lukas Geniušas ☆ リトアニア	Tristan Pfaff ○☆ フランス	Violetta Khachikian ○☆ ロシア
2010	Oxana Shevchenko ○☆ ウクライナ	Nadezhda Pisareva ロシア	Pavel Kolesnikov ☆ ロシア	
2014	Jonathan Fournel ○ フランス	Ilya Maximov ○☆ ロシア	Jianing Kong ○☆ 中国	
2017	Can Cakmur トルコ	Florian Mitrea ○ ルーマニア	Luka Okros ○ ジョージア	

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア	
日本	1	ロシア	6	イスラエル	1	フランス	2	ルーマニア	1	アメリカ合衆国	1	ニュージーランド	1
中国	1	ジョージア	2	トルコ	1	イギリス	1						
		リトアニア	1										
		カザフスタン	1										
		ウクライナ	1										

【リーズ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2003	Antti Siirala ○ フィンランド	Eugenia Rubina ○ ウズベキスタン	大崎 結真 ○ 日本	Igor Tcheteuev ウクライナ	Chiao-ying Chang ○ 台湾	Sodi Braide ナイジェリア
2006	Sun-Wook Kim ○ 韓国	Andrew Brownell ○ アメリカ合衆国	Denis Kozhukhin ☆ ロシア	Siheng Song ○ 中国	Sung Hoon Kim ○ 韓国	Grace Fong アメリカ合衆国
2009	Sofya Gulyak ○ ロシア	Alexej Gorlatov ○☆ ウクライナ	Alessandro Tavema ○☆ イタリア	David Kadouch ○ フランス	Wai-Ching Rachel Cheung ○☆ 香港	Jianing Kong ☆ 中国
2012	Federico Colli ○ イタリア	Louis Schwitzgebel-Wang ○ スイス	Jia-yan Sun ○☆ 中国	Andrejs Osokins ○☆ ラトビア	Andrew Tyson ☆ アメリカ合衆国	Jayson Gillham ○☆ オーストラリア
2015	Anna Tsybuleva ○ ロシア	Hee-Jae Kim ○ 韓国	Vitaliy Pisarenko ○ ロシア	Drew Petersen アメリカ合衆国	北村 朋幹 ○☆ 日本	Yun Wei 中国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア		アフリカ	
中国	4	ロシア	4	イタリア	2			アメリカ合衆国	4	オーストラリア	1	ナイジェリア	1
韓国	3	ウクライナ	2	フィンランド	1								
日本	2	ウズベキスタン	1	フランス	1								
台湾	1	ラトビア	1	スイス	1								
香港	1												

【ロンドン国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位
2002	Giuseppe Andaloro ○☆ イタリア	Alberto Nosè ○☆ イタリア	Andrej Shibko ○ ベラルーシ

2005	Herbert Schuch ○☆	Jean-Frédéric Neuburger ○	Jayson Gillham ☆
	ドイツ	フランス	オーストラリア
2009	Behzod Abdurayimov	Alessandro Taverna ☆	Andrejs Osokins ○☆
	ウズベキスタン	イタリア	ラトビア

東アジア	旧ソ連	西ヨーロッパ	東ヨーロッパ	北アメリカ	オセアニア
	ベラルーシ	1 イタリア	3		オーストラリア
	ウズベキスタン	1 ドイツ	1		
	ラトビア	1 フランス	1		

(不明1名)

【RNCM モットラム国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位
2008	Kateryna Titova	Sasha Grynyuk ☆	Alexei Tartakovski
	ウクライナ	ウクライナ	アメリカ合衆国
2010	Kiryl Keduk	Zoltán Fejérvári ☆	Ronaldo Rolim ☆
	ベラルーシ	ハンガリー	ブラジル
2012	該当なし	Yat Tsang Hin Victoria Vassilenko ☆	Dionne Lee
		香港 ブルガリア	不明
2014	Alexander Panfilov ○☆	Giuseppe Guerrera ☆	Kausikan Rajeshkumar
	ロシア	イタリア	イギリス
2016	Clément Lefebvre	Florian Mitrea ○☆	Daumants Liepinš ☆
	フランス	ルーマニア	ラトビア

東アジア	旧ソ連	西ヨーロッパ	東ヨーロッパ	北アメリカ	南アメリカ
香港	1 ウクライナ	2 イタリア	1 ハンガリー	1 アメリカ	1 ブラジル
	ベラルーシ	1 イギリス	1 ブルガリア	1	
	ロシア	1 フランス	1 ルーマニア	1	
	ラトビア	1			

【ダブリン国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2003	Antti Siirala ○☆	Li Wang ○	Matan Daniel Porat	Brenda Jone	Andrej Ponochevny ○☆	Heidi Hau
	フィンランド	カナダ	イスラエル	アメリカ合衆国	ベラルーシ	アメリカ合衆国
2006	Romain Deschamps ○	Kyu-Yeon Kim ○☆	Roberto Plano ○	Libor Novacek	須藤 梨菜 ○	Gilles Vonsattel ○☆
	フランス	韓国	イタリア	チェコ	日本	スイス
2009	Alexej Gorlatch ○☆	Jong-Hai Park ○☆	Soo-Jung Ann ☆	Eric Zuber ○☆	Rachel Naomi Kudo	Sooyeon Ham ☆
	ウクライナ	韓国	韓国	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	韓国
2012	Nikolay Khozyainov ☆	Jia-yan Sun ☆	Andrejs Osokins ○☆	Alexander Bernstein ☆		
	ロシア	中国	ラトビア	アメリカ合衆国		
2015	Nathalia Milstein	Alexander Bernstein ○☆	Alexander Beyer ☆	Caterina Grewe ○		
	フランス	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	ドイツ		

東アジア	旧ソ連	イスラエル・中東	西ヨーロッパ	東ヨーロッパ	北アメリカ
韓国	4 ベラルーシ	1 イスラエル	1 フランス	2 チェコ	1 アメリカ
日本	1 ウクライナ	1	フィンランド	1	カナダ
中国	1 ロシア	1	イタリア	1	
	ラトビア	1	スイス	1	
			ドイツ	1	

これらのコンクールのうち、ロンドン国際ピアノコンクールは2009年を最後に廃止されたため、2018年現在のイギリス・アイルランドでは、4つのWFIMC加盟コンクールが現存している。

全体に西ヨーロッパ出身者の健闘が目立つが、地元イギリス・アイルランドの割合は低く、ホームアドバンテージはほとんど見られない。リーズ・ダブリンの両コンクールでは、アメリカ勢も好成績である。対してスコットランドでは、明らかに旧ソ連系の入賞者割合が多い。東アジア地域出身者は、リーズ・ダブリンで多く、その他の3つのコンクールではほとんど見られない。中国系（中国、香港、台湾）の割合が比較的多い一方、日本人入賞者は17年間・計21大会が行われたうち、木村綾子（スコットランド3位）・大崎結真（リーズ3位）・須藤梨菜（ダブリン5位）・北村朋幹（リーズ5位）の4名にとどまっており、コンクールごとに見ても地域全体で見ても、日本人にとっては難関である。

リーズとダブリン両コンクールにおける結果の親和性については言及が必要であろう。修士論文でも取り上げたが、この二つのコンクールは3年毎に同年開催され（ダブリンが初夏、リーズが晩夏に行われる）、リーズの審査員長を長く務めたファニー・ウォーターマンと、ダブリンの審査員長を現在も務めるジョン・オコーナーが、互いのコンクール審査に頻繁に行き来していることもあってか、2003年のアンティ・シーララ（ダブリン、リーズとも1位）、2009年のアレクセイ・ゴルラッチ（ダブリン1位、リーズ2位）、2012年のJiayan Sun（ダブリン2位、リーズ3位）、Andrejs Osokins（ダブリン3位、リーズ4位）と、同じ年に両コンクール共に入賞したピアニストが目立つ。ただ2018年のリーズは、ウォーターマン体制を刷新して行われることがすでに発表されている。

次に、他コンクールでの入賞者傾向（○または☆欄）を見ると、

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
スコットランド	24	17	11	13	3	70.8%	45.8%	54.2%	16.7%
リーズ	30	25	22	10	0	83.3%	73.3%	33.3%	0.0%
ロンドン	9	8	6	6	1	88.9%	66.7%	66.7%	11.1%
RNCM	15	8	2	8	7	53.3%	13.3%	53.3%	46.7%
ダブリン	26	20	14	15	2	76.9%	53.8%	57.7%	13.3%

となり、RNCM マンチェスターがやや下がる他は、おしなべて高い値となっている。RNCM マンチェスターは、○で表した既入賞者の入賞が極端に少ない。また上位入賞者、特に1位の独自性が気になるところである。リーズでは、上位入賞者の全員が他の何らかのWFIMC・準WFIMCコンクールで入賞しており、全体でも既入賞者の割合が7割以上を占める。対照

的に☆で表した積入賞者は少なく、1位・2位に限って見ると、ゴルラッチを除けば、リーズ入賞以降、他 WFIMC コンクールでの入賞を積み重ねていない。これらの受賞者は、キャリアにそれ以上の入賞は必要ないと判断していると考えられる。スコットランド・ダブリンでは、既入賞者・積入賞者が拮抗した数字となっており、キャリアスタート、エンド両方に使うことのできるコンクールであるといえる。

2-3. ヨーロッパ諸国 2. ドイツ・オーストリアのコンクール

【テレコム・ボン・ベートーヴェン国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位
2005	Henri Sigfridsson ○	高橋 礼恵 ○	David Kadouch ☆
	フィンランド	日本	フランス
2007	Yung Wook Yoo ○	服部 慶子 ☆	Dmitry Demiashkin ○
	韓国	日本	ロシア
2009	Hinrich Alpers ○	Jordi Bittloch	Einav Yarden ○
	ドイツ	フランス	イスラエル
2011	Jingge Yan	Chi Ho Han ○☆	Rémi Geniet ☆
	中国	韓国	フランス
2013	Soo-Jung Ann ○	Stefan Cassomenos	犬飼 新之介 ○
	韓国	オーストラリア	日本
2015	Filippo Gorini	Ben Cruchley	Moritz Winkelmann
	イタリア	カナダ	ドイツ
2017	Alberto Ferro ○	北村 朋幹 ○	Jo Heong Lee
	イタリア	日本	韓国

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア	
日本	4	ロシア	1	イスラエル	1	フランス	3			カナダ	1	オーストラリア	1
韓国	4					ドイツ	2						
中国	1					イタリア	2						
						フィンランド	1						

【ケルン国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト
2001	Lance Coburn	Ingmar Schwindt ☆	Joanna Marcinkowska	
	オーストラリア	ドイツ	ポーランド	
2005	Jin Sang Lee ○☆	Joon Kim ☆	奥村 友美 ☆	服部 慶子 ☆ Anna Sheludko Gerhard Vielhaber
	韓国	韓国	日本	日本 ロシア ドイツ
2011	坂本 真由美 ○	Suk Yeon Kim	Florian Noack ☆	
	日本	韓国	ベルギー	
2014	Georgy Voylochnikov ○☆ Philipp Scheucher ☆	Mishka Rushdie Momen	沼沢 淑音	
	ロシア オーストリア	イギリス	日本	

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア	
韓国	3	ロシア	2	ドイツ	2	ポーランド	1			オーストラリア	1
日本	4			ベルギー	1	イギリス	1				
				オーストリア	1						

【ドルトムント・シュューベルト国際コンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位
2001	Olga Filatova ロシア	Eun Joo Chung 韓国	Zoltán Füzesséry ハンガリー	Jill Lawson メキシコ	Jacob Leuschner ○☆ ドイツ
2003	Yong-Kyu Lee ○ Amir Katz 韓国 イスラエル	該当なし	峯 優子 ☆ 日本	Sonja Fräki フィンランド	Géraldine Dutroncy フランス
2005	川島 基 日本	今川 裕代 日本	Philip Kopatchevsky ロシア	Konstantin Lapshin ロシア	Anastasia Gamaley ロシア
2007	佐藤 卓史 ☆ 日本	篠原 モモ 日本	David Meier ドイツ	Kinwai Shum 香港	萬谷 衣里 ☆ 日本
2011	Vadym Kholodenko ○☆ ウクライナ	Chi Ho Han ○☆ 韓国	Ah Ruem Ahn ☆ 韓国		
2016	Volodymyr Lavrynenko ウクライナ	Jun-Hee Kim ○☆ 韓国	Emrecan Yavuz トルコ	古川 貴子 (セミ) 日本	Vasyl Kotys ○ (セミ) ウクライナ

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		南アメリカ	
日本	7	ロシア	4	イスラエル	1	ドイツ	2	ハンガリー	1			メキシコ	1
韓国	5	ウクライナ	3	トルコ	1	フィンランド	1						
香港	1					フランス	1						

【ヨハン・セバスチャン・バッハ国際コンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2002	Martin Stadtfeld ○ ドイツ	該当なし	Andrew Brownell ☆ Eric King-hei Fung アメリカ合衆国 香港	富永 綾 日本	Herbert Schuch ☆ ドイツ	Marijana Nevolovitch ロシア
2006	Irina Zahharenkova ○☆ エストニア	Varvara Nepomnyashchaya ☆ ロシア	Olena Vorotko ロシア	Li-chun Su ☆ 台湾	Assen Boyadjiev ブルガリア	Olga Andryushenko ○ ロシア
2010	Ilya Poletaev ○☆ ロシア	Stepan Simonian ☆ ロシア	Ekaterina Richter ロシア			
2014	Hilda Huang アメリカ合衆国	Shaghajegh Nosrati ドイツ	George Kjurjian ラトビア			

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
香港	1	ロシア	7	ドイツ	3			アメリカ合衆国	2
日本	1	エストニア	1						
台湾	1	ブルガリア	1						
		ラトビア	1						

【ARD 国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位
2002	Denis Proschaev ウクライナ	Ferenc Vizi ○☆ ルーマニア	Chiao-ying Chang ○☆ 台湾

2006	Benjamin Kim	河村 尚子 ○☆ Marianna Shirinyan	
	アメリカ合衆国	日本 ドイツ	
2011	Alexej Gorlatch ○	Claire Huangci	Da Sol Kim ○☆
	ウクライナ	アメリカ合衆国	韓国
2014	該当なし	Chi Ho Han ○☆	Kangun Kim Florian Mitrea ☆
		韓国	韓国 ルーマニア
2017	Jeung Beum Sohn ○	Fabian Müller ○	久末 航
	韓国	ドイツ	日本

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	4	ウクライナ	2	ドイツ	2	ルーマニア	2	アメリカ合衆国	2
日本	2								
台湾	1								

【フランツ・リスト国際ピアノコンクール（ワイマール）】

	1位	2位	3位	ファイナリスト
2003	該当なし	Julian Gorus	Risto-Matti Marin	Tamara Kordzadze ○
		ブルガリア	フィンランド	ジョージア
2006	Olga Kozlova ☆	高田 匡隆 ○☆	Vitaliy Pisarenko ☆	
	ロシア	日本	ロシア	
2009	Gábor Farkas ○	Oleksandr Poliykov ○☆	Linzi Pan ☆	
	ハンガリー	ウクライナ	中国	
2011	Marina Yakhlakova	Sergei Sobolev ○	Ilya Kondratiev ○☆	
	ロシア	ロシア	ロシア	
2015	Alexey Sychev ○	Dina Ivanova ☆	Arseny Sadykau ○	
	ロシア	ロシア	ベラルーシ	

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	1	ロシア	7	フィンランド	1	ブルガリア	1		
中国	1	ジョージア	1			ハンガリー	1		
		ウクライナ	1						
		ベラルーシ	1						

【ロベルト・シューマン国際ピアノ・声楽コンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト
2004	山本 亜希子 ○	Nicolas Bringuier	Soojin Ahn	鈴木 弘尚 ○ 仁上 亜希子 ○☆ Sofya Lisitchenko-Lisitsa
	日本	フランス	アメリカ合衆国	日本 日本 ロシア
2008	加野 瑞夏 ○	仁上 亜希子 ○	Da Sol Kim ○☆	東浦 亜希子 Ksenia Rodionova ☆ 山本 絵理
	日本	日本	韓国	日本 ロシア 日本
2012	Aljoša Jurinic ☆	Florian Noack ○	Luca Buratto ☆	Uikyung Jung ☆ Andrey Telkov
	クロアチア	ベルギー	イタリア	韓国 ロシア

2016	該当なし	Cheng Zhang ○ 梅村 知世	阿見 真依子 Tiffany Poon	Uiikyung Jung ○ Yupeng Mei
		中国 日本	日本 香港	韓国 中国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	9	ロシア	3	フランス	1	クロアチア	1	アメリカ合衆国	1
韓国	3			ベルギー	1				
中国	2			イタリア	1				
香港	1								

【ザルツブルク・モーツァルト国際コンクール】

	1 位	2 位	3 位	ファイナリスト
2002	菊池 洋子 ○	Jae-Won Cheung	酒井 雅子	Jacob Leuschner ○☆ Emese Mali
	日本	韓国	日本	ドイツ ハンガリー
2011	Federico Colli ☆	Ji-Hye Jung	Xiaoxi Wu	
	イタリア	韓国	中国	
2016	Saskia Giorgini	Yoonhee Yang	Julia Kociuban ☆	
	イタリア	韓国	ポーランド	

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	3			イタリア	2	ポーランド	1		
日本	2			ドイツ	1	ハンガリー	1		
中国	1								

【ウィーン・ベートーヴェン国際ピアノコンクール】

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
2001	Oliver Kern	Christopher Hinterhuber○	Ingo Dannhorn			
	ドイツ	オーストリア	ドイツ			
2005	Herbert Schuch ○☆	Gabrielius Alekna	Petr Ovtcharov	高橋 礼恵 ☆ (セミ)	Matthias Souce (セミ)	Hyo-Sun Lim ○☆ (セミ)
	ドイツ	リトアニア	ロシア	日本	オーストリア	韓国
2009	Alexander Schimpf ☆	該当なし	Ji-Hoon Jun ○ Chi Ho Han ☆			
	ドイツ		韓国 韓国			
2013	Maria Mazo ☆	Andrey Gugin ○☆ Valentin Fheodoroff	該当なし	Vakhtang Jordania(セミ)○	Adela Liculescu (セミ)	Sarah Soyeon Kim (セミ)○
	ロシア	ロシア オーストリア		ジョージア	ルーマニア	韓国
2017	Rodolfo Leone ○	Sahun Hong	Bolai Cao ○☆	Hans H. Suh (セミ)○	Alexander Bernstein(セミ)○	Kyubin Chung (セミ)
	イタリア	アメリカ合衆国	中国	韓国	アメリカ合衆国	韓国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	6	リトアニア	1	ドイツ	4	ルーマニア	1	アメリカ合衆国	2
日本	1	ロシア	3	オーストリア	3				
中国	1	ジョージア	1	イタリア	1				

あらゆる特色あるコンクールが集まるドイツ・オーストリアの9つのコンクールのうち、ケルン・ARDを除く7つが、作曲家の名前を冠したものとなっている。また、ドイツ一

の加盟ピアノコンクールは7つあり、これは世界最多である。

入賞者を地域別にみると西ヨーロッパ勢はあまり思わしくなく、好成績はボンとウィーンの両ベートーヴェンコンクールに限られる。リスト（ワイマール）・シューマン両コンクールに至っては、21世紀のドイツ・オーストリア勢の入賞が一度もない。アメリカ勢も、全体に低調傾向である。一方旧ソ連系は、モーツァルトコンクールでの入賞がないことをはじめ、ベートーヴェン（ボン）・ケルン・シューマン・ARDにおいても、彼らの世界的な傾向を考えれば、比較的少ない入賞者数であるものの、バッハ・リスト（ワイマール）におけるロシア人入賞者数は突出しており、他の追随を許さないものとなっている。東アジア系参加者にとっては得意なコンクールが多く、旧ソ連系が得意なバッハ・リスト（ワイマール）を除いた7つのコンクールで、多数の入賞者を輩出している。日本人も9つのコンクール全てで入賞を果たしており、特にシュベルト・シューマンの両コンクールでは、多くの入賞者と共に複数回の優勝者を出している。後述するが、これらは世界的に見ても日本人入賞者がたくさんいるコンクールである。また、韓国も同じく各コンクールで好成績を残しており、中でもウィーン・ベートーヴェンコンクールの戦績は特に良い。

では、他コンクールでの入賞歴はどうか。イギリス・アイルランドと比較すると、全体

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
ボン・ベートーヴェン	21	14	11	4	7	66.7%	52.4%	19.0%	33.3%
ケルン	16	9	3	8	4	56.3%	18.8%	50.0%	30.8%
シュベルト	28	10	6	8	11	35.7%	21.4%	28.6%	61.1%
バッハ	18	9	4	7	6	50.0%	22.2%	38.9%	50.0%
ARD	15	9	8	6	6	60.0%	53.3%	40.0%	40.0%
ワイマール・リスト	15	12	8	7	3	80.0%	53.3%	46.7%	21.4%
シューマン	23	13	9	6	5	56.5%	39.1%	26.1%	38.5%
モーツァルト	11	4	2	3	6	36.4%	18.2%	27.3%	66.7%
ウィーン・ベートーヴェン	24	15	11	8	6	62.5%	45.8%	33.3%	40.0%

的に独自上位入賞者の割合が高くなっている。目を引くのが、シュベルト・モーツァルト両コンクールにおける他コンクール入賞者の少なさである。これら作曲家の作品に関して、筆者もコンクールで評価されることが難しいと指導された経験があるが、第3章で分析する日本出身コンテストへのアンケートでも、レパートリー選択についてそれに同調する回答が幾つもあった。その認識はあながち間違いではないことが数字となって現れた形で、個人差があることを前提に、両作曲家を得意にするようなスタイルのピアニストは、他コンクールでは評価されにくい傾向にあると言える。これら2コンクールに加えて、バッハコンクールの独自上位入賞者割合が高いのも、似たような理由からであると推察できる。一

方、リスト（ワイマール）コンクールでは、入賞者の8割が他コンクールでの入賞を果たしている。またリストコンクールには他にも、ユトレヒト・ブダペストの両コンクールがあるが、その中でも飛び抜けて高い数字となっている。課題曲にリスト作品だけではなく、ベートーヴェンソナタや平均律など、他コンクールとの汎用性の高いものや、リスト作品でもメジャーなものが選択できること等が理由として考えられる。ボン・ベートーヴェン国際ピアノコンクールにおいては、積入賞者割合が低くなっている。年齢制限が比較的高いコンクールということに加えて、どちらかというキャリアの終盤に受ける意味合いが強いと認識されているように思われる。それと対照的なのは既入賞者割合が低いケルン国際音楽コンクールで、こちらはコンクールキャリアの入口としての役割を果たしているコンクールであると言える。

2-4. ヨーロッパ諸国 3. スイスのコンクール

【ジュネーヴ国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位
2001	Roland Krüger ドイツ	Nicolas Stavy ☆ フランス	塚本聖子 日本
2002	Sergei Kudriakov ☆ ロシア	山本 亜希子 ☆ 日本	大崎 結真 ○☆ 日本
2005	該当なし	Louis Schwitzgebel-Wang ☆ スイス	Irina Zaharenkova ○ Alexander Yakovlev ☆ エストニア ロシア
2006	該当なし	Gilles Vonsattel ○☆ (1席) Juliana Avdeeva ☆ (2席) スイス ロシア	菊地 裕介 ○ 日本
2008	該当なし	Hannes Minnaar ☆(1席) Duanduan Hao ☆(2席) オランダ 中国	Da Sol Kim ○☆ 韓国
2010	萩原 麻未 日本	Maria Massytcheva ○ Hyo-Joo Lee ○ ロシア 韓国	
2012	Lorenzo Soules-Aguilar フランス	Mikhail Sporov ロシア	松下 彩 日本
2014	Ji-Yeong Mun ○☆ 韓国	Pallavi Mahidhara ○ アメリカ合衆国	Honggi Kim ○ 韓国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	6	ロシア	5	スイス	2			アメリカ合衆国	1
韓国	4	エストニア	1	フランス	2				
中国	1			ドイツ	1				
				オランダ	1				

【クララ・ハスキル国際ピアノコンクール】

	1 位	ファイナリスト
2001	Martin Helmchen	Inon Barnatan Deborah Lee ☆
	ドイツ	イスラエル アメリカ合衆国
2003	該当なし	Jacob Katznelson ○ Herbert Schuch ○☆ Stefan Stroissnig
		ロシア ドイツ オーストリア
2005	Sun-Wook Kim ☆	Francesco Piemontesi ☆ Gottlieb Wallisch
	韓国	スイス オーストリア
2007	河村 尚子 ○	Alina Elena Bercu Yana Vasilyeva
	日本	ルーマニア ロシア
2009	Adam Laloum	François Dumont ☆ Nima Vincent Sarkechik
	フランス	フランス フランス
2011	Cheng Zhang ☆	Zhichao Julian Jia ☆ Joo-Hyeon Park ☆
	中国	中国 韓国
2013	Cristian Budu	Dmitry Mayboroda ☆ François-Xavier Poizat
	ブラジル	ロシア スイス
2015	該当なし	Guillaume Bellom ○ Yukyeong Ji Benedek Horváth
		フランス 韓国 ハンガリー
2017	藤田 真央	Alberto Ferro ○☆ Aristo Sham ☆
	日本	イタリア 香港

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		南アメリカ	
韓国	3	ロシア	3	イスラエル	1	フランス	4	ルーマニア	1	アメリカ合衆国	1	ブラジル	1
日本	2					オーストリア	2	ハンガリー	1				
中国	2					スイス	2						
香港	1					ドイツ	2						
						イタリア	1						

【ゲザ・アンダ国際ピアノコンクール】

	1 位	2 位	3 位
2003	Alexei Volodin ○	Sergei A. Kuznetsov ☆	河村 尚子 ○☆
	ロシア	ロシア	日本
2006	Sergei Kudriakov ○	Nikolai Tokarev	奥村 友美 ○
	ロシア	ロシア	日本

2009	Jin Sang Lee ○ 韓国	Alexei Zuev ロシア	Tatjana Kolesova ○ ロシア
2012	Varvara Nepomnyashchaya ○ ロシア	Da Sol Kim ○ 韓国	Elmar Gasanov ○ ロシア
2015	Andrew Tyson ○ アメリカ合衆国	Aleksandr Shaikin ○ ロシア	Ronaldo Rolim ○ ブラジル

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		南アメリカ	
日本	2	ロシア	9					アメリカ合衆国	1	ブラジル	1
韓国	2										

スイスでは、3つの伝統的な WFIMC 加盟コンクールが開催されている。古くからスイス人作曲家の作品を積極的に取り上げるジュネーヴ、ヴィルトゥオーソピースをほとんど選択することのできないクララ・ハスキル、そして世界一準備する課題曲が多く、入賞後の演奏活動褒賞も豊富なゲザ・アンダである。日本人優勝者の存在からか、日本では前者2つが有名であるが、ゲザ・アンダの難易度と入賞の価値は、もっと広く知られるべきものであると筆者は常々感じている。2018年に開催時の課題は以下の通り。本大会の1次・2次では、表中1～10.の課題からそれぞれ選択しておき、その膨大なレパートリーの中から、

2018年ゲザ・アンダ国際ピアノコンクールの課題

作曲家	選択肢
1. ハイドン	ピアノソナタ Hob. XVI:49, 50, 52 から一曲
2. モーツァルト	ピアノソナタ K.280, 310, 333, 457, 576 から一曲
3. ベートーヴェン	ピアノソナタ No.4, 7, 16, 18, 28, 32 から一曲
4. シューベルト	4つの即興曲 D899、4つの即興曲 D935のどちらか全曲または、ピアノソナタ D850, 958, 959, 960の中から一曲
5. シューマン	謝肉祭、幻想小曲集、交響的練習曲、幻想曲、フモレスケから一曲
6. ブラームス	ピアノソナタ No.1, 2, 3、ヘンデル変奏曲、パガニーニ変奏曲から一曲、または8つの小品 op.76、幻想曲 op.116、6つの小品 op.118のいずれかの全曲
7. ショパン	op.10、op.25の練習曲から3曲(op.10-3, 6、op.25-7を除く)
8. ショパン またはリスト	ショパン:ピアノソナタ 2, 3番から一曲、または24の前奏曲全曲、または任意のバラードとスケルツォを一曲ずつ または リスト:超絶技巧練習曲から5曲、またはパガニーニ大練習曲全曲、またはピアノソナタ
9. ドビュッシー またはラヴェル	ドビュッシー:映像第1集と第2集両方全曲または、版画と喜びの島、または前奏曲から5曲 または ラヴェル:夜のガスパール、クーブランの墓、鏡のいずれかの全曲、または、高雅で感傷的なワルツと水の戯れの組み合わせ
10. バルトーク または現代曲	バルトーク:組曲 op.14と戸外にての組み合わせ、またはハンガリー農民の歌による即興曲とピアノソナタの組み合わせ または 60年以内に書かれた現代作品、任意の一曲
11. モーツァルトの ピアノ協奏曲	No.20, 21, 23, 24 から一曲

12. ベートーヴェンのピアノ協奏曲	No.3, No.4, No.5 から一曲
13. ロマン派以降のピアノ協奏曲	シューマン イ短調、ブラームス 1,2 番、ショパン 1,2 番、リスト 1,2 番、チャイコフスキー 1 番、バルトーク 3 番のいずれか一曲

審査員に指定される作品を演奏する（第1次予選の最初の作品のみ自分で選択できる）。セミファイナルでは 11. のモーツァルト協奏曲を、ファイナルでは 12. のベートーヴェン協奏曲と 13. のロマン派以降の協奏曲から、審査員に指定される一曲を演奏する。

3 コンクール入賞者の地域別傾向を見ると、旧ソ連勢は、ロシアがアンダで入賞者全体の 6 割を占める無類の強さを誇る他、ジュネーヴ・ハスキルでも最も入賞者の多い国の一つとなっている。東アジア勢もマジョリティである。日本・韓国の二カ国が満遍なく入賞者を輩出し、ハスキルではそれに加えて、中国系の入賞者も見られる。またジュネーヴは、トータルでも日本人入賞者が多いコンクールの一つである。一方でヨーロッパ勢は、ハスキルで西ヨーロッパ系の健闘が光るものの、ジュネーヴでは少なく、アンダに至っては一人も入賞者を出すことができていない。アメリカ勢では、珍しい南米ブラジル入賞者がハスキル・アンダ両コンクールで登場している。

入賞者の他 WFIMC コンクールでの入賞状況は以下の通り。ゲザ・アンダは他コンク

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
ジュネーヴ	24	18	10	12	6	75.0%	41.7%	50.0%	25.0%
クララ・ハスキル	27	14	5	11	13	51.9%	18.5%	40.7%	48.1%
ゲザ・アンダ	15	13	12	2	2	86.7%	80.0%	13.3%	13.3%

ルでの入賞割合が 86.7%と非常に高いが、既入賞者が 8 割なのに対し、積入賞者の割合は 13.3%と非常に低くなっている。先ほどから見てきたように、巨大な課題曲群全てを準備することは熟練したピアニストとっても難しい上に、世界ツアーのような手厚い褒賞演奏会も、次の難コンクールに向かう動機をなくさせるものである。ジュネーヴの他コンクール入賞割合も高い。上位入賞者というくくりで見ると独自性はあまりないが、1 位受賞 5 人のうち 3 人（Roland Krüger、萩原麻未、Lorenzo Soules-Aguilar）が、WFIMC コンクールではジュネーヴのみの入賞となっていることも興味深い（2001 年 1 位の Roland Krüger は、公式ホームページ⁸によると、2000 年以前にも WFIMC コンクールの入賞歴はない）。一方で、残り 2 人のセルゲイ・クドゥリャコフ、ムン・ジョンは、前者はゲザ・アンダ(2006)、後者はブゾーニ(2015)と別の WFIMC 加盟コンクールでも優勝を果たしている。ジュネーヴ優勝後

⁸ Roland Krüger,

http://www.rolandkrueger.com/index.php?option=com_content&view=article&id=2&Itemid=2&lang=en, accessed on 5 August, 2018.

にコンクールを受験するかどうかは、優勝者によって考え方が異なるようである。ハスキルは、そのレパートリーの特異性からであろうか、作曲家の名前を冠さず課題曲から自由に選択できるコンクールにしては、独自入賞者の割合が非常に高くなっている。また、既入賞者も少なく、多くの入賞を積み重ねた上でキャリアの最後に優勝を果たした河村尚子の例はレアケースと言える。基本的に、ここをステップアップに他コンクールを狙うという位置付けのコンクールと見て良い。

2-5. ヨーロッパ諸国 4. フランスのコンクール

【エピナル国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位
2001	Serei Salov ☆ ウクライナ	Sung-Hoon Hwang ☆ 韓国	辻本 智美 日本	Olivier Moulin フランス
2003	Sung Hoon Kim ☆ 韓国	Jean-Frédéric Neuberger ☆ フランス	Tom Poster ☆ イギリス	後藤 正孝☆ 日本
2005	該当なし	Irina Zahharenkova ○☆ Sang-Il Han エストニア 韓国	森川 由佳子 日本	Natalja Zagalskaya ○ ロシア
2007	Ho-Yeul Lim 韓国	Sarah Soyeon Kim ☆ Hyo-Joo Lee ☆ 韓国 韓国	該当なし	Eric Artz フランス
2009	Ksenia Rodionova ○ ロシア	Chao Wang ○ 中国	岡田 奏 日本	Yuliya Lapchinskaya ロシア
2011	Da Sol Kim ○☆ 韓国	Andrey Dubov ☆ ロシア	奥田 暁仁 日本	Yoon-Soo Rhee 韓国
2013	該当なし	Ashot Khachaturyan ○ Yedam Kim ☆ アルメニア 韓国	Melissa Gore イギリス	Arseny Sadykau ☆ ベラルーシ
2015	Guillaume Bellom ☆ フランス	務川 慧悟 日本	Esther Seung-Hyun Lee 韓国	Oxana Shevchenko ○☆ ウクライナ
2017	Vitaly Starikov ロシア	Hyo-Eun Park ☆ 韓国	Dominic Degavino イギリス	江崎 萌子 日本

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	11	ロシア	5	フランス	4				
日本	7	ウクライナ	2	イギリス	3				
中国	1	エストニア	1						
		アルメニア	1						
		ベラルーシ	1						

【オルレアン国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト
2002	Winston Choi ☆ カナダ	Nino Jvania ジョージア	上野 真 日本	

2004	該当なし			Ya-ou Xie ○ Reto Reichenbach Francesco Schlimé
				中国 スイス ルクセンブルク
2006	Wilhem Latchoumia			Prodromos Symeonidis ○ Andrej Sudelskii Ermis Theodorakis
	フランス			ギリシャ ウクライナ ギリシャ
2008	Florence Cioccolani			Adam Marks Antal Sporck
	フランス			アメリカ合衆国 オランダ
2010	Christopher Falzone ○☆	Yejin Gil		Anaël Bonnet
	アメリカ合衆国	韓国		フランス
2012	Christopher Guzman ○			Soojin Anjou Andrew Zhou
	アメリカ合衆国			アメリカ合衆国 アメリカ合衆国
2014	Imri Talgam	Aline Piboule	Kathrin Isabelle Klein	
	イスラエル	フランス	ドイツ	
2016	大滝 拓哉	Marianna Abrahamyan	Philippe Hattat-Colin	
	日本	アルメニア	フランス	

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	2	ジョージア	1	イスラエル	1	フランス	5			アメリカ合衆国	5
中国	1	ウクライナ	1			ギリシャ	2			カナダ	1
韓国	1	アルメニア	1			スイス	1				
						ルクセンブルク	1				
						オランダ	1				
						ドイツ	1				

【ロン＝ティボー＝クレスパンコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	ファイナリスト
2001	Dong-Hyek Lim ○☆	Ilya Rashkovsky ☆	Serei Salov ○☆	Bertrand Chamayou	木村綾子 ○	岡本麻子 ☆	
	韓国	ロシア	ウクライナ	フランス	日本	日本	
2004	Siheng Song ○☆	Alberto Nosé ○☆	Jean-Frédéric Neuburger○☆	Mu-ye Wu ○	Pavel Dombrovsky	Véra Tsybakova	
	中国	イタリア	フランス	中国	ロシア	ロシア	
2007	田村 響	Jun-Hee Kim ☆	Sofya Gulyak ○☆	Tae-Hyung Kim ○☆	Antoine De Grolée	Tristan Pfaff ○	
	日本	韓国	ロシア	韓国	フランス	フランス	
2009	該当なし	Maria Massytcheva ○☆	Guillaume Vincent	Yunjie Chen ☆	佐野 隆哉		斎藤 一也 ☆
		ロシア	フランス	中国	日本		日本
2012	該当なし	Jong-Do An ○	Ismaël Margain	JuYoung Park	Jaeyeon Won ☆		Andrejs Osokins ○☆
		韓国	フランス	韓国	韓国		ラトビア
2015	該当なし	Julian Trevelyan	實川 風	Joo-Hyeon Park○☆	深見 まどか ○	Darya Kiseleva ○	
		イギリス	日本	韓国	日本	ロシア	

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	7	ロシア	6	フランス	6				
日本	7	ウクライナ	1	イタリア	1				
中国	3	ラトビア	1	イギリス	1				

【オリヴィエ・メシアン国際コンクール】

	1 位	2 位	3 位	4 位
2003	Chuan Qin 中国	Prodromos Symeonidis ☆ ギリシャ	Hue-Am Park 韓国	Fedor Amirov ○☆ ロシア
2007	Le Liu 中国	Marie Vermeulin ○ フランス	岡本 麻子 ○ 日本	Yuri Favorin ☆ ロシア

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
中国	2	ロシア	2	ギリシャ	1				
韓国	1			フランス	1				
日本	1								

現存するフランスの WFIMC 加盟コンクールは、2007 年に終了したメシアン国際を除く 3 つである。またオルレアン、メシアンは現代音楽に特化した国際コンクールとして知られている。

全体的にフランス人の入賞が目立つ。ある程度はホームアドバンテージが働いていると見て良いであろう。他の西ヨーロッパ勢は、まとまった数の入賞がエピナルにおけるイギリスくらいで、全体的に低調であると言える。あまり見かけない国ギリシャは、現代曲中心のコンクールで入賞者を出している。また東ヨーロッパ勢は、現時点で入賞が見られない。オルレアンにおけるアメリカ合衆国は、フランスと並んで最も入賞者の多い国であるが、北アメリカ勢の入賞はそこでしか見られない。ロシアを中心とする旧ソ連は、オルレアンでは低調な一方、自由曲中心のエピナル・ロン＝ティボーでは安定した成績を取っている。しかし、最も多数派を占めるのは、日中韓の東アジア勢である。エピナル・ロン＝ティボー＝クレスパンは、21 世紀において日本が好成績を出している 2 コンクールであるが、韓国もそれと同等か上回る入賞者を輩出している。

フランスの自由曲を中心とするコンクールの入賞者国籍傾向については特筆すべきであろう。ロン＝ティボー＝クレスパンでの入賞者（ファイナリストを含む）33 人の国籍は 9 カ国にとどまり、日本・韓国・ロシア・フランスの 4 国で約 88% を占める。エピナルにおいても、入賞者 36 人の 7 割 5 分がこの四カ国で占められている。日露韓は、世界的に見て入賞トップの国々であることは確かであるが、西ヨーロッパのコンクールでここまでの偏りは珍しい。

次に、他コンクールでの入賞者を見る（次頁上表）。やはり、現代曲コンクールの独自上位入賞率は、課題の特殊性から高めとなっている。エピナルにおいては、既入賞者を積入賞者がかなり上回り、どちらかといえばキャリアのはじめに受けるコンクールという位

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
エピナル	36	20	7	16	10	55.6%	19.4%	44.4%	37.0%
オルレアン	25	5	4	2	20	20.0%	16.0%	8.0%	80.0%
ロン＝ティボー	33	22	16	16	5	66.6%	48.5%	48.5%	33.3%
メシアン	8	5	3	3	3	62.5%	37.5%	37.5%	50.0%

置付けになる。ロン＝ティボーに関しては、既入賞者と積入賞者の数が拮抗したが、両方を兼ねる入賞者も10名と、キャリアスタート・エンドの中間に位置するコンクールであると言える。2000年代の上位入賞者は、田村響（2007年1位）、Guillaume Vincent（2009年3位）を除き、入賞後に他のWFIMC加盟コンクールに入賞しているが、10年代に行われた2回のコンクールの上位入賞者は2017年までに入賞はなく、独自色が強まる傾向となっている。

2-6. ヨーロッパ諸国 5. イタリアのコンクール

【フェルッチョ・ブゾーニ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2001	Alexander Romanovsky ☆ ウクライナ	Hea Jung Cho ☆ 韓国	Dong-Min Lim ○☆ 韓国	松本 和将 (セミ) ☆ 日本	Luca Rasca (セミ) ○ イタリア	Martin Stadtfeld (セミ) ☆ ドイツ
2003	該当なし	Maria Stembolskaya ○ ロシア	Lyubov Gegetchkori Mu-ye Wu ☆ ジョージア 中国	Jong-Hwa Park (セミ) 韓国	Alberto Ferrari (セミ) イタリア	Alessio Cioni ☆ (セミ) イタリア
2005	Giuseppe Andoloro ○☆ イタリア	Mariangela Vacatello ☆ イタリア	Hye-Jin Kim ☆ 韓国	Anna Vinnitskaya ○☆ (セミ) ロシア	Spencer Myer ○☆ (セミ) アメリカ合衆国	Wen-yu Shen ○☆ (セミ) 中国
2007	該当なし	Sofya Gulyak ○☆ Dinara Klinton ☆ ロシア ウクライナ	Lilian Akopova ○☆ ウクライナ	Mariya Kim ○☆ (セミ) ウクライナ	Martina Filjak ☆ (セミ) クロアチア	Dudana Mazmanishvili (セミ) ジョージア
2009	Michail Lifits ○ ウズベキスタン	Alexei Lebedev ☆ ロシア	Gesualdo Coggi イタリア	Oxana Shevchenko ○☆ (セミ) ウクライナ	Jie Yuan ○☆ (セミ) Sun-Ho Lee ○ (セミ) 中国 韓国	
2011	該当なし	Antoni Baryshevsky ○☆ Anna Bulkina ○☆ ウクライナ ロシア	Tatiana Chernichka ○☆ ロシア	Min Soo Hong ☆ (セミ) 韓国	Esther Park ○ (セミ) Alessandro Taverna ○ (セミ) アメリカ合衆国 イタリア	
2013	該当なし	Rodolfo Leone ☆ イタリア	崎谷 明弘 ☆ Dmitry Shishkin ☆ 日本 ロシア	Fabian Müller ☆ (セミ) ドイツ	Galina Chistyakova ○ (セミ) Maria Mazo ○☆ (セミ) ロシア ロシア	
2015	Ji-Yeong Mun ○ 韓国	Alberto Ferro ☆ イタリア	Roman Lopatynskiy ☆ ウクライナ	Min Soo Hong ○☆ (セミ) 韓国	Bolai Cao ☆ (セミ) 中国	Leonardo Colafelice ○☆ (セミ) イタリア
2017	Ivan Krpan クロアチア	Jaeyeon Wo ○ 韓国	Anna Geniushene ロシア	Eunseong Kim (セミ) 韓国	Xing Yu Lu ○ (セミ) 中国	Dmytro Choni ○ (セミ) ウクライナ

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	10	ロシア	10	イタリア	10	クロアチア	2	アメリカ合衆国	2
中国	5	ウクライナ	8	ドイツ	2				
日本	2	ジョージア	2						
		ウズベキスタン	1						

【リナ・サラ・ガッロ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位
2004	Mihkel Poll	Mikhail Mordvinov	Marlena Maciejkowicz
	エストニア	ロシア	ドイツ
2006	Michail Lifits ☆	Sofya Gulyak ○☆	Lorenzo Cossi ☆
	ウズベキスタン	ロシア	イタリア
2008	Ilya Poletaev ☆	Samuel Parent	Maria Perrotta
	ロシア	フランス	イタリア
2010	Mateusz Borowiak ☆	Alexander Yakovlev ○	Duanduan Hao ○
	ポーランド	ロシア	中国
2012	Scipione Sangiovanni ○☆	Meng-yang Pan	石井 園子
	イタリア	中国	日本
2014	Fiorenzo Pascalucci	Federica Bortoluzzi	木下 敦子
	イタリア	イタリア	日本
2016	Alexander Panfilov ○	Federico Nicoletta	Maddalena Giacomuzzi
	ロシア	イタリア	イタリア

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	2	ロシア	5	イタリア	7	ポーランド	1		
中国	2	エストニア	1	ドイツ	1				
		ウズベキスタン	1	フランス	1				

【アレッサンドロ・カサグランデ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位
2002	河村 尚子 ○☆	William Yun ☆	Henri Bonamy
	日本	韓国	フランス
2004	Herbert Schuch ○☆	Romain Descharmes ☆	Alessandro Roselletti ☆
	ドイツ	フランス	イタリア
2006	Irina Zahharenkova ○☆	Dmitry Demiaashkin ☆	Marco Vergini
	エストニア	ロシア	イタリア
2008	Evgeni Bozhanov ☆	Wai-Ching Rachel Cheung ☆	Gabriele Baldocci
	ブルガリア	香港	イタリア
2010	該当なし	萬谷 衣里 ○	Christopher Falzone ○ Giulio Biddau ☆
		日本	アメリカ合衆国 イタリア
2014	Zhichao Julian Jia ○	Jie Yuan ○	Alexey Sychev ○☆
	中国	中国	ロシア

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	2	ロシア	2	イタリア	4	ブルガリア	1	アメリカ合衆国	1
中国	2	エストニア	1	フランス	2				
韓国	1			ドイツ	1				
香港	1								

【G. B. ヴィオッティ国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト
2001	河村 尚子 ☆	Stefania Cafaro ○	Federico Gianello	
	日本	イタリア	イタリア	

2002	Yeol Eum Son ☆	Ekaterina Mechetina	Lorenzo Di Bella ○☆	
	韓国	ロシア	イタリア	
2003	Hyo-Sun Lim ☆	該当なし	該当なし	中尾 純 仁上 亜希子 ☆
	韓国			日本 日本
2004	Fedor Amirov ○☆	該当なし	該当なし	大嶺 未来 ○ 石岡 千弘
	ロシア			日本 日本
2005	加野 瑞夏 ☆	峯 優子 ○	Boris Feiner ○	
	日本	日本	イスラエル	
2007	Martina Filjak ○☆	Sergei Artsybashev	Cathal Breslin	
	クロアチア	ロシア	アイルランド	
2009	該当なし	Stefan Ciric ○	Christian Chamorel ☆	Yifan Hu
		セルビア	スイス	中国
2011	Alexei Lebedev ○	Ilya Zuykov ☆	Artyom Yasynskiy ☆	
	ロシア	ウクライナ	ウクライナ	
2013	Jonathan Fournel ☆	該当なし	Alexander Panfilov ☆ Alexey Sychev ☆	
	フランス		ロシア ロシア	
2015	Ilya Maximov ○	Maxim Kinasov	Alexander Bernstein ○☆	
	ロシア	ロシア	アメリカ合衆国	
2017	Konstantin Emelyanov	桑原 志織 ○ Aristo Sham ○		
	ロシア	日本 香港		

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	8	ロシア	9	イスラエル	1	イタリア	3	クロアチア	1	アメリカ合衆国	1
韓国	2	ウクライナ	2			アイルランド	1	セルビア	1		
中国	1					スイス	1				
香港	1					フランス	1				

世界で最も国際コンクールが多い国とされるイタリアであるが、WFIMC加盟コンクールは少なく、ブゾーニ・モンツァ（リナ・サラ・ガッロ）・カサグランデ・ヴィオッティの4つに限られており、それぞれの入賞者の地域・国籍別特色も明確に分かれている。近年のヴィオッティを除けば、これらのコンクールにおけるイタリアのホームアドバンテージは全体的に強いと言える。西ヨーロッパ系入賞者はイタリア一強であり、他の国々の存在感は薄い。

最大規模で唯一6位まで順位をつける（ただし最終ステージは3人で争われる）ブゾーニ国際は、2001年まで毎年開催されていたが、現在は本大会進出者を決める年と本大会の年が交互に行われ、二年にわたって選考する長期戦のコンクールである。国別の入賞者はイタリア・韓国・ロシアが多数を占め、ウクライナ・中国が続く。地域別では旧ソ連>東アジア

ア>西ヨーロッパの順となる。東アジアの入賞者が多いコンクールの中で、日本の存在感が非常に薄く、代わりに中国が強いことが特徴的である。モンツァ（リナ・サラ・ガッロ）ではイタリア人入賞者数が突出し、ロシアがそれに続く。地域別は西ヨーロッパ>旧ソ連>東アジアとなる。カサグランデでは、東アジア勢とイタリアを中心とする西ヨーロッパが拮抗し、旧ソ連系の入賞は、世界的な傾向を考えれば低調である。ヴィオッティでは日本を中心とする東アジアと、ロシアを中心とする旧ソ連系が拮抗し、イタリア中心の西ヨーロッパが続く。このコンクールも日本人が得意とするものの一つである。

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
ブゾーニ	54	46	27	35	4	85.2%	50.0%	64.8%	14.8%
リナ・サラ・ガッロ	21	9	5	6	12	42.9%	23.8%	28.6%	57.1%
カサグランデ	18	15	8	11	3	83.3%	44.4%	61.1%	16.7%
ヴィオッティ	33	24	13	15	9	72.7%	39.4%	45.5%	27.3%

他コンクール入賞者割合を見ると、ブゾーニ・カサグランデの突出が際立つ。特にブゾーニは、21世紀で最も入賞者数トータル（54人）の多いコンクール群の一つであるにもかかわらず、9回開催中5回で入賞6人全員が他WFIMCコンクール入賞を果たすなど、85%超という驚異的な数値を叩き出している。新人入賞者3人を出した2017年の開催データも含めての数字であるから、彼らの活躍次第でこれからさらに高くなる可能性さえある。また、両コンクールの積入賞者6割超えは傑出した数字で、次代の可能性あるコンテストを的確に選出していることの証明である。上位の独自入賞者も1割台と、非常に低い。カサグランデは、近年財政難もあるのか開催頻度が不定期となっているが、なんとかして良き伝統を繋いで欲しいものである。両コンクールのインパクトに隠れているが、ヴィオッティの他コンクール入賞者割合もかなり高い。一方、独自色を強めるのがリナ・サラ・ガッロで、一次にショパン作品の演奏が必須になっている等、クララ・ハスキルのようにヴィルトゥオーソ的な要素をあまり前面に押し出さないレパートリーに特徴がある。

2-7. ヨーロッパ諸国 6. スペイン・ポルトガルのコンクール

【マリア・カナルス国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位
2001	三浦 友理枝	Mel Adkins Ekaterina Krivokochenko	浅田 真弥子
	日本	イギリス ロシア	日本

2002	Viv McLean	1席:Aleksander Moutouzkine ○☆ 2席:Kook-Hee Hong	1席:Yun-yang Lee ☆ 2席:浅野真弓
	イギリス	ロシア 韓国	台湾 日本
2003	Inessa Sinkevych ☆	新納 洋介	Sowon Hwang
	ウクライナ	日本	韓国
2004	Piotr Machnik	Yi-chih Lu ☆	Matei Varga ○
	ポーランド	台湾	ルーマニア
2005	Jue Wang ☆	赤木 有季子	川村 文雄
	中国	日本	日本
2006	José Enrique Bagaría Villazá	Marie Vermeulin ☆	Mi-Yeon I
	スペイン	フランス	ニュージーランド
2007	Mladen Colic ☆	Veronika Böhmová Marisa Gupta	
	セルビア	チェコ アメリカ合衆国	
2008	Martina Filjak ○☆	Ilya Maximov ☆	石村 純 ☆
	クロアチア	ロシア	日本
2009	Vestards Shimkus	Jong-Yun Kim ☆	Scipione Sangiovanni ☆
	ラトビア	韓国	イタリア
2010	Denis Zhdanov ○☆	Olga Kozlova ○☆	Marko Hilpo
	ウクライナ	ロシア	フィンランド
2011	Mateusz Borowiak ○☆	Alexei Lebedev ○☆	Alexei Chernov ○☆
	ポーランド	ロシア	ロシア
2012	Soo-Jung Ann ○☆	中桐 望 ☆	Vadym Kholodenko ○☆
	韓国	日本	ウクライナ
2013	Stanislav Khrystenko ○☆	吉田 友昭 ○☆	Hee-Jae Kim ○☆
	ウクライナ	日本	韓国
2014	Regina Chernychko	Sergey Belyavskiy ○☆	Tatiana Chernichka ○
	ウクライナ	ロシア	ロシア
2015	Danylo Sayenko ○	Min Sung Lee	Caterina Grewe ☆
	ウクライナ	韓国	ドイツ
2016	佐藤 彦大 ○	桑原 志織 ☆	Yutong Sun ○
	日本	日本	中国
2017	Levon Avagyan	Hin Yat Tsang ○	Anastasia Rizikov ☆
	アルメニア	香港	カナダ

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア	
日本	11	ロシア	8	イギリス	2	ポーランド	2	アメリカ合衆国	1	ニュージーランド	1
韓国	6	ウクライナ	6	スペイン	1	ルーマニア	1	カナダ	1		
台湾	2	ラトビア	1	フランス	1	セルビア	1				
中国	2	アルメニア	1	イタリア	1	チェコ	1				
香港	1			フィンランド	1	クロアチア	1				
				ドイツ	1						

【ハエン賞国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト
2001	Javier Perianes Granero ☆	Sung-Hoon Hwang ○☆	Ilona Timtchenko ☆	
	スペイン	韓国	ロシア	
2002	Anna Vinnitskaya ○☆	Lilian Akopova ☆	Ya-ou Xie ☆	
	ロシア	ウクライナ	中国	

2003	該当なし	Laura McDonald	Daniel Del Piño ○ Tali Morgulis ○	
		オーストラリア	スペイン ウクライナ	
2004	Irina Zaharenkova ○☆	Domenico Godispoti ○	Mariya Kim ○☆	
	エストニア	イタリア	ウクライナ	
2005	Ilya Rashkovsky ○☆	Tatiana Chernichka ○☆	高田 匡隆 ○☆	
	ロシア	ロシア	日本	
2006	Inessa Sinkevych ○☆	Chenyin Li ○	Ji-Eun Lee	
	ウクライナ	ニュージーランド・中国	韓国	
2007	Uki Ovaskainen	Miao Huang ○☆	吉田 友昭 ☆	
	フィンランド	ドイツ	日本	
2008	Yunyi Qin	Olga Kozlova ○☆	Stefan Ciric ☆	
	中国	ロシア	セルビア	
2009	Antoni Baryshevsky ☆	犬飼 新之介 ☆	Jingjing Wang	
	ウクライナ	日本	中国	
2010	Mladen Colic ○☆	Scipione Sangiovanni ○☆	Jae-Kyung Yoo ☆	
	セルビア	イタリア	韓国	
2011	Marianna Prjevalskaya ○	Tatiana Dorokhova ☆	Viviana Pia Lasaracina ☆	
	スペイン	ロシア	イタリア	
2012	Yutong Sun ☆	Miyeon Lee	Michael Davidov ☆	
	中国	韓国	スペイン	
2013	該当なし	Marcos Raúl Madrigal Soto	Nicholas Namoradze ○	Evgeni Starodubtsev ○☆
		キューバ	ジョージア	ロシア
2014	崎谷 明弘 ○☆	Juan Carlos Fernández Nieto ☆	João Miguel Xavier	
	日本	スペイン	ポルトガル	
2015	Anastasia Rizikov ☆	Alexey Sychev ○☆	Da Sul Jung	
	カナダ	ロシア	韓国	
2016	Alexander Panfilov ○☆	Soojin Cha	Denis Zhdanov ○	
	ロシア	韓国	ウクライナ	
2017	Chun Wang ○	Dmitry Mayboroda ○	Leon Bernsdorf ○	
	中国	ロシア	ドイツ	

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア		中アメリカ	
韓国	6	ロシア	10	スペイン	5	セルビア	2			オーストラリア	1	キューバ	1
中国	5	ウクライナ	6	イタリア	3	カナダ	1			ニュージーランド	1		
日本	4	エストニア	1	フィンランド	2								
		ジョージア	1	ドイツ	1								
				ポルトガル	1								

【パロマ・オシェイ・サンタンデール国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト賞
2002	該当なし	Boris Giltburg ☆	Ning An ☆ Soyeon Clara Lee	
		イスラエル	アメリカ合衆国 韓国	
2005	Alberto Nosè ○☆	Herbert Schuch ○	Jie Chen ○	
	イタリア	ドイツ	中国	
2008	Jue Wang ○	Avan Yu ☆	福間 洸太郎 ○☆	
	中国	カナダ	日本	
2012	該当なし	Ah Ruem Ahn ○	Tamar Beraia ○ János Palóitai	
		韓国	ジョージア ハンガリー	

2015	Juan Pérez Floristán	Jae Weon Huh ☆	Jianing Kong ○☆	齋藤 一也 ○ 崎谷 明弘 ○ Jinhyung Park ☆
	スペイン	韓国	中国	日本 日本 韓国

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	4	ジョージア	1	イスラエル	1	イタリア	1	ハンガリー	1	アメリカ合衆国	1
中国	3					ドイツ	1			カナダ	1
日本	3					スペイン	1				

【ホセ・イトウルビ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2002	Maria Sissi ○	Maria Stembolskaya ☆ Severin Von Eckardstein ○☆	該当なし	Annalisa Londero ☆	Massimiliano Motterle ○	Alexei Goulenko
	ギリシャ	ロシア ドイツ		イタリア	イタリア	モルドヴァ
2004	Aleksander Moutouzkine ○☆	Jean-Frédéric Neuberger ○☆	Ingmar Schwindt ○	Panos Karan (セミ)	José Enrique Bagaria Carreira (セミ)	Alessandro Roselletti ○ (セミ)
	ロシア	フランス	ドイツ	ギリシャ	スペイン	イタリア
2006	Josu De Solaun Soto ☆	Valentina Igoshina	Andrey Yaroshinskiy ☆	Patrick Hemmerlé (セミ) Sofya Melikyan (セミ)	Natalia Kuchaeva (セミ)	
	スペイン	ロシア	ロシア	フランス アルメニア	ロシア	
2008	Zhengyu Chen	Sarah Soyeon Kim ○☆	Marianna Prjevalskaya ○☆	Ángel Cabrera Alguaci (セミ)	Angelo Arciglione (セミ)	Yu Mi Lee (セミ)
	中国	韓国	スペイン	スペイン	イタリア	韓国
2010	Andrey Yaroshinskiy ○	Arta Arnicane ○☆	Alexei Lebedev ○☆	Christian Chamorel ○ (セミ)	Zhee-Young Moon ○☆ (セミ)	Giulio Biddau ○☆ (セミ)
	ロシア	ラトビア	ロシア	スイス	韓国	イタリア
2013	吉田 友昭 ○	Ilya Maximov ○☆	Tetiana Shafran ○	仲田 みずほ (セミ)	José Ramón García Pérez (セミ)	Enrique Lapaz Lombardo (セミ) ○
	日本	ロシア	ウクライナ	日本	スペイン	スペイン
2015	Luka Okros ○☆	Viviana Pia Lasaracina ○	Aleksandra Jablczynska	Jean-Paul Gasparian	Mario Mora Saiz	Scipione Sangiovanni ○☆
	ジョージア	イタリア	ポーランド	フランス	スペイン	イタリア
2017	Fatima Dzusova	Sae-Yoon Chon ○	Jorge Antonio Nava Vásquez	Andrey Ivanov ○	坂本 彰 ○	Juan Carlos Fernández Nieto ○
	ロシア	韓国	ボリビア	ベラルーシ	日本	スペイン

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		南アメリカ	
韓国	4	ロシア	9	スペイン	8	ポーランド	1			ボリビア	1
日本	3	アルメニア	1	イタリア	7						
中国	1	ラトビア	1	フランス	3						
		ウクライナ	1	ギリシャ	2						
		ジョージア	1	ドイツ	2						
		ベラルーシ	1	スイス	1						
		モルドヴァ	1								

【ピラール・バヨナ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位
2001	Domenico Codispoti ☆	大崎 結真 ○☆	Aleksander Moutouzkine ☆
	イタリア	日本	ロシア

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ
日本	1	ロシア	1	イタリア	1			

【ヴィアンナ・ダ・モッタ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位
2001	該当なし	江尻 南美	Javier Perianes Granero ○	Ferenc Vizi ○☆	Arta Arnicane ☆	Alexei Chernov ☆	
		日本	スペイン	ルーマニア	ラトビア	ロシア	
2004	該当なし	Eleonora Karpukhova ○	Olga Monakh ○	Ketevan Sepashvili-Flashaar	Maria Massytcheva ○☆	Bei Lin Han	Tristan Pfaff ☆
		ロシア	ウクライナ	ジョージア	ロシア	中国	フランス
2007	該当なし	Dmytro Onyshchenko ○☆ Yung Wook Yoo ☆	該当なし	Lilit Grigoryan ○☆	Szczepan Konczal ☆ Inessa Sinkevych ○☆	Andreas König ○	
		ウクライナ 韓国		アルメニア	ポーランド ウクライナ	ドイツ	
2010	Lilian Akopova ○	Ilya Rashkovsky ○☆	Mikhail Shilyaev				
	ウクライナ	ロシア	ロシア				

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	1	ロシア	5	スペイン	1	ルーマニア	1		
中国	1	ウクライナ	4	フランス	1	ポーランド	1		
韓国	1	ラトビア	1	ドイツ	1				
		ジョージア	1						
		アルメニア	1						

【ポルト市国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2001	Sergei Tarasov	Siheng Song ☆ Alexandra Trusova	該当なし	Sung-Hoon Hwang ○☆	Lorenzo Di Bella ☆	Andreas König ☆
	ロシア	中国 ロシア		韓国	イタリア	ドイツ
2002	泉 ゆりの	Matei Varga ○☆	Elena Portnaya	山畑 誠	Tamara Kordzadze ☆	Razvan Victor Dragnea☆
	日本	ルーマニア	ロシア	日本	ジョージア	ルーマニア
2003	菊地 裕介 ○☆	Annalisa Londero ○ Inga Kazantseva ○	Ji-Hoon Jun ☆	Olga Monakh ☆	Eun-Nyung Erika Chun	
	日本	イタリア ロシア	韓国	ウクライナ	韓国	
2004	Tae-Hyung Kim ○☆	Inessa Sinkevych ○☆	Sam Armstrong	Vladimir Milošević	Nikolai Saratovski ☆	Diana Ismailova
	韓国	ウクライナ	イギリス	セルビア	ロシア	ウズベキスタン
2005	Evgeni Starodubtsev ○☆	Tristan Pfaff ○☆ Andrejs Osokins ☆	倉地 恵子	Mi Yeon Lee ☆	脇岡 洋平	
	ロシア	フランス ラトビア	日本	韓国	日本	
2006	Jung-Eun Lee	Hwan-Hee Yoo	古川 まりこ	今井 彩子		
	韓国	韓国	日本	日本		
2007	Daniil Tsvetkov ○☆	Enrique Bernaldo de Quirós Martín ☆	仁上 亜希子 ○☆	Yubo Zhou		
	カザフスタン	スペイン	日本	中国		
2008	Li-chun Su ○	Sun-Ho Lee ○☆ Stéphanie Proot ☆	菅野 雅紀			
	台湾	韓国 ベルギー	日本			
2010	Konstantin Semilakovs	Scipione Sangiovanni ○☆	海瀬 京子	深見 まどか ☆		
	ラトビア	イタリア	日本	日本		

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	11	ロシア	6	イタリア	3	ルーマニア	2		
韓国	8	ウクライナ	2	ドイツ	1	セルビア	1		
中国	2	ラトビア	2	イギリス	1				
台湾	1	ジョージア	1	フランス	1				
		ウズベキスタン	1	スペイン	1				
		カザフスタン	1	ベルギー	1				

イベリア半島も伝統的にコンクールが盛んな地域であり、21世紀初頭には7つのピアノ部門のある WFIMC 加盟コンクールが開催されていたが、スペインのピラール・バヨナが2001年を最後に廃止、ポルトガルのヴィアンナ・ダ・モッタ、ポルト市の両コンクールも財政難等により開催が難しくなった。国の経済危機が文化事業に大きく影響したことは想像に難くない。

かつてブゾーニ・ヴィオッティがそうであったように、カナルス・ハエン賞は、毎年行われ続けている伝統的なコンクールである。ポルト市もこの流れを組んで毎年開催であったが、やや小ぶりで賞金も少額であった（最終の2010年の1位賞金が8000€）。何かとライバル感のあるカナルス・ハエン賞両コンクールの賞金は、毎年スポンサーによって上下するが、順位賞の総額はほぼ同額（マリア・カナルスは1位賞金が大きく、ハエン賞は2位3位にも厚い特徴がある）で、ハエン賞は特別賞の賞金が非常に大きい。対するカナルスは褒賞演奏会が多いことが魅力的である。そして両コンクール共、1位受賞者は Naxos 社からの CD リリースが約束されている。また、カナルスが予備審査後に多数の本大会出場者から少数を選ぶのに対し、ハエン賞の一次予選参加者はその半分程度である。課題曲に委嘱作品の演奏が要求され、準備により手間がかかることも影響しているかもしれない。

パトロンのパロマ・オシェイの名を冠するサンタンデールは3年に一度行われ、音楽祭と直結するヨーロッパ最大規模のコンクールであるが、音源審査の上に世界各地で予備予選形式の審査があり、20人しか本大会に出場できない。ヴィアンナ・ダ・モッタは重鎮セキエラ・コスタが長く監督を務め、高い水準を誇るコンクールであった。

入賞者の地域・国籍傾向は、コンクール毎にかなり特色が違ってくる。マリア・カナルスでは日本を中心とする東アジア系がマジョリティを形成し、旧ソ連系がそれに続く。ハエン賞では逆に、ロシアを中心とする旧ソ連系に東アジア・西ヨーロッパが続く構図である。サンタンデールは、東アジア系の独壇場と言っていいほどの偏りで、旧ソ連系にとっては厳しい数字が並ぶ。ホセ・イトゥルビでは一転、国別で見ればロシアが最多となるが、地域別ではスペイン・イタリアを中心とする西ヨーロッパ系の勢力が最も大きい珍しいコンクールとなっている。廃止されたポルトガルの2コンクールについて、ヴィアンナ・ダ・モッタでは旧ソ連系が圧倒し、東アジア・西ヨーロッパは存在感が薄い。ポルト市では日本・韓国を中心とする東アジア勢が席卷し、旧ソ連系を大きく引き離していた。日本人にとって、カナルス・ポルト市は非常に入賞者数の多いコンクールである。特にポルト市は2010年までの開催にもかかわらず、9回で11人の入賞者が誕生した。それ以外のコンクールで

も満遍なく入賞者を輩出しているが、同じ毎年開催のハエン賞では東アジア諸国の中で、韓国・中国の後塵を拝していることが特徴的である。

他コンクールでの入賞は下表の通りで（ピラール・バヨナは1回のみのため除く）、こち

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
マリア・カナルス	54	33	19	27	21	61.1%	35.2%	50.0%	38.9%
ハエン賞	51	41	26	31	10	80.4%	51.0%	60.8%	19.6%
サンタンデル	18	15	10	8	3	83.3%	55.6%	44.4%	16.7%
ホセ・イトゥルビ	48	30	26	16	5	62.5%	54.2%	33.3%	20.8%
ダ・モッタ	20	16	11	11	2	80.0%	55.0%	55.0%	22.2%
ポルト市	46	27	14	24	12	58.7%	30.4%	52.2%	40.0%

らのデータでもコンクール毎の違いが顕著である。まず、サンタンデルの他コンクール入賞者割合が高いことが目を引く。全体の入賞者数は少ないが、既入賞者が積入賞者を上回っていることから、厳しい選考で本大会出場者数を絞っていることが影響していると考えられる。カナルス・ポルト市は逆に、既入賞者割合は低く積入賞者が高いことから、どちらかという新人のためのコンクールと言える。また両コンクール共、上位入賞者の4割前後が独自入賞者となっている。ただ10年以降のカナルスは、劇的に他コンクール入賞者が増えており、コンクールがその独自性を捨てて、世界基準に則したものとなるように変容したと言える。

ハエン賞は、1983年の優勝者、迫昭嘉の下で勉強する筆者が2014年に優勝したコンクールであるため、個人的な思い入れが強いことは公平に記しておかねばならない。ただブゾーニと同様に、51人という最大規模の入賞者数を抱える中で、その8割以上が他コンクールでの入賞者である点、積入賞者率が6割を超える点は、その水準を率直に評価すべきであろう。既入賞者も少なくなく、キャリアスタート・アップ・エンド全ての役割を果たしているといえる。ホセ・イトゥルビも、上位陣は独自入賞者が少ない粒ぞろいである。既入賞者率の高さを見れば、どちらかというキャリアエンドに受けるコンクールと位置付けられる。

2-8. ヨーロッパ諸国 7. ベルギー・オランダのコンクール

【エリザベート王妃国際音楽コンクール】（順位入賞者6人のみ）

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2003	Severin Von Eckardstein ○	Wen-yu Shen ☆	Dong-Hyek Lim ○☆	Roberto Giordano	松本 和将 ○	Jin Ju ○
	ドイツ	中国	韓国	イタリア	日本	中国
2007	Anna Vinnitskaya ○	Plamena Mangova	Francesco Piemontesi ○	Ilya Rashkovsky ○☆	Hyo-Sun Lim ○☆	Liebrecht Vanbeckevoort
	ロシア	ブルガリア	スイス	ロシア	韓国	ベルギー
2010	Denis Kozhukhin ○	Evgeni Bozhanov ○☆	Hannes Minnaar ○	Yuri Favorin ○☆	Tae-Hyung Kim ○	Da Sol Kim ○☆
	ロシア	ブルガリア	オランダ	ロシア	韓国	韓国

2013	Boris Giltburg ○	Rémi Geniet ○	Mateusz Borowiak ○	Stanislav Khrystenko ○☆	Zhang Zuo ○	Andrew Tyson ○☆
	イスラエル	フランス	ポーランド	ウクライナ	中国	アメリカ合衆国
2016	Lukáš Vondráček ○	Henry Kramer ○	Alexander Beyer ○	Chi Ho Han ○	Aljoša Jurinic ○	Alberto Ferro ○☆
	チェコ	カナダ	アメリカ合衆国	韓国	クロアチア	イタリア

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	5	ロシア	4	イスラエル	1	イタリア	2	ブルガリア	2	アメリカ合衆国	2
中国	3	ウクライナ	1			ドイツ	1	ポーランド	1	カナダ	1
日本	1					スイス	1	チェコ	1		
						ベルギー	1	クロアチア	1		
						オランダ	1				
						フランス	1				

【フランス・リスト国際ピアノコンクール（ユトレヒト）】

	1 位	2 位	3 位
2002	Jean Dubé ○	Ilona Timtchenko ○☆	Giancarlo Crespeau
	フランス	ロシア	フランス
2005	Yingdi Sun	Anton Salnikov	Christiaan Kuyvenhoven
	中国	ロシア	オランダ
2008	Vitaliy Pisarenko ○☆	Nino Gvetadze	Anzhelika Fuchs
	ロシア	ジョージア	ウクライナ
2011	後藤 正孝○	Olga Kozlova ○	Oleksandr Polykov ○
	日本	ロシア	ウクライナ
2014	Mariam Batsashvili	Peter Klimo	Mengjie Han
	ジョージア	アメリカ合衆国	オランダ
2017	Paweł-Alexander Ullman ○	Min Soo Hong ○	Dina Ivanova ○
	イギリス	韓国	ロシア

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
中国	1	ロシア	5	フランス	2			アメリカ合衆国	1
日本	1	ジョージア	2	オランダ	2				
韓国	1	ウクライナ	2	イギリス	1				

ベネルクス 3 国の WFIMC 加盟ピアノコンクールはこの 2 つのみである。エリザベート王妃国際音楽コンクールは、12 人でファイナルが争われた後に順位入賞者の 6 人が選出される大所帯のコンクールであるため、本論文ではこれ以降も順位入賞者のみを入賞者として扱う。そのエリザベート王妃は、コンクール強国である韓国・ロシアの入賞者が目立つものの、地域別で見た場合には比較的偏りの少ないコンクールと言える。入賞者総数は東アジア>西ヨーロッパ>旧ソ連=東ヨーロッパ>北アメリカの順となる。日本は、ファイナリスト 12 人に選ばれるコンテストは一定数いるものの、21 世紀の入賞は松本和将（2003 年、5 位）によるものが唯一で、上位進出が厳しいコンクールの一つである。ユトレヒトのリストコンクールは、ワイマールと同様に旧ソ連系の入賞が目覚ましい。オランダのホームアドバンテージも多少は加味されているが、西ヨーロッパの入賞者数が東アジアを上回っ

ている点特徴的である。

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
エリザベート(6位まで)	30	27	26	10	1	90.0%	86.7%	33.3%	6.7%
ユトレヒト・リスト	18	9	9	2	9	50.0%	50.0%	11.1%	50.0%

他コンクールでの入賞状況では、エリザベート王妃が際立つ。毎回80人近くが本大会一次予選に参加する大規模なものであるにもかかわらず、入賞者30人のうち26人が既入賞者であるという事実は、入賞歴の乏しい新人に厳しいコンクールであると示唆している。積入賞者割合がかなり低くなっていることからそれは明らかで、キャリアエンドのためのコンクールであると言える。一方、リストコンクールでは、独自入賞者の割合が半数となった。リスト作品の中でもマイナーなものが多く課題になる傾向があり、このコンクールを受験するためだけにわざわざ準備しなければいけない作品が大量にある点が、独自入賞者の割合を高めている主たる要因として考えられる。

2-9. ヨーロッパ諸国 8. フィンランド・ノルウェーのコンクール

【マイ・リンド国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	ファイナリスト
2002	Alberto Nosè ○☆ イタリア	福岡 洗太郎 ☆ 日本	Pierre Mancinelli フランス	Juho Tuomas Pohjonen フィンランド	Albert Tiu フィリピン	Sarah Tysman フランス	
2007	Sofya Gulyak ○☆ ロシア	Roope Gröndahl フィンランド	Violetta Khachkian ☆ ロシア	Marko Mustonen ☆ フィンランド	Yoonjung Han 韓国	Irina Zahharenkova ○☆ エストニア	
2012	Sergey Redkin ○☆ ロシア	Denis Zhdanov ○☆ ウクライナ	Gehui Xu 中国				大銅 新之介 ○☆ Oskar Jezior Johannes Piirto 日本 ドイツ フィンランド
2017	Melemed MacKenzie アメリカ合衆国	Jun Bouterey-Ishido ニュージーランド	Ji-Young Kim 韓国				So Hyang In ○ Hyo-Eun Park ○ Hannu Alasaarela 韓国 韓国 フィンランド

東アジア		東南アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア	
韓国	4	フィリピン	1	ロシア	3	フィンランド	5			アメリカ合衆国	1	ニュージーランド	1
日本	2			エストニア	1	フランス	2						
中国	1			ウクライナ	1	イタリア	1						
						ドイツ	1						

【トップ・オブ・ザ・ワールド国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位
2009	Mariangela Vacatello ○ イタリア	坂本 真由美 ☆ 日本	Sergei Salov ○☆ ウクライナ
2011	Alberto Nosè ○☆ イタリア	Ashot Khachaturyan ☆ アルメニア	Yaron Kohlberg ○ イスラエル
2013	Emanuel Rimoldi イタリア	Lukáš Vondráček ○☆ チェコ	François Dumont ○☆ フランス

2015	Georgy Tchaidze ○☆	Jong-Hai Park ○	Evgeni Starodubtsev ○☆
	ロシア	韓国	ロシア
2017	Dmitry Shishkin ○	Bolai Cao ○	Artyom Yasynski ○
	ロシア	中国	ウクライナ

東アジア		イスラエル・中東		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	1	イスラエル	1	ロシア	3	イタリア	3	チェコ	1		
韓国	1			ウクライナ	2	フランス	1				
中国	1			アルメニア	1						

北欧の WFIMC 加盟コンクールは、ここにあげた二つにノルウェー・ベルゲンのグリーグ国際ピアノコンクールが 2018 年より加わる予定で、状況もまた変化すると思われる。この例に限らず目まぐるしい環境変動が、コンクール研究を難しくしていることには違いないが、本研究のように、ある程度期間を区切って推移を観察する他ない。

マイ・リンドについては、フィンランド勢のホームアドバンテージが効き、世界的なコンクール強者である東アジア・旧ソ連の優位は感じられない。一方でトップ・オブ・ザ・ワールドでは、旧ソ連勢の入賞者が目立つ。ただ、イタリア人ピアニストが 3 回連続で 1 位を占めているのも印象的である。日本ではあまり知られていない両コンクールであるが、それぞれに日本人入賞者が誕生している。

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
マイ・リンド	24	11	8	9	6	45.8%	33.3%	37.5%	50.0%
TOW	15	14	12	8	1	93.3%	80.0%	53.3%	6.7%

マイ・リンドの他コンクール入賞実績は、課題曲選択方式のコンクールとしては少なく、上位入賞者に限ってもその半数が独自入賞者である。フィンランド勢入賞者 5 人のうち、4 人が独自入賞者である点も影響を与えている。トップ・オブ・ザ・ワールドは、その名にふさわしく、入賞者の 93%が他 WFIMC コンクールの入賞者である。後述するが、これは全 WFIMC 加盟コンクールの中で 1 番の数字である。入賞者に占める既入賞者の割合も 8 割で、出場までに入賞を重ねてきた者が実力を競い合う場として定着していると言える。

2-10. ヨーロッパ諸国 9. ギリシャ・トルコのコンクール

【マリア・カラス・グランプリ】

	1 位	2 位	3 位	ファイナリスト/4 位
2002	Yong-Kyu Lee ☆ 韓国	Rusen Özgür Aydın ○ トルコ	Alessandra Ammara ○ イタリア	Gergely Bogányi (フア) ハンガリー
2004	Vadym Kholodenko ○☆ ウクライナ	Igor Levit ☆ Henri Sigfridsson ○☆ ロシア フィンランド		

2006	該当なし	Mariya Kim ○☆ 高田 匡隆 ○☆	Ilona Timtchenko ○	
		ウクライナ 日本	ロシア	
2008	該当なし	Mei Yi Foo ○	Galina Chistyakova ☆ Helen Mavromoustakis	
		マレーシア	ロシア ギリシャ	
2010	該当なし	吉田 友昭 ○☆	Mi Yeon Lee ○ Ivan Roudine	
		日本	韓国 ロシア	
2015	該当なし	Konstantinos Destounis ○ Maria Mazo ○	Triantafyllos Liotis	Balázs Fülei (4位)
		ギリシャ ロシア	ギリシャ	ハンガリー

東アジア		東南アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	2	マレーシア	1	ロシア	5	トルコ	1	ギリシャ	3	ハンガリー	2		
日本	2			ウクライナ	2			イタリア	1				
								フィンランド	1				

【ジオルゴス・ティミス国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位
2011	Martyna Jatkaukaite ☆ リトアニア	Konstantinos Destounis ☆ ギリシャ	Vasilios Rakitzis ギリシャ
2013	Evgeni Starodubtsev ○☆ ロシア	Rustam Muradov ロシア	Aleksandr Shaikin ☆ ロシア
2015	Danylo Sayenko ○☆ ウクライナ	Michael Davidov ○ スペイン	Daniel Seng ドイツ
2017	Yilei Hao ☆ 中国	Xing Yu Lu ☆ 中国	Maria Anikina ○ ロシア

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
中国	2	ロシア	4	ギリシャ	2				
		リトアニア	1	スペイン	1				
		ウクライナ	1	ドイツ	1				

【イスタンブール・オーケストラシオン国際ピアノ協奏曲コンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト
2013	Burak Çebi Olana Kozlova トルコ ウクライナ	Yanitzia Hristova ブルガリア	八田 智大 日本	深見 まどか ○☆ Güray Basol 日本 トルコ
2015	Yener Gokbudak トルコ	Maria Anikina ☆ ロシア	Ilter Vurucu トルコ	
2017	Shaun Choo シンガポール	Georgy Voylochnikov ○ ロシア	Mamikon Nakhapetov ○ ジョージア	

東アジア		東南アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	2	シンガポール	1	ロシア	2	トルコ	4			ブルガリア	1		
				ウクライナ	1								
				ジョージア	1								

ギリシャ・トルコ地域においては、伝説的ギリシャ系音楽家の名を冠したマリア・カラス・グランプリが最も古い WFIMC 加盟ピアノコンクールであったが、財政難等で中断され、2015 年以降は WFIMC 非加盟のコンクールとして復活している。ティミス・オーケストラシオンは、両者とも 2010 年以降に創設された新興コンクールであり、その発展とともに WFIMC に加盟を果たした。

マリア・カラスでは課題曲で多数の協奏曲を用意する必要があり、そのような難レパートリーコンクールの例に漏れず、ロシア勢が強みを見せている。また地元ギリシャの入賞者も目立つ。ティミスは、カラスと同じくロシアとギリシャを中心に入賞者を輩出し、中国がそこに加わる構図になっている。オーケストラシオンでは、他コンクールではほとんど見られないトルコ人入賞者が目立つ。

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
マリア・カラス	20	15	12	8	3	75.0%	60.0%	40.0%	16.7%
ティミス	12	9	4	7	3	75.0%	33.3%	58.3%	25.0%
オーケストラシオン	12	4	3	2	7	33.3%	25.0%	16.7%	70.0%

他コンクールでの入賞については、ギリシャの 2 コンクールが 75%と高い割合を示している。カラスでは課題の難しさから、やはり既入賞者の割合が高い。対するティミスはレパートリーの気軽さも含め、キャリアスタートに受けるコンクールとして適している。一方、オーケストラシオンの上位入賞者の独自性は、現代曲中心のオルレアンに次ぐワースト 2 位の水準である。新しいコンクールである上、WFIMC に加盟してまだ日が浅いので、今後の経過を注意深く見る必要があるであろう。

2-11. 旧ソ連諸国（ロシア・ウクライナ・ジョージア・リトアニア・アルメニア）のコンクール

【チャイコフスキー国際コンクール】

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
2002	上原 彩子 ○	Alexei Nabiulin ○	Jin Ju ○☆ Andrei Ponochevny ☆	該当なし	Dong-Min Lim ○☆ Dmytro Onyshchenko ☆	
	日本	ロシア	中国 ベラルーシ		韓国 ウクライナ	
2007	該当なし	Miroslav Kultishev	Alexander Lubyantsev ○	Dong-Hyek Lim ○ Sergei Sobolev ☆	Benjamin Moser	Fedor Amirov ○☆
		ロシア	ロシア	韓国 ロシア	ドイツ	ロシア
2011	Daniil Trifonov ○	Yeol Eum Son ○	Seong Jin Cho ○☆	Alexander Romanovsky ○	Alexei Chemov ○☆	
	ロシア	韓国	韓国	ウクライナ	ロシア	
2015	Dmitro Masleev	Lukas Geniušas ○ George Li	Sergey Redkin ○ Danilo Kharitonov	Lucas Debargue		
	ロシア	リトアニア アメリカ合衆国	ロシア ロシア	フランス		

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	4	ロシア	10	ドイツ	1			アメリカ合衆国	1
日本	1	ウクライナ	2	フランス	1				
中国	1	ベラルーシ	1						
		リトアニア	1						

【セルゲイ・プロコフィエフ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト
2004	Nikolaj Mazhara	Yuri Ilinov	Chun-chieh Yen	Muriel Berard-Baida 菊地 裕介 ○☆ Anton Lyakhovskiy
	ロシア	ロシア	台湾	フランス 日本 ウクライナ
2013	Sergey Redkin ○☆	Pallavi Mahidhara ○☆	Enrique Lapaz Lombardo ☆	Artem Lyakhovich ○ Eduard Kiprskiy Dina Pysarenko
	ロシア	アメリカ合衆国	スペイン	ウクライナ ロシア ウクライナ

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
台湾	1	ロシア	4	フランス	1			アメリカ合衆国	1
日本	1	ウクライナ	3	スペイン	1				

【ホロヴィッツ記念国際ピアノコンクール（シニア部門）】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	ファイナリスト
2001	Mariya Kim ☆	Alexandre Pirojenko ○ Pavel Yeletskiy	Yevei Huang Eduard Kunz ☆ Natalja Sukhina				
	ウクライナ	ロシア ベラルーシ	中国 ロシア ウクライナ				
2003	該当なし	Tsimur Shcharbakov	Artem Lyakhovich ☆	Alexei Komarov ○ 鈴木 謙一郎			Lev Krymtsov Kostyantyn Travinskiy
		ベラルーシ	ウクライナ	カザフスタン 日本			ロシア ウクライナ
2005	Lorenzo Di Bella ○	Alexei Kurbatov	Mariya Pukhlianko	Pavel Kashcheva	Miao Huang ☆ Kateryna Kulikova Andriy Vasin		
	イタリア	ロシア	ウクライナ	ベラルーシ	ドイツ ウクライナ ウクライナ		
2007	該当なし	Yun Tian Liu	Magdalena Amara Oleksandr Poliykov ☆	Artem Kanke	Maxim Bandurin	Anastasiya Naplyokova	
		中国	ロシア ウクライナ	ウクライナ	ロシア	ウクライナ	
2010	Kho Woon Kim	Vasyl Kotys ☆	Alexei Kovalenko	Luka Okros ☆	Alexander Koryakin	Anna Ulayeva	
	韓国	ウクライナ	ウクライナ	ジョージア	ロシア	ウクライナ	
2012	Alexander Sinchuk	Nikolay Medvedev	Ketevan Chkhartishvili	Tetiana Shafran ☆	Pavlo Kachnov	Danylo Sevenko ☆	
	ロシア	ロシア	ジョージア	ウクライナ	ウクライナ	ウクライナ	
2017	Jun-Hee Kim ○	Dmytro Choni ☆	Alexander Leonov	Baichao Lan (セミ)	Denis Linnik (セミ)	Stanislav Guminiuk (セミ)	
	韓国	ウクライナ	ウクライナ	中国	ウクライナ	ウクライナ	

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
中国	3	ウクライナ	20	イタリア	1				
韓国	2	ロシア	9	ドイツ	1				
日本	1	ベラルーシ	3						
		カザフスタン	1						
		ジョージア	2						

【トビリシ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2001	該当なし	Murad Adigezalzade	Daniel De Borah ☆ Jacob Katznelson ☆	Tatiana Chernichka ☆	関屋 まき	Maria Massytsheva ☆
		ロシア	オーストラリア ロシア	ロシア	日本	ロシア
2005	Danil Tsvetkov ○ ☆ (Gr.P)	Tamar Beraia ☆ (1位)	Khatia Buniatishvili ☆ (2位)	Dizhou Zhao (3位)	Denis Zhdanov ☆ (4位)	Inna Charushvili (5位)
	カザフスタン	ジョージア	ジョージア	中国	ウクライナ	ジョージア
2009	Evgeny Brakhman ○ ☆	Dinara Klinton ○ ☆	Szczepan Konczal ○ Vakhtang Jordania ☆	Giuliano Mazzocante	Scipione Sangiovanni ○ ☆	
	ロシア	ウクライナ	ポーランド ジョージア	イタリア	イタリア	
2013	Ilya Kondratiev ○ (Gr.P)	Tsotne Tsotskhalashvili	Ilya Zuilkov ○ Reed Tetzloff	Giulio Biddau ○	Ana Gogava	
	ロシア	ジョージア	ウクライナ アメリカ合衆国	イタリア	ジョージア	
2017	該当なし	Giorgi Gigashvili	Anastasia Rizikov ○ Tian Yi Li	Daumants Liepinš ○	Andrzej Wiercinski	Seung-Hyuk Na
		ジョージア	カナダ 中国	ラトビア	ポーランド	韓国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア	
中国	2	ジョージア	7	イタリア	3	ポーランド	2	アメリカ合衆国	1	オーストラリア	1
日本	1	ロシア	6					カナダ	1		
韓国	1	ウクライナ	3								
		カザフスタン	1								
		ラトビア	1								

【M.K.チュルリョーニス国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	ファイナリスト
2003	Sonata Alšauskaite-Mikule	Irina Zahharenkova ☆	小関 絃子				Gintaras Januševicius ☆ Matilda Kärkkäinen Andrius Racevicius
	リトアニア	エストニア	日本				リトアニア フィンランド リトアニア
2007	Edvinas Minkštėmas	Tatjana Titova ○	Gintaras Januševicius ○	Inga Vysniauskaite	Laima Smolskaite	Marko Mustonen ○	
	リトアニア	ロシア	リトアニア	リトアニア	リトアニア	フィンランド	
2011	Evgeni Starodubtsev ○ ☆	Rokas Valuntonis	Emil Gryesten Jensen				Motiejus Bazaras ☆ Martyna Jatkuskaite ○ Veronika Kojjova
	ロシア	リトアニア	デンマーク				リトアニア リトアニア リトアニア
2015	Roberts Lozinskis	Daria Parkhomenko	Jean-Sélim Abdelmoula Motiejus Bazaras ○ Guillaume Durand Jonis Sodeika				
	リトアニア	ロシア	スイス リトアニア フランス リトアニア				

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	1	リトアニア	14	フィンランド	2				
		ロシア	3	デンマーク	1				
		エストニア	1	スイス	1				
				フランス	1				

【アラム・ハチャトゥリアン国際コンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト/4位
2003	Tanya Gabrielian ☆	Tinatin Kiknadze	Ruben Dalibaltayan ☆ Mamikon Nakhapetov ☆	Lilit Grigoryan ☆ (F)
	アメリカ合衆国	ジョージア	アルメニア ジョージア	アルメニア

2007	Sofya Bugayan	Sona Barseghyan Tamar Elizbarashvili	Hrant Bagrazyan Lilit Zakaryan	Artur Tadevosyan (F)
	ロシア	アルメニア ジョージア	アルメニア アルメニア	アルメニア
2011	Peng Cao	Lilit Grigoryan ○ Zhora Sargsyan	Sona Arshakyan	Anahit Dilbaryan (F)
	中国	アルメニア アルメニア	アルメニア	アルメニア
2014	該当なし	Evgeni Starodubtsev ○☆ Anastasia Nesterova	Stepan Simonian ○	Ran Jia (4位)
		ロシア ロシア	ロシア	中国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
中国	2	アルメニア	11					アメリカ合衆国	1
		ロシア	4						
		ジョージア	3						

チャイコフスキーコンクールに代表される旧ソ連諸国の WFIMC 加盟コンクールを並べると、どの国でもホームアドバンテージがかなり強いことがわかる。これら全てのコンクールで開催国の入賞者数がトップとなり、特にロシアのチャイコフスキー、ウクライナのホロヴィッツ、リトアニアのチュルリョーニス、アルメニアのハチャトゥリアンではその傾向が顕著である。旧ソ連が崩壊して20年以上経ってもなお、自国を誇示する風土があるように見受けられる。コンクール名からして、その国の代表的な作曲家やピアニストを冠するのであるから推して知るべしであろう。同時に、旧ソ連圏内におけるロシア人の強さも根付いている。対して西ヨーロッパ系の存在感はほとんど感じられず、トビリシのイタリア3名が最高である。またヨーロッパの東側諸国も、トビリシでポーランド2名を数えるのみであり、アメリカ合衆国の参加者も苦戦している。東アジアの入賞者も、他地域に比較して非常に少ない。チャイコフスキーにおける韓国人入賞者4名の健闘が目立つ程度である。日本も上原彩子（チャイコフスキー1位、2002年）、小関紘子（チュルリョーニス3位、2003年）を除けば、下位入賞またはファイナリストにとどまり、それでさえも2004年まで遡らなければならない。チャイコフスキー以外での入賞が、キャリアに直結するイメージが湧きにくいことも挑戦への意欲に影響していると推察できるが、現時点で13年以上のブランクは、旧ソ連諸国が日本人の最も苦手とする地域であることを証明している。

入賞者国籍の傾向の偏りは、その副作用としてコンクール独自性もかなり高めている。

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
チャイコフスキー	23	17	14	8	4	73.9%	60.9%	34.8%	28.6%
プロコフィエフ	12	5	4	4	3	41.7%	33.3%	33.3%	50.0%
ホロヴィッツ	43	14	4	10	14	32.6%	9.3%	23.3%	60.9%
トビリシ	30	18	10	12	5	60.0%	33.3%	40.0%	29.4%
チュルリョーニス	24	9	6	4	10	37.5%	25.0%	16.7%	66.7%
ハチャトゥリアン	20	7	3	5	10	35.0%	15.0%	25.0%	62.5%

チャイコフスキーでさえ、この種のキャリアエンド向けと考えられるコンクールには、独自上位入賞者の割合が高い。既入賞者は6割を超える高水準であるが、ここでの入賞に飽き足らずその後別のWFIMCコンクールで入賞した者が、3位入賞の3人を含む34.8%も存在する。ホロヴィッツ・チュルリョーニス・ハチャトゥリアンの独自入賞者は6割を超え、コンクールを複数積み上げてキャリアに繋げるには厳しい数字である。特にホロヴィッツでは、34歳までと高い年齢制限にもかかわらず、入賞者に占める既入賞者の割合が約9%にとどまる。チャイコフスキーとトビリシを除く旧ソ連系のコンクールは、独自性や自国第一主義により、旧西側諸国の有力な参加者から敬遠されていることは間違いなさそうである。

2-12. ヨーロッパ旧東側諸国（ポーランド・ハンガリー・チェコ・スロバキア・ルーマニア・セルビア・クロアチア）のコンクール

【パデレフスキ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	ファイナリスト
2001	Štěpán Kos チェコ	Alexei Komarov ☆ カザフスタン	Barbora Sejková チェコ	Slawomir Wilk ポーランド	該当なし	Vsevolod Vartanov Vyacheslav Zubkov ロシア ウクライナ	
2004	Mariya Kim ○☆ ウクライナ	Esther Park ☆ アメリカ合衆国	Maryna Baranova ウクライナ	根津 理恵子 日本	山本 貴志 ○☆ 井上 麻紀 日本 日本		
2007	Nikita Mndoyants ☆ ロシア	Juliana Avdeeva ○☆ ロシア	Marianna Prjevalskaya ☆ スペイン	Lilit Grigoryan ○☆ アルメニア	Melody Sean Roei Quah Pavel Raikerous マレーシア ロシア		
2010	Eduard Kunz ○ ロシア	Hyun-Jung Kim ○☆ 韓国	Sergey Redkin ☆ Michal Szymanowski ロシア ポーランド				Denis Evstiukhine ロシア
2013	Zhee-Young Moon ○ 韓国	Dinara Klinton ○☆ ウクライナ	加藤 大樹 日本				Violetta Khachikian ○ Sun-Hwa Kim ロシア 韓国
2016	Hyuk Lee 韓国	Jakub Kuszlik ポーランド	Svetlana Andreeva ロシア				Dina Ivanova ○☆ Elzbieta Bilicka ロシア ポーランド

東アジア		東南アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	4	マレーシア	1	ロシア	10	スペイン	1	ポーランド	4	アメリカ合衆国	1
韓国	4			ウクライナ	4			チェコ	2		
				カザフスタン	1						
				アルメニア	1						

【フレデリック・ショパン国際ピアノコンクール（順位入賞者6名のみ）】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2005	Rafal Blechacz ○ ポーランド	該当なし	Dong-Min Lim ○ Dong-Hyek Lim ○☆ 韓国 韓国	関本 昌平 ○ 山本 貴志 ○☆ 日本 日本	該当なし	Ka Ling Colleen Lee ○☆ 香港
2010	Juliana Avdeeva ○ ロシア	Lukas Geniušas ○☆ Ingolf Wunder リトアニア オーストリア	Daniil Trifonov ☆ ロシア	Evgeni Bozhanov ○ ブルガリア	François Dumont ○☆ フランス	
2015	Seong Jin Cho ○ 韓国	Charles Richard-Hamelin ○ カナダ	Kate Liu ○ アメリカ合衆国	Eric Lu アメリカ合衆国	Tony Yike Yang カナダ	Dmitry Shishkin ○☆ ロシア

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	3	ロシア	3	オーストリア	1	ポーランド	1	カナダ	2
日本	2	リトアニア	1	フランス	1	ブルガリア	1	アメリカ合衆国	2
香港	1								

【ブダペスト国際音楽コンクール (リスト国際ピアノコンクール)】

	1位	2位	3位	ファイナリスト
2001	該当なし	Péter Tóth ○	Gábor Farkas ☆ Vadym Kholodenko ○☆ Massimiliano Motterle ☆	Lev Vinocour ☆ Li Wang ☆
		ハンガリー	ハンガリー ウクライナ イタリア	ロシア カナダ
2006	Elmar Gasanov ☆	Olivier Besnard László Borbély	István Lajkó	高田 匡隆 ○☆
	ロシア	フランス ハンガリー	ハンガリー	日本
2011	Pawel-Alexander Ullman ☆	Ilya Kondratiev ☆	János Balázs	Sergey Belyavskiy ☆ Nicholas Namoradze ☆
	イギリス	ロシア	ハンガリー	ロシア ジョージア
2016	阪田 知樹 ○	Sergey Belyavskiy ○	Leon Bernsdorf ☆	Krisztián Kocsis Kuan-ting Lin 森本 美帆
	日本	ロシア	ドイツ	ハンガリー 台湾 日本

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	3	ロシア	5	イタリア	1	ハンガリー	6	カナダ	1
台湾	1	ウクライナ	1	フランス	1				
		ジョージア	1	イギリス	1				
				ドイツ	1				

【プラハの春国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位
2004	Ivo Kahánek	Dong-Min Lim ○☆	Matej Arendárik ☆ 山本 貴志 ☆
	チェコ	韓国	スロバキア 日本
2011	該当なし	Arta Arnicane ○ Yoon Ji Kim	Varvara Nepomnyashchaya ○☆
		ラトビア 韓国	ロシア
2016	Jinhyung Park ○☆	Jun Ho Kim Marek Kozák	Kyuho Han
	韓国	韓国 チェコ	韓国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	5	ラトビア	1			チェコ	2		
日本	1	ロシア	1			スロバキア	1		

【J. N. フンメル国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	ファイナリスト
2005	Andrew Brownell ○☆	Yi-chih Lu ○☆ Alessandro Deljavan ☆			Gábor Csaba Monostori Sandro Russo Anna Semkina
	アメリカ合衆国	台湾 イタリア			ハンガリー イタリア ロシア

2008	Christine Ning Zhao	Matej Arendárik ○	池本 三太	Sung Ho Yang	佐野 麻衣子 上野 優子
	中国	スロバキア	日本	韓国	日本 日本
2011	Martin Levický	Mamikon Nakhapetov ○☆	Marko Ernek		
	チェコ	ジョージア	スロバキア		
2014	Su Yeon Kim	Agapi Triantafyllidi	Michael Davidov ○☆		
	韓国	ギリシャ	スペイン		
2017	仁田原 祐	伊藤 香紀	Tatiana Dorokhova ○		
	日本	日本	ロシア		

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	5	ロシア	2	イタリア	2	スロバキア	2	アメリカ合衆国	1
韓国	2	ジョージア	1	ギリシャ	1	ハンガリー	1		
台湾	1			スペイン	1	チェコ	1		
中国	1								

【ジョルジュ・エネスク国際ピアノコンクール】

	1 位	2 位	3 位	ファイナリスト
2001	Mirela-Dana Ionescu ルーマニア	Matei Varga ☆ ルーマニア	Maria Magdalena Pitu-Podlacha ルーマニア	
2003	Ilona Timtchenko ○☆ ロシア	該当なし	Razvan Victor Dragnea ○ Evgeni Starodubtsev ☆ ルーマニア ロシア	Ferenc Vizi ○ ルーマニア
2005	Irina Zahharenkova ○☆ エストニア	Evgeny Izotov ロシア	Adrian Aimo Pagin フランス	
2007	Eduard Kunz ○☆ ロシア	Evgeny Cherepanov ロシア	Christopher Falzone ☆ アメリカ合衆国	
2009	Amir Tebenikhin ○ カザフスタン	Violetta Khachikian ○☆ ロシア	Jong-Do An ☆ 韓国	
2011	該当なし	Jeung Beum Sohn ☆ 韓国	Ilya Poletaev ○ Mihai Ritivoi ロシア ルーマニア	
2014	Josu De Solaun Soto ○ スペイン	Ilya Rashkovsky ○ ロシア	Vasileios Varvaresos ジョージア	
2016	Victoria Vassilenko ○ ブルガリア	石井 琢磨 日本	Danor Quinteros チリ	

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		南アメリカ	
韓国	2	ロシア	8	フランス	1	ルーマニア	6	アメリカ合衆国	1	チリ	1
日本	1	エストニア	1	スペイン	1	ブルガリア	1				
		カザフスタン	1								
		ジョージア	1								

【若き音楽家のための国際音楽コンクール】

	1 位	2 位	3 位	ファイナリスト
2004	Alessio Cioni ○ イタリア	Tae-Hyung Kim ☆ 韓国	Daniil Tsvetkov ☆ カザフスタン	Stanislav Soloviev Mikko Merjanen ○ Tatjana Titova ☆ ロシア フィンランド ロシア

2009	該当なし	Dong-Kyu Kim	Eniko Görög	吉田 友昭 ○☆ Vladimir Gligoric Aliaksandr Muzykantau Minka Popovic
		韓国	セルビア	日本 セルビア ベラルーシ セルビア
2014	Andrey Ivanov ☆	Sooyeon Ham ○	該当なし	Thibault Lebrun Wenqi Li Woogil Park ☆
	ベラルーシ	韓国		フランス 中国 韓国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	4	ロシア	2	イタリア	1	セルビア	3		
日本	1	ベラルーシ	2	フィンランド	1				
中国	1	カザフスタン	1	フランス	1				

【EPTA S. スタニチッチ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	ファイナリスト
2003	Tali Morgulis ☆	Ruben Dalibaltayan ○	Toomas Vana	Zrinka Narija Ivancic	Filip Fak Natalja Zagalskaya ☆
	ウクライナ	アルメニア	アルメニア	クロアチア	クロアチア ロシア
2007	Dmitry Ulasjuk	Georgy Tchaidze ☆	Fatima Merdanova Ksenia Yelagina	Bruno Vlahek	
	ベラルーシ	ロシア	ロシア ウクライナ	クロアチア	
2011	Scipione Sangiovanni ○☆	Andrey Gugnin ☆	Varvara Nepomnyashchaya ○☆ Stéphanie Proot ○		Jae-Kyung Yoo ○ Domenico Monaco
	イタリア	ロシア	ロシア ベルギー		韓国 イタリア
2014	該当なし	Daniil Tsvetkov ○	Aljoša Jurinic ○☆ Petar Klasan		Danylo Sayenko ○☆ Stipe Bilic
		カザフスタン	クロアチア クロアチア		ウクライナ クロアチア

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	1	ロシア	5	イタリア	2	クロアチア	6		
		ウクライナ	3	ベルギー	1				
		アルメニア	2						
		ベラルーシ	1						
		カザフスタン	1						

ショパンコンクールはやはり特別な存在で、入賞者（エリザベート王妃と同様に、本論文では順位入賞者6人を指す）には東アジア・旧ソ連・北アメリカの出身者がバランス良く見られる。2005年は東アジア、2010年は旧ソ連・東側諸国、2015年は北アメリカが多数を占め、開催回ごとの偏りはあるもののトータルで収束している。ただショパンを含め、東側諸国のコンクール全体で西ヨーロッパ系は苦戦傾向にある。一方の東ヨーロッパ系も、ショパンを除くコンクールにおいて入賞総数が多いのは、ホームアドバンテージと見るべきである。開催国の優位性は程度問題であり、旧ソ連のコンクール群ほど露骨でなければ、自国演奏家の振興に役立つなど、良い側面もある。ロシアを中心する旧ソ連系は、パデレフスキ・

ブダペスト（リスト）・エネスク・スタニチッチの5コンクールで猛威をふるっている。また、東アジア勢入賞者は西ヨーロッパのコンクールよりは少ないものの、旧ソ連のコンクールほどには逆風を感じられない。パデレフスキ・ブダペスト（リスト）・フンメルでは日本が、パデレフスキ・プラハの春・若き音楽家では韓国が良い成果を上げているようである。

他 WFIMC コンクールでの入賞データでも、ショパンコンクールの特異性は明確である。

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
パデレフスキ	33	15	10	12	8	45.5%	30.3%	36.4%	42.1%
ショパン	18	15	14	7	1	83.3%	77.8%	38.9%	11.1%
ブダペスト・リスト	22	15	5	12	4	68.2%	22.7%	54.5%	28.6%
プラハの春	11	6	4	5	5	54.5%	36.4%	45.5%	45.5%
フンメル	21	7	6	5	8	33.3%	28.6%	23.8%	53.3%
エネスク	25	16	11	9	9	64.0%	44.0%	36.0%	37.5%
若き音楽家	17	9	4	6	2	52.9%	23.5%	35.3%	28.6%
EPTA	22	12	8	8	5	54.5%	36.4%	36.4%	35.7%

元来、一つの作曲家をテーマに掲げるコンクールは独自性が強くなる傾向になることが多いが、他コンクール入賞者は83.3%、既入賞者も8割弱を占める。つまり、ショパンの演奏に優れているだけではなく、演奏家としての総合力が高いピアニストを選出することに成功している。コンクールが長年に渡って醸成した権威と、ショパンという作曲家の人気ぶり故に、入賞すれば世界市場に進出しやすいことも、多くの若手ピアニストの目標とされる理由である。ただチャイコフスキーコンクールと同様、上位入賞の3人を含む38.9%の入賞者がその後他コンクールを受験し、入賞を果たしている。一昔前まではどの順位でもキャリアに絶対的な安定をもたらすイメージがあったが、コンクールが多様化し、各々のレベルが高まる現代において入賞者の意識も変わってきていると考えられる。

パデレフスキ・フンメル・エネスクは作曲家の名前を冠しているものの、その作曲家の作品のみを演奏するわけではないため、ピアニストの総合力が問われるコンクール群であると言えるが、これらの中ではエネスクの独自上位が比較的少ない数字である。年齢制限の上限が高いことも影響していると推察でき、どちらかというとも既入賞者の多いキャリアエント向けのコンクールと言えるであろう。一方、ブダペスト（リスト）も他コンクール入賞割合は高いが、既入賞者に比べて積入賞者の割合が突出している。こちらはどちらかというとも新人発掘の意味合いが強いと言える。プラハの春・若き音楽家・EPTAの3コンクールでは、他コンクール入賞者で似たような値が並ぶ。上位に限れば、プラハの春の独自性が強調される結果となった。

2-13. 北アメリカ（アメリカ合衆国・カナダ）のコンクール

【クリーヴランド国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト／4位
2001	Roberto Plano ○☆ イタリア	Min Soo Sohn ☆ 韓国	該当なし	Gilles Vonsattel ☆ (7位) スイス
2003	福間 洸太郎 ○☆ 日本	Soyeon Kate Lee 韓国	Konstantin Sukhovetski ☆ ロシア	Andrius Žlabys (4位) リトアニア
2005	Chufang Huang ○ 中国	Sergei A. Kuznetsov ○☆ ロシア	Stanislav Khrystenko ☆ ウクライナ	Spencer Myer ○☆ (4位) アメリカ合衆国
2007	Alexander Ghindin ロシア	Yaron Kohlberg ☆ イスラエル	Aleksander Moutouzkine ○☆ ロシア	Ran Dank ☆ (4位) イスラエル
2009	Martina Filjak ○ クロアチア	Dimitri Levkovich ☆ ウクライナ	William Yun ○ 韓国	Evgeny Brakhman ○☆ (4位) ロシア
2011	Alexander Schimpf ○ ドイツ	Alexei Chernov ○ ロシア	Eric Zuber ○☆ アメリカ合衆国	Kyu-Yeon Kim ○ (4位) 韓国
2013	Stanislav Khrystenko ○ ウクライナ	Arseny Tarasevich-Nikolaev ☆ ロシア	François Dumont ○ フランス	Jia-yan Sun ○ (4位) 中国
2016	Nikita Mndoyants ○ ロシア	Leonardo Colafelice ○☆ イタリア	Dinara Klinton ○ ウクライナ	Georgy Tchaidze ○☆ (4位) ロシア

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	4	ロシア	9	イスラエル	2	イタリア	2	クロアチア	1	アメリカ合衆国	2
中国	2	ウクライナ	4			スイス	1				
日本	1	リトアニア	1			ドイツ	1				
						フランス	1				

【ウィリアム・カペル国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位
2003	Ning An ○ アメリカ合衆国	Ying Feng 中国	Won Kim 韓国
2007	Sofya Gulyak ○☆ ロシア	Sara Daneshpour ☆ アメリカ合衆国	Spencer Myer ○ アメリカ合衆国
2012	Yekwon Sunwoo ☆ 韓国	Jin Uk Kim 韓国	Steven Lin ☆ アメリカ合衆国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	3	ロシア	1					アメリカ合衆国	4
中国	1								

【ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	ファイナリスト
2001	Stanislav Ioudenitch Olga Kern ○ ウズベキスタン ロシア	Maxim Philippov Antonio Pompa-Baldi ロシア イタリア		Olexei Koltakov Xiao-Han Wang ウクライナ 中国

2005	Alexander Kobrin ○	Joyce Yang	Sa Chen ○	Roberto Plano ○☆ Chufang Huang ○☆ Davide Cabassi
	ロシア	韓国	中国	イタリア 中国 イタリア
2009	Haochen Zhang ○ 辻井 伸行	Yeol Eum Son ○☆		Mariangela Vacatello ○☆ Evgeni Bozhanov ○☆ Di Wu
	中国 日本	韓国		イタリア ブルガリア 中国
2013	Vadym Kholodenko ○	Beatrice Rana ☆	Sean Yow Chen ○	Nikita Mndoyants ○☆ Fei Fei Dong 阪田 知樹 ☆
	ウクライナ	イタリア	アメリカ合衆国	ロシア 中国 日本
2017	Yekwon Sunwoo ○	Kenny Broberg ○	Daniel Hsu ○	Yuri Favorin ○ Georgy Tchaidze ○ Wai-Ching Rachel Cheung ○
	韓国	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	ロシア ロシア 香港

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
中国	6	ロシア	6	イタリア	5	ブルガリア	1	アメリカ合衆国	3
韓国	3	ウクライナ	2						
日本	2	ウズベキスタン	1						
香港	1								

【ジーナ・バッカウワー国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2002	Cédric Pescia	Vasily Primakov	Lev Vinocour ○	Nicolas Stavy ○	Hae-Jung Cho ○	Albert Mamriev ○☆
	スイス	ロシア	ロシア	フランス	韓国	イスラエル
2006	Stephen Beus	山本 貴志 ○	Vadym Kholodenko ○☆	Hinrich Alpers ☆	Jue Wang ○☆	Ka Ling Colleen Lee ○☆
	アメリカ合衆国	日本	ウクライナ	ドイツ	中国	香港
2010	Lukas Geniušas ○☆	Serei Salov ○☆	Dimitri Levkovich ○☆	Yunjie Chen ○☆	福間 洗太郎 ○☆	Zhang Zuo ○☆
	リトアニア	ウクライナ	ウクライナ	中国	日本	中国
2014	Andrey Gugin ○☆	Chi Ho Han ○☆	Artyom Yasynskiy ○☆			
	ロシア	韓国	ウクライナ			

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
中国	3	ウクライナ	4	イスラエル	1	スイス	1			アメリカ合衆国	1
韓国	2	ロシア	3			フランス	1				
日本	2	リトアニア	1			ドイツ	1				
香港	1										

【ホーンズ国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	ファイナリスト
2003	Xiang Zou	Winston Choi ○	Roberto Plano ○☆	Romain David	Einav Yarden ☆	
	中国	カナダ	イタリア	フランス	イスラエル	
2006	Min Soo Sohn ○	Hinrich Alpers ○☆	Hong Xu	Spencer Myer ○☆	Serei Salov ○☆	
	韓国	ドイツ	中国	アメリカ合衆国	ウクライナ	
2009	Georgy Tchaidze ○☆	Evgeni Starodubtsev ○☆	Gilles Vonsattel ○			Natalya Kudrytska Kyrylo Zvegintsov
	ロシア	ロシア	スイス			ウクライナ ウクライナ

2012	Pavel Kolesnikov ○						Lorenzo Cossi ○ Eric Zuber ○ Jong-Hai Park ○☆ Maria Mazo ☆
	ロシア						イタリア アメリカ合衆国 韓国 ロシア
2015	Luca Buratto ○						Henry Kramer ○☆ Artyom Yasynskiy ○☆
	イタリア						カナダ ウクライナ

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
中国	2	ロシア	4	イスラエル	1	イタリア	3			カナダ	2
韓国	2	ウクライナ	4			フランス	1			アメリカ合衆国	2
						ドイツ	1				
						スイス	1				

【モントリオール国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	ファイナリスト
2004	Serei Salov ○☆ ウクライナ	David Fray フランス	Daria Rabotkina ○ ロシア	Spencer Myer ○☆ アメリカ合衆国	Natalja Zagalskaya ○☆ ロシア	Darrett Zusko カナダ	Gintaras Januševičius ☆ リトアニア
2008	Nareh Arghamanyan アルメニア	Aleksander Moutouzkine ○☆ 高田 匡隆 ○ ロシア 日本					Sara Daneshpour ○☆ Sergei Saratovskii Elizabeth Schumann アメリカ合衆国 ロシア アメリカ合衆国
2011	Beatrice Rana ☆ イタリア	Lindsay Garrtson アメリカ合衆国	Henry Kramer ☆ カナダ				Zhee-Young Moon ○☆ Yuliya Chaplina Jong Ho Won 韓国 ロシア 韓国
2014	Jayson Gillham ○ オーストラリア	Charles Richard-Hamein ○☆ カナダ	Annika Maria Treutler ドイツ				Pawel-Alexander Ullman ○☆ Kate Liu ☆ Xiaoyu Liu ☆ イギリス アメリカ合衆国 カナダ
2017	Zoltán Fejérvári ○ ハンガリー	Giuseppe Guarnera ○ イタリア	Stefano Andreatta イタリア				Ye-Jin Noh ○ Jinhyung Park ○ Albert Cano-Smit 韓国 韓国 スペイン

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア	
韓国	4	ロシア	5	イタリア	3	ハンガリー	1	アメリカ合衆国	5	オーストラリア	1
日本	1	ウクライナ	1	フランス	1			カナダ	4		
		リトアニア	1	ドイツ	1						
		アルメニア	1	イギリス	1						
				スペイン	1						

ここに挙げた6つのコンクールのうち、2018年現在の北アメリカにおけるWFIMC加盟コンクールは、クリーヴランド・クライバーン・ホーンズ・モントリオールの米加各2つずつである。残り2つのうちカペルは2012年を最後に廃止となったが、バックアワーは2010年に連盟を脱退した後も大規模な文化イベントとして大きな存在感を示し続けている。

全体的に目を引くのはロシア、ウクライナを中心とする旧ソ連系と、他の地域では一部でしか見られない北米系の入賞者が多いことである。ロシアは、カペルこそソフィア・グリャ

ク（2007年、第1位）一人の受賞に留まるものの、北米最大規模のクライバーンを始め、クリーヴランド・ホーンズ・モンリオールの4コンクールで最大の入賞国となっている。ウクライナも、バックウワー・ホーンズ両コンクールで最も入賞者数が多いことに加え、クリーヴランドでも健闘が光る。アメリカ合衆国は、カペル・モンリオールで最多の入賞を果たし、クライバーンでも好成績を収めるなど、全てのコンクールに入賞者が存在する。カナダは、自国のホーンズ・モンリオールでは一定数が見られるものの、米国では入賞者を出せていない。ホームアドバンテージは米加両国共、多少見られるが、それよりも米国の隣国カナダでの強さには目を見張るものがある。西ヨーロッパ諸国では、イタリアの存在が際立つ。特にクライバーンとカナダの2コンクールでは、まとまった数の入賞者を送り込んでいる。

東アジアにとっても決して苦手とする地域ではない。また、特に北米出身の入賞者には名前がアジア系の方も多く、民族として見た場合にはより大きなグループとなる。ただクライバーン・バックウワーでマジョリティを形成するように、合衆国では良い結果が出ている一方、カナダでは奮わない。ホーンズでは北米地域と並ぶ3番手、モンリオールでは西ヨーロッパ地域に圧されて4番手となっており、東アジア出身者にとって入賞が難しい国である。国別の内訳をみると、クリーヴランド・カペル・ホーンズ・モンリオールが韓国、クライバーン・バックウワー・ホーンズでは中国がリードし、日本の存在感は薄い。とりわけ中国は、クライバーンにおいてロシアと同数で最多の入賞数を誇るなど、世界的に見て北米のコンクールで強さを発揮していると言える。

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
クリーヴランド	31	28	20	17	2	90.3%	64.5%	54.8%	8.7%
カペル	9	6	3	4	3	66.7%	33.3%	44.4%	33.3%
クライバーン	30	20	18	8	5	66.7%	60.0%	26.7%	31.3%
バックウワー	21	18	17	14	3	85.7%	81.0%	66.7%	25.0%
ホーンズ	23	18	16	11	2	78.3%	69.6%	47.8%	15.4%
モンリオール	31	20	15	13	5	64.5%	48.4%	41.9%	33.3%

他コンクール入賞の実績について見ると、廃止になったカペルを除いて、既入賞者が積入賞者よりも多いのが全体的な特徴である。これらコンクール群の賞金高さや褒賞演奏会の多さも影響しているのであろう。中でもクリーヴランドやバックウワーでの他コンクール入賞率の高さが際立つ。クライバーンは高い値を示すものの、2001年入賞者の独自入賞が多いことが66.7%まで割合を下げた。ただ、1999年以前の入賞結果は反映されていないことを考慮しなくてはならない。既入賞者・積入賞者の割合差を見ればキャリアエンドに受け

るべきコンクールという意味合いが強いことは間違いなく、上位入賞を果たした殆どのピアニストがこのコンクールを終着駅とするが、ファイナリストにとどまった者はこれをきっかけに他コンクールを狙う傾向にある。これはマコーミックの論文でライバル関係とされた、ホーンズでも同様の構図である。

2-14. 東アジア（日本・韓国・中国・香港）のコンクール

【浜松国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2003	該当なし	Rafal Blechacz ☆ Alexander Kobrin ○☆	Serei Salov ○☆	関本 昌平 ☆ 須藤 梨菜 ☆	鈴木 弘尚 ○☆	
		ポーランド ロシア	ウクライナ	日本 日本	日本	
2006	Alexej Gorlatch ☆	Sergei A. Kuznetsov ○	Tae-Hyung Kim ○☆ 北村 朋幹 ☆	該当なし	Chun Wang ☆	Nikolai Saratovski ○
	ウクライナ	ロシア	韓国 日本		中国	ロシア
2009	Seong Jin Cho ☆	Elmar Gasanov ○☆	Jae Weon Huh ☆	François Dumont ○☆	Hyun-Jung Kim ☆	Soo-Jung Ann ○☆
	韓国	ロシア	韓国	フランス	韓国	韓国
2012	Ilya Rashkovsky ○☆	中桐 望 ○	佐藤 卓史 ○	Anna Tcybuleva ☆	Joon Kim ○	内匠 慧
	ロシア	日本	日本	ロシア	韓国	日本
2015	Alexander Gadjevi	Roman Lopatynskiy ○	Daniel Hsu ☆ Alexei Melnikov Alexia Mouza	Florian Mitrea ○☆		
	イタリア	ウクライナ	アメリカ合衆国 ロシア ギリシャ	ルーマニア		

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	7	ロシア	7	フランス	1	ポーランド	1	アメリカ合衆国	1
韓国	6	ウクライナ	3	イタリア	1	ルーマニア	1		
中国	1			ギリシャ	1				

【仙台国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2001	Giuseppe Andaloro ○☆	Jin Sang Lee ☆	Yuja Wang	Daria Rabotkina ☆	Roberto Plano ○☆ Amir Tebenikhin ☆	
	イタリア	韓国	中国	ロシア	イタリア カザフスタン	
2004	Xiaotang Tan	高田 匡隆 ☆	Misha Namirovsky	Elizavieta Dmitriyeva	Sean Kennard ☆	Florence Boissolle
	中国	日本	イスラエル	ロシア	アメリカ合衆国	フランス
2007	津田 裕也	Yi-chih Lu ○	Oxana Shevchenko ☆	Ilya Ovchinnikov	Ka Ling Colleen Lee ○	Vyacheslav Grieznev
	日本	台湾	ウクライナ	ロシア	香港	ロシア
2010	Vadym Kholodenko ○☆	Maria Massytcheva ○☆	Marianna Prjevalskaya ○☆ 佐藤 彦太 ☆	該当なし	Zhee-Young Moon ☆	Kwan Yi
	ウクライナ	ロシア	スペイン 日本		韓国	アメリカ合衆国
2013	Yekwon Sunwoo ○☆	Hans H. Suh ☆	Artyom Yasynskiy ○☆	Sun-A Park	片田 愛理	Ji Hwan Hong
	韓国	韓国	ウクライナ	韓国	日本	韓国
2016	Hyun-Jung Kim ○	Evan Wong	北端 祥人	Xiaoyu Liu ○☆	Chang Yong Shin ☆	坂本 彰 ☆
	韓国	アメリカ合衆国	日本	カナダ	韓国	日本

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	8	ロシア	5	イスラエル	1	イタリア	2			アメリカ合衆国	3
日本	6	ウクライナ	3			フランス	1			カナダ	1
中国	2	カザフスタン	1			スペイン	1				
台湾	1										
香港	1										

【高松国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	ファイナリスト
2006	Pavel Gintov	Stanislav Khrystenko ○☆	Chao Wang ☆				Sofya Gulyak ☆ Chih-long Hu 岡本 麻子 ○☆
	ウクライナ	ウクライナ	中国				ロシア 中国 日本
2010	Alexander Yakovlev ○☆	石村 純○	Yun-yang Lee ○	Daniil Tsvetkov ○☆	Georgy Voylochnikov ☆	Marianna Prjevalskaya ○☆	
	ロシア	日本	台湾	カザフスタン	ロシア	スペイン	
2014	Ji-Yeong Mun ○	Andrei Shichko	Ye-Jin Noh ☆	Anna Toybuleva ○☆	リード 希亜奈		
	韓国	ベラルーシ	韓国	ロシア	日本		

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
日本	3	ロシア	4	スペイン	1				
中国	2	ウクライナ	2						
韓国	2	カザフスタン	1						
台湾	1	ベラルーシ	1						

【ソウル国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2008	Mariya Kim ○	Alexej Gorlatch ○☆	Tae-Hyung Kim ○☆	Hyo-Sun Lim ○ Eric Zuber ☆	該当なし	Marianna Prjevalskaya ○☆
	ウクライナ	ウクライナ	韓国	韓国 アメリカ合衆国		スペイン
2011	Georgy Gromov	Sean Yow Chen ☆ Han-Bin Chyung	該当なし	Hyun-Jung Kim ○☆	Christopher Guzman ○☆	Yunjie Chen ○
	ロシア	アメリカ合衆国 韓国		韓国	アメリカ合衆国	中国
2014	Chi Ho Han ○☆	Jong-Yun Kim ○	Charles Richard-Hamelin ☆	Jeung Beum Sohn ○☆	Sara Daneshpour ○☆	Hee-Jae Kim ○☆
	韓国	韓国	カナダ	韓国	アメリカ合衆国	韓国
2017	Chang Yong Shin ○	Yonggi Woo	Taek Gi Lee Yeonmin Park	該当なし	Sae-Yoon Chon ☆	Yedam Kim ○
	韓国	韓国	韓国		韓国	韓国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	14	ウクライナ	2	スペイン	1			アメリカ合衆国	4
中国	1	ロシア	1					カナダ	1

【イサンユン国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位
2005	Viktoriya Korchinskaya-Kogan	Da Sol Kim ☆	高橋 礼恵 ○☆	Aleksander Moutouzkine ○☆	Young-Ah Tak
	ロシア	韓国	日本	ロシア	韓国
2008	Sofya Gulyak ○☆	Stanislav Khrystenko ○☆	Mariangela Vacatello ○☆	William Yun ○☆	Christopher Guzman ☆
	ロシア	ウクライナ	イタリア	韓国	アメリカ合衆国
2010	Yunjie Chen ○☆	Alessandro Deljavan ○	Elmar Gasanov ○☆	Sungpil Kim Ju Eun Lee	
	中国	イタリア	ロシア	韓国 韓国	
2013	Honggi Kim ☆	Jiwon Han	Jeung Beum Sohn ○☆	So Hyang In ☆	
	韓国	韓国	韓国	韓国	

2016	Hans H. Suh ○☆	Gyu-Tae Ha	Min Soo Hong ○☆ Julia Kociuban		
	韓国	韓国	韓国 ポーランド		

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	12	ロシア	4	イタリア	2	ポーランド	1	アメリカ合衆国	1
日本	1	ウクライナ	1						
中国	1								

【中国国際ピアノコンクール（2007年以降、アモイ開催 WFIMC 加盟後のみ）】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2007	Haochen Zhang ☆	Victor Stanislavsky	Yunqing Zhou	Bo Tong	野木 成也	後藤 正孝 ○☆
	中国	イスラエル	中国	中国	日本	日本
2010	Dimitri Levkovich ○	Anna Bulkina ☆	Joon Kim ○☆	Siliang John Chen	Ruoyu Huang	Jun Sun
	ウクライナ	ロシア	韓国	アメリカ合衆国	中国	中国
2013	Han Chen ○	Wen-bin Jin ☆	Honggi Kim ○☆	Chi Ho Han ○☆	Daniel Lehardt	Boyang Shi
	台湾	中国	韓国	韓国	ハンガリー	中国

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
中国	7	ウクライナ	1	イスラエル	1			ハンガリー	1	アメリカ合衆国	1
韓国	3	ロシア	1								
日本	2										
台湾	1										

【シンセン国際ピアノ協奏曲コンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	ファイナリスト
2006	Mariya Kim ○☆ Zhang Zuo ☆	該当なし	Wen-yu Shen ○	Jie Yuan ☆	Miao Hou	Sun-Ho Lee ☆	
	ウクライナ 中国		中国	中国	中国	韓国	
2011	Galina Chistyakova ○☆	Mladen Colic ○	Anton Igubnov				Chi Ho Han ○☆ Jin-Hong Li Alexandra Zaytseva
	ロシア	セルビア	ロシア				韓国 中国 ロシア
2014	Ke Ma	Hao Zhu ○	Wen-bin Jin ○				Andrejs Osokins ○ Tong Shen Ning Zhou
	中国	中国	中国				ラトビア 中国 中国
2017	Yanfeng Bai	Linzi Pan ○	Fabio Martino ○				Xue Hong Chen Yilei Hao ○ Andrey Ilyushkin
	中国	中国	ブラジル				中国 中国 ロシア

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		南アメリカ	
中国	14	ロシア	4			セルビア	1			ブラジル	1
韓国	2	ウクライナ	1								
		ラトビア	1								

【香港国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	ファイナリスト
2005	Ilya Rashkovsky ○☆	Wen-yu Shen ○☆	Sung Hoon Kim ○☆				Andrej Ponochevny ○ Ka Ling Colleen Lee ☆ Mei Yi Foo ☆
	ロシア	中国	韓国				ベラルーシ 香港 マレーシア
2008	Jin Sang Lee ○☆	Jong-Hai Park ☆	Miao Huang ○	Hye-Jin Kim ○	Hélène Tysman		
	韓国	韓国	ドイツ	韓国	フランス		

2011	Giuseppe Andoloro ○	佐藤 圭奈	Min Hao Tsai	Soo-Jung Ann ○☆	Elmar Gasanov ○☆	Han Chen ☆	
	イタリア	日本	台湾	韓国	ロシア	台湾	
2016	Luka Okros ○☆	Jeonghyun Yoon	Andrey Dubov ○	Hin Yat Tsang ☆	Linzi Pan ○☆	Yedam Kim ○☆	
	ジョージア	韓国	ロシア	香港	中国	韓国	

東アジア		東南アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	7	マレーシア	1	ロシア	3	ドイツ	1				
中国	2			ベラルーシ	1	フランス	1				
香港	2			ジョージア	1	イタリア	1				
台湾	2										
日本	1										

東アジア地域ではそのクラシック・ピアノ学習需要を反映してか、WFIMC 加盟コンクールが増加しており、浜松・ソウルを除けば 21 世紀に創設された新しいものばかりである。仙台・ソウルでアメリカ合衆国出身者がある程度見られるものの、大枠では東アジア系が圧倒的多数で、旧ソ連系がそれに続く構図となっている。その旧ソ連系にしても、欧州・北米で開催されるコンクール程の勢いは感じられない。東西ヨーロッパ勢もあまり振るわないようである。これらの状況は、東アジア勢が優秀な能力をホームで存分に発揮しているという意味合いだけではなく、旧ソ連勢や欧州勢にとって遠方のコンクールに参加することが、たとえ手厚い旅費や滞在補助があっても魅力に感じられないことを示唆するものである。東アジア諸国の中では、やはり韓国の強さが出色である。自国のコンクールではもちろん、日中の 5 コンクールでも一定数の入賞者を輩出してきた。対照的に日本は、中韓系のコンクールでの入賞はごく僅かで、上位入賞は香港の佐藤圭奈（2 位、2011 年）のみである。

では、各コンクールのホームアドバンテージはいかようなものとなっているのであろうか。下表は、東アジアコンクール入賞者の東アジア出身者についてまとめたものである。

東アジアのコンクール入賞者の東アジア出身者の割合

	韓国	日本	中国	その他	東アジア全体
浜松	20.0%	23.3%	3.3%	0%	46.7%
仙台	22.2%	16.7%	5.6%	5.6%	50.0%
高松	11.8%	17.7%	11.8%	5.9%	47.1%
ソウル	58.3%	0%	4.2%	0%	62.5%
イサンユン	52.2%	4.4%	4.4%	0%	60.9%
中国	16.7%	11.1%	38.9%	5.6%	72.2%
シンセン	8.3%	0%	58.3%	0%	66.7%
香港	30.4%	4.4%	8.7%	13.0%	60.9%

ソウル・イサンユン・シンセンの 3 コンクールについては、あまりにも自国コンテストが強すぎる。10 年代以降にその傾向がエスカレートしているのも気掛かりである。もちろんその国で最も高いレベルのコンクールに、その国で最も高いレベルの若手ピアニストが

参加するのは当然であるし、国籍のバラ付きに配慮して結果を出す訳ではないであろうが、開催国の入賞者が 5 割以上を占めるのは、あまりにも国際コンクールとして閉鎖的過ぎると言わざるを得ない。

入賞者地域で見ても、韓国・中国・香港のコンクールでは、東アジア圏からの入賞が 6 割を超え、日本開催のものでも 4 割後半から 5 割と非常に高いものとなる。コンクールに熱心なことは悪いことばかりではないが、他地域からの優秀な参加者により選択してもらえらるコンクールを目指すことが重要で、東アジア共通の課題と言えよう。

他 WFIMC コンクールでの入賞者については、浜松・香港が 8 割を超える非常に高い数字

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
浜松	30	26	15	20	3	86.7%	50.0%	66.7%	16.7%
仙台	36	22	10	19	6	61.1%	27.8%	52.8%	31.6%
高松	17	13	9	10	2	76.5%	52.9%	58.8%	22.2%
ソウル	24	19	15	13	5	79.2%	62.5%	54.2%	38.5%
イサンユン	23	16	12	15	4	69.6%	52.2%	65.2%	25.0%
中国	18	9	6	7	2	50.0%	33.3%	38.9%	22.2%
シンセン	24	14	11	6	3	58.3%	45.8%	25.0%	33.3%
香港	23	19	14	14	3	82.6%	60.9%	60.9%	33.3%

をマークしている。高松・ソウル・イサンユンも高水準と言える。既入賞者と積入賞者の割合に注目すると、ソウル・シンセンを除けば積入賞者割合が高くなっており、全体的には東アジア出身者のキャリアスタートという意味合いが強いようである。特に浜松では、2000 年代に開催された 3 回すべての入賞者が他コンクールで入賞を果たしており、最上位者はおしなべてショパン (2 名)・クライバーン・ミュンヘンといったメジャーコンクールで優勝者となっている。当時世界最高レベルの若手を集めることに成功したことは大きな功績である一方、他コンクールと審査員の重複が激しいことなどには批判があったことも事実で、2009 年を最後に故・中村紘子が審査委員長を退任してからは、まだ見ぬ若手をコンクールから発掘するという目的に立ち戻りつつあるように見受けられる。筆者は生前の中村と何度かお話しする機会があったが、彼女が浜松を世界屈指のコンクールにすることを目標に掲げられていたことは間違いない。ただ東アジアのコンクールの宿命かもしれないが、入賞したとしても国際的なキャリアが約束される訳ではなく、海外のコンテストにとってステップアップ、または日本市場に受け入れられることが主要な参加目的となるであろう。

2-15. その他の地域（イスラエル・オーストラリア・南アフリカ・チリ・ブラジル）のコンクール

【アルトゥール・ルービンシュタイン国際ピアノマスターコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	ファイナリスト
2001	Kyril Gerstein ○	Ferenc Vizi ○☆	Massimiliano Ferrati	Ulugbek Palvanov ○	大崎 結真 ☆	Henry Wong Doe ○	
	ロシア	ルーマニア	イタリア	ウズベキスタン	日本	ニュージーランド	
2005	Alexander Gavrylyuk ○	Igor Levit ○	Yeol Eum Son ○☆	Tatjana Kolesova ○☆ (セミ) Jie Chen ☆ (セミ)	Min Soo Sohn ○☆ (セミ)		
	ウクライナ	ロシア	韓国	ロシア 中国	韓国		
2008	該当なし	Ching-yun Hu Roman Rabinovitch	Khatia Buniatishvili ○	David Fung (セミ)	Inna Zakharenkova ○ (セミ)	Inessa Sinkevych ○ (セミ)	
		台湾 イスラエル	ジョージア	オーストラリア	エストニア	ウクライナ	
2011	Daniil Trifonov ○☆	Boris Giltburg ○☆	Ilya Rashkovsky ○☆	Eric Zuber ○☆	Aleksander Moutouzkine ○	福間 洗太郎 ○	
	ロシア	イスラエル	ロシア	アメリカ合衆国	ロシア	日本	
2014	Antoni Baryshevsky ○	Steven Lin ○	Seong Jin Cho ○☆				Andrejs Osokins ○☆ Maria Mazo ○☆ Leonardo Colafelice ☆
	ウクライナ	アメリカ合衆国	韓国				ラトビア ロシア イタリア
2017	Szymon Nehring	Daniel Patricia Ciobanu ○	Sara Daneshpour ○				Xiaoyu Liu ○ Jae Hong Park Yevgeny Yontov
	ポーランド	ルーマニア	アメリカ合衆国				カナダ 韓国 イスラエル

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア	
韓国	4	ロシア	7	イスラエル	3	イタリア	2	ルーマニア	2	アメリカ合衆国	3	ニュージーランド	1
日本	2	ウクライナ	3					ポーランド	1	カナダ	1	オーストラリア	1
中国	1	ウズベキスタン	1										
台湾	1	ジョージア	1										
		エストニア	1										
		ラトビア	1										

【シドニー国際ピアノコンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2004	John Js. Chen	Rem Urasin	Daniel De Borah ○	島田 彩乃	Alexander Lubyantsev ☆	Chufang Huang ☆
	ニュージーランド	ロシア	オーストラリア	日本	ロシア	中国
2008	Konstantin Shamray	Tatjana Kolesova ○☆	Ran Dank ○	佐藤 卓史 ○☆	北村 朋幹 ○☆	Eric Zuber ○☆
	ロシア	ロシア	イスラエル	日本	日本	アメリカ合衆国
2012	Avan Yu ○	Nikolay Khozyainov ○	Dmytro Onyshchenko ○☆	Mikhail Berestnev ☆	Hao Zhu ☆	Tanya Gabrielian ○
	カナダ	ロシア	ウクライナ	ロシア	中国	アメリカ合衆国
2016	Andrey Gugin ○	Arseny Tarasevich-Nikolaev ○	Moye Chen	Kenny Broberg ☆	Oxana Shevchenko ○	Jianing Kong ○
	ロシア	ロシア	中国	アメリカ合衆国	ウクライナ	中国

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		オセアニア	
中国	4	ロシア	8	イスラエル	1					アメリカ合衆国	3	ニュージーランド	1
日本	3	ウクライナ	2							カナダ	1	オーストラリア	1

【UNISA 国際音楽コンクール】

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
2004	Spencer Myer ☆	Konstantin Sukhovetski ○	Tatjana Kolesova ○☆	Alexei Chernov ○☆	Albert Mamriev ○	Rostislav Krimer
	アメリカ合衆国	ロシア	ロシア	ロシア	イスラエル	ペラルーシ

2008	Ben Schoeman	Alexei Yemtsov	Chun Wang ○☆	Pallavi Mahidhara ☆	Martina Fijak ○☆	Szczepan Konczal ○☆
	南アフリカ	ウクライナ	中国	アメリカ合衆国	クロアチア	ポーランド
2012	Lukáš Vondráček ☆	Hee-Jae Kim ☆	Stanislav Khrystenko ○☆	Sebastian Di Bin	Enrique Bernaldo de Quirós Martín ○	Christopher McKiggan
	チェコ	韓国	ウクライナ	イタリア	スペイン	イギリス
2016	Daniel Petricia Ciobanu ☆	Philipp Scheucher ○	Seom Seung Lee			
	ルーマニア	オーストリア	韓国			

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		アフリカ	
韓国	2	ロシア	3	イスラエル	1	イタリア	1	クロアチア	1	アメリカ合衆国	2	南アフリカ	1
中国	1	ウクライナ	2			スペイン	1	ポーランド	1				
		ベラルーシ	1			イギリス	1	チェコ	1				
						オーストリア	1	ルーマニア	1				

【ルイス・シガール博士国際音楽コンクール】

	1 位	2 位	3 位
2002	Eleonora Karpukhova ☆	Sung-Hoon Hwang ○ 大嶺 未来 ☆	
	ロシア	韓国 日本	
2007	Sean Kennard ○	Ryo Yanagitani	José Menor Martín
	アメリカ合衆国	カナダ	スペイン
2014	Alexey Sychev ○☆	Yuliya Yermalayeva	Woogil Park ○
	ロシア	ベラルーシ	韓国

東アジア		旧ソ連		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ	
韓国	2	ロシア	2	スペイン	1			アメリカ合衆国	1
日本	1	ベラルーシ	1					カナダ	1

【BNDES リオデジャネイロ国際ピアノコンクール】

	1 位	2 位	3 位
2009	Sasha Grynyuk ○	Tina Chong	Simon El Ghraichy
	ウクライナ	カナダ	レバノン
2010	Fabio Martino ☆	福間 洗太郎 ○☆	Evgeny Brakhman ○
	ブラジル	日本	ロシア
2012	Tamila Salimdzhanova	Mikhail Berestnev ○	Nino Bakradze
	ウズベキスタン	ロシア	ジョージア
2014	Darya Kiseleva ☆	Dmitry Shishkin ○☆	Dinara Klinton ○☆
	ロシア	ロシア	ウクライナ
2016	Daniel Petricia Ciobanu ○☆	Joo-Hyeon Park ○	Andreas Ioannides
	ルーマニア	韓国	イギリス

東アジア		旧ソ連		イスラエル・中東		西ヨーロッパ		東ヨーロッパ		北アメリカ		南アメリカ	
日本	1	ロシア	4	レバノン	1	イギリス	1	ルーマニア	1	カナダ	1	ブラジル	1
韓国	1	ウクライナ	2										
		ウズベキスタン	1										
		ジョージア	1										

ルービンシュタインとシドニーは多くのスポンサーに支えられ、世界で見ても大規模のコンクールを長年運営し続けてきた。UNISA・シガールもその歴史は長く、地域に根付いて

いる。また、BNDES は新興ながら、名を冠するブラジル国立経済社会開発銀行が全面的に支援し、賞金の高さや運営の手厚さで参加者を魅了してやまない。これらでは、その国出身の作曲家の作品⁹ が課せられることも特徴的である。高いレベルのコンクールを開催することで当該地域の文化振興のみならず、自国の素晴らしい音楽を世界に広く知らしめる目的も達成できるのである。

さて入賞者を地域・国籍別に見てみると、ルービンシュタイン・シドニー・BNDES の3コンクールでロシアを中心とする旧ソ連勢が安定した強さを発揮している。UNISA では、東西ヨーロッパ勢と旧ソ連勢が拮抗している。対する東アジア勢は、ルービンシュタイン・シドニーでまとまった入賞者を輩出しているものの、比較的大人しい印象である。西ヨーロッパは合計でも UNISA で4人、ルービンシュタインで2人、BNDES とシガールで2人ずつと寂しく感じられる。アメリカ合衆国も、いくつかのコンクールで健闘が見られるのみである。これらのコンクール群ではホームアドバンテージはほとんど感じられず、ルービンシュタインのイスラエル3人が最大で、もちろんピアニストのレベルもあるのであろうが、何が何でも自国演奏家を世に出すという方針は感じられない。

コンクール名	入賞者数	○または☆	○	☆	独自上位	○または☆	○	☆	独自上位
ルービンシュタイン	36	29	26	14	4	80.6%	72.2%	38.9%	22.2%
シドニー	24	19	14	10	4	79.2%	58.3%	41.7%	33.3%
UNISA	21	15	10	11	3	71.4%	47.6%	52.4%	25.0%
ルイス・シガール	9	6	4	3	3	66.7%	44.4%	33.3%	33.3%
BNDES	15	10	8	6	5	66.7%	53.3%	40.0%	33.3%

他コンクール入賞者割合は、ルービンシュタイン・シドニーが特に高い水準を示しているが、他の3コンクールも決して低くはない。また、UNISA を除けば、既入賞者の割合が高い。特にキャリアエンドに受けるコンクールとして位置付けられてきた雰囲気のあるルービンシュタインは、その印象に違わず既入賞者が7割を超えるが、積入賞者割合も一定程度あり、入賞が安定してキャリアに結び付けられるかは個人差があるように見受けられる。

3. 入賞傾向とコンクールの役割分析（他コンクール入賞・独自上位入賞・既入賞・積入賞から）

ここまでは個別のコンクールを国・地域ごとにまとめ、入賞者の国籍と他コンクールで挙げた実績について分析を行ってきたが、これらのデータをもとに、さらにわかりやすく WFIMC 加盟コンクールの傾向を比較するため、いくつかの統計的な手法をとりたい。

⁹ シドニーや BNDES では開催毎の委嘱作品ではなく、既出版された作品の中から選択するルールとなっている。

まずは、WFIMC・準 WFIMC のコンクールにおけるトータルでの他コンクール入賞者割合について、全入賞を集計して算出した。結果は下表の通り。この表について注釈してお

2001-17年のWFIMC加盟・準WFIMCコンクール入賞者における他コンクール入賞者人数・割合

	入賞タイトル数	他コンクール入賞者	既入賞者	積入賞者	独自上位入賞者	独自下位入賞者
合計	1703(うち上位 1193)	のべ 1107 人	のべ 754 人	のべ 723 人	392 人	204 人
割合		全体の 65.0%	全体の 44.3%	全体の 42.5%	上位全体の 32.9%	全体の 40.0%

くと、既入賞者（既に他 WFIMC・準 WFIMC コンクールで入賞を果たしている入賞者）・積入賞者（当該コンクール入賞後に他 WFIMC・準 WFIMC コンクールで入賞を積み上げた入賞者）は、合計すれば本来同数になるはずであるが、既入賞者に 2000 年の入賞データも含めたため、数値のバラ付きが出ている。

最も重大で衝撃的な事実、2001 年から 2017 年までに行われた WFIMC 加盟コンクール・準 WFIMC コンクールのファイナリストを含む全入賞タイトル 1703 のうち、65.0%が他の何らかの WFIMC・準 WFIMC コンクールの入賞者によって占められているということである。上位（1 位・2 位・3 位、または 3 位以内相当のファイナリスト）では、67.1%とさらに高水準となり、上位 3 人のうち 2 人以上が他コンクールで入賞してきた、または今後入賞する（あるいはその両方）ということになる。下位では、上位に比べれば独自性が高くなるものの、それでも 6 割が他コンクール入賞者によって占められている。これらの数字は、21 世紀において若手ピアニストの多くが、複数の WFIMC 加盟コンクールを渡り歩いてキャリアを築くことを証明したものと見えよう。

続いて WFIMC・準 WFIMC のコンクールについて、キャリアのどの時期に受けるべきかなどの理解を深めるために、次頁から

- 【A. WFIMC、準 WFIMC コンクールにおける他コンクール入賞割合ランキング】
- 【B. WFIMC、準 WFIMC コンクールにおける上位入賞者の独自性ランキング】
- 【C. WFIMC、準 WFIMC コンクール入賞者における既入賞者の割合ランキング】
- 【D. WFIMC、準 WFIMC コンクール入賞者における積入賞者の割合ランキング】

の 4 表を掲載し、比較・考察を行う。尚、一つの作曲家に特化したコンクールは、薄灰色で着色した。

【A. WFIMC、準 WFIMC コンクールにおける他コンクール入賞割合ランキング】

順位	コンクール名	賞の数	他入賞数	他コンクール入賞割合
1	トップ・オブ・ザ・ワールド	15	14	93.3%
2	クレーヴランド	31	28	90.3%
3	エリザベト(6位まで)	30	27	90.0%
4	ゲザ・アンダ	15	13	86.7%
	浜松	30	26	86.7%
6	プゾーニ	54	46	85.2%
7	リーズ	30	25	83.3%
	カサグランデ	18	15	83.3%
	サンタンデル	18	15	83.3%
	シヨパン(6位まで)	18	15	83.3%
11	香港	23	19	82.6%
12	ルービンシュタイン	36	29	80.6%
13	ハエン賞	51	41	80.4%
14	ワイマール・リスト	15	12	80.0%
15	ソウル	24	19	79.2%
	シドニー	24	19	79.2%
17	ホーンズ	23	18	78.3%
18	ダブリン	26	20	76.9%
19	高松	17	13	76.5%
20	ジュネーヴ	24	18	75.0%
	ジオルゴス・ティミス	12	9	75.0%
22	チャイコフスキー	23	17	73.9%
23	ヴィオッティ	33	24	72.7%
24	UNISA	21	15	71.4%
25	スコットランド	24	17	70.8%
26	イサンユン	23	16	69.6%
27	ブダペスト・リスト	22	15	68.2%
28	ボン・ベートーヴェン	21	14	66.7%
	ヴァン・クライバーン	30	20	66.7%
	ルイス・シガール	9	6	66.7%
	BNDES リオデジャネイロ	15	10	66.7%
	ロン＝ティボー	33	22	66.7%
	<u>2001-2017 合計のべ数</u>	<u>1703</u>	<u>1107</u>	<u>65.0%</u>
33	モントリオール	31	20	64.5%
34	ジョルジュ・エネスク	25	16	64.0%
35	ウィーン・ベートーヴェン	24	15	62.5%

36	ホセ・イトゥルビ	48	30	62.5%
37	マリア・カナルス	54	33	61.1%
	仙台(協奏曲)	36	22	61.1%
39	ARD ミュンヘン	15	9	60.0%
	トビリシ	30	18	60.0%
41	シンセン(協奏曲)	24	14	58.3%
42	シューマン	23	13	56.5%
43	ケルン	16	9	56.3%
44	エピナル	36	20	55.6%
45	ブラハの春	11	6	54.5%
46	RNCM マンチェスター	15	8	53.3%
47	若き音楽家	17	9	52.9%
48	クララ・ハスキル	27	14	51.9%
49	J.S. バッハ	18	9	50.0%
	ユトレヒト・リスト	18	9	50.0%
	中国	18	9	50.0%
52	マイ・リンド	24	11	45.8%
53	パデレフスキ	33	15	45.5%
54	リナ・サラ・ガッロ	21	9	42.9%
55	チュルリョーニス	24	9	37.5%
56	モーツァルト	11	4	36.4%
57	シューベルト	28	10	35.7%
58	ハチャトゥリアン	20	7	35.0%
59	オーケストラシオン	12	4	33.3%
	フンメル	21	7	33.3%
61	ホロヴィッツ	43	14	32.6%
62	オルレアン(現代曲)	25	5	20.0%

(脱退コンクール、廃コンクール)

1	ロンドン	9	8	88.9%
2	ジーナ・バックアワー	21	18	85.7%
3	ヴィアンナ・ダ・モッタ	20	16	80.0%
4	マリア・カラス(協奏曲)	20	15	75.0%
5	ウィリアム・カベル	9	6	66.7%
6	メシアン (現代曲)	8	5	62.5%
7	ポルト市	46	27	58.7%
8	EPTA スタニチッチ	22	12	54.5%
9	プロコフィエフ	12	5	41.7%

【B. WFIMC、準 WFIMC コンクールにおける上位入賞者の独自性ランキング】

順位	コンクール名	上位賞数	独自上位数	独自上位割合
1	リーズ	15	0	0%
2	エリザベート(3位まで)	15	1	6.7%
	トップ・オブ・ザ・ワールド	15	1	6.7%
4	クレーヴランド	23	2	8.7%
5	ショパン(3位まで)	10	1	10.0%
6	ダブリン	15	2	13.3%
	ゲザ・アンダ	15	2	13.3%
8	ブゾーニ	27	4	14.8%
9	ホーンズ	13	2	15.4%
10	スコットランド	18	3	16.7%
	カサグランデ	18	3	16.7%
	サンタンデール	18	3	16.7%
	浜松	18	3	16.7%
14	ハエン賞	51	10	19.6%
15	ホセ・イトゥルビ	24	5	20.8%
16	ワイマール・リスト	14	3	21.4%
17	高松	9	2	22.2%
	中国	9	2	22.2%
	ルービンシュタイン	18	4	22.2%
20	ジュネーヴ	24	6	25.0%
	ジオルゴス・ティミス	12	3	25.0%
	イサンユン	16	4	25.0%
	シンセン(協奏曲)	12	3	25.0%
	香港	12	3	25.0%
	UNISA	12	3	25.0%
26	ヴィオッティ	33	9	27.3%
27	チャイコフスキー	14	4	28.6%
	ブダペスト・リスト	14	4	28.6%
	若き音楽家	7	2	28.6%
30	トビリシ	17	5	29.4%
31	ケルン	13	4	30.8%
32	ヴァン・クライバーン	16	5	31.3%
33	仙台(協奏曲)	19	6	31.6%
	<u>2001-2017 合計のべ数</u>	<u>1193</u>	<u>392</u>	<u>32.9%</u>
34	ボン・ベートーヴェン	21	7	33.3%
	ロン＝ティボー	15	5	33.3%

34	モントリオール	15	5	33.3%
	シドニー	12	4	33.3%
	ルイス・シガール	9	3	33.3%
	BNDES リオデジャネイロ	15	5	33.3%
40	エピナル	27	10	37.0%
41	ジョルジュ・エネスク	24	9	37.5%
42	シューマン	13	5	38.5%
	ソウル	13	5	38.5%
44	マリア・カナルス	54	21	38.9%
45	ARD ミュンヘン	15	6	40.0%
	ウィーン・ベートーヴェン	15	6	40.0%
47	パデレフスキ	19	8	42.1%
48	ブラハの春	11	5	45.5%
49	RNCM マンチェスター	15	7	46.7%
50	クララ・ハスキル	27	13	48.1%
51	J.S. バッハ	12	6	50.0%
	ユトレヒト・リスト	18	9	50.0%
	マイリンド	12	6	50.0%
54	フンメル	15	8	53.3%
55	リナ・サラ・ガッロ	21	12	57.1%
56	チュルリョーニス	15	10	60.0%
57	ホロヴィッツ	23	14	60.9%
58	シューベルト	18	11	61.1%
59	ハチャトゥリアン	16	10	62.5%
60	モーツァルト	9	6	66.7%
61	オーケストラシオン	10	7	70.0%
62	オルレアン(現代曲)	25	20	80.0%

(脱退コンクール、廃コンクール)

1	ロンドン	9	1	11.1%
2	マリア・カラス(協奏曲)	18	3	16.7%
3	ヴィアンナ・ダ・モッタ	9	2	22.2%
4	ジーナ・パッカウワー	12	3	25.0%
5	ウィリアム・カベル	9	3	33.3%
6	EPTA スタニチッチ	14	5	35.7%
7	ポルト市	30	12	40.0%
8	プロコフィエフ	6	3	50.0%
	メシアン(現代曲)	6	3	50.0%

【C. WFIMC、準 WFIMC コンクール入賞者における既入賞者の割合ランキング】

順位	コンクール名	入賞者数	既入賞者	既入賞者割合
1	エリザベート(6位まで)	30	26	86.7%
2	トップ・オブ・ザ・ワールド	15	12	80.0%
	ゲザ・アンダ	15	12	80.0%
4	ショパン(6位まで)	18	14	77.8%
5	リーズ	30	22	73.3%
6	ルービンシュタイン	36	26	72.2%
7	ホーンズ	23	16	69.6%
8	クレーヴランド	31	20	64.5%
9	ソウル	24	15	62.5%
10	香港	23	14	60.9%
	チャイコフスキー	23	14	60.9%
12	ヴァン・クライバーン	30	18	60.0%
13	シドニー	24	14	58.3%
14	サンタンデール	18	10	55.6%
15	ホセ・イトゥルビ	48	26	54.2%
16	ダブリン	26	14	53.8%
17	ワイマール・リスト	15	8	53.3%
	BNDES リオデジャネイロ	15	8	53.3%
	ARD ミュンヘン	15	8	53.3%
20	高松	17	9	52.9%
21	ボン・ベートーヴェン	21	11	52.4%
22	イサンユン	23	12	52.2%
23	ハイン賞	51	26	51.0%
24	ユトレヒト・リスト	18	9	50.0%
	プゾーニ	54	27	50.0%
	浜松	30	15	50.0%
27	モントリオール	31	15	48.4%
28	ロン＝ティボー	33	16	48.5%
29	UNISA	21	10	47.6%
30	スコットランド	24	11	45.8%
	シンセン(協奏曲)	24	11	45.8%
	ウィーン・ベートーヴェン	24	11	45.8%
33	ルイス・シガール	9	4	44.4%
	カサグランデ	18	8	44.4%
35	ジョルジュ・エネスク	25	11	44.0%
	<u>2001-2017 合計のべ数</u>	<u>1703</u>	<u>754</u>	<u>44.3%</u>

36	ジュネーヴ	24	10	41.7%
37	ヴィオッティ	33	13	39.4%
38	シューマン	23	9	39.1%
39	ブラハの春	11	4	36.4%
40	マリア・カナルス	54	19	35.2%
41	マイ・リンド	24	8	33.3%
	トビリシ	30	10	33.3%
	中国	18	6	33.3%
	ジオルゴス・ティミス	12	4	33.3%
45	仙台(協奏曲)	36	11	30.6%
46	パデレフスキ	33	10	30.3%
47	フンメル	21	6	28.6%
48	チュルリョーニス	24	6	25.0%
	オーケストラシオン	12	3	25.0%
50	リナ・サラ・ガッロ	21	5	23.8%
51	若き音楽家	17	4	23.5%
52	ブダペスト・リスト	22	5	22.7%
53	J.S. バッハ	18	4	22.2%
54	シューベルト	28	6	21.4%
55	エビナル	36	7	19.4%
56	ケルン	16	3	18.8%
57	クララ・ハスキル	27	5	18.5%
58	モーツァルト	11	2	18.2%
59	オルレアン(現代曲)	25	4	16.0%
60	ハチャトゥリアン	20	3	15.0%
61	RNCM マンチェスター	15	2	13.3%
62	ホロヴィッツ	43	4	9.3%

(脱退コンクール、廃コンクール)

1	ジーナ・バックウワー	21	17	81.0%
2	ロンドン	9	6	66.7%
3	マリア・カラス(協奏曲)	20	12	60.0%
4	ヴィアンナ・ダ・モッタ	20	11	55.0%
5	メシアン(現代曲)	8	3	37.5%
6	EPTA スタニチッチ	22	8	36.4%
7	プロコフィエフ	12	4	33.3%
	ウィリアム・カベル	9	3	33.3%
9	ポルト市	46	14	30.4%

【D. WFIMC、準 WFIMC コンクール入賞者における積入賞者の割合ランキング】

順位	コンクール名	入賞者数	積入賞者	積入賞者割合
1	浜松	30	20	66.7%
2	イサンユン	23	15	65.2%
3	ブゾーニ	54	35	64.8%
4	カサグランデ	18	11	61.1%
5	香港	23	14	60.9%
6	ハエン賞	51	31	60.8%
7	高松	17	10	58.8%
8	ジオルゴス・ティミス	12	7	58.3%
9	ダブリン	26	15	57.7%
10	クレーヴランド	31	17	54.8%
11	ブダペスト・リスト	22	12	54.5%
12	スコットランド	24	13	54.2%
	ソウル	24	13	54.2%
14	RNGM マンチェスター	15	8	53.3%
	トップ・オブ・ザ・ワールド	15	8	53.3%
16	仙台(協奏曲)	36	19	52.8%
17	UNISA	21	11	52.4%
18	ケルン	16	8	50.0%
	ジュネーヴ	24	12	50.0%
	マリア・カナルス	54	27	50.0%
21	ロン＝ティボー	33	16	48.5%
22	ホーンズ	23	11	47.8%
23	ワイマール・リスト	15	7	46.7%
24	ヴィオッティ	33	15	45.5%
	プラハの春	11	5	45.5%
26	エピナル	36	16	44.4%
	サンタンデル	18	8	44.4%
	<u>2001-2017 合計のべ数</u>	<u>1703</u>	<u>723</u>	<u>42.5%</u>
28	モントリオール	31	13	41.9%
29	シドニー	24	10	41.7%
30	クララ・ハスキル	27	11	40.7%
31	ARD ミュンヘン	15	6	40.0%
	トビリシ	30	12	40.0%
	BNDES リオデジャネイロ	15	6	40.0%
34	J.S. バッハ	18	7	38.9%
	ショパン(6位まで)	18	7	38.9%

	中国	18	7	38.9%
	ルービンシュタイン	36	14	38.9%
38	マイリンド	24	9	37.5%
39	パデレフスキ	33	12	36.4%
40	ジョルジュ・エネスク	25	9	36.0%
41	若き音楽家	17	6	35.3%
42	チャイコフスキー	23	8	34.8%
43	リーズ	30	10	33.3%
	ウィーン・ベートーヴェン	24	8	33.3%
	ホセ・イトゥルビ	48	16	33.3%
	エリザベート(6位まで)	30	10	33.3%
	ルイス・シガール	9	3	33.3%
48	シューベルト	28	8	28.6%
	リナ・サラ・ガッロ	21	6	28.6%
50	モーツァルト	11	3	27.3%
51	ヴァン・クライバーン	30	8	26.7%
52	シューマン	23	6	26.1%
53	ハチャトゥリアン	20	5	25.0%
	シンセン(協奏曲)	24	6	25.0%
55	フンメル	21	5	23.8%
56	ホロヴィッツ	43	10	23.3%
57	ボン・ベートーヴェン	21	4	19.0%
58	オーケストラシオン	12	2	16.7%
	チュルリョーニス	24	4	16.7%
60	ゲザ・アンダ	15	2	13.3%
61	ユトレヒト・リスト	18	2	11.1%
62	オルレアン(現代曲)	25	2	8.0%

(脱退コンクール、廃コンクール)

1	ロンドン	9	6	66.7%
	ジーナ・バックハウアー	21	14	66.7%
3	ヴィアンナ・ダ・モッタ	20	11	55.0%
4	ポルト市	46	24	52.2%
5	ウィリアム・カベル	9	4	44.4%
6	マリア・カラス(協奏曲)	20	8	40.0%
7	メシアン(現代曲)	8	3	37.5%
8	EPTA スタニチッチ	22	8	36.4%
9	プロコフィエフ	12	4	33.3%

まず他コンクール入賞率比較の【A.】を見ると、トップ・オブ・ザ・ワールドの93.3%を筆頭に、14のコンクールが8割を超える高い水準を示し、地域中最高峰と言えるコンクールが居並ぶが、イタリア（ブゾーニ・カサグランデ）とスペイン（サンタンデールとハエン賞）からは2コンクールずつが入ったことも興味深い。一つの作曲家に特化したコンクールは専門性が高いため、おしなべて低くなるものと予想していたが、ショパンとリスト（ワイマール）では8割超えをマークし、リスト（ブダペスト）・ベートーヴェン（ボン）でも平均値を上回った。21世紀の上位コンテストは、どんな課題でも苦にせず演奏できる傾向があると言えるのではないか。一方で、他コンクール入賞率が5割を切るコンクールも11存在した。新興で評価が定まっていないものや、旧ソ連・東欧地域のホームアドバンテージが強すぎるものに加えて、課題曲の特殊性という側面も大きな要素となっている。モーツァルト国際やシューベルト国際では、自由曲レパートリーのコンクールとは違ったセンスが求められていることは容易に想像がつく。最下位のオルレアンは現代曲に軸を置いたコンクールであるから、逆に20%は高い、と見るべきであろう。

入賞の中でもより価値の高い3位以内、またはそれと同等に褒賞されたいいわゆる上位入賞者について、独自性が少ないコンクール順に並べた【B.】は、14位のハエン賞までが上位の8割以上を他コンクール入賞者で占めた。【A.】と似た顔ぶれも並ぶが、0%という驚異的な数字を叩き出したリーズをはじめ、英国圏のコンクールが3つもトップ10にランクインした。

また下表は、【A.】と100%-【B.】¹⁰の値が±10%以上あるコンクールの一覧である。

全体の入賞者と上位入賞者との独自性の比較

入賞者全体に比べて 上位入賞者の独自性が低いコンクール	入賞者全体に比べて 上位入賞者の独自性が高いコンクール
中国(+27.8%) 若き音楽家(+18.5%) ホセ・イトゥルビ(+16.7%) リーズ(+16.7%) シンセン(+16.7%) フンメル(+13.4%) ケルン(+12.9%) スコットランド(+12.5%) パデレフスキ(+12.4%) トビリシ(+10.6%)	シドニー(-12.5%) 香港(-15.9%) ソウル(-17.7%)

表の左側、全体の入賞者に比較して上位入賞者の独自性が低いコンクールは、上位入賞となると難易度がより増すコンクール、つまり上位と下位とのレベルに大きな差があると言える。独自入賞者が下位に固まる傾向が強いコンクールは、新人にも下位入賞のチャンスは大きいですが、たとえ入賞したとしても、他WFIMCコンクールで入賞するためには更な

¹⁰ 100% - 【B. 表の独自上位割合】で、上位入賞者限定の他コンクール入賞率を算出できる。

るレベルアップが必要と解釈できる。ただ、リーズほど全体の他コンクール入賞者割合が高ければ誤差の範囲と言えるであろう。

反対に右側の香港・シドニー・ソウルは、上位入賞に独自の基準を持つコンクールとなる。新人にとっては上位入賞のチャンスが大きくなる一方、複数のコンクールを渡り歩く既入賞者は、当て馬にされ、これまでの評価を覆される危険をやや考慮しなければならない。

【C. 既入賞者】・【D. 積入賞者】のランキングは、各コンクールの性格をより明確に表すものである。既入賞者割合は、入賞経験のあるピアニストを評価する傾向の強弱を表す。値が5割であれば、入賞未経験者も5割入賞していることとなり、経験がないコンテスタントにとっても悪い勝負にはならないであろうが、7割を超えるようなコンクール（エリザベート王妃、トップ・オブ・ザ・ワールド、ゲザ・アンダ、ショパン、リーズ、ルービンシュタイン）では、新人がいきなり入賞を目標に掲げることは得策とは言えない。また自由曲レパートリーが中心で、既入賞者割合が低い（RNCM マンチェスター・ハスキル・ケルン・エピナル・若き音楽家）コンクールは、審査基準が独特、あるいは基本的に他コンクールの色を持たない人を強く求めていると推察できる。

積入賞者割合は、そのコンクール出身のピアニストがその入賞以降、どれだけ他コンクールで活躍するのを見るのに便利な指標である。最高が浜松¹¹の66.7%と、既入賞者に比較して傾向差は緩やかで、5割以上をマークした現在の加盟コンクールは、19にとどまった。ただ独自入賞者としてカウントされている者が、今後他コンクールに入賞すれば、割合はより高く変動する。

この数字が低い要因には二つの可能性がある。課題曲や審査基準が他と一線を画すものであるか、入賞後に別のコンクールを受ける必要がないほど価値があるかである。前者はリスト（ユトレヒト）やチュルリョーニス・ホロヴィッツ、後者は、アンダ・クライバーン・エリザベート王妃といったものが挙げられよう。また、過去の入賞者の活躍から日本では絶対的な存在として取り上げられることの多いジュネーヴやロン＝ティボー・ARD ミュンヘンも、現代では入賞者の4割以上が引き続き入賞を求め、他コンクールに足を伸ば

¹¹ 浜松について、ある時期には本大会参加者を選ぶために、書類審査とその落選者による予備予選の両方が設けられていた。前者で既入賞者や有力な指導者の生徒など、実力者を呼び込み、予備予選でまだ実績のない才能を発掘する面白い制度である。2003年の開催回で2位に入賞したラハウ・ブレハッチは、後のショパンコンクールで優勝したことで知られているが、この予備予選制度で発掘された一人であると聞く。先述の通りその頃の浜松は、特に若年齢の入賞者を送り出していた。若い入賞者は、ほぼ必ず他のレベルが高いコンクールを受験するため、そこで成果をあげれば、浜松が育てたピアニストと銘打つことができる。2009年まで審査員長を務めた中村絃子には、そのような意図があったのではないか。

している。日本での感覚とは齟齬があると同時に、WFIMC 加盟コンクール群内で、水準の拮抗化が進んでいる証左と言える。

次に、複数の表を比較して考察する。【B. (独自上位入賞者)】と、【D. (積入賞者)】とを照らし合わせると、【B.】でランキングが高く、【D.】が低いリーズ (B. 1位/D. 43位) やエリザベート (B. 2位/D. 43位)、ショパン (B. 5位/D. 34位) やゲザ・アンダ (B. 6位/D. 60位) は、上位入賞を果たせばキャリアエンドであると多くの入賞者に考えられており、WFIMC 入賞歴なしで上位入賞を狙うことは非常に難しいコンクール群と言える。

【C. (既入賞者)】と【D. (積入賞者)】との比較は、コンクールをどのタイミングで受験することが良いのか、理解するために重要である。以下のように考えて見た。

1. 他コンクール入賞者割合 (【A.】参照) が $\geq 50\%$ のコンクールについて
(既入賞者割合) - (積入賞者割合) の解が
 <ア. 20%以上ならば、他 WFIMC コンクールでの受賞を経てからの受験を推奨>
 <イ. -20%以下ならば、初めて WFIMC で入賞を目指すコンテストに推奨>
2. 既入賞者割合と積入賞者割合が共に 50%を超え、差が 20%以内のコンクールの場合
 <ウ. 複数の WFIMC 入賞を目指す者に平等に大きなチャンスがあるコンクール>

ア. に該当するコンクール	イ. に該当するコンクール	ウ. に該当するコンクール
ゲザ・アンダ (66.7)	RNCM (-40.0)	クリーヴランド (64.5/54.8)
エリザベート王妃 (53.4)	ケルン (-31.2)	ソウル (62.5/54.2)
リーズ (40.0)	リスト (ブダペスト) (-31.8)	ダブリン (53.8/57.7)
ショパン (38.9)	ティミス (-25.0)	香港 (60.9/60.9)
ユトレヒト・リスト (38.9)	エピナル (-25.0)	高松 (52.9/58.8)
ベートーヴェン (ボン) (33.4)	クララ・ハスキル (-22.2)	ハエン賞 (51.0/60.8)
ルービンシュタイン (33.3)	仙台 (-22.2)	イサンユン (52.2/65.2)
ヴァン・クライバーン (33.3)		ブゾーニ (50.0/64.8)
Top of the World (26.7)		浜松 (50.0/66.7)
チャイコフスキー (26.1)		
ホーンズ (21.8)		
ホセ・イトウルビ (20.9)		
シンセン (20.8)		()内は、既入賞者/積入賞者

コンテストは、目の前にあるコンクールをやみくもに受けがちであるが、このような情報を頭に入れておくと長期的計画に役立てることが可能で、無理な挑戦を行なって貴重な労力や費用・時間を無駄にすることも少なくなるはずである。当たって砕けるような経験が成長には必要という意見もあるであろうが、応募数の増加等、競争の激化が著しい昨今、コンクール本大会に出場すること自体も難しくなっている現状を考えれば、少ないチャンスをものにする確率を高めることこそ大切な学習であり、本来ならば教育機関でも情報を習得できるようになることが望ましい。

4. 入賞者国籍の推移

4-1. 入賞者ポイントの基準と国・地域別データ

これまで WFIMC・準 WFIMC コンクールの結果データをコンクール毎にまとめてきたが、この項では年毎に入賞者を国籍・地域別に集計し、分析する。単純に入賞者数を合計するのではなく、入賞順位が反映されるように、下表の基準でポイントを振り分けた。

入賞ポイントの基準

<p>【WFIMC 加盟コンクール入賞者の場合】</p> <p><基本ポイント> 1位：18P 2位：14P 3位：12P 4位：8P 5位：6P 6位：4P</p> <p><4-6位がセミファイナリストである場合> 4位：7P 5位：5P 6位：3P</p> <p><1-3位に1席・2席がある場合（グランプリと1位を両立する場合等も含む）></p> <p>1位1席：18P/2席：16P 2位1席：14P/2席13P 3位1席：12P/2席：11P</p> <p><ファイナリスト></p> <p>1位と2人のファイナリストの場合、1位が出ずに3人がファイナリストの場合：13P</p> <p>1位と多数のファイナリストの場合：人数分の順位ポイントを合計し、平均して切り捨て</p> <p>入賞者3人の中で明確に3位未満という意味合いの場合：10P</p> <p>4-6位の意味合いで3人のファイナリストがいる場合：6P</p> <p>5-6位の意味合いで2人のファイナリストがいる場合：5P</p> <p>入賞者6人の中で明確に6位未満という意味合いの場合：2P</p> <p>【WFIMC 加盟前、脱退した（一時的なものを含む）コンクールの場合（準 WFIMC）】</p> <p><基本ポイント> 1位：16P 2位：12P 3位：10P 4位：6P 5位：4P 6位：2P</p> <p><4-6位がセミファイナリストである場合> 4位：5P 3位：3P 6位：1P</p> <p><ファイナリスト></p> <p>1位と2人のファイナリストの場合、1位が出ずに3人がファイナリストの場合：11P</p> <p>1位と多数のファイナリストの場合：人数分の順位ポイントを合計し、平均して切り捨て</p> <p>入賞者3人の中で明確に3位未満という意味合いの場合：8P</p> <p>4-6位の意味合いで3人のファイナリストがいる場合：4P</p> <p>5-6位の意味合いで2人のファイナリストがいる場合：3P</p> <p>入賞者6人の中で明確に6位未満という意味合いの場合：1P</p>

年毎の国毎ポイント合計を年毎のポイント総計で割ると、その国がその年残したコンクールの結果についての指数が算出できる。筆者はこれを、**入賞占有率**と呼ぶ。

$$(\text{ランクに応じた入賞ポイントの国別合計}) \div (\text{入賞ポイントの総計}) \times 100 = \text{入賞占有率}(\%)$$

ポイントのつけ方について、順位の価値差を反映することで、その国の全体レベルを測ることが出来、国や地域毎に比較しやすくなる。まず、上位入賞にのみ褒賞演奏会が手厚い慣習や、参加する立場の感覚から、上位と下位との差を大きく開くようにした。1位も、2位

と3位との差が2Pなのに対し、1位と2位には4P差をつけ、やや一線を画す。ただ筆者の経験上、あるいはあらゆる指導者や諸先輩から聞いてきた通り、上位の実力を持ち続け、条件（運やコンディション・審査員の好み）が合致した時に漸く、1位というランクを頂けるものであるから、乖離し過ぎないようにも配慮した。

コンクールによって順位の出し方にも個性があるため、統一基準を作るのは大変悩ましく、議論を呼ぶかもしれない。ただ第1章で述べたように、これからの時代はコンクール一つ一つをつぶさにみることも、レベル差が拮抗しているコンクール群を渡り歩くコンテストが、どのように経歴を辿っているのかを観察することがより重要になると筆者は考える。そういう意味でも、入賞者ポイントと入賞占有率は一つのバロメーターとして機能に足るものである。

次頁から【A. 毎年の推移】、【B. 5年毎・10年毎の推移】をまとめた表を掲載する。また、地域別・トップ10諸国については、ベスト3がわかりやすくなるように色分けした表を添付した。

【A2. 地域圏・トップ10 諸国の年別推移とランキング】

	<地域別>	全体の割合	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	
1位	旧ソ連	35.33%	31.44%	27.53%	35.50%	37.60%	34.97%	37.72%	43.83%	28.20%	37.87%	50.26%	42.17%	35.27%	38.41%	33.33%	35.68%	22.73%	23.31%	旧ソ連
2位	東アジア	30.34%	23.74%	32.59%	31.41%	21.18%	35.35%	30.11%	26.38%	37.12%	29.90%	25.77%	28.11%	32.06%	30.16%	29.46%	17.88%	43.04%	43.54%	東アジア
3位	西ヨーロッパ	18.44%	25.66%	25.29%	17.44%	23.47%	22.86%	19.44%	14.33%	14.94%	19.70%	11.22%	16.22%	15.83%	15.67%	22.39%	25.54%	11.41%	12.43%	西ヨーロッパ
	東ヨーロッパ	6.19%	11.39%	5.84%	4.45%	6.49%	1.84%	3.58%	6.67%	6.77%	8.24%	6.97%	5.87%	6.21%	4.35%	3.03%	2.75%	15.09%	6.66%	東ヨーロッパ
	北アメリカ	6.16%	2.09%	4.09%	6.58%	6.87%	2.83%	6.81%	5.96%	6.86%	2.33%	3.57%	5.94%	10.22%	3.80%	8.75%	14.88%	5.42%	8.53%	北アメリカ
	イスラエル・中東	1.79%	1.68%	4.28%	3.20%	1.53%	0.92%		2.55%	2.44%	1.79%		1.68%		3.44%	1.52%	2.24%	1.16%	1.95%	イスラエル・中東
	オセアニア	0.95%	4.01%		1.07%	2.86%	0.92%	2.33%		0.66%				0.40%	1.27%	1.52%			1.14%	オセアニア
	中南アメリカ	0.48%										2.21%			2.90%		1.03%	1.16%	0.97%	中南アメリカ
	東南アジア	0.22%		0.39%			0.31%		0.28%	1.32%									1.46%	東南アジア
	アフリカ	0.11%			0.36%					1.69%										アフリカ

	<トップ10カ国>		2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	
1位	ロシア	19.67%	17.88%	18.19%	12.54%	20.99%	19.97%	20.34%	25.74%	14.10%	16.47%	29.68%	26.43%	20.84%	20.20%	19.02%	21.32%	13.35%	13.48%	ロシア
2位	韓国	12.85%	9.46%	9.92%	9.70%	4.39%	9.95%	10.04%	8.23%	11.47%	15.13%	11.31%	16.57%	15.63%	17.03%	16.84%	12.12%	22.15%	19.09%	韓国
3位	日本	9.66%	11.15%	17.02%	14.23%	9.06%	14.92%	11.47%	10.64%	12.22%	6.27%	9.18%	4.48%	7.41%	8.06%	3.87%	4.13%	13.25%	8.45%	日本
	ウクライナ	7.83%	7.62%	3.50%	7.74%	10.11%	4.59%	12.10%	7.02%	9.40%	12.26%	12.41%	6.71%	6.81%	12.68%	5.22%	6.96%	5.13%	3.98%	ウクライナ
	中国	6.24%	3.13%	2.14%	6.94%	5.25%	8.80%	7.53%	5.53%	9.12%	7.97%	4.42%	5.94%	7.62%	3.44%	8.75%	1.63%	5.13%	12.19%	中国
	イタリア	5.87%	10.51%	8.66%	3.74%	5.53%	8.72%	3.05%		3.76%	7.70%	4.85%	7.55%	6.61%	4.71%	4.38%	7.65%	6.00%	6.58%	イタリア
	アメリカ合衆国	4.76%	1.04%	2.33%	4.09%	6.87%	2.83%	6.81%	4.96%	5.55%	1.25%	3.57%	5.10%	8.42%	3.80%	6.06%	9.29%	3.29%	6.09%	アメリカ合衆国
	フランス	3.70%	2.41%	6.03%	2.49%	7.44%	3.83%	6.36%	3.12%	3.20%	7.70%	1.36%	0.84%	3.01%	4.89%	3.20%	6.02%	2.90%	0.00%	フランス
	ドイツ	2.74%	7.46%	4.77%	2.76%	3.82%	4.74%	3.23%	2.55%	0.94%	3.22%		1.26%	0.60%	0.63%	3.20%	3.61%	1.16%	2.11%	ドイツ
	ジョージア	1.91%	1.12%	1.95%	4.00%	0.76%	2.30%		1.06%	2.44%	1.07%	0.68%	1.40%	3.61%	3.53%	2.53%	1.55%	1.74%	3.09%	ジョージア

<年毎のトップ10> (2%未満はランク外)	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017			
1位	ロシア	ロシア	日本	ロシア	ロシア	ロシア	ロシア	ロシア	ロシア	ロシア	ロシア	ロシア	ロシア	ロシア	ロシア	韓国	韓国	1位		
2位	日本	日本	ロシア	ウクライナ	日本	ウクライナ	日本	日本	韓国	ウクライナ	韓国	韓国	韓国	韓国	韓国	ロシア	ロシア	2位		
3位	イタリア	韓国	韓国	日本	韓国	日本	韓国	韓国	ウクライナ	韓国	イタリア	アメリカ合衆国	ウクライナ	中国	アメリカ合衆国	日本	中国	3位		
4位	韓国	イタリア	ウクライナ	フランス	中国	韓国	ウクライナ	ウクライナ	中国	日本	ウクライナ	中国	日本	アメリカ合衆国	イタリア	イタリア	日本	4位		
5位	ウクライナ	フランス	中国	アメリカ合衆国	イタリア	中国	中国	中国	フランス	イタリア	中国	日本	フランス	ウクライナ	ウクライナ	中国	ウクライナ	5位		
6位	ドイツ	ドイツ	アメリカ合衆国	イタリア	ドイツ	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	中国	アメリカ合衆国	ウクライナ	イタリア	イタリア	イタリア	フランス	アメリカ合衆国	アメリカ合衆国	6位		
7位	ルーマニア	ウクライナ	ジョージア	中国	ウクライナ	フランス	リトアニア	イタリア	日本	アメリカ合衆国	日本	イタリア	アメリカ合衆国	ベラルーシ	カナダ	ルーマニア	ウクライナ	7位		
8位	中国	ルーマニア	イタリア	フィンランド	韓国	フランス	エストニア	ドイツ	スベイン	アルメニア	フランス	セルビア	ラトビア	リトアニア	リトアニア	ポーランド	香港	8位		
9位	ハンガリー	イスラエル		ドイツ	エストニア		フランス	台湾	ウズベキスタン	ドイツ		アルメニア	フランス	中国	日本	日本	アメリカ合衆国	ジョージア	9位	
10位	フランス	台湾	ベラルーシ	アメリカ合衆国	リトアニア	エストニア	アメリカ合衆国	フィンランド	オランダ			ポーランド	ラトビア		イギリス	ドイツ	チェコ	カナダ	イギリス	10位

【B2. 地域圏・トップ10 諸国の5年・10年別推移とランキング】

	<地域別>	全体の入賞ポイントの割合	2001-2005	2006-2010	2011-2015	2016-2017 (2年分)	2001-2010	2010-2017 (7年分)	増減割合	
1位	旧ソ連	35.39%	33.45%	40.00%	37.23%	23.05%	36.76%	33.28%	0.90倍	
2位	東アジア	30.32%	28.99%	29.58%	27.42%	43.31%	29.29%	31.84%	1.09倍	
3位	西ヨーロッパ	18.44%	22.96%	15.81%	19.14%	11.96%	19.34%	17.15%	0.87倍	
	東ヨーロッパ	6.19%	5.98%	6.46%	4.45%	10.51%	6.22%	6.14%	0.99倍	
	北アメリカ	6.16%	4.36%	5.12%	8.60%	7.11%	4.74%	8.19%	1.73倍	
	中東・イスラエル	1.74%	2.24%	1.43%	1.80%	1.59%	1.81%	1.74%	0.96倍	
	オセアニア	0.95%	1.81%	0.56%	0.61%	0.62%	1.18%	0.61%	0.52倍	
	中南アメリカ	0.48%	0.00%	0.44%	0.75%	1.06%	0.22%	0.83%	3.77倍	
	東南アジア	0.22%	0.14%	0.31%	0.00%	0.79%	0.22%	0.22%	1倍	
	アフリカ	0.11%	0.07%	0.31%	0.00%	0.00%	0.19%	0.00%		
			5年単位				10年単位			
1位	<トップ10カ国>		2001-2005	2006-2010	2011-2015	2016-2017 (2年分)	2001-2010	2010-2017 (7年分)	増減割合	評価
2位	ロシア	19.73%	17.94%	21.64%	21.81%	13.42%	19.81%	19.48%	0.98倍	横ばい
3位	韓国	12.86%	8.78%	11.08%	15.67%	20.49%	9.94%	17.01%	1.71倍	大幅増
	日本	9.65%	13.28%	9.96%	5.46%	10.64%	11.60%	6.90%	0.59倍	大幅減
	ウクライナ	7.84%	6.67%	10.49%	7.60%	4.50%	8.60%	6.74%	0.78倍	減
	中国	6.24%	5.37%	6.80%	5.47%	8.96%	6.09%	6.45%	1.05倍	横ばい
	イタリア	5.87%	7.54%	3.69%	6.24%	6.31%	5.59%	6.26%	1.11倍	微増
	アメリカ合衆国	4.76%	3.34%	4.44%	6.44%	4.81%	3.89%	5.99%	1.53倍	大幅増
	フランス	3.71%	4.31%	4.27%	3.47%	1.32%	4.29%	2.87%	0.67倍	減
	ドイツ	2.74%	4.78%	2.01%	1.89%	1.68%	3.38%	1.83%	0.54倍	大幅減
	ジョージア	1.91%	2.03%	1.04%	2.43%	2.47%	1.53%	2.44%	1.59倍	大幅増
			5年単位				10年単位			
	<年毎のトップ10> (2%未満は省略)		2001-2005	2006-2010	2011-2015	2016-2017 (2年分)	2001-2010	2010-2017 (7年分)		
	1位		ロシア	ロシア	ロシア	韓国	ロシア	ロシア		
	2位		日本	韓国	韓国	ロシア	日本	韓国		
	3位		韓国	ウクライナ	ウクライナ	日本	韓国	日本		
	4位		イタリア	日本	アメリカ合衆国	中国	ウクライナ	ウクライナ		
	5位		ウクライナ	中国	イタリア	イタリア	中国	中国		
	6位		中国	アメリカ合衆国	中国	アメリカ合衆国	イタリア	イタリア		
	7位		ドイツ	フランス	日本	ウクライナ	フランス	アメリカ合衆国		
	8位		フランス	イタリア	フランス	ルーマニア	アメリカ合衆国	フランス		
	9位		アメリカ合衆国	ドイツ	ジョージア	香港	ドイツ	ジョージア		
	10位		ルーマニア	-----	スペイン	ポーランド	-----	カナダ		

これらのデータを見ると、まず目につくのが入賞国の偏りである。2001年から2017年の17年間でWFIMC、または準WFIMCの国際コンクールで入賞したのは、54の国と2つの地区（台湾・香港）に限られる。特に東南アジア・中東・中南米・アフリカ諸国は、殆ど入賞者を出せていない。また2017年の世界人口トップ10¹²の中では、インド・インドネシア・パキスタン・バングラデシュといったアジアの巨大な人口を擁する国からの入賞者が一人も出ていない。音楽の学習には経済的な豊かさが重要という事がよくわかる。これらの国がより発展しピアノを学習する土壌が整えば、今の東アジア三国のように良い結果を出すようになるのかもしれない（イスラム圏では宗教上難しいかもしれない）。

入賞国の中でも、まとめて入賞ポイントを占有している国とそうでない国との差は極端である。上位10カ国（ロシア・韓国・日本・ウクライナ・中国・イタリア・アメリカ合衆国・フランス・ドイツ・ジョージア）の合計で、全入賞者ポイントの実に7割5分を占め、上位4カ国、ロシア・韓国・日本・ウクライナのみでは全入賞者ポイントの5割を超える計算となる。筆者が受けてきたWFIMC加盟コンクールでもこれらの国籍出身者は多くみられたが、入賞者がここまでの寡占状態にあるとは、驚きである。

4-2. 入賞占有率と代表的入賞者の国別考察（トップ10諸国以外）

トップ10カ国を詳細に見る前に、まずはそれ以外の国々について、背景や入賞者にも触れながら、地域別に考察したい。

東アジアでは、台湾や香港といった地区がランクインしている。特に香港は、音楽院¹³の発達に加えて、香港国際ピアノコンクールが2005年から始まり、2016年からWFIMCに加盟したこともピアノ熱の高さを窺わせる。コンテストにも、WFIMCコンクールで複数入賞を果たす有力な者が定期的に登場する。代表的なのはショパン国際コンクールや仙台でも入賞を重ねたカリン・コリン・リーや、Hin Yat Tsangといった存在である。

東南アジアは、フィリピン・マレーシア・シンガポールで僅かに入賞者が見られるのみである。また、ヤマハが特に教育に力を入れて来たと聞くインドネシア、ダン・タイ・ソンやクン＝ウー・パイクに代表される世界的なピアニストを輩出してきたベトナム両国の

¹² 順に、中国・インド・アメリカ合衆国・インドネシア・ブラジル・パキスタン・ナイジェリア・バングラデシュ・ロシア・日本

¹³ 筆者も一度香港演芸学院を訪れたが、学習と鑑賞（クラシック以外の舞台演芸も含む）が可能な一体型の近代的な施設であった。

入賞が見られなかったことは驚きである。この地域は今後の経済成長とともに文化的発展が期待されるため、動向に注目したい。

イスラエル及び中東地域は地政学的に同じグループとしたが、誰もが知るように、ひとくくりにはできない。**イスラエル**は、アルトゥール・ルービンシュタイン国際ピアノマスターコンクールを擁し、コンクール審査員もアリエ・ヴァルディ、ヨハヘド・カプリンスキー、ディーナ・ヨッフエ等、重鎮が多い。ホロヴィッツの「ピアニストには三種類しかいない、ユダヤ人とホモと下手くそだ」は、現代においては活動休止に追い込まれるほどのレイシズムと偏見に満ちた失言であるが、そう言わしめるほど、民族的な意味でのユダヤ系ピアニストが世界を席卷していたと窺わせるものである。21世紀においてはエリザベト王妃覇者のボリス・ギルトブルク（他にサントンデールとルービンシュタインで共に2位を受賞している）が代表的なコンクール出身のピアニストとして挙げられる。

中東は、イスラム圏が宗教的にクラシック音楽を忌避しているということも影響しているのか、入賞者が少ない地域である。その中でも欧亜相半ばする**トルコ**の健闘が光る。また、オーケストラシオン国際ピアノコンクールがイスタンブールに創設され、WFIMCに加盟したことは中東全体にとっても大きな動きである。2000年代はほとんど見られなかったトルコ人入賞者が2013年以降に増加したのは、このコンクールにおける好成績が主な要因であるが、それだけにとどまらず、2016年にシューベルト国際コンクールにおいて**Emrecan Yavuz**が3位入賞、2017年にスコットランド国際ピアノコンクールにおいて**Can Cakmur**が優勝を果たすなど、ヨーロッパの伝統的なコンクールにも進出してきた。この国では、ハエン賞で優勝しているフセイン・セルメット（他にブゾーニ4位、ゲザ・アンダ2位等）がコンクール出身ピアニストの草分けであり、それに続く存在が期待される。その他の国では、BNDES(2009)での**Simon El Ghraichy**（レバノン）が3位に見られるのみである。レバノンを代表するコンクール出身のピアニストには、エリザベト覇者の**アブデル・ラーマン・エル＝バシャ**の名が挙げられる。

いずれの中東諸国でも今後代表的なピアニストを輩出するには、西洋文化の受容がより進まなければ難しいかもしれない。イスラム原理主義勢力が、西洋の楽器を集めて燃やした映像は、古代中国やナチスの焚書を思い起こさせる衝撃的なものであった。ただ、カタールがクラシック音楽に注力したり、アブ・ダビで大規模な音楽フェスティバルが行わ

れ、国際ピアノコンクールも開催されたりするなど、寛容な国々では決して禁忌ではないので、発展も期待できる。

続いて、**旧ソ連諸国**である。後述するトップ 10 諸国のロシア・ウクライナ・ジョージアを除くと、バルト 3 国のエストニア・ラトビア・リトアニア、ヨーロッパに属するベラルーシ、南コーカサスに属するアルメニア、ルーマニア系が住民の多くを占めるモルドヴァ、さらにアジア系のカザフスタン・ウズベキスタンで入賞ポイントが見られた。

リトアニアは、自国のチュルリョーニス国際ピアノ・オルガンコンクールが WFIMC に加盟しているため、このコンクールが開催される年はポイント占有率が高くなっている。エストニア・ラトビアは中規模の国際コンクールが充実しており、定期的に強力なコンクール覇者が生まれている印象で、ハエン賞・エネスク・J. S. バッハでそれぞれ 1 位を獲得している Irina Zahharenkova (エストニア) や、ロンドン・ダブリン・リーズ等で入賞を果たした Andrejs Osokins (ラトビア) といった存在に代表される。ベラルーシは一人でたくさんのコンクールを制覇する者は少ない印象である。アルメニアではリトアニアと同様、自国のアラム・ハチャトゥリアンコンクールが行われる年に占有率が高くなるが、WFIMC に加盟した後の 2014 年の回では、入賞者を出せていない。アジア系 2 カ国を見ると**カザフスタン**は、中堅のアルマトイ国際ピアノコンクールが開催されたり、アスタナでチャイコフスキーコンクールのユース版が行われたりするなど、クラシック音楽が盛んな地域であるにもかかわらず、特に 2010 年代は振るわない。**ウズベキスタン**は、ロンドン国際優勝(2009)で世界デビューを果たしたベフゾド・アブドゥライモフ、ブゾーニ国際優勝(2009)のミハイル・リフィッツが、早逝したアレクセイ・スルタノフに続く出身ピアニストとして世界的な活動を展開している。

さて、本論文で**西ヨーロッパ**としてまとめた国々は、政治的に東側に属しなかったという意味合いで、スイス、オーストリアの中立国やソ連と深いつながりのあったフィンランドも含まれる。また、地理的に見れば北欧・南欧・中央ヨーロッパに該当する国々も内在している。つまり、かつての非共産圏（西ヨーロッパ）・共産圏（東ヨーロッパ）という分類に近いので、国々を個別に見ていくことが肝要となる。西ヨーロッパの中でベスト 10 のイタリア・フランス・ドイツについては後述する。

筆者が驚いたのは、世界最高レベルの音楽院を持ち、指折りのコンクール、リーズ国際を擁する**イギリス**の低迷である。自国の 3 コンクールでは合計 2 つの入賞があるのみで、複数入賞者もブダペスト(2011)とユトレヒト(2017)の両リストコンクールで優勝を果たし

た Alexander Ullman が目立つ程度である。ただイギリスを活動拠点にするピアニストも多く、アンドラーシュ・シフなど、活躍ののち、英国籍を取得するケースもある。多民族国家は、国籍だけで判断し難い側面もあるが、少なくともイギリス生まれのピアニストがコンクールで低調であることは事実である。

そのイギリスを上回って西ヨーロッパ中 4 番手につけるのが、**スペイン**である。ホセ・イトウルビ(2006)・エネスク(2014)両コンクールで優勝した Josu De Solaun Soto や、仙台 3 位(2010)・ハエン賞 1 位(2011)など 6 つの WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールでの入賞歴を持つ Marianna Prjevalskaya が代表的なコンテストとして挙げられ、共にアメリカ合衆国で学んだ経歴を持つ。筆者の友人で、ハエン賞(2014)・ホセ・イトウルビ(2017)・サンタンデル(2018)のスペイン 3 コンクールで入賞歴を持つ Juan Carlos Fernández Nieto もニューヨークで学んでいる。コンクール上位のスペイン人にとって、米国はメジャーな留学先であると言えるのではないか。

その他の国々の入賞占有率は 1%を下回る。中央ヨーロッパの**スイス・オーストリア**も人口が少ないとはいえ、優秀な音楽院や音楽大学を持ち、それぞれに WFIMC 加盟コンクールを複数抱えているが、成績は芳しくない。近年コンクールからデビューしたピアニストには、フランチェスコ・ピエモンテージ (スイス) が挙げられる。同じく WFIMC 加盟コンクールを抱える**ギリシャ**や**フィンランド**も、わずかな占有率にとどまる。フィンランドのポイントは、2003 年にダブリン・リーズの両コンクールで優勝を果たしたアンティ・シーララによるものと、マイ・リンド国際ピアノコンクールのホームアドバンテージが大きい。フィンランド以外の北欧諸国では、**デンマーク**にわずかにポイントが見られるのみである。**ベネルクス 3 国**も特に目立たない。**ポルトガル**も 2010 年までポルト市国際やヴィアンナ・ダ・モッタ国際が開催されていたにもかかわらず、2014 年の入賞 1 人とどまり、同じイベリア半島のスペインと明暗が分かれる。

東ヨーロッパ (旧共産圏) 諸国は、おしなべて低調な結果となった。占有率が 1%を超える国もルーマニア(1.27%)・ポーランド(1.21%)の二カ国に限られる。**ルーマニア**は、自国のジョルジュ・エネスク国際ピアノコンクールの存在も大きい。浜松・ルービンシュタイン・ARD ミュンヘン等の複数入賞歴を持つフレンク・ヴィジや、UNISA・BNDES で第 1 位を獲得し、ルービンシュタイン(2017)で第 2 位を収めた新進気鋭の Daniel Petrica Ciobanu 等、しばしば複数のコンクールで好成績を残すコンテストが登場する。ショパン・パデレスキ両コンクールを開催する**ポーランド**は、様々なコンクールで入

賞が見られ、特に浜松 2 位・ショパン 1 位のラファウ・ブレハッチ、リナ・サラ・ガッロ (2010) とマリア・カナルス(2011) 両コンクールで優勝、エリザベート王妃(2013) で 3 位の成績を収めた Mateusz Borowiak が結果を残している。リスト音楽院とブダペスト国際音楽コンクールを擁するハンガリーは、2001 年に同コンクールで好成績であったが、その後は年に 1-2 人の入賞があるかないかといった範疇にとどまる。RNCM で 2 位(2010) を獲得した Zoltán Fejérvári が、モンテリオールで 1 位(2017) となったことは記憶に新しい。チェコでは、2016 年エリザベート王妃覇者の Lukáš Vondráček が、他にも UNISA 1 位(2012)・TOW2 位(2013) 入賞を果たし、ブルガリアでは、日本でも人気のあるエフゲニー・ボジャノフがカサグランデ 1 位(2008)・エリザベート王妃 2 位(2010)・ショパン 4 位(2010) の成績を収め、スターピアニストとなっている。クロアチアは、自国開催の EPTA S.スタニッチ国際ピアノコンクールでのポイントも大きいですが、ヴィオッティ(2007)・カナルス(2008)・クリーヴランド(2009) の各コンクールで優勝した Martina Filjak がブゾーニや UNISA でも入賞してポイントを積み上げ、シューマン 1 位(2012)・エリザベート王妃 5 位(2016) 等の受賞歴のある Aljoša Jurinic が続く。若き音楽家のための音楽コンクールが開催されるセルビアは、そこでのポイントに加え、Mladen Colic がハエン賞(2007)・カナルス(2010) 両コンクールを制覇している。スロバキアは自国開催のフンメルと、隣国チェコで行われているプラハの春での僅かな入賞が見られるのみである。

北中南米地域に移ると、トップ 10 諸国のアメリカ合衆国を除けば、ここ数年で存在感があるのはカナダである。2014 年から 4 年連続して 2% 以上の占有率をマークし、サンタデール 2 位(2008)・シドニー 1 位(2012) の Avan Yu、モンテリオール 3 位(2011)・エリザベート王妃 2 位(2016) Henry Kramer、ソウル 3 位(2014)・モンテリオール 2 位(2014)・ショパン 2 位(2015) のシャルル・リシャール＝アムランといった活躍する面々は、ほとんど筆者と同年代のピアニストで馴染み深い。対照的に中南米は、入賞者が出る年の方が珍しい。ブラジル人ピアニスト Ronaldo Rolim が、RNSM(2010) とゲザ・アンダ(2015) で共に 3 位入賞を果たした程度である。メキシコ・キューバ・チリ・ボリビアの各国は単発の入賞にとどまる。そして 20 世紀を代表するダニエル・バレンボイム、マルタ・アルゲリッチ、ブルーノ・レオナルド・ゲルバーの出身国アルゼンチンは、21 世紀に入って WFIMC 加盟・準 WFIMC の入賞はゼロである。

オーストラリア・ニュージーランドのオセアニア地域 2 カ国での入賞者も、中南米に比すればやや高いものの、それぞれ 1% を下回る数値となっている。オーストラリアはロン

ドン 3 位(2005)・リーズ 6 位(2012)・モントリオール 1 位(2014)のジェイソン・ギルハムが代表的なコンテストとして挙げられるが、2015 年から 3 年間は入賞者がいない。ニュージーランドの複数入賞者は、スコットランド 1 位(2001)・ハエン賞 2 位(2006)の Chenyin Li が唯一である。

アフリカ諸国は、**ナイジェリア・南アフリカ**にそれぞれ 1 人ずつの入賞が見られるのみである。ヨーロッパに近いエジプトやモロッコでは比較的クラシック音楽が盛んで、特にモロッコでは、WFIMC に加盟こそしていないもののララ・メリヤム女王国際ピアノコンクール、モロッコ交響楽団国際ピアノコンクール等、コンテストに広く認知され上級者が多く受験しているコンクールがある。それらの国々出身の入賞者がいても良さそうなものであるが、現状は厳しいようである。

4-3. 入賞占有率の地域圏別・トップ 10 諸国の考察

地域圏とトップ 10 諸国についてはより詳細に、入賞占有率と複数入賞者それぞれを分けて考察する。この項ではまず入賞占有率について取り上げるので、複数入賞者については、124 頁からの分析を参照のこと。

2001 年から 2017 年までの通算地域別入賞占有率は、旧ソ連が約 35%でトップ、約 30%の東アジアが続き、少し離れて約 18%の西ヨーロッパという勢力圏になっている。東ヨーロッパ・北アメリカは共に約 6%と拮抗し、他は 2%弱のイスラエル・中東を除く全ての地域（オセアニア・中南米・東南アジア・アフリカ）で 1%を下回っている。

最もコンクールで強い地域と言える**旧ソ連**からは、ロシア（1 位）を筆頭にウクライナ（4 位）・ジョージア（10 位）の 3 カ国がトップ 10 にランクインした。5 年単位で見ると、2006-10 年に入賞占有率 40%という驚異的な数値を叩き出すが、2016-17 年は露・烏の低調が響いて 15%を超える下落となっている。ただ残り 3 年の 2018-20 年で大きく変動する可能性もある。10 年単位では、2010 年までとそれ以降との比較で 0.9 倍の微減となった。

ロシアはドイツ圏で行われる一部の作曲家中心のコンクールや、現代作品のためのコンクールでは振るわないものの、それ以外の多くでトップの入賞数を誇り、旧ソ連・東欧・その他の地域のコンクールでは総じて強さを見せている。年毎の入賞占有率を見ても、2003 年に僅差で日本に上回られたものの、その年を除けば 2001 年から 2015 年までトップ

であり続け、特に 2007 年・2010 年・2011 年は一国で全体の 25%を超える数値をマーク、20%を超える年も 17 年中 8 回を数える。多くのロシア人若手ピアニストにとって恐らく最も重要なイベント、チャイコフスキーコンクールの開催された 2002 年・2007 年・2011 年・2015 年は前年の占有率から常に伸長し、上原彩子優勝の 2002 年は日本と僅差であるものの、それ以外の 3 回では 2 番手の国と 5%以上の大きな差がついていることも興味深い。しかし、2016 年に韓国に首位を明け渡し、2017 年も同じ構図が続く。ただ 2001-10 年と 2011-17 年を比較すれば占有率はほぼ横ばいであり、ロシア自身に要因があるというよりも、後述する韓国の急成長によるところが大きい。

人口 5000 万人に満たないウクライナは、全体 4 位につける。低調な年も散見されるが、2004 年・2006 年・2010 年は全体の 2 番目、2009・2011 年・2013 年は 3 番目の占有率を記録した。キエフで開催される若き音楽家のためのホロヴィッツ国際記念コンクールでの計 20 人にのぼる自国入賞者の存在も大きいですが、決してそこで積み重ねたポイントだけではない。各コンクールを個別に見れば入賞者の多寡はあるものの、地域によってあまり得意不得意がなく、世界中で満遍なく入賞を重ねる傾向が見られる。ただ、2014 年以降は若干低調気味と言える。14 年といえばロシアによるクリミア侵攻の年であり、政情不安も低迷の要因として考えられる。

南コーカサスの小国ジョージアは、全体の第 10 位であった。その人口（2016 年時点で約 372 万人）を考えると、国別の入賞者占有率 1.91%は驚異的な数字である。自国開催のトビリシ国際ピアノコンクールの開催年を見ると、2005 年・2013 年・2017 年には占有率を増しているが、2001・2009 年はその影響が見られない。特にイベリア半島で開催される種々のコンクールで入賞者が見られる他、3 つのリストコンクールでそれぞれ入賞者を出している。5 年単位で見ると 2006-10 年の低調を 2011-15 年で大きく挽回し、2001-10 年と 2011-17 年との比較では、占有率が 1.6 倍程度増加している。

次に東アジア地域について述べる。東アジアは、旧ソ連に続く全体の 3 割を超える占有率を誇り、韓国（第 2 位）・日本（第 3 位）・中国（第 5 位）がトップ 10 にランクインした。この 3 カ国はアジア躍進の象徴であり、コンクールでいうアジア人という呼称は大抵の場合この三国を指す。5 年毎の経過を見ると、2015 年までは 3 割未満であった地域別占有率が、韓国の躍進で 2016-17 年には 4 割を大きく超えている。ただ、2001-10 年と 2011-17 年との比較では、1.09 倍の微増にとどまる。後述する日本の低迷が大きく響いた形である。

華々しい成長を続ける**韓国**は、近年の国際ピアノコンクールでの主役とも言える国である。5年毎の経過では、2001-05年では8.78%に過ぎなかった占有率が、2011-15年には15.67%まで急増し、まだ2年だけのデータではあるが、2016-17年には20%を超える驚異的な水準となった。年毎では2009年に日本を抜くと、そのまま東アジアのトップを維持し続け、2016年にはついにロシアをも抜き、全体1位に躍り出た。2017年もその傾向は変わっていない。もともと、トータルでもトップ3までにランクインしていない年は2001年・2004年・2006年だけで、もともと強国の一角を占めていた国が更なる飛躍を遂げたと位置付けられる。

その要因の一つには、韓国のピアノ教育の成功が考えられる。2009年の第7回浜松国際ピアノコンクール開催時に一般社団法人全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）が行った、韓国国立芸術大教授カン・チュンモへのインタビュー¹⁴（以下、カンの発言は全てこのページから引用）によると、韓国では韓国国立芸術大の開設当時に赴任したカンに加え、キム・デジン、イム・チョンピル両教授の「3名の教授が、予備科から大学・大学院に至るまで、非常に有能な生徒を数年単位の長いスパンで教育できるシステム」を敷いており、生徒のレッスン内容・進度全てを記録しながら長期的に育成計画を立てるといふ。予備科には「非常に若い生徒でも、才能が認められれば」入学が認められている。またカンは、韓国人の民族性についても、

韓国のピアニスト、音楽家は、情熱的で感情の起伏が特に激しい、とは言えるでしょうね。また、韓国の人々は、民族的に、歌うことが本当に好きですし、音楽を特に好む国民の一つといえるでしょう。そして、「競争が好き」という一面はありますね（笑）。つい勝負に熱くなりすぎるところがあります。

と言及を加えており、その性質もコンクールで勝ち上がるに向いていると示唆している。

また国をあげてクラシック音楽家のレベルを上げることに努力してきた韓国の取り組みは、教育だけにとどまらないことを指摘したい。その最たるものが、ソウル国際音楽コンクールとイサンユン国際コンクールである。ソウルは1996年に創設され、ソウル市と韓国三大新聞の東亜日報が共同で運営し、ピアノ・ヴァイオリン・声楽の3部門が持ち回りで開催される。2009年にWFIMC加盟を果たし、アジア最高額の賞金を誇る自由曲中心のコンクールである。イサンユンは、国際的作曲家の尹伊桑を記念し、慶尚南道行政区とト

¹⁴ 浜コン：カン・チュンモ先生特別インタビュー、ファイナリスト3名を出した世界最高峰の教授に聞く。 http://www.piano.or.jp/report/04ess/ham/2009/11/21_9824.html, accessed on 11 August, 2018.

ンヨン市、MBC 慶南放送局が共同で運営を行う統営国際音楽祭の一環として開催されている。WFIMC には 2006 年に加盟し、ピアノ・ヴァイオリン・チェロの 3 部門が開催されており、イサンユンの作品が課せられる他は、自由曲コンクールの枠組みに近い。これら 2 つのコンクールは、2-14. で述べた通り、非常にホームアドバンテージが強く、韓国人の入賞割合がそれぞれ 5 割を超える。国際コンクールとして見れば国籍の偏りは好ましくないが、韓国出身者にとっては地元での足がかりを作ることや、WFIMC 加盟コンクール入賞という実績を引っ提げて他のコンクールに臨めるといったメリットがある。加えて専攻の異なる 3 部門が交互に開催されることで、毎年恒例の文化イベントとして定着に成功していることも、日本の諸コンクールとの違いである。

韓国の大躍進の影で、日本は 2009 年以降、低迷に苦しむ。2000 年代初頭はロシアに次ぐ 2 番手のポジションで、2003 年にはロシアを抑えてトップに立った一方、2004 年・2006 年は僅差でウクライナに譲って 3 番手になるものの、2008 年までこの構図が大きく変わることはなかった。ところが 2009 年に落ち込んでからは、個人では好成績を挙げる者がいるものの、全体では振るわない。2011 年・2014 年・2015 年は入賞占有率 5%を下回り、2001-10 年と 2010-17 年との比較では、11.6%から 6.9%と、4 割以上の減少を記録した。2016 年はやや持ち直したものの、入賞占有率一桁台が定位置となりつつある。コンクールの成果がその国の音楽文化のレベルの高さや価値を決定づけるとは思わないが、それまで優秀な成績を収めてきただけに、若手にとって厳しい時代が続くことは、日本のピアノ芸術の将来に悪影響があると筆者は考える。

低迷の原因は何か。例えば YouTube が公開された年は 2005 年であるが、その頃からインターネットを利用した手続きが非常に簡単になり、それまで申し込みを考えていなかった層に押しやられているという説はどうであろうか。確かに応募・移動の利便性向上によるコンクール申込数が増え、予備選考段階での競争が激しくなったことで、本大会に参加できる確率が減る傾向であることは十分に考えられる。後述するが、現に特別複数入賞者の数は世界的に見ても減ってきており、複数入賞者一人あたりの入賞コンクール数も減少している。しかし国籍ごとの入賞占有率の分布の変化は、一部西ヨーロッパ諸国・日本の退潮と、韓国の増加が目につく程度で、そのあおりを日本だけが受けていると主張することには無理があるであろう。ただ競争が激しくなれば、当然コンクールの水準は上がる。その環境下で日本のトップ層は変わらずに結果を出すことができているものの、あと一歩で入賞に届くレベルの層を他国と比較した時に、圧されてしまっていることは考え得る。

もう一つ、中村紘子に代表される識者が「日本人がコンクールで受け入れられにくくなったのは、豊かになりすぎてハングリー精神がなくなったため、新興国のように人生の逆転をかけて音楽を勉強できないからである」という説を唱えているが¹⁵、それも違うように思う。貧乏からのし上がり、成功を収めたシンデレラストoryは確かに存在するのであろうが、筆者のパリ留学時代やコンクールで遭遇した韓国人やロシア人留学生を見ても、基本的には経済的に余裕があるが故に音楽を続けることができるのであり、それを可能にする・あるいは不可能にする経済格差は、日本では考えられないほど大きいと感じた。ましてや近年の韓国経済の成長を考えても、かの国が発展途上国であるというには無理がある。説が正しいならば、経済の発展に伴って入賞数が減少しなければおかしい。現在の占有率トップ国を見れば、ハングリー性に欠けるといふ批判は、どの国にも大なり小なり当てはまるものであり、典型的な根性論でしかない。

外的要因で一つ有力なのは、我々がヨーロッパ人・旧ソ連系諸国出身の人々と分類するように、アジア外の国々から東アジア3カ国を見た場合、その中の違いは一見区別することが難しいということである。カン・チュンモが指摘するような理由で韓国の演奏家がコンクールで好かれるようになれば、その分日本出身者は割を食う可能性がある。東アジア全体では2001-10年と2011-17年とを比較した場合に、1.09倍の微増にとどまったのに対し、日韓の内訳が劇的に変化しているのもこの推論を裏付けるものである。

他にも韓国が自国開催の2コンクールで韓国人入賞者を数多く輩出しているのに対し、日本の浜松・仙台・高松の3コンクールにおいて日本人入賞がそれ程は多くない上、韓国勢も匹敵する割合であること、日本人が長年多数の入賞を果たしてきたポルト国際ピアノコンクールが2010年を最後に廃止になったことも、占有率逆転の理由として挙げられる。

素晴らしい音楽家はいつの時代にも現れ、素晴らしい音楽はいつの時代にも存在する。2000年代にコンクールに入賞したピアニストと、2010年代とを比べて日本人のレベルが上がっているとも下がっているとも思わない。しかし事実として入賞数の減少を受け入れ、対策を立てなければならない。後の章でも更にその要因について引き続き考察する。

もう一つの強国である中国については、やや浮き沈みはあるものの、基本的に5%前後をマークし、稀に高い占有率を記録する推移となっている。2001-10年までと2011-17年ま

¹⁵ 例えば、以下のインタビューにも見られる。Ms Wendy 261号 注目の人 ピアニスト/中村紘子さん <https://www.wendy-net.com/nw/person/261.html>, accessed on 29 September, 2018.

どとを比較しても、ほぼ横ばいである。ただ世界的な中国人ピアニストといえば、若い音楽家のためのチャイコフスキーコンクール出身のラン・ラン、仙台国際ピアノコンクールで3位に入賞しているユジャ・ワンが挙げられるが、2人ともメジャーコンクールの入賞を複数積み重ねてデビューした訳ではない。

旧ソ連、東アジアに次いで三番手につける地域は、非共産圏という意味合いでの西ヨーロッパである。2016-17年は明確に低調だが、2001-10年・2011-17年の比較をみても13%程度の減少にとどまる。西欧諸国はクラシックを勉強する学生がいなかったといったステレオタイプな言説をよく耳にするが、2014年・15年には占有率2割を上回り、中でも2015年は東アジアを抜いて2番手に浮上するなど、近年も存在感を見せている。ただトップ10にランクインした3カ国のうち、堅調なのはイタリア（第6位）のみで、フランス（第8位）・ドイツ（第9位）の退潮は否めない。

イタリアは2007年に入賞者を出せなかった空白年があるものの、10年代は低くても3-4%程度、高ければ6-7%程度で推移する。2005-10年間にやや低迷したが、2001-10年と2011-17年との比較では微増となり、西ヨーロッパ勢を牽引する国と言える。国際コンクールや音楽院の数が多く（加えてドイツに比べて留学需要が少ない）、中堅からWFIMC加盟のハイレベルなものまで、非常に充実していることもその要因の一つと考えられる。

フランスは年によって占有率の上下が激しい国である。近年は良い年が少なくなり、5年単位・10年単位で見ても入賞占有率の減少が見られる。筆者は2008-12年の間、国立パリ高等音楽院で学んだが、ブルーノ・リグット、ジョルジュ・ブルーデルマッハー、そして恩師のジャック・ルヴィエと、今まで時代を築いてきた教授陣が定年で次々と交代する時期に差し掛かり、それぞれの門下で、次は誰に師事できるのかという話で持ちきりであった。もちろん、トップレベルのフランス人全員があつた学校に集まるとは限らないが、そのような過渡期にあつたことも低調の要因として考えられる。退職した教授陣より若く、優秀な門弟を多数抱えていたミッシェル・ベロフはこの流れの例外で、チョ・ソンジンが2015年ショパンの優勝等、彼の指導の下、更に花開いたことも付け加えておきたい。

ドイツにも勢いは感じられず、ジリジリと下がり続けている。2001年は7.46%を記録していた占有率もそこがピークで、1%を切る年も散見される。5年毎の経過を見ると、2011-15年の集計ではベスト10から陥落しており、代わりにスペインがランクインした。2001-10と2011-17年との比較でも、後者はカナダに取って代わられている。ドイツは我が国のピアニストにとって最も人気のある留学先であるが、一部の州では無料であった大学教育

を非 EU の留学生に対して有料化するという話も聞こえてきており¹⁶、留学生の増加が、ドイツ人の機会減少につながっている可能性も考えられる。音楽の世界において、グローバル化は悪いことではないと筆者は信じているが、過度に進み、その国の内需を荒らし尽くしてしまうと分断を招くことは、昨今の移民問題においても明らかである。

最後に、他の地域圏についてまとめる。全体の 6.19%を占める**東ヨーロッパ**ではトップ 10 にランクインする国はなかったが、ポーランド、ルーマニアの健闘もあり、2001-10 年と 2011-17 年との比較では横ばいとなり、一定の勢力を保ち続けている。低調な年もあるが、2016 年は西ヨーロッパを抜き、初めて 3 番手につけた。**北アメリカ**地域にも好不調の波があるが、2001-10 年と 2011-17 年との比較を見れば約 1.7 倍の増となり、後者の入賞者占有率は東ヨーロッパを抜いて 4 番手に位置する。カナダの堅調については先述したが、フランス・ドイツを上回って 7 位にランクインした**アメリカ合衆国**も大いに力をつけ、単独で 1.5 倍増の伸びを示している。年単位で見ると 2012 年・2015 年には 3 位につけるが、10%を超える占有率をマークした年はまだない。多民族国家らしく、入賞者にはアジア系も多い。**オセアニア・中南米・東南アジア・アフリカ**については、地域における入賞国に限られるため、4-2. で述べたことと重複する。数値として小さい範囲の推移であるが、オセアニア地域は、2001-10 年と 2011-17 年との比較で入賞占有率が半減した。中南米は増加に転じているものの、アルゲリッチやフレイレと言った大物が次々に現れた時代には遠い。東南アジア・アフリカについては、学習に必要なインフラと今後の芸術への投資の如何によって、大きく結果が変わるに違いない。

5. 特別複数入賞者のデータと男女比

5-1. データと男女比

先述の通り本論文では、WFIMC 加盟・準 WFIMC のコンクールにおいて、1 位を獲得し、他コンクールの入賞がある、または 2 位・3 位の上位入賞を 2 回以上成し遂げている、の条件どちらか、または両方を満たす者を**特別複数入賞者**と呼称している。ここではまず、これまで詳説してきたコンクールの結果を、AAF のサイトや各コンクールの公式ペ

¹⁶ Spiegel Online “Baden-Württemberg Regierung beschließt Gebühren - aber nur für internationale Studenten”, <http://www.spiegel.de/lebenundlernen/uni/baden-wuerttemberg-regierung-beschliesst-gebuehren-fuer-internationale-studenten-a-1118189.html>, accessed on 30 September, 2018.

ージ¹⁷ より再び取りまとめ、2001-17年の間に WFIMC・準 WFIMC コンクールで入賞キャリアをスタートさせ、特別複数入賞者に該当する条件のコンテストについて調査し、性別・年齢の情報を可能な限りアーティスト本人の公式ホームページ等から得て、次頁からの表にまとめた。全てネット上に公開されている情報ではあるが、入賞者の名前は分析において不要であるので、伏せて掲載する。

¹⁷ AAF のサイトでは <https://www.alink-argerich.org/results> の結果データベースより開催地やコンクール名を検索した。また各コンクールのページについては参考 web サイトとして巻末にまとめた。

性	生年	国籍	入賞コンクール名1	位年	入賞コンクール名2	位年	入賞コンクール名3	位年	入賞コンクール名4	位年	入賞コンクール名5	位年	入賞コンクール名6	位年	入賞コンクール名7	位年	入賞コンクール名8	位年	入賞コンクール名9	位年										
37	男	1978	ロシア	ジュネーブ(2002)	1	24	ゲザ・アング(2006)	1	28																					
38	女	不明	日本	ジュネーブ(2002)	2		シューマン(2004)	1																						
39	男	不明	アメリカ合衆国	パッサ(2002)	3		フンメル(2005)	1		リーズ(2006)	2																			
40	男	1979	ドイツ	パッサ(2002)	5	23	クララハスキル(2003)	F	24	カサグランデ(2004)	1	25	ロンドン(2005)	1	26	ウーレン・ベーター・ヴェン(2005)	1	26	サンタンデール(2005)	2	26									
41	男	1979	イタリア	ロンドン(2002)	2	23	マイリンド(2002)	1	23	ロンティボー(2004)	2	25	サンタンデール(2005)	1	26	TOW(2011)	1	32												
42	男	1983	ウクライナ	チャイコフスキー(2002)	2	19	ヴィアンナ・ダ・モッタ(2007)	2	24	シドニー(2012)	3	29																		
43	男	1977	カナダ	オルレアン(2002)	1	25	ホーンズ(2003)	2	26																					
44	男	1984	イスラエル	サンタンデール(2002)	2	18	ルービンシュタイン(2011)	2	27	エリザベート王妃(2013)	1	29																		
45	男	1976	アメリカ合衆国	サンタンデール(2002)	3	26	カベル(2003)	1	27																					
46	男	1982	韓国	カサグランデ(2002)	2	20	イサンユン(2008)	4	26	クリーヴランド(2009)	3	27																		
47	女	1974	ロシア	ホセ・イトウルビ(2002)	2	28	ブゾーニ(2003)	2	29																					
48	男	1978	ドイツ	ホセ・イトウルビ(2002)	2	24	エリザベート王妃(2003)	1	25																					
49	女	1986	韓国	ヴィオッティ(2002)	1	16	ルービンシュタイン(2005)	3	19	ヴァン・クライバーン(2009)	2	23	チャイコフスキー(2011)	2	25															
50	女	1976	ロシア	ルイスシガール(2002)	1	26	ヴィアンナ・ダ・モッタ(2004)	2	28																					
51	男	1982	日本	マイリンド(2002)	2	20	クリーヴランド(2003)	1	21	サンタンデール(2008)	3	26	ジーナ・パッカウワー(2010)	5	28	BNDES(2010)	2	28	ルービンシュタイン(2011)	6	29									
52	女	1983	ロシア	ハエン賞(2002)	1	19	ブゾーニ(2005) (S)	4	22	エリザベート王妃(2007)	1	24																		
53	女	1983	ウクライナ	ハエン賞(2002)	2	19	ブゾーニ(2007)	3	24	ヴィアンナ・ダ・モッタ(2010)	1	27																		
54	男	1981	イスラエル	リナ・サラ・ガロ(2002)	2	21	ヴィオッティ(2005)	3	24																					
55	女	1975	ロシア	リナ・サラ・ガロ(2002)	3	27	ポルト(2003)	2	28																					
56	女	不明	ウクライナ	マリア・カナルス(2003)	1		ポルト(2004)	2		ハエン賞(2006)	1		ヴィアンナ・ダ・モッタ(2007)	5		ルービンシュタイン(2008) (S)	6													
57	男	1986	中国	エリザベート王妃(2003)	2	17	ブゾーニ(2005)	6	19	香港(2005)	2	19	シンセン(2006)	3	20															
58	男	1981	ロシア	エネスク(2003)	3	22	ポルト(2005)	1	24	ホーンズ(2009)	2	28	チュルリョーニス(2011)	1	30	ティミス(2013)	1	32	ハエン賞(2013)	F	32	ハチャトゥリアン(2014)	2	33	TOW(2015)	3	34			
59	男	1981	ロシア	クリーヴランド(2003)	3	22	UNISA(2004)	2	23																					
60	女	1975	日本	シューベルト(2003)	3	28	ヴィオッティ(2005)	2	30																					
61	男	1979	フィンランド	ダブリン(2003)	1	24	リーズ(2003)	1	24																					
62	男	1978	韓国	エビナル(2003)	1	25	香港(2005)	3	27	リーズ(2006)	5	28																		
63	男	1986	フランス	エビナル(2003)	2	17	ホセ・イトウルビ(2004)	2	18	ロンティボー(2004)	3	18	ロンドン(2005)	2	19															
64	男	1981	イギリス	エビナル(2003)	3	22	スコットランド(2007)	1	26																					
65	男	1985	日本	エビナル(2003)	4	18	中国(2007)	6	22	ユトレヒト・リスト(2011)	1	26																		
66	男	1985	ポーランド	浜松(2003)	2	18	ショパ(2005)	1	20																					
67	男	1980	ロシア	浜松(2003)	2	23	ヴァン・クライバーン(2005)	1	25																					
68	男	1977	日本	ポルト(2003)	1	26	プロコフィエフ(2004)	F	27	ジュネーブ(2006)	3	29																		
69	男	1986	韓国	ポルト(2003)	3	17	ウーレン・ベーター・ヴェン(2009)	3	23																					
70	女	1979	日本	ヴィオッティ(2003)	F	24	シューマン(2004)	F	25	ポルト(2007)	3	28	シューマン(2008)	2	29															
71	女	1976	エストニア	チュルリョーニス(2003)	2	27	ハエン賞(2004)	1	28	エビナル(2005)	2	29	エネスク(2005)	1	29	ジュネーブ(2005)	3	29	カサグランデ(2006)	1	30	パッサ(2006)	1	30	マイリンド(2007)	6	31	ルービンシュタイン(2008) (S)	5	32
72	男	1978	ロシア	ゲザアング(2003)	2	25	クリーヴランド(2005)	2	27	浜松(2006)	2	28																		
73	女	不明	ウクライナ	EPTA(2003)	1		ハエン賞(2003)	3																						

性	生年	国籍	入賞コンクール名1	位年	入賞コンクール名2	位年	入賞コンクール名3	位年	入賞コンクール名4	位年	入賞コンクール名5	位年	入賞コンクール名6	位年	入賞コンクール名7	位年	入賞コンクール名8	位年	入賞コンクール名9	位年							
109	女	1983	フランス	マリア・カナルス(2006)	2	23	メシアン(2007)	2	24																		
110	男	1983	ロシア	ブダベスト(2006)	1	23	浜松(2009)	2	26	イザンユン(2010)	3	27	香港(2011)	5	28	ゲザアンダ(2012)	3	29									
111	男	1981	ドイツ	ジーナ・バックウワー(2006)	4	25	ホーンズ(2006)	2	25	ボン・ベートーヴェン(2009)	1	28															
112	女	1985	ロシア	ジュネーヴ(2006)	2-2	21	パデレフスキ(2007)	2	22	ショパン(2010)	1	25															
113	男	1988	ウクライナ	浜松(2006)	1	18	ソウル(2008)	2	20	ダブリン(2009)	1	21	リーズ(2009)	2	21	ARD(2011)	1	23									
114	男	1991	日本	浜松(2006)	3	15	シドニー(2008)	5	17	リーズ(2015)	5	24	ボン・ベートーヴェン(2017)	2	26												
115	男	1990	中国	浜松(2006)	5	16	UNISA(2008)	3	18	ハエン賞(2017)	1	27															
116	男	1986	ロシア	リーズ(2006)	3	20	エリザベト王妃(2010)	1	24																		
117	女	1983	ロシア	パッサ(2006)	2	23	EPTA(2011)	3	28	ブラハの春(2011)	3	28	ゲザアンダ(2012)	3	29												
118	女	1980	台湾	パッサ(2006)	4	26	ポルト(2008)	1	28																		
119	男	1982	ロシア	カザグランド(2006)	2	24	ボン・ベートーヴェン(2007)	3	25																		
120	男	1981	スペイン	ホセ・イトウルビ(2006)	1	25	エネスク(2014)	1	33																		
121	男	1986	ロシア	ホセ・イトウルビ(2006)	3	20	ホセ・イトウルビ(2010)	1	24																		
122	女	1986	ロシア	ワイマール・リスト(2006)	1	20	ハエン賞(2008)	2	22	マリア・カナルス(2010)	2	24	ユトレヒト・リスト(2011)	2	25												
123	男	1987	ロシア	ワイマール・リスト(2006)	3	19	ユトレヒト・リスト(2008)	1	21	リーズ(2015)	3	28															
124	男	1982	ウズベキスタン	リナ・サラ・ガロ(2006)	1	24	ブゾーニ(2009)	1	27																		
125	女	1979	ロシア	高松(2006)	F	27	リナ・サラ・ガロ(2006)	1	27	マイリンダ(2007)	1	28	ウィリアム・カベル(2007)	1	28	ブゾーニ(2007)	2	28	ロンティボー(2007)	3	28	イザンユン(2008)	1	29	リーズ(2009)	1	30
126	女	1988	中国	シンセン(2006)	1	18	ジーナ・バックウワー(2010)	6	22	エリザベト王妃(2013)	5	25															
127	男	1990	中国	高松(2006)	3	16	エビナル(2009)	2	19																		
128	男	1982	セルビア	マリア・カナルス(2007)	1	25	ハエン賞(2010)	1	28	シンセン(2011)	2	29															
129	女	1989	ウクライナ	ブゾーニ(2007)	2	18	トビジシ(2009)	2	20	パデレフスキ(2013)	2	24	BNDES(2014)	3	25	クリーヴランド(2016)	3	27									
130	女	1978	クロアチア	ブゾーニ(2007) (S)	5	29	ヴィオッチェ(2007)	1	29	UNISA(2008)	5	30	マリア・カナルス(2008)	1	30	クリーヴランド(2009)	1	31									
131	男	1985	アメリカ合衆国	エネスク(2007)	3	22	オルレアン(2010)	1	25	カザグランド(2010)	3	25															
132	男	1983	イスラエル	クリーヴランド(2007)	2	24	TOW(2011)	3	28																		
133	女	1987	アメリカ合衆国	ウィリアム・カベル(2007)	2	20	モントリオール(2008)	F	21	ソウル(2014)	5	27	ルービンシュタイン(2017)	3	30												
134	男	1983	日本	シューベルト(2007)	1	24	シドニー(2008)	4	25	浜松(2012)	3	29															
135	女	1982	韓国	エビナル(2007)	2	25	ホセ・イトウルビ(2008)	2	26	ウィーン・ベートーヴェン(2013) (S)	6	31															
136	女	1985	韓国	エビナル(2007)	2	22	ジュネーヴ(2010)	2	25																		
137	男	1990	リトアニア	スコットランド(2007)	2	17	ジーナ・バックウワー(2010)	1	20	ショパン(2010)	2	20	チャイコフスキー(2015)	2	25												
138	女	1982	ロシア	マイリンダ(2007)	3	25	スコットランド(2007)	4	25	エネスク(2009)	2	27	パデレフスキ(2013)	F	31												
139	男	1983	日本	ハエン賞(2007)	3	24	若き音楽家(2009)	F	26	マリア・カラス(2010)	2	27	マリア・カナルス(2013)	2	30	ホセ・イトウルビ(2013)	1	30									
140	男	1988	ウクライナ	ホロヴィッツ(2007)	3	19	ワイマール・リスト(2009)	2	21	ユトレヒト・リスト(2011)	3	23															
141	男	1977	韓国	ヴィアンナ・ダ・モッタ(2007)	2	30	ボン・ベートーヴェン(2007)	1	30																		
142	男	1990	韓国	ロンティボー(2007)	2	17	シューベルト(2016)	2	26	ホロヴィッツ(2017)	1	27															
143	女	1987	ウクライナ	仙台(2007)	3	20	ブゾーニ(2009) (S)	4	22	スコットランド(2010)	1	23	エビナル(2015)	4	28	シドニー(2016)	5	29									
144	男	1990	中国	中園(2007)	1	17	ヴァン・クライバーン(2009)	1	19																		

性	生年	国籍	入賞コンクール名1	位年	入賞コンクール名2	位年	入賞コンクール名3	位年	入賞コンクール名4	位年	入賞コンクール名5	位年	入賞コンクール名6	位年	入賞コンクール名7	位年	入賞コンクール名8	位年	入賞コンクール名9	位年										
145	男	1989	ロシア	パデレフスキ(2007)	1	18	ヴァン・クライバーン(2013)	F	24	クリーヴランド(2016)	1	27																		
146	女	1982	スペイン	パデレフスキ(2007)	3	25	ソウル(2008)	6	26	ホセ・イトウルビ(2008)	3	26	高松(2010)	6	28	仙台(2010)	3	28	ハエン賞(2011)	1	29									
147	男	1988	ロシア	EPTA(2007)	2	19	ホーンズ(2009)	1	21	TOW(2015)	1	27	クリーヴランド(2016)	4	28	ヴァン・クライバーン(2017)	F	29												
148	女	1987	ロシア	マリア・カラス(2008)	3	21	シンセン(2011)	1	24	ブゾーニ(2013)	5	26																		
149	男	1987	ロシア	マリア・カナルス(2008)	2	21	ホセ・イトウルビ(2013)	2	26	スコットランド(2014)	2	27	ヴィオッティ(2015)	1	28															
150	女	1988	日本	マリア・カナルス(2008)	3	20	高松(2010)	2	22																					
151	男	1984	オランダ	ジュネーブ(2008)	2-1	24	エリザベート王妃(2010)	3	26																					
152	男	1990	中国	ジュネーブ(2008)	2-2	18	リナ・サラ・ガッロ(2010)	3	20																					
153	男	1986	セルビア	ハエン賞(2008)	3	22	ヴィオッティ(2009)	2	23																					
154	女	1987	ベルギー	ボルト(2008)	2	21	EPTA(2011)	3	24																					
155	女	不明	アメリカ合衆国	UNISA(2008)	4		プロコフィエフ(2013)	2		ジュネーブ(2014)	2																			
156	男	1987	カナダ	サンタンデール(2008)	2	21	シドニー(2012)	1	25																					
157	男	1984	ブルガリア	カサグランデ(2008)	1	24	ヴァン・クライバーン(2009)	F	25	エリザベート王妃(2010)	2	26	ショパル(2010)	4	26															
158	男	不明	アメリカ合衆国	イサンユン(2008)	5		ソウル(2011)	5		オルレアン(2012)	1																			
159	女	1988	ロシア	シューマン(2008)	F	20	エドナル(2009)	1	21																					
160	男	1990	韓国	香港(2008)	2	18	ダブリン(2009)	2	19	ホーンズ(2012)	F	22	TOW(2015)	2	25															
161	男	1983	ウクライナ	RNOM(2008)	2	25	BNDES(2009)	2	26																					
162	男	1980	ロシア	リナ・サラ・ガッロ(2008)	1	28	バッハ(2010)	1	30	エネスク(2011)	3	31																		
163	男	1990	韓国	マリア・カナルス(2009)	2	19	ソウル(2014)	2	24																					
164	男	1987	イタリア	マリア・カナルス(2009)	3	22	トリジシ(2009)	5	22	ハエン賞(2010)	2	23	ボルト(2010)	2	23	EPTA(2011)	1	24	リナ・サラ・ガッロ(2012)	1	25	ホセ・イトウルビ(2015)	6	28						
165	男	1980	ロシア	ブゾーニ(2009)	2	29	ホセ・イトウルビ(2010)	3	30	マリア・カナルス(2011)	2	31	ヴィオッティ(2011)	1	31															
166	男	1986	韓国	エネスク(2009)	3	23	ロン・ティボー(2012)	2	26																					
167	男	1980	ウクライナ	クリーヴランド(2009)	2	29	ジーナ・バッカウワー(2010)	3	30	中国(2010)	1	30																		
168	女	1987	韓国	ダブリン(2009)	3	22	浜松(2009)	6	22	香港(2011)	4	24	マリア・カナルス(2012)	1	25	ボン・ベーター・ヴェン(2013)	1	26												
169	男	1994	韓国	浜松(2009)	1	15	チャイコフスキー(2011)	3	17	ルーベンシュタイン(2014)	3	20	ショパル(2015)	1	21															
170	男	1986	韓国	浜松(2009)	3	23	サンタンデール(2015)	2	29																					
171	男	1985	フランス	クララ・ハスキル(2009)	F	24	浜松(2009)	4	24	ショパル(2010)	5	25	TOW(2013)	2	28	クリーヴランド(2013)	3	28												
172	男	1991	韓国	浜松(2009)	5	18	パデレフスキ(2010)	2	19	ソウル(2011)	4	20	仙台(2016)	1	25															
173	男	1988	ウクライナ	ハエン賞(2009)	1	21	ブゾーニ(2011)	2	23	ルーベンシュタイン(2014)	1	26																		
174	男	1982	日本	ハエン賞(2009)	2	27	マイリンド(2012)	F	30	ボン・ベーター・ヴェン(2013)	3	31																		
175	男	1983	イタリア	ロンドン(2009)	2	26	リーズ(2009)	3	26	ブゾーニ(2011) (S)	5	28																		
176	男	1986	中国	リーズ(2009)	6	23	スコットランド(2014)	3	28	サンタンデール(2015)	3	29	シドニー(2016)	6	30															
177	男	不明	中国	ロン・ティボー(2009)	4		ジーナ・バッカウワー(2010)	4		イサンユン(2010)	1		ソウル(2011)	6																
178	男	1981	ドイツ	ウーレン・ベーター・ヴェン(2009)	1	28	クリーヴランド(2011)	1	30																					
179	男	1992	韓国	ウーレン・ベーター・ヴェン(2009)	3	17	シューベルト(2011)	2	19	シンセン(2011)	F	19	ボン・ベーター・ヴェン(2011)	2	19	中国(2013)	4	21	ソウル(2014)	1	22	ジーナ・バッカウワー(2014)	2	22	ARD(2014)	2	22	エリザベート王妃(2018)	4	24

性	生年	国籍	入賞コンクール名1	位年	入賞コンクール名2	位年	入賞コンクール名3	位年	入賞コンクール名4	位年	入賞コンクール名5	位年	入賞コンクール名6	位年	入賞コンクール名7	位年	入賞コンクール名8	位年	入賞コンクール名9	位年
180	女	1994	中国	ワイマール・リスト(2009)	3	15	香港(2016)	5	22	シンセン(2017)	2	23								
181	女	1983	日本	TOW(2009)	2	26	ケルン(2011)	1	28											
182	男	1991	ロシア	パデレフスキ(2010)	3	19	マイリンド(2012)	1	21	プロコフィエフ(2013)	1	22	チャイコフスキー(2015)	3	24					
183	男	1989	ロシア	スコットランド(2010)	3	21	ホーンズ(2012)	1	23											
184	男	1991	ウクライナ	ホロヴィッツ(2010)	4	19	ホセ・イトウルビ(2015)	1	24	香港(2016)	1	25	スコットランド(2017)	3	27					
185	男	1981	ロシア	パツハ(2010)	2	29	ハチャトゥリアン(2014)	3	33											
186	男	1988	ポーランド	リナ・サラ・ガッロ(2010)	1	22	マリア・カナルス(2011)	1	23	エリザベート王妃(2013)	3	25								
187	男	1987	日本	仙台(2010)	3	23	マリア・カナルス(2016)	1	29											
188	女	1983	韓国	仙台(2010)	5	27	ホセ・イトウルビ(2010) (S)	5	27	モントリオール(2011)	F	28	パデレフスキ(2013)	1	30					
189	男	1991	ロシア	ショパン(2010)	3	19	ルービンシュタイン(2011)	1	20	チャイコフスキー(2011)	1	20								
190	女	1986	ロシア	中国(2010)	2	24	ブゾーニ(2011)	2	25											
191	男	1986	ハンガリー	RNSM(2010)	2	24	モントリオール(2017)	1	31											
192	男	1986	ブラジル	RNSM(2010)	3	24	ゲザ・アンダ(2015)	3	29											
193	男	1988	ブラジル	BND&S(2010)	1	22	シンセン(2017)	3	29											
194	男	1985	ロシア	高松(2010)	5	25	ケルン(2014)	1	29	オーケストラ・シオン(2017)	2	32								
195	男	1993	韓国	ブゾーニ(2011) (S)	4	18	ブゾーニ(2015) (S)	4	22	イサンユン(2016)	2	23	ユトレヒト・リスト(2017)	2	24					
196	男	1993	フランス	ボン・ベート・ヴェン(2011)	3	18	エリザベート王妃(2013)	2	20											
197	男	1991	韓国	エネスク(2011)	2	20	イサンユン(2013)	3	22	ソウル(2014)	4	23	ARD(2017)	1	26					
198	男	1991	イギリス	ブダベスト・リスト(2011)	1	20	モントリオール(2014)	F	23	ユトレヒト・リスト(2011)	1	23								
199	男	1988	ロシア	ブダベスト・リスト(2011)	2	23	ワイマール・リスト(2011)	3	23	トビリシ(2013)	GP	25								
200	男	1993	ロシア	ブダベスト・リスト(2011)	F	18	マリア・カナルス(2014)	2	21	ブダベスト・リスト(2016)	2	23								
201	男	1992	ジョージア	ブダベスト・リスト(2011)	F	19	ハエン賞(2013)	3	21											
202	男	1990	ベルギー	ケルン(2011)	3	21	シューマン(2012)	2	22											
203	女	1984	韓国	シュベルト(2011)	3	27	サンタンデール(2012)	2	28											
204	男	1987	ロシア	エピナル(2011)	2	24	香港(2016)	3	29											
205	女	1991	ロシア	ハエン賞(2011)	2	20	フンメル(2017)	3	26											
206	女	1988	イタリア	ハエン賞(2011)	3	23	ホセ・イトウルビ(2015)	2	27											
207	女	1993	イタリア	モントリオール(2011)	1	18	ヴァン・クライバーン(2013)	2	20											
208	男	1987	カナダ	モントリオール(2011)	3	24	ホーンズ(2015)	F	28	エリザベート王妃(2016)	2	29								
209	男	1988	イタリア	モーツァルト(2011)	1	23	リーズ(2012)	1	24											
210	男	1988	アメリカ合衆国	ソウル(2011)	2	23	ヴァン・クライバーン(2013)	2	25											
211	男	1994	ウクライナ	ヴィオッティ(2011)	2	17	トビリシ(2013)	2	19											
212	男	1988	ウクライナ	ヴィオッティ(2011)	3	23	仙台(2013)	3	25	ジーナ・バックカウワー(2014)	3	26	ホーンズ(2015)	F	27	TOW(2017)	3	29		
213	男	1989	中国	クララ・ハスキル(2011)	1	22	シューマン(2016)	2	27											
214	男	1991	中国	クララ・ハスキル(2011)	F	20	カサグランデ(2014)	1	23											

性	生年	国籍	入賞コンクール名1	位年	入賞コンクール名2	位年	入賞コンクール名3	位年	入賞コンクール名4	位年	入賞コンクール名5	位年	入賞コンクール名6	位年	入賞コンクール名7	位年	入賞コンクール名8	位年	入賞コンクール名9	位年
215	女	1984	リトアニア	ティミス(2011)	1	27	チュルリョーニス(2011)	F	27											
216	男	1987	ロシア	EPTA(2011)	2	24	ウィーン・ベーターヴェン(2013)	2	26	ジーナ・バツカウワー(2014)	1	27	シドニー(2016)	29						
217	男	1992	台湾	香港(2011)	6	19	中国(2013)	1	21											
218	男	1991	ギリシャ	ティミス(2011)	2	20	マリア・カラス(2015)	2	24											
219	男	1984	アルメニア	TOW(2011)	2	27	エピナル(2013)	2	29											
220	女	1987	日本	マリア・カナルス(2012)	2	25	浜松(2012)	2	25											
221	女	1982	ロシア	ホーンズ(2012)	F	30	ウィーン・ベーターヴェン(2013)	1	31	ブゾーニ(2013)	5	31	ルービンシュタイン(2014)	F	32	マリア・カラス(2015)	2	33		
222	男	1989	韓国	ウィリアム・カベル(2012)	1	23	仙台(2013)	1	24	ヴァン・クライバーン(2017)	1	28								
223	男	1989	アメリカ合衆国	ウィリアム・カベル(2012)	3	23	ルービンシュタイン(2014)	2	25											
224	男	1992	ロシア	ダブリン(2012)	1	20	シドニー(2012)	2	20											
225	男	1990	中国	ダブリン(2012)	2	22	リーズ(2012)	3	22	クリーヴランド(2013)	4	23								
226	男	1988	アメリカ合衆国	ダブリン(2012)	4	24	ダブリン(2015)	2	27	ヴィオッティ(2015)	2	27	ウィーン・ベーターヴェン(2017) (S)	5	29					
227	女	1990	ロシア	浜松(2012)	4	22	高松(2014)	4	24	リーズ(2015)	1	25								
228	男	1995	中国	ハエン賞(2012)	1	17	マリア・カナルス(2016)	3	21											
229	男	1986	スペイン	ハエン賞(2012)	3	26	フンメル(2014)	3	28	ティミス(2015)	2	29								
230	男	1991	ウクライナ	ホロヴィッツ(2012)	6	21	EPTA(2014)	F	23	ティミス(2015)	1	24	マリア・カナルス(2015)	1	24					
231	男	1986	アメリカ合衆国	リーズ(2012)	5	26	エリザベート王妃(2013)	6	27	ゲザ・アンダ(2015)	1	29								
232	女	1992	ブルガリア	RNCM(2012)	2	20	エネスク(2016)	1	24											
233	男	1988	韓国	ロン・ティボ(2012)	2	24	ブゾーニ(2017)	2	29											
234	男	1986	チェコ	UNISA(2012)	1	26	TOW(2013)	2	27	エリザベート王妃(2016)	1	30								
235	女	1987	韓国	UNISA(2012)	2	25	マリア・カナルス(2013)	3	26	ソウル(2014)	6	27	リーズ(2015)	2	28					
236	男	1989	クロアチア	シューマン(2012)	1	23	EPTA(2014)	3	25	エリザベート王妃(2016)	5	27								
237	男	1993	イタリア	シューマン(2012)	3	19	ホーンズ(2015)	1	22											
238	男	1991	イタリア	ブゾーニ(2013)	2	22	ウィーン・ベーターヴェン(2017)	1	26											
239	男	1988	日本	ブゾーニ(2013)	3	25	ハエン賞(2014)	1	26	サンタンデール(2015)	F	27								
240	男	1992	ロシア	ブゾーニ(2013)	3	21	BNDES(2014)	2	22	ショパン(2015)	6	23	TOW(2017)	1	25					
241	男	1993	ロシア	クリーヴランド(2013)	2	20	シドニー(2016)	2	23											
242	女	1988	韓国	エピナル(2013)	2	25	香港(2016)	6	28	ソウル(2017)	6	29								
243	男	1993	日本	ヴァン・クライバーン(2013)	F	20	ブダペスト・リスト(2016)	1	23											
244	男	1990	韓国	仙台(2013)	2	23	イサンユン(2016)	1	26	ウィーン・ベーターヴェン(2017) (S)	4	27								
245	男	1991	韓国	イサンユン(2013)	1	22	中国(2013)	3	22	ジュネーヴ(2014)	3	23								
246	男	1993	フランス	ヴィオッティ(2013)	1	20	スコットランド(2014)	1	21											
247	男	1989	ロシア	ヴィオッティ(2013)	3	24	RNSM(2014)	1	25	ハエン賞(2016)	1	27	リナ・サラ・ガッロ(2016)	1	27					
248	男	1988	ロシア	ヴィオッティ(2013)	3	25	カザグランデ(2014)	3	26	ルイス・シガール(2014)	1	26	ハエン賞(2015)	2	27	ワイマール・リスト(2015)	1	27		
249	男	1987	中国	中國(2013)	2	26	シンセン(2014)	3	27											

性	生年	国籍	入賞コンクール名1	位年	入賞コンクール名2	位年	入賞コンクール名3	位年	入賞コンクール名4	位年	入賞コンクール名5	位年	入賞コンクール名6	位年	入賞コンクール名7	位年	入賞コンクール名8	位年	入賞コンクール名9	位年
250	男	ロシア	ティミス(2013)	3 26	ザザ・アング(2015)	2 28														
251	男	ベラルーシ	若き音楽家(2014)	1 24	ホセ・イトウルビ(2017)	4 27														
252	男	オーストリア	ケルン(2014)	1 21	UNISA (2016)	2 23														
253	女	韓国	高松(2014)	1 19	ジュネーヴ(2014)	1 19	ブゾーニ(2015)	1 20												
254	男	イタリア	RNCM(2014)	2 23	モントリオール(2017)	2 26														
255	男	カナダ	ソウル(2014)	3 25	モントリオール(2014)	2 25	ショパン(2015)	2 26												
256	男	ルーマニア	ARD(2014)	3 25	浜松(2015)	4 26	RNCM(2016)	2 27	スコットランド(2017)	3 28										
257	女	ロシア	BNDES(2014)	1 25	ロン・ティボー(2015)	6 26														
258	男	イタリア	ブゾーニ(2015)	2 19	エリザベート王妃(2016)	6 20	クララ・ハスキル(2017)	F 21	ボン・ペーターヴェン(2017)	1 21										
259	男	ウクライナ	ブゾーニ(2015)	3 22	浜松(2015)	2 22														
260	男	中国	ブゾーニ(2015) (S)	5 18	ウィーン・ペーターヴェン(2017)	3 20	TOW (2017)	2 20												
261	男	アメリカ合衆国	ダブリン(2015)	3 21	エリザベート王妃(2015)	3 21														
262	男	フランス	エピナル(2015)	1 23	クララ・ハスキル(2015)	F 23														
263	男	アメリカ合衆国	浜松(2015)	3 18	ヴァン・クライバーン(2015)	3 18														
264	女	カナダ	ハエン賞(2015)	1 17	マリア・カナルス(2017)	3 19	トビシ(2017)	3 19												
265	男	韓国	サンタンデル(2015)	F 19	ブラハの春(2016)	1 20	モントリオール(2017)	F 21												
266	女	ロシア	ワイマル・リスト(2015)	2 21	パデレフスキ(2016)	F 22	ユトレヒト・リスト(2017)	3 23												
267	女	ロシア	オーケストラシオン(2015)	2 29	ティミス(2017)	3 31														
268	女	日本	マリア・カナルス(2016)	2 21	ヴィオッティ(2017)	2 22														
269	男	ドイツ	ブダペスト・リスト(2016)	3 24	ハエン賞(2017)	3 25														
270	男	ルーマニア	UNISA (2016)	1 25	BNDES(2016)	1 25	ルービンシュタイン(2017)	2 26												
271	女	ポーランド	モーツァルト(2018)	3 24	イザンユン(2016)	3 24														
272	男	韓国	仙台(2016)	5 22	ソウル(2017)	1 23														
273	男	アメリカ合衆国	シドニー(2016)	4 23	ヴァン・クライバーン(2016)	2 23														
274	男	中国	ティミス(2017)	1 21	シンセン(2017)	F 21														

入賞の数が演奏家としての素晴らしさに比例するわけではないが、特別複数入賞者の基準を満たす者は、運やまぐれではなくコンクールでキャリアを作り上げた、ある程度実力が保証されているピアニストであると言える。この17年間で条件に当てはまったのは世界で274人。ただ、対象とした入賞期間を2001-17年（過去の入賞については2000年から）に限定していることには留意されたい。もし表中に1999年以前の入賞を果たした者がいれば、本来はその年からの入賞キャリアスタートとなるが、調査の限界があった。2001年や02年からキャリアスタートした特別複数入賞者が多いのはそのせいである。また1999年以前に入賞歴があり、2001年以降にもう1つ入賞して条件を満たしたケースについてもカウントできない。加えて、これからの入賞についても未知数である。WFIMCの指針で年齢制限は15-35歳までと推奨されているため、仮に15歳で初入賞し35歳で2回目の入賞を果たすことも有りうると考えれば、真にデータが確定するのは、コンクール開催後20年程度待つ必要がある。ただある程度の期間を設定し、多くの母数を集計すれば誤差は小さくなるため、これらの可能性について深刻に考慮する必要はないと考える。

まず目につくのは、年数の偏りが見られることである。下表は特別複数入賞者を、キャリアスタート年別に集計し、全体の入賞数の参考に入賞ポイントの年毎の合計を記した

特別複数入賞者年別集計表

年	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
人数	34	21	21	14	18	19	20	15	19	13
ポイント合計	1247	1028	1124	1048	1307	1116	1410	1064	1117	1176

年	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
人数	25	18	13	7	10	6	1
ポイント合計	1430	998	1104	1188	1163	1034	1231

ものである。特に2010年代後半に人数が少なくなっているが、まだ新しい入賞が増えて数に変動する可能性があるため、この情報だけでは単純比較することはできない。ただ下表の通り、2011年以降のキャリアスタート者は6つ以上の入賞を果たした例はない。5入

特別複数入賞者のWFIMC、準WFIMCコンクールの入賞回数

	2入賞	3入賞	4入賞	5入賞	6入賞	7入賞	8入賞	9入賞
2001-2010年	194	123	66	35	19	13	5	2
2011-2017年	80	35	12	3	0	0	0	0
合計	274	158	78	38	19	13	5	2

賞は全体で3名、4入賞は12名、3入賞も35名にとどまる。未来のことは予測不能であるものの、WFIMCのような高いレベルのコンクールで、1人が多数の賞を独占する時代は終わったと見るべきである。

次に、特別複数入賞者を性別で集計したところ、男性が女性を圧倒する結果となった。

特別複数入賞者男女別集計

	2001-2010	2011-2017	合計
男	139	62	201
女	55	18	73

全体の割合を計算すると、男性が約 72%、女性が約 28%となる。2011 年以降はさらに女性の割合が減少し、男性 77.5%女性 22.5%にまで開く。この極端な割合の原因は何であるか。WFIMC 加盟コンクールではその多くが 1 週間から 10 日間、長いものでは 1 ヶ月近くを掛け連続して審査を行うため、短い期間で大量の作品を準備する必要があり、フィジカル差が大きく働くことによって男性優位の結果が出やすいというのが、筆者の仮説である。ピアノという楽器が金属のフレームに支えられ、響板をよく響かせる必要があるという性質も考慮しなければならない。次にトップ 10 諸国の特別複数入賞者を、男女別に集計した。

コンクール入賞トップ 10 カ国の特別上位入賞者

	ロシア			韓国			日本			ウクライナ			中国		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
2001-2010	27	16	43	22	5	27	10	10	20	12	6	18	9	3	12
2011-2017	10	6	16	8	4	12	2	2	4	4	0	4	7	0	7
合計	37	22	59	30	9	39	12	12	24	16	6	22	16	3	19

	イタリア			アメリカ合衆国			フランス			ドイツ			ジョージア		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
2001-2010	8	1	9	5	3	8	4	1	5	6	1	7	1	2	3
2011-2017	5	2	7	7	0	7	3	0	3	1	0	1	1	0	1
合計	13	3	16	12	3	15	7	1	8	7	1	8	2	2	4

10 カ国で全体の 78%、213 人の特別複数入賞者を数える結果となった。男性優位の傾向はトータルでは変わらないが、日本の男女比は 50%ずつとなる特徴が見られた。ジョージア

トップ 10 カ国の男女比

	露	韓	日	ウ	中	伊	米	仏	独	ジ
男	63%	77%	50%	73%	84%	81%	80%	88%	88%	50%
女	37%	23%	50%	27%	16%	19%	20%	13%	13%	50%

も同じ比率であるが、標本が 4 人と少なすぎるため、傾向として評価することは難しい。

日本人女性の特別複数入賞者の数はロシアに次ぐ 2 番手につける一方、男性は 6 番手に過ぎない。ロシアは平均に比べれば女性の割合がやや高いが、韓国・ウクライナは平均的、中国・米国、そして伊独仏のヨーロッパ勢は、より男性優位の傾向を示している。

今は死語になりつつあるのかもしれないが、一昔前までのわが国では、**女流**ピアニストという形容で女性ピアニストを特別に称していたのに対し、**男流**ピアニストとは言われなかった。しかし、日本人女性こそ、世界的に強いことが判明した。原因の一つに挙げられるのは、ピアノ学習人口男女比の偏りであろう。全日本ピアノ指導者協会の公式ホームページによると、2014年度のピティナ・ピアノステップ参加者の男女比は17.8%:81.2%であった¹⁸。ピアノステップとは、その後のコンクールのための準備や、舞台を踏み講評を受けるためなど幅広い目的で利用されている擬似コンクールのようなもので、相対的優劣がはっきり付く本物のコンクールとは同列に並べられないが、少なくとも日本で圧倒的に女性の学習人口が高いことがわかる。ただ研究が及ばなかったところであるが、各国のデータを比較しなければ、他国女性と比べて強い本質的な理由はわからない。我が国に女性が強く育つ土壌があるということは確かであるが。

5-2. トップ10 諸国の特別複数入賞者

次にトップ10 諸国の代表的な特別複数入賞者について、具体的に取り上げる。尚、日本については全てのWFIMC加盟コンクール入賞者に広げて詳細な分析を行うため、6-1. で述べるものとする。

まず**ロシア**は量（全コンクールあたりの入賞占有率の高さ）のみならず、コンテスタントの質（特別複数入賞者の多さ）でも飛び抜けた国であると改めて認識出来る。浜松(2012)の優勝者イリヤ・ラシュコフスキーは、2001年のロン＝ティボーで2位に入賞し、2014年のエネスクで2位を獲得するまで13年にわたって8つのコンクールで入賞という圧倒的な成果を残し、長年一線で活躍し続けたコンテスタントの代表例である。セルゲイ・クドゥリャコフはジュネーヴとゲザ・アンダ両コンクールで優勝を果たし、若くしてモスクワ音楽院のピアノ科教授に就任した。アンナ・ヴィニツカヤはハエン賞優勝後、ブゾーニでの入賞を経て2007年にエリザベート王妃で優勝、アレクサンダー・コブリンは、ブゾーニ優勝、ショパン3位、浜松2位を経て、2005年のヴァン・クライバーンで優勝した。2010年のショパンコンクール優勝者、ユリアンナ・アフディエーワは、それまでにジュネーヴやパデレフスキで受賞を重ねてきた。ソフィヤ・グルヤクは、WFIMC加盟コンクールでの入賞は、27歳

¹⁸ ピティナ・ピアノホームページ、http://www.piano.or.jp/step/news/2014/06/13_18112.html。2018年8月14日閲覧。

になる年に出場したりナ・サラ・ガッロ 1 位が最初であるが、その後もマイ・リンド、ウィリアム・カペル、イサンユンの優勝、ブゾーニやロン＝ティボーの上位入賞を経て、30 歳になる年にリーズで優勝を果たした。コンクール受験年齢を考えると遅咲きの躍進劇は、当代のコンテスタントの間で大きな話題となっていた。ダニエル・トリフォノフは、WFIMC 初入賞であるショパンコンクールの 3 位(2010)で衝撃的に登場し、翌年のルービンシュタイン・チャイコフスキー両コンクールで 1 位となって (20 歳になる年である)、世界で最も活躍するピアニストの一人となった。2011 年以降はやや勢いの落ちた印象のあるロシア人特別複数入賞者勢であるが、多くの入賞を重ねるコンテスタントといえば、ドミトリ・シシキンとアレクセイ・シチェフが挙げられる。シシキンは 2013 年のブゾーニ 3 位入賞後、ショパン入賞、エリザベート王妃ファイナリストを経て、2017 年にトップ・オブ・ザ・ワールドで優勝を果たす。シチェフは 2011-17 年中最も多い 5 コンクールでの入賞を誇り、ルイス・シガール、リスト (ワイマール) 両コンクールで優勝している。このように特別複数入賞者のほんの一部をあげるだけでも、ロシアの層の厚さや入賞内容の充実がうかがえる。若くして華々しい成果をあげる者、成熟を重ねてから満を辞して登場する者、長年トップに居続ける者等々、あらゆるタイプのコンテスタントが男女に存在することも、ロシア勢の大きな特徴である。

韓国の躍進については、特別複数入賞者と絡めてもう一つ付け加えておきたい。2001-10 年の入賞占有率統計では、日本を下回って 3 番手であった韓国であるが、特別複数入賞者数はこの時点で日本を抜いており、一人で多数のコンクールに入賞する傾向であった。そして、それら出色の成績を収めた韓国人コンテスタントが、韓国は (あるいは韓国の方が) コンクールに強いという確固たるイメージを定着させたことは間違いない。イム・ドンミン、イム・ドンヒョクのショパンコンクール兄弟入賞がその口火を切り、ルービンシュタイン・クライバーン・チャイコフスキーで入賞を重ねたソン・ヨルム、ハスキル・リーズの両コンクールで優勝したキム・ソンウク、ジュネーヴ・エリザベート王妃・ARD・ゲザ・アンダ等 7 つの WFIMC コンクールで入賞を重ねたキム・ダソル、ダブリン・浜松で入賞し、カナルス・ベートーヴェン (ボン) 両コンクールで優勝を果たしたアン・スージュン、ウィーンとボン両ベートーヴェンコンクールで上位入賞、ソウル優勝、その他にも ARD やエリザベート王妃など 21 世紀で最高の 9 入賞を誇るハン・チホ、カペル・仙台・クライバーンの 3 コンクールで第 1 位のソヌ・イエゴン。そして浜松を僅か 15 歳で優勝し、チャイコフスキー・ルービンシュタインの入賞を経てショパンで優勝を果たしたチョ・ソンジンと、高松・ジュ

ネーヴ・ブゾーニの3コンクールで次々に優勝したムン・ジョンの二人も忘れてはならない。ロシアに質量ともに追いつき追い越せと言わんばかりの華々しさである。

ウクライナも、しばしば飛び抜けた特別複数入賞者を輩出してきた国で、ブゾーニ優勝後チャイコフスキー入賞のアレクサンダー・ロマノフスキー、15歳になる年にブダペスト・リストで上位入賞し、その後13年コンクールの一線に立ち続け、カラス・仙台・シューベルト・クライバーンの各コンクールで優勝を果たしたヴァディム・ホロデンコ、同時代にホロデンコと同じく8つのWFIMC入賞を果たしたセルゲイ・サロフとマリア・キム、浜松優勝で名前を轟かせ、ソウル2位、ダブリン1位、リーズ2位、ARD1位と勝ち続けたアレクセイ・ゴルラッチ、ハエン賞優勝後、ブゾーニ2位、ルービンシュタイン1位とキャリアを重ねたアントニー・バリシェフスキーなどが代表的なコンテストとして挙げられる。

中国には、目立つ特別複数入賞者が少ない。ロン＝ティボー優勝後、リーズ入賞の Siheng Song や、中国国際優勝後にヴァン・クライバーンで優勝を果たしたハオチェン・チャンがその代表格であろうか。

数自体は少ないが、代わりにビッグネームが揃うのはイタリアである。仙台・ブゾーニ・ロンドン・香港の4コンクールで1位のジュゼッペ・アンダローロ、ロンドン・ロン＝ティボーで2位、マイリンド・サントンデール・TOWで1位を獲得しているアルベルト・ノセ、モンテリオール優勝後クライバーンで2位を獲得したベアトリーチェ・ラナ、モーツァルト・リーズで共に優勝したフェデリーコ・コッリ、2011年以降ではブゾーニ2位・ベートーヴェン（ウィーン）1位のロドルフォ・レオーネ、ブゾーニ2位・エリザベート王妃入賞・ベートーヴェン（ボン）1位のアルベルト・フェッロ等が挙げられる。

アメリカ合衆国の特別複数入賞者は、相対的にはやや控えめである。90年代にクリーヴランドやエリザベート王妃で既に上位入賞を重ね、サントンデール3位・カペル優勝の中国出身アメリカ人の Ning An、ウィリアム・カペルで3位入賞後、ルービンシュタインで2位を受賞したスティーヴン・リン、リーズ・エリザベート王妃で入賞を重ね、ゲザ・アンダで優勝したアンドリュウ・タイソンが代表的存在である。

フランスは、エピナル・イトゥルビ・ロン＝ティボー・ロンドンの4コンクールで上位入賞を果たし、若くして国立パリ高等音楽院の教授をつとめるジャン＝フレデリック・ヌーブルジェ、カサグランデ2位、ダブリン優勝のロマン・デシャルム、ベートーヴェン（ボン）・エリザベート王妃で共に上位入賞のレミ・ジネ、ヴィオッティとスコットランドで共に優勝した Jonathan Fournel が存在感を見せ、ドイツはカサグランデ・ロンドン・ベートーヴェン

(ウィーン) の3コンクールで優勝の Herbert Schuch、ホセ・イトゥルビ 2 位後にエリザベート王妃で優勝のセヴェリン・フォン・エッカードシュタイン、ベートーヴェン(ウィーン) とクリーヴランドで共に 1 位の Alexander Schimpf が出色の成績を収めている。ジョージア出身のコンテスタントでは、トビリシとルービンシュタイン両コンクールで上位入賞のカティア・ブニアティシヴィリが日本でも人気を博す。

5-3. 特別複数入賞者の入賞時年齢

コンクール毎の年齢制限は、まちまちに設定されているもので、下限の有無や上限年齢の差はコンクールの個性とも言える。WFIMC の指針においては、15-35 歳の間収めることが推奨されているが、現代曲中心のオルレアンや新興のオーケストラシオンのように上限を高めるコンクールもある。ただ入賞者の入賞時の年齢については、統計資料もなく、その傾向は謎に包まれている。そこで全部は網羅できないものの、生年がわかる特別複数入賞者が入賞してきたコンクールに限って、年齢別に集計をしたのが下表である。次頁冒頭には、年代別に区切ったものも掲載した。尚、入賞者の生年から算出しているのが厳密には受験時の年齢、ではなく受賞年に入賞者が到達する年齢となる。

特別複数入賞者の各入賞時年齢 (世界集計)

歳	男	男%	女	女%	計	計%
15	3	0.49%	1	0.46%	4	0.48%
16	3	0.49%	1	0.46%	4	0.48%
17	17	2.77%	2	0.91%	19	2.28%
18	22	3.59%	5	2.28%	27	3.25%
19	34	5.55%	9	4.11%	43	5.17%
20	35	5.71%	16	7.31%	51	6.13%
21	47	7.67%	13	5.94%	60	7.21%
22	50	8.16%	16	7.31%	66	7.93%
23	62	10.11%	14	6.39%	76	9.13%
24	62	10.11%	17	7.76%	79	9.50%
25	51	8.32%	24	10.96%	75	9.01%
26	50	8.16%	15	6.85%	65	7.81%
27	49	7.99%	26	11.87%	75	9.01%
28	42	6.85%	22	10.05%	64	7.69%
29	43	7.01%	16	7.31%	59	7.09%
30	23	3.75%	12	5.48%	35	4.21%
31	9	1.47%	7	3.20%	16	1.92%
32	6	0.98%	2	0.91%	8	0.96%
33	3	0.49%	1	0.46%	4	0.48%
34	1	0.16%	0	0.00%	1	0.12%
35	1	0.16%	0	0.00%	1	0.12%
計	613		219		832	

特別複数入賞者の入賞時年代別集計

年代	男性	男性割合	女性	女性割合	合計	合計の割合
10代	79	12.89%	18	8.22%	97	11.66%
20代前半	256	41.76%	76	34.70%	332	39.90%
20代後半	235	38.34%	103	47.03%	338	40.63%
30代	43	7.01%	22	10.05%	65	7.81%

男性は17歳から緩やかに上昇し、23・24歳をピークに30歳まで徐々に減少する傾向であるのに対し、女性は18歳から微増後、20-24歳までは微差の横ばい、その後25歳・27歳・28歳の受賞が多い。男女比を見ると、10代入賞は4:1、20代前半では10:3程度に開いているが、20代後半では7:3、30代では2:1程度に差に縮まっている。男性は若いうちに、女性はその後からという傾向であると言える。若年層15歳・16歳の受賞は全体的に非常に少なく、また30代を超えても1年ごとにどんどん少なくなる。コンクールを複数受けてキャリアを築くピアニストたちにとって、やはり勝負は20代の10年間であることは間違いない。

6. 日本人入賞者の分析

6-1. 21世紀におけるWFIMC日本人入賞者とその分析

この項では、ここまでの種々のデータも用いながら、いよいよ日本人入賞者についての分析を行う。次頁から134頁までの表は、2001年から2017年にかけてWFIMCまたは、準WFIMCコンクールでの日本人全入賞記録を男女別にまとめたもので、女性、男性の順に記載する。先述のコンクール別入賞者・特別複数入賞者リストに加え、一部は音楽之友社から2018年に出版された『最新 ピアノ&ピアニスト』¹⁹に掲載されている情報を参考に作成した。名前横の◇マークは第1位の獲得者に（1位タイトルについては灰色反転で示す）、また♣マークは特別複数入賞者（1位を含む複数入賞、または2位・3位の上位入賞が2回以上）の受賞者につけている。

¹⁹ 音楽の友編『最新 ピアノ&ピアニスト』 東京：音楽之友社、2018年。

【WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールの日本人女性入賞者(2001-17年)】 ♣は特別複数入賞者 ◇は1位受賞者 1位タイトルは反転

名前	性	入賞コンクール1	位	入賞コンクール2	位	入賞コンクール名3	位	入賞コンクール名4	位	入賞コンクール名5～	位
三浦 友理枝 ◇	女	マリア・カナルス(2001)	1								
浅田 真弥子	女	マリア・カナルス(2001)	3								
辻本 智美	女	エピナル(2001)	3								
塚本 聖子	女	ジュネーヴ(2001)	3								
木村 綾子	女	スコットランド(2001)	3	ロン=ティボー(2001)	5						
江尻 南美	女	ヴィアンナ・ダ・モッタ(2001)	2								
岡本 麻子	女	ロン=ティボー(2001)	6	高松(2006)	F	メシアン(2007)	3				
大崎 結真 ♣	女	ルービンシュタイン(2001)	5	ピラール・パヨナ(2001)	2	ジュネーヴ(2002)	3	リーズ(2003)	3		
河村 尚子 ♣◇	女	ヴィオッティ(2001)	1	カサグランデ(2002)	1	ゲザ・アンダ(2003)	3	ARD ミュンヘン(2006)	2	クララ・ハスキル(2007)	1
関屋 まき	女	トピリン(2001)	5								
浅野 真弓	女	マリア・カナルス(2002)	3-2								
山本 亜希子 ♣◇	女	ジュネーヴ(2002)	2	シューマン(2004)	1						
富永 綾	女	J. S. バッハ(2002)	4								
上原 彩子 ◇	女	チャイコフスキー(2002)	1								
泉 ゆりの ◇	女	ポルト(2002)	1								
菊池 洋子 ◇	女	モーツァルト(2002)	1								
酒井 雅子	女	モーツァルト(2002)	3								
大嶺 未来	女	ルイス・シガール(2002)	2	ヴィオッティ(2004)	F						
峯 優子 ♣	女	シューベルト(2003)	3	ヴィオッティ(2005)	2						
須藤 梨菜	女	浜松(2003)	4	ダブリン(2006)	5						
仁上 亜希子 ♣	女	ヴィオッティ(2003)	F	シューマン(2004)	F	ポルト(2007)	3	シューマン(2008)	2		
小関 紘子	女	チュルリョーニス(2003)	3								
島田 彩乃	女	シドニー(2004)	4								
石岡 千弘	女	ヴィオッティ(2004)	F								
根津 理恵子	女	パデレフスキ(2004)	4								
井上 麻紀	女	パデレフスキ(2004)	5								
赤木 有希子	女	マリア・カナルス(2005)	2								
奥村 友美 ♣	女	ケルン(2005)	3	ゲザ・アンダ(2005)	3						

服部 慶子	女	ケルン(2005)	F	ボン・ベートーヴェン(2007)	2				
今川 裕代	女	シューベルト(2005)	2						
森川 由佳子	女	エピナル(2005)	3						
倉地 恵子	女	ポルト(2005)	3						
加野 瑞夏 ♠◇	女	ヴィオッティ(2005)	1	シューマン(2008)	1				
高橋 礼恵 ♠	女	ウィーン・ベートーヴェン(2005) (S)	4	イサンユン(2005)	3	ボン・ベートーヴェン(2005)	2		
古川 まりこ	女	ポルト(2006)	3						
今井 彩子	女	ポルト(2006)	4						
篠原 モモ	女	シューベルト(2007)	2						
萬谷 衣里	女	シューベルト(2007)	5	カサグランデ(2010)	2				
石村 純 ♠	女	マリア・カナルス(2008)	3	高松(2010)	2				
佐野 麻衣子	女	フンメル(2008)	F						
上野 優子	女	フンメル(2008)	F						
東浦 亜希子	女	シューマン(2008)	F						
山本 絵理	女	シューマン(2008)	F						
岡田 奏	女	エピナル(2009)	3						
坂本 真由美 ♠◇	女	トップオブザワールド(2009)	2	ケルン(2011)	1				
萩原 麻未 ◇	女	ジュネーヴ(2010)	1						
海瀬 京子	女	ポルト(2010)	3						
深見 まどか	女	ポルト(2010)	4	オーケストラシオン(2013)	F	ロン=ティボー(2015)	5		
佐藤 圭奈	女	香港(2011)	2						
中桐 望 ♠	女	マリア・カナルス(2012)	2	浜松(2012)	2				
松下 彩	女	ジュネーヴ(2012)	3						
石井 園子	女	リナ・サラ・ガッロ(2012)	3						
片田 愛理	女	仙台(2013)	5						
仲田 みずほ	女	ホセ・イトゥルビ(2013) (S)	4						
リード 希亜奈	女	高松(2014)	5						
木下 敦子	女	リナ・サラ・ガッロ(2014)	3						
桑原 志織 ♠	女	マリア・カナルス(2016)	2	ヴィオッティ(2017)	2				
森本 美帆	女	ブダペスト・リスト(2016)	F						
古川 貴子	女	シューベルト(2016) (S)	5						

坂本 彩	女	仙台(2016)	6	ホセ・イトゥルビ(2017)	5					
梅村 知世	女	シューマン(2016)	2							
阿見 真依子	女	シューマン(2016)	3							
伊藤 香紀	女	フンメル(2017)	2							
江崎 萌子	女	エピナル(2017)	4							

【WFIMC加盟・準WFIMCコンクールの日本人男性入賞者(2001-17年)】 ◆は特別複数入賞者 ◇は1位受賞者 1位タイトルは反転

名前	性	入賞コンクール1	位	入賞コンクール2	位	入賞コンクール名3	位	入賞コンクール名4	位	入賞コンクール名5～	位
松本 和将	男	プゾーニ(2001)(S)	4	エリザベート王妃(2003)	5						
上野 真	男	オルレアン(2002)	3								
山畑 誠	男	ポルト(2002)	4								
福間 洗太郎 ◆◇	男	マイ・リンド(2002)	2	クレーヴランド(2003)	1	サンタンデル(2008)	3	ジーナ・バックウワー(2010)	5	BNDES(2010)	2
										ルービンシュタイン(2011)	6
新納 洋介	男	マリア・カナルス(2003)	2								
後藤 正孝 ◆◇	男	エピナル(2003)	4	中国(2007)	6	ユトレヒト・リスト(2011)	1				
関本 昌平	男	浜松(2003)	4	ショパン(2005)	4						
鈴木 弘尚	男	浜松(2003)	5	シューマン(2004)	F						
菊地 裕介 ◆◇	男	ポルト(2003)	1	プロコフィエフ(2004)	F	ジュネーヴ(2006)	3				
中尾 純	男	ヴィオッティ(2003)	F								
鈴木 謙一郎	男	ホロヴィッツ(2003)	4								
山本 貴志 ◆	男	ブラハの春(2004)	3	パデレフスキ(2004)	5	ショパン(2005)	4	ジーナ・バックウワー(2006)	2		
高田 匡隆 ◆	男	仙台(2004)	2	ハエン賞(2005)	3	マリア・カラス(2006)	2	ブダベスト(2006)	F	ワイマール・リスト(2006)	2
										モントリオール(2008)	2
川村 文雄	男	マリア・カナルス(2005)	3								
川島 基 ◇	男	シューベルト(2005)	1								
脇岡 洋平	男	ポルト(2005)	5								
北村 朋幹 ◆	男	浜松(2006)	3	シドニー(2008)	5	リーズ(2015)	5	ボン・ベートーヴェン(2017)	2		
佐藤 卓史 ◆◇	男	シューベルト(2007)	1	シドニー(2008)	4	浜松(2012)	3				
吉田 友昭 ◆◇	男	ハエン賞(2007)	3	若き音楽家(2009)	F	マリア・カラス(2010)	2	マリア・カナルス(2013)	2	ホセ・イトゥルビ(2013)	1
田村 響 ◇	男	ロン＝ティボー(2007)	1								

津田 裕也 ◇	男	仙台(2007)	1							
野木 成也	男	中国(2007)	5							
池本 三太	男	フンメル(2008)	3							
菅野 雅紀	男	ポルト(2008)	3							
辻井 伸行 ◇	男	ヴァン・クライバーン(2009)	1							
犬飼 新之介 ♠	男	ハエン賞(2009)	2	マイ・リンド(2012)	F	ボン・ベートーヴェン(2013)	3			
佐野 隆哉	男	ロン=ティボー(2009)	5							
斎藤 一也	男	ロン=ティボー(2009)	F	サンタンデール(2015)	F					
佐藤 彦大 ♠◇	男	仙台(2010)	3	マリア・カナルス(2016)	1					
奥田 暁仁	男	エピナル(2011)	3							
内匠 慧	男	浜松(2012)	6							
崎谷 明弘 ♠◇	男	ブゾーニ(2013)	3	ハエン賞(2014)	1	サンタンデール(2015)	F			
加藤 大樹	男	パデレフスキ(2013)	3							
阪田 知樹 ♠◇	男	ヴァン・クライバーン(2013)	F	ブダペスト・リスト(2016)	1					
八田 智大	男	オーケストラ・シオン(2013)	3							
沼沢 淑音	男	ケルン(2014)	3							
務川 慧悟	男	エピナル(2015)	2							
實川 風	男	ロン=ティボー(2015)	3							
石井 琢磨	男	ジョルジュ・エネスク(2016)	2							
大滝 拓哉 ◇	男	オルレアン(2016)	1							
北端 祥人	男	仙台(2016)	3							
仁田原 祐 ◇	男	フンメル(2017)	1							
久末 航	男	ARD ミュンヘン(2017)	3							
藤田 真央 ◇	男	クララ・ハスキル(2017)	1							

2001-17年に開催されたWFIMC加盟・準WFIMCコンクールにおいて日本人は、108名で174タイトルを獲得している。女性が64名94タイトルに対し、男性は44名80タイトルで、人数・獲得タイトル数共に女性が男性を大きく上回り、改めて、日本人女性コンテストの強さが浮き彫りとなった。ただ一人当たりの獲得タイトル数は、やや男性が多い傾向で、1位に限ると27タイトル中、女性が12(9名)・男性が15(15名)である。複数の1位タイトルを持つのは女性のみで、河村尚子が3つ、加野瑞夏が2つのタイトルを保持している。

情報を整理すると、下表のようになる。入賞全体の64.4%が上位入賞と高い割合を示す

2001-17年の日本人WFIMC・準WFIMC入賞の男女別集計

	男性	男性割合	女性	女性割合	合計	
入賞数	80	46.0%	94	54.0%	174	全174タイトル中割合
上位入賞数	50	44.6%	62	55.4%	112	64.4%
1位の数	15	55.6%	12	44.4%	27	15.5%
入賞者	44人	40.7%	64人	59.3%	108人	全108人中割合
特別複数入賞者	12人	50.0%	12人	50.0%	24人	22.2%
1位獲得者	15人	62.5%	9人	37.5%	24人	22.2%
複数1位獲得者	0人	0.0%	2人	100.0%	2人	1.9%

が、1位は15.5%である。特別複数入賞者・1位獲得者は共に全体の2割強にとどまった。WFIMCや準WFIMCのコンクールでは、どんなタイトルでも1つ入賞することが難しく価値のあるものであるが、それ以上に経歴を重ねることは非常に狭き門であることが改めて露呈した。

次に、日本人の入賞について年別に集計を取ると以下の通りとなる。入賞ポイントの分

WFIMC・準WFIMCコンクールにおける年別日本人入賞数

	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
男入賞数	1	3	9	5	6	7	6	6	5	4
女入賞数	12	10	6	7	12	5	6	7	2	5
入賞数合計	13	13	15	12	18	12	12	13	7	9
	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017			
男入賞数	3	3	7	2	5	5	4			
女入賞数	2	4	2	2	1	6	4			
入賞数合計	5	7	9	4	6	11	8			

析で示したように、2009年を境にして東アジアトップの座を韓国に譲ることになるが、その年から特に、女性の減少傾向が見られる。さらに2001-10年と2011-17年との比較では、

2010年で区切ったWFIMC・準WFIMCコンクールにおける日本人入賞数と平均

	2001-2010	2011-2017		2001-2010	2011-2017
入賞数合計	124	50	1年あたり計平均	12.4 タイトル	7.1 タイトル
男入賞数	52	29	1年あたり男平均	5.2 タイトル	4.1 タイトル
男割合	41.9%	58.0%	1年あたり女平均	7.2 タイトル	3 タイトル
女入賞数	72	21			
女割合	58.1%	42.0%			

上表の通り 2001-10 年は、入賞に占める男性の割合が 41.9%、女性の割合が 58.1%なのに対し、2011-17 年では男性が 58.0%、女性が約 42.0%とほぼびったり逆転している。また 1 年あたりの平均獲得タイトル数の比較では、2001-10 年が年間 12.4 タイトルなのに対し、2011-17 年は 7.1 タイトルとなり、約 43%の大幅な減少が見られる。男性は約 21%の減少にとどまるが、女性は約 58%の激減で、半数以下である。2016 年のように単年では持ち直す年もあるので、長期的に統計を取り続ける必要があるが、日本人コンテストがコンクールで勝てなくなっていることや、世界的に見て好成績をあげ続けてきた日本人女性の強さに翳りが見えることが実証された。

更に日本人入賞者の入賞時年齢については、公式ホームページや演奏会のプログラム等に掲載されている情報が入手できた者に限って集計し、下表にまとめた。尚、プライバシーの観点から個人情報掲載しない。また生年を参考にしたため、受賞時の満年齢と一致するとは限らない。

2001-17年のWFIMC・準WFIMCコンクールにおける日本人入賞者の入賞時年齢

	合計		男性		女性	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
15 歳	1	0.6%	1	1.3%	0	0.0%
16 歳	1	0.6%	0	0.0%	1	1.3%
17 歳	1	0.6%	1	1.3%	0	0.0%
18 歳	4	2.6%	3	3.8%	1	1.3%
19 歳	3	1.9%	1	1.3%	2	2.6%
20 歳	11	7.1%	5	6.4%	6	7.9%
21 歳	10	6.5%	5	6.4%	5	6.6%
22 歳	11	7.1%	4	5.1%	7	9.2%
23 歳	6	3.9%	5	6.4%	1	1.3%
24 歳	10	6.5%	4	5.1%	6	7.9%
25 歳	13	8.4%	5	6.4%	8	10.5%
26 歳	16	10.4%	11	14.1%	5	6.6%
27 歳	22	14.3%	10	12.8%	12	15.8%
28 歳	18	11.7%	5	6.4%	13	17.1%
29 歳	15	9.7%	9	11.5%	6	7.9%
30 歳	6	3.9%	3	3.8%	3	3.9%
31 歳	3	1.9%	3	3.8%	0	0.0%
32 歳	1	0.6%	1	1.3%	0	0.0%
33 歳	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
34 歳	1	0.6%	1	1.3%	0	0.0%
35 歳	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
36 歳	1	0.6%	1	1.3%	0	0.0%
合計	154		78		76	

年代別の集計						
年齢	人数	割合	人数	割合	人数	割合
15-19 歳	10	6.5%	6	7.7%	4	5.3%
20-24 歳	48	31.2%	23	29.5%	25	32.9%
25-29 歳	84	54.5%	40	51.3%	44	57.9%
30 歳-	12	7.8%	9	11.5%	3	3.9%

ここでは 129-130 頁の世界の特別複数入賞者による 613 タイトルを調査した表とも見比べてみたい。まず女性は、途中まで世界統計と日本とで同じような経過を辿る。不思議なことに 26 歳を飛ばして 25・27・28 歳が多いのも同様であるが、世界ではその三年齢がほぼ横並びなのに対し、日本では 27・28 歳に大きく比重が傾いている。日本人女性の特徴は他にも、23 歳が極めて低い数字であること、30 歳以降の入賞が、世界は 10.05%あるのに対し、日本は 3.9%と極めて低い水準になっていることがあげられる。

原因を解明するためには、今後調査を進める必要があり、以下は筆者の仮説となるが、まず 23 歳という年齢は、日本社会では大学卒業後、大学院進学や留学を考える歳である場合が多い。環境が変わる際にはなかなかコンクール受験まで手が回らず、受験数自体が少なくなり、世界的に見ても女性の入賞年齢は男性比で遅いことも相まって、日本人女性にとっては特に厳しい条件が揃っていると言える。30 代に関しては、女性はその年齢帯で自由に音楽を学習し、コンクールに挑戦し続けることへの理解が進んでいない可能性はないであろうか。海外では、結婚や出産経験のある女性がコンクールに戻ってくる話は幾例も聞くが、日本にはそれが難しい空気があることは確かであろう。

一方男性は、10 代の入賞が世界集計に比べると半数強にとどまる。また 23 歳・24 歳が最も多くなる世界的な入賞傾向より、ピークが 2 年程遅い。

男女共、若年齢での入賞が少なく、比較的遅い年齢に偏ることについては、高校までとそれ以降との専門教育の分断や、大学のカリキュラムやシステムといった要因も考えられる。本気で世界に通用する演奏家を育て続けるならば、筆者は入賞年齢の引き下げを目標とする必要があると考える。また、たとえ若くして優勝を果たしたとしても 1 つのタイトルで終わるのではなく、勉強を続けながら発展的にコンクールキャリアを築く努力をすべきである。世界的に見れば、複数のコンクールを渡り歩くことは当たり前であるのに、どうも日本ではキャリアに傷が付くと称して、成功者に更なる挑戦を許さない雰囲気がある。目先の商業的な都合を考えれば一理あるのかもしれないが、長い目で見れば、落ちたコンクールのことは忘れ去られ、成功のみが記録と記憶に残るものである。

これらについては、第 5 章にて更なる考察と、解決策の提案・提言を行いたい。

6-2. 日本人コンテストの得意なコンクール・不得意なコンクール

2001-17 年の間に行われた WFIMC 加盟・準 WFIMC のコンクールについて、日本人とい

うグループで見た場合、どこで大きな成功を収め、あるいは苦戦を強いられてきたのか見るため、入賞数別にまとめたのが下表である。

2001-17年におけるコンクール別日本人入賞数

コンクール名	人数	男	女	-2010	2011-
ポルト市	11	4	7	11	廃止
マリア・カナルス	11	4	7	7	4
シューマン	9	1	8	7	2
ヴィオッティ	8	1	7	7	1
ロン＝ティポー	7	4	3	5	2
シューベルト	7	2	5	6	1
エピナル	7	3	4	4	3
浜松	7	5	2	4	3
ジュネーヴ	6	1	5	5	1
仙台	6	4	2	3	3
フンメル	5	2	3	3	2
パデレフスキ	4	2	2	3	1
ハエン賞	4	4		3	1
ケルン	4	1	3	3	1
ボン・ベートーヴェン	4	2	2	2	2
高松	3		3	2	1
サンタンデル	3	3		1	2
ブダベスト	3	2	1	1	2
シドニー	3	2	1	3	0
ホセ・イトゥルビ	3	1	2	0	3

(入賞数2つ以下のコンクール)

入賞数	コンクール名
2	ブゾーニ、ルービンシュタイン、リーズ、カサグランデ、ゲザ・アンダ、ARD、クララ・ハスキル、マイ・リンド、ジーナ・バッカウワー、中国、ショパン、マリア・カラス、オーケストラシオン、ヴァン・クライバーン、オルレアン、モーツァルト、リナ・サラ・ガッロ
1	エリザベート王妃、スコットランド、メシアン、ピラール・バヨナ、ルイス・シガール博士、クレーヴランド、BNDES、ユトレヒト・リスト、ダブリン、プロコフィエフ、プラハの春、ワイマール・リスト、モントリオール、ウィーン・ベートーヴェン、イサンユン、若き音楽家、トップオブザワールド、ヴィアンナ・ダ・モッタ、トビリシ、J. S. バッハ、チャイコフスキー、チュルリョーニス、ホロヴィッツ、香港、ジョルジュ・エネスク
0	ホーンズ、ロンドン、UNISA、シンセン、ハチャトゥリアン、ソウル、RNCM、ジオルゴス・ティミス、EPTA スタニチッチ、ウィリアム・カペル

このように、入賞者がいないのは右表0にあげた10コンクールのみで、日本人はあらゆるWFIMC加盟・準WFIMCコンクールで入賞を果たしてきたことがわかる。入賞数が少ないコンクールは、他コンクール入賞者率が高い等、特に難易度が高いと考えられるコンクールと、開催地域やコンクールそのものが日本人にとって馴染みが薄く、日本でのキャリアにあまり有効ではないと考えられるものと大別される。また先述の通り、旧ソ連地域や中国・韓国のコンクールは、自国主義が強い側面がある。

入賞数が多いコンクールに目を移すと、ポルト市・カナルス両コンクールが11で並び、最多となった。ただ1コンクールあたりの入賞数が違うので（褒賞が3位までのものは3、6位までのものは6である）、そのコンクールが本当に日本人にとって得意か不得意かを論じるには、コンクール全体の入賞者数に占める日本人入賞者の割合を算出する必要がある。次頁表にまとめたところ、ランキングに変動が見られた。

WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールにおける日本人入賞者の割合 (2001-2017 年、脱退・廃コンクールを含む)

順位	コンクール名	全体入賞数	日本人入賞	日本人割合
1	シューマン	23	9	39.13%
2	シュベルト	28	7	25.00%
	ジュネーヴ	24	6	25.00%
	ケルン	16	4	25.00%
5	ヴィオッティ	33	8	24.24%
6	ポルト市	46	11	23.91%
7	フンメル	21	5	23.81%
8	浜松	30	7	23.33%
9	ロン＝ティボー	33	7	21.21%
10	マリア・カナルス	54	11	20.37%
11	エピナル	36	7	19.44%
12	ボン・ベートーヴェン	21	4	19.05%
13	モーツァルト	11	2	18.18%
14	高松	17	3	17.65%
15	仙台	36	6	16.67%
	サンタンデール	18	3	16.67%
	オーケストラシオン	12	2	16.67%
18	ブダペスト・リスト	22	3	13.64%
19	ARD	15	2	13.33%
	ゲザ・アンダ	15	2	13.33%
21	シドニー	24	3	12.50%
	メシアン	8	1	12.50%
23	パデレフスキ	33	4	12.12%
24	カサグランデ	18	2	11.11%
	ショパン	18	2	11.11%
	中国	18	2	11.11%
	ルイス・シガール	9	1	11.11%
	すべての合計	1703	174	10.22%
28	マリア・カラス	20	2	10.00%
29	リナ・サラ・ガッロ	21	2	9.52%
30	ブラハの春	11	1	9.09%
31	マイリンド	24	2	8.33%
	プロコフィエフ	12	1	8.33%
33	オルレアン	25	2	8.00%
34	ハエン賞	51	4	7.84%
35	クララ・ハスキル	27	2	7.41%

36	クライバーン	30	2	6.67%
	リーズ	30	2	6.67%
	BNDES	15	1	6.67%
	トップ・オブ・ザ・ワールド	15	1	6.67%
	ワイマール・リスト	15	1	6.67%
41	ジーナ	31	2	6.45%
42	ホセ・イトゥルビ	48	3	6.25%
43	若き音楽家	17	1	5.88%
44	ルービンシュタイン	36	2	5.56%
	J.S.バッハ	18	1	5.56%
	ユトレヒト・リスト	18	1	5.56%
47	ダ・モッタ	20	1	5.00%
48	イサンユン	23	1	4.35%
	チャイコフスキー	23	1	4.35%
	香港	23	1	4.35%
51	ウィーン・ベートーヴェン	24	1	4.17%
	スコットランド	24	1	4.17%
	チュルリョーニス	24	1	4.17%
54	エネスク	25	1	4.00%
55	ダブリン	26	1	3.85%
56	ブゾーニ	54	2	3.70%
57	エリザベート(6位まで)	30	1	3.33%
	トビリシ	30	1	3.33%
59	クレーヴランド	31	1	3.23%
	モントリオール	31	1	3.23%
61	ホロヴィッツ	43	1	2.33%
62	シンセン	24	0	
	ソウル	24		
	ホーンズ	23		
	EPTA	22		
	UNISA	21		
	ハチャトゥリアン	20		
	RNCM	15		
	ティミス	12		
	カベル	9		
	ロンドン	9		

2001-17年に行われたWFIMC加盟・準WFIMCのコンクールでは、のべ1703人の入賞者（ファイナリストを含む）が誕生したが、そのうちの10.22%にあたるのべ174人を日本人が占めた（表中灰色で示した）。同期間中、日本の入賞者占有率は9.65%であるが、入賞ポイントは入賞ランクに応じてつけられるものなので、下位入賞やファイナリストが占める割合が、世界平均よりもやや高くなっているということである。その10.22%を上回るコンクールは、全部で24を数え、日本人が比較的得意とするコンクールと言える。ただ全体の入賞者数が少ないコンクールの場合には、入賞者が1人増えるだけで値が大きく変動することには留意しなければならないであろう。

圧倒的に強いと言えるのは、ツヴィッカウで開催されるシューマン国際ピアノ・声楽コンクールである。同コンクールでは他の東アジア諸国も一定数入賞者を輩出しているが、日本人は全体の39.13%を占め、突出している。次点のドルトムント・シューベルト国際音楽コンクールも25%と好ポイントをマークしており、シューマン・シューベルトという二人のドイツロマン派の作曲家が、古くから日本人に愛され、研究が盛んに行われてきたことが影響しているかもしれない。ただ男女比を見ると、両コンクールとも女性に大きく分があるようである。21世紀に入って日本人第1位が2人ずつ誕生しており、シューマンは女性優勝者が2人、シューベルトは男性優勝者が2人（他順位の男性入賞はなし）となる。

シューベルトと同率の25%でジュネーヴ・ケルンが並ぶ。ジュネーヴはWFIMC創設メンバーの古豪で、1939年にアルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリの優勝を皮切りにピアノ部門が続けられて以降、要項や情報が簡単に手に入らない時代では最高水準のコンクールの1つであった。日本は50年代に1人、60年代に3人、70年代に2人、80年代に4人、90年代に2人の入賞者を輩出しており、伝統的に強いコンクールであるといえる。先述の通りWFIMCコンクール群の均質化などの要因で、現在の水準は20世紀のものと比較すると一概には言えないところもあるが、入賞者数は00年代4人、10年代2人と21世紀に入っても順調に推移している。日本人優勝者は歴代で、萩原麻未（2010年）一人である。ケルンは、先述したように既入賞者の割合が非常に低く、入り口として受けるコンクールの役割が大きい。ただ優勝してコンクールキャリアを終えた、坂本真由美のような例もある。

それらのコンクールに次ぐ水準なのが、イタリア・ヴェルチェリで開催されるWFIMC創設メンバーのヴィオッティ、そしてポルト市といった頻度の多いコンクールである。前者の受賞の内訳を見ると、2人の優勝・2人の2位・4人のファイナリストとなるが、ファイナリストは入賞ランクが1位のみのもので、上位入賞として扱うべきである。このコ

ンクールも、入賞者割合が女性にかなり偏る。ポルト市は2010年で廃止されたことを考えると、入賞数11は驚異的な数字である。今世紀は2人の日本人優勝者がいる。

次に続くのがスロバキアのブラティスラヴァで開催されるフンメルで、2017年に仁田原祐・伊藤香紀が日本人ワンツーフィニッシュを決め、大きく日本人入賞者割合が上昇した。WFIMCコンクールでの優勝は非常に価値が高く、より注目されるべき功績である。8位の浜松国際ピアノコンクールは日本で開催されるため、ホームアドバンテージも発生している。ここまで挙げたコンクールで初めて、男性受賞者が女性を上回る。中村紘子が審査委員長を務めた2003・2006・2009年のコンクールでは、4人の日本人入賞者のうち3人が10代であるなど（それぞれの最高位も、コプリンを除くブレハッチ、ゴルラッチ、ソンジンが10代で受賞している）若い人材を評価する傾向にあったが、2012年に海老彰子に交代後は異なる方向性を見せる。2018年に審査委員長が小川典子に再び交代したため、状況を注視したい。トップ10のコンクール中、唯一、歴代で日本人優勝者が出ていない点も特徴的である。

9位にはWFIMC創設メンバーのロン＝ティボー＝クレスパンコンクールがランクインした。1943年のサンソン・フランソワの優勝から、ピアノ部門世界最高のコンクールの一つとされ、日本人も50年代に2人、60年代に2人、70年代に6人、80年代に7人、90年代に4人と多くの入賞者を輩出し、男女比も9:12と相対的に拮抗している。21世紀ではジュネーヴと同様、他コンクール入賞率等のデータを考慮すると、レベルの高い、いちWFIMC加盟コンクールと考えるべきであろう。21世紀の優勝者は田村響1人である。10位のマリア・カナルス、11位のエピナルは開催頻度の高いコンクールである（前者は毎年、後者は2年に1度）。カナルスはその全てが3位以内の上位入賞である点は特記しておきたい。トータルでは既入賞者割合がやや低く、積入賞者割合がやや高い数値を示しているが、2010年以降には既入賞者も増え、佐藤彦大（2016年）のように、優勝してコンクールキャリアを締めくくる者もいる。

12位は2005年創設の新興、ボン・ベートーヴェンコンクールで、入賞者の2割弱を日本人が占めている。ただウィーン・ベートーヴェンコンクールでは、日本人入賞割合は僅か約4%しかなく、同じ作曲家でなぜここまでの成績差が出るのか、興味深い。

ちなみに、ここまでで不既出の頻度の高いスペイン・イタリアの各コンクールを見ると、おしなべて平均より低く位置している。ハエン賞はカナルスと並び、毎年開催されるWFIMC加盟コンクールの代表であるのに、日本人入賞割合は芳しくない。隔年で行われる

ホセ・イトゥルビは更に少なく、2013年以降に3人の入賞者が存在するのみである。WFIMC創設メンバーのブゾーニも隔年で開催されるが（2001年までは毎年開催）、入賞ゼロを除けば入賞者ワースト10に入る日本人にとって難しいコンクールである。

またダブリンを含む英国系のコンクール、北米のコンクール、旧ソ連系のコンクールも低調で、特に2011年以降では、英国系・北米でそれぞれ1人の下位入賞にとどまり、旧ソ連系の入賞はゼロである。

もちろん日本人入賞者と一口に言っても様々なタイプが存在することは百も承知しているが、海外育ちの方を除けば、日本の音楽教育環境出身であることに相違はない。ここでランキングが高いコンクールは、緻密で内省的な日本人的気質がはまりやすく、低いコンクールは、ヴィルトゥオジティの披露や積極的な表現といった特には優れていない部分が求められている可能性が高いと推察できる。コンクール運営側には、特に課題曲の選定方針などに表れるように、どのようなタイプの演奏家を世に出すのか、確固たる意思がある。招聘される審査員やその時の参加者の顔ぶれに左右される部分もあるが、コンテストは日頃から己をよく知り、何が評価され、評価されないのかを認識することで、ある程度自分向きのコンクールを見つけ、ターゲットを絞り込むことができるであろう。

6-3. 日本人入賞者の国内コンクール実績と学歴・留学経験

この項の最後では、日本人入賞者がどのような経歴をたどってきたのか、遡及的な調査を行い、分析する。まずは全国規模の国内コンクールの中で、最もレベルが高いとされているコンクール群について、学年によって部門や級が分けられている学生向けのコンクールと、一般向けのものそれぞれで、入賞者が過去に残してきた結果を統計した。前者は全日本学生音楽コンクールピアノ部門の小学校の部・中学校の部・高校の部²⁰とピティナ・ピアノコンペティションD級・E級・F級²¹、後者は日本音楽コンクールピアノ部門²²とピティナ・ピアノコンペティションG級・特級²³を対象とした。

²⁰ 小学校の部は4年生以上が、高校の部は20歳未満の在籍者を対象としている。

²¹ ピティナ・ピアノコンペティションの学生向け部門について、年齢上限はD級が中学校2年以下、E級が高校1年以下、F級が高校3年以下となっている。ただし、下限は設けられておらず、いわゆる飛び級も可能である。C以下の級については、開催年によって金・銀・銅賞の人数が変わるなど、単純に比較することが難しいため、今回は除外した。

²² 2018年度の規定では、2018年7月31日の時点で満17歳以上、満29歳以下が対象。

²³ 2018年度の規定では、G級は22歳以下、特級は年齢制限がないが、過去にピティナ・ピアノコンペティションに参加経験がある人を対象としている。

学生向け国内コンクールで入賞した経験のある WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールの日本人入賞者の人数・割合

	全日本学生音楽コンクール				合計
	小学	中学	高校	合計	
全入賞者	2	9	6	16	14.8%
特別複数入賞者と第1位受賞者	2	3	1	6	16.7%
	PTNA D 級				合計
	金賞	銀賞	銅賞	合計	
全入賞者	5	2	0	7	6.5%
特別複数入賞者と第1位受賞者	4	1	0	5	13.9%

	PTNA E 級				合計	
	金賞	銀賞	銅賞	合計		
全入賞者	2	2	1	5	4.6%	
特別複数入賞者と第1位受賞者	1		1	2	5.6%	
	PTNA F 級				合計	
	金賞	銀賞	銅賞	合計		
全入賞者	1	4	1	6	5.6%	
特別複数入賞者と第1位受賞者	1	1		2	5.6%	
	PTNA D・E・F 級合算				合計	
	全入賞者			15		13.9%
特別複数入賞者と第1位受賞者	7			19.4%		
	入賞者トータル				合計	
	学コンまたは PTNA	両方		合計		
全入賞者	25	23.1%	3	2.8%	28	25.9%
特別複数入賞者と第1位受賞者	12	33.3%	1	2.8%	13	36.1%

一般向け国内コンクールで入賞した経験のある WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールの日本人入賞者の人数・割合

	日本音楽コンクール				合計	
	1位	2位	3位	入選		
全入賞者	7	8	7	4	26	24.1%
特別複数入賞者と第1位受賞者	4	4	4	1	13	36.1%
	PTNAG 級				合計	
	金	銀	銅	合計		
全入賞者	5	6	1	12	11.1%	
特別複数入賞者と第1位受賞者	3	2	0	5	13.9%	
	PTNA 特級				合計	
	金・準金	銀	銅	合計		
全入賞者	7	4	2	13	12.0%	
特別複数入賞者と第1位受賞者	3	2	1	6	16.7%	
	PTNA G・特 入賞実人数合計				合計	
	全入賞者			20		18.5%
特別複数入賞者と第1位受賞者	8			22.2%		
	入賞者トータル				合計	
	日コンまたは PTNA	両方入賞		合計		
全入賞者	34	31.5%	6	5.6%	40	37.0%
特別複数入賞者と第1位受賞者	17	47.2%	2	5.6%	19	52.8%

学生のためのコンクールでは、全日本学生音楽コンクール全国大会で入賞している者が14.8%、ピティナ・ピアノコンペティションのD級・E級・F級全国決勝大会で銅賞以上の

いずれかに入賞している者が 13.9%となった²⁴。また、一方または両方の入賞を経験している WFIMC 加盟・準 WFIMC 入賞者は 25.9%で、残りの 74.1%が学生向けコンクールの結果とは関係なく、国際コンクールで成果を出しているということになる。特別複数入賞者と第 1 位受賞者に絞ると、入賞経験割合は全体の 36.1%まで増加するが、それでもなお 63.9%は無関係ということである。加えて学生コンクール・ピティナの両方で入賞した者は、3%弱にとどまる。子供時代のコンクールでいくら成績が良くても、将来、世界最高レベルの舞台で結果を残すことには必ずしも繋がらないことがこれらのデータから読み取れる。

では一般向けコンクールはどうか。日本音楽コンクールで入選以上の成績を残している WFIMC 加盟・準 WFIMC 入賞者は 24.1%、ピティナ・ピアノコンペティション G 級・特級で銅賞以上に入賞している者は 18.5%となった。これらのいずれかまたは複数に入賞している者は 37%となり、学生向けコンクールよりもやや高い割合である。入賞の内訳をみると（同コンクールで複数回入賞している場合は、順位が高い方のみをカウント）、日本音楽コンクールでは 1 位：2 位：3 位が 7：8：7 とランク別に殆ど差がない一方、ピティナ G 級では金：銀：銅が 5：6：1 と上位 2 つに偏り、特級では 7：4：2 で金賞（ただし準金賞も含む）が半数以上を占めた。また特別複数入賞者と第 1 位受賞者に限った集計では、いずれかまたは複数に入賞経験がある者は 52.8%と過半数を超え、スーパートップ層とこれらのコンクールの入賞とはある程度の因果関係が認められる。ただ特別複数入賞者・第 1 位受賞者がピティナ G・特級に入賞した 11 件を調べたところ、全てのケースで受賞年齢が 10 代であった。つまり彼らは、学生向けコンクール代わりに国際舞台へのたたき台としてこれらを利用しているに過ぎない。

次に、日本人の特別複数入賞者・第 1 位受賞者について、出身大学や留学先について調査を行った。ここでは特別複数入賞者 24 名、それに該当しない第 1 位受賞者 12 名に加え、20 世紀に遡ると第 1 位を受賞している入賞者 2 人を加えた計 38 名を対象とした。【A. 進学と留学の有無・タイミング】、【B. 日本の大学に進学した者の内訳】、【C. 高卒後・大学在籍中留学者が最初に留学した学校のある都市】、【D. 2 番目に進学した大学・音楽院の都市統計】、【E. 海外学習先集計（のべ人数）】の 5 項目について情報を収集し、次頁表にまとめた。

²⁴ 全日本学生音楽コンクールは、2005 年まで北海道・東京・名古屋・大阪・北九州の各地区大会本選第 1 位のみが全国大会に進出し、全国でも第 1 位のみが選ばれる方式であったが、2006 年以降は各地区から複数の全国進出者が選ばれ、全国大会でも第 3 位までが表彰されるよう変更された。今回の調査で学生コンクールとピティナの入賞経験割合はほとんど並んだが、集計対象者の多くは学生コンクールが 1 位のみを選出していた時代の入賞者で、今後の世代では同コンクール出身者が増加する可能性も十分に考えられる。

特別複数入賞者・第1位受賞者の進学・留学についての各種データ

【A.】進学と留学の有無・タイミング	
高卒後・大学在学中に留学	15
大卒後・院卒後に留学	18
日本の大学のみで学習	3
大学等進学なし	1
子供の頃より海外に居住し 現地の大学に進学	1

【B.】日本の大学に進学した者の内訳	
東京藝術大学	11
桐朋学園大学	7
東京音楽大学	3
愛知県立芸術大学	1
昭和音楽大学	1
上野学園大学	1

【C.】高卒後・大学在籍中留学者が 最初に留学した学校のある都市	
パリ(CNSM、ノルマル)	6
ロンドン	2
イモラ	2
ベルリン	1
ハノーファー	1
デトモルト	1
フライブルク	1
ザルツブルク	1

【D.】2番目に進学した大学・音楽院の都市統計	
ベルリン(UDK、アイスラー)	8
ハノーファー	4
その他ドイツ:ワイマール、 シュトゥットガルト、ロストック、 フランクフルト、ケルン	各 1
パリ(CNSM)	1
ニューヨーク(マネス)	1
ローマ	1
モスクワ	1
ワルシャワ	1
ビドゴシュチ	1
ザルツブルク	2
海外校から東京藝術大学(院)	1
海外校から大阪音楽大学(院)	1

【E.】海外学習先集計(のべ人数)		
国名	数	内訳
ドイツ	22	ベルリン 10、ハノーファー5、 デトモルト、フライブルク、 フランクフルト、シュトゥットガルト、 ロストック、ケルン、ワイマール
フランス	8	パリ 8
イタリア	5	ローマ 2、イモラ 2、コモ
オーストリア	5	ザルツブルク 4、ウィーン
英国	2	ロンドン 2
ロシア	2	モスクワ 2
ポーランド	2	ワルシャワ、ビドゴシュチ
米国	1	ニューヨーク
ハンガリー	1	ブダペスト

まず【A.】について見ると、留学経験のない者は4人（10.5%）にとどまった。留学の時期については、高校卒業までにした者はおらず、高卒後または大学在学中に留学した例（15人、39.4%）よりも、大学や大学院を卒業してから留学した例（18人、47.3%）が若干上回る。ただ、一般的には後者が圧倒的に多い日本の留学事情を考えると、入賞者における前者の割合は非常に高いと言える。日本の大学を卒業しない選択は、潰しがきかないとも言われるが、それだけ音楽家としての将来に確信があるということかもしれない。

【B.】は、高卒後に国内大進学を選択した入賞者の内訳（中途留学者を含む）で、東京藝術大学が11人、桐朋学園大学が8人（ソリスト・ディプロマ・コースを含む）、東京音楽大学が3人と続く。桐朋出身者は特に00年代に強さを見せ、7人が入賞キャリアをスタートさせた。全体の入賞者数が減少している10年代（厳密には2011年以降）は、東京藝大出身者が目立つ。トップ層の出身大学については更に幅広く調査するため、131頁から134頁に掲載した2001-17年のWFIMC加盟・準WFIMCコンクール全入賞者108名に対象を拡大し、下表にまとめた。()内の数字は1年あたりの人数平均である。

WFIMC/準WFIMCコンクール日本人入賞者108名全員の1番目の出身大学

年数 ()内は1年あたり平均	2001-2010	2011-2017	合計
東京藝術大学	24 (2.4)	15 (2.14)	39
桐朋学園大学	21 (2.1)	3 (0.43)	24
東京音楽大学	3 (0.3)	4 (0.57)	7
昭和音楽大学	2 (0.2)	1 (0.14)	3
大阪芸術大学	1 (0.1)	0	1
上野学園大学	1 (0.1)	0	1
京都市立芸術大学	1 (0.1)	3 (0.43)	4
愛知県立芸術大学	0	1 (0.14)	1
海外の大学・音楽院	23 (2.3)	4 (0.57)	27
進学なし	1 (0.1)	0	1

2001-10年と2011-17年までとを比較すると、桐朋と海外の大学・音楽院（留学生と居住者の両方を含む）の激減が明らかである。これが、日本人入賞者全体の減少につながっていることは間違いない。一方11年以降で、公立校の京都市芸・愛知県芸から入賞者が増加している点も特徴的である。

前頁の残り3つの表は、留学先についての統計である。【C.】は高卒または大学在学中に留学を選択した特別複数入賞者・第1位受賞者が、最初の留学先にどの都市を選択したかを調査したものである。結果はパリが最多となり、国立パリ高等音楽院（CNSM）の受験年齢の上限（21歳まで）が大きく影響していると思われる。【D.】は、各入賞者が2番目に進学

した、高等専門教育機関のある都市の統計である。日本の大学を経て留学する、あるいは留学先から別の留学先に移動するケースが殆どであるが、筆者自身を含め、海外の留学先から日本帰国後に大学院で学習する者も少数存在した。この調査ではベルリンが人気で、ハノーファーや他都市と合わせて、ドイツが全体の 2/3 近くを占めた。【E.】は、一人で複数の都市を渡り歩く場合も含め、すべての留学先についてトータルで集計したものである。ここでもドイツが他国の追随を許さない。フランス（＝パリ）は 2 番手に位置するが、【C.】から 2 人増のみで、他都市からの移動先としては不人気である。イタリア、オーストリアがそれに続き、世界で最も WFIMC 加盟コンクール入賞者を輩出してきたロシアに留学した者は 2 人のみであった（また世界 2 位の韓国、4 位ウクライナへの留学も見られなかった）。東欧へはポーランド、ハンガリーが僅かに見られるのみ。英国（＝ロンドン）や米国は、学費の高さもネックとなるであろう。総合するとドイツ・オーストリアのドイツ語圏 2 国が 56.3% と圧倒し、都市ではベルリンとパリがスーパートップ層の二大留学先となった。

7. 日本人審査員と日本人入賞

この章の最後は、日本人審査員の招聘と日本人入賞との関連を調査する。WFIMC 加盟コンクールにおける審査員の国籍は、開催国の他には幅広い地域から偏りなく、が基本である。しかしながら現状、韓国勢の躍進などの要素が関わっているのか、東アジア地域からの審査員が日本人であることは少なくなっているように感じる。

日本人審査員が日本人参加者を意図的に最良している・日本人審査員によってもたらされた日本人の入賞は価値が落ちるといった俗説や論調には全く賛同しない。ただ日本人審査員が似たような感性や感覚を持ち得る日本人参加者に、音楽的に共感する可能性が高いことは自然であり、それは日本に限らず全ての国で起こり得ることであろう。もちろん恣意的に特定の参加者を支援することは論外であるが、多くの日本人審査員が公平中立に聴く努力をしていることは、日本のコンクールのホームアドバンテージが東アジアの中で低いことから明らかである。また日本人審査員と一口に言っても、国内には国内の人間関係があり、その審査員が必ずしもそのコンテストを応援する気持ちを持っているかはわからない。ただ先ほど述べた自国参加者への共感の理に倣えば、少なくとも日本人審査員の減少が、日本人コンテストにとって有利になるとは考えられない。

分析にあたり、まずは 2001-17 年における WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールの日本人

入賞 174 について、入賞時の日本人審査員の有無を集計した。AAF の結果サイト²⁵ の右の検索窓からコンクール名を検索し、当該コンクールの結果から、審査員を見る (view jury) をクリックして確認した。個別のケースをピックアップすることは差し控えるが、下表を見ると、

WFIMC・準 WFIMC コンクールの日本人入賞に対する日本人審査員の有無

年	日本人入賞数	日本人審査員が審査したケース	割合
2001-2010	124	54	43.55%
2011-2017	50	21	42.00%

2001-10 年と 2011-17 年とを比較して、割合にほとんど変化はない。ただ、このデータは、一つのコンクールで複数日本人入賞者が出た場合にも、その数分を入賞数に含めている。わかりやすく相関を見るためには、コンクール毎に日本人入賞者の有無、日本人審査員の有無をそれぞれカウントして計算するべきである。それをまとめたのが下表で、左から見る

WFIMC・準 WFIMC コンクールにおける日本人審査員の有無と、それぞれの場合での日本人入賞者の有無

1. 総コンクール数 (内は一年平均)	2. (1.)のうち 審査員に日本人が いたコンクール	3. (1.)のうち 審査員に日本人 不在のコンクール	(1.)の全体数の中 日本人入賞者が 出たコンクール	(2.)のうち 日本人入賞者が 出たコンクール	(3.)のうち 日本人入賞者が 出たコンクール
227 (22.7) (2001-2010)	89 39.21%	138 60.79%	91 40.09%	41 46.07%	50 36.23%
162 (23.1) (2011-2017)	49 30.25%	113 69.75%	40 24.69%	14 28.57%	26 23.01%

と、コンクールの世界総数は 2001-10 年が 1 年あたり 22.7 に対し、2011-17 年は 23.1 と微増にもかかわらず、日本人が入賞したコンクール数は 15%以上の減少となっている。右二列のデータを見ると日本人審査員が存在する時、日本人コンテストの入賞率が上がることは明白 (2001-10 年では 9.8%増、2011-17 年では 5.6%増) であるが、肝心の日本人審査員の招聘は 9%近く減少したことになる。日本人審査員不在のコンクールでも、入賞割合は 13%下落していることから、招聘の減少のみが日本人入賞減少の理由ではもちろんないが、その一翼を担っていることは間違いない。また、日本人審査員が存在する時の日本人入賞数は 2011 年を境に 17.5%も減少しており、これは日本人コンテストに共感する日本人審査員が少なくなったことを示唆している。

次頁表は、2001-17 年に開催された WFIMC・準 WFIMC コンクールの日本人審査員を対象に、その審査結果に日本人入賞者が存在するかどうか審査員別の結果について、審査回数が 3 回以上の審査員のみ、とりまとめたものである。

²⁵ <https://www.alink-argerich.org/results>, accessed on 15 August, 2018.

WFIMC・準 WFIMC コンクールの審査結果において日本人審査員が審査した場合の日本人入賞者の有無(審査員別)

審査員名	審査回数計	2001-2010		2011-2017		合計	
		入賞有	入賞無	入賞有	入賞無	入賞有	入賞無
海老 彰子	19	3	5	5	6	8	11
中村 紘子	17	8	5	3	1	11	6
野島 稔	11	3	4	2	2	5	6
植田 克己	10	3	2	3	2	6	4
小川 典子	7	0	4	0	3	0	7
小山 実稚恵	7	3	3	0	1	3	4
江口 文子	6			0	6	0	6
菅野 潤	5	3	1	0	1	3	2
青柳 晋	4	2	0	1	1	3	1
津田 理子	4	1	1	0	2	1	3
松田 康子	4	1	3			1	3
山岡 優子	4	2	2			2	2
池辺 晋一郎	3	2	0	1	0	3	0
今井 顕	3	0	3			0	3
岩崎 淑	3	2	0	1	0	3	0
神谷 郁代	3	2	0	1	0	3	0
児玉 麻里	3			0	3	0	3
林 達次	3	3	0			3	0
播本 枝未子	3	0	2	0	1	0	3
練木 繁夫	3	0	1	1	1	1	2
合計	122	38	36	18	30	56	66

上表を見ると 2011-17 年では日本人審査員の存在による日本人コンテストの優位が明らかに小さくなっていることがわかる。また浜松・仙台・高松といった国内開催のコンクールでは複数の日本人審査員がいるため、コンクール単位で見ればより厳しい結果となる。

故・中村紘子の審査したコンクールにおける日本人入賞は比較的多く、彼女が日本人を国際舞台に押し上げることに熱心であったことが窺える。近年は日本人の演奏に全く共感しない日本人審査員が存在する一方で、非常に共感を示す審査員はいないことも、日本人入賞者の全体数を押し下げている遠因となっている。

第3章：アンケート・インタビュー調査から見る日本出身コンテストの特徴と性質

1. アンケート・インタビュー調査の手法

1-1. 概要

前章では、21世紀のWFIMC加盟・準WFIMCコンクールの入賞者を分析する中で、日本人コンテストがどのような成果を上げ、世界でどこに位置するかが明らかになった。日本人入賞者の特色や経歴についても、客観的な事実調査から傾向が判明したが、次代に向けての教訓を得るためには、大きく見れば似たような環境と社会で学んだと言える日本出身の専門教育学習者が、どのような姿勢で何を考え、実際にコンクールに臨んでいるのかを探る必要がある。

そこでこの章では、ピアノコンクールに参加経験のある日本出身（日本育ちの外国籍者を含み、外国育ちの日本人は含まない）コンテスト（回答163人）を対象にアンケート調査を行い、分析・考察した結果をまとめるものとする。加えて、WFIMC加盟コンクールで優秀な成績を収めた4人にインタビューを行って、入賞者の視点から諸問題についてさらに議論を深める。

マコーミックの先行研究では、コンテストの実態を明らかにする同様の狙いから計16人のコンテストに対してインタビューを行っているが、第1章で述べたように、サンプルが少ないことや、専攻や国籍・性別の情報が不明であること、同じ質問に対する回答を適切に比較できていないこと、ピアノコンクールに関しては一部の北米のもののみを対象としていること等、問題が多い。彼女のようなコンクールを中心軸に据える調査は、数々のコンクールを渡り歩き、その後も長大なキャリアが待ち受けるピアニストの有り様を解き明かすには不十分である。そのような課題を解消するために、筆者は、育成環境を統一する目的から日本出身者に絞ること、年代を10代後半から30代前半に制限することの二点に加え、可能な限り多数のコンテストにご協力いただくため、アンケート調査の手法を選択し、質問の設定や回答が明快になる選択肢を設定するように心がけた。

調査対象者はすべて、筆者のFacebookとLineに友人登録されている、またはGmailの連絡先に登録されているピアニストである。筆者は20年以上に渡って国内外のコンクールに多数参加してきたため、知人・友人を排除することは、長年チャレンジを続けてきた日本出身コンテストの多くを排除することと同義で、不可能であると判断した。同じ理由から、自身のSNSは最もコンクール挑戦者を見つけやすいツールとなった。ただ筆者の

Facebook アカウント²⁶ には、アンケート依頼時点で 1300 を超える人物が登録されており、正直に言って、その全員を把握していたわけではない。非常に近い友人から、一度出会っただけの知人、時には面識のない方まで、交友のレベルは様々である。対象者全員 (235 人) に直接メールやメッセージ機能で依頼し、快諾を得た 163 人の回答を得ることができた。お忙しい中、ご協力いただいた皆様への感謝の念にたえない。

質問票は素案を作成したのち、WFIMC 入賞者で現役コンテストの齊藤一也さんに電話インタビューを行い、助言をもらった上で完成させた。内容はコンクールを受ける準備に関する質問 (申し込み・レパートリー選択・練習)、コンクール参加に関する質問 (参加環境・コンクール本番の演奏)、コンクール経験と音楽家としてのキャリアに関する質問 (子供時代のコンクール・受験の意義・キャリア形成におけるコンクールの役割)、そしてコンクール挑戦の修練と芸術性の深化に関する質問の四つの観点から成る。

それぞれの設問についてその意図や筆者の経験・結果への仮説等を適宜述べ、男女、年代 (10 代後半・20 代前半・20 代後半・30 代前半)、そして国際コンクール入賞歴 (WFIMC/準 WFIMC 入賞・非 WFIMC 入賞・未入賞) の 3 種類の属性別に集計したアンケート結果表 (最も高い割合の項目は灰色の帯をつけて示す) を元に、分析・考察を記す。更に、必要に応じて WFIMC 入賞者 4 人の半構造化インタビュー²⁷ を交えて、論考を掘り下げる。

1-2. アンケート回答者の属性

今回行ったアンケートの回答依頼・回答承諾・回答返送 (有効回答) の分布は以下の通り。

アンケートの依頼について			回答者の男女別人数・割合		
回答依頼	回答承諾	回答返送	合計	男	女
235	179	163 (69.3%)	163	54 (33.1%)	109 (66.9%)

依頼に対する有効回答は 69.3%と約 7 割を記録する高水準となり、一人一人に依頼や催促のメッセージを書いたことや、対象のほとんどが筆者の知人であったことが功を奏したと言える。承諾と返送とで人数差があるのは、質問票で用いたワードソフトのファイル形式が合わなかったことや、急な病気などの要因で回答が難しくなったケースがあるからである。

²⁶ <https://www.facebook.com/akihiro.sakiya>, accessed on 10 June, 2018.

²⁷ 質問リストを事前に送付し、電話または対面で、一人当たり 1 時間半から 2 時間の調査を行った。対象者の経歴は、1-3. で詳しく述べる。

男女比は、ほぼ 1:2 の偏りとなった。あくまで参考であるが、第 2 章であげた 2014 年のピティナ・ピアノステップ参加者の男女比（17.8%:82.2%）を考えると、男性がやや多いと言えるかもしれない。年代比は下表の通りである。対象年齢は WFIMC の規約で推奨されて

回答者の年代別の人数・割合				
	15-19 歳	20-24 歳	25-29 歳	30-34 歳
合計	7 (4.3%)	33 (20.2%)	71 (43.6%)	52 (31.9%)
男	2 (3.7%)	12 (22.2%)	26 (48.1%)	14 (25.9%)
女	5 (4.6%)	21(19.3%)	45 (41.3%)	38 (34.9%)

いる基準に近い 15-34 歳（2018 年に 35 歳を迎える人を含む）に設定したが、今回の集計では 5 年ずつ区切って回答の割合を算出する。10 代後半は非常に少なく、年代が上がるにつれて人数が増えた。コンクール経験の多い層・国際コンクール経験のある層に多く答えてもらう狙いは果たせたが、若年層にももう少しアプローチできれば、尚厚みのあるものになったであろう。コンクール歴別集計では、下表の通りとなった。回答者の中で何らかの

回答者の入賞歴別人数・割合	
WFIMC 加盟・準 WFIMC 国際コンクール入賞	20 (12.3%)
WFIMC・準 WFIMC ではない国際コンクール入賞	78 (47.9%)
国際コンクール入賞経験なし	65 (39.9%)

国際コンクールに入賞している人の割合は 60.1%となり、12.3%が WFIMC・準 WFIMC コンクールの入賞者である。いずれも非常に高い割合と言えるが、特に後者では、対象年齢となる 1983 年生まれの一部と 1984 年以降に生まれた、日本人 WFIMC・準 WFIMC 入賞者全員のうち、4 割近くに回答を頂いた計算となった。

以上が集計に用いる属性の内訳となるが、回答者のコンクール歴については、他のいくつかの尺度からも分析したい。下表は、全国規模の国内コンクールと国際コンクールにおけるそれぞれの入賞歴を尋ねた質問の回答を男女別・年代別に集計した結果である。全国規模の

人数・割合(男女)			コンクール入賞歴の有無	人数・割合(年代)			
全体	男	女		15-19 歳	20-24 歳	25-29 歳	30-34 歳
151 (92.6%)	51 (94.4%)	101 (92.7%)	全国規模のコンクールで入賞	7 (100%)	29 (87.9%)	66 (93.0%)	50 (96.2%)
98 (60.1%)	34 (63.0%)	64 (58.7%)	国際コンクールで入賞	3 (42.9%)	9 (27.3%)	45 (63.4%)	41 (78.8%)

国内コンクール入賞は 92.6%と驚異的な数字を示し、なんらかの形で音楽の道に進んだ者にとってマストと言えるに近い水準である。国際コンクールの入賞も前述の通り高く、特に 20 代後半以降に急増する。第 2 章で明らかになった入賞年齢が遅い傾向がここにも現れた形である。続いて、国際コンクールの参加について尋ねた質問では（次頁上表参照）、82.2%に

当たる 163 名中 134 名が国際コンクールに参加した経験があるという結果が出た。男女の

男女別			国際コンクール参加 についての調査	年齢別			
全体	男	女		15-19 歳	20-24 歳	25-29 歳	30-34 歳
134 (82.2%)	45 (83.3%)	89 (81.7%)	参加経験あり	5 (71.4%)	18 (54.5%)	61 (85.9%)	50 (96.2%)
73.1%	75.6%	71.9%	参加あたりの入賞率	60.0%	50.0%	73.8%	82.0%
96 (58.9%)	39 (72.2%)	57 (52.3%)	今後参加したいと思う	7 (100%)	33 (100%)	44 (62.0%)	12 (23.1%)
36 (22.1%)	6 (11.1%)	30 (27.5%)	参加したいと思わない	0	0	21 (29.6%)	15 (28.8%)
31 (19.0%)	9 (16.7%)	22 (20.2%)	現役引退	0	0	6 (8.5%)	25 (48.1%)

割合差はほとんどない。年代別に見ると、まとまった数の回答がある 20-24 歳、25-29 歳、30-34 歳では、年齢が上がるたびにさらに高い数値を記録している。入賞歴の有無と照らし合わせて算出した入賞率は、国際コンクール参加経験者のうち、73.1%と高い割合となった。参加率と同様に 20 代前半、後半、30 代の順に上がっていく。入賞は減るものではないので当然の推移ではあるが、やはり 20 代後半に向けてキャリアアップが行われる様子が見られる。

国際コンクールに今後参加したいかどうかの意向を尋ねた質問では、今後参加したいと回答した男性が 72.2%なのに対し、女性は 52.3%と男女差が大きく出た。女性に年齢の高い回答者が比較的多いことも影響しているが、男性の方がコンクールに対して意欲的と言える。明確に引退と出処進退を明らかにしている割合は男女 3.3%の差に過ぎないが、参加したいと思わないと答えた割合は、女性が 16%以上も上回ることもこれを裏付ける。年代別にみると、10 代後半・20 代前半では全員が参加を希望した。20 代後半ではまだ 62%が参加に意欲を見せるが、30 代になると 23%まで後退する。ただ前章のデータ調査上、21 世紀の日本人コンテストにとって 25-29 歳は男女共に最も脂の乗る時期であること、30 代の入賞は 1 割にも満たないことを考えると、25-29 歳の数字は低く、30-34 歳の数字は高いようにも感じられる。対象年齢の上限を引き上げて、芸術的成熟を問うコンクールが増えたことも作用している可能性がある。

回答者の留学歴の有無と、そのタイミングについても調査した（下表・次頁上表）。

男女別			留学歴の有無	年齢別			
全体	男	女		15-19 歳	20-24 歳	25-29 歳	30-34 歳
58 (35.6%)	19 (35.2%)	39 (35.8%)	留学なし	7 (100%)	22 (66.7%)	21 (29.6%)	8 (15.4%)
105 (64.4%)	35 (64.8%)	70 (64.2%)	留学あり	0	11 (33.3%)	50 (70.4%)	44 (84.6%)

男女別			留学のタイミング	年齢別			
全体	男	女		15-19 歳	20-24 歳	25-29 歳	30-34 歳
0	0	0	高校卒業前	0	0	0	0
27 (25.7%)	12 (34.3%)	15 (21.4%)	高卒後・大学在学中	0	6 (54.5%)	14 (28%)	7 (15.9%)
78 (74.3%)	23 (65.7%)	55 (78.6%)	大学卒業後	0	5 (45.4%)	36 (72%)	37 (84.1%)

結果、全体の3分の2近くに当たる64.4%が留学歴ありと回答した。男女共、割合はほぼ同じで、25歳以降で留学歴ありの割合が圧倒的に増加する。また、留学のタイミングの調査では、高卒前留学者は0となった。筆者が2008-12年に在籍したパリ国立高等音楽院には、入学年齢の下限が設けられていなかったため、高校を中退した日本人留学生もわずかに存在していたが、職業演奏家を目指すピアノ学習者全体を考えると、非常に少ない人数と考えられる。高卒・大学課程途中での留学は全体の25.7%、大卒後の留学は74.3%とほぼ1:3の割合となり、男性の方が早い年齢に留学する者が多い傾向である。

これらいずれのデータも、今回実施したアンケート調査の回答者に、日本出身のピアノ学習者の中でも特に熱心で、継続的かつレベルの高い人が非常に多く含まれていることを示唆するものである。

1-3. インタビュー者の紹介

次に、インタビュー調査に協力してくださったWFIMC加盟国際コンクール入賞者の4人について順番に紹介したい。1人目は木下敦子さん。公式ホームページ²⁸によると、1987年に神戸市で生まれ、京都市立芸術大学を卒業後マンハイムに留学、ブラームス国際ピアノコンクールで優勝等数々の入賞を経て、2014年にリナ・サラ・ガッロ国際ピアノコンクールで第3位を受賞、現在はドイツを拠点に精力的に活動されている。2人目は桑原志織さん。公式ホームページ²⁹や、受給されている奨学金のホームページ³⁰によると、1995年生まれ、東京出身で東京藝術大学音楽学部附属音楽高校を経て東京藝術大学を首席で卒業、ピティナ・ピアノコンペティション特級や日本音楽コンクールで上位入賞を重ね、2016年にマリア・カナルス国際音楽コンクールで第2位、2017年にヴィオッティ国際音楽コンクールで第2位を獲得、2018年8月現在は、ドイツ・ベルリン芸術大学に留学し、研鑽を積む。3人

²⁸ <https://www.atsukokinoshita.com/vita/japanese/>, accessed on 24 August 2018.

²⁹ <https://shiori-kuwahara-piano.jimdo.com/profile-1/>, accessed on 24 August 2018.

³⁰ <http://www.ezoe-mf.or.jp/music/kuwahara.html>, accessed on 24 August 2018.

目は日本で活躍する佐藤彦大さん。所属する事務所のホームページ³¹ や、CD ジャーナルによる評論のページ³² によると、1987 年生まれの岩手・盛岡市出身、東京音楽大学付属高校、東京音楽大学を経て、同大学院器楽専攻鍵盤楽器研究領域（ピアノ・エクセレンス）修了、ベルリン芸術大学やモスクワ音楽院に留学後、現在は東京音楽大学の講師、岩手大学の特命准教授を務める。国内では野島稔・よこすかピアノコンクール、日本音楽コンクールで第 1 位を受賞し、2010 年仙台国際音楽コンクールで第 3 位、2016 年マリア・カナルス国際音楽コンクールで第 1 位優勝を果たした。4 人目は日本で学習後にポーランドに移住された須藤梨菜さん。公式ホームページ³³ によると、1987 年千葉市生まれ、昭和音楽大学付属ピアノアカデミー修了、エトリングゲン青少年国際コンクール A カテゴリーで第 1 位、ピティナ・ピアノコンペティション G 級で銀賞を受賞するなど 10 代前半から頭角を現し、浜松国際ピアノコンクール・ダブリン国際ピアノコンクールなどで入賞を果たした。

4 人に依頼するにあたって重視した条件は、第一に、日本での出身学校が違うことや、国内・国外を問わず指導者が共通しないことである。第二は、留学歴と活動拠点の多様性である。大卒留学後、ドイツに残って活動する木下さん、二カ国に留学し、帰国後は日本で教鞭を取りながら音楽活動を行う佐藤さん、大卒後、これから留学生活が本格的に始まる桑原さん、留学せずに日本で学習を終え、ポーランドに移住して日欧で活動する須藤さんと四者四様になっている。第三に WFIMC 加盟コンクールに入賞した時期が異なることである。入賞年齢は須藤さんが一番早く 10 代後半、桑原さんが 20 代前半、佐藤さんが 20 代前半と後半、木下さんが 20 代後半である。入賞年も比較的バラバラで、00 年代は須藤さんのみ、10 年代前半は佐藤さんと木下さん、後半では佐藤さんと桑原さんが入賞している。日本人入賞者といっても異なる教育を受け、多種多様な経歴を辿ってきた 4 人を集めることで、多角的な視点から論議を進めることが可能な上、もし共通の問題意識があれば、日本特有の環境が原因となるものであると推定できる。網羅できなかったのは高卒留学者や、日本人入賞者が 2 番目に多かったパリへの留学者であるが、筆者がその両方にあてはまるため、必要であれば経歴を記すことで補いたい。

³¹ http://www.millionconcert.co.jp/artist/piano/profile/sato_h.html, accessed on 24 August 2018.

³² <https://artist.cdjournal.com/d/piano-recital/4117031862>, accessed on 24 August 2018.

³³ <http://management.imc-music.net/artists/domestic/rina-sudo>, accessed on 24 August 2018.

2. アンケートの集計と分析・インタビューを交えた考察

2-1. コンクールは好きですか

いよいよ、アンケート本体の分析に入る。まずは、【コンクールは好きですか】と尋ねた。導入でこの質問をしたのは、回答者に気軽な気持ちでアンケートに取り組んでもらいやすくする意図と、キャリアにおいてコンクールが半ば義務になっている現状で、それに挑戦し続けるピアニストがどのような気持ちでコンクールと相對しているのかを知るためである。筆者は率直に言って嫌いであるが、日本出身者は子供の頃からコンクールの存在が身近であるから、好きの割合が高いと予測した。結果（下表）は予想に反して、すべての性別・

コンクールは好きですか？									
	はい	いいえ	どちらでもない	無回答		はい	いいえ	どちらでもない	無回答
合計	19.0%	19.0%	60.7%	1.2%	男性	16.7%	24.1%	57.4%	1.9%
					女性	20.2%	16.5%	62.4%	0.9%
15-19 歳	28.6%	14.3%	42.9%	14.3%					
20-24 歳	27.3%	21.2%	51.5%		WFIMC 国際入賞	5.0%	15.0%	80.0%	
25-29 歳	19.7%	18.3%	60.6%	1.4%	非 WFIMC 国際入賞	15.4%	23.1%	59.0%	
30-34 歳	11.5%	19.2%	69.2%		国際コン未入賞	27.7%	15.4%	56.9%	

年代・入賞者層でどちらでもないの回答がマジョリティであった。女性の方が男性に比べてややはいと答えた割合が多い。年代別では20代後半からはいは減少の一途で、それに伴ってどちらでもないの割合が増加している。特筆すべきは、コンクール入賞者2層のはいの少なさであろう。特にWFIMC入賞者は、平均を大きく下回る。入賞歴が高くなると、好き嫌いに関係ない義務のようなものと捉えているのではないか。コンクールばかりに囚われずに音楽を学習出来ている、また嫌々精神的に苦痛を感じて受験している者が少ないとも言える。ただ、高い入賞歴を持つから、あるいは入賞ができるからこそ、コンクールを特別好きになるということでもないようである。

2-2. コンクールの申し込みに関する質問と学校での情報教育

コンクールを受ける準備には様々な段階があるが、まずは申し込みについての質問群をまとめる。第一にコンクール受験の長期戦略について、【コンクールを申し込む計画を立てるときに近いものを選んでください】と尋ねた。長い期間挑戦を続ける現代のコンクールキャリアを想定し、目的のコンクールを選定段階で絞り込み、集中的に注力するスナイパー

型、レパートリーが合うコンクールを複数申込み、合格した中から出場するものを選ぶもぐら叩き型 (いずれも筆者の造語) のどちらの割合が日本出身者に多いのか、見るためである。筆者自身はどちらかと言うともぐら叩き型であると言えるが、日本帰国後は、予備予選のない中堅コンクールは受けていない。選考が通過して出場できる WFIMC 加盟コンクールは自然に年間 1-2 つに落ち着き、受験過多に陥ることはなかった。

コンクールを申し込む計画を立てるときに近いものを選んでください							
	スナイパー型	もぐら叩き型	無回答		スナイパー型	もぐら叩き型	無回答
合計	66.9%	32.5%	0.6%	男性	66.7%	31.5%	1.9%
				女性	67.0%	33.0%	
15-19 歳	85.7%	14.3%					
20-24 歳	66.7%	33.3%		WFIMC 国際入賞	60.0%	40.0%	
25-29 歳	70.4%	28.2%	1.4%	非 WFIMC 国際入賞	65.4%	33.3%	1.3%
30-34 歳	59.6%	40.4%		国際コン未入賞	70.8%	29.2%	1.5%

結果は上表の通りで、ほぼ 2:1 の割合でスナイパー型 が上回る。回答に男女差は殆ど見られない。年代別では 10 代・20 代に比べて、レパートリーが増え成熟するであろう 30 代に入るともぐら叩き型 も増加傾向になる。また入賞歴が高くなるにつれて、ややもぐら叩き型 が増す。未入賞者層は 7:3 なのに対し、WFIMC 入賞層は 6:4 の割合である。経歴や実力が高まるにつれて受験可能なコンクールが増えるからであると推察できる。ただ高入賞歴でもスナイパー型 が多数を占めることには違いない。これは、コンクール選択における日本出身コンテスト共通の傾向である。

次の質問は、【コンクールを選択する上で優先する選択理由を 3 つまで教えてください】である。筆者にとって国際コンクールは、レベルに応じて自分の将来を決めるために受けるものという認識で、キャリアアップになることを重視する選択肢の割合が高くなると仮説を立てていたが、次頁冒頭表の通り、それとは異なる結果が出た。全体の集計では、B. 自分のレベルアップにつながる、A. レパートリーが持っているまたは弾きたい作品がある、が共に 7 割近くをマークし、E. 賞金や褒賞演奏会の規模が大きい が 4 割弱、F. 入賞できる可能性を感じる が 3 割弱で続いた。1 割を超えた選択肢は他に、G. 難しいことに挑戦したい(17.7%)、M. ヨーロッパで演奏活動ができる(16.8%)、H. 世界的に有名である(10.8%) の 3 つとなった。男女を比べると、女性は B. が男性より 20%以上も高い一方で、E.・F.・H. といった利益や名誉に関する動機は 10%前後少ない。年代別ではあまり変化が見られず、年齢が高くなるにつれ E. が減少していることくらいである。歳をとるごとに現実的になるということであろうか。10 代後半の G. 難しいことに挑戦したい、20 代前半の J. 日本のメディアに注目される など、特定の年代に支持されている選択肢もあるが、誤差の範疇で

あろう。より大きな違いが見られるのは、入賞歴別の結果である。最も入賞歴の高い WFIMC 入賞者層は、B や G といった自己研鑽型の回答割合が低いのに対し、C、WFIMC に加盟している、E、M が比較的高いことに加え、H は 36.8% と突出しており、キャリアアップに直結する理由を選択している割合が高いと言える。同時に A の選択も他 2 層と比べて高く、レパートリー戦略を重視していることも窺える。総合すると日本出身コンテストは、未来のキャリアや名声を目的にするよりも、自己研鑽に重きを置いてコンクールを選択・受験する傾向があると言える。女性はそれがより強く、男性でも多数派を占めることに

コンクールを選択する上で、優先する選択理由を 3 つまで 教えてください														
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	他
合計	68.4%	69.6%	5.7%	5.7%	39.2%	27.9%	17.7%	10.8%	1.9%	5.7%	0.0%	1.9%	16.5%	6.3%
男性	67.9%	54.7%	7.5%	9.4%	45.3%	37.7%	17.0%	17.0%	1.9%	3.8%	0.0%	3.8%	18.9%	5.7%
女性	68.6%	77.1%	4.8%	3.8%	36.2%	22.9%	18.1%	7.6%	1.9%	6.7%	0.0%	1.0%	15.2%	6.7%
15-19 歳	42.9%	85.7%	0.0%	0.0%	57.1%	28.6%	42.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	14.3%	0.0%
20-24 歳	65.6%	68.8%	9.4%	6.3%	46.9%	21.9%	18.8%	9.4%	0.0%	12.5%	0.0%	0.0%	15.6%	3.1%
25-29 歳	67.6%	64.7%	2.9%	4.4%	38.2%	29.4%	14.7%	11.8%	2.9%	7.4%	0.0%	2.9%	16.2%	8.8%
30-34 歳	74.5%	74.5%	7.8%	7.8%	33.3%	29.4%	17.6%	11.8%	2.0%	0.0%	0.0%	2.0%	17.6%	5.9%
WFIMC 国際入賞	78.9%	47.4%	15.8%	0.0%	47.4%	15.8%	10.5%	36.8%	0.0%	5.3%	0.0%	0.0%	31.6%	0.0%
非 WFIMC 国際入賞	69.3%	70.7%	5.3%	5.3%	36.0%	32.0%	17.3%	6.7%	2.7%	2.7%	0.0%	4.0%	21.3%	8.0%
国際コン未入賞	65.1%	76.2%	3.2%	7.9%	41.3%	27.0%	20.6%	7.9%	1.6%	9.5%	0.0%	0.0%	6.3%	6.3%

表中アルファベットの選択肢内容	
記号	内容
A	レパートリーがあっているまたは弾きたい作品がある
B	自分のレベルアップにつながる
C	WFIMC に加盟している
D	AAF に加盟している
E	賞金や褒賞演奏会の規模が大きい
F	入賞できる可能性を感じる
G	難しいことに挑戦したい
H	世界的に有名である
I	ユニークで特色がある
J	日本のメディアが注目する
K	日本人入賞者が多い
L	日本人の入賞者が少ない
M	ヨーロッパで演奏活動ができる
他	その他の理由

変わりはない。また上級コンクールが集まる WFIMC への加盟を参考にする割合は、5.7% と非常に低かった。WFIMC 入賞者に限って見ても 15.8%にとどまる。キャリアの打破や展開を求めてコンクールの海に飛び込む若手が少ないことは、難関コンクール日本人入賞者の減少の一因になっていると推察できる。レベルの高いコンクールの特色や情報を知り、学習できる機会を設け、いずれはそこに挑戦するという目的意識を広めることが肝要である。

トップレベルがトップを目指すことが、ピアニストを目指す者全体の底上げに繋がると筆者は考える。

申し込みについての最後の質問は、【コンクール申し込みについて、困難を感じることはありますか／あるとお答えの方は、当てはまるものを全て選択してください】で、選択肢は主に筆者が実際に困ったことを参考に作成したものである。やはり応募音源については悩まされた。良いクオリティのものを出したいと思いつつ、毎回のコンクール応募のたびに高い費用を出して制作することは経済的に不可能であったからである。後に楽器会社や所属レコード会社の協力を得てこの問題を解決することができたが、そのような幸運は誰もが得られるものではないと、ご支援に感謝するばかりである。

結果は以下の通り。合計・性別・年代・入賞歴別のすべての集計で、困難を感じたこと

コンクール申し込みについて、困難を感じることはありますか							
	はい	いいえ	無回答		はい	いいえ	無回答
合計	79.1%	20.9%		男性	72.2%	27.8%	
				女性	82.6%	17.4%	
15-19 歳	85.7%	14.3%					
20-24 歳	84.8%	15.2%		WFIMC 国際入賞	65.0%	35.0%	
25-29 歳	80.3%	19.7%		非 WFIMC 国際入賞	84.6%	15.4%	
30-34 歳	73.1%	26.9%		国際コン未入賞	76.9%	23.1%	

あるとお答えの方は当てはまるものを 全て 選択してください							
	A	B	C	D	E	F	他
合計	89.1%	45.0%	17.1%	7.8%	27.1%	36.4%	6.2%
男性	89.7%	53.8%	28.2%	10.3%	23.1%	23.1%	5.1%
女性	88.9%	41.1%	12.2%	6.7%	28.9%	42.2%	6.7%
15-19 歳	66.7%	83.3%	16.7%	0.0%	0.0%	33.3%	0.0%
20-24 歳	89.3%	46.4%	32.1%	10.7%	39.3%	17.9%	0.0%
25-29 歳	86.0%	38.6%	14.0%	8.8%	35.1%	40.4%	8.8%
30-34 歳	97.4%	47.4%	10.5%	5.3%	10.5%	44.7%	7.9%
WFIMC 国際入賞	100.0%	38.5%	0.0%	0.0%	15.4%	38.5%	0.0%
非 WFIMC 国際入賞	87.9%	48.5%	18.2%	10.6%	27.3%	40.9%	7.6%
国際コン未入賞	88.0%	42.0%	20.0%	6.0%	30.0%	30.0%	6.0%

表中アルファベットの選択肢内容	
記号	内容
A	申し込み音源や映像の作成
B	推薦状のお願い
C	募集要項の読解
D	批評などの資料収集
E	申し込み料
F	演奏活動や仕事との日程調整
他	その他

がある と答えた割合が、感じたことはない を非常に大きく上回った。年齢を追うごとに微妙に低くなるのは、コンクール慣れもあるのかもしれない。困難を感じたことがある を選

択した人に原因を尋ねた選択肢では、筆者と同様に A. 申し込み音源や映像の作成 が大勢を占めた。標本が少ない（7人）10代後半の層を除いて、全て8割後半以上の高水準となっている。B. 推薦状のお願い も男女・世代・入賞歴にかかわらず、大きな問題のようである。入賞歴が高いWFIMC層、留学生の割合が多い25-29歳のコンテストでは比較的抑えた割合であるものの、特に自分の指導者プラスアルファで推薦状を提出しなければならないコンクールは、そのハードルが高くなるのが容易に推察できる。誰に書いてもらうのが良いのか、誰が推すことが効力を発揮するのか全くわからないことも、それに拍車をかける。E. 申し込み料 の高さも、収入に乏しい20代にとっては厳しい。また筆者の経験では、SWIFTやIBANコードの活用等、国ごとに要求される情報が違う海外送金の手間も煩わしい。F. 演奏活動や仕事との日程調整 は年代を経るごとに難しくなり、入賞経験者の2層でもその傾向を示している。C. 募集要項の読解 や、D. 資料収集 については経験と共に困難でなくなることが多いようである。その他 では、渡航費や滞在費を捻出することを挙げた回答者もいた。応募の段階である程度まとまった資金がないと、参加の検討自体が不可能となることも確かである。

さて、ここまではアンケート調査から、日本出身コンテストのコンクール申し込みの傾向や困難について考察してきたが、WFIMC加盟コンクール入賞者は実際にどのような順を追ってコンクールを受験してきたのであろうか。以下の二つの質問をぶつけた。

- | |
|---|
| 1. WFIMCのコンクールで入賞を果たすまで、どのような国内・国際コンクールを受けられてきましたか。 |
| 2. 年にどれくらいの応募をして、どれくらいの数のコンクールを受験されましたか。 |

回答を総合すると木下・佐藤・須藤の3氏は、子供の頃から地方コンクール、次にピティナや全日本学生音楽コンクールといった全国規模の学生向けコンクール、と徐々にステップアップし、全国規模の一般（または大学生向けの）コンクールを経て、国際舞台に進出した。一方桑原氏は、地方コンクールや学生コンクールを経験せずに、16歳の時に一般向けコンクールで入賞し始め、18歳の入賞を以って国内コンクール経験を終えた。国際コンクールでの入賞は、須藤氏が16歳の浜松国際と非常に若く、ダブリン国際に18歳で入賞を果たし、その後もWFIMC非加盟ながら権威ある国際コンクールの一つ、ヒルトン・ヘッド等で入賞を積み重ねた。桑原氏は20歳でマリア・カナルス、22歳でヴィオッティの両コンクールに入賞。佐藤氏は22歳で仙台国際、イタリア・スペインの中堅コンクールで入賞を経て、28歳でマリア・カナルス国際優勝を果たした。木下氏は留学後、23-24歳頃から国際

コンクールで受賞し始め、ブラームス・ニースの優勝を含む3つの国際コンクールに入賞、27歳の時にリナ・サラ・ガッロ国際で上位入賞を果たす。4人それぞれが、非常に輝かしい経歴を持つ。

これまでの応募・受験について、木下氏、桑原氏は応募段階で落選することはあるが、入賞コンクール以外のものは殆ど受験していないスナイパー型であるという。佐藤・須藤両氏もスナイパー型寄り、年に一回程度応募を行い、そこで合格して出場権を得たならば受けに行くというスタンスに近いとのことであった。

受験コンクールの選択について佐藤氏は、少しずつレベルを上げることが大切と説く。尚、以降インタビュー引用中の（）内は筆者が前後の文脈から補うものとする。

最初のうちは WFIMC の大きなコンクールばかり受けて来たけど、それだけじゃないんじゃないかと思って大学院の2年の時に受けたイタリアの小さなコンクールを獲ったでしょ。あれは AAF で見つけたコンクール。(最初から) 大手のところに出した(のは) 今思えば無謀だった。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

小さいコンクールでも1位を獲ることは難しいものであるし、そういった中堅の経歴がないと大きなコンクールの予備予選通過に至りにくいという体感もある。

加えて桑原氏は、学業とコンクール受験の両立の難しさについて指摘した。

なかなか受けにいけないというのは、みんなが抱えている問題。1、2年(単位を)必死でとって、3年で落としたりとしても4年に猶予がある、そういう時ではないと(長期間のコンクールは)無理。藝高の頃の方が、コンクール・演奏会、届け出だせば休みになったので、だから高校の頃は受けに行く子は行っていました。なんだかんだ学部の間は、半期に2-3回しか休めない。それ以上休んだら単位を落とす。学校から提供される外部の本番も)欠席扱いで、他にもなんらかの本番が入ると休まざるを得ない日が絶対あるので、なかなか(公欠扱いにならない)国際コンクールは受けられません。最初に受けたマリア・カナルスは完全に春休みの期間だったから。ヴィオッティは4年だったので卒業単位が取れていて、受けに行ってる。

母親がずっと(藝大の)役員をやってて、議題には結構いろんなところから上がって来ていると聞いています。だけどやっぱり、コンクールはとにかく(公欠にするには)無理。いろんな楽器があっっていろんなコンクールがあっって全部把握できないから(という理由)。(桑原志織さん、2018年8月4日)

近年、東京藝術大学の学部在学中に WFIMC 加盟の国際コンクールで入賞したピアニストは、桑原氏の他にはクライバーン国際の阪田知樹の例があるくらいで、制度が整っていないことも致し方ないかもしれない。特に日本の国公立大学では22歳まで学業優先となり、大

学院に進学してから留学や国際コンクール挑戦を考えるというスタンスが一般化しているが、先章で指摘した通り、世界的にみて日本人の入賞年齢のピークは遅くなっており、今後対策を考えるならば、早い時期から積極的に経験を積む必要がある。あるいは、すべての国際コンクールに対しては難しくても、例えば WFIMC 国際コンクール等に限定して、公欠制度などを設立することも必要ではないか。学部時代にそのようなレベルにある者は藝大の中でも一握りかもしれないが、積極的に挑戦しやすい環境を整備すれば、全体のレベルも上がるはずである。第5章で詳しく論じたい。

学校やそこでの指導についてもう一つ着目したのは、受験するコンクールの情報をどのように得るかという点である。

3. コンクールの情報や選曲について学校や先生から指導された経験はありますか。ある場合はどこで、どのタイミングですか。

京都（市立芸術大学）では椋木（裕子）先生にお世話になっていたんですけど、彼女もあんまりコンクールコンクールという感じじゃなくて、私も大学学部に入っただけには、コンクール受けたいとは言わなくて、先生もその方がいいという感じだったので。3回生くらいにベガの学生（コンクール）を受けて、選曲とかも時間も限られてたけれど、この曲がいいんじゃないという助言は先生からもあったと思います。

ドイツでは、どのコンクールを受けるかというのは、ある程度自分で探して、これ受けようと。毎回一応先生には相談して、「プログラムがあつてればいいんじゃない」と。だいたいまあ私の持ってきた曲と合うコンクールを受けたいと思っていたから、例えばエチュード弾かないといけない時だったら、コンクールだったら絶対ミスはダメとか。先生はご夫婦（で教えられているん）ですけど、奥さんはかなりたくさん受けてらっしゃって、だから色々な逸話とかを聞いて。例えばクララ・ハスキルを受けた時にまさか、ファイナルまでいけると思ってらっしゃらなくて、コンチェルトを全然練習してられなかったらしいんです。せっかくいけたのに、「やっぱり私は無理だ」って言って辞退したそうで、当時の先生にめっちゃ怒られた・・・と。そういうことから、「何があるかわからないから、最後まで準備をしておきなさい」ということとか言われました。（木下敦子さん、2018年8月3日）

芸高の頃は、伊藤（恵）先生に言われたから受けてたんですよ、コンクール。私一人でいたら、多分応募していなくて、（伊藤先生が）「これ出したら？出しなさいよ（笑）」みたいな感じで、毎年出して、結果的にそれがいい目標になっていたなど。日本音コンだけは自分でも受けたいと思っていたし、受けなきゃいけないと思ってたし、反対もされなかったです。東京音コンとピティナ特級受けて、正直あと音コンしかないかなというところもあったし。

でも、国際コンクールになると・・・先生もご自分が持ってらっしゃる情報が古くなって思っただけのものもあると思うし、毎年山ほどあるコンクールと変わっていく状況に目を向けているお時間はないですからね。国内だとあまりレベル的にもそんな

に変化はないですし、芸大という範囲の中でも色々情報があると思うけど、国際コンになったらゼロなので。

(授業とかで情報を得られたら便利?という問いかけに) そうですね。それこそアーリンク (のサイト) ができる前までは、ほんとみんなどうしてたんだろうっていうくらい。今、先生をしてらっしゃる年代の人たちは、結構話を聞くとみんな自分で保険じゃないけど書類取り寄せまくって、全部郵送で応募したりとか。(桑原志織さん、2018年8月4日)

(コンクールに関する) 授業はないよ。例えば、韓国の方ならあるでしょ、そういう本番にどうやって持っていくのか、モチベーションを高めるための授業、心理の。(日本は) ないもんね。やるべきだね。世界に日本が通用しないんだったら、それはやらなきゃダメだ。(佐藤彦太さん、2018年8月4日)

先生からこんなのあるよ?とは言われたことがあります。小さい頃は特に。もう少し大きくなって来たら、例えばアーリンク財団の本があるじゃないですか? ああいうの見たりして、どれ自分が受けたらいいかなというのを見ながらって感じ。小さい頃は、先生から指示をされていました。(学校主導では) なかったです。確かにあった方がいいかな。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

4人に共通するのは、少なくとも学校の授業で国際コンクールについて学習できたり、特別情報を得たりしなかったということである。指導者がそれまでの経験をもとに受験に対してアドバイスを送ることが基本線で、大学で国際コンクール関連といえば、掲示されている募集要項程度の情報しか得られない。桑原氏が指摘するように、毎年変遷する国際コンクール事情を、多忙極める大学教員が把握し、受験について判断することは難しい。しかしかたや、国際コンクール入賞を目指すことは、そのレベルの高低はあれども、多くの音楽を志す学生にとっての目標である。何らかの形で、学校が積極的にサポートできるようなシステムがあっても良いのではないか。また佐藤氏が指摘するように、コンクールに臨むにあたっての精神面の重要性は、誰もが認めるところであろう。スポーツ科学でもようやくメンタルトレーニングの存在は普遍的なものとなったが、より精神世界と対話しなければならない音楽の演奏において、この分野について殆ど取り上げられないのは不思議である。おそらく需要がピンポイント過ぎて、儲からないからであろう。コンクールそのものの情報だけではなく、本番に対峙する心理面も学校で学ぶことができれば、国内に居ながらも、よりスムーズに国際舞台に立つことができるようになるのではないか。これらについても第5章にまとめたい。

次に尋ねたのは、主に音源審査の可否に関して、

4. コンクール申し込みは成功するときと落選するときがあると思うのですが、成功した理由・失敗した理由についての推測をそれぞれ教えてください

という質問である。コンクールは長い目で見れば、若手ピアニストにとっての就職活動とも言えるが、結果が落選なら、いわゆるお祈りメールが来ておしまい、落ちた理由や演奏評については何も教えてもらえない。ひとつ、筆者が数年前の奨学生交流会で友人ピアニストから耳にした話が象徴的であるので紹介したい。ある英国のコンクールでは、予備予選審査向けの音源を申込者が動画投稿サイトにアップロードする必要があった。結果、彼は落選の通知を受け取って落胆したが、自分のアカウントを確認して愕然としたという。再生記録によれば、応募動画はたったの3秒しか再生されていなかったのである。これは出だしの音になるかならないか際どい長さで、運営側は再生のアリバイを作ったが、記録までは頭が回らなかったということであろう。つまるところ、このコンクールでは推薦状やコンクール歴等の書類で合否が決まっている可能性が高い。そのような内部基準であると応募者自身の手には負えないが、しかし我々受ける側が確実に努力できるのは、良い質の応募音源を録ることであろう。回答はやはり4人とも、それについての言及が中心となった。

(落ちた時は) 確実に演奏が認められなかったということも絶対あると思うし、ただ他の要因で可能性があるとしたら、録音のクオリティが悪くなかったとか、ちっちゃい自分の機械でとって、それを送って…。プロフェッショナルに録ってもらおうと音のクオリティも絶対に良いし、真剣さが録音のクオリティからは伝わるのでは。ただ、同じ録音をいろんなところに送って、こっちは通ったがこっちは通らなかったということもある。モンザ(リナ・サラ・ガッロ国際ピアノコンクール)は自分のちっちゃいレコーダーでも通った。(基準は) あんまりよくわからない。なんでかな、という。まあ運もあると思います。(木下敦子さん、2018年8月3日)

(落ちる時は) もちろん演奏で切られているという部分も大きいなと思いつつ…DVDを普段撮るとき、付け焼き刃的になってしまう時があります。

(モチベーションはコンクール本番と比べて) 全然ですね。何かの合間に昔やったエチュード引っ張って来て、短期間でやって。クオリティがあんまり良くないのは自分でわかっている時もあります。あとそれがダメなのかどうかわからないですけど、いろいろな録音を組み合わせ出しているから、結局撮っている場所とか衣装とかが違う状態を出しているというの、ある人に揃えた方がいいよ、ってアドバイスもらってことがあって。そういうのも(合否の)要素としてなくはないのかな、と。このコンクールのために準備した動画じゃないという印象はどうしても与えてしまうというのは感じています。

私、指…結構弾き方に癖が強いんですよ。あんまり手の形は綺麗じゃないんですね。ライブだと気にならない部分なんですけれど動画だとそこがすごく目立って。そのせいで苦勞している面がかなりあるので、今、改善しないと、と。そういうDVD

ならではの視点というものもありますよね。ライブで隠せないものが(あります)。(桑原志織さん、2018年8月4日)

今まで思い返して見ると、スタジオで録った録音は落ちてて、ホールとかで録った方が強い。いい演奏ができてる感じがする。ロン＝ティボーの(申し込んだ)時は、通ったんですよ。であの時はね、ちょっとミスはあったんだけど、中身は悪くなかった。東京音大のホールでね。録音録った時に、これいけるかもしれないと思った。部屋でやると残響がないからよくわからないというのね。乗れない。雰囲気でないっていうか。

エチュードなんかを入れてる時はやっぱりすごい細部の隅々まで弾けていないと厳しいものがあるかなとは思うかな。木枯らしとか、ちょっとしたところ、どうでもいいところまで聴いてんじゃないかなあと思う。録音の場合、技師も(大事)。編集しちゃいけないけれど、やっぱりマスタリングぐらいはね。音質整えることくらいはやるでしょう？切ったり貼ったり、それはできないけど。

あとボンの(ベートーヴェン)コンクールとか、セルフプレゼンテーションってのがいるでしょ？自分で動画を作って、多分よくあるコマーシャルムービーみたいなもの、ああいうのを作らなきゃいけないとか、ああいうのは全滅だね。それ(CM)もあって落ちたんじゃないかと思うね。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

まず決定的に違うのが、ビデオ審査のための準備をちゃんとして来たのかということ。だいたい受かっているものっていうのはちゃんと準備をしてるのね。二ヶ月前とか一ヶ月前からプログラムを組んで。

落ちちゃったものっていうのは、締め切り一週間前とかにちょっと(コンクールを)見つけてやってみたりとかっていうのは、だいたいアウト。準備期間が大事だなんて思いますね。(録音場所は)できる限り最大でいい状況で録れるところを選んだほうがいいです。私はホールでしか録ったことがないかな。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

全員が示唆しているのは、音源は、応募するコンクールのためだけに真剣に作成すべきであるということである。予備予選の課題は、古典派ソナタからの抜粋やエチュードなど類似していることが多く、一度録ったものを使い回してしまうこともままあるが、本来は大会ラウンドの一つと捉えて演奏すべきであろう。コンサートの演奏に近づけるために、ホールで録音する、音質を高く保つために録音技師に依頼するなど、費用はかかるが、良い環境を整えることも有用な手段となるようである。筆者自身はスタジオで録音することが多いが、確かに、後で聴き返すと細部のアラが目立つように感じる場合がある。ホールの残響は過度でなければ心地よく聴けるように設計されているものであるから、その方が美しく聴こえるのは当然の話ではある。ただホール(主にライブ録音)・スタジオ共に、同じ音源を使用した場合でも通ったり通らなかったりと、結果はまちまちで、佐藤氏が言うホール録音の完全な優位性を感じられたことはない。また桑原氏が疑問を呈する複数の録音を混合して提出

した場合も同様で、筆者の場合にはあまり影響はなかったと言える。自分の適性をうまく見極めて、経験則から通る確率が高い方法を選ぶことが大事である。

申し込みのセクションでは最後に、アンケートの結果、日本出身コンテストに自己研鑽型が多かったことを踏まえて、以下のように尋ねた。

5. アンケート調査ではコンクール選択の理由について、演奏活動キャリアにつなげるためにという意識が全体的に低いように思います。「キャリアアップのために」「勝つために」という意識は良くないことなのでしょうか。

キャリアアップというのは、本当に自分本位というイメージがあるけれど、勝つというのは他の人より上に立つということ（という意味合い）が出ている。コンクールを受ける以上やっぱり勝ちたいから、トップに立ちたいから受ける必要はある程度ある。それだけではダメだけれど、トップに立つためには自分の演奏がいい演奏であることは必要不可欠。だから、よくないことではないと思う。それが嫌だったらコンクールを受けなくていい。（木下敦子さん、2018年8月3日）

私は、受けに行くなら受かりたい。今の年齢で、もっと山ほど出して山ほど落ちたり受かったりを経験することが個人的な勉強のスキルアップにはなるだろうなというのはわかるんですけど、今まで私はあまりコンクールで失敗して来たことがなくて、幸いにも。それがむしろ安易に受けたくない、落ちたくないという意識はあって。手当たり次第に出して一次で落ちるなら、それだったら今みたいに DVD、書類で落ちて誰の目にも触れない方が（良い）。

今まで全部日本から受けに行っていたので、当然交通費もバカにならないですし、受けに行くんだったら、勝てないのに受けに行っても意味がないというところもあるので。まあ勝つために弾いているわけではないけど、自分の 100%が出せたら勝てるでしょみたいな意識はちゃんと持って行きます。

あとキャリアアップという意味では、なんだかんだ留学したりとか、奨学金に選ばれるのに手近なアピールはコンクールだなというのはありますね。どんなに演奏活動をしていても、それを聴きにいらしていただかない限り、その出来栄とか、よく弾けたとしても、聴いていない人には伝わらないし、実際の演奏活動に繋がるかというのは、国際コンクールでもまずは1位じゃないと。演奏家として（今後の活動に）繋げるというよりは、まず目先の自己アピールとしては最も有効で、ほぼ唯一の手段ではないでしょうか。（桑原志織さん、2018年8月4日）

（キャリアアップ型が）少なかった？みんなあれだね、殊勝だね（笑）。肉食系じゃないんだ。これは自論があってね、例えばコンクールってさ、有名どころでいくと賞金も高いじゃない。僕の場合は結局マリア・カナルスで一等を取れたから、残り一年の（モスクワの）学費も払えた。今演奏する時に、仕事でお金をいただいているじゃない。でもお金のことを演奏の時に考えちゃいけない、それと同じでね、受ける時は獲りたいとか自己顕示欲があってもいいんだけど、弾く時はそれを持ちちゃダメだね。そこらへんは切り離して考えてる。

音楽というのを人と人の演奏と聴き比べて優劣をつけるというところは、正直好きじゃないけど、仕方ないくらいに思っている。だから受けすぎると、心が廢れるんじゃないかと思って、特に海外に行ってからガンガン受けるようなことはしなかった。誰とは言わないけど、コンクールいっぱい受けまくって、それでなんか一個獲ればいいっていう人いるじゃない。でも受けに行くことだって、お金のかかることだし。飛行機とか滞在費とか。僕はモスクワに行ってから、狙って獲りに行くスタイルの方がいいんじゃないかと思ってたね。その方が長く準備できるしね。

まあリスクはあるよね。その本番で失敗したらアウトだから。だからそれに負けないように、本番でそのプログラムでリサイタルやったりとか、まあそういうので対策はしたんだけど。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

勝つためにやるっていうのは、別に悪いとは私は思わなくて、逆に勝ちたいがためにいろいろなことを努力していくじゃないですか。だから自分の実力ももちろんレベルアップしていけるだろうし。目的が勝つだけ、になっちゃうとどうなのかなっていうのはあるけど。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

各氏とも、勝つ目的意識があることを認め、それと自分の音楽との折り合いをうまくつけている様子が窺える。木下氏は、コンクールに勝つことは自分自身の挑戦という意味合いだけでなく、他者よりも優れることであると定義し、コンクールを受けるからにはトップに立ちたいという思いは大切であると述べている。須藤氏は、勝つ目標のための努力こそが自分のレベルアップにつながると主張した。まだ20代前半である桑原氏が、若くして世界トップクラスの成果を挙げることが出来た理由は、重圧や恐怖を過度に意識せず、100%の実力を出せば勝てるという確信があるからである。高い力量と才能にバランスの取れた自信が備わってこそ、良い結果を出せる好例と言える。また佐藤氏は、勝つ意欲を持ってコンクールを受験し、本番を成功させるための対策や準備を行うことは大切であるが、演奏の瞬間には勝つ意識があってはいけないと説く。

佐藤・桑原両氏の話から、彼らには、コンクールに臨む際の心理的な備えや切り替えの技術が発達していることが推測できる。それは、先生からの教えに、彼らが経験・学習したことが加わって独自に積み上げられたものである。スポーツの世界でメンタルトレーニングの重要性が叫ばれるようになって久しいが、音楽はどうであるか。高い技術を長い期間訓練した上で戦うことが求められる若手ピアニストにとって、コンクール本番の瞬間に思うような力が発揮できないことは大きな悲劇である。それも実力のうち、という言葉で片付けてしまっても良いのであろうか。我々音楽家は、作曲家への理解や曲の解釈といったことには積極的に目を向けるが、特に難関コンクール入賞がキャリアへの必須条項に近い現代にお

いては、桑原氏の言葉を借りれば、「自分の 100%」を出すことについて科学的に研究・学習し、技術として取り入れる必要に迫られている。

2-3. レパートリー選択についての質問

コンクールの準備段階で恐らく最も重要なのは、レパートリー選択である。もちろん自分の得意な作品を効果的に聴かせることも大事であるが、一つの方向に偏ることなく、演奏家として必要な、様々なスタイルの作品を高いレベルで表現し、完成度高く演奏することをアピールする必要がある。最初の質問は【コンクールを受験するときあなたにとって、レパートリー選択はどのくらい重要ですか】と尋ねた。結果は下表の通りとなる。

コンクールを受験するときあなたにとって、レパートリー選択はどのくらい重要ですか									
	非常に重要	ある程度重要	あまり重要でない	全く重要でない		非常に重要	ある程度重要	あまり重要でない	全く重要でない
合計	65.6%	33.7%	0.6%	0.0%	男性	68.5%	31.5%	0.0%	0.0%
					女性	64.2%	34.9%	0.9%	0.0%
15-19 歳	71.4%	28.6%	0.0%	0.0%					
20-24 歳	60.6%	39.4%	0.0%	0.0%	WFIMC 国際入賞	75.0%	25.0%	0.0%	0.0%
25-29 歳	69.0%	29.6%	1.4%	0.0%	非 WFIMC 国際入賞	66.7%	32.1%	1.3%	0.0%
30-34 歳	63.5%	36.5%	0.0%	0.0%	国際コン未入賞	61.5%	38.5%	0.0%	0.0%

どの年代でもほぼ 100 パーセントが非常に重要、ある程度重要と回答し、日本出身コンテストの共通認識になっていると言える。特に入賞歴が上がるにつれて、非常に重要の割合は高まる。

続いては、弾き慣れていて自信がある、あるいはblankが空いても短い期間で復帰させることのできる曲、いわゆる持ち曲についてである。ある程度持ち曲がそろわなければ、複数のコンクールに参加し続けることは難しい。【コンクールで必ず選択する、または選択したい特定の作品、いわゆる持ち曲がありますか／はいと答えられた方はどの分野にお持ちでしょうか、当てはまるものを全て選んでください】と設問した。

筆者は修士研究で、特定の作曲家作品のみをテーマとしない WFIMC 加盟の 44 コンクールについて、どのような作品が課題となっているかを調査したが、バッハの平均律はヨーロッパを中心に全体の約 20% (バロック作品という括りなら約 36%)、古典派の作品は全体の約 81%、練習曲は約 52%、ロマン派の大作は約 32%、印象派 (代わりにバルトークが選択できるものも含む) は約 18%、年代指定のある 20 世紀・21 世紀の作品は約 23%のコンクールで、それぞれ課されていた。それらの作品分類に、殆どの場合、ファイナルで弾かなければならないピアノ協奏曲を加えて、選択肢を作成した。

回答は次頁冒頭表の通り。まず有無については、78%が「はい」と回答し、やはり非常に多くのコンテストが、持ち曲でコンクールに臨むという結果となった。男女別でも殆ど変わらない割合である。年代別で見ると、25歳以降に明らかな増加が見られる。歳を重ねるにつれて曲が蓄積されるのは自然なことであろう。ただ、20代前半が6割前半とやや少ないのは気になるところである。日本出身者の入賞年齢ピークが遅いことと関連がある可能性がある。入賞歴別でも、未入賞と入賞者2層とでは微差が生じている。

持ち曲の内容に関しては、エチュードが65.4%でトップ、古典派のソナタとロマン派の大作が5割弱、近現代作品が4割強で、バッハの平均律は35.4%、協奏曲は最も少なく、3割を切る結果となった。この調査で特徴的であったのは、男女別の割合がかなり違う

コンクールで必ず選択する、または選択したい特定の作品、いわゆる持ち曲がありますか							
	はい	いいえ	無回答		はい	いいえ	無回答
合計	77.9%	22.1%		男性	75.9%	24.1%	
				女性	78.9%	21.1%	
15-19歳	71.4%	28.6%					
20-24歳	63.6%	36.4%		WFIMC国際入賞	80.0%	20.0%	
25-29歳	81.7%	18.3%		非WFIMC国際入賞	80.8%	19.2%	
30-34歳	82.7%	17.3%		国際コン未入賞	73.8%	26.2%	

あるとお答えの方は当てはまるものを全て選択してください						
	バッハの平均律	古典派のソナタ	エチュード	ロマン派の大作	近現代の作品	協奏曲
合計	35.4%	49.6%	65.4%	48.0%	41.7%	28.3%
男性	43.9%	68.3%	58.5%	56.1%	51.2%	36.6%
女性	31.4%	40.7%	68.6%	44.2%	37.2%	24.4%
15-19歳	20.0%	0.0%	80.0%	60.0%	60.0%	0.0%
20-24歳	9.5%	42.9%	47.6%	47.6%	42.9%	14.3%
25-29歳	34.5%	50.0%	60.3%	46.6%	37.9%	27.6%
30-34歳	51.2%	58.1%	79.1%	48.8%	44.2%	39.5%
WFIMC国際入賞	43.8%	50.0%	75.0%	31.3%	43.8%	43.8%
非WFIMC国際入賞	38.1%	50.8%	68.3%	50.8%	44.4%	31.7%
国際コン未入賞	29.2%	47.9%	58.3%	50.0%	37.5%	18.8%

ということである。男性は、ほぼすべての項目において女性より上回り、特に古典派のソナタでは30%近くの差がある。女性は、7割弱が選択したエチュードが、選択肢の中で突出して高く、唯一男性を上回るが、残りの選択肢ではすべて50%未満となり、協奏曲では24.4%まで落ち込む。年代別に見ると、サンプルの少ない10代を除いて、基本的に歳を重ねるごとに増加傾向にあることに変わりはないが、ロマン派の大作、近現代の作品については年代間の差はあまり見られない。年齢が上がるにつれバッハ・古典ソナタ・エチュードを固定しつつ、ロマン派や近現代に関しては場合に応じて新しい作品を入れ、プログラムの中で新曲旧曲のバランスを取るのが、日本出身コンテスト全体の傾向と言える。

入賞歴別に見ると、バッハの平均律 は入賞歴が上がるごとに増加傾向、古典派のソナタ はほぼ同じ、エチュード は全体に高く、高入賞歴では更なる増加傾向を示し、近現代 では未入賞者が減少傾向にある。ロマン派の大作 は、WFIMC 入賞層が突出して少ない唯一の項目で、特徴的である。このジャンルは、大きいコンクールを複数受けることを考えると、時間や作曲家指定などから完全に固定しにくい面があることや、ミスの有無や細かい精度よりも構成力や内容の充実性を重視されるため、技量がある者にとっては使い古した作品よりも、経験を積んだ上で新しい作品に取り組む方が良い内容で演奏できる可能性がある、といった理由が原因として考えられる。またこの比較で決定的に違うのが、協奏曲 の割合である。未入賞層は 18.8%に過ぎないのに、WFIMC 入賞層では 43.8%と大きく差がついている。WFIMC 入賞者のレベルでは、複数の協奏曲をレパートリーにしていることは当たり前で、数字以上にその差は大きいと見られる。確かに殆どの場合、協奏曲は最終ラウンドにたどり着かないと演奏できず、小さいコンクールならば準備する必要もない。目指すコンクールの違いも数値差に表れているのであろうが、この結果から見れば、まず協奏曲のレパートリーを持ち、練習ではソロに時間を注力するパターンを作ることが、大きなコンクールで入賞することに向けては、大きな助けになると言える。

最後は、【コンクールであるからこそ、コンサートと違って演奏したい特定の作曲家や作品はありますか／はい、の方はその具体例と、もしよろしければ理由を教えてください】【コンクールであるからこそ、あえて演奏しない特定の作曲家や作品群はありますか／はい、の方はその具体例と、もしよろしければ理由を教えてください】という対を成す質問である。第 1 章で述べたようにマコーミックの論文では、コンテスタントがコンクールのために醜悪な技巧的作品を学習すると論じられていたが、果たしてそのようなピアニストばかりなのであろうか。またコンクールでは避けた方が良い作品の組み合わせやプログラミングは存在するのではないか。緩急や変化に乏しいプログラムや、ノクターンの全曲演奏などピアニストとして出来ることが少ないと思われる構成は、不向きであろう。

まず前者の質問について、結果は下表の通りで、はい と回答した割合はどの層でもお

コンクールであるからこそ、コンサートと違って演奏したい特定の作曲家や作品はありますか							
	はい	いいえ	無・他		はい	いいえ	無・他
合計	17.2%	82.2%	0.6%	男性	13.0%	87.0%	
				女性	19.3%	79.8%	0.9%
15-19 歳	0.0%	100.0%					
20-24 歳	12.1%	84.8%	3.0%	WFIMC 国際入賞	10.0%	90.0%	
25-29 歳	21.1%	78.9%		非 WFIMC 国際入賞	21.8%	78.2%	
30-34 歳	17.3%	82.7%		国際コン未入賞	13.8%	84.6%	1.5%

しなべて低く、全体では17.2%にとどまる。少なくとも日本出身コンテストには、マコーミックの主張は当てはまらないようである。はいの回答者にはどのような曲を選択するか、理由を含めて尋ねたところ、一般的に難解とされ、コンサートではお客さんが退屈する危険性のある作品、競技性を重視し、点数が出易い＝聴き映えする、または評価が割れにくいと感じられる作品、そして、自分が得意な作品、に大別された。次頁にいくつか抜粋する。尚、アンケート回答票の原文をそのまま引用するが、明らかな誤字・脱字の場合には、筆者が訂正を加えている。

<<コンサート向けには難解な作品をコンクールで演奏したいという意見の例>>

シューマンのソナタ1番、3番。長くて難解なため、コンサートでは使いにくい（曲に集客力もない）が、自分が一番好きな曲であり、思いの丈を込めることができるから。（好きな曲でないと、モチベーションを保てない）。また、ディテールを凝れば凝るほど、その努力が報われる（採点的に）から←これは多分ですが。。。 （回答番号3番）

現代曲。演奏会では好んで聴かれなくても、プログラムに入れるとインパクトがある。また新しい作品ほど演奏される機会が少なく、固定概念が未だ根付いていないため、解釈への評価も少し寛容な気がする。（回答番号57番）

メシアン、スクリャーピン、ヒナステラ、プロコフィエフ...等々の近現代の作曲家。コンクールの場合は時として審査員受け（友人受け）する必要があり、退屈している審査員の目が覚めるような曲も必要である。また現代曲は、演奏効果が高い（技量不足を誤魔化すことができる）曲も多数ある。（回答番号176番）

<<点数の出やすい作品、意見の割れにくい作品を演奏したいという意見の例>>

リストの作品。曲想が映えるものが多く点数が取りやすい印象がある。また、バッハやショパンなどのように審査員によっての解釈の偏りが少ないので、審査が分かれにくい。そして、上記の特性がありながら色んな演奏時間の楽曲があるので他のプログラムと抱き合わせて使いやすい。（回答番号60番）

コンクールでは、より映える曲目、他人との甲乙を付けられるということを鑑みて、技巧的にも難曲を選ぶ傾向にあるように思う。ex. 同じベートーヴェンのソナタでも後期（op.110など）は音楽的にも難しく、コンクールでは点数としては伸びにくいですが、コンサートではぜひ積極的に演奏したい。近現代ならコンクールではプロコ、スカルボなど技巧が華々しい曲を選ぶことが多かった（回答番号147番）

近現代の作品。理由は勝つため、インパクトを残すため（回答番号200番）

<<自分が得意な作品をとりわけ演奏するという意見の例>>

自分の得意だと思っている作曲家（わたしの場合シューマンやショパン）の作品はほかの作品

よりも自信があったり、聴いてほしいと思う気持ちが強いため、プログラムとして入れたいなと思います。（回答番号79番）

スクリービン、自分の感性をそのまま出せるから（回答番号221番）

一方で、あえて避ける作曲家や作品はあるかとの問いには、下表の通り、はいといいえが全体でほぼ半数ずつに分かれることとなった。男女別集計では、女性の方が、わずかに

コンクールであるからこそ、あえて演奏しない特定の作曲家や作品群はありますか							
	はい	いいえ	無回答		はい	いいえ	無回答
合計	49.1%	50.9%		男性	44.4%	55.6%	
				女性	51.4%	48.6%	
15-19 歳	14.3%	85.7%					
20-24 歳	54.5%	45.5%		WFIMC 国際入賞	50.0%	50.0%	
25-29 歳	57.7%	42.3%		非 WFIMC 国際入賞	50.0%	50.0%	
30-34 歳	38.5%	61.5%		国際コン未入賞	47.7%	52.3%	

はいが高い傾向が見られる。特に大きな変化があるのは年代別の割合で、数の少ない10代はともかく、30代になるといいえが逆転して多数となるのは興味深い。コンクールであっても、勝つために謀を巡らすよりも、芸術家として表現したいものを明確に提示することが求められる年齢という自覚があるのではないであろうか。また、はいの回答者に尋ねた具体的な作品と理由については、自分に合わない作品（苦手・難しすぎる）、演奏効果が高くない（叙情的・長大・簡単すぎる）作品、有名すぎる作品、審査員の解釈や好き嫌いが分かる作品、点数が出にくい⇨減点されやすいと感じる作品、に大別された。以下に一部引用する。

<<自分に合わない、または苦手な作曲家・作品を演奏しないという意見の例>>

フォーレの作品 自分の特色が発揮されないため（回答番号35番）

苦手意識の強いショパンの作品は、選びません。（回答番号51番）

近現代の作曲家が特に私は苦手意識があり、プロコフィエフやラヴェルは人前で弾くことに、怖いと感じてしまう事もあり、避けてしまいます。（回答番号79番）

シューベルトの作品（特に大きなもの）は、暗譜、テンポなどのコントロールが難しく、音楽も繊細な内面的表現が要求されるので、大きな舞台では、身体が縮こまってしまうたり、その音楽の素晴らしさだけでなく、自分のピアノに対しての能力も、表現しづらい印象があります。デュナーミクや音色、キャラクターなどにメリハリがある、他の作品に比べると、ぼやけてしまう危険性があるかと。（回答番号85番）

リストの作品。自分の良さが出ない。（回答番号151番）

モーツァルト 自分の音楽性に合っていないと感じるため (回答番号169番)

ブラームス ピアノソナタ第1番3楽章等に物理的に演奏困難な箇所があり(手の大きさ)、個人的に好きな曲なのですがコンクールであえて選曲はしません。(回答番号184番)

<<演奏効果が高くない作品を避けるという意見の例>>

パツと聞いたときに、あまり聴きばえがしないものは控えています。(回答番号 15 番)

終始緩やかな表情の曲などは、決められたコンクールの演奏時間内では緩急が乏しくなってしまう自身を発揮出来なくなってしまう場合があるから。(回答番号36番)

必ず弾かない、というわけではありませんが、ショパンの後期の作品やフォーレの作品などは、抽象性がとても高い感じがするので(単純明快な表現のみでは成り立たないので...)、大きなホールで弾く場合やコンクールで強いプレゼンテーションを必要とする場合にはあまり向かないような気がします。(回答番号64番)

音楽的に素晴らしい作品だとしても、あまり技巧的ではない、あるいは停滞しやすい作品は避けます。(回答番号 78 番)

自由プログラムの中でのモーツァルト、JSバッハ。失敗した経験と、基本的にある程度華やかな技術的闊達さをアピールすればするほど有利であるというコンクールという場の性格上、これらの作曲家の作品は大抵の場合そぐわないと判断したため。(回答番号101番)

シューベルト作品。他のロマン派作品と比較した場合、演奏効果の部分で不利だと考える。シューベルト作品をとりあげる場合、よっぽど印象に残る演奏をする自信があることが絶対条件。(回答番号 173 番)

<<有名すぎる作品は演奏しないという意見の例>>

アンコールピース、ポピュラー過ぎる作品は中身の薄いものが多いので。(回答番号37番)

コンサートにおいては、例えば誰もが知っている有名曲など、お客様が好む曲をプログラムに入れる必要がある場合もありますが、コンクールではそれらの曲を避ける傾向にあります。(回答番号 39 番)

シューマン謝肉祭。シューベルト後期ソナタ。ベートーヴェン三大ソナタと後期ソナタ。評価が付きまとうコンクールにおいて、どの音楽家、演奏家においてもこだわりが強いとされる"the 名曲"は極力選ばないように注意している。どれだけ熱意を持って解釈を持って演奏しても、"嫌い"と言われた経験から選べなくなった!でも、"この曲となら心中できる!"と思えるくらい愛する作品は、敢えて選ぶようにしている。その強い思いが舞台で味方となることがあるので。(回答番号 56 番)

有名な曲は皆さんが知っているので避けたいです。(回答番号 77 番)

ショパン。誰もが知りすぎて、聴く側の理想とする音に反した時点で欠点になってしまうから。(回答番号 200 番)

<<審査員の解釈が分かれそうな作品を演奏しないという意見の例>>

フォーレ: 個々の意見の相違で審査員評が割れやすい。(回答番号4番)

ショパンの作品は、得意不得意というよりも審査員の方の中にこだわりが強い方がいると点数が激しく割れることがよくある気がするので、積極的には選ばないです。(回答番号5番)

特定の作曲家ではありませんが、、、主にロマン派に多いかと思いますが、解釈に幅があり聴き手各々の理想像が出来上がりやすい作品は、コンクールではなくコンサートで演奏するようにしています。(ブラームス間奏曲、ショパンノクターンなど)(回答番号10番)

バッハは一人一人見解が分かれる印象があるため、課題として指定されている場合を除いて選ぶことはない。(回答番号14番)

現代音楽や実験的な要素を含む曲 —— 現代音楽に理解のある審査員と理解のない審査員がいるため(回答番号26番)

バッハやショパン、また国によって(フランスであればラヴェルの道化師の朝の歌なども?)は審査員によって解釈の違いが大きいこと、それ故に点数が分かれやすいことが多いので、なるべく選択しない(課題として指定がない限り)。(回答番号60番)

ベートーヴェンソナタOp.101以降 審査員の先生方それぞれにこだわりがある作品を避けたいから。(回答番号103)

自分の好みの演奏が審査員によって分かれて、場合によって極端に低く評価されなような作品。例えばバッハ=ブゾーニ編曲シャコンヌでは、私は多少自由に解釈している演奏が好きで、実際そのような演奏で著名な国際コンクール(浜松、クライバーンなど)で入賞している人もいるのだが、バッハが原曲なのだからどこまでもin tempoという先生も必ずいて審査員によって当たり外れがあるのでとは思っているから。(回答番号190番)

<<点数が出にくい作品を避けるという意見の例>>

ベートーヴェンの熱情、後期ソナタ、ショパンのソナタ第3番→審査員の先生方、これらの曲が好きすぎて思い入れが強く、採点が辛くなると聞いた為。(回答番号3番)

モーツァルト、ショパン。理由は減点がされやすい、ケチがつけやすい印象がある(回答番号40番)

モーツァルトの作品。なかなか一定の評価を得るのが同じ古典派のベートーヴェンと比べて難しいと思うから。(回答番号52番)

モーツァルトのK.279-284 余程の出来でなくては、認められにくいので不利(回答番号85番)

ショパンの作品は避けることが多かった。やはり各審査員それぞれにこだわりがあり、相当上手く弾かなければ高得点につながりにくいイメージがあるため。(回答番号147番)

Chopinの曲は選びません。審査員の方によって "自分のChopinの解釈" が色濃く点数に反映されます。また同じ理由で、ブラームスの小曲類もコンクールには向かないのかなと感じています。(回答番号162番)

自由記述で挙げられた作曲家を集計したところ、ショパンが26人で最多となり、次いでモーツァルト10人、シューベルト8人、ブラームス6人、J.S. バッハ5人と続いた。

これらの結果を総合すると、日本出身のコンテスタントは、コンクールに勝つために何か特別な作品を演奏することは少ないが、主に審査員の存在を意識して、ある特定の作曲家や作品をプログラムから避けることを考える層が半数程度存在していると判明した。

では WFIMC 入賞者の4人は、コンクールのレポーターについてどのように考えているのであろうか。特に持ち曲についての見解や、選曲における成功・失敗それぞれの体験を探るため、以下の質問をした。

- | |
|--|
| 6. コンクール演奏の中で持ち曲を持つメリット・デメリットを教えてください。 |
| 7. 経験上、選曲で入賞につながったと思う点、失敗につながったと思う点はそれぞれありますか。ある場合には具体例も教えてください。 |

まずは質問6. 持ち曲についての回答である。

メリットは、何回も弾いているから自分の中に深く染み付いて安心して演奏できる。例えば、他のコンクールでこれを弾いたから通ったという思い出というか、経験もあるし、だから大丈夫だという安心感も。デメリットは特にないな。(木下敦子さん、2018年8月3日)

デメリットはだんだん荒くなること、フレッシュさもなくなるし、この間やったからと言って、練習にける時間も少なくなってくるかもしれないです。でもなんだかんだ舞台に何度も乗せてる曲は、安心感・安定感が比例してあると思うので、たとえ練習期間が短くて急ピッチで戻したとしても、ある程度安定した土台は(ある)。人にもよると思いますけどね。私は古い曲を戻すのは全然得意じゃないので、エチュードとかは毎回ゼロからやり直してみたいな感じになるんですけど。(桑原志織さん、2018年8月4日)

やっぱり、持ち曲持っていると他の曲に割けるじゃない。例えば新しく、特定の課題を弾かなくちゃいけないとかさ、そういうのに時間割けるし。そこが一番大きいんじゃない。あとは他の仕事もあるから、コンクール用のプログラムとかね、持っていると結構使い分けられていいなあと。楽だよ、準備するのが。

デメリットは、演奏に慣れが出てくるとそこに油断が出たりとかさ、それがすごいマンネリ化したものになりかねないからね。まあだから、何年も何年も(ずっと同じ曲)っていうのはちょっと危険かもしれないね。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

持ち曲は、自分の得意なもの、これはもう絶対というのはみんなあると思うんだけど、メリットとしては、もちろん何回も弾いてきているし、自信もあるからすごくいい演奏をしやすいと思う。デメリットとしては、審査員の先生が全く違えばいいんだけど、毎回同じ審査員の先生だとまたこの曲弾いてるのかと思われちゃうと、レパトリーがこの人ないのかな？と思われなかなと。あとは、同じ曲ばかり弾いて来て新鮮さがなくなる感じかな。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

メリットとしては、総じて準備面での優位性や本番での安心感があげられている。その作品を持ち曲であると自認する基準や水準は各々違ってくるが、やはり早い時期から、コンクール主要レパトリー群については持ち曲を作るよう努力しておくべきである。日本出身コンテスタントにより高い成果を期待するためには、アンケートの結果も踏まえると、20代前半の持ち曲保持割合をより高める必要があるのではないかな。特に協奏曲は現状、入賞者と未入賞者でかなり比率に差があるが、要求される演目はコンクールごとにあまり差がないことを考えても、持ち曲の利点は大きい。例えばチャイコフスキーの第1番やラフマニノフの第2番は、汎用性が高く、演奏効果の高い協奏曲である。またコンクールに強い・弱いというイメージを抜きにすれば、ショパン・リスト・シューマン等のロマン派の協奏曲は非常に多くのコンクールで選択肢に含まれている。これらに加えてモーツァルトのメジャーな作品や、ベートーヴェンから少なくとも1曲を持っておけば、ほぼ網羅できることになる。

一方デメリットについては、桑原・佐藤・須藤の3氏がマンネリ化、フレッシュ、新鮮さといった言葉を使って、繰り返し準備・演奏することによる本番でのインスピレーション不足を指摘している。筆者も全くの同感であり、コンクールに限らず長年苦しめられてきた自身の課題でもある。打破するためには、毎日少しでも向上し、常に新しい自分で曲と向き合い続けるしかない。また須藤氏は、特定の参加者が特定の作品を繰り返して演奏することは、コンテスタントと同様に複数のコンクールを渡り歩く審査員にとって好ましいことではないと述べている。審査員は膨大な演奏を聴くため、個々の演奏や選曲のことはコンクールが終われば殆ど覚えていないかもしれないが、印象深い演奏をすればするほど、同じ審査員がいる他のコンクールでその作品を演奏する危険が高まることは確かである。

ちなみに様々なコンクールを持ち回りで審査する、似たような顔ぶれの審査員のことを、我々コンテスタントの間ではマフィアと揶揄するが、コンクールの常任審査委員長や音楽監督が、他コンクールの同列の役職者を互いに呼び合うことが繰り返されるため、閉鎖的なコミュニティが形成される現象が起きる。他コンクールの審査委員長や音楽監督を呼ぶのは1人までと推奨する国際音楽コンクールへのすすめが WFIMC で制定されたのは、2011

年のことであり、まだ日が浅い。

閑話休題、レパートリー選択における成功と失敗の実例はどうであろうか。4人に再び聞いた。

コンクールってある程度テクニック、指が回るとか技巧的であるというのも結構大事だと思うし、私はあんまり得意な面ではない。あえてコンクールに強そうだなと思う曲を選んだりもすることもあるけど、結局それがあんまり自分に合っていない曲だったらそれでも結果が出なかったりする。モンザ（リナ・サラ・ガッロ）でも、シューベルトの D. 960 を弾いた、フリーの3次で…一般的にはやっぱりあんまりコンクール向きではない気が…でも私は自分自身の良さが出せると思ってたから、思い切ってそれを弾いて次に進めた。結局自分の良さが出せる曲を選ぶのが大事なのかな。

イタリア（の別のコンクール）で入賞できなかったときに、ベートーヴェンの（op.）111 を弾いた。たまたまそのゼメスターに中間リサイタル試験があつて、111 が新しかったから練習のために（コンクールを）受けた。試験（まで）はあと一ヶ月くらいあつてその前になんとか形にして仕上げを持っていったけど、111 とかってすごい深く読まないといけないのに、あんまり弾き込めてなかったから、審査員の先生に話を聞くと、その曲が原因で最後までいけなかった。そういうのが理由で落ちることもあるよね。（木下敦子さん、2018年8月3日）

私の選んでいる曲は、コンクールとしてはメジャーピースっていうんですか、ラフマのソナタ2番、ペトルーシュカとかダンテもそうだと思いますし、みんなが弾く曲というのはあると思うんですけど、ヴィオッティ受けた時だけ、本当にたまたまセミファイナルの朝一でシューベルトの D. 958 を弾いたんですよ。全体で12人くらいいたんですけど、みんなロシアもの、コンクール！みたいな感じで。たまたま毛色の違う、正統派音楽で攻められたことは、今回プログラミングで得したなと思いました。そもそもセミファイナルの時点で女性が私だけだったので、男性陣と同じような曲を弾いて、もちろん違う良さを出せるとは思いますが、やっぱりパワーとかテクニックで劣る面もあるし、朝イチだからピアノも鳴らないしというのもありますから。

あと弾き古された曲って、いい曲だからみんな弾きたいと思ってて、いい曲だからアピールできるということもあると思うので、やっぱりそういう曲を、自分の、まあなかなか100%とはいかないですけど、最高の演奏ができれば、音楽の良さが助けてくれるものって大きいから、みんなが弾くから敬遠しようっていうのは、あんまりいい考えじゃないかなと思います。もちろん、（自分にとっての）向き・不向きというので選ぶというのはありますけれど。だから、メジャーなピースを弾くことについては、誰も知らないような曲を弾くよりは、私は（いいと思います）。国際的な審査員の先生の中には、誰も知らないような曲でも絶対知ってらっしゃる先生がいらっしゃるし、それ（知名度の低い曲）が弾ければいいだろうということにはならないように。

あとやっぱり一次の印象って後ろにつながるじゃないですか。マリア・カナルスは一次から全部をプラスして採点するという方式なので、一次がギリギリで受かると、二次でいい演奏をしてもボーダーになっちゃって落ちたりするっていう風に聞くので、で、だいたい一次で古典弾かされるじゃないですか。それは大きいですよ。あとセミファイナルとかでも、ガンガンロシアものばかりじゃなくて古典入れていると、

周りがガンガン弾いている時には聴いている方としては救われるから、上手ければそれはすごい評価になると思うんです。(桑原志織さん、2018年8月4日)

ロン=ティボー受けた時は、亡くなった先生(ベルリン芸大のラピツカヤ教授)にね、「彦大、一次でこのプログラムはダメだよ」という話がね。ドビュッシーの前奏曲とダンテを組み合わせたプログラムを作ったんだけど、「あれじゃあねえ、聴きたいと思わないよ」とって。

モスクワに行っただいぶ考えが変わったから思うんだけど、パッとプログラム見た時に、聴きたいな、とか、なんか関連がある、とか、ちゃんと順序組み立てて組んだプログラムか、とか、すごい見るんですよ。リサイタルも、そういうので魅力感じない人には行かない。何かの作曲家をメインにうまくまとめているとか、前後の調性関係だったりとかさ。美学っていうかな。すごい大事だと思う。

だからカナルス獲った時はね、先生と相談して、順番もこの次はこれにしようとかね。だからこそ二次の時に、プログラムの順番変更を無理矢理させられてね、すごい怒り狂ったんですよ。いきなりこれを最後に弾けとか言われてね。しかも出る1分前にとこだよ。それで、はい出番出番とか言われて背中押されてさ。そんな経験もしました。

やっぱりそういう風にちゃんと考えてやると、弾く時のモチベーションとか心の移り変わりとかさ、色々あると思うんだよね。例えばほら、バッハ・エチュードにあと何か、というプログラムの時も、その組み合わせは大事な気がする。ただ持ってる曲を並べましたっていうのと、ちゃんと考えましたというのはわかるよね。水と油みたいなのが組み合わせられてもなってるね。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

入賞に繋がった時っていうのはだいたい、まあこれ言っちゃうとあれかもしれないけれど、よく弾き込んでる曲やよく勉強している曲で、失敗しちゃったなというのは、まだその曲自体が浅い。一ヶ月くらいしか経ってないとか新しい曲を持っていて冒険しすぎちゃった場合かな。当たり前っちゃ当たり前なことなんだけど。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

木下氏は、コンクール向きではないかもしれないが、自分の良さを発揮できる曲をメインに据えて演奏したことが通過の要因と話す。本来はヴィルトゥオーソ作品も得意とする桑原氏は、同じくシューベルトソナタを演奏して成功を収め、周りとの対比が有利に働いたと述べている。また古典派作品についても、審査員の目線を変える構成が可能で、効果的なプログラミングになることを指摘した。2氏の回答は、一般にはコンクールに不適合とされている作品でも説得力ある水準で表現できれば、その稀少性が大きな武器となることを示唆している。つまり自分の長短所をよく把握し、強みを生かすことが最も大切なのである。

桑原氏は、よく演奏される作品は、完成度や質が高いものであり、選択すること自体が奏者の助けになるとも述べる。あまり知られていない、例えば現代曲を大量に並べるようなプログラムは、アラが見えない・ごまかしが利くと思われがちであるが、レベルの高い次元で

は、小手先は通用しない。佐藤氏はより踏み込んで、プログラム構成に哲学が必要と訴える。持ち曲には非常に肯定的な氏であるが、単純に演奏できる作品を並べるだけでは不十分で、調性の関連・曲順なども重要な要素であると述べる。筆者はここに、そのプログラムが本人にとってフィジカル・内面の両方で消化出来るものであるかという視点を加えたい。コンクールでは演奏会と違って、全ての曲毎にお辞儀や休憩を取ることはできない。従って続けて演奏した際にまとまりがよく、かつ身体的に無理のない構成にする必要がある。また、佐藤氏の逸話にある出番直前の曲順変更のように、本来あってはならないことが起こり得るのが、国際舞台であることも忘れてはならない。

須藤氏は、持ち曲の重要性をより強調し、木下氏も新しい作品を学習する際の弾き込みの大切さを述べている。新曲をコンクールで演奏する場合には、綿密に計画を立て、少なくとも半年前から学習するくらいの余裕を持つべきであろう。

2-4. 練習に関する質問

練習はもちろん、コンクール準備において必要不可欠なパートであるが、本研究は、どの練習がどのように効果的かを解明することを目的にはしないので、アンケート調査のみにとどめた。絶対的な解決法はなく、経験にしたがって、あるいは身体的な変化によって少しずつその内容も変わるものである。まずは【コンクールの準備をする際、一日の平均練習時間は競争のない本番の時と比較してどうなりますか】と尋ねた。結果は、

コンクールの準備をする際、一日の平均練習時間は競争のない本番の時と比較してどうなりますか								
	非常に長く	長く	少し長く	変わらない	少し短く	短く	非常に短く	無・他
合計	7.4%	28.8%	30.1%	32.5%	0.0%			1.2%
男性	5.6%	27.8%	31.5%	31.5%				3.7%
女性	8.3%	29.4%	29.4%	33.0%				
15-19 歳	0.0%	28.6%	14.3%	57.1%				
20-24 歳	9.1%	12.1%	39.4%	36.4%				3.0%
25-29 歳	2.8%	36.6%	28.2%	31.0%				1.4%
30-34 歳	13.5%	28.8%	28.8%	28.8%				
WFIMC 国際入賞	5.0%	40.0%	25.0%	30.0%				
非 WFIMC 国際入賞	6.4%	30.8%	26.9%	34.6%				1.3%
国際コン未入賞	9.2%	23.1%	35.4%	30.8%				1.5%

非常に長くなる・長くなる・少し長くなる の合計が 66.3%となり、3 分の 2 近くのコンテスタントが、普段よりも長くなることがわかった。変わらない も 32.5%と、一定数をマークしたが、短くなる回答者はいなかった。男女比も傾向に殆ど変わりはない。年代別に見る

と、20代後半・30代前半の長くなる・非常に長くなるの合計が高い。日本人入賞者の入賞年齢のデータと照らし合わせると、この年代はより難しいコンクールに挑戦しているため、練習時間が長くなっている可能性が考えられる。入賞歴別で長くなる・非常に長くなるの合計を見ると、未入賞者は32.3%、非WFIMC入賞者は37.2%、WFIMC入賞者は45%となり、入賞歴が高いほど、より長時間になる傾向となっている。

次に練習内容について、【コンクールの準備をする際、練習内容は競争のない本番の時と比較して変わりますか/変わる、と回答した方は、当てはまるものを全て選択してください】と質問した。結果は下表の通りで、全体では変わる・変わらないがほぼ拮抗したが、

コンクールの準備をする際、練習内容は競争のない本番の時と比較して変わりますか							
	変わる	変わらない	無		変わる	変わらない	無
合計	48.5%	51.5%		男性	40.7%	59.3%	
				女性	52.3%	47.7%	
15-19歳	57.1%	42.9%					
20-24歳	48.5%	51.5%		WFIMC国際入賞	45.0%	55.0%	
25-29歳	42.3%	57.7%		非WFIMC国際入賞	48.7%	51.3%	
30-34歳	55.8%	44.2%		国際コン未入賞	49.2%	50.8%	

変わる、と回答した方は、当てはまるものを全て選択してください									
	A	B	C	D	E	F	G	H	他
合計	55.7%	44.3%	38.0%	73.4%	1.3%	35.4%	22.8%	19.0%	17.7%
男性	36.4%	31.8%	22.7%	63.6%	0.0%	36.4%	18.2%	9.1%	13.6%
女性	63.2%	49.1%	43.9%	77.2%	1.8%	35.1%	24.6%	22.8%	19.3%
15-19歳	25.0%	50.0%	50.0%	75.0%	0.0%	25.0%	25.0%	25.0%	0.0%
20-24歳	43.8%	31.3%	18.8%	68.8%	6.3%	37.5%	6.3%	12.5%	0.0%
25-29歳	56.7%	56.7%	40.0%	70.0%	0.0%	36.7%	26.7%	20.0%	20.0%
30-34歳	65.5%	37.9%	44.8%	79.3%	0.0%	34.5%	27.6%	20.7%	27.6%
WFIMC国際入賞	44.4%	33.3%	22.2%	55.6%	0.0%	33.3%	11.1%	11.1%	33.3%
非WFIMC国際入賞	76.3%	57.9%	52.6%	76.3%	0.0%	39.5%	28.9%	21.1%	21.1%
国際コン未入賞	34.4%	31.3%	25.0%	75.0%	3.1%	31.3%	18.8%	18.8%	9.4%

上表中アルファベットの選択肢内容	
記号	内容
A	部分練習を増やす
B	通し練習を増やす
C	細部がはっきりするように
D	よりミスをしないように意識
E	得意な作品をより沢山練習
F	苦手な作品をより沢山練習
G	全体に均等に練習
H	様々な楽器で練習
他	その他よろしければ自由にお書きください

男性は変わらないが18.6%多い一方、女性は変わるが4.6%上回り、男女で異なる性質となった。年代別集計では、20代は変わらない、30代は変わるにやや偏っている。入賞歴別

ではあまり変化が見られない。

変わる と答えた回答者にその内容を尋ねると、全体で最も多かったのが D. よりミスをしないうちに意識 で 73.4%をマークした。しかし、WFIMC 入賞層では比較的低い割合 (55.6%) を示している。また、A. 部分練習を増やす も過半数を超えた。この選択肢は男性 36.4%に対し女性は 63.2%とかなりの開きがあり、また年代が進むごとに割合が増える。面白いのは入賞歴別のデータである。未入賞者での選択者は少なく、非 WFIMC 入賞者では増加するが、WFIMC 層となると再び少なくなる。同様の経過は、B. 通し練習を増やす、C. 細部がはっきりするように、G. 全体に均等に練習する でも顕著に見られる。これらの結果が表すのは、練習の工夫は、未入賞者が入賞を狙う上では有効であるが、中堅入賞者がもう一歩レベルの高い WFIMC 加盟コンクールで入賞を目指すためには、普段と練習内容を変えなくても、満足できる状態に仕上げる技量を身に付ける必要があるということである。

属性別に見ると、男性は選択肢全体について割合が低いと言える。特に先述の A.、C. と H. 様々な楽器で練習 では、女性とダブルスコア程度の差がついており、男女の違いが明確である。年代別では 20 代後半以降に増加する選択肢が多い。コンテストそれぞれが、経験に伴って、自分に合う練習方法を見つけているものと推測できる。

自由記述では、自分の演奏を録音や録画し確認する・人前で事前に弾く機会を設ける等の多種多様な練習方法が挙げられていた。また次のように、

筋肉の疲弊を考え、長いスパンで計画を立てる。→技巧的に難しい曲 (ブラームスのパガニーニ変奏曲や、リスト作品など) は、本番の一週間前までに追い込みをかけ、前日などの直前にもう一度確認追い込みで仕上がるようにする、など。(回答番号 3 番)

ウォームアップなく、いきなり弾いてもひけるように練習 (回答番号 78 番)

コンクールならでの演奏環境への対策を記した人もいた。レパートリー選択とも重なるが、一つの良いやり方が万人に共通するとは限らないため、自分にとってどの方法や計画が最も効果・効率的であるかを早い年齢で理解しておくことが、何よりも重要となる。

2-5. コンクールの参加環境についての質問

ここからの設問は、実際の参加についてである。まずアンケートでは、【コンクールに参加することに楽しみがありますか／はいの方は、選択肢から当てはまるものを全て選んでください】、【コンクールに参加することにストレスや痛みがありますか／はいの方は、選

択肢から当てはまるものを全て選んでください】の対をなす問いを立てた。筆者自身はコンクールを楽しんで受けられたことはあまりない。自分のコンディションを整えることに集中し、ベストなパフォーマンスをと思うが、現場では想定外のハプニングとの戦いで、とても余裕がなかったというのが正直なところである。しかし、結果を見ると、多くの日本出身コンテストは、コンクール受験に楽しみを感じているようである。

コンクールに参加することに楽しみがありますか							
	はい	いいえ	無・他		はい	いいえ	無・他
合計	79.8%	19.0%	1.2%	男性	81.5%	18.5%	
				女性	78.9%	19.3%	1.8%
15-19 歳	71.4%	14.3%	14.3%				
20-24 歳	72.7%	27.3%		WFIMC 国際入賞	90.0%	10.0%	0.0%
25-29 歳	78.9%	19.7%	1.4%	非 WFIMC 国際入賞	80.8%	17.9%	1.3%
30-34 歳	86.5%	13.5%		国際コン未入賞	75.4%	23.1%	1.5%

【楽しみ】 はいの方は、選択肢から当てはまるものを全て選んでください								
	A	B	C	D	E	F	G	他
合計	76.2%	56.9%	17.7%	8.5%	58.5%	15.4%	30.0%	10.0%
男性	79.5%	63.6%	20.5%	6.8%	56.8%	15.9%	34.1%	11.4%
女性	74.4%	53.5%	16.3%	9.3%	59.3%	15.1%	27.9%	9.3%
15-19 歳	80.0%	40.0%	20.0%	0.0%	60.0%	60.0%	60.0%	20.0%
20-24 歳	58.3%	41.7%	4.2%	12.5%	66.7%	25.0%	33.3%	0.0%
25-29 歳	71.4%	60.7%	8.9%	8.9%	55.4%	12.5%	26.8%	10.7%
30-34 歳	91.1%	62.2%	35.6%	6.7%	57.8%	8.9%	28.9%	13.3%
WFIMC 国際入賞	94.4%	77.8%	33.3%	16.7%	61.1%	5.6%	22.2%	5.6%
非 WFIMC 国際入賞	84.1%	61.9%	20.6%	1.6%	55.6%	11.1%	25.4%	11.1%
国際コン未入賞	59.2%	42.9%	8.2%	14.3%	61.2%	24.5%	38.8%	10.2%

表中アルファベットの選択肢内容	
記号	内容
A	普段と違う街への滞在や食事
B	他の参加者との交流
C	ホストファミリー
D	練習・練習場所
E	本番の演奏
F	結果発表
G	入賞
他	その他

楽しみに関しては、全体の 8 割近くが はい と答えた。男女別・年代別・入賞歴別でもその傾向は変わらないが、年代や入賞歴が進むとやや増加が見られる。はい と答えた人の内容について選択肢別に見ると、A、

普段と違う街への滞在や食事 が 76.2% でトップ、E、本番の演奏、B、他の参加者との交流 が過半数を超え、続く。対して、D、練習や練習場所、F、結果発表、C、ホストファミリー は低い水準である。入賞者歴別では、未入賞者の A、B が相対的に低い。挑戦段階であるため楽しむ余裕がないことや、違った環境に適応することに慣れていないなどの理由が考えられる。

一方のストレスや苦しみについてはどうか。次頁表の結果の通り、ストレスを

コンクールに参加することにストレスや苦しみがありますか							
	はい	いいえ	無		はい	いいえ	無
合計	87.1%	11.7%	1.2%	男性	92.6%	7.4%	
				女性	84.4%	13.8%	1.8%
15-19歳	71.4%	14.3%	14.3%				
20-24歳	81.8%	18.2%		WFIMC 国際入賞	95.0%	5.0%	0.0%
25-29歳	88.7%	11.3%		非 WFIMC 国際入賞	89.7%	7.7%	2.6%
30-34歳	90.4%	7.7%	1.9%	国際コン未入賞	81.5%	18.5%	0.0%

【苦しみ・ストレス】はいの方は、以下の選択肢から当てはまるものを 全て 選んでください								
	A	B	C	D	E	F	G	他
合計	16.2%	8.5%	7.0%	51.4%	52.1%	64.8%	16.9%	9.9%
男性	16.0%	8.0%	4.0%	46.0%	48.0%	64.0%	20.0%	10.0%
女性	16.3%	8.7%	8.7%	54.3%	54.3%	65.2%	15.2%	9.8%
15-19歳	60.0%	20.0%	0.0%	20.0%	40.0%	60.0%	100.0%	0.0%
20-24歳	11.1%	11.1%	3.7%	40.7%	70.4%	59.3%	18.5%	11.1%
25-29歳	19.0%	9.5%	11.1%	57.1%	46.0%	66.7%	14.3%	6.3%
30-34歳	10.6%	4.3%	4.3%	53.2%	51.1%	63.8%	17.0%	14.9%
WFIMC 国際入賞	10.5%	5.3%	10.5%	52.6%	42.1%	68.4%	5.3%	10.5%
非 WFIMC 国際入賞	15.7%	10.0%	10.0%	54.3%	47.1%	65.7%	11.4%	10.0%
国際コン未入賞	18.9%	7.5%	1.9%	47.2%	62.3%	62.3%	28.3%	9.4%

表中アルファベットの選択肢内容	
記号	内容
A	普段と違う街への滞在や食事
B	他の参加者との交流
C	ホストファミリー
D	練習・練習場所
E	本番の演奏
F	結果発表
G	入賞
他	その他

感じているコンテストはかなり多く、87.1%が「はい」と回答している。男性ではなんと9割を超える。また年代・入賞歴においては、それぞれ高くなるほどに割合が増加している。

内容の選択肢では、F. 結果発表 が最も高くなった。また、2番手の E. の本番演奏、は【楽しみ】でも【苦しみ】でも多くのコンテストが選んだ項目である。特に20代前半の回答割合が、【楽しみ】・【苦しみ】共に突出して多い。場数がまだ少ない年代で、本番の出来が不安定ということなのであろうか。入賞歴が高くなるほど、【苦しみ】の割合が減ることからも、そう推察できる。D. 練習や練習場所 も過半数を超える。筆者の経験でも、良い楽器で練習できることは稀で、時にはWFIMC加盟コンクールであっても、電子ピアノでさらったこともあった。時間の割り振りが不公平なコンクールもあり、自分の思い通りになることはまずないという点が、演奏会との決定的な違いである。【楽しみ】の調査で割合の高かった、A. B. は共に低くなった。C. ホストファミリー は【楽しみ】でも【苦しみ】でも低く、日本出身コンテストにとってあまり関係のないマターと言える。

最後に、以上2問の その他の項目 の自由記述の例を挙げると、【楽しみ】では、「自分の演奏が世界基準ではどのように評価されるのか（回答番号 39 番）」、「ピアノ音楽・演奏の魅力や難しさ、醍醐味を深く知る音楽家が客席に必ず居る、という安心感と緊張感（回答番号 136 番）」といった審査されることについてや、「本番までの準備で学べること（回答番号 194 番）」「ピアノだけに集中できる環境（回答番号 179 番）」といった自己研鑽についての回答が見られた。【苦しみ】では、「動画配信や、演奏前後のインタビューなどから、必要以上にプレッシャーを感じてしまうこと（回答番号 123 番）」、「先生からのプレッシャー（回答番号 130 番）」、「人に評価されること（回答番号 158 番）」といった周囲から受けるストレス、「当日滞在先に到着するまでの準備（航空券やホテル、また順路などの準備）（回答番号 60 番）」、「渡航費や滞在費の捻出（回答番号 142 番）」、「移動やそのときの荷物運び（回答番号 173 番）」といった現地までの交通に関するもの、「次のラウンドに進めるかどうか分からないなど、演奏日程が非常に流動的なため、筋肉の消耗度や体調・集中力などを管理・調整するのが難しい（回答番号 136 番）」、「会いたくない人に会うこと（回答番号 101 番）」といったコンクールの不確定性に対するストレスなどが挙げられた。

2-6. コンクール本番の演奏についての質問

コンサート、またはコンクールであるからといって、そのピアニストにとっての理想や目指すところが変わってしまうことは、本来望ましくない。しかし、これまでの調査を見ても、レパトリーや練習方法の工夫は演奏を変質させるであろうし、心理的なストレスも相まって、その2つが全く同じものになるとは考えられない。ならば、コンテストの意識は競争のない本番と比較して、どのような変化があるのであろうか。

まずは舞台本番での緊張感について、【本番の演奏について、緊張感は競争のない本番の時と比較してどうですか】と尋ねた。結果は下表の通り。より緊張することが多いが

本番の演奏について、緊張感は競争のない本番の時と比較してどうですか									
	A	B	C	無・他		A	B	C	無・他
合計	57.1%	40.5%	1.8%	0.6%	男性	51.9%	46.3%	1.9%	
					女性	59.6%	37.6%	1.8%	0.9%
15-19 歳	28.6%	71.4%	0.0%						
20-24 歳	51.5%	42.4%	3.0%	3.0%	WFIMC 国際入賞	65.0%	25.0%	10.0%	0.0%
25-29 歳	60.6%	38.0%	1.4%		非 WFIMC 国際入賞	56.4%	43.6%	0.0%	0.0%
30-34 歳	59.6%	38.5%	1.9%		国際コン未入賞	55.4%	41.5%	1.5%	1.5%

【緊張感】表中アルファベットの選択肢内容					
記号	内容	記号	内容	記号	内容
A	より緊張することが多い	B	あまり変わらない	C	よりリラックスすることが多い

あまり変わらない を大きく上回り、よりリラックスできることが多い と回答したのは、ごく僅かにとどまった。男性よりも女性の方が緊張する傾向にある。また年代別に見ると、10代後半ではサンプルが少ないながらも、あまり変わらない が突出し、20代後半・30代前半の世代になると、より緊張することが多い の割合が増す。入賞歴別では、WFIMC 入賞者層が他の2層に比べて、より緊張することが多い が高い一方、よりリラックスできることが多い の回答も最も多い。WFIMC 層が目指す難関コンクールは、プレッシャーが大きいことは容易に想像が付くが、少数ながらそれを全く感じない者も存在しているということである。これらの結果を見る限り、緊張自体を抑え込む、あるいは無理やりリラックスした感覚で本番に臨む必要はなく、緊張がある中で普段通りに実力を発揮する方法を知ることが大切であることが窺える。

では集中力はどうか。【コンクール本番の演奏について、集中力は競争のない本番の時と比較してどうですか】と設問した。結果は下表の通り、あまり変わらない が男女・

	A	B	C	無・他		A	B	C	無・他
合計	16.6%	63.8%	18.4%	1.2%	男性	16.7%	66.7%	14.8%	1.9%
					女性	16.5%	62.4%	20.2%	0.9%
15-19 歳	42.9%	57.1%	0.0%						
20-24 歳	21.2%	60.6%	18.2%		WFIMC 国際入賞	5.0%	75.0%	10.0%	10.0%
25-29 歳	12.7%	70.4%	16.9%		非 WFIMC 国際入賞	17.9%	64.1%	17.9%	
30-34 歳	15.4%	57.7%	23.1%	3.8%	国際コン未入賞	18.5%	60.0%	21.5%	

記号	内容	記号	内容	記号	内容
A	より集中力が増すことが多い	B	あまり変わらない	C	集中が難しくなることが多い

年代・入賞歴別のどの層で見ても過半数を上回り、多数を占めた。ただ、より集中力が増すことが多い・集中が難しくなることが多い の回答も一定数あり、特に後者の女性割合はやや高い。年齢を重ねると集中が高まるということもないようで、むしろ30代前半は集中が難しくなることが多い が年代別で最も高くなった。WFIMC 入賞者層は、より集中力が増すことが多い・集中が難しくなることが多い 両者共、入賞歴別で最も少ない割合となった。

次の問いは、【コンクール本番の演奏について自己評価する時、競争のない本番の時と比較してどうですか】(次頁表)である。全体では、あまり変わらない が過半数を僅かに上回ったが、不満なことが多い と回答した割合も、44.2%と高い。対照的に、満足できることが多い は、非常に少ない。男性は、あまり変わらない が多く、不満なことが多い との差が大きい一方、女性では拮抗していて、不満なことが多い が相対的に高くなっている。

コンクール本番の演奏について自己評価する時、競争のない本番の時と比較してどうですか									
	A	B	C	無・他		A	B	C	無・他
合計	4.9%	50.9%	44.2%		男性	5.6%	55.6%	38.9%	
					女性	4.6%	48.6%	46.8%	
15-19 歳	28.6%	28.6%	42.9%						
20-24 歳	3.0%	45.5%	51.5%		WFIMC 国際入賞	0.0%	65.0%	35.0%	
25-29 歳	5.6%	59.2%	35.2%		非 WFIMC 国際入賞	5.1%	51.3%	43.6%	
30-34 歳	1.9%	46.2%	51.9%		国際コン未入賞	6.2%	46.2%	47.7%	

表中アルファベットの選択肢内容					
記号	内容		記号	内容	
A	満足できることが多い		B	あまり変わらない	
			C	不満なことが多い	

年代別に見ると、20代後半のみあまり変わらないがマジョリティを占め、日本人入賞年齢のピークと関連がある可能性もあるが、単純に世代的な傾向である可能性も捨てきれない。入賞者歴別では、入賞歴が高まるごとに、明らかにあまり変わらないが増え、不満なことが多いが減る。先の2つの調査結果も踏まえると、緊張が高まるコンクール環境の中で、競争のない本番といかに変わらず演奏できるかが成功のカギとなることが、裏付けられたと言える。

最後は、【コンクール本番の演奏について自己評価する時、結果との関係を教えてください】と質問し、コンテスタント自身の評価と審査結果が合致しているのか、それともズレが生じるのか調査した。結果は、あまり変わらない³⁴と満足度が高ければ結果が良いこと

コンクール本番の演奏について自己評価する時、結果との関係を教えてください									
	A	B	C	無・他		A	B	C	無・他
合計	41.7%	45.4%	11.7%	0.6%	男性	42.6%	50.0%	7.4%	
					女性	41.3%	43.1%	13.8%	0.9%
15-19 歳	57.1%	42.9%	0.0%						
20-24 歳	33.3%	57.6%	9.1%		WFIMC 国際入賞	50.0%	40.0%	10.0%	0.0%
25-29 歳	47.9%	42.3%	9.9%		非 WFIMC 国際入賞	33.3%	55.1%	9.0%	2.6%
30-34 歳	36.5%	42.3%	17.3%	3.8%	国際コン未入賞	49.2%	35.4%	15.4%	

表中アルファベットの選択肢内容					
記号	内容		記号	内容	
A	満足度が高ければ結果が良いことが多い		B	あまり変わらない	
			C	不満な演奏の方が結果が良いことが多い	

が多いが拮抗することになった。男性の方があまり変わらないが多く、満足度が高ければ結果が良いことが多いとの差が開き、20代後半は満足度が高ければ結果が良いことが多いが高い。入賞者歴で見れば、非 WFIMC 入賞層のみあまり変わらないが多い。また不満な演奏の方が結果が良いことが多いという回答は全体に少なかったが、女性や30代前半、未

³⁴ この選択肢は後々考えると少し分かりにくく、B. はあまり関連がない、にすべきであった。(自分が演奏に満足でも不満でも結果は)あまり変わらない、という趣旨であるが、(自己評価と結果が)あまり変わらないとも解釈できるからである。

入賞者層で比較的高くなった。個々の値を解釈するには材料に乏しいため、憶測は避けるが、全体に総括すれば、日本出身コンテストは自分の演奏を冷静に評価し、結果と演奏との相関関係が高いと言える。

これら4つのアンケート結果を受けて、WFIMC入賞者4人にまず尋ねたのは、

- | |
|---|
| 8. 入賞した時の演奏、落選した時の演奏を比較した時に、緊張感や集中力はそれぞれどうでしたか。 |
| 9. 入賞した時の演奏、落選した時の演奏を比較した時に、演奏そのものについてはどのような違いがあったと思いますか。 |

の二問である。まとめて回答していただいた。

うまくいったときの状態として、もちろん緊張感も集中力もあるけど、どちらかというと集中力が緊張感に優っている。緊張感がネガティブな緊張感ではなく、エキサイティングな感じで、自分の音もよく聴ける。

途中で演奏をやめて帰りたいと思うぐらいの混乱した緊張感でも、なぜか次のラウンドに行けることもあるから、一概に絶対そうとは言えないけど。でもまあ、どういう場においても集中力が、音楽に集中するという感じが、いい演奏につながるのかな。いい演奏ができれば次に行ける可能性も高いし。(木下敦子さん、2018年8月3日)

緊張しないという人の方が少ないですよ。私は多分珍しい方なんです。普通の演奏会でも緊張しない方なので、(普通の演奏会と)全然変わらないです。意識を同じに持っている。結局、演奏会もコンクールも、自分のベストの演奏をするというところが一番重要であって、その意味では全く変わらないし、審査員も、まあ日本のコンクールは技術点をすごい見ているところ、ミスのなさとか正確性とかあると思いますけど、ヨーロッパだとやっぱりそうじゃないなって。それだったら自分が、ちゃんとその曲に入って、弾けて、審査員もお客様だから、その心を動かせるように自分のコンサートだと思って演奏して、それが成功すれば、そんな悪い点はつけられないと思っているので。まあもちろんそこに好き嫌いというのは入って来ますけど。

ただ、集中力という意味では(コンクールでは)30分、(コンサートでは)2時間と違うので。一点集中みたいなものは、コンクールの方があると思います。もちろん演奏が全てではあるけど、コンサートだと1日ばかりみたいなどころがあるじゃないですか。朝から終演後の雑談まで、全部含めて自分のリサイタルの日みたいなイメージありますけど、コンクールだと、自分が今からする演奏が完全に全てとわかっているから、そこに集中するみたいなのはありますね。MCとかもないですしね(笑)。(コンサートでは)雑念とまでは言わないですけど、演奏以外でやらなければいけないことがたくさんありますよね。その有る無しが、集中の鋭さにまあ少し比例はするかなというのはあります。(桑原志織さん、2018年8月4日)

より緊張するよ。単純に舞台に行って、崩れないで弾けるかなってそういう心配をしている。ここまで努力してやってきたことが、ここで水の泡になっちゃったら・・・たった一回のために、ものすごい時間をかけて用意してきたわけだからね。そういう怖さ。それはリサイタルでもそうじゃない？ただリサイタルではお客さんがすごい楽

しみにして来るけど、コンクールの時ってみんな玄人みたいな目線でこう（品定めされる）。だから緊張するって感じ。

すごく集中できてる時っていうのは、本番がやたら短く感じる。始まって弾き始めたと思ったら、もうすでにコーダに（なっている）。でも舞台上で弾いている時は、集中できている方だと思う。あんまり、コンクールだからどうかはしない。いつも舞台上に出る時は真剣勝負、という感覚。

（昔は先生の反応で良し悪しを判断していたが）今は完全に自分でわかる。これだけ、ってね。なんていうのかな、心が折れてやる気が無くなった時っていうのが一番ダメだね。いつもそうだけど。緊張はまだいい。やる気がなくなったら…。（佐藤彦大さん、2018年8月4日）

全然違いますね。入賞した時って緊張感、結構あるんですよ。緊張感はあるんだけど、集中力もそのぶんすごいあって、で逆に落選した時って、割と集中力もなあなあな感じで、緊張感もそんなに感じてない時。そこが毎回思ってたことかな。自分の中でいろんなコンクールを受けていく中で、「あ、今回緊張してないな」とか「今回緊張してるな」って、なんとなく違いがわかってくるじゃないですか。その時に自分で、なんとなくわかっちゃう。今日こういう演奏するだろうな、ってのが。結果としては、自分の出したいものを出せるためには、ある程度の緊張感ってやっぱり必要だになってすごく感じましたね。（須藤梨菜さん、2018年8月6日）

木下・須藤両氏は、集中力を高めることに緊張をうまく利用して演奏に反映させ、力を発揮している。佐藤氏は、審査員を含む聴衆の雰囲気、緊張を促進させる要素の一つであると指摘しつつ、舞台上での集中力を普段と変えないことで、良い演奏ができるとする。また引用外の部分で、「リサイタルでも、自分の評判に関わるかもしれない評論家や大学の指導者が来場する場合は緊張感が増す」とも述べていた。アンケートの回答者からも、同様の意見が寄せられており、筆者も全く同感である。コンサート・コンクールにかかわらず、誰に聴かれるかが、演奏家にプレッシャーを与えるか否かを決定付けるのである。

コンサートとコンクールとで同じ意識を持ち、舞台では緊張を感じず、出場したコンクールの殆どで成功し続ける桑原氏の回答は、多くのコンテスタントにとって参考にならないものかもしれないが、興味深いポイントがいくつかある。一つは、日本と海外のコンクールとでは審査基準が異なるとの指摘である。昔から言われてきたことであり、筆者も完全に賛同するが、日本の現役トップコンテスタントである彼女からその発言が出たことには重みがある。もう一つは、彼女にとって、ただ演奏することのみを要求されるコンクールの方が、演奏への集中を高められる可能性があるということである。筆者にとってリサイタルは、全てをあらかじめ計画した通りに自分のペースで遂行できるため、非常に心地良いのに対し、コンクールでは前の人の時間が伸びたり縮んだり、突然休憩が挟まったりといった他者の

存在によるイレギュラー要素が、大きなストレス要因となる。ところが彼女は、リサイタルにおける演奏以外の行為が、むしろ演奏そのものへの集中の妨げになる可能性があると言う。コンクールの舞台では他者からの影響を全く感じず、演奏のみにただ集中する。貫き通すメンタルの強さこそ、彼女の特別な武器なのである。緊張や集中に苦しむコンテストは、それを自然に身につける事はできなくても、日頃の意識変革やメンタルトレーニングを取り入れるなど、改善の余地があるはずである。心を整える重要性を早くから認識し、国際舞台における戦いに進出する前から学習できるような環境を整備することが大切であろう。

次の質問ではさらに踏み込んで、入賞できる可能性を意識するか、そしてその時にはどのような心持ちで舞台に臨むのかを尋ねた。

10. コンクールを受けている中で入賞ができる可能性があると感じた瞬間はありますか。ある場合には、普段通りの実力を発揮するためにどのように自分と向き合われましたか。

確信があることはまずない。どちらかというとなし。どうしても自分の主観的になってしまうから。最終的には審査員の主観、意見だから。(演奏が良かったと思うのは)演奏が終わった後にすごくお客さんの反応が良かった。あえて休憩の時にあなたの演奏が良かったと言いに来てくれる人がいたとか。でも審査員と同じ考えかどうかはわからない。(木下敦子さん、2018年8月3日)

私、割と自信過剰タイプというか、自分に自信をもたせて頑張るタイプといいますか。だからネガティブなイメージは全然しないし、あんまりできないし、自分が成功するイメージを常に持つというのは、普段の演奏会でもコンクールでもあるんですね。

ただやっぱり、コンクールの時はあんまり周りの演奏を聴いていないので。練習時間とかもありますし、聴いてない分不安にならないっていうのも。自分がちゃんと弾けていれば、あとはそんなに不安にならないっていうのもあるかもしれないですね。

お金かけて(日本から)受けに来て、落ちたくないという気持ちはすごくあるので。ただ自分は演奏以外にできることは何もないから、どんなに落ちたくないと思ったところで意味ないです。もちろん審査結果発表の時は人並みに緊張します。(桑原志織さん、2018年8月4日)

日本音コンの3次は、手応えがあっただろうと思ったけれど、そのくらいじゃないかなあ。意外に自分ではうまくいってないと思った時の方が、昔は良かったりした。仙台の時なんか自分では全然手応えがなくて。終わった時に、その時の先生が聴きに来て興奮していると、ああなんかどうもうまくいったらしいって。当時はそういうのは先生の顔色見て判断して、自分では感じられなかったっていうのはあるんだろうね。

最近は結構冷静に見られるようになったから、ダメな時って本当にダメなのね。よくないな、と思って演奏している時は、あとで録音聴き返してもぜんぜんよくない。なんかその辺は昔と感覚が変わった感じがするかな。

カナルスの時は、3次予選の時はちょうどホストファミリーのおばあちゃんが亡くなっちゃって。会った人だったからショッキングで、今までの疲れが出たりして結構荒れ果てた演奏だった。なんでファイナル行ったんだろうなあというのは不思議。そういうことはあるかな。

(入賞を意識して硬くなったりとかは?) あんまりないかな。ファイナルって、残り1、2、3位しか付かない。仙台の時もそうだったんだけど、残った段階で最低6位にはいけるんだみたいな感じで思うから。カナルスの時も、どんなにやっても1位か2位か3位で絶対に(順位が)付くから、ダメでも3位だからっていうある意味、気楽っていう。1位獲りにいこうという感情は全くなかったですね。ガウディ建築のカタルーニャ音楽堂で本選があるから、あんなすごいところで弾けるのが嬉しい、って本当にそのくらいの感じでしたね。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

(入賞を) あんまり考えてないと言ったら嘘になるかもしれない。全くゼロではない。もちろん、入賞したい!というのを目標に出ているので。ただ、可能性があるか、というのを意識したかという、そうではないかな。入賞するために受ける、ということばかりじゃないけど、入賞できる可能性もゼロではないように自分ではするように(準備する)。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

この質問に関しては、かなり答えが分かれた印象である。木下氏は、コンクールの結果はそもそも審査員の主観で決定されるものであるから、良い演奏をしようが、入賞の可能性に確信などないと主張する。桑原氏は、一つ前の質問への回答と同様に、自分の演奏や結果に対してポジティブなイメージを常に持つことで、プレッシャーがかかる場面でも平常心で臨んでいることが窺える。周りの演奏を聴かないことも、それに寄与している。佐藤氏の話を経験を積み重ねて自己評価と他者評価が合致するようになったという事であろう。またファイナルに進出すれば入賞が約束されるため、重圧を感じずに自由に演奏できると指摘している。須藤氏は、入賞できるレベルに到達していると自己判断できるところまで準備し、コンクール期間中に意識することはないという。

これらの話から、自分が上達する・芸術性を高めるといった主体的な向上に加えて、入賞し得る実力とは何か、最初は抽象的であってもそのイメージを持ち、達成する、客観的な自己実現の意識が必要であることがわかる。そうしてこそ初めて、できることは本番で良い演奏をするだけという境地に至るのである。

2-7. 他者から受ける影響についての質問

コンクールという環境では、他の参加者や審査員の存在を避けることはできない。プラスの面でもマイナスの面でもストレス要因となり得るが、日本出身コンテストはどのよ

うに感じているのであろうか。

まずは、【他の参加者について、意識しますか】と尋ねた結果、下表の通り、全体・

他の参加者について、意識しますか							
	はい	いいえ	無		はい	いいえ	無
合計	73.0%	27.0%		男性	75.9%	24.1%	
				女性	71.6%	28.4%	
15-19 歳	71.4%	28.6%					
20-24 歳	78.8%	21.2%		WFIMC 国際入賞	80.0%	20.0%	
25-29 歳	77.5%	22.5%		非 WFIMC 国際入賞	67.9%	32.1%	
30-34 歳	63.5%	36.5%		国際コン未入賞	76.9%	23.1%	

男女の集計共、はい が7割を超えた。入賞歴別を見れば、他者への意識の有無と上位コンクールでの入賞に因果関係はないようである。

次に、前の質問ではい と答えた人に、【はい、の方は意識することで演奏に良い影響や悪い影響を感じたことがありますか】と質問したところ、全体の63%がはい と回答した。

前問では、の方は意識することで演奏に良い影響や悪い影響を感じたことがありますか							
	はい	いいえ	無		はい	いいえ	無
合計	63.0%	37.0%		男性	53.7%	46.3%	
				女性	67.9%	32.1%	
15-19 歳	80.0%	20.0%					
20-24 歳	73.1%	26.9%		WFIMC 国際入賞	50.0%	50.0%	
25-29 歳	54.5%	45.5%		非 WFIMC 国際入賞	60.4%	39.6%	
30-34 歳	66.7%	33.3%		国際コン未入賞	70.0%	30.0%	

男女比では女性の方がはい の割合が高い。年代別の集計は、ばらけている。入賞歴別は傾向が明確で、入賞歴が高くなるほど、はい は少ない。それでも、WFIMC 入賞者でさえ、半数が演奏に影響があったと感じているのである。意識すること自体はある程度仕方のないことと捉えて、それをいかにポジティブな作用にするかが肝要と言える。

さらにその内容について【はい、の方はどんな点が気になりますか。当てはまるものを全て選んでください】と、質問した。結果は他の参加者の演奏の出来 がトップとなったが、

影響を感じるに はい、の方はどんな点が気になりますか。当てはまるものを全て選んでください					
	演奏の出来	レパートリーの選択	順番	観客や審査員の反応	その他
合計	68.0%	54.7%	52.0%	37.3%	5.3%
男性	68.2%	50.0%	50.0%	31.8%	4.5%
女性	67.9%	56.6%	52.8%	39.6%	5.7%
15-19 歳	100.0%	50.0%	75.0%	0.0%	0.0%
20-24 歳	68.4%	42.1%	42.1%	36.8%	5.3%
25-29 歳	53.3%	63.3%	56.7%	33.3%	10.0%
30-34 歳	81.8%	54.5%	50.0%	50.0%	0.0%
WFIMC 国際入賞	62.5%	75.0%	62.5%	62.5%	12.5%
非 WFIMC 国際入賞	62.5%	59.4%	59.4%	43.8%	3.1%
国際コン未入賞	74.3%	45.7%	42.9%	25.7%	5.7%

相対的に評価されるコンクールの性質を考慮すれば、気にする人が多くなるのは自然である。レポートリーの選択は、年代別集計の25-29歳、入賞歴別集計のWFIMC入賞層で最も高い選択率をマークした。順番の選択肢も同様の傾向を示している。この2つは、受験中の戦略に関わるもので、同じ曲が続くことや前のコンテストがどのような雰囲気であるのかに配慮して、審査員の視線を変える曲順を選択することも有効かもしれない。観客や審査員の反応は、WFIMC入賞層で高い。先ほど木下氏が述べていた通り、お客さんが声をかけに来てくれると、たとえ審査員の評価と違ったとしても嬉しいものである。

さて、他のコンテストの存在と共にコンクールの特殊な演奏環境を決定付けているのは、マコーミックも指摘しているように、審査員である。意識したくなくともしてしまうことも多いのではないか。筆者が思い出すのは、パリ国立高等音楽院の卒業試験で、恩師のジャック・ルヴィエから事前に発表された審査員メンバー（イヴ・アンリ、クリスチャン・イバルディ、ジャン＝フィリップ・コラール、ミッシェル・ダルベルト、ジャン＝マルク・ルイサダ）について、それぞれの特徴を説明されたことである。（オペラ・パラフレーズ作品を演奏するにあたり）誰々はオペラ好きで非常に詳しいから忠実に表現しろ、室内乐的なアプローチを大切にできる所を見せろ、といった具合であったが、ルヴィエが各ピアニストと個人的な親交があり、特徴を知り尽くしていたからこそ起こった特殊な事例と言えよう。

コンテストには【舞台上の演奏は審査員がいることで変わりますか、近いものを選んでください】と尋ねた。結果は、審査員を意識するが何もしないが64.4%となり、審査員

舞台上の演奏は審査員がいることで変わりますか、近いものを選んでください									
	A	B	C	無・他		A	B	C	無・他
合計	29.4%	64.4%	6.1%		男性	33.3%	55.6%	11.1%	
					女性	27.5%	68.8%	3.7%	
15-19歳	57.1%	42.9%	0.0%						
20-24歳	36.4%	60.6%	3.0%		WFIMC国際入賞	35.0%	65.0%	0.0%	
25-29歳	21.1%	66.2%	12.7%		非WFIMC国際入賞	25.6%	67.9%	6.4%	
30-34歳	32.7%	67.3%	0.0%		国際コン未入賞	32.3%	60.0%	7.7%	

表中アルファベットの選択肢内容					
記号	内容	記号	内容	記号	内容
A	審査員を意識しない	B	審査員を意識するが何もしない	C	多くの審査員に受け入れられる演奏を心がける

を意識しないと回答したコンテストは29.4%、多くの審査員に受け入れられる演奏を心がけるは6.1%にとどまった。ただ男性は、多くの審査員に受け入れられる演奏を心がけるが11.1%と、女性に比べて高くなった。20代後半でも一定の選択割合がある。しかし、WFIMC入賞層では0であったことから、審査員を意識して演奏を変えてしまうことへの効果は疑問である。

続いて【コンクールの演奏における自分の個性について、演奏会と比べてどうですか】と尋ねた。練習・準備段階に関わることでもあるが、審査員の存在を意識した質問である。个性的な演奏≒賛否が分かれる演奏≒審査員の票が割れる、と思考したことのあるコンテスタントも多いであろう。ただ、実際にコンサート等の本番と、演奏を変えてしまうかどうかは、また違った話である。結果は、次頁冒頭表の通りで、変わらない が全体の約 68%をマークし主流となったが、残りは どちらかという個性を強調する と、どちらかという

コンクールの演奏における自分の個性について、演奏会と比べてどうですか									
	A	B	C	無・他		A	B	C	無・他
合計	17.8%	68.1%	13.5%	0.6%	男性	14.8%	68.5%	16.7%	
					女性	19.3%	67.9%	11.9%	0.9%
15-19 歳	14.3%	71.4%	14.3%						
20-24 歳	18.2%	63.6%	18.2%		WFIMC 国際入賞	20.0%	80.0%	0.0%	0.0%
25-29 歳	16.9%	70.4%	12.7%		非 WFIMC 国際入賞	21.8%	62.8%	15.4%	0.0%
30-34 歳	19.2%	67.3%	11.5%	1.9%	国際コン未入賞	12.3%	70.8%	15.4%	1.5%

表中アルファベットの選択肢内容					
記号	内容	記号	内容	記号	内容
A	どちらかという個性を強調する	B	変わらない	C	どちらかという個性を抑える

個性を抑える に別れる形となった。多少の増減はあるものの、どの集計・分類でも似たような分布を示すが、唯一 WFIMC 入賞者層では、どちらかという個性を抑える の回答が 0 となった。一つ前の調査結果と同様、個性を抑えて多くの審査員に受け入れられようという考えは、成功には繋がらないことがわかる。

WFIMC 入賞者へは少し視線を変えて、次のように質問を行なった。

11. 審査員のタイプ (例えばピアニストや指導者、評論家) によって、自分の演奏が評価される or されないが左右される感覚はありますか。

中村紘子は「教授タイプは失点の少ないツツのない演奏を評価し、演奏家は个性的な演奏に寛容になる³⁵」と述べているが、審査員が事前に発表されている場合には、コンクールを選択する上で参考にするコンテスタントも多いかもしれない。筆者も、明確に演奏が好かれないと考えられる審査員、例えば面と向かって「お前の演奏は嫌いだ」と言われたことのある審査員のいるようなコンクールは避ける。高い確率で一票が失われることは、好ましいことではないからである。

だいたい私が今まで受けてきたコンクールは、審査員がピアニストというのが多か

³⁵ 中村紘子『コンクールでお会いしましょうー名演に飽きた時代の原点』 東京：中央公論新社、2003年、106頁。

ったので、やっぱりピアニスティックな面、ピアニストの視点というので選ばれるというのはあった。一回だけ、日本人の指揮者が審査員をしていて、指揮者の人はピアニストではないから、そういう人にとってはピアノの繊細な技術がどうこうよりも、華やかさというか、一般受けの方が大事なかなというのもあるかなと感じた。(木下敦子さん、2018年8月3日)

審査員のメンツを見て、今年はこのカラーなんだとか。あとは、コンクールの持っているカラーリングによって、審査員もそれにあったような選び方はされているじゃないですか。それはもちろん感じますし、意識します。けど、審査員と話ができるのって、(あまり落選した経験がないため)最後の懇親会とかになっちゃうと、あんまりこの自分の演奏に対して、評価が割れるみたいな感覚はないんですよ。

ただ、自分の演奏で好き嫌いが分かるとしたら、どっちかという演奏家タイプの方が好いてもらえるだろうなっていうのは、まあ完全に私の想像ですけど、それはあります。プログラムの選び方も、割と重い、重量級が集まりがちだし、あとは本番になったらミス云々よりもいかに(音楽に)はいれるかを優先するし、これから勉強したいと思っている緻密さとか構成力みたいなものは、評論や指導を中心にする人から見たら、まだまだ幼いと思うので。そういう意味では勢いとかスケール感を評価してもらえる方が、私にとってはポイントになる。で、そういう方を重視するのは、どっちかという演奏家タイプの人じゃないかな、という私の想像、あくまで想像です。減点式だと結構弱いかもしれない。(桑原志織さん、2018年8月4日)

あるでしょ。(タイプによって)違うんじゃない?例えば、ピアニストとか大学の先生とかが審査するんだったらさ、アカデミックさとか。やっぱり聴衆、日本なんか特にそうだと思うんだけど、審査員が見ているところと一般の何も知らない聴衆が見ているところって違うよね。それは今の音楽界見てたらわかるじゃない。例えば日本音コン受けた時なんかは、藝大の先生はわりについていい点くれたんだよ。桐朋系は点数が悪いかね。日本だったら学校によって好みが違うっていうのはわかる。

なんの楽器とか専攻とかじゃなくて、審査員のお国柄とかさ。そっちの方が結構違いがありそうな気がするね。スペイン人だったらね、ノリとか、感覚みたいな。アメリカもそうだよね。これがね、ドイツとかロシアとかになるとなんかそういうのは全然。お客さんも喜ばないの。すごいアカデミックなんだけど、よく頭を使って構築して且つ圧倒的な演奏をすると、ものすごく盛り上がるんだよね。国によってだいぶ違うんだろうな。フランスだと音色なんかすごく豊かだしさ。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

あんまり意識したことはないかな、そこについては。ただまあ評論家の方とか、すごく勉強してらっしゃる方よりかは、ピアニストとして活躍されているの方が割といい感じだったかな。どっちかという。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

桑原・須藤両氏は、自身の演奏の特徴が、ピアニストタイプの演奏家に評価されやすいものであると考えている。また佐藤氏の主張する、出身国によって聴き方が変わるという指摘

は興味深い。演奏自体を変えないまでも、意識してプログラミングを工夫することも一考に値する。そして、日本で大学によって好みがある（佐藤氏自身は、東京音楽大学出身）ことは、彼のようなトップコンテストでも感じているようである。日本出身コンテストがより飛躍を遂げるためには、そこを乗り越えた情報共有と、教育機関全体で国際的なピアニストを育てる気運を高める必要があるのかもしれない。

木下氏は、ピアノ専攻でない審査員がどこまでピアノのことを理解して審査できるのか、疑義を唱え、審査の基準に質的な高さを希求する考えと、聴衆にアピールする力を高く評価する考えの二項対立があることを示唆している。桑原氏は、コンクールにおける審査員団の構成に、コンクール運営の考え方が大いに反映されていると指摘する。また、失敗経験の少ない彼女にとって、審査員との会話はコンクール終了後であるため、祝福された雰囲気で行われるものであるという。筆者の経験上、落選後の審査員の話は、誠実なアドバイスであることが殆どであるものの、しばしば否定のための否定や、こじつけと思われる寸評もある。落ちたことには何かしら理由をつけなければならないということであろうが、先述のように、率直に演奏が嫌いと言われる方が、スッキリするものである。

2-8. 子供時代のコンクールについての質問

ここからはコンクール経験を含む、音楽家としてのキャリアを形成する過程についての質問へと移る。まずは、【子供の頃のコンクールの経験が、今のコンクール挑戦に役に立っていますか】と尋ねた。結果は以下の通りで、役立っている と 関係ない が僅差となった。

子供の頃のコンクールの経験が、今のコンクール挑戦に役に立っていますか					
	役立っている	関係ない	どちらかという 邪魔になっている	受けたことがない	無・他
合計	46.6%	43.6%	6.1%	3.1%	0.6%
男性	44.4%	48.1%	3.7%	3.7%	
女性	47.7%	41.3%	7.3%	2.8%	0.9%
15-19 歳	71.4%	28.6%	0.0%	0.0%	
20-24 歳	51.5%	33.3%	9.1%	6.1%	
25-29 歳	45.1%	46.5%	7.0%	1.4%	
30-34 歳	42.3%	48.1%	3.8%	3.8%	1.9%
WFIMC 国際入賞	40.0%	60.0%	0.0%	0.0%	0.0%
非 WFIMC 国際入賞	48.7%	39.7%	7.7%	2.6%	1.3%
国際コン未入賞	46.2%	43.1%	6.2%	4.6%	0.0%

男性は 関係ない、女性は 役立っている の割合がそれぞれやや多い。年代別では、20 代後

半以降、関係ないが役立っているを逆転する。入賞歴別は、WFIMC 入賞層で関係ないが大きく上回る結果となった。第2章で、ピティナ・ピアノコンペティション D/E/F 級や全日本学生音楽コンクールでの入賞経験は、WFIMC・準 WFIMC 入賞者全体の4分の1強が持つに過ぎず、国際コンクールでの成功とは関連性が薄いことが判明したが、このアンケート結果からは、小さい頃から舞台経験を積むことでコンクールに慣れるという役割にも疑問符がつく。また、子供時代にコンクールを受けたことがないコンテストの割合はわずか3.1%にとどまり、WFIMC 入賞者層に至っては0である。コンクール挑戦は日本のピアノ学習者にとって、子供の頃からほぼ義務付けられているものであり、避けて通れないという事実を改めて確認した。さらに、自由記述欄を設けなかったにもかかわらず、

役立っているなど思う時もあるし、子供の頃コンクールを受けていなければ、コンクールに対するマイナスの感情やその時の嫌な記憶を持たずに、もっと違う、新鮮な気持ちでコンクールに挑めたのではないかと思う時もあります (回答番号 79 番)

コンクールの経験がない人生を送ったことがないので、「関係ない」という選択肢は選べない。関係ないと思っていても、何かしらで影響を受けていると思う。(回答番号 91 番)

といった意見も寄せられた。

次は少し踏み込んで、【子供時代、自分の意思と関係なくコンクールを受けさせられたことがありますか】と尋ねた。結果はいいえが上回ったものの、はいの割合も44.8%と

子供時代、自分の意思と関係なくコンクールを受けさせられたことがありますか							
	はい	いいえ	無・他		はい	いいえ	無・他
合計	44.8%	55.2%		男性	46.3%	53.7%	
				女性	44.0%	56.0%	
15-19 歳	14.3%	85.7%					
20-24 歳	51.5%	48.5%		WFIMC 国際入賞	50.0%	50.0%	
25-29 歳	52.1%	47.9%		非 WFIMC 国際入賞	41.0%	59.0%	
30-34 歳	34.6%	65.4%		国際コン未入賞	47.7%	52.3%	

かなり高い。男女別では殆ど差が見られないが、年代別集計では、世代ごとに開きがある。10代前半は7人中6人がいいえと答えたが、20代前・後半では、両回答が拮抗した。一方30代前半は、いいえがダブルスコア近くまで増えており、生年を考えると、1987-88年より前に生まれた世代は、受験を強制されることは少なかったようである。ただ、この年齢まで業界に残った人の平均であるから、実態はこの数字とは異なる可能性もある。いずれにしても無視できない割合が、意思とは関係なくコンクールを受けさせられており、特に高校時までのピアノ指導者には、より一層、学習者が主体となるコンクール活用方法を考える義務があるのではないかと。

2-9. キャリアにつながるコンクール受験意識についての質問

さらに、コンクール後のキャリアを見据えた質問に進む。まずはズバリ、【コンクールは、人生を左右すると思いますか】である。結果は下表の通りで、全体では、はい が 73%と非常に高い割合となった。特に男性では 81.5%と非常に高い値をマークし、女性とは若干の

コンクールは、人生を左右すると思いますか							
	はい	いいえ	無・他		はい	いいえ	無・他
合計	73.0%	26.4%	0.6%	男性	81.5%	18.5%	
				女性	68.8%	30.3%	0.9%
15-19 歳	100.0%	0.0%					
20-24 歳	81.8%	18.2%		WFIMC 国際入賞	65.0%	30.0%	5.0%
25-29 歳	63.4%	36.6%		非 WFIMC 国際入賞	75.6%	24.4%	
30-34 歳	76.9%	21.2%	1.9%	国際コン未入賞	72.3%	27.7%	

開きがあるが、彼女たちの社会進出がより進むに違いない近未来には、その差が縮まるかもしれない。年代別集計では、20 代後半に向かって はい の割合が下がるものの、30 代前半で上昇に転じる。仕事に従事する年齢になると、コンクールの経歴が有利に働くことが多くなると推察できる。入賞歴別で見ると、WFIMC 入賞者の方が、はい の割合が低くなった。難関コンクール入賞をきっかけにキャリアが充実したとしても、それを継続的に発展させる大変さは筆者も痛感している。入賞歴が高い回答者ほど、入賞はゴールではなく、スタートであると感じているのではないか。

次に、【日本ではコンクール歴が重視されすぎていると感じることがありますか】と尋ねた。結果は、はい が 78.5%と高い割合になり、男女・年代・入賞歴別でもその傾向は変わ

日本ではコンクール歴が重視されすぎていると感じることがありますか							
	はい	いいえ	無・他		はい	いいえ	無・他
合計	78.5%	20.9%	0.6%	男性	75.9%	24.1%	
				女性	79.8%	19.3%	0.9%
15-19 歳	71.4%	28.6%					
20-24 歳	75.8%	24.2%		WFIMC 国際入賞	70.0%	30.0%	0.0%
25-29 歳	78.9%	21.1%		非 WFIMC 国際入賞	80.8%	17.9%	1.3%
30-34 歳	80.8%	17.3%	1.9%	国際コン未入賞	78.5%	21.5%	

らない。合わせて質問したのが【コンクールで入賞しなければならないという心理的負担を感じるがありますか】(次頁表)で、先ほどよりは若干割合が下がるものの、はい が 68.1%と、いいえ の 2 倍以上となっている。引退が多くなる 30 代で割合が下がるのは自然であろう。入賞歴別に見ると、未入賞者にとって重圧がより大きなものになることは想像に難くないが、入賞したとしても尚、65%前後が負担を感じ続けていることも示されている。ただ、そのような心理的負荷は、自分を成長させる原動力にもなり得る。回答者の多くが、

コンクールで入賞しなければならないという心理的負担を感じることがありますか							
	はい	いいえ	無・他		はい	いいえ	無・他
合計	68.1%	31.3%	0.6%	男性	70.4%	27.8%	1.9%
				女性	67.0%	33.0%	
15-19 歳	57.1%	42.9%					
20-24 歳	84.8%	15.2%		WFIMC 国際入賞	65.0%	35.0%	0.0%
25-29 歳	71.8%	28.2%		非 WFIMC 国際入賞	64.1%	34.6%	1.3%
30-34 歳	53.8%	44.2%	1.9%	国際コン未入賞	73.8%	26.2%	

既に国内・国際コンクールで成果を出していることを考えても、日本出身コンテストはプレッシャーとうまく向き合うことができていると言えるのではないかな。

これらの結果を踏まえて、WFIMC 入賞者には、まずこの質問をぶつけた。

12. 日本と留学先を比較して、コンクール入賞に対するプレッシャーに違いはありますか。

尚、4人の中で須藤氏は留学経験がないため、残りの3人にご回答いただいた。

（プレッシャーを感じることも自体が）あんまりないかな。コンクールはダメだったら仕方ないという感じがあるから。例えば大学入試なら、ダメだったら人生に関わることじゃないですか。でもコンクールはオマケじゃないけど、例えばショパンやチャイコフスキーコンクールのように大きいのを受けて入賞したらまた話は別だけど、どっちかというとお金を稼ぎたい。コンクールって運が良ければお金が稼げるじゃないですか。いっぺんに大きな。だから、そんなにコレがだめだったらもう人生がだめになるというようなプレッシャーとか、あんまりいつもなかったですかね。もちろん獲れたら嬉しいけれど。（木下敦子さん、2018年8月3日）

若いから、ある意味どこに言っても下克上というか。抜かれる、とかそういう意識を持ってないんですね。国内のコンクール行っても、国際コンクール行っても、今でこそ下（の世代）がいますけど、日本人の中ではまだそれでも最年少だったりとか、そういう気持ちはすごいあるんですよ。これが年上になればなるほど、プレッシャーになるんだろうなっていう予測はつくんですけど。

国内でも日本音コンに入賞して、伊藤（恵）先生にも国内は受けなくていいって言われて、これでこのあと何か受けたら1位じゃないと（経歴に）傷がつくだけになってしまうから、そういう意味でも国内はもう受けないという方向で、結果的にプレッシャーのかかる場面から逃れ続けて、のらりくらりきてる感はあると思います。

ただ、コンクールじゃないですけど、藝大内では一番を取らなきゃというプレッシャーは、ある程度ありました。そういう限られた世界、人数の中の方が感じますよね。

国内の方が周りみんなが知り合いだから、プレッシャーも大きくなると思います。外国に行っちゃうと上手い人が山ほどいても、みんな知らないから、すごいなあ、で自分も頑張ろうと思わせられます。（桑原志織さん、2018年8月4日）

外国に行った方がない！それは当然だよ。日本にいたら、なまじ音コン獲ってるものだから（笑）。外国行って良かったと思うよ。本当に。落ちたからといって、別にシ

ョックとか(ないよね)。結構周り見てるとそうじゃん。落ち込むというより、「ああ、うーん」だよね。次から次。

なんだろうね、なんで日本にいたところ、周りの目を気にしないといけないんだろうね。狭いからかね。やっぱり演奏会とかもそうだけど、あれじゃない？外国だとあんなに開放的に楽しく来てくれるからね。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

3人とも国際コンクール参加そのものに関しては、プレッシャーを感じていないようである。お話に出たのは、木下氏が大学入試、桑原氏は大学の学内試験、佐藤氏は周囲と、いずれも日本のことばかりで、桑原氏の言う「みんなが知り合いだから」や、佐藤氏の「なんで周りの目を気にしないといけないんだろうね」というコメントには、築いた立場や、求められているレベルが高い故に生じる重圧が背景にあるだけではなく、彼らは落選が知られば国内での地位を危険に晒すと感じており、「外国に行って良かった」や「傷が付く」といった表現にもそれが表れている。それは日本に、新しい挑戦への失敗がそれまでの経歴の価値をも下げるとい風潮があることに他ならない。この馬鹿げた価値観は、成果をあげたコンテストが国際コンクールに連続して受験しにくい閉塞的な雰囲気醸成している。今世紀の間に WFIMC・準 WFIMC コンクールで複数の1位を獲得した日本人は僅か2人で、しかもその内の一人は外国育ちである。コンクール1回きりでの評価は、実力プラスアルファの様々な環境面に依存するため、奏者本来の力量や将来性を見るためには若年齢での優勝があがりとなるのは早計である。国際コンクール受験の5年から10年程度の期間で総合的にどのような成績を残したかがより重要ではないか。音楽家自身にも、それを取り巻く周辺環境にも言えることであるが、挑戦し続けることの値打ちを讃え、勇気ある失敗を笑わない社会にならなければ、活発な成果も期待できない。

さてこれまで見てきたように、WFIMC入賞者である今回のインタビューは、求めるものも求められるものも大きく、それぞれプレッシャーやモチベーションと向き合い、いくつもの壁を乗り越えた人達である。彼らの入賞に関する心理的な葛藤を探るため、次のように設問した。

13. 結果が出ない、自分には無理だと感じる時がありましたか。ある場合には、どのように努力されて入賞につなげましたか。

14a. (20代半ばまでに初めてWFIMC入賞して)若くして入賞したことで難しさを感じることはありますか。
--

14b. (20代半ば以降に初めてWFIMC入賞して)若くして入賞できなかったことへの焦りはありましたか。

まずは、問13.について、失敗経験がほとんどないという桑原氏以外の3人に尋ねた。

イタリア、マドリッド（の小規模な国際コンクール）で最後までいけなくて、その前にブラームス（国際音楽コンクール）で獲った後だったから、なんで？というのがあった。ただ結構コンクールを多く受けている友達も一緒に受けていて、審査員が難しいとも聞いていたので、運が悪かったと片付けた。それがモンザ（リナ・サラ・ガッロ国際）を受ける直前のこと。

（上位入賞した）モンザの時は、事前審査が通った時点で自信になるじゃないですか。ある程度のレベルには居るんだということが認識できたから、これは頑張っ受けてよ。でも特別に何か入賞するためにこうしようというのはなくて、それは練習しかなかったと思います。（木下敦子さん、2018年8月3日）

ありましたよ。書類でボコスカ落ちてる時っていうのはさ、さすがにショックを受けるでしょ。そうだね、色々な考え方があるんじゃない。このコンクールは縁がなかったとか。でもやっぱり自分で反省して、録音のああいうところがよくなかったとか。次のコンクール受けるときには、そういうところを注意して受けるよね。苦手なものを克服していく。結局それってレベルアップにもつながることだし。（佐藤彦大さん、2018年8月4日）

ありますね。エトリングと浜コンの間に大スランプがあって、ピティナでもなかなかうまくいかなかったりとかして、ああもうダメなのかな、と思ったり。（打破するためには）気持ちは諦めないで、できるところまでやってみよう。（須藤梨菜さん、2018年8月6日）

反省すべきを反省し、実力を向上させることは当然であるが、落選要因の客観的な分析による気持ちの切り替えも重要であることがわかる。全て自分のせいと考えて思い詰めるのも、運や審査員ばかりに理由を求めて転嫁のみになるのも好ましくない。自分に向き合う部分と、言葉は少し悪いが、逃げの部分とをバランスよく持つべきである。

問 14. では、入賞した年齢に応じて異なる問いを設けている。桑原氏・須藤氏には早い入賞経験を、木下氏には比較的遅い入賞経験を、佐藤氏にはその両方についてご回答いただいた。

【14a. 早い入賞経験について】

やっぱりある程度勢いに偏りすぎた演奏をしても、若いから許してもらえた部分って多分絶対あったと思うんですよね。特にカナルスの時とかは、それもあったんじゃないかなあと。あと三次でペトルーシュカ弾いて、リスト・ソナタを弾いたんですよ。このプログラミングは、受けに行ったのは20（歳）かな？この歳だったから受け入れられて評価してもらえたなっていうのはあるので、年齢によって変えていかないと、同じものを弾いていても評価は伸びないどころか多分どんどん下がっていくし、そういう意味で今自分が持っているレパートリーをただ並べて、で成功してきたのは、若かったというのもあるのかなと。よくこれを続けて弾いたねという勢いを評価された

みたいな感じだったので、27とか30になったらちょっと体力的にも弾ける気がしないし、どうかなっていう。

(これまでの成績がいい故に、負けたくない気持ちがあり) 怯えてるわけじゃないけれど、普通の人に比べて意識しすぎているかもしれない。当たって砕けろというのはちょっとできない。(桑原志織さん、2018年8月4日)

日本音コン受けてから、(次に) リーズなんか受けたもんだから、当然身の丈にあってないわけじゃない。あの時(2009年) だってゴルラッチとかソフィア・グルヤクとかさ、ああいうのが(上位に) 入ってるわけじゃん。

あと日本にいた時とかはさ、(誰がどの) 国際コンクール受けてるのとか、ネットで情報が見れるわけじゃん。だから落ちるということは評価に繋がったりとか・・・あるじゃん。周りの目みたいな。(落ちることで) 音コンをとったという価値がなくなるとかさ。そういう怖さはあったけどね。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

そうですね、それなりに一回入賞すると、そのあともそういう目で見られるから、その分ストレスというか緊張感は増したりもするかな。そのコントロールが難しくなってくるんじゃないかな。自分との戦いが。逆に一番最初、本当に初めて国際コンクールに出た時は、ストレスが全くなかった。エトリンゲン、浜松・・・浜松以降に結構感じるようになって来たかな。少しずつ。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

【14b. 比較的遅い入賞経験について】

あんまり焦りはなかった。20代半ばまでに小さなコンクールは受けてて、1位になったことは本当になくて、なんで私2位止まりなんやろうというのはあったから、それが原動力になってまたちょっとコンクール受けようというの、それだけじゃないけれどちょっとあって。ただまあ獲れなかったら獲れなかったで(仕方ない) という部分もあったから、機会があれば、タイミングが合えば受けてみようという感じだったから。(木下敦子さん、2018年8月3日)

(ベルリン留学後) モスクワ行って、まずケッチョンケッチョンにされて、プライドも何もかもなくなった状態から勉強したから、怖いものなんかないのね。年齢がやっぱり上になるとその分頭は使うし、色々今までの経験があるしで、熟練タイプみたいになる。若者はさ、多少荒れても勢いとかでそういうのでもいけるけど、中身とか、今までの人生経験値みたいなものがね。特に(カナルスの) ファイナルではね、ラフマニノフの(ピアノ協奏曲) 二番を弾いたけれども、オケと20何回くらい弾いてる曲だからさ、(オーケストラが) 何をやってるとか、何が起こっても絶対にこっちが合わせられるとか、そのくらい自信はあったから。(他のファイナリスト) 2人ともラフマニノフ二番は初めて弾いたんだよね、オケとね。そういう意味であの時はアドバンテージがあったね。経験差だね。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

早い年齢で入賞を果たしている 3 氏共、他のコンクールで落ちることへのプレッシャーを述べている。この問題に関しては問 12. の考察でも詳述したが、やはり個々のコンクールの結果ではなく、挑戦期間全体での実績を重要視する社会的な潮流を作る必要がある。

桑原氏が、当時の年齢においては勢い先行のプログラムや演奏でも評価されたと述べ、将来スタイルチェンジする必要性を見据える一方、佐藤氏は同じカナルスでの勝利について、音楽的成熟と経験が味方したと語っており、2 人の話からコンクールで求められている演奏が年齢によっても異なることが窺える。このような中期的成長を見る意味からも、コンテストへの評価は、やはりトータルで何を成し遂げたかという単位で見る必要がある。

木下氏は、年齢による焦りや絶対に入賞しなければならないという圧迫を感じておらず、それが良い結果に繋がったと推察できる。佐藤氏の回答も含め、20 代後半ともなると、コンクールを自分の都合でうまく利用する強かさが必要となってくることも見て取れる。

2-10. 具体的なキャリア形成への意識とコンクールの役割

筆者は将来日本で仕事することを念頭に、20 代後半はコンクール挑戦に加え、このように博士研究に取り組むことや、コンサートや録音といった商業的な活動も積極的に行ってきた。もちろんピアニストとしては、どのような演奏をするのか・成長や進歩を示し続けられるかが最も肝要である。ただそれは、幸運にもコンクールで一定の成績を収めたから言えることであって、現役の若手の中には、先が見えない不安な思いを抱えている人がいることも想像に難くない。ここでは日本出身コンテストスタントが、将来にどのような理想を持ち、ピアノコンクールは実際のキャリア形成に役立っているのかを調査する。

まずは【コンクール受験を終えた後の希望するキャリアについて、活動拠点をどちらに置かれますか】と尋ねた。全体では、圧倒的に日本が多く、63.8%をマークした。

コンクール受験を終えた後の希望するキャリアについて、活動拠点をどちらに置かれますか					
	日本	ヨーロッパ	アメリカ合衆国	その他の外国	複数選択
合計	63.8%	22.1%	1.2%	0.6%	12.3%
男性	57.4%	27.8%	0.0%	1.9%	13.0%
女性	67.0%	19.3%	1.8%	0.0%	11.9%
15-19 歳	42.9%	28.6%	28.6%	0.0%	
20-24 歳	57.6%	33.3%	0.0%	0.0%	9.1%
25-29 歳	66.2%	18.3%	0.0%	1.4%	14.1%
30-34 歳	67.3%	19.2%	0.0%	0.0%	13.5%
WFIMC 国際入賞	65.0%	20.0%	0.0%	0.0%	15.0%
非 WFIMC 国際入賞	60.3%	20.5%	1.3%	1.3%	16.7%
国際コン未入賞	67.7%	24.6%	1.5%	0.0%	6.2%

ヨーロッパの22.1%がこれに続き、アメリカ合衆国・その他の外国を選択した層は非常に少ない。また、今回のアンケートでは、特に注釈がない場合には一問一答でお願いしていたが、この問いでは、恐らく一つに絞れないという意味合いで、12.3%の回答者が複数の選択肢をチェックしており、その殆どが 日本・ヨーロッパの両方を選択していた。男女別集計では、日本は女性が67%と、男性57.4%を上回った。一方のヨーロッパは、男性が女性を上回る。年代別に見ると、20代前半では全体の3分の1がヨーロッパ志望であるが、20代後半以降では2割を切り、代わりに日本志望が増える。仕事をする年齢になると、現実的に日本の方が無難であるということであろう。入賞歴別集計では、入賞者2層で複数選択の割合が高くなっており、国際コンクールに入賞することで選択肢が増えたという見方もできる。ヨーロッパ在留の足がかりをと考えると、コンクールが良いきっかけとなるに違いない。ただ、近年の外国人排斥の動きには注意を払う必要がある。

次の質問は、【コンクール受験後のキャリアについて理想に近いものを1つ教えてください】である。20世紀においては、著名コンクール入賞後にメジャーな音楽事務所に所属し、華々しくデビューを飾って演奏活動を続けることがピアニストとしての典型的な成功であったが、最近のコンテストはどのように考えているのであろうか。結果は下表の通り、

コンクール受験後のキャリアについて理想に近いものを1つ教えてください							
	A	B	C	D	E	その他	無効
合計	13.6%	17.9%	3.7%	54.3%	6.2%	3.1%	1.9%
男性	20.8%	24.5%	1.9%	49.1%	1.9%	1.9%	
女性	10.1%	14.7%	4.6%	56.9%	8.3%	3.7%	
15-19歳	16.7%	16.7%	16.7%	50.0%	0.0%	0.0%	
20-24歳	18.2%	18.2%	0.0%	51.5%	9.1%	3.0%	
25-29歳	9.9%	21.1%	1.4%	59.2%	5.6%	2.8%	
30-34歳	15.4%	13.5%	7.7%	50.0%	5.8%	3.8%	
WFIMC 国際入賞	21.1%	21.1%	0.0%	57.9%	0.0%	0.0%	
非 WFIMC 国際入賞	11.5%	21.8%	5.1%	53.8%	5.1%	2.6%	
国際コン未入賞	14.3%	12.7%	3.2%	55.6%	9.5%	4.8%	

表中アルファベットの選択肢内容	
A	世界的な演奏家として活動する
B	日本以外のある国に居住し、演奏活動や指導活動で生計を立てる
C	日本のメジャーな音楽事務所に所属し、演奏活動のみを行う
D	日本で音楽活動をしながら、教育機関等で指導活動も行う
E	指導活動を中心に、安定した生計を優先する

全ての集計で、D. 日本で音楽活動をしながら教育機関等で指導活動も行うが多数を占め、全体で54.3%をマークした。大きく離れて B. 日本以外のある国に居住し、演奏活動や指導活動で生計を立てるが17.9%で2番手、それに僅差で A. 世界的な演奏家として活動する

が続く。特筆すべきは C. 日本のメジャーな音楽事務所に所属し、演奏活動のみを行う が選択肢中最下位の 3.7%にとどまることである。もちろんオファー自体が少ない事情もあると推察できるが、たとえメジャー市場に身をおいても、ほとんどの場合演奏活動だけで生計を立てられない現実や、求められる演目が演奏家にとっては魅力的でないというような理由も挙げられるであろう。筆者にとって更に驚きであったのが、実現に最も近い位置にいる WFIMC の入賞者に、C. が一人もいなかったことである。ピアニストは増える一方、聴衆は減る一方で、今までと同じ枠組みを念頭に置いて経歴を積み重ねても、満足に活動することが難しくなっている日本の音楽業界の厳しさを反映していると筆者は見る。芸術を志す若手音楽家にとって、今後音楽の質を高く向上させながら興行的な広がりを求めるには、自らのフットワークを軽く、少ないコストで企画を行って、部分的に外部から協力を仰ぐというコンパクトなスタイルを取る必要があるかもしれない。また、メジャー市場については次の第 4 章で、在京・在関西のオーケストラに招聘されるピアニストの実態調査し、考察する。

男女別集計を見ると、男性は A. や B. の割合が多く、国際志向が強いことがうかがえる。先述の C. と E. 指導活動を中心に、安定した生計を優先する は非常に僅かである。対照的に女性は、D. と E. の国内での指導活動を含む 2 選択肢が計 65%を超え、男女で目指すキャリアの理想が大きく違うことがわかる。年代別では、A. と B. の合計が年代順に減少し、前問と同様に、歳を取るごとに海外志向から日本へという流れであると言える。入賞歴別では、入賞歴が高くなるにつれ、国際的な活動を希望する割合が高くなっている。

改めて、【大きなコンクールで入賞することが、その後のキャリアにつながると思いますか】と尋ねた結果、全体・男女別・年代別・入賞歴別全ての集計で はい が 9 割を超えた。

大きなコンクールで入賞することが、その後のキャリアにつながると思いますか							
	はい	いいえ	無・他		はい	いいえ	無・他
合計	95.1%	3.7%	1.2%	男性	96.3%	3.7%	
				女性	94.5%	3.7%	1.8%
15-19 歳	100.0%	0.0%					
20-24 歳	97.0%	0.0%	3.0%	WFIMC 国際入賞	95.0%	0.0%	5.0%
25-29 歳	91.5%	7.0%	1.4%	非 WFIMC 国際入賞	93.6%	6.4%	
30-34 歳	98.1%	1.9%	0.0%	国際コン未入賞	96.9%	1.5%	1.5%

難関コンクールの入賞が生涯の音楽活動へ大きな鍵を握ることは、たとえ既存のメジャー市場に魅力が感じられなくなっても、殆どの日本出身コンテストの共通認識であることに変わりはない。

では実際に、コンクール入賞はその後の演奏活動に繋がっているのか。【全国規模でのコンクール入賞をされている場合、演奏活動に役立つ実感や経験がありますか】、【国際コンク

ール入賞をされている場合、演奏活動に役立つ実感や経験がありますか】と尋ねた。あえて役立つという表現を使うことで、褒賞演奏会のみならずコンクール以降の演奏活動全般を指すようなニュアンスを出している。

全国規模でのコンクール入賞をされている場合、演奏活動に役立つ実感や経験がありますか							
	はい	いいえ	無・他		はい	いいえ	無・他
合計	79.6%	19.7%	0.7%	男性	84.3%	15.7%	
				女性	77.2%	21.8%	1.0%
15-19 歳	100.0%	0.0%					
20-24 歳	82.8%	17.2%		WFIMC 国際入賞	80.0%	20.0%	0.0%
25-29 歳	81.8%	18.2%		非 WFIMC 国際入賞	79.5%	19.2%	1.4%
30-34 歳	72.0%	26.0%	2.0%	国際コン未入賞	79.7%	20.3%	

国際コンクール入賞をされている場合、演奏活動に役立つ実感や経験がありますか							
	はい	いいえ	無・他		はい	いいえ	無・他
合計	83.7%	16.3%		男性	85.3%	14.7%	
				女性	82.8%	17.2%	
15-19 歳	100.0%	0.0%					
20-24 歳	88.9%	11.1%		WFIMC 国際入賞	85.0%	15.0%	
25-29 歳	84.4%	15.6%		非 WFIMC 国際入賞	83.3%	16.7%	
30-34 歳	80.5%	19.5%		国際コン未入賞			

結果は上表の通りで、全国規模コンクールでは はい の割合は全体の 79.6%に達し、男女別で男性が高めであるなど多少の振れ幅はあるものの、属性別でも大きな傾向の違いは見られない。では、国際コンクールではどうか。全ての集計・分類で はい が 8 割を超え、こちらも国内コンクールと同様、入賞はほとんどの場合、演奏活動に実利をもたらすものであると証明された。

最後に、日本のピアノ学習者のトップ層と言える今回のアンケート回答者が、コンクールをどれほど重視してキャリア形成を行なっているかを明らかにするため、【演奏家のキャリアを築く上で、学歴/コンクール歴/コンサート歴のそれぞれについて、あなたが思う重要性を 5 段階で評価してください。1 が最も軽視、5 が最も重視です】と設問した。まずは、

演奏家のキャリアを築く上で、学歴/コンクール歴/コンサート歴をそれぞれのあなたが思う重要性を 5 段階で評価してください。5 が最も重視、1 が最も軽視です(点数別集計)															
点数	学歴					コンクール歴					コンサート歴				
	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
合計	7.4%	33.3%	31.5%	16.0%	11.7%	28.4%	48.8%	18.5%	2.5%	0.6%	42.2%	22.4%	26.7%	7.5%	1.2%
男性	0.0%	22.2%	40.7%	14.8%	22.2%	22.2%	42.6%	25.9%	3.7%	1.9%	43.4%	15.1%	34.0%	7.5%	0.0%
女性	11.1%	38.9%	26.9%	16.7%	6.5%	31.5%	51.9%	14.8%	1.9%	0.0%	41.7%	25.9%	23.1%	7.4%	1.9%
15-19 歳	14.3%	57.1%	14.3%	14.3%	0.0%	28.6%	71.4%	0.0%	0.0%	0.0%	28.6%	28.6%	42.9%	0.0%	0.0%
20-24 歳	9.1%	33.3%	15.2%	21.2%	21.2%	45.5%	30.3%	18.2%	3.0%	3.0%	28.1%	21.9%	40.6%	9.4%	0.0%
25-29 歳	5.7%	30.0%	35.7%	17.1%	11.4%	24.3%	52.9%	18.6%	1.4%	0.0%	54.3%	18.6%	18.6%	8.6%	0.0%
30-34 歳	7.7%	34.6%	38.5%	11.5%	7.7%	23.1%	51.9%	21.2%	3.8%	0.0%	36.5%	26.9%	26.9%	5.8%	3.8%
WFIMC 国際入賞	0.0%	10.0%	40.0%	20.0%	30.0%	25.0%	35.0%	35.0%	5.0%	0.0%	60.0%	20.0%	15.0%	5.0%	0.0%
非 WFIMC 国際入賞	6.5%	37.7%	32.5%	14.3%	9.1%	23.4%	54.5%	19.5%	2.6%	0.0%	45.5%	20.8%	23.4%	7.8%	2.6%
国際コン未入賞	10.8%	35.4%	27.7%	16.9%	9.2%	38.5%	46.2%	12.3%	1.5%	1.5%	32.8%	25.0%	34.4%	7.8%	0.0%

点数別に結果を見ると、トータルでは、学歴は 4、コンクール歴も 4、コンサート歴は 5 がそれぞれ最も多い回答であった。

学歴は、他の2つよりもやや軽視されている印象である。5は7.4%にとどまり、4と3で全体の6割以上を占め、2や1もそれぞれ1割を超す水準である。男女別では、女性の重視傾向が明確で、5と4で半数に達する一方、男性は5が0、4が22.2%と非常に低い。年代別では、大学等に入学する年齢の10代前半は重視、大学院への進学の有無を決断する20代前半は考え方が別れ、就職が近づく25歳以降になると4と3の多数に落ち着く。入賞歴別では、未入賞・非WFIMC入賞の2層とWFIMC入賞層との違いが顕著で、後者は明らかに学歴軽視傾向である。

コンクール歴は、5単体ではコンサート歴より低い数字であるが、重視の2選択肢5・4を合算して見ると77.2%にのぼり、コンサート歴を大きく超える水準である。女性では83.4%まで上昇し、特に高い。年代別は、20代以降5・4の合計割合に変化はない。入賞歴別で見ると、すべての層で軽視の2選択肢2や1は少ないが、重視の2選択肢の合計においては、未入賞で84.7%、非WFIMC入賞で77.9%、WFIMC入賞では60%と入賞歴が高くなるごとに減少が見られることは興味深い。

コンサート歴は、5を選んだ回答者の割合が最も多い項目である。5・4合算での男女別集計では、女性が男性を上回る。全体的に女性は、どの項目でも高い点をつける傾向にあった。年代別では回答の分布がばらけているが、20代後半・30代前半は、よりコンサート歴を重視すると言える。入賞歴別ではコンクール歴の回答とは対照的に、5・4の選択肢合計が、未入賞は57.8%、非WFIMC入賞は66.3%、WFIMC入賞は80%と入賞歴が高くなるごとに増加している。コンクール実績が充実するほど、コンクール歴よりコンサート歴の方に目を向けるようになることが明らかとなった。

次に、3項目につけられた点数を相対的に順位付けし、集計したのが次頁上表である。尚、異なる項目が同点の場合には、同順位として扱うものとする。

こうして見ると、学歴は明確に3番手であることがわかる。コンクール歴とコンサート歴はどの集計・分類でも並んで1位に推されているが、1位・2位共に割合で上回ることから、日本出身コンテストにとって最も重視されているのは、コンクール歴であると言える。入賞歴が高くなればなるほど学歴・コンクール歴は軽視され、コンサート歴により重きが置かれることには変わりない。また、コンサート歴を3位に置いた回答者が全体の23.9%にもなることは、やや気がかりである。やはりコンクールに追われ過ぎてしまっている学習者が一定数いるということかもしれない。

演奏家のキャリアを築く上で、学歴/コンクール歴/コンサート歴をそれぞれのあなたが思う重要性を5段階で評価してください。1が最も軽視、5が最も重視です(順位別集計)									
	学歴			コンクール歴			コンサート歴		
	1位	2位	3位	1位	2位	3位	1位	2位	3位
合計	24.5%	27.6%	47.9%	61.3%	32.5%	6.1%	58.3%	17.8%	23.9%
男性	16.7%	27.8%	55.6%	63.0%	33.3%	3.7%	61.1%	22.2%	16.7%
女性	28.4%	27.5%	44.0%	60.6%	32.1%	7.3%	56.9%	15.6%	27.5%
15-19歳	42.9%	28.6%	28.6%	71.4%	28.6%	0.0%	57.1%	0.0%	42.9%
20-24歳	21.2%	30.3%	48.5%	69.7%	30.3%	0.0%	39.4%	30.3%	30.3%
25-29歳	18.3%	26.8%	54.9%	53.5%	42.3%	4.2%	63.4%	18.3%	18.3%
30-34歳	32.7%	26.9%	40.4%	65.4%	21.2%	13.5%	63.5%	11.5%	25.0%
WFIMC国際入賞	10.0%	20.0%	70.0%	50.0%	45.0%	5.0%	75.0%	20.0%	5.0%
非WFIMC国際入賞	28.2%	25.6%	46.2%	60.3%	32.1%	7.7%	60.3%	11.5%	28.2%
国際コン未入賞	24.6%	32.3%	43.1%	66.2%	29.2%	4.6%	50.8%	24.6%	24.6%

これまで見てきた通り日本出身コンテストは、キャリアにとってコンクール入賞が不可欠と捉えており、また入賞が実際にその助けとなっている。WFIMC入賞者にも、

15. コンクール入賞前と入賞後、コンクールに対してとピアニストとしてのキャリア、それぞれに思い描いていたイメージは変わりましたか。変わった場合は、具体的に教えてください。

と尋ねた。

コンクールが主体ではない。あくまでついてくるものみたいな感じだからあまり変わらないかな。(木下敦子さん、2018年8月3日)

あくまでコンクールは一つの手段というイメージは持っています。国内にいる頃は、やっぱり国内でのコンクールとしては音コンで入賞することが、一つの終着点でもあったし、藝高の頃からコンクールを受け始めて、そこを目指すっていう感覚があって、いざ日本音コンとったら日本の中ではこれで終わったっていうはっきりした意識はできたけど、いざ海外に行ってみると、あくまでコンクールは一つの通過点というか道具に過ぎないっていうのは。国内でコンクール受けている時と、国際的なのを受けている時とでそこは多少感覚として、視点は変わっています。ただそれ以外に、大きな差は・・・あんまりないですね。あくまでコンクールは一つの本番というのは昔からそうなので。(桑原志織さん、2018年8月4日)

変わったというか、(音楽家としてのキャリア形成は)自分が予想していたよりもはるかに大変だということだね。例えば日本音コンとった後はさ、その後演奏会が始まってさ、獲るまでが目標だったじゃない。その時まで。結局獲った後の方が全然大変なんだって。それは獲らなきゃわからない。例えば、誰かね、演奏会を聴きにいった、なににコンクールを獲りましたという人がいて、たいしたことねーな、って思うことが昔はあったけど、それが自分の立場になったときに、やばいこれは忙しいんだなと。ちょっと同情の目で見れるようになったかな。まあそういうのも言い訳だから通用しないのもわかってるんだけど。そういう意味で、獲るまで必死。でも獲っ

たらもっと必死。演奏会の数だったりさ、プログラムの用意のことも。色々。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

コンクールに対しては全く変わらないかな。こんなに(入賞するのが)大変なんだという感じを経験したくらいで、違いはないけど、入賞後はやっぱりこんなに呼ばれるようになるんだというくらい増えるから、そこは違いを感じたかな。あとはお客さんの入りとかも全然違うから。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

木下氏・桑原氏は、コンクールをあくまでも通過点と考え、レベルアップやキャリア形成のための有効なツールとして扱っている様子が窺える。彼女らはコンクールと演奏会とを分け隔てなく準備し、高い成果をあげ、回り道することなく常に成長し続けており、理想的にコンクールと対峙している。佐藤氏・須藤氏は、コンクール入賞を大きな目標と定め、「必死」「大変」という言葉からも、成功を収めるまでは大きな重圧を感じていたことが読み取れる。入賞に到達するための努力や工夫は、その後の演奏活動に生かされ、自身を大いに成長させるものであり、これもまた相応しいコンクールとの向き合い方と言える。入賞後は演奏機会の増加や、求められる多種多様なプログラムなど、コンクール挑戦時を超えるキャパシティが必要となり、その修練の方がよほど大変なもので、まさに佐藤氏の「獲るまで必死、でも獲たらもっと必死」という言葉に尽きる。

大きなコンクールの入賞者は責任の大きな立場に就くことも多く、どちらのタイプであっても、限られた時間の中で向上する日々の歩みを止めないことが、難しくも重要となる。

2-11. コンクールで勝つことと芸術性を深めることへの葛藤

さてこれまで見てきたように、現代の若手ピアニストは中長期に渡ってコンクールに挑戦することが当たり前となっているが、勝つことを求めるあまり、音楽本来の「心の琴線に触れる」演奏の追求がなおざりとなっているという批判を良く耳にする。先の4人のように、コンクールと演奏会とを同じに捉える考え方や、入賞後も芸術家として深化する意識を強く持つ人たちには当てはまらないことであろうが、20代をコンクール一辺倒で過ごした演奏家は、その後について学ぶチャンスが少ないのではないか。筆者も2016年頃に挑戦が一段落したため、演奏家と指導者として第一線で活躍する師匠に、生涯の音楽活動を見据えた指導を受ける機会を得た。停滞した時期もあったが、大きな財産となっている。

そのような背景から、まず【コンクールで勝ちやすい演奏、演奏家というのは存在すると思いますか】と設問した。ここで言う勝ちやすい演奏とは、技術力が高く、解釈で賛否両論

を引き起こしにくいという意味合いとなる。勝ちやすいピアニストには、元々のスタイルが勝ちやすい演奏であるタイプと、本来の自分とは違っても、コンクールのために勝ちやすい演奏を意識するタイプがいると考えられる。結果、全体で存在する・どちらかという

コンクールで勝ちやすい演奏、演奏家というのは存在すると思いますか					
	存在する	どちらかという存在する	どちらかという存在しない	存在しない	無・他
合計	47.2%	50.9%	0.6%	0.6%	0.6%
男性	48.1%	48.1%	1.9%	0.0%	1.9%
女性	46.8%	52.3%	0.0%	0.9%	
15-19 歳	28.6%	71.4%	0.0%	0.0%	
20-24 歳	54.5%	42.4%	0.0%	3.0%	
25-29 歳	49.3%	50.7%	0.0%	0.0%	
30-34 歳	42.3%	53.8%	1.9%	0.0%	1.9%
WFIMC 国際入賞	35.0%	55.0%	5.0%	0.0%	5.0%
非 WFIMC 国際入賞	43.6%	56.4%	0.0%	0.0%	
国際コン未入賞	55.4%	43.1%	0.0%	1.5%	

存在する の合計が 98.1%となり、ほとんどの回答者が勝ちやすい演奏・演奏家の存在を認めている。男女・年代・入賞歴別の集計においても内訳は多少変化するものの、同様の傾向を示す。先の調査と合わせると、日本出身コンテストの殆どは、大きなコンクールでの入賞がキャリアにつながると認識し、コンクールで勝ちやすい演奏スタイルがあると考えているにもかかわらず、WFIMC 加盟コンクールで日本人入賞者が減少しているのは、コンクールのために敢えて演奏を変えろという価値観を持つ者が少なくなっているからであると推測できる。

その延長線上で尋ねたのが、【コンクールで入賞を目指すことと、芸術を志す中で高みを目指すこととの関連について近いものを選んでください】である。結果は、合致する部分

コンクールで入賞を目指すことと、芸術を志す中で高みを目指すこととの関連について近いものを選んで下さい									
	合致する	合致する部分も相反する部分もある	全く相反する	無・他		合致する	合致する部分も相反する部分もある	全く相反する	無・他
合計	4.9%	89.0%	5.5%	0.6%	男性	7.4%	85.2%	5.6%	1.9%
					女性	3.7%	90.8%	5.5%	
15-19 歳	0.0%	100.0%	0.0%						
20-24 歳	12.1%	87.9%	0.0%		WFIMC 国際入賞	10.0%	85.0%	0.0%	5.0%
25-29 歳	4.2%	87.3%	8.5%		非 WFIMC 国際入賞	1.3%	89.7%	9.0%	
30-34 歳	1.9%	90.4%	5.8%	1.9%	国際コン未入賞	7.7%	89.2%	3.1%	

も相反する部分もある、が 89%と大多数を占めた。合致する、全く相反する の選択は、それぞれ 5%前後にとどまる。年代別の 20 代前半や WFIMC 入賞者で 合致する の回答がやや多い程度で、この質問でも全体の傾向は大きく変わらない。

ではコンクールで大きな成功を果たし、演奏活動も積極的に行う WFIMC 入賞者の 4 人

はこの問題をどのように考えているのであろうか。以下のように質問した。

16. コンクールの存在が音楽を芸術から離れてしまっているという批判もありますが、どう思われますか。

一理あると思いますね。ある程度音楽を芸術から離れている、ということは正しいと思います。競争にばかり目がいってしまって。

先日イタリアで講習会を受けていたんですが、もともとドイツで勉強していてそのあとアメリカでも勉強して、今は韓国に戻って高校の音楽の先生をやっている韓国の方と話をする機会があったんです。やっぱり韓国は（日本より）もっとみんながコンクールコンクールと言っていて、コンクールのためのピアノという風な考えを持っている子がたくさんいて、とにかく「指が回ればいい・難しい曲を弾けたらそれでいい」と思っている若い子がすごく多いと嘆いていました。

同年代ですごくたくさんコンクールを受けている子は、すでにたくさんのレパートリー・難しい曲を持っているのに、「このコンクールにはもっと難しいこっちのコンチェルトの方がいいから」と、急いで勉強して。でもやっぱり付け焼き刃では、完成度も低くなるし、どれも同じような演奏になっちゃうから、弾けているだけで中身があんまりないということをよく目にすることがあって、それだったら結局入賞できないんですね。

コンクールって最後に賞が獲れるか獲れないか、一次で落ちてもセミファイナルで落ちても結局は同じことだから、数撃ちや当たるじゃないけど、そういう考えで曲を浅く勉強してやるよりは、少なくとも一つ一つの曲を深くゆっくり勉強する方が、音楽的には実のあるやり方だと思います。でもそう考えている人ばかりじゃないし、そもそも何が芸術を離れているというのか、結局そういう話になって、それも人によってそれぞれだから。とにかくたくさん曲を持っている方が、芸術的な演奏ができる人もいるのかもしれないけど。（木下敦子さん、2018年8月3日）

私はあんまり思わないですね。結局、芸術的な演奏をしたらコンクールでも勝つし、まあコンクールで上位入賞している人はやっぱりうまいなと思うし、そんななんか納得いかないような結果にまだ当事者として出会ってないので。もちろん個々でこんなにすごいまく弾けたのに落ちたとか、あると思いますけど、まあその場合は他にもっと素晴らしい人がいただけの話じゃないかな、っていう。私自身はあんまりコンクールに対しての不満はないです。（桑原志織さん、2018年8月4日）

やっぱりさ、音楽にいいも悪いもないじゃん。その人の表現なんだからさ。極論を言ってしまうえば、それを否定するっていうのはそもそもねえ、あり得ないわけで。それに優劣つけるっていうのはね。人を批判してるみたいな感じがしてね。

でも、仕方ない。だってそうしないと世に出れない世の中なんだから。だから、嫌だけど、好きじゃないけれど、でもまあ（コンクールに）出なきゃ、こうやってキャリア積めないんだから、じゃあしょうがないっていうね。

（芸術を切り離してしまっているのはある程度事実）と思うけどね。だってやっぱりさ、今はどうかわかんないけど、いい演奏していてちょっと暗譜が飛んだのと、ミスしないけど面白くなかった、どっちがいい？とか・・・わかんないでしょ？比べら

れないからね。例えば、今実技試験で、点数をつけるのも心苦しい。なんか、この点数かわいそうだけど、うーんとか。不特定多数の生徒を聴くから、その場の演奏でしか判断できないしね。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

芸術から離れてしまっているかということ、そこまでそうじゃないかもしれないけれど、ちょっと戦いみたいになってる感じがするのは、うーん、って思いますね。コンクールだから、ってコンクールの賞を意識しすぎるのも良くないんじゃないかなと思います。そうすると自分のやりたい音楽っていうのから離れちゃうし、コンクールの場合、審査員を意識して弾く人が結構多いじゃないですか。そうすると、自分の個性を閉ざしてでも審査員の好きなものに近づけようとしちゃったりするから、個性が出なくなっちゃう。特に日本の方は結構そういう方が多いんじゃないかとすごく感じる、海外の子達を見てると。

個性を潰しちゃってる、その人のできる音楽性をなくしちゃってるかなと感じたことはありますね。コンクールや審査員を意識しすぎるんじゃないなくて、自分の中でどれだけという音楽を弾きたいんだよっていうのをアピールできるのかということに変えていった方がいいのかなと思います。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

この批判に明確に否定的なのは、桑原氏である。ただ、ご自身でも再三断ってらっしゃるように、自己研鑽の延長線上で受験することを心掛け、卓越した成功を収め続けているタイプならではの意見かもしれない。須藤氏も芸術を引き離すというところまではいかないのではと疑問を呈しつつ、音楽を競技として捉える学習者が多いとも指摘している。そして日本出身者の個性が弱いとされるのは、審査員に迎合し、演奏を変えてしまうからであると述べ、演奏者自身が表現したい音楽をよりアピールすべきであると主張している³⁶。

木下氏は、WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールにおいて 2016 年より最大の入賞者輩出国となった韓国の事例を挙げ、勝つためのピアノが蔓延することの危険性を指摘している。たとえコンクールに持っていく作品であっても、にわか仕込みにならず音楽的に成熟させることが大切で、それが良い成果を生むと説く。また、佐藤氏が言うように、そもそも音楽に優劣をつけるという行為自体が、個それぞれに絶対的な評価をされるべき芸術の概念と対立するものである。それでもキャリアのためには受けるしかない、仕事ゆえに点数をつけなければならない。大勢の人がそのようなジレンマを抱えながら、コンクールに関わっているのではないであろうか。

木下氏・佐藤氏は質問外の雑談中、次のようにも述べていた。

やっぱり演奏会を聴きにいくにしても、〇〇コンクール優勝とかいうのがあったら、

³⁶ ただ、今回のアンケート調査では、審査員を意識するも何もしない・審査員を意識しないと回答したコンテスト参加者が多数派となった。

「ああやっぱりこの人すごいんかな」と一般の人は思うだろうし、それがないと、全く見ず知らずの人の演奏会に聴きに行こうとあんまり思わない。だから、ある程度の受賞歴は大事かもしれないし、仕事・・・就職する時にも。かといって、矛盾というか、いい演奏家になるためには芸術を追求しないといけないし、それだけでは負けてしまうという。(木下敦子さん、2018年8月3日)

コンクールって圧倒的に弾けるのが強いわな。だって減点のしようがない。(練習で) やっぱりコンクールの対策やらない? 獲るまでは。このコンクールでこうやるときは、こういうところで注意してとか。獲らなきゃ何もできないんだから。(佐藤彦大さん、2018年8月6日)

調査の結果から、日本の若手がコンクールで勝つことばかり考えて、芸術面がおろそかになっているという批判はあまり的を射ていないと言える。芸術の高みを目指すこととコンクールで上位を狙うこと、それら二つが合致することは理想ではあるが、コンクールで入賞するためにはそれでは不十分であるという考え方が日本出身コンテストの中では大勢で、またコンクールの実態にも即したものと言える。むしろそれを十分に理解した上で、コンクールで勝つために何かをすることへの抵抗感や嫌悪感が、楽壇に瀰漫しているように思われる。

2-12. 日本人入賞者の減少についての質問（インタビュー調査から）

これまで見てきたように、先に音楽ありきで、己が芸術家としてどういう存在なのか探す途上にコンクールがあるという考え方が、日本出身コンテストには広く浸透している。しかし 2009 年以降、WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールにおいて日本人入賞者が減少しているのは厳然たる事実であり、何かを変えなければそれに歯止めをかけることはできない。コンクールの結果が全てではないといっても、日本の実力やレベルが落ちたと世界から見られることは、業界にとっても演奏家自身にとっても不利益にしかならないであろう。

自然体で輝かしい成績を残すタイプは、今まで通り指導者から正しく、芸術的に導かれれば事足りるが、もう一步で入賞に届く可能性のある層の底上げをどのように行うのか、意識的な改革も含めて議論されるべきである。成功すれば、全体がレベルアップし、既にトップに位置する者も突き上げを受け、更なる高みに向かって精進する相乗効果が期待できる。

年齢に上限のあるコンクールでの入賞が、演奏家人生に大きく影響を与えると同時に、青少年期の研鑽がその後の芸術家としての可能性を広げることを考えると、過度な芸術中心

主義もコンクール至上主義も避けなければならない。それぞれの面で、若手・指導者双方による取り組みが必要である。

関連して WFIMC 入賞者 4 人にも、以下のように伺った。

17. 日本人 WFIMC 加盟コンクール入賞者数は去年・一昨年に盛り返してはいるものの、2010 年代に入って全体的に低調が続いています。原因と、改善点（コンクール入賞者をより増やすこと）についてご意見をお聞かせください。

思うのは、日本人はやっぱり今でもちょっと弱いところがあると思うんです。メンタル的にも。すごく礼儀正しいし、私が私が！って行く人は少ないじゃないですか。他の国、例えばロシアとか韓国とかはみんな強いし、なんというかキャラクター。例えば練習室、1日1人2時間と決められていても、なんとかして沢山取ろうとか、日本人では美德とされないところ、でもそれを裏でやる人もいたということをはっきり見てきたので。でもそういう強さが、やっぱり入賞に繋がる、演奏にも出る。逆に強すぎてアグレッシブすぎる演奏もあるけど、プロコフィエフとかを演奏するとそんなにはずれでもない。だから日本人はもっと、前に出て行っていいんじゃないかなと思うんですよね。（木下敦子さん、2018年8月3日）

コンクールでも審査員を観客だと思って弾くという意識は、完全に（恩師の）伊藤（恵）先生から来てると思うんですよ。結局、審査員に評価してもらわないじゃなくて、審査員に聴かせるっていう演奏をする日本人があんまりいないのかなっていうのは思います。評価される演奏を求められているんじゃないかと、特に国際的な方に行くと、そういう演奏じゃないんだよね、きっと求められているのはみたいな。（今の日本人の）演奏に熱がないみたい。端正にすごいハイレベルで弾くけど、なんかまあその場ではすごいよく弾ける人だなあ、ああすごいいいなああって思っても、結局100人聴くと、印象には残らないだろうと。

スペインとかイタリア系とかで、テクニック結構やばいところがあっても、「すごい、あついいな」みたいなのがいるじゃないですか。テクニカルな面が弱いと思われて落ちることも多いけど、受かるか受からないかは置いておいて、そういう演奏をする人がいっぱいいる中にそのままの日本人が飛び込んだら、やっぱりそれは弱いよねっていうのはちょっとありますよね。

私もただ弾く方に行きがちで、この7年間何度も何度も伊藤先生に、「違うでしょ、もっとなんかないの？」って言われ続けて来たから、今そういう意識を持てているのであって、それを言わない先生だったら絶対そっちにはなかなか意識がいかない、特にコンクールだと、ちゃんと弾く！ちゃんと弾く！ってなっちゃうから。演奏会だったら、ある程度自分の自由に弾いていいって思えるかもしれないけど。

コンクールになると、多分この真面目な国民性も相まって、そういう意識を持てる人ってなかなかいないんじゃないでしょうか。それと技術を両立するのが大変というのがもちろんありますけど。私にとって伊藤先生につけたのが幸運だったというのはありますね。（桑原志織さん、2018年8月4日）

僕はロシアにいたから、そのメソッドの中でね、いわゆる緊張に強くなるような、

緊張してても指が安定するとか。それを習って舞台を踏んだ時に、ああこういうことかかってわかったんだよね。モスクワのメソッドとして、ほら、(ロシアは)強かったわけじゃない?そういうところに(原因が)あったんじゃないの。メンタルの強さっていうのはもちろんあるけど、そのメンタルが強くなるには?っていうのは自信とか弾き方ということなんだよね。ベートーヴェンとかリストとかの系譜が守られてそれが昇華されたのがロシアンメソッドでしょ?日本では習わないよね。例えば、鍵盤をちゃんとおさえるということに対して、あんなに執着したメソッドはないんじゃないかな。メソッドによって弾くことが安定するから、結果舞台の上でも安定する、落ち着くとか、そういうことなんだと思う。

帰ってそれを(大学で)やろうとしてるけど、(自分で)やりたいと思う子がいない。なぜならそのメソッドをやろうとすると、1年半とか2年とかピアノがまともに弾けなくなるだろうし。そこまでしてやりたい人がいないんだよね。

僕が本当に期待してるのは、ピアノ始めたくらいの時に僕のところに来てくれて、最初からじっくりじっくりやらしてくれるような子で、それを面白いと思ってくれるような子がいればね。

入賞者を増やしていくためには、世界でどういう演奏が好まれているかをリサーチしたりとかさ、そういうのってすごい大事なんじゃないの。我が道を行くだけでなく、それであと自分なりのさ、オリジナルを持たなきゃいけないでしょ、個性としてね。それを融合させなきゃいけない。

僕は正統派の演奏が好きなのわけだけど、そうなるとおソドックスでアカデミックな演奏になるでしょ。似通った人たちが出てくるから、そこに面白さみたいなものがあるとすると全体的にみんなレベルがあがってきて、個性とかの話になるんじゃないかな。全員が全員好きな演奏家なんているわけないんだから、あとはお客さんが好みで分かれていければ。

ただこんだけピアノばかり弾くマシンばかり量産してもどうするんだろうね、とは思うけどね。だって、ピアニストが多くても聴く人がいないんじゃないかなあしょうがないんだよね。その辺のジレンマは感じているんだけど、答えはわかりません。どうしたらいいんだろうね。

コンクールを獲った後に活躍する場が必要なわけだから、聴いてくれる人の耳を育てないとダメだよ。小さいうちから芸術鑑賞会とか学校訪問とかでちょっと弾いたりとかさ。後ワークショップでボランティアでも、演奏会前にちょっとしたレクチャーとかやって、で数日後にリサイタルやって楽しんでもらったり。お客さんを集めるっていうことに対して、やっぱり自分好みの音を聴いてくれるような人を発掘して、そういう人たちを育てて、結果的にクラシック音楽に興味を持ってもらう、ピアノ以外の他の演奏会にも行ってくれるね。(佐藤彦大さん、2018年8月3日)

日本人の演奏は、私は昔からそう思ってたんだけど、結構主張しないじゃない。海外の入賞した人とかを見てると、やっぱり自分をすごい出してるんだよね。根本的なところから、その国々の性格もあるのかもしれないけれど、そこを少し普段から(注意する)。学校とか行ってもわかるけど、日本であんまり自分の意見言わないじゃん。でも海外はすごい自分の意見をばっかっていうから、そこでもう差が出るかな、ってすごい思うよね。だからピアノのレッスンをするときでも、もうちょっと生徒に意見を言わず訓練をしたりとかした方が、演奏ももっと自分のしたいことが前になる演奏になるんじゃないかなと思う。

海外の生徒って、何か質問ある？って聞いた時にわーって来るのね。日本の生徒って何も出てこないの。その差が違う。海外の子って、自分が上手になりたいから色々聞いて来るんだけど、日本の子って「あ、いいです、大丈夫です」って遠慮しちゃうのはちょっともったいないかな。そこ少し変えていくだけでもすごく音楽変わってくるのになって思うから、それも入賞する・しないに関わってくるんじゃないかなって思ってます。

あとは、海外の先生ってその子の個性を尊重してあげた上で教えるじゃない。日本の先生はこうしなさい、って押し付けちゃう傾向にあるから、まあ全員が全員そうじゃないのかもしれないけれど、そこも押し付けは良くないかなって。もちろん悪いところは悪いって言わなきゃいけないんだけど。(大人になったら取捨選択できるけど)ちっちゃい頃に押し付けちゃったら、そのまま大人になるからその癖がついちゃうんだよね。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

全員、日本人入賞者が減少している事実はご存知なかったにもかかわらず、日本人コンテスタントの演奏やその教育に、強く問題意識を持っていることが窺える。

木下氏・須藤氏の指摘は、控えめで人を押しつけてまで自分を主張しない日本人の国民性が、時に自己アピールが必要とされる国際コンクールの中では不利に働くことがあるというものである。須藤氏は、日頃から指導者が自分の型に当てはめていくのではなく、生徒に自己発信する癖をつけさせることが大切と説く。また桑原氏の「端正でハイレベル」という形容も、それに通じるところがある。彼女は「印象に残る演奏」を「審査員に聴かせる」意識が必要であり、「審査員に評価される」ための演奏は良くないと述べ、そのためには須藤氏と同様に、指導者の適切な導きが必要不可欠であると訴えている。正確で高水準な演奏を追求することはコンクール受験には必要不可欠な反面、その達成のみで満足してしまいがちで、筆者もコンクール連戦の中で幅広く受け入れられることを心がけるあまり、何を表現すべきなのかを見失い、師匠に軌道修正されてきた経験がある。

佐藤氏はまずロシアの強さについて言及し、自身のモスクワ音楽院留学経験から、ロシアンメソッドと言われるテクニックそのものがメンタル面の強さに結び付けられ、ロシア系コンテスタントの安定感に繋がっていると主張している。高質な「オーソドックスでアカデミック」な演奏に「オリジナリティを融合させる」必要があり、個性を出すことを恐れず、聴く人の好みで判断してもらえれば良いと断言する。加えて市場において、「コンクールを獲った後に活躍する場」を作る意味でも、聴衆を育てていく活動が重要になると、鋭く言明している。

せっかく入賞を果たしても、披露する機会と、演奏が良質であると理解した上で足を運んで下さるお客さんが増えなければ、演奏家は心身ともに路頭に迷う。入賞を目指す機運も高

まらず、そのための研究や創意工夫もなされないままであろう。従って、聴衆や市場、そしてそれらに大きな影響力を持つメディアに、コンクール入賞の価値を相応に評価してもらい、若きコンテストの壮絶な努力が正当に報われるようになることが重要である。そこで、次章ではこれらコンクール入賞者を取り巻く周辺環境について調査し、分析・考察を行う。

第4章：周辺環境（聴衆・市場・メディア）のコンクール入賞への意識

著名コンクールで入賞することは大変な労苦と修練を伴い、誰もが成し遂げられることではないと音楽の世界では理解され、尊敬の念を抱かれるが、実社会ではその価値は曖昧で、ある種の錯誤に基づく演奏家の待遇差も感じられる。この章では、コンテスタント自身では関与することが難しい聴衆・市場・メディアの反応や意識について調査を行い、日本社会がどのようにコンクール入賞を扱っているのかを分析する。

1. 聴衆のコンクールに関する意識調査

1-1. 回答者の属性と分類

まず、聴衆にとってコンクール入賞は演奏会に来場する判断材料となり得るのか、また彼らがピアノコンクールについてどのようなイメージや認識を持っているのか調査することを主要な目的に、筆者のリサイタルに来場したお客様³⁷に、**コンクールに関する意識調査のお願い**と称するアンケートへのご協力をお願いした。

一般聴衆と一口に言ってもその背景は様々であり、どのような客層であったのかという情報は、分析を行う上で重要であろう。対象のリサイタルは、2018年5月20日に神戸市の神戸新聞松方ホールで行われ、神戸新聞社・神戸新聞文化財団が主催したものである。筆者にとって同ホールでのリサイタル出演は6回目で、継続的に足を運んで下さる方に加え、今回は兵庫県や神戸市といった自治体や、関連する芸術文化団体にご後援を頂いた関係で、その関係者が多く訪れてくださった。また全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）や、出身である兵庫県立西宮高校音楽科同窓会からもご後援を頂き、音楽学習者や指導者の姿も沢山見られた。更に、ホールのリーフレットや公演でのチラシ挟み込み、新聞紙面上で繰り返し告知して頂いたことなど、松方ホールに定着しているお客さんや、神戸新聞を購読されている人にも広報が行き届いていたと思われる。高校生以下の入場を無料にしたことで10代の来場者が多くなったことも特記事項である。しかし、音楽事務所や広告代理店は運営に関しておらず、またプログラムもいわゆる耳なじみの良い曲とは言えない³⁸ことから、一般大衆向けというより、本格的なクラシック作品を楽しむことや筆者の演奏を目的とする来場

³⁷ 当日は招待状でのご入場も多く、半券で入場者数を集計することができなかったが、約300名がご来場、そのうちの124名にご回答いただいた。

³⁸ 前半にハイドン：ピアノソナタ XVI:49・リスト：ピアノソナタ。後半にドビュッシー：喜びの島・ベートーヴェン：ピアノソナタ第10番 op. 14-2・シューマン：フモレスケ op. 20

の色合いが強いことは間違いない。

以下に 124 人の回答者がどのような属性を持つか、まとめた。

回答者の男女別人数・割合			
合計	男	女	性別無回答
124 人	31 (25.0%)	89 (71.8%)	4 (3.2%)

回答者の年代別の人数・割合									
年代	10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	無回答
合計 124	20 (16.1%)	7 (5.6%)	15 (12.1%)	23 (18.5%)	19 (15.3%)	21 (16.9%)	9 (7.3%)	1 (0.8%)	9 (7.3%)
男 31	2 (6.5%)	1 (3.2%)	1 (3.2%)	7 (22.6%)	6 (19.4%)	12 (38.7%)	2 (6.5%)	0	0
女 89	18 (20.2%)	6 (6.7%)	14 (15.7%)	16 (18.0%)	13 (14.6%)	9 (10.1%)	7 (7.9%)	1 (1.1%)	5 (5.6%)
性別無答 4	0	0	0	0	0	0	0	0	4 (100%)

性別では、女性が圧倒的に多数を占めた。来場者に、女性人口の多いピアノ学習者や指導者がたくさんいらっしやったことが原因の一つであると推察できる。筆者にはアイドル的な人気は全くなく、また望むべくもないが、多少は男性奏者であるということも影響しているかもしれない。年代別では 10 代以下・40 代・50 代・60 代が多くなった。70 代以降が少ないのは、アンケート用紙の文字が非常に小さかった上、会場の照明が暗く、回答意欲を失わせた可能性もある。

次に、回答者をピアノ学習歴と、音楽系職に従事・または音楽系の学生か否かという属性で分類すると、下表のようになった。ピアノ学習歴を持つ人は全体の 3 分の 2 以上と多数

回答者の学習歴・職歴での人数・割合						
分類 項目	ピアノ学習歴での分類			音楽系職(学生含む)による分類		
	学習歴有	学習歴無	無回答	音楽系職	非音楽系職	職業無回答
人数	84 (67.7%)	33 (26.6%)	7 (5.6%)	26 (21.0%)	59 (47.6%)	39 (31.5%)
内訳	男 15.5% 女 83.3% 無 1.2%	男 51.5% 女 48.5%		男 15.4% 女 84.6%	男 27.1% 女 72.9%	

で、女性が 8 割超を占めるが、学習歴のないグループでは、男女比が拮抗した。一方、職業別では非音楽系職が 5 割近くをマークし、音楽系を大きく上回ったが、無回答も無視できない水準である。総合するとピアノ経験者は多いものの、音楽系職に従事・または目指している人は少ないことが分かる。

以上が、今回実施した聴衆に対するアンケート回答者の属性別分類となる。尚、1-3. 以降の集計分析においては、これらに加え、1-2. のアンケート結果によるピアノ演奏会来場頻度別でも集計を行なった。後述する。

1-2. ピアノコンサートに来場する頻度について

まず尋ねたのは、【クラシック・ピアノのコンサートにどのくらいの頻度でいらっしゃいますか。最も近いものを選んでください】という問いである。クラシック音楽の聴衆は、様々な編成のコンサートに訪れる人も多いが、ピアノコンクールの問題を考えるときには、クラシック・ピアノに限定した方がわかりやすいと判断し、他の楽器や室内楽・オーケストラ等の演奏会は含めなかった。結果は下表の通りとなり、D. 年に0～3回程度が過半数

質問 1	クラシック・ピアノのコンサートにどのくらいの頻度でいらっしゃいますか。もっとも近いものを選んでください。				
	A	B	C	D	無・他
合計 (124)	8.9%	5.6%	33.1%	51.6%	0.8%
男(31)	12.9%	0.0%	32.3%	54.8%	
女(89)	7.9%	7.9%	33.7%	49.4%	1.1%
20代まで (26)	7.7%	0.0%	34.6%	53.8%	3.8%
30-40代 (39)	7.7%	10.3%	33.3%	48.7%	
50-60代 (40)	15.0%	0.0%	25.0%	60.0%	
70-80代 (10)	0.0%	20.0%	40.0%	40.0%	

学習歴有 (84)	11.9%	6.0%	38.1%	42.9%	1.2%
学習歴無 (33)	3.0%	6.1%	21.2%	62.2%	
音楽系職 (26)	23.1%	7.7%	46.2%	23.1%	
非音楽系職 (59)	5.1%	8.5%	23.7%	62.7%	

質問1の選択肢アルファベット詳細	
記号	詳細
A	年に12回以上
B	年に8～11回程度
C	年に4～7回程度
D	年に0～3回程度

となった。比較的多くのピアノコンサートに来場する人と定義できる A. 年に12回以上、B. 年に8～11回程度の選択肢合計は、男女別では大きく変わらないが、年代別では20代までは計7.7%と少なく、30代以降は15%～20%の範囲で推移している。

ピアノ学習歴の有無で比較した場合は、やはりある層の方が、来場頻度の多い人の割合が高い。音楽系職に従事・目指している層では更に増え、D.の割合も激減する。コンサート来場と音楽歴との関連性の解明は本研究の目的ではないが、これら音楽が身近な存在である人々が、比較的高頻度で来場し、クラシック・ピアノの演奏会を支えていることは間違いないようである。

1-3. 演奏会選択と受賞歴との関わりについて

次に、入賞と演奏会選択との相関を見るために、【日本出身のピアニストの演奏会に初めて足を運ぼうとされる場合、そのピアニストが国際コンクールで入賞しているかどうかという要素はどのくらい選択に影響しますか。】と尋ねた。尚この質問から、質問1の回答結果別に分類した集計を加えている³⁹。結果は、B. あまり関係ないが56.5%で、

質問 2	日本出身のピアニストの演奏会に初めて足を運ぼうとされる場合、そのピアニストが国際コンクールで入賞しているかどうかという要素はどのくらい選択に影響しますか。近いものをついで選択ください。			
	A	B	C	無回答・他
合計 (124)	41.1%	56.5%	0.0%	2.4%
男(31)	54.8%	41.9%	0.0%	3.2%
女(89)	38.2%	59.6%	0.0%	2.2%
20代まで (26)	53.8%	46.2%	0.0%	
30-40代 (39)	28.2%	69.2%	0.0%	2.6%
50-60代 (40)	50.0%	47.5%	0.0%	2.5%
70-80代 (10)	50.0%	50.0%	0.0%	0.0%
学習歴有 (84)	36.9%	59.5%	0.0%	3.6%
学習歴無 (33)	57.6%	42.4%	0.0%	
音楽系職 (26)	50.0%	42.3%	0.0%	7.7%
非音楽系職 (59)	47.5%	52.5%	0.0%	
来場 A-C (59)	37.3%	57.6%	0.0%	5.1%
来場 D (64)	43.8%	56.3%	0.0%	

質問 2 の選択肢アルファベット詳細	
記号	詳細
A	どちらかという国際コンクールに入賞している演奏家の演奏を聴きたい
B	あまり関係ない
C	どちらかというコンクールに入賞していない演奏家の演奏を聴きたい

A. どちらかという国際コンクールに入賞している演奏家の演奏を聴きたいの41.1%を上回った。しかし、聴衆の4割超が、初めて演奏を聴きに行く場合に入賞者を求めている事実は重い。C. どちらかというコンクールに入賞していない演奏家の演奏を聴きたいの回答が0であることから、賞歴が聴衆獲得の障害になるとことは全くないと言える。

男性はAが優勢で、より経歴を重視する傾向にあるが、女性是对照的に、Bが20%以上も高い。年代別集計ではそれを反映して、Aの選択肢が女性割合の多い30-40代で低くなっているものの、その他の年代では5割を超え、Bと二分する状態である。最もピアノに

³⁹ 来場 A-C が、年に4回以上クラシック・ピアノの演奏会に足を運ぶ層、来場 D が、年に0~3回の層である。アルファベット記号は、質問1の回答選択肢に準拠している。

関係が深い職業従事者・学生に限れば、5割が4と回答する一方、よりライトな音楽関係者と言えるピアノ学習歴のある層では、むしろその割合は下がり、学習歴のない層の方が入賞を重視する傾向にある。来場頻度別でも、ピアノコンサートに殆ど行かない層の方が4の割合が高い。この複雑な分布をどう考えるべきか。恐らく、音楽系の職についている、あるいは目標としている人は、ある程度コンクールに関する知識も豊富で、上手な演奏を聴くということに興味大きい人たちである。またピアノ学習歴のない・あまり演奏会に訪れない人たちは、演奏家の良し悪しをわかりやすく判断する基準として、入賞を目安にすることが多いと考えられる。反面ピアノ学習者は、音楽職従事者を除けば、ピアノを愛好している集団であり、入賞を絶対視しない多様な価値観を持つのではないかと。

入賞を生かして聴衆をもっと呼び込むためには、一部の超有名なものを除けば玉石混合状態で曖昧にされているコンクールの価値について、WFIMCに加盟しているものは特別視するなど、現代の実態に即した水準を明確にし、影響力を持つマスメディアや専門でない人にもわかりやすく浸透させる努力が必要である。そうなればコンクール入賞に対する信頼性が上がり、参考にする人も増えるに違いない。その上で、良いものを聴くことが上達に繋がるといった、学習者を演奏会へ誘導する指導も大切である。

次の質問は、【本日の演奏者を除いて、著名なコンクールで入賞を果たした演奏家を継続的に聴きになった経験がありますか。当てはまるものを一つ選んでください。】である。国際コンクールの入賞は、演奏会に足を運ぶきっかけとしては、ある程度は役割を果たしていると言えたが、継続的に同じピアニストのコンサートに足を運ぶとなると、また一つ

質問 3-1	本日の演奏者を除いて、著名なコンクールで入賞を果たした演奏家を継続的に聴きになった経験がありますか。当てはまるものを一つ選んでください。		
	ある	ない	わからない
合計 (124)	29.8%	59.7%	10.5%
男(31)	35.5%	58.1%	6.5%
女(89)	29.2%	61.8%	9.0%
20代まで (26)	23.1%	57.7%	19.2%
30-40代 (39)	33.3%	59.0%	7.7%
50-60代 (40)	30.0%	65.0%	5.0%
70-80代 (10)	40.0%	60.0%	0.0%
学習歴有 (84)	35.7%	56.0%	8.3%
学習歴無 (33)	18.2%	69.7%	12.1%
音楽系職 (26)	50.0%	42.3%	7.7%
非音楽系職 (59)	25.4%	66.1%	8.5%
来場 A-C (59)	47.5%	40.7%	11.9%
来場 D (64)	14.1%	78.1%	7.8%

ハードルは高くなる。結果は、ある が 29.8%、ない が 59.7%となり、ない がダブルスコアで上回った。男女別で見ると、男性の方がやや はい が多いものの、大きくは変わらない。年代別では、20 代までは わからない の回答が多く、年齢から考えて単純にそのような経験が少ないと推察できる。また音楽系職従事者やピアノ学習歴のある層、そして来場頻度が年 4 回以上のグループでは ある の割合が相対的に高くなっている。

質問 2 とは前提条件がやや異なるため、単純には比較できないが、入賞が来場のきっかけになる割合が 41.1%と考えると、継続性は 10%以上も低い値であり、最良にしてくれる聴衆を獲得する難しさを反映していると言える。2 つの質問の結果を合わせると、演奏会の来場頻度が低い人たち、あるいはピアノ学習歴がない人たちは、国際コンクール入賞を参考にして演奏会に訪れる可能性が高いにもかかわらず、そのピアニストの演奏を聴き続けるまでには至っていないということである。これらの層に属する一見のお客さんを、一回の演奏で魅了するのは難しいことが示されており、非常にシビアな結果と言える。一方、ピアノ学習歴がある層は、質問 2 の A. どちらかという国際コンクールに入賞している演奏家の演奏を聴きたい が 36.9%で、質問 3-1 で継続的に入賞者の演奏を聴いたことがあると答えた割合は 35.7%と殆ど変わらず、比較的に入賞者の演奏が受け入れられ易いと見ることができる。もちろん今回の調査のみで断定はできないが、聴衆の中でもピアノ学習者をターゲットにすることは、コンクール入賞者にとって有益であると推察できる。

質問 3-2 ではさらに踏み込んで、【3-1 で ある とお答えの方にお聞きします。それらの演奏家の演奏の質について、どのような変化を感じる人が多いですか。】と投げかけた。結果は下表の通りで、A. 入賞直後よりも質が上がる と答えた人は、40.5%にとどまった。

質問 3-2	3-1 で A. ある とお答えの方にお聞きします。 それらの演奏家の演奏の質について、どのような変化を感じる人が多いですか。				
	A	B	C	D	無回答・他
合計 (37)	40.5%	24.3%	5.4%	27.0%	2.7%
男(11)	36.4%	27.3%	9.1%	27.3%	
女(26)	42.3%	23.1%	3.8%	26.9%	3.8%
20 代まで (6)	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%	
30-40 代 (13)	30.8%	38.5%	7.7%	23.1%	
50-60 代 (12)	41.7%	16.7%	8.3%	25.0%	8.3%
70-80 代 (4)	50.0%	0.0%	0.0%	50.0%	
学習歴有 (30)	43.3%	20.0%	6.7%	30.0%	
学習歴無 (6)	33.3%	50.0%	0.0%	16.7%	
音楽系職 (13)	38.5%	30.8%	7.7%	23.1%	
非音楽系職 (15)	33.3%	33.3%	0.0%	33.3%	
来場 A-C (28)	46.4%	14.3%	7.1%	32.1%	
来場 D (9)	22.2%	55.6%	0.0%	11.1%	11.1%

質問 3-2 の選択肢アルファベット詳細	
記号	詳細
A	入賞直後よりも質が上がる
B	あまり変わらない
C	入賞直後よりも質が下がる
D	その他

一方で B. あまり変わらない、C. 質が下がる と答えた人の合計は 30% 近くにはのぼる。D. その他 に設定した自由記述の中でも、「海外留学前に比べて、2-4 年後の演奏は格段の進歩をとげている (50 代男性)」や、「演奏の質というより、自信や風格が身についているように感じたことがある。(40 代女性)」という好意的な意見もあったものの、「演奏家による (30 代女性、70 代女性)」「各々の演奏家によって様々です。残念な方もやはり素晴らしいという方も。(50 代女性)」等、成長する人もしない人もいるという趣旨の回答がいくつも見られた。自戒も込めるが、標本が少ない (質問 3-1 で A と回答したのは 37 名) とは言え、これ程の割合の聴衆に入賞後の成長を感じて頂けていないことには、若手演奏家側も危機意識を持ってしかるべきである。

さてこの章でも議論を深めるため、第 3 章に引き続き WFIMC 加盟コンクールの入賞者 4 人にお話を伺う。まずは国際コンクールの入賞が聴衆を獲得するかの実感について尋ねた。

16. コンクールを入賞したことによって、より多くの聴衆を獲得したという実感はありますか。

去年の年末に一回日本に帰って、ひよんな事から知り合ったアマチュアの歌をやっ
てらっしゃる方から、「ずっとブラームスをあなたの伴奏で歌いたかった」とオファ
ーをいただいて、オールブラームスプログラムという風にして。それも「いつの話や！」
という過去の栄光にすがって、チラシにブラームス国際コンクール優勝と書いてもら
ったんです。ブラームス自体も有名だし、それで演奏会の機会をもらえたりとか、多
少はなんかあるかなと思います。ただすごく作用したとは思いません。特にドイツで
演奏会をするのに、コンクールを獲ったとか獲らなかったとかあんまり出さない気が
して。逆にそれを出さなくてもお客さんが来てくれるという。おじいちゃんおばあち
ゃんとかは来てくれるから。(入賞で) すごく大きく変わったということはない。(木
下敦子さん、2018 年 8 月 3 日)

あんまりないです。宣伝文句として一定の効果はあると思うけど、どれくらいすご
いコンクールなのか、レベルとか (一般の人には) 全然わからないし。(桑原志織さ
ん、2018 年 8 月 4 日)

実感はないですね。確かに (地元の) 盛岡の方なんかはあるかもしれないけど、東
京の方では全然感じないね。お客さんを増やしたかったら、テレビに出ればいいん
ですよ。5 分でも出演したら、全然変わりますよ。地方公演でも東京でも。(佐藤彦大さ
ん、2018 年 8 月 4 日)

実感はあります。日本でお客さんの入りは全然違いますね。ただ、まだ数は少ないけどポーランドでコンサートをやった時は、聴衆獲得の苦勞とかはない。みんな音楽が基本好きだから、誰がやっても満席にはなるよね。

日本って、ある程度コンクール歴があるか、有名か、テレビ業界が注目してるとか・・・何かないと（お客さんが）なかなか来てくれないじゃない。こっち（ポーランド）って、なんかこういうの（コンサート）あるんだ。行ってみようかな？っていう感じで、音楽に触れただけで行くから。

私今、トルンに住んでいて、そこに大きなホールがあって、コンサートに何回かいったことがあるんだけど、誰これ？っていう人も毎回満席になってる。チケットも安いね。300-400円くらい。（ピオトル・）パレチニ先生がオーケストラで弾いた時でも600円くらいかな。ただ日本って安いから来るって感覚でもないよね。文化が違うからね。日本ってクラシックに対してハードル上げすぎなのかもね。格式が高いっていうのがあるじゃん、まだ。ポーランドも含めてこっちの人はそういうのはないから。

私が日本で全くピアノに関係のない方によく聞かれるんだけど、クラシックコンサートってなると行き辛っていうイメージがあるのね、日本の方って。どういう格好で行けばいいのか、とか。クラシック音楽のハードル下げないとね。行きやすっていう。そこで多分全然集客も変わって来るんじゃないかな。（須藤梨菜さん、2018年8月6日）

明確に実感があると回答したのは、須藤氏のみである⁴⁰。ただそれはあくまでも日本のみの現象であり、現在居住するポーランドでは、入賞のない無名演奏家であっても大ホールを満席にするなど、音楽への身近さが全く違っていると述べている。木下氏が拠点とするドイツでも、演奏会に足を運ぶことが文化として定着しており、奏者のコンクール歴の有無は関係ないことが窺える。桑原氏の発言は、コンクールの特色や水準が伝わっていないため、聴衆獲得に繋がらないと指摘するもので、入賞の価値をより広く正確に知らしめる必要があるという筆者の主張を裏付ける。佐藤氏は、コンクールの実績よりも、テレビに出るか出ないかが一般聴衆に大きく作用すると訴える。

また、アンケートで浮き彫りになった入賞者の課題、コンクール後に成長し続けることについて、どのように努力されているのか伺った。

17. コンクール入賞後、芸術家として自己を確立していく上で心掛けられていることはなんですか。

私は小さい頃ずっと、弾けているけれどなんかすごい自信なさそうに弾くとか、なんでもっと自分を出さないのとか言われていて。それでドイツに来てから、それこそコンクールとか見ても、すごいパフォーマーみたいな演奏をする子もいて。それだけではやっぱり浅いんだけど、プラス中身とか技術とかも伴っていたら印象はすごくいいから、ちょっとパフォーマンスも必要だなということは勉強になりました。いろんな他の要素も取り入れつつ、最終的に聴き手にどう伝わるかが大事だから、自分をも

⁴⁰ 須藤氏が、テレビのドキュメンタリーで大々的に取り上げられた、2003年浜松国際ピアノコンクールの入賞者ということも影響した可能性がある。

っと表現することかな。

あとは自分を見失わないということです。周りがどう言っても、自分の演奏はこうだと自信を持って言える演奏をすること。自分の何がいいところなのか、良さをどんどん伸ばす必要があると思います。できないことを見ているときりがないから、ある程度自分を認めてあげるということも大事。やっぱり、舞台上で自信を持って自分の音楽をできるのが一番大事だと思うから。人に伝わる演奏を。(木下敦子さん、2018年8月3日)

コンクールっていうものがあると、自分の練習に対してお尻に火がつきやすいです(笑)。ある意味勝ち負けという明確さがあるぶん、目標としてもすごく明確だし、期間も決まっているじゃないですか。例えばリサイタルとかだと、これ(の予定)もあって、何ヶ月後にはこれもあってみたいな感じで、色々やっていかないといけないことがあるという状況を考えると、このコンクールに向けて練習するという意味での心の持ち方は、本来ずっとこうであるべきなんだろうな、っていう感じがします。まあ普段がだれるというわけじゃないんですけど。もちろん本番があったらだれるわけにいかないから。(桑原志織さん、2018年8月4日)

モスクワでロシアンメソッドに触れて、勉強したわけだから。あれっていわゆるベートーヴェンから続いている系譜の訳でしょ？そういうのは継承するというわけではないけど、大事にしていきたいと思っているし、先生たちから受け継いで来た伝統みたいなものっていうのは、やっぱりある意味誇りであると僕は思う。だからそこに自我があんまり強すぎてもね、いわゆるはみ出た表現は今あんまり全然興味がない。昔は面白いと思ってたけど。それはロシアに行った影響がすごく大きいかな。大事にしていききたいね。まずそこかな。

後は、勉強も終わって自分が教える立場だよ。練習時間もやっぱりね、盛岡にいる時だけしかできなくて、1日5-6時間とか、多くてそのくらいしかとれないわけだから。こっち(東京)にいと、朝8:30から夜7:30まで(仕事を)やって、休憩が途中20分しかない。それが2日間あって、全く練習できないから。

レパートリーの方は、自分一人で新しい曲を譜読みしてね、それをいかにどこまでロシアで勉強していたときみたいに仕上げられるかなあ、と。まだ(2017年に)帰って来てね、新しい曲ってそんなにたくさん勉強できてないから、その辺はまだもっと・・・。(自分オンリーで勉強しないといけないので)それで変にやって来たことから崩れないようにっていうのは気をつけないといけないことだよ。やっぱり、先生から習うのをやめて、自分で変になっている人って多いじゃん。そうはなりたくないな。圧倒的な成功はいらないから、細く長く、ちゃんとやっていききたいね。

自己っていう意味では人生経験だろうな。例えば、日本にいたときは環境的に恵まれていて苦労を知らなかった時代だから、やっぱりそういうのって音に出て、なんかメンデルスゾーンみたいな感じ(笑)。あの人も人生苦労していないでしょ。

でもああいうね、どうしようもないモスクワのあんなところに行って。ドスの効いた音ってね、やっと最近少し出てくるようになったと思うんだけど、あれが昔から欲しかった音でね。なんかそういうので、自己を確立していくんじゃないかなあ。でもまだ、これが自分みたいな答えは出てないかな。なんとも。そのうちわかるんじゃないかな。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

入賞前でも入賞後でもそうだけど、コンサートにお客さんが来てくださる場合に、やっぱりその期待にちゃんと応えられる練習をしていくようにはしてるかな。プラス、レパートリーは入賞後だろうと増やして行って、音楽の幅は広げていった方がいいのかなって。コンクール中でもコンクールの曲もやりながら、他のも並行してやってきました。その人その人で練習にかかる時間とかも違うと思うんですよ。私の場合って短期集中型なんで、おんなじ曲を長時間やるっていうのは逆にできなくて。いろんなのをかじりながら学んでいくっていう。(須藤梨菜さん、2018年8月4日)

これらの回答から、彼らが常に研究心・向上心を持ちながら、聴衆と向き合って誠実に演奏しているさまが窺える。木下氏は聴き手を意識しつつも、舞台上で自分の強みを出す・自信を持って音楽を伝えることが大切と述べている。4人の中では唯一、現役コンテストでもある桑原氏は、連続した演奏活動には演奏以外にしなければならない準備が沢山あるため、コンクール挑戦中の方が練習に集中しやすい環境にあると指摘した。佐藤氏は、指導されてきた伝統を大切に受け継ぐ決意を語り、自分を確立していく途中であるとした上で、ピアニストと指導の仕事との両立の難しさに言及している。我々演奏家としては言い訳できないが、多くの場合で演奏活動が収入に直結しないことが、入賞後の演奏を充実させる面で難しいシチュエーションを作っている。須藤氏は、コンサートに向けたレパートリーを、コンクール受験期間も並行して学習することが大切と説き、聴衆の期待に応えられる準備を心掛けると語る。

これまでの調査から、コンクール入賞のおかげで獲得した聴衆が少なく、その継続性も低いことや、継続的に入賞者を聴く聴衆も、奏者の上達をあまり感じていないということが課題として明らかになった。まずは質の向上について、入賞者に自覚を促すこと(そのための指導も含む)が重要と言える。前章での佐藤氏の言葉を借りれば、演奏家は「獲るまで必死、獲ったらもっと必死」に精進し、難関コンクールでの入賞がゴールになってしまっただけではない。ただ労働環境の問題もあり、単純に努力不足と片付けられない一面もある。やはり聴く人を増やすことは急務で、コンクールの水準や価値について一般への啓蒙活動を行い、聴衆獲得に入賞をもっと結びつける努力をしなければならない。

1-4. コンクール参加への直接的な支援について

古代ギリシャのオリンピックではスポーツの他に音楽の種目も設けられ、その競技性が否定的に捉えられてはいなかった。今日、クラシック・ピアノは世界的に愛好されている文

化であり、国際コンクールはその世界大会と定義できるが、出場のためにはお金がかかるものである。東アジアや北米で行われる WFIMC 加盟のものは、遠方からコンテストに来てもらうという意識が強く、殆どの場合に交通費や滞在費の大部分が支払われる一方、ヨーロッパでは、地域内の学習者が参加することを想定し、手当てが不十分なことが多い。このことは、ヨーロッパの歴史あるコンクールへの参加を日本在住者に躊躇わせる理由となっている。燃油サーチャージや出発の時期にも左右されるが、欧州までの往復航空券は十数万程度、滞在支援がなければホテル代として、安くても 1 日 7000 円程度は見ておかなければならない。食費や現地での交通費も考えると、1 回につき 20-30 万円の予算が必要となる。

権威ある WFIMC 加盟コンクールでの日本人入賞は、近年減少が認められるとはいえ、依然として世界第 3 位の水準にある。かたやスポーツの世界では、メジャー競技のオリンピック代表レベルの選手には強化指定制度があり、戦績によって強化費が決められているというのに、どうして国際コンクールの挑戦には目を向けられないことがないのであるだろうか。もちろん何から何までとはいかないが、やはり世界的な難関で入賞が期待できる者に支援をいただければ、より良い成績を残すことができるはずである。

芸術の学習者に対する国からの支援は、文化庁の新進芸術家海外派遣制度があるが、留学生のみに限られ、一時帰国が難しいなどの制限がある。そこで今回のアンケートでは、一般聴衆に【国際コンクールへの挑戦について、行政や民間の若手演奏家への支援は必要だと思いますか。お気持ちに近いものをご選択ください。】と投げかけた。結果は下表の通りで、全体では、A. 個人的な挑戦なので支援の必要はない や、D. 若手にはコンクールに

質問 4	国際コンクールへの挑戦について、行政や民間の若手演奏家への支援は必要だと思いますか。お気持ちに近いものをご選択ください。				
	A	B	C	D	無回答・他
合計 (124)	4.8%	57.3%	26.6%	0.8%	10.5%
男 (31)	9.7%	58.1%	19.4%	3.2%	9.7%
女 (89)	3.4%	58.4%	30.3%	0.0%	7.9%
20 代まで (26)	3.8%	61.5%	34.6%	0.0%	
30-40 代 (39)	2.6%	59.0%	28.2%	2.6%	7.7%
50-60 代 (40)	5.0%	62.5%	25.0%	0.0%	7.5%
70-80 代 (10)	10.0%	50.0%	0.0%	0.0%	40.0%
学習歴有 (84)	3.6%	56.0%	33.3%	0.0%	7.1%
学習歴無 (33)	9.1%	63.6%	12.1%	3.0%	12.1%
音楽系職 (26)	0.0%	53.8%	42.3%	0.0%	3.8%
非音楽系職 (59)	6.8%	59.3%	23.7%	0.0%	10.2%
来場 A-C (59)	6.8%	55.9%	27.1%	0.0%	8.5%
来場 D (64)	3.1%	59.4%	25.0%	1.6%	10.9%

質問 4 の選択肢アルファベット詳細	
記号	詳細
A	個人的な挑戦なので、支援の必要はない
B	スポーツの強化指定選手のような制度が必要
C	特定の著名コンクールに限定して支援
D	若手にはコンクールに挑戦して欲しくない

挑戦して欲しくない はごく少数にとどまり、行政や民間から何らかの支援があつて良いと答えた聴衆が 8 割を超えた。内訳は B. スポーツの強化指定選手のような制度が必要 が 57.3%とマジョリティで、C. 特定の著名コンクールに限定して支援 も 26.6%をマークした。全ての属性別集計で、B. が 50%以上を占める傾向は変わらないが、女性やピアノ学習者・音楽系職従事者の層は、全体に比べると C. の割合がやや高くなっている。

もちろん、殆どがクラシック音楽に馴染み深いであろう演奏会来場者を対象としたアンケートであることは考慮しなければならないが、挑戦に応援する気持ちを持ってもらえていることは心強い。ただ支援を行うにしても、一部への利益誘導にならないように、対象者や対象コンクールをどのように策定するのか、慎重に検討する必要があるであろう。また、学習者の自由を阻害せず、進度に即したコンクール受験ができるように、担当教員を含めて綿密な計画を立てる必要がある等、制度の整備にはいくつもの高い壁を越えなければならない。すぐに実現することは難しいかもしれないが、今後の活発な議論を望む。

1-5. 一般聴衆とコンテストとの意識差

最後に、一般聴衆はコンクールについてどのようなイメージを持ち、それは実際に参加してきた日本出身コンテストと、どう違っているのかを調査した。松方ホールで実施した聴衆を対象とするアンケートと、第 3 章で分析を行った日本出身コンテストを対象とするアンケートの両方で、【コンクールについてのご認識について、当てはまるものを全てお選びください】と設問し、入賞報道・入賞後の保証・コンクールの特色・入賞年齢・入賞者と演奏の質・アジア人の強さ・入賞と奏者の人気の 7 項目（次頁表：質問 5 の選択肢カタカナの詳細を参照のこと）について尋ねた。

まず集計全体（次頁冒頭）を見ると、選択肢の中で聴衆は ウ. ○○コンクール入賞と目にするが、どのコンクールがどのような特色やレベルを持つのかあまりよくわからない が 50%で最も多く、次いで ア. テレビや新聞で報道されるコンクールはレベルが高く、権威があると思う、イ. 著名な国際コンクールで入賞したピアニストは、今後の活動が保証され

凡例：1位・2位・3位 ()内数字はサンプル数

質問 5	コンクールについてのご認識について、当てはまるものを全てお選びください。						
選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ
聴衆合計 (124)	44.4%	24.2%	50.0%	22.6%	21.0%	13.7%	17.7%
コンテスト合計 (163)	35.6%	23.9%	33.1%	17.2%	46.0%	20.9%	19.6%
聴衆男性 (31)	58.1%	22.6%	58.1%	16.1%	22.6%	19.4%	19.4%
コンテスト男性 (54)	25.9%	16.7%	37.0%	14.8%	51.9%	25.9%	13.0%
聴衆女性 (89)	41.6%	24.7%	47.2%	24.7%	21.3%	12.4%	18.0%
コンテスト女性 (109)	40.4%	27.5%	31.2%	18.3%	43.1%	18.3%	22.9%

選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ
聴衆 20代まで (26)	65.4%	23.1%	38.5%	42.3%	15.4%	11.5%	15.4%
聴衆 30-40代 (39)	43.6%	15.4%	59.0%	15.4%	33.3%	17.9%	17.9%
聴衆 50-60代 (40)	45.0%	30.0%	57.5%	17.5%	20.0%	7.5%	12.5%
聴衆 70-80代 (10)	20.0%	40.0%	30.0%	20.0%	10.0%	30.0%	60.0%
コンテスト 10代後半 (7)	28.6%	42.9%	28.6%	28.6%	42.9%	42.9%	57.1%
コンテスト 20代前半 (33)	48.5%	24.2%	27.3%	12.1%	24.2%	24.2%	21.2%
コンテスト 20代後半 (71)	33.8%	21.1%	33.8%	16.9%	52.1%	21.1%	15.5%
コンテスト 30代前半 (52)	30.8%	25.0%	36.5%	19.2%	51.9%	15.4%	19.2%

選択肢	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ
コンテスト WFIMC 入賞 (20)	20.0%	20.0%	25.0%	15.0%	50.0%	15.0%	5.0%
コンテスト非 WFIMC 入賞 (78)	33.3%	20.5%	34.6%	10.3%	53.8%	21.8%	14.1%
コンテスト国際未入賞 (65)	43.1%	29.2%	33.8%	26.2%	35.4%	21.5%	30.8%
聴衆・学習歴有 (84)	44.0%	22.6%	40.5%	23.8%	23.8%	10.7%	17.9%
聴衆・学習歴無 (33)	51.5%	24.2%	72.7%	21.2%	12.1%	24.2%	21.2%
聴衆・音楽系職 (26)	46.2%	15.4%	30.8%	23.1%	30.8%	15.4%	11.5%
聴衆・非音楽系職 (59)	49.2%	23.7%	61.0%	25.4%	16.9%	15.3%	22.0%
聴衆・来場 A-C (59)	39.0%	20.3%	30.5%	20.3%	23.7%	13.6%	16.9%
聴衆・来場 D (64)	48.4%	26.6%	68.8%	23.4%	17.2%	12.5%	17.2%

質問 5 の選択肢カタカナ詳細	
記号	詳細
ア	テレビや新聞で報道されるコンクールはレベルが高く、権威があると思う
イ	著名な国際コンクールで入賞したピアニストは、今後の活動が保証されていると思う
ウ	〇〇コンクール入賞と目にするが、どのコンクールがどのような特色やレベルを持つのかあまりよくわからない
エ	若い年齢でのコンクール入賞は、高い年齢での入賞に比べて価値があると思う
オ	国際コンクール入賞と、演奏のクオリティの高さはあまり関係がないと思う
カ	日本人を含むアジア人はコンクールで強いと思う
キ	コンクール入賞者は人気のある演奏家になると思う

ていると思うが続いた。一方、コンテストが最も選んだ割合が高かったのは、オ。国際コンクール入賞と、演奏のクオリティの高さはあまり関係がないと思うの46%で、ア、ウが3割台をマークして2・3番手に位置する。両者の認識に、最も大きな差があるのはオである。逆説的に考えれば、聴衆の79%が、コンクール入賞が演奏の質に反映されると考えているのに対し、コンテストでそう感じているのは54%にとどまる。経験者ゆえのコンクールに対する不信や、入賞後の演奏活動における難しさといった側面もあるであ

ろう。

次に、選択肢の項目ごとに考察を行う。アについて聴衆は 44.4%、コンテストは 35.6%があてはまると回答しているが、裏を返せば聴衆の 55.6%、コンテストの 64.4%が、マスメディアのコンクール報道に対して不信感を持っていると言える。入賞が報道される基準についてはこの章でも後述するが、明確なものではなく、コンクールの難易度や入賞の希少価値をうまく反映することができていないように思われる。その実態が、聴衆やコンテストにもある程度伝わっているのではないか。メディアの責任よりも、我々ピアニスト側が、コンクールのレベルや特長を積極的に発信してこなかったツケが大きい。属性別の集計では、コンテストの入賞歴別で、入賞歴が上がるごとに信頼性の減少が見られるのが特徴的である。難関コンクール入賞者にとっては、自身の成果が報道されるかどうかはその後のキャリアに関わる非常に重要な問題であり、扱いの違いに疑問を持っていても不思議ではない。

イの割合は、聴衆もコンテストも 24%前後に収まった。大きな入賞は活動を保証するものという楽観視がコンテスト側に少ないことは予期していたが、聴衆にもまた共有されているようである。属性別の集計では、コンテストの入賞歴別で、やはり国際コンクールに入賞している 2 層が、未入賞層よりも厳しい見方をしている点が挙げられる。聴衆のピアノ学習歴・音楽系職・来場頻度別でも、音楽により関連が深いと考えられる層に同様の傾向が見られ、実情に近いほど現実の過酷さを認識していると言える。

ウは、今まで論じてきた大きな問題点、コンクールの情報がわかりやすく共有されているかどうかを問うたものであるが、聴衆の 5 割、コンテストも 33.1%がわかりにくいと感じている。あてはまると考えなかった回答者でも、その理解の度合いにはかなり差があるであろう。属性別集計を見ると、聴衆・コンテスト共に男性の方がわかり辛く思う人が多い傾向にある。またピアノ学習歴なし・非音楽系職従事者・来場頻度が低い層では、おしなべて 6 割以上をマークした。筆者が考える対策は、まずは最も明瞭な基準として WFIMC 加盟コンクールを権威・難易度の高いものであると位置付け、個別の情報をできる限りピアノ関係者とメディアに認識してもらうこと。その上で一般聴衆に、その中でも主要な 30 程度のコンクールについて理解を広めることである。第 5 章で提言と共に詳しくまとめたい。

一流の芸術家は生涯成長し続けるものであり、作品や演奏には成熟が大切とされるにもかかわらず、神童という言葉があるように、一般には子供時代に活躍する人物がとりわけ受けが良いように思う。エはその中でもコンクール入賞に絞って、若い方に値打ちがあると

考える人がどれ程いるのかを調査したものであるが、結果は、聴衆は 22.6%、コンテストは 17.2%と、どちらも低い水準にとどまった。男女別では、聴衆・コンテスト共に、女性がやや高い割合を示す。また聴衆の年齢別集計では、20 代までの層が突出して多い結果となった。これは 10 代の回答者に女性やピアノ学習者が多いことに加え、近い世代の入賞者を自身の目標や憧れとして捉えているからと推察できる。筆者が 10 代の頃 (1998-2008 年) は、「早く大コンクールで入賞しなければ将来まともに活動できない」と思い込み、プレッシャーや焦燥感を強く感じていた。第 2 章で述べたように、当時の浜松国際が若年層を重視する傾向であったことに、特に大きな影響を受けていたのである。しかし近年は、その浜松やエリザベート王妃の年齢上限の延長に象徴されるように、若過ぎる未知の才能よりも、ある程度道筋のついた歳での入賞に目が向けられるようになったと感じられる。聴衆やコンテストの多くが、若年での入賞を特別視していないことは、演奏家が長い目で育つ文脈でも良い風潮と言える。

オ は先述の通り、聴衆とコンテストとの認識に最も乖離のある項目であった。たとえ集客に直接つながってなくても、聴衆の 8 割近くは国際コンクールの入賞が演奏の価値を保証すると信じており、経歴があることで、上手な人と認識しているのである。中でも、音楽との関連が薄いと想定されるピアノ未経験・非従事職・低来場頻度の各層は特に、入賞歴を頼りにしている。それだけに演奏者の責任は重い。他方、コンテストの反応は冷ややかである。20 代前半は回答割合が 24.2%にとどまるが、20 代後半・30 代前半は 50%を超え、単純な実力アップが入賞に繋がるとは限らないという諦めも感じられる。また未入賞者と入賞者 2 層とでも、その差が大きなものとなっている。

カ は、コンクールでアジア人が強いという言説について尋ねたものである。第 2 章の調査では、東アジア諸国の WFIMC 入賞ポイント (2001-17 年) は全体の 30%を越え、旧ソ連諸国の次に、強さを見せている。結果は聴衆が 13.7%、コンテストが 20.9%と低い水準にとどまった。それぞれの理由を考察すると、まずコンクールの世界を知る由もない聴衆に日本人やアジア人の強さが浸透していないことは、入賞でフィーチャーされるアジア人若手奏者を市場で目にしないことから頷ける。特に韓国系ピアニストの来日は、その入賞割合から考えても非常に少ないように感じられる。コンテストには、日本を含むという言葉が関わっているかもしれない。相対的に見れば、日本は入賞者輩出の上位国であるが、近年は隣国の躍進が凄まじく、圧されている印象が強くあるはずである。

最後のキ は、聴衆もコンテストも 2 割未満の低水準となった。聴衆は、質の証明と

して入賞歴をある程度信頼しているものの、奏者の人気とは関係がないと正確に認識している。また、コンテストの入賞歴別集計を見ても、入賞歴が高くなる程、入賞が世間の注目を必ずしも集めるものではないと強く実感していることがわかる。もちろん個人の努力と研鑽が大切なのは言うまでもないが、これまで論じてきたように、コンクールの特色やレベルが曖昧にされていることも大きな要因ではないか。専門教育を受ける学習者が、国際コンクールと銘打つなんらかで賞を取ることは、易しいものを探してくれば誰にでも可能であるといっても過言ではない。基準を設け、例えば難関のWFIMC加盟コンクールでの入賞が、日本社会の中で高く評価されるようになる必要がある。人気と実力は違うとはどの世界でも言われることであるが、結局のところ、人気の弱い実力がある人を如何に世に知らしめるかが、一番の課題なのである。

2. オーケストラ招聘ピアニストから見る日本市場における入賞者の扱い

2-1. 招聘者調査

市場がコンクール入賞者をどのように処遇しているのかを見るためには、オーケストラに招ばれるソリストについて調査するのが良いであろう。例えばリサイタルは、ホールや企業などが主催し、一見招聘されているように見えても、実際は奏者本人が企画・販売に責任を持つ名義貸し公演も数多く存在する。しかしオーケストラの独奏者は、オーケストラや企画団体側が音楽事務所や個人に依頼することが殆どであり、どのピアニストが市場で求められているかがわかりやすい。次頁から列記する表は、2012-17年まで（一部は資料がある期間から）に、確認が取れた東京と関西のオーケストラ（下表参照）の定期演奏会とその他の演奏会計730公演について、招聘されたピアニストと演目をまとめたものである。

地域	オーケストラ団体名	データ対象期間(2017年まで 共通)	
		定期演奏会	その他の演奏会
在京	NHK 交響楽団	2012-	2012-
	新日本フィルハーモニー交響楽団	2012-	2012-
	東京交響楽団	2012-	2012-
	東京シティ・フィルハーモニー管弦楽団	2012-	なし
	東京都交響楽団	2012-	2012-
	東京フィルハーモニー交響楽団	2012-	2012-
	日本フィルハーモニー交響楽団	2012-	2013.10-
	読売日本交響楽団	2012-	なし
在関西	大阪フィルハーモニー交響楽団	2012-	2012.4-
	関西フィルハーモニー管弦楽団	2012-	なし
	大阪交響楽団	2012-	2013.4-
	日本センチュリー交響楽団	2012-	2012-
	京都市交響楽団	2012-	2012-
	兵庫県立芸術文化センター管弦楽団	2012-	2012-

NHK 交響楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017

回数	#1722C	オーチャード定期	#1724A	#1726B	#1727A	オーチャード定期	オーチャード定期	#1743C
ピアニスト	デニス・マツエフ	セドリック・ティベルギアン	マルティン・ヘルムヒェン他	河村 尚子	ギャリック・オールソン	リーズ・ドゥ・ラ・サール	小菅 優	レイ・ローティ
日程	2012/2/17-18	2012/3/20	2012/4/14-15	2012/4/25-26	2012/5/12-13	2012/6/3	2012/7/4	2012/12/7-8
演目	チャイコフスキー1番	ラヴェル ト長調	ベートーヴェン 三重	ベートーヴェン4番	ショパン2番	ベートーヴェン3番	シューマン イ短調	リスト2番
回数	オーチャード定期	#1746B	#1747A	#1748A	#1750B	#1753B	#1757A	#1759B
ピアニスト	児玉 桃	エレヌ・グリモー	スチュアート・グッドイヤー	ポール・ルイス	ヘルベルト・シュフ	ラベック姉妹	ネルソン・ゲルナー	チョ・ソンジン
日程	2012/12/16	2013/1/16-17	2013/1/26-27	2013/2/9-10	2013/2/21-23	2013/4/24-25	2013/6/8-9	2013/6/19-20
演目	サン＝サーンス2番	ブラームス2番	バーンスタイン交響2番	ベートーヴェン5番	リスト1番	デュービュオン 作品 54	シューマン イ短調	モーツァルト21番
回数	#1763B	#1765B	#1767C	#1769C	#1773B	オーチャード定期	#1777B	#1785C
ピアニスト	ロバート・レヴィン	ラルス・フォークト	ボリス・ベレゾフスキー	ステイブン・ハフ	ルドルフ・ブッフビNDER	小川 典子	ティル・フェルナー	ペゾド・アブドゥライモフ
日程	2013/10/9-10	2013/10/25-26	2013/11/15-16	2013/11/30-12/1	2014/1/16	2014/2/2	2014/2/19-20	2014/6/13-14
演目	ベートーヴェン2番	ベートーヴェン3番	ラフマニノフ2番	リスト1番	モーツァルト20番	ラヴェル ト長調	モーツァルト22番	ラフマニノフ3番
回数	#1786C	#1790A	#1792B	オーチャード定期	#1798B	#1799A	#1801B	#1804B
ピアニスト	中野 翔太	フランチェスコ・ビエモンテージ	ヤン・リジュツキ	オルガ・ケルン	ユジャ・ワン	アレクサンダー・ガブリユク	アレクサンダー・ロマノフスキー	ピョートル・アンデルジェフスキ
日程	2014/6/18-19	2014/10/18-19	2014/10/29-30	2014/11/9	2014/12/17-18	2015/1/10-11	2015/1/21-22	2015/2/18-19
演目	グリーグ イ短調	ベートーヴェン1番	ショパン1番	ラフマニノフ2番	ラヴェル ト長調	プロコフィエフ3番	ラフマニノフ パガニーニ	モーツァルト25番
回数	オーチャード定期	#1806C	#1807B	#1813B	#1814C	#1816A	#1821C	#1822B
ピアニスト	ジャン・エフラム・バヴゼ	アンナ・ヴィニツカヤ	ベルトラン・シャマユ	小山 実稚恵	ニコライ・ルガンスキー	ティル・フェルナー	チョ・ソンジン	ゲルハルト・オピッツ
日程	2015/3/14	2015/4/17-18	2015/4/22-23	2015/6/17-18	2015/9/11-12	2015/9/26-27	2015/11/20-21	2015/11/25-26
演目	ベートーヴェン5番	ラフマニノフ2番	シューマン イ短調	チャイコフスキー1番	ラフマニノフ3番	ベートーヴェン5番	ショパン1番	モーツァルト24番
回数	#1828B	#1831B	オーチャード定期	#1835A	#1838A	オーチャード定期	#1824A	#1843C
ピアニスト	ルーカス・ゲニューシャス	カティア・ブニアティシヴィリ	ペーター・レーゼ	テック・コリア/小曾根 真	ルステム・ハイルディノフ	アレクサンダー・ガブリユク	ラルス・フォークト	デニス・マツエフ
日程	2016/1/20-21	2016/2/17-18	2016/5/8	2016/5/14-15	2016/6/11-12	2016/7/10	2016/9/24-25	2016/9/30-10/1
演目	ラフマニノフ2番	シューマン イ短調	ベートーヴェン3番	モーツァルト 2台のための	チャイコフスキー 作品 56	チャイコフスキー1番	モーツァルト27番	プロコフィエフ2番
回数	#1846B	#1848A	#1849C	オーチャード定期	#1859C	オーチャード定期	#1862A	#1865C
ピアニスト	エリザベート・レオンスカヤ	レイフ・オヴェ・アンズネス	アレクセイ・ヴォロディン	クリスティナ・オルティエス	ヘアトリーチェ・ラナ	アンヌ・ケフレック	河村 尚子	デニス・コジュヒン
日程	2016/10/26-27	2016/11/19-20	2016/11/25-26	2017/4/8	2017/4/21-22	2017/5/7	2017/6/24-25	2017/9/22-23
演目	ベートーヴェン3番	シューマン イ短調	ショスタコーヴィチ1番	ブラームス1番	ベートーヴェン1番	モーツァルト9番	サン＝サーンス2番	ラフマニノフ4番 (1941)
回数	オーチャード定期	#1873A	#1874C					
ピアニスト	ゲルハルト・オピッツ	ピーエール・ロラン・エマール	ジャン＝イヴ・ティボーデ					
日程	2017/11/26	2017/12/2-3	2017/12/8-9					
演目	ベートーヴェン5番	ラヴェル 左手	サン＝サーンス5番					

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	トリフォニーシリーズ	サントリーホールシリーズ	トリフォニーシリーズ	サントリーホールシリーズ	トリフォニーシリーズ	サントリーホールシリーズ	トリフォニーシリーズ	トリフォニーシリーズ
ピアニスト	ラルス・フォークト	原田 英代	清水 和音	ポール・ルイス	三輪 郁	ラルス・フォークト	小菅 優	レオン・フライシャー
日程	2012/1/27	2012/4/19	2013/4/19-20	2014/6/29	2015/6/19-20	2015/7/3	2015/9/4-5	2015/11/20-21
演目	チャイコフスキー1番	カゼツラ スカルラッティアーナ	ブラームス2番	ブラームス1番	ストラヴィンスキー ベトル・シュカ	ブラームス2番	バルトーク3番	モーツァルト12番
回数	サントリーホールシリーズ	トリフォニーシリーズ	トリフォニーシリーズ	サントリーホールシリーズ	トリフォニーシリーズ	トリフォニーシリーズ	トリフォニーシリーズ	サントリーホールシリーズ
ピアニスト	アレクサンドル・タロー	トーマス・ヘル	アンヌ・ケッフエルク	木村 かをり	クシユトフ・ヤブウォンスキ	ベキネル姉妹	パスカル・ロジェ	デジュ
日程	2016/2/25	2016/5/27-28	2016/9/16-17	2017/1/26	2017/2/24-25	2017/5/19-20	2017/7/14-15	2017/9/14
演目	ラヴェル ト長調	矢代秋雄 ピアノ協奏曲	モーツァルト27番	武満徹 2つのレント他	ショパン1番	ブーランク 2台のための	サン＝サーンス5番	ベートーヴェン4番
回数	サントリーホールシリーズ	トリフォニーシリーズ						
ピアニスト	清水 和音	カティア・ブニアティシヴィリ						
日程	2017/10/14	2017/11/10-11						
演目	グリーグ イ短調	チャイコフスキー1番						

東京交響楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	第601回	第603回	第78回新潟定期	第81回新潟定期	第618回、川崎定期44回	第622回、川崎定期46回	第627回	川崎定期50回、第629回
ピアニスト	ゾルタン・コチシュ	デジュ・ランキ	中村 絃子	クニウー・バイク	ゲルハルト・オピッツ	小菅 優	キット・アームストロング	ニコライ・ホジャイノフ
日程	2012/6/9	2012/9/15	2013/7/21	2013/11/15	2014/3/29,30	2014/7/5,6	2015/2/26	2015/4/18,19
演目	モーツァルト17番	モーツァルト27番	ショパン2番	ブラームス2番	ベートーヴェン5番	リスト2番	ブリテン ピアノ協奏曲	ショパン2番
回数	第632回、川崎定期61回	第91回新潟定期	第635回	川崎定期第53回、第636回	第637回	第94回新潟定期	第1回八王子定期	第640回、第95回新潟定期
ピアニスト	デジュ・ランキ	ミロスラフ・クルティシエフ	エマニュエル・アックス	セルゲイ・カスプロフ	小菅根 真	萩原 麻未	中村 絃子	アレクサンダー・ロマノフスキー
日程	2015/7/16,18	2015/8/22	2015/11/22	2015/12/12,13	2016/1/16	2016/3/20	2016/4/30	2016/5/28,29
演目	バルトーク1番	チャイコフスキー1番	R.シュトラウス プルレスケ	ラフマニノフ バガニーニ	ショスタコーヴィチ1番	ラヴェル ト長調	モーツァルト24番	プロコフィエフ3番
回数	第96回新潟定期	第643回	第648回	第101回新潟定期	第650回、川崎定期60回	第654回	川崎定期64回、第655回	
ピアニスト	横山 幸雄	オルガ・シェップス	小菅 優	菊池 洋子	小菅根 真	児玉 桃	フランク・ブラレイ	
日程	2016/7/4	2016/8/4	2017/1/14	2017/4/23	2017/5/20,21	2017/10/21	2017/11/12,14	
演目	リスト1番、ショパン1番、 ラフマニノフ2番	ラフマニノフ2番	矢代秋雄 ピアノ協奏曲	モーツァルト20番	モーツァルト6番	ラフマニノフ バガニーニ	ダンディ フランスの山人	

東京シティ・フィルハーモニー管弦楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017

回数	第256回	第258回	第31回ティアラこうとう定期	第264回	第268回	第269回	第272回	第35回ティアラこうとう定期
ピアニスト	フランク・ブラレイ	小山 実稚恵	阪田 知樹	野田 清隆	菊池 洋子	清水 和音	横山 幸雄	菅原 望
日程	2012/2/10	2012/4/18	2012/11/3	2012/12/14	2013/4/19	2013/5/27	2013/9/13	2013/11/30
演目	ガーシュウィン in F ストラヴィンスキー バトル・シュカ	モーツァルト27番	ラヴェル ト長調	シェーンベルク ピアノ協奏曲	モーツァルト21番	ベートーヴェン3番	ラフマニノフ3番	チャイコフスキー1番
回数	第36回ティアラこうとう定期	第280回	第282回	第38回ティアラこうとう定期	第285回	第42回ティアラこうとう定期	第292回	第295回
ピアニスト	金子 三勇士	ハオチェン・チャン	横山 幸雄	浦山 瑠衣	福岡 洸太郎	山崎 亮汰	伊藤 恵	江口 玲
日程	2014/1/25	2014/6/7	2014/9/13	2014/9/27	2015/1/16	2015/7/18	2015/10/3	2016/2/19
演目	ショパン1番	ラフマニノフ バガニーニ	ラフマニノフ2番	グリーグ イ短調	モーツァルト9番	プロコフィエフ3番	モーツァルト24番	ブラームス2番
回数	第46回ティアラこうとう定期	第301回	第47回ティアラこうとう定期	第48回ティアラこうとう定期	第305回	第49回ティアラこうとう定期		
ピアニスト	仲道 郁代	菊池 洋子	小柳 美奈子	篠永 紗也子	牛田 智大	奥田 弦		
日程	2016/7/16	2016/11/6	2017/1/21	2017/3/4	2017/3/18	2017/11/25		
演目	チャイコフスキー1番	モーツァルト25番	吉松隆 サイバーバード	ラフマニノフ1番	ベートーヴェン5番	ガーシュウィン ラブソディ		

東京都交響楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017

回数	第728回 A	第732回 B	第733回 A	第734回 B	第739回 B	第740回 A	第745B	第748回 A
ピアニスト	岡田 博美	児玉 桃	辻井 伸行	アンドレア・ルケシーニ	館野 泉	岡田 博美	ゲルハルト・オピッツ	伊藤 恵
日程	2012/1/17	2012/4/12	2012/4/20	2012/5/14	2012/8/28	2012/9/3	2012/12/5	2013/3/22
演目	リゲティ (1988)	モーツァルト8番	ショパン1番	ブラームス1番	一柳慧5番 左手	ベリオ2番	バルトーク2番	モーツァルト21番
回数	第750回 B	第751回 A	第752回 A	第754回 B	第757回 A	第758回 B	第769回 A	第772回 B、第733回 A
ピアニスト	ヴァディム・ホロデンコ	フランチェスコ・ピエモンテージ	児玉 桃	ヤン・リシエツキ	アンリ・バルダ	小山 実稚恵	ジャン・ルイ・ストイアマン	ピョートル・アンデルジェフスキ
日程	2013/4/3	2013/4/8	2013/5/9	2013/6/26	2013/9/30	2013/10/16	2014/4/8	2014/6/24-25
演目	ベートーヴェン5番	ベートーヴェン4番	モーツァルト9番	ショパン2番	ベートーヴェン3番	プロコフィエフ3番	ヴィラ=ロボス モモプリコシ	バルトーク3番
回数	第776回 B	第790回 B	第794回 B	第803回 A	第806回 C	第808回 A	第811回 C	第814回 A
ピアニスト	ステイヴン・オズボーン	ウィリアム・ウォルフラム	ピーター・ゼルキン	クソウ・バイク	ミシェル・ダルバルト	エリック・ル・サージュ	小山 実稚恵	アンナ・ヴィニツカヤ
日程	2014/10/20	2015/6/15	2015/9/29	2016/3/29	2016/4/30	2016/5/30	2016/6/15	2016/9/15
演目	ブリテン ピアノ協奏曲	シェーンベルク ピアノ協奏曲	ブラームス2番	モーツァルト27番	ベートーヴェン4番	モーツァルト24番	サン=サーンス5番	プロコフィエフ2番
回数	第818回 C、第819回 A	第830回 C	第831回 B	第833回 A	第834C	第838回 A		
ピアニスト	ビエル=ロラン・エマール	イノン・バルナタン	ステイヴン・オズボーン	アプデル・ラーマン・エル=バジャ	ロジェ・ムラロ	ハオチェン・チャン		
日程	2016/11/27,28	2017/4/22	2017/5/16	2017/5/31	2017/6/21	2017/9/4		
演目	ラヴェル 左手	ラフマニノフ バガニーニ	ティベット ピアノ協奏曲	ベートーヴェン5番	ダンディ フランスの山人	ラフマニノフ3番		

東京フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	第809回オーチャード	第813回オーチャード	第814回オーチャード 第815回サントリー	第71回東京オペラシティ 第820回サントリー 第821回オーチャード	第825回オーチャード	第827回オーチャード	第828回サントリー 第76回東京オペラシティ	第831回サントリー 第77回東京オペラシティ
ピアニスト	中野 翔太	小山 実稚恵	ソフィー・バチーニ	中村 紘子	館野 泉	渡邊 一正	小川 典子	中村 紘子
日程	2012/1/22	2012/3/18	2012/4/15,20	2012/7/19,20,22	2012/11/18	2013/1/27	2013/3/13,14	2013/4/12,18
演目	モーツァルト21番	ラヴェル ト長調	シューマン イ短調	チャイコフスキー1番 グリーク イ短調	ラヴェル 左手	ラヴェル ト長調	ラフマニノフ2番	ベートーヴェン2番・5番
回数	第82回東京オペラシティ	第839回サントリー 第840回オーチャード	第842回オーチャード	第844回オーチャード 第845回サントリー 第84回東京オペラシティ	第851回オーチャード	第852回オーチャード	第853回サントリー 第88回東京オペラシティ	第855回オーチャード
ピアニスト	小菅 優	ファジル・サイ	清水 和音	アレクサンダー・コルサンティア	清水 和音	中村 紘子	チョ・ソンジン	及川 浩治
日程	2013/10/10	2013/10/25,27	2014/1/26	2014/3/2,3	2014/7/21	2014/9/23	2014/10/21,24	2014/11/16
演目	ヘンツェ1番	ラヴェル ト長調	ガーシュウィン ラブソディ	ラフマニノフ2番・3番	プロコフィエフ3番	リスト1番	ショパン1番 (プレトニョフ編)	ラフマニノフ3番
回数	第857回オーチャード	第858回オーチャード	第866回オーチャード	第96回東京オペラシティ	第99回東京オペラシティ 第875回オーチャード	第104回東京オペラシティ 第884回サントリー	第108回東京オペラシティ 第891回オーチャード	第110回東京オペラシティ 第893回オーチャード
ピアニスト	仲道 郁代	菊池 洋子	児玉 桃/カリン・K・ナガノ	反田 恭平	小林 愛実	チョ・ソンジン	松田 華音	阪田 知樹
日程	2015/1/18	2015/2/15	2015/7/12	2015/9/11	2016/2/25, 28	2016/9/21, 23	2017/3/22	2017/6/14,18
演目	シューマン イ短調	モーツァルト20番	モーツァルト 2台のための	ラフマニノフ バガニーニ	モーツァルト23番	ベートーヴェン5番	ラフマニノフ2番	リスト1番
回数	第896回オーチャード 第112回東京オペラシティ	第899回サントリー						
ピアニスト	イム・ジュヒ	小山 実稚恵						
日程	2017/9/18,21	2017/12/5						
演目	ベートーヴェン3番	チャイコフスキー1番						

日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	第637回東京	第275回横浜	第640回東京	第280回横浜	第645回東京	第647回東京	第285回横浜	第288回横浜
ピアニスト	田部 京子	河村 尚子	上原 彩子	中村 紘子	バスカル・ロジェ	ハオチェン・チャン	萩原 麻未	伊藤 恵
日程	2012/1/20	2012/3/24	2012/5/18	2012/9/22	2012/11/9	2013/1/25	2013/3/23	2013/6/8
演目	シューマン イ短調	ブラームス1番	ラフマニノフ3番	ベートーヴェン5番	ガーシュウィン in F	ラフマニノフ2番	グリーク イ短調	サン＝サーンス5番
回数	第651回東京	第290回横浜	第1回相模原	第658回東京	第82回埼玉、第295回横浜	第660回東京	第298回横浜、第3回相模原	第84回埼玉、第299回横浜
ピアニスト	河村 尚子	清水 和音	仲道 郁代	浜野 与志男	小菅 優	若林 顕	上原 彩子	田部 京子
日程	2013/6/14	2013/9/28	2013/10/6	2014/3/14	2014/3/21-22	2014/5/30	2014/6/7-8	2014/7/4,5
演目	ラフマニノフ バガニーニ	チャイコフスキー1番	ベートーヴェン5番	スクリャーピン 嬰へ短調	シューマン イ短調	スクリャーピン交響曲5番	ショパン1番	グリーク イ短調

回数	第300回横浜	第86回埼玉	第302回	第666回	第668回東京	第669回東京	第89回埼玉	第308回横浜
ピアニスト	菊池 洋子	小山 実稚恵	館野 泉	小山 実稚恵	イワン・ルージン	アンジェラ・ヒューイト	金子 三勇士	伊藤 恵
日程	2014/9/27	2014/11/7	2014/11/22	2014/12/5	2015/3/20	2015/4/24	2015/5/22	2015/6/6
演目	モーツァルト26番	ショパン1番	ラヴェル 左手	ベートーヴェン5番	ショスタコーヴィチ2番	ブラームス1番	チャイコフスキー1番	ラフマニノフ バガニニ
回数	第5回相模原	第91回埼玉	第310回横浜	第311回横浜	第678回東京	第318回横浜	第96回埼玉	第98回埼玉
ピアニスト	田部 京子	上原 彩子	ソヌ・イエゴン	小川 典子	野田 清隆	小山 実稚恵	及川 浩治	仲道 郁代
日程	2015/6/27	2015/9/18	2015/9/19	2015/10/17	2016/3/4	2016/6/3	2016/7/1	2016/11/4
演目	モーツァルト23番	ベートーヴェン4番	ラフマニノフ3番	リスト1番	尾高惇忠 ピアノ協奏曲	ベートーヴェン5番	ラフマニノフ3番	グリーグ イ短調
回数	第322回横浜	第688回東京	第101回埼玉、第327回横浜	第691回	第692回東京	第102回埼玉、第329回埼玉	第696回東京	
ピアニスト	ルーカス・ゲニューシャス	金子 三勇士	田村 響	若林 顕	ジャン＝エフラム・バウゼ	菊池 洋子	渡邊 康雄	
日程	2016/11/19	2017/3/3	2017/5/19,20	2017/6/16	2017/7/8	2017/7/14	2017/12/9	
演目	ラフマニノフ2番	チャイコフスキー1番	リスト1番	プロコフィエフ1番	ラヴェル 左手	ショパン1番	八村義夫 錯乱の論理	

読売日本交響楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	第522回	第531回	第532回	第536回	第543回	第544回	第548回	第554回
ピアニスト	菊池 洋子	デジュ・ランキ	金子 三勇士	ニコライ・デミジエンコ	アンジェラ・ヒューイト	金子 三勇士	アンドレアス・シュタイアー	フランチェスコ・ビエモンテージ
日程	2013/1/21	2013/11/22	2013/12/10	2014/4/17	2014/12/4	2015/1/16	2015/5/13	2016/1/14
演目	モーツァルト23番	ブラームス2番	バルトーク3番	リスト1番	酒井健治 ブルーコンチェルト	シューマン イ短調	モーツァルト17番	リスト2番
回数	第562回	第564回	第565回	第569回				
ピアニスト	ヴィクトリア・ポストニコワ	イェルク・デームス	イーヴォ・ボゴレリッチ	ペゾド・アブドゥライモフ				
日程	2016/9/26	2016/11/24	2016/12/13	2017/6/24				
演目	ショスタコーヴィチ1番	ベートーヴェン3番	ラフマニノフ2番	プロコフィエフ3番				

大阪フィルハーモニー定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	第456回	第457回	第465回	第466回	第471回	第474回	第476回	第479回
ピアニスト	野平 一郎	萩原 麻未	小山 実稚恵	イングリット・フリッター	児玉 桃	フセイン・セルメット	ネルソン・フレイレ	アルド・チッコリーニ
日程	2012/3/8,9	2012/4/12,13	2013/2/7,8	2013/2/28, 3/1	2013/10/21, 22	2013/12/5,6	2014/3/13,14	2014/6/26,27
演目	ベートーヴェン4番	モーツァルト23番	グリーグ イ短調	シューマン イ短調	メシアン トゥランガリラ	モーツァルト18番	ベートーヴェン5番	サン＝サーンス5番
回数	第482回	第484回	第494回	第498回	第504回	第509回		
ピアニスト	ユリアナ・アフディエーワ	ダン・タイ・ソン	ガルハルト・オピッツ	アンナ・ヴィニツカヤ	河村 尚子	ニコラ・アンゲリッシュ		
日程	2014/10/23,24	2015/1/30,31	2015/12/16,17	2016/5/20,21	2016/12/8,9	2017/6/23,24		
演目	プロコフィエフ3番	ショパン2番	ブラームス2番	ラフマニノフ2番	ベートーヴェン4番	ラフマニノフ パガニーニ		

関西フィルハーモニー管弦楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	第235回	第238回	第242回	第244回	第245回	第246回	第254回	第260回
ピアニスト	小山 実稚恵	津田 裕也	館野 泉	児玉 桃	小菅 優	クニウエー・バイク	弓張 美季	萩原 麻未
日程	2012/2/3	2012/5/25	2012/10/18	2013/2/27	2013/3/15	2013/4/29	2014/3/30	2014/10/10
演目	ブラームス1番	モーツァルト26番	一柳慧5番 左手	ラフマニノフ2番	モーツァルト24番	ラフマニノフ1番	シューマン イ短調	ショパン1番
回数	第261回	第262回	第265回	第266回	第270回	第272回	第273回	第277回
ピアニスト	上田 晴子	中野 翔太	児玉 桃	横山 幸雄	ジャン＝フィリップ・コラール	アレクサンドル・タロー	横山 幸雄	プリステイヤ・フージイ
日程	2014/11/15	2015/2/13	2015/5/19	2015/6/12	2015/11/23	2016/3/5	2016/4/29	2016/9/25
演目	ベートーヴェン 三重	ヒンデミット 主題と変奏曲	細川俊夫 月夜の蓮	ブラームス2番	ベートーヴェン5番	モーツァルト21番	ラフマニノフ3番	ショスタコーヴィチ1番・2番
回数	第280回	第281回	第287回	第288回				
ピアニスト	ルーカス・ゲニューシャス	若林 顕	松田 華音	横山 幸雄				
日程	2017/2/24	2017/3/31	2017/10/19	2017/11/23				
演目	ラフマニノフ パガニーニ	モーツァルト25番	グリーグ イ短調	サン＝サーンス2番				

大阪交響楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	第164回	第166回	第167回	第168回	第174回	第175回	第180回	第183回
ピアニスト	長尾 洋史	石井 克典	クリストファー・ヒンターファー	田部 京子	山本 貴志 佐藤 卓史	江口 玲	児玉 麻里	クリストファー・ヒンターファー
日程	2012/3/16	2012/5/28	2012/6/22	2012/9/28	2013/3/14	2013/4/12	2013/10/18	2014/2/28
演目	ヘンゼルト ヘ短調	R シュトラウス 町人貴族	ドボナーニ 作品 25	モーツァルト25番	ブルッフ 2台のピアノのための	ベートーヴェン3番	ドビュッシー 幻想曲	ショミット ベートーヴェンの主題
回数	第184回	第187回	第188回	第189回	第190回	第192回	第197回	第201回
ピアニスト	福間 洸太郎	内藤 佳有	佐藤 卓史	田村 響	クリストファー・ヒンターファー	田部 京子	金子 三勇士	林 澄子
日程	2014/3/18	2014/7/28	2014/9/19	2014/10/16	2014/12/15	2015/2/18	2015/10/21	2016/4/7
演目	ヘルマン・ゲッツ 2番	ストラヴィンスキー バトル・シカ	モーツァルト15番	ショスタコーヴィチ2番	ブラームス2番	マルトウッチ1番	プロコフィエフ3番	メンデルスゾーン ヴァイオリンとピアノのための
回数	第204回	第208回	第30回いづみホール	第213回				
ピアニスト	長富 彩	横山 幸雄	エドゥアルト・クンツ	コルネリア・ヘルマン				
日程	2016/9/9	2017/2/22	2017/10/18	2017/10/26				
演目	リスト1番	ベートーヴェン4番	ベートーヴェン3番	シューマン イ短調				

日本センチュリー交響楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	第169回	第173回	第174回	第176回	第180回	第189回	第192回	第198回
ピアニスト	小菅 優	小山 実稚恵	デジュ・ラーンキ	バスカル・ロジェ	マルクス・グロー	上原 彩子	エリック・ル・サージュ	アレクサンダー・オブリエク
日程	2012/3/22	2012/7/26	2012/9/20	2012/11/1	2013/4/11	2014/3/6	2014/6/19	2015/1/22
演目	シューマン イ短調	ラフマニノフ3番	バルトーク3番	サン＝サーンス5番	チャイコフスキー1番	ラフマニノフ2番	ラヴェル ト長調	ラフマニノフ バガニーニ
回数	いづみ定期 No.26	第199回	第200回	第205回	いづみ定期 No.29	第207回	第210回	いづみ定期 No.32
ピアニスト	萩原 麻未	ボリス・ギルトブルク	小山 実稚恵	レオン・フライシャー	クシシュトフ・ヤブウォンスキ	J. J. フォン・アルニン	アレクサンダー・ロマノフスキー	小山 実稚恵
日程	2015/2/26	2015/3/12	2015/4/10	2015/11/13	2015/11/20	2016/3/25	2016/7/1	2016/8/12
演目	モーツァルト20番	ブラームス1番	シューマン イ短調	モーツァルト12番	ベートーヴェン3番	ラフマニノフ2番	プロコフィエフ3番	モーツァルト9番
回数	第212回	第213回	第215回	第216回	第219回			
ピアニスト	エフゲニー・スドビン	ファジル・サイ	ミシェル・ダルバルト	江崎 昌子	ジョージ・ヴァチナーゼ			
日程	2016/10/28	2016/11/25	2017/3/10	2017/4/21	2017/9/15			
演目	チャイコフスキー1番	モーツァルト21番	R.シュトラウス プルレスケ	ショパン1番	ラフマニノフ3番			

京都市交響楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	第553回	第558回	第560回	第563回	第565回	第572回	第576回	第577回
ピアニスト	リーズ・ドゥ・ラ・サール	ジャン＝エフラム・パウゼ	瀬尾 久仁・加藤 真一郎	河村 尚子	小曾根 真	小管 優	児玉 桃	ニコライ・ルガンスキー
日程	2012/1/20	2012/6/10	2012/8/12	2012/11/30	2013/2/16	2013/9/6	2014/1/23	2014/3/14
演目	サン＝サーンス2番	ラヴェル ト長調	ブラームス 2台のための	ブラームス1番	ショスタコーヴィチ1番	ベートーヴェン1番	モーツァルト23番	ラフマニノフ2番
回数	第581回	第584回	第586回	第587回	第590回	第591回	第594回	第595回
ピアニスト	アンドレア・バケッティ	ニコライ・ホジャイノフ	舘野 泉	ナレ・アルガマニヤン	リリー・マイスキー	アンティ・シーララ	萩原 麻未	ソン・ヨルム
日程	2014/7/18	2014/10/24	2015/1/22	2015/2/22	2015/5/9,10	2015/6/26	2015/9/5, 6	2015/10/9
演目	モーツァルト17番	ショパン2番	ラヴェル 左手	グリーグ イ短調	ベートーヴェン 三重	シューマン イ短調	ラヴェル ト長調	プロコフィエフ3番
回数	第604回	第607回	第608回	第611回	第618回			
ピアニスト	石井 楓子	児玉 桃	パスカル・ロジェ	北村 朋幹	アンナ・フェドロヴァ			
日程	2016/8/19	2016/11/26,27	2017/1/21,22	2017/2/21	2017/11/25,26			
演目	三善晃 ピアノ協奏曲	メシアン トゥランガリラ	モーツァルト25番	ショパン2番	ベートーヴェン5番			

兵庫芸術文化センター管弦楽団 定期演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
回数	第54回	第55回	第65回	第69回	第74回	第77回	第78回	第81回
ピアニスト	ベテル・ヤブロンスキー	ダン・タイ・ソン	菊池 洋子	ドミトリー・メイボローダ	ダン・タイ・ソン	リーズ・ドゥ・ラ・サール	エフゲニー・ボジャノフ	小林 愛実
日程	2012/9/14-16	2012/11/2-4	2013/11/8-10	2014/4/11-13	2014/11/14-16	2015/3/13-15	2015/4/10-12	2015/9/11-13
演目	ガーシュウィン in F	ベートーヴェン5番	モーツァルト9番	ラフマニノフ2番	ラヴェル 左手	ラフマニノフ3番	ショパン2番	ベートーヴェン4番
回数	第85回	第93回	第98回	第99回	第100回	第101回		
ピアニスト	田村 響	クン＝ウー・バイク	萩原 麻未	ロジェ・ムラロ	ピョートル・アンデルジェフスキ	反田 恭平		
日程	2016/2/12-14	2016/12/16-18	2017/8/11-13	2017/9/15-17	2017/10/6-8	2017/11/17-19		
演目	ブラームス1番	ベートーヴェン3番	ラヴェル ト長調	メシアン トゥランガリラ	バルトーク3番	ガーシュウィン ラプソディ		

NHK 交響楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017

ピアニスト	清水 和音	館野 泉	小曽根 真	キム・ソヌク	清水 和音	中村 紘子	小山 実稚恵	サ・チェン
日程	2012/2/4	2012/2/5	2012/2/27,28,29 3/1,3,4,8	2012/3/14-15	2012/5/4,6	2012/7/4	2012/8/23-26	2012/9/1,2,4
地域	東京	東京	大阪・徳島・高知・大分・宮崎・福島	東京・福井	長野・岩手	東京	北海道各地	中華人民共和国
演目	ラヴェル ト長調	プリテン ティヴァー・ジョンズ 左手	ラフマニノフ バガニーニ ガーシュウイン ラプソディ	ベートーヴェン3番	ラヴェル ト長調	外山雄三 (1984)	チャイコフスキー1番	チャイコフスキー1番
ピアニスト	インゴルフ・ブンダー	外山 啓介	上原 彩子	館野 泉	小山 実稚恵	小曽根 真	萩原 麻未	伊藤 恵
日程	2013/1/31-2/3	2013/2/28	2013/4/29	2013/6/25	2013/6/29,30,7/2	2013/7/13	2013/7/28-29	2013/10/5
地域	静岡・岐阜・石川・富山	東京	埼玉	東京	東京・福島・山形	神奈川	広島・大阪	埼玉
演目	ショパン 1番	ラフマニノフ2番	ラフマニノフ2番	ノルドグレン 作品 129	ベートーヴェン4番	モーツァルト9番	モーツァルト20番	モーツァルト20番
ピアニスト	小曽根 真	ソン・ヨルム	河村 尚子	小山 実稚恵	館野 泉	石井 楓子	ユリアンナ・アフディエーワ	ボリス・ギルトブルク
日程	2014/1/29	2014/6/1	2014/6/22	2014/7/5-7	2014/7/18-20	2014/9/5	2014/10/2,4	2014/11/5
地域	東京	韓国	千葉	埼玉・栃木・福島	東京・大阪・愛媛	東京	東京・青森	東京
演目	ガーシュウイン in F	プロコフィエフ3番	チャイコフスキー1番	ラフマニノフ2番	ラヴェル 左手	チャイコフスキー1番	モーツァルト21番	グリーグ イ短調
ピアニスト	小曽根 真	横山 幸雄	アリス・紗良・オット	ジャン=イヴ・ティボーデ	小山 実稚恵	清水 和音	福岡 洸太郎	小山 実稚恵
日程	2015/1/25-26	2015/6/27,29	2015/8/21,23,25,26,28,29,31	2015/10/8	2015/11/5	2015/11/8	2016/5/3	2016/7/1-3
地域	東京・福島	埼玉・愛知	東京・福島・青森・北海道	東京	東京	埼玉	東京	岡山・山口・島根
演目	ガーシュウイン ラプソディ	リスト1番	ベートーヴェン3番	ラヴェル ト長調	ラフマニノフ2番	ラフマニノフ3番	ラフマニノフ バガニーニ	ラフマニノフ2番
ピアニスト	小林 愛実	山中 千尋(ジャズ)	児玉 桃	小曽根 真	小曽根 真	ボリス・ベレゾフスキー	小林 愛実	小山 実稚恵
日程	2016/7/30-31	2016/8/1	2016/8/26-29	2016/11/3	2017/1/6-8	2017/5/24-25	2017/5/28,30	2017/6/3-4
地域	神奈川・東京	東京	岐阜・石川・愛知・静岡	千葉	東京・新潟・富山	東京・神奈川	東京・大阪	神奈川・埼玉
演目	久石譲 千と千尋他	ガーシュウイン ラプソディ	グリーグ イ短調	モーツァルト24番	モーツァルト9番	チャイコフスキー1番	モーツァルト23番	チャイコフスキー1番
ピアニスト	反田 恭平	塩谷 哲(ジャズ)	キット・アームストロング	小曽根 真				
日程	2017/6/9	2017/8/19	2017/8/24-27	2017/10/7-8				
地域	東京	東京	秋田・岩手・青森・宮城	埼玉・茨城				
演目	ターネイジ (2013)	チック・コリア ラ・フィエスタ	モーツァルト26番	プロコフィエフ3番				

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017

ピアニスト	高橋 礼恵	三輪 郁	萩原 麻未	弓張 美季	アンナ・ヴィニツカヤ	塚本 聖子	菊池 洋子	田村 響
日程	2012/2/24-25	2012/5/5,7	2012/8/10-11	2012/8/31-9/1	2013/6/7-8	2013/7/19-20	2013/10/4-5	2013/11/1-2
地域	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京
演目	グリーグ イ短調	R.シュトラウス 町人貴族	ラヴェル ト長調	シューマン イ短調	ラフマニノフ2番	モーツァルト26番	ショパン1番	チャイコフスキー1番

ピアニスト	アンドリュー・フォン・オーエン	フランク・ブラレイ	菊池 洋子	フランチェスコ・トリスターノ	江口 玲	フランチェスコ・トリスターノ	エリソ・ヴィルサラゼ
日程	2014/9/12-13	2015/2/6-7	2015/5/29-30	2016/5/20-21	2017/1/13	2017/11/3	2017/11/23
地域	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京
演目	シューマンイ短調	ガーシュウィン ラプソディ	モーツァルト27番	バッハ1番	バーンスタイン 2番	トリスターノ 自作協奏曲	モーツァルト15番、ベートーヴェン2番、ショパン1番

東京交響楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
※2012.1 - 2013.3 までは、サントリーホールでの公演のみ								
ピアニスト	中村 絃子	石田 啓明	藤田 真央	中村 絃子	後藤 正孝	アレクサンダー・ロマンフスキー	西山 莉愛・春木彩友子	辻井 伸行
日程	2012/1/8	2012/9/20	2012/9/22	2013/1/6	2013/5/5	2013/5/11,12	2013/6/15	2013/7/6
地域	東京	東京	東京	東京	神奈川	神奈川、新潟	東京	東京
演目	チャイコフスキー1番	ベートーヴェン5番	プロコフィエフ3番 3楽章	チャイコフスキー1番	チャイコフスキー1番	ラフマニノフ2番	自作曲	ラフマニノフ2番 3楽章
注釈等					昭和音楽大学公演		ヤマハガラコンサート 2013	
ピアニスト	小菅 優	小菅 優	小林 亜矢乃	仲道 郁代	加藤 大樹	小川 典子	及川 浩治	小山 実稚恵
日程	2013/7/13	2013/7/28	2013/9/1	2013/10/23	2013/10/27	2013/11/10	2013/11/13	2013/11/23
地域	神奈川	神奈川	神奈川	東京	東京	神奈川	東京	東京
演目	モーツァルト8番	グリーグ イ短調	ベートーヴェン 三重	チャイコフスキー1番	ベートーヴェン5番	モーツァルト26番	小山和彦2番	チャイコフスキー1番
注釈等				JAF 会員のための	小平市民文化会館			
ピアニスト	牛田 智大	フセイン・セルメット	小川 典子	中村 絃子	小山 実稚恵	居福 健太郎	及川 浩治	高橋 優介
日程	2013/11/25	2013/11/30-12/1	2013/12/31	2014/1/5,11,12	2014/1/13	2014/1/23	2014/1/25	2014/1/31
地域	東京	神奈川、東京	神奈川	東京・埼玉・神奈川	神奈川	東京	東京	東京
演目	ショパン1番	モーツァルト18番	ラフマニノフ バガニニ 他	チャイコフスキー1番 ショパン1番	ラフマニノフ2番	グリーグ イ短調	ベートーヴェン5番 1楽章他	チャイコフスキー1番
注釈等			MUZA ジルバスター			都民芸術フェスティバル		
ピアニスト	中村 絃子	仲道 郁代	佐藤 卓史	山田 令子	アンドレイ・コロベニコフ	イリヤ・ラシュコフスキー	中村 崇仁	上原 彩子
日程	2014/3/23	2014/4/12	2014/4/26,27	2014/5/31	2014/6/29	2014/7/13	2014/7/27	2014/8/6
地域	神奈川	東京	神奈川、東京	神奈川	東京	神奈川	埼玉	東京
演目	モーツァルト24番	モーツァルト23番2楽章	ブラームス1番	伊福部 リトミカオステイナー	ラフマニノフ2番	ラフマニノフ2番	ベートーヴェン1番 3楽章	ラフマニノフ2番
注釈等							こどもソリスト	
ピアニスト	高橋 優介	ファジル・サイ	牛田 智大	マーティン・ヘルムヘン	田部 京子	蛭多 令子	佐藤 芹香	中村 絃子
日程	2014/9/30	2014/10/11	2014/10/26	2014/11/1	2014/11/3	2013/12/1	2014/12/31	2015/1/4,10,11,12
地域	東京	東京	東京	神奈川	千葉	東京	神奈川	神奈川・埼玉・東京
演目	チャイコフスキー1番	モーツァルト21番	ラフマニノフ2番	モーツァルト25番	グリーグ イ短調	藤原嘉文2番	チャイコフスキー1番	ベートーヴェン5番 チャイコフスキー1番
注釈等							(オーディション合格者)	

ピアニスト	丸山 農民	安部 まりあ	上原 彩子	浜野 与志男	弦うさぎ ベス	須藤 梨菜	若林 顕	金子 三勇士
日程	2015/1/17	2015/1/30	2015/3/6	2015/3/28	2015/4/29	2015/5/6	2015/6/14	2015/7/4
地域	埼玉	東京	東京	東京	神奈川	神奈川	神奈川	東京
演目	ベートーヴェン3番	チャイコフスキー1番	モーツァルト20番	ラフマニノフ2番	石川亮太 ムーンコンチェルト	ラフマニノフ2番	ストラヴィンスキー バトル・シュカ	リスト1番より抜粋
注釈等	コンクール褒賞					昭和音楽大学		
ピアニスト	アレクサンダー・クリツェル	萩原 麻未	横山 幸雄	石田 啓明	岡田 奏	シブリアン・カツアリス	小菅 優	児玉 桃
日程	2015/7/5	2015/7/11	2015/7/25	2015/7/30	2015/8/2	2015/10/3	2015/10/11	2015/11/1
地域	神奈川	東京	神奈川	東京	東京	東京	神奈川	東京
演目	ラフマニノフ2番	ラヴェル左手	ショパン1番	シューマンイ短調	ベートーヴェン4番	種々様々	ベートーヴェン3番	メシアン トゥランガリラ
注釈等								
ピアニスト	ユンディ・リ	中川 俊郎	清塚 信也	上原 彩子	桑原 志織	深見 理紗子	中村 紘子	松田 華音
日程	2015/11/11	2015/11/17	2015/12/31	2016/1/6	2016/1/17	2016/1/23	2016/4/30	2016/7/9
地域	東京	東京	神奈川	神奈川	東京	東京	神奈川	東京
演目	ショパン1番	中川俊郎 ピアノ協奏曲	ガーシュウィン ラブソディ	チャイコフスキー1番	モーツァルト24番	グリーグ イ短調	モーツァルト24番	ラフマニノフ2番 1楽章
注釈等								
ピアニスト	山田 令子	金子 三勇士	反田 恭平	小山 実稚恵	横山 幸雄	奥田 弦	中桐 望	金子 三勇士
日程	2016/7/10	2016/7/17	2016/7/26,27	2016/8/7	2016/10/1	2016/12/18	2016/12/31	2016/12/31
地域	神奈川	神奈川	東京	神奈川	長野	神奈川	神奈川	新潟
演目	伊福部 リトミカオステイナータ	モーツァルト20番	チャイコフスキー1番	ラフマニノフ2番	ラフマニノフ2番	ガーシュウィン ラブソディ	不明	ベートーヴェン5番 2・3楽章
注釈等			はじめてのクラシック				ジルバスター	にいがたジルバスター
ピアニスト	仲道 郁代 上原 彩子 牛田 智大	小山 実稚恵	北村 朋幹	小川 典子	岡田 奏	金子 三勇士	開原 由紀乃	萩原 麻未
日程	2017/1/7	2017/1/8,9	2017/2/12	2017/5/7	2017/5/28	2017/6/25	2017/7/2	2017/7/26
地域	埼玉	東京・神奈川	神奈川	神奈川	神奈川	東京	東京	神奈川
演目	ベートーヴェン5番 チャイコフスキー1番 ラフマニノフ バガニエーニ	ショパン1番	モーツァルト21番	チャイコフスキー1番	サン＝サーンス5番	チャイコフスキー1番	シューマン1番	チャイコフスキー1番
注釈等	中村紘子メモリアル							
ピアニスト	西本 裕矢	反田 恭平	草 冬香	小菅 優	加羽沢 美濃	黒岩 航紀	上原 彩子	小山 実稚恵
日程	2017/7/29	2017/8/11	2017/8/16	2017/8/26	2017/8/27	2017/9/10	2017/10/10	2017/11/4
地域	埼玉	神奈川	埼玉	神奈川	埼玉	東京	東京	東京
演目	ラフマニノフ2番 3楽章	ラフマニノフ3番	モーツァルト21番より	モーツァルト12番・9番	不明	チャイコフスキー1番	ラフマニノフ2番	モーツァルト21番2楽章 ラフマニノフ2番3楽章
注釈等	こどもソリスト						JAF 会員のための	

東京都交響楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017

ピアニスト	アンナ・マリコヴァ	清水 和音	小山 実雅恵	クニ＝ウー・パイク	ミハイル・ルディ	上原 彩子	清水 和音	山下 洋輔(ジャズ)
日程	2012/2/11	2012/2/18	2012/3/6	2012/3/17	2012/7/15	2012/9/15	2013/1/27	2013/3/17
地域	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京	東京
演目	ラフマニノフ2番	シューマン イ短調	ベートーヴェン5番	ドボルザーク ト短調	ショスタコーヴィチ2番	ベートーヴェン2番	ベートーヴェン 三重	ガーシュウィン ラプソディ
注釈等			共催			依頼公演		
ピアニスト	ウシシュトフ・ヤブウォンスキ	横山 幸雄	ロバート・レヴィン	HJ リム	河村 尚子	萩原 麻未	小山 実雅恵	アンドリュース・リットン
日程	2013/6/8	2014/7/6	2014/11/15	2014/11/30	2015/3/8	2015/3/29	2015/4/19	2015/6/7
地域	東京	東京	東京	東京	東京	東京	大阪	東京
演目	ベートーヴェン4番	ラフマニノフ パガニーニ	モーツァルト20番	チャイコフスキー1番	シューマン イ短調	グリーグ イ短調	ラフマニノフ3番	ガーシュウィン in F
注釈等	共催							
ピアニスト	小曾根 真	アレクサンダー・ロマノフスキー	イノン・バルナタン	ロバート・レヴィン ヤーフェイ・チャン	反田 恭平	横山 幸雄	シュテファン・ヴラダー	キム・ソヌク
日程	2015/9/30	2015/10/11	2016/1/30	2016/9/25	2016/11/3	2017/3/5	2017/3/18-19,21	2017/4/29
地域	北海道	東京	東京	東京	東京	東京	福岡・名古屋	東京
演目	ガーシュウィン ラプソディ	ラフマニノフ2番	ベートーヴェン3番	モーツァルト 2台のための	リスト1番	ラフマニノフ2番	ブラームス1番	ベートーヴェン3番
注釈等								
ピアニスト	小曾根 真	藤田 真央	児玉 桃					
日程	2017/10/14-15	2017/10/19	2017/10/30					
地域	東京	東京	東京					
演目	バーンスタイン交響2番	リスト1番	一柳慧3番					
注釈等								

東京フィルハーモニー交響楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017

ピアニスト	江口 玲	尾崎 未空	仲道 郁代	金子 三勇士	館野 泉	仲道 郁代	松田 華音	三船 優子
日程	2012/6/3	2012/10/6	2013/2/2	2014/1/2-3	2014/2/8	2015/2/1	2016/1/2,3	2016/3/20
地域	東京	千葉	東京	東京	東京	東京	東京	東京
演目	ガーシュウィン ラプソディ	グリーグ イ短調	ベートーヴェン5番	ラフマニノフ2番 1楽章	ラヴェル 左手	ベートーヴェン5番 1楽章	チャイコフスキー1番 1楽章	ガーシュウィン ラプソディ
注釈等		(千葉定期だが、特別演奏会に分類されている)		ニューイヤー			ニューイヤー	

ピアニスト	小林 愛実	小山 実雅恵
日程	2017/1/2,3	2017/2/3-5
地域	東京	東京
演目	ショパン1番 1楽章	グリーグ イ短調
注釈等	ニューイヤー	

日本フィルハーモニー交響楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2013.10.-2017

(<https://www.japanphil.or.jp/concert/history/>)掲載分

ピアニスト	モナ=飛鳥・オット	外山 啓介	アレクセイ・ゴルラッチ イリヤ・ラシュコフスキー 関本 昌平 萩原 麻未 ミシェル・ダルベルト	上原 彩子	清水 和音	外山 啓介	岡田 博美	外山 啓介
日程	2013/10/22	2013/11/13	2013/11/16	2014/1/19	2013/2/19	2014/3/3	2014/6/15	2014/11/2
地域	東京	東京	横浜	東京	宮崎	東京	東京	東京
演目	チャイコフスキー1番	チャイコフスキー1番	リスト1番、ショスタコーヴィチ2、 ベートーヴェン4、ラヴェル左手、 ラフマニノフ バガニーニ	モーツァルト20番	チャイコフスキー1番	菅野光亮 宿命他	チャイコフスキー1番	菅野光亮 宿命他
注釈等			横浜市招待国際ピアノ演奏会					
ピアニスト	児玉 桃	小林 亜矢乃	金子 三勇士	若林 顕	及川 浩治	上原 彩子	佐々木 崇	ベンヤミン・ヌス
日程	2015/1/17	2015/2/7	2015/3/8	2015/4/5	2015/5/25	2015/8/7	2015/8/30	2015/9/12
地域	東京	佐賀	東京	東京	東京	神奈川	埼玉	東京
演目	チャイコフスキー1番	モーツァルト20番	モーツァルト20番	ラフマニノフ バガニーニ	ラフマニノフ2番	グリーグ イ短調	チャイコフスキー1番	ガーシュウィン ラブソディ
注釈等								
ピアニスト	梅田 智也	及川 浩治	中桐 望	石田 啓明	小山 実雅恵	小山 実雅恵	梅田 智也	清塚 信也
日程	2015/10/3	2015/10/22	2015/11/23	2015/12/5	2016/1/17	2016/2/7,9,10,17	2016/3/3	2016/4/30
地域	東京	埼玉	東京	東京	東京	福岡・長崎・佐賀・宮崎	東京	東京
演目	ラフマニノフ2番	ラフマニノフ3番	ショパン2番	チャイコフスキー1番	ラフマニノフ バガニーニ	ラフマニノフ2番	ベートーヴェン4番	ガーシュウィン ラブソディ
注釈等							東京音楽コンクール受賞	ディズニー ファンタジア
ピアニスト	若林 顕	小林 亜矢乃	寺田 悦子 渡邊 規久雄	仲道 郁代	仲道 郁代	イリーナ・メジューエワ	松永 貴志	ゲルハルト・オピッツ
日程	2016/5/8	2016/5/27	2016/5/29	2016/6/25,26	2016/8/7	2016/9/18	2016/10/30	2016/11/12
地域	東京	東京	東京	東京	神奈川	東京	東京	東京
演目	チャイコフスキー1番	ラフマニノフ2番 1楽章	モーツァルト 2台のための	ベートーヴェン5番	クーラウ ピアノ協奏曲	ラフマニノフ2番	ガーシュウィン ラブソディ	ベートーヴェン4番
注釈等								

ピアニスト	桑原 志織	居福 健太郎	小山 実雅恵	金子 三勇士	小林 亜矢乃	福間 洸太郎	小林 亜矢乃	福間 洸太郎
日程	2016/11/20	2017/1/13	2017/1/15	2017/2/12,14,15,17,18,21	2017/3/18	2017/3/30	2017/4/8,9	2017/9/3
地域	東京	東京	東京	福岡・熊本・大分・佐賀・ 鹿児島	福島	東京	不明	東京
演目	リスト1番	ラフマニノフ2番	ラフマニノフ2番	リスト1番	チャイコフスキー1番	ラフマニノフ2番	チャコフスキー1番	大澤壽人 3 番
注釈等								
ピアニスト	山下 洋輔(ジャズ)	キム・ヒョンジュン	今田 篤	反田 恭平	牛田 智大	黒岩 航紀	小林 海都	
日程	2017/9/15	2017/9/18	2017/9/30	2017/10/1	2017/11/3	2017/11/26	2017/12/2	
地域	東京	東京	東京	東京	東京	不明	不明	
演目	ガーシュウィン ラブソディ	モーツァルト 23 番	チャイコフスキー1番	ショパン2番・1番	リスト 死の舞踏	グリーク イ短調	チャイコフスキー1番	
注釈等								

大阪フィルハーモニー交響楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2012.4-2017

ピアニスト	若林 顕	清水 和音 小曽根 真	伊藤 恵	インゴルフ・ブンダー	三船 優子	金子 三勇士	須関 裕子	ケマル・ゲキチ
日程	2012/7/7	2012/10/14	2012/10/28	2012/11/25	2012/12/13	2013/1/14	2013/3/16	2013/4/13
地域	兵庫	大阪	滋賀	大阪	大阪	鳥取	岐阜	奈良
演目	ベートーヴェン5番	リスト1番 ガーシュウィン ラプソディ	シューマン イ短調	ベートーヴェン4番	ガーシュウィン ラプソディ	リスト1番	ベートーヴェン 三重	ラフマニノフ2番
注釈等		ザ・シンフォニーホール 30周年記念						
ピアニスト	仲道 郁代	小林 亜矢乃	デュオ・イケダ	小曽根 真	多田 真理	金子 三勇士	牛田 智大	尾崎 未空
日程	2013/6/7	2013/6/12	2013/6/30	2013/7/17	2014/2/11	2014/2/15	2014/3/8	2014/3/31
地域	大阪	大阪	奈良	兵庫	大阪	大阪	岐阜	大阪
演目	ベートーヴェン5番	チャイコフスキー1番	ブルーランク ニ台のための	ラフマニノフ バガニーニ	ラヴェル ト長調	ベートーヴェン5番	チャイコフスキー1番	モーツァルト26番 1楽章
注釈等					ABC フレッシュコンサート			
ピアニスト	清水 和音	児玉 桃	ファジル・サイ	太田 糸音	大植 英次	ハオチェン・チャン	山本 貴志	関本 昌平
日程	2014/6/5	2014/7/6	2014/10/18	2014/11/15	2014/12/20	2015/2/8	2015/5/22	2015/6/27
地域	大阪	兵庫	京都	大阪	滋賀	岡山	大阪	兵庫
演目	ラフマニノフ2番	サン＝サーンス2番	モーツァルト21番	グリーグ イ短調1楽章	モーツァルト21番 2楽章	ベートーヴェン5番	ショパン2番	モーツァルト23番
注釈等					ラ・フォル・ジュルネ びわ湖			
ピアニスト	ティル・フェルナー	ピーター・ゼルキン	川田 健太郎	迫 昭嘉	小曽根 真 江口 玲	松田 華音	山下 洋輔(ジャズ)	金子 三勇士
日程	2015/10/4	2015/10/7	2015/10/8	2015/11/7	2015/11/12	2016/1/9	2016/1/31	2016/2/13
地域	京都	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪	大阪
演目	モーツァルト25番	モーツァルト19番	千住明 宿命1楽章他	ラフマニノフ2番	サン＝サーンス 動物の謝肉祭	チャイコフスキー1番 1楽章	ガーシュウィン ラプソディ	リスト1番
注釈等			千住明 個展					
ピアニスト	菊池 洋子	アンヌ・ケフェック	野上 真梨子	山本 貴志	小曽根 真	小林 愛実	池田 洋子	アレクセイ・ヴォロディン
日程	2016/3/5	2016/5/1	2016/5/15	2016/7/10	2016/10/16	2016/10/21	2016/11/6	2016/11/16
地域	岐阜	滋賀	大阪	大阪	京都	大阪	兵庫	大阪
演目	ラヴェル ト長調	モーツァルト27番	チャイコフスキー1番	ショパン1番	ガーシュウィン ラプソディ	ショパン1番	モーツァルト21番	チャイコフスキー2番
注釈等								
ピアニスト	及川 浩治	牛田 智大	小曽根 真	及川 浩治	仲道 郁代	ハオチェン・チャン	岡田 将	仲道 郁代
日程	2016/11/20	2017/1/14	2017/1/31	2017/3/25	2017/5/26	2017/6/14	2017/7/19	2017/9/30
地域	奈良	愛知	大阪	大阪	大阪	大阪	兵庫	兵庫
演目	ベートーヴェン5番	ベートーヴェン5番	モーツァルト24番	ラフマニノフ2番	ベートーヴェン5番	ラフマニノフ3番	リスト1番	ショパン1番 チャイコフスキー1番
注釈等								仲道郁代デビュー30周年

ピアニスト	牛田 智大	及川 浩治	清水 和音
日程	2017/11/16	2017/12/2	2017/12/13
地域	大阪	大阪	大阪
演目	ラフマニノフ2番	ラフマニノフ2番	チャイコフスキー1番
注釈等			

大阪交響楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2013.4-2017								
ピアニスト	大淵雅子・青島広志	崎谷 明弘	大淵 雅子	貫川 風	イリーナ・メジューエワ	ショーン・ケナード	松永 貴志(ジャズ)	魚谷 絵奈
日程	2013/5/6	2013/7/15	2013/12/27	2014/4/5	2014/8/2	2014/10/4	2015/5/16	2015/12/28
地域	大阪	大阪	大阪	兵庫	大阪	大阪	大阪	大阪
演目	サン＝サーンス 動物の謝肉祭	ベートーヴェン5番 1楽章 チャイコフスキー1番 1楽章	ラヴェル ト長調	ラフマニノフ2番 1楽章	ベートーヴェン5番 1楽章	ショパン2番	ガーシュウィン ラプソディ	グリーグ イ短調
注釈等	特別演奏会	朝日放送主催	特別演奏会		朝日放送主催	名曲コンサート	朝日放送主催	特別演奏会
ピアニスト	イリーナ・メジューエワ	松田 華音	林 澄子	牛田 智大	菊池 洋子	竹村 美和子	大淵 雅子	塩谷 哲(ジャズ)
日程	2015/12/31	2016/8/27	2016/9/3	2016/10/8	2017/10/7	2017/10/15	2017/12/27	2017/12/31
地域	滋賀	大阪	愛媛	大阪	大阪	兵庫	大阪	滋賀
演目	ラフマニノフ2番	ラフマニノフ2番	ベートーヴェン4番	リスト 死の舞踏	モーツァルト20番	ショパン1番	シューマン イ短調	ガーシュウィン ラプソディ
注釈等	びわ湖ホール主催	名曲コンサート	宇和島市主催	名曲コンサート	名曲コンサート	川西市市民合唱団主催	特別演奏会	びわ湖ホール主催

日本センチュリー交響楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
ピアニスト	横山 幸雄	外山 啓介	戸島 園恵	池本 三太	山中 歩夢	小菅 優	小山 実雅恵	杉谷 昭子
日程	2012/1/29	2012/2/4	2012/2/18	2012/2/22	2012/3/4	2012/3/18	2012/6/29	2012/9/8
地域	大阪	大阪	富山	大阪	大阪	滋賀	広島	和歌山
演目	ベートーヴェン5番、ショパン1番、 チャイコフスキー1番、 ラフマニノフ2番	ラフマニノフ2番	ブラームス1番	リスト2番	ラフマニノフ2番	ベートーヴェン5番	チャイコフスキー1番	ベートーヴェン5番
注釈等	デビュー20周年記念			新進演奏家育成プロジェクト	摂津音楽祭入賞者			
ピアニスト	北村 朋幹	横山 幸雄	小川 典子	石井 敏貴	菊池 洋子	有馬 圭亮	山口 珠奈	関本 昌平
日程	2012/10/5	2013/1/14	2013/1/20	2013/2/10	2013/2/17	2013/2/22	2013/3/3	2013/4/6
地域	大阪	大阪	京都	大阪	びわ湖	大阪	大阪	大阪
演目	ラフマニノフ2番	ショパン1番・2番、 シューマン、リスト1番	グリーグ イ短調	リスト1番	モーツァルト20番	ラヴェル左手	モーツァルト20番	ベートーヴェン4番
注釈等				ABCフレッシュコンサート		新進演奏家育成プロジェクト	摂津音楽祭入賞者	

ピアニスト	萩原 麻未	沼尻 竜典	小山 実稚恵	福岡 洗太郎	キム・ソヌク	松山 美穂	上原 彩子	外山 啓介
日程	2013/8/11	2013/10/12	2013/11/4	2013/11/28	2014/1/19	2014/2/25	2014/4/13	2014/6/22
地域	滋賀	滋賀	三重	大阪	京都	大阪	滋賀	大阪
演目	モーツァルト21番	モーツァルト ロンド	ショパン1番	モーツァルト9番	ベートーヴェン5番	サン＝サーンス2番	チャイコフスキー1番	菅野光亮 宿命
注釈等						新進演奏家育成プロジェクト		
ピアニスト	アンドレイ・コロベニコフ	清水 和音	マルティナ・フリヤウ	ジャン＝フィリップ・コラール	上原 彩子	黒住 友香	崎谷 明弘	コンスタンティン・リファッツ
日程	2014/7/5	2014/9/21	2014/10/25	2014/11/15	2015/1/12	2015/1/28	2015/1/31	2015/2/11
地域	大阪	兵庫	大阪	京都	大阪	大阪	兵庫	大阪
演目	ガーシュウィン ラブソディ	ベートーヴェン5番、ラフマニノフ2番、チャイコフスキー1番	リスト1番	ベートーヴェン4番	ラフマニノフ2番	マクダウェル2番	ラフマニノフ3番	モーツァルト15番・23番
注釈等						新進演奏家育成プロジェクト		
ピアニスト	萩原 麻未	金子 三勇士	法貴 彩子	坂口 航大	菊池 洋子	北川 千紗	小山 実稚恵	CHIAKi
日程	2015/2/22、3/1	2015/3/22	2015/3/28	2017/1/26	2017/2/11	2017/2/19	2017/3/26	2017/4/22
地域	三重・広島	大阪	大阪	大阪	滋賀	大阪	大阪	大阪
演目	グリーグ イ短調	ラフマニノフ2番	ストラヴィンスキー ベトル・シュカ	モーツァルト20番	ベートーヴェン1番	グリーグ イ短調	チャイコフスキー1番	リスト ハンガリー2番他
注釈等				新進演奏家育成プロジェクト		ABCフレッシュコンサート		ハウス ファミリーコンサート
ピアニスト	児玉 麻里・児玉 桃	イリーナ・メジューエワ	若林 顕	横山 幸雄	小林 愛実			
日程	2017/5/7	2017/5/14	2017/5/20	2017/7/29	2017/12/17			
地域	大阪	滋賀	大阪	大阪	滋賀			
演目	ブーランク 2台のための 他	モーツァルト9番	ラフマニノフ2番	モーツァルト26番、ベートーヴェン5番、チャイコフスキー1番、ラフマニノフ2番	ショパン1番			
注釈等								

京都市交響楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
https://www.kyoto-symphony.jp/concert/ 掲載分								
ピアニスト	沼尻 竜典	インゴルフ・ブンダー	小川 典子	辻井 伸行	山下 洋輔(ジャズ)	仲道 郁代	小山 実稚恵	河内 仁志
日程	2012/3/18	2012/4/15	2012/6/24	2012/9/20	2012/9/28, 30	2013/1/12	2013/3/17	2013/3/20
地域	京都	滋賀	京都	京都	富山・愛知	京都	京都	京都
演目	モーツァルト23番	ショパン1番	ラフマニノフ バガニーニ	ラフマニノフ2番	ガーシュウィン ラブソディ	ベートーヴェン5番	モーツァルト27番	サン＝サーンス2番
注釈等								

ピアニスト	津田 裕也	小山 実雅恵	山本 貴志	谷 千鶴	山下 洋輔(ジャズ)	佐藤 彦大	清水 和音	横山 幸雄
日程	2013/3/31	2013/7/13	2013/9/21	2014/4/29	2014/9/7	2014/9/14	2015/1/18	2015/1/24
地域	京都	京都	大阪	京都	山口	京都	京都	大阪
演目	ショパン1番	ラフマニノフ2番	ラフマニノフ バガニーニ	ラフマニノフ2番 1楽章	ガーシュウィン ラブソディ	ベートーヴェン5番	モーツァルト24番	ラフマニノフ2番
注釈等								
ピアニスト	森上 英美子	山下 洋輔(ジャズ)	レオ・ルケシーニ	中村 紘子	清水 和音	小林 亜矢乃	児玉 桃	松田 華音
日程	2015/2/14	2015/3/19	2015/5/27, 6/9	2015/7/1	2015/7/30	2015/10/25	2015/11/8	2016/4/10
地域	京都	京都	京都・イタリア	京都	愛知	京都	京都	京都
演目	チャイコフスキー1番 1楽章	ガーシュウィン ラブソディ	ベートーヴェン4番	ベートーヴェン5番	モーツァルト23番	ラフマニノフ2番	ラヴェル 左手	ラフマニノフ バガニーニ
注釈等	ラオスありがとうコンサート							
ピアニスト	萩原 麻未	関本 昌平	萩原 麻未	三浦 友理枝	清水 和音	熊本 マリ	清塚 信也	松田 華音
日程	2016/4/24	2016/5/28	2016/6/16	2016/6/19	2016/8/28	2016/11/2	2017/7/1	2017/8/27
地域	京都	岐阜	愛知	京都	京都	京都	京都	京都
演目	ベートーヴェン 三重	チャイコフスキー1番	サン＝サーンス5番	モーツァルト21番 2楽章	グリーグ イ短調 1楽章	ガーシュウィン in F	ガーシュウィン ラブソディ	チャイコフスキー1番
注釈等								
ピアニスト	ルーカス・ガニューシャス							
日程	2017/9/17							
地域	京都							
演目	ショパン2番							
注釈等								

兵庫芸術文化センター管弦楽団 定期外演奏会 招聘ピアニスト 2012-2017								
ピアニスト	児玉 麻里	小林 愛実	水谷 桃子	クレア・ファンチ	小山 実雅恵	河村 尚子	小菅 優	崎谷 明弘
日程	2012/1/7	2012/2/25	2013/5/18	2014/2/1	2014/3/8	2014/4/5	2014/9/27	2015/5/23
地域	兵庫	兵庫	兵庫	兵庫	兵庫	兵庫	兵庫	兵庫
演目	ベートーヴェン5番	グリーグ イ短調	リスト1番	ベートーヴェン3番	ブラームス1番	ブラームス2番	モーツァルト25番	チャイコフスキー1番
注釈等								
ピアニスト	シブリアン・カツアリス	アリス＝沙良・オット	菊池 洋子	弓張 美季	津田 裕也	酒井 有彩	高橋 多佳子 三浦 友理枝	
日程	2015/10/17	2015/12/10	2016/8/6	2017/3/18-20, 25, 26	2017/4/15	2017/5/20	2017/8/5, 6	
地域	兵庫	兵庫	兵庫	兵庫	兵庫	兵庫	兵庫	
演目	ベートーヴェン5番	ベートーヴェン1番 3楽章	モーツァルト9番	モーツァルト20番 2楽章他	モーツァルト20番	グリーグ イ短調	ラフマニノフ2番・3番	
注釈等								

2-2. 分析と考察

前頁までの表中で、複数回の招聘を受けた日本人ピアニスト、計 65 名を以下にまとめた。尚、WFIMC 加盟コンクールの入賞者については、網掛けをして表している。

2012-17 年に在京・在関西のオーケストラに複数回招聘されたピアニストと招聘回数

名前	計	東京 定期	関西 定期	東京 定期外	関西 定期外
小山 実稚恵	37	9	5	17	6
清水 和音	19	6		6	7
小曾根 真	18	3	1	9	5
金子 三勇士	17	5	1	7	4
児玉 桃	17	5	5	4	3
萩原 麻未	17	2	5	6	4
横山 幸雄	16	3	4	5	4
上原 彩子	15	3	1	9	2
菊池 洋子	15	7	1	2	5
小菅 優	15	6	3	4	2
仲道 郁代	15	4		7	4
中村 紘子	14	6		7	1
牛田 智大	9	1		4	4
及川 浩治	9	2		4	3
河村 尚子	9	4	2	2	1
館野 泉	9	3	2	4	
小川 典子	8	3		3	2
小林 愛実	8	1	1	3	3
松田 華音	8	1	1	2	4
若林 顕	8	2	1	3	2
小林 亜矢乃	7			5	2
反田 恭平	7	1	1	5	
伊藤 恵	6	4		1	1
田部 京子	6	3	2	1	
福間 洸太郎	6	1	1	3	1
山下 洋輔	6			2	4
江口 玲	5	1	1	2	1
外山 啓介	5			4	1
関本 昌平	4			1	3
田村 響	4	1	2	1	
山本 貴志	4		1		3
石田 啓明	3			3	
大淵 雅子	3				3

名前	計	東京 定期	関西 定期	京 定期外	関西 定期外
岡田 博美	3	2		1	
北村 朋幹	3		1	1	1
清塚 信也	3			2	1
児玉 麻里	3		1		2
崎谷 明弘	3				3
佐藤 卓史	3		2	1	
津田 裕也	3		1		2
辻井 伸行	3	1		1	1
中野 翔太	3	2	1		
弓張 美季	3		1	1	1
石井 楓子	2		1	1	
梅田 智也	2			2	
岡田 奏	2			2	
奥田 弦	2	1		1	
尾崎 未空	2			1	1
居福 健太郎	2			2	
黒岩 航紀	2			2	
桑原 志織	2			2	
阪田 知樹	2	2			
塩谷 哲	2			1	1
高橋 優介	2			2	
中桐 望	2			2	
沼尻 竜典	2				2
野田 清隆	2	2			
浜野 与志男	2	1		1	
林 澄子	2		1		1
藤田 真央	2			2	
松永 貴志	2			1	1
三浦 友理枝	2				2
三船 優子	2			1	1
三輪 郁	2	1		1	
山田 令子	2			2	

65名中、WFIMCコンクールの入賞者は半数弱の32名にとどまった。ジャズピアニストの4名（但し、小曾根真はクラシック作品を演奏する場合も多い）を差し引いたとしても、少ない割合である。ただ非常に多い回数と言える10回以上招聘されたピアニストに絞れば12人中9人が該当し、未入賞者（2018年9月現在）の中にも、これから入賞を狙える年齢の若手が10人程度含まれている。

全国規模のコンクール優勝が、オーケストラとの共演のきっかけとなる場合も多い。表中には浜野与志男・石田啓明・石井楓子に代表される日本音楽コンクールの優勝者や、石田・梅田智也といった東京音楽コンクールの優勝者も見られる。また、近年はこれらのコンクールをきっかけに日本市場にデビューした者もいる。前者の代表例が反田恭平、後者が北村朋幹で、北村はその後WFIMC加盟コンクールでも複数入賞を果たし、世界的な活躍を見せる。またピティナ・ピアノコンペティション特級は、毎年ではないものの、グランプリ受賞者に東京シティ・フィルハーモニーのティアラこうとう定期への出演機会を褒賞とすることや、大手音楽事務所であるジャパン・アーツとの提携を進め、尾崎未空が所属のきっかけにするなど、市場に入賞者を仲介する役割も果たす。

しかし何と言っても、最もキャスティングに影響力を持っているのは、音楽事務所である。筆者は招聘された日本人ピアニスト全員について、大手音楽事務所の所属の有無を調査した⁴¹。下表の通り、特に定期演奏会においては、事務所所属者が圧倒的な割合を占める。

2012-17年に在京・在関西のオーケストラに招聘されたピアニストの大手音楽事務所所属の有無・割合

	合計	東京定期演奏会	関西定期演奏会	東京定期演奏会以外	関西定期演奏会以外
日本人ピアニスト招聘合計	499	108	59	194	140
事務所系	344 (68.9%)	93 (86.1%)	48 (81.4%)	124 (63.9%)	79 (56.4%)
非事務所系	155 (31.1%)	15 (13.9%)	11 (18.6%)	70 (36.1%)	61 (43.6%)

東京定期演奏会の非事務所系は、先述のような褒賞演奏会も含まれた数字であり、実際にフリーランスで活動する者にはほぼ機会がないものと考えて良い。ただその他の演奏会には、事務所に所属していない者も一定数見られ、その傾向が関西ではより強い。非事務所系かつ招聘回数上位のピアニストでは、及川浩治の9回がトップで、小林亜矢乃⁴²・反田恭平の7回が続く。WFIMC入賞者に限ると、共に2005年ショパン国際ピアノコンクールで入賞した関本昌平・山本貴志の4回が最多である。たとえ著名コンクール入賞を成し遂げたとして

⁴¹ ただし該当アーティストの2018年9月現在の情報によって集計しているため、演奏会開催時点の所属とは異なる可能性もある。

⁴² 小林はジャパン・アーツの協力アーティストであるが、非事務所系とした。

も、大手音楽事務所に所属していなければ、オーケストラとコンスタントに共演することは難しいのが日本の現状である。

では、事務所別の内訳はどうなっているのでしょうか。日本では長らく KAJIMOTO と

2012-17年に在京・在関西のオーケストラに招聘された大手音楽事務所所属ピアニストの内訳

事務所名	演奏機会合計	東京定期演奏会	関西定期演奏会	東京定期演奏会以外	関西定期演奏会以外
日本人ピアニスト招聘合計	499	108	59	194	140
ジャパン・アーツ	134 (26.9%)	38 (35.2%)	13 (22.0%)	55 (28.4%)	28 (20.0%)
KAJIMOTO	61 (12.2%)	17 (15.7%)	13 (22.0%)	18 (9.3%)	13 (9.3%)
AMATI	54 (10.8%)	16 (14.8%)	6 (10.2%)	19 (9.8%)	13 (9.3%)
ヒラサ・オフィス	45 (9.0%)	9 (8.3%)	10 (16.9%)	14 (7.2%)	12 (8.6%)
MIYAZAWA & Co.	25 (5.0%)	7 (6.5%)	1 (1.7%)	9 (4.6%)	8 (5.7%)
ASPEN	11	2	3	4	2
パンフィック・コンサート・マネジメント	8	2	1	4	1
ミリオンコンサート協会	4	1	1	0	2
コジマ・コンサートマネジメント	2	1	0	1	0

ジャパン・アーツが二大音楽事務所とされてきたが、オーケストラへのピアニスト派遣数は、ジャパン・アーツが大きく上回った。横山幸雄・上原彩子・仲道郁代、そして故・中村紘子を中心とする著名コンクール覇者・入賞者も多いが、事務所内で最も招聘回数の多かった金子三勇士や牛田智大など、若手で人気のあるアーティストも抱えている。所属18名がオーケストラと共演し、そのうちの10名は8回以上の招聘を受けるなど、非常に売り込む力のある事務所であると言える。一方のKAJIMOTOは、関西の定期演奏会を除けばジャパン・アーツの半数未満の水準にとどまり、共演は8人、8回以上の招聘は萩原麻未・小菅優・小林愛実の若手女性3人のみである。3番手のAMATIでは、全体で最も多い招聘回数的小山実稚恵と、菊池洋子の2人で演奏機会の殆ど全てを占める。ピアニスト二枚看板で沢山の依頼を受ける体制は他の中堅事務所でも見られ、ヒラサ・オフィスはジャズ出身の小曾根真と児玉桃が、MIYAZAWA & Co. では清水和音と福間洗太郎がその役割を果たす。

このように音楽事務所に所属しなければ、オーケストラとの仕事はなかなか難しい。WFIMC入賞は所属への有力な条件であると言えるが、その基準は不明である。せっかく非常に厳しい競争を勝ち抜いても、コンクール出身でないピアニストも人気を博すメジャー市場では、活動にうまく反映させることができていないのが現状である。第3章のアンケート調査で、殆どの日本出身コンテスタントが音楽事務所の所属を志望していないのも、こうした実情を踏まえてのことであろう。また、自分の表現欲求を具現化したり、SNSなどで発信・宣伝したりすることも容易な時代となり、多くても年に数回のオーケストラ共演を考えなければ、所属の必要性もそれほど感じられないのかもしれない。

3. コンクール入賞の新聞報道

3-1. 入賞記事の掲載の仕組み

新聞・テレビによるコンクール入賞報道の多寡で、入賞者に対するその後の注目は大きく変わってくる。第2章で判明した通り、21世紀においてWFIMC加盟・準WFIMCコンクール入賞者の6割以上は、他WFIMC加盟・準WFIMCコンクールの入賞者であり、コンクール同士の水準はかなり拮抗しているにもかかわらず、日本の新聞に取り上げられるものは未だに限定されており、その基準もよくわからない。WFIMC入賞者の4人にもお話を伺った。

18. WFIMCコンクールのレベル差は年々拮抗しているように思われるのに、メディアのコンクールの取り上げ方はコンクール毎の差が大きすぎるように思われます。どのような取り組みが必要だと思いますか。

モンザ（リナ・サラ・ガッロ国際ピアノコンクール）の方が明らかに大きなコンクールなのに、ブラームス（国際での優勝）の方が取り上げられている。テレビにでも出てほしいし、ちょっと変な感じでした。もちろん初めてラウンドのある大きなコンクールで1位を獲れたという嬉しさはあったけど、そのあとの報道で、しばらく音沙汰なかった子からも「すごい優勝をしたんだね」という連絡をもらって。もちろん嬉しいんです。でも、なんか空回りしているような気分になって。今言ったようにモンザなんかは全然誰も知らないし。もちろんそっちは3位だったというのものもあるけど、他にももっと大きなコンクールを獲っても全然報道されていない人っているのもいますよね。（木下敦子さん、2018年8月3日）

マリア・カナルスの時は、1位だった佐藤彦大さんが多分事務所に入ってらっしゃるのかな。その関係で毎日系の新聞とインターネットニュースは載ってたんですよ。佐藤さんを取り上げて、2位も日本人なのね、ついでにこの子も載せといてあげようみたいな感じで（笑）載ったんですけど。そうじゃないと、知り合いの知り合いの知り合いくらいまでに、何かしらのコネクションか、もしくは事務所に所属しているとか、そういうのじゃないとなかなか（難しい）。

あと日本で今活躍してる人たちの獲ったコンクールだと後も追ってもらいやすいんでしょうね。ミュンヘンとかも何かあったら新聞載りますよね。音楽の当事者でない人たちにとって、コンクールのレベルの判断基準として前例があるかないかを見てしまうっていうのは、理解はできます。

私たちは、このコンクールのレベルが高いとか知っているけれど、全日本国民から見ると、ショパコンすらイマイチよく知らないという人も結構いると思うし、エリザベートとかチャイコフスキーとかでもガクッと数が減ると思うし。やっぱり、でも作曲家の名前のついてるコンクールの方が馴染みやすいというか、みんなすごいかなって思いやすいんでしょうね。きっと。（桑原志織さん、2018年8月4日）

(取り上げられ方の差は)大きいよね。各雑誌にさ、アーリンク明美さんのように、コンクールを見に行き、レポートしてくれるような人とかがいればいいんじゃないの。特定のコンクールだけに集中しているんじゃないで。そういうのを専門にしている雑誌とかがあればいいね。何人かでコンクール行きまくって、レポート載せる。あと音楽家が聴かなきゃダメだよ。大手でやれないかな。ここで我々二人で喋ってるだけじゃなくって、多くの人に賛同してもらわないとね。(佐藤彦大さん、2018年8月4日)

有名なコンクール、有名じゃないコンクールというのが出て来ちゃっているし、もうちょっと情報を広げた方がいいのかな。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

木下氏は自身の経験から、WFIMC加盟でないブラームス国際音楽コンクールが、日本で大きく取り上げられていることへの疑問を率直に語っている。近年このコンクールは、毎年のように日本人が入賞・優勝を果たしており、筆者も実際、NHKの報道で目にしたことがある。基準が曖昧であることの象徴と言えるが、今まで報道されているものに、このコンクールのレベルは?と問いかけるより、難しいコンクールで入賞したにもかかわらず、報道されない事例を無くしていくことが建設的であろう。桑原氏は、マリア・カナルス入賞時に報道されたのは、1位の佐藤氏が事務所に所属していたからと推察している。確かに、コンクール入賞が新聞記事になるときに、「所属事務所によると」、「所属している〇〇によると」等の枕詞が散見される。報道には瑕疵があってはならないため、社会的信用がある団体が情報源であることや、既に活動実績がある人物でないと報ずるに踏み切れない側面はあるであろう。また、一般国民がコンクールのことを良く知らないと言う指摘は、これまで筆者が論じてきた通りである。繰り返しになるが、我々音楽家自身の手でコンクールの存在や内容をもっとアピールし、広報していかなければならない。佐藤氏も同調し、音楽家がコンクールを観察し、レポートを何らかの媒体で発表することを提案している。さすがに日本から開催期間中に訪れることは、予算が難しいかもしれないが、各地で協力者ネットワークを作れば、実現不可能な話ではない。

では実際の新聞報道は、どのような判断で行われているのか。本来知る由もないことであるが、ありがたいことに神戸新聞社文化部の松本寿美子記者にご協力を頂けることになり、貴重なお話を伺うことができた。まずはメールで、コンクール入賞への紙面掲載基準の有無について尋ねた。

新聞掲載の明確な基準、正直ないんですよ。ニュース価値はその日その日のほかの記事量によっても変わり、相対的なんです。あと記者個人の興味の程度や入賞

者への思い入れの深さにもよるかなと。(松本記者、2018年7月17日)

記事掲載の基準は、記者の裁量と紙面の都合により決められるようである。つまり、地震や台風などの天災があればそのような大ニュースが優先され、必然的に文化記事は小さな扱いになるか割愛される。

続いて、掲載までの仕組みについて教えていただいた。尚、以降の松本記者のコメントは、全て2018年7月31日に神戸市の神戸新聞本社文化部で行った非構造化インタビューを、筆者が文字起こしし、まとめたものである。

文化部はニュース面を作っていないんですね。何月何日何々があったというニュース面を作る部署じゃなくて、フューチャー面と言って日付がないページを作っている部署なんです。だから、ニュースを出そうと思ったら報道面の担当デスクを通さないといけない。でだいたい、報道部のデスクというのは警察畑とか行政畑とかでバリバリとやってきた人が多いので、こちらが言ったまま扱ってくれる場合もあれば、そんなに重視されずに過小評価される場合もありますね。(松本記者、2018年7月31日)

アーティストのインタビューや文化イベントの紹介といった内容は、特定の日に必ず掲載しなければならないことは少ない。しかし、コンクール入賞は速報性が求められるニュースであり、担当デスクに掲載の可否を判断してもらわなければならないという。たとえ現場が価値ある入賞と判断しても、決定権を握る側がどのように考えるかが重要となる。問題は、後者に専門的な知識がない場合も多いことである。

次に、紙面中の扱いの差については、以下のような基準があるという。

一番バリューがあつたらもちろん一面に来るんですけど、その次にニュース性が高いので言うと、第1社会面、第2社会面という順番になっているんですね。で社会面、うちは第4まであるんですけど、なかなか第1社会面、第2社会面となるとハードルが高いんですね。全国のニュースがここに集まって来るので、第4社会面となると比較的こちらからプッシュすれば、載せてもらいやすいページということですね。各紙とも同じような構成で、社会面は第3までのところもあります。(松本記者、2018年7月31日)

一面が最も優先度の高いニュースというのはわかりやすいが、我々が誤解しがちなのは、社会面に載る記事の価値が、記事の大きさよりも社会面のランクで決まっていることで、段のないベタ記事であっても第1社会面に載る方が、段付きで第3社会面に載るよりも重視されていることになる。

更に、コンクール入賞の記事作成に必要な情報についてお話を伺った。

記事の素材で必要なことというのが、ご自身の今の時点での正確な年齢とか、コンクールであればいつからいつまで、どこで開かれたコンクールであるのか、あとご自身のプロフィールですね。毎年開かれているものなのか、何年かにいっぺんのものなのか。大まかな位置付けてどんなものなののでしょうか、ということも。

次の日の朝刊に入れようと思ったら、(午後)6時ごろまでには情報が必要ですね。出稿段階で、どれだけの情報が集まるかが大事です。写真がついてくるかとか、コメントがあるのかないのか、それで大分変わりますね。素材はあればあるほどありがたい。他のニュースとの兼ね合いで削ぎ落としていくことはあっても、最初にあるだけある方がいいんです。(2018年7月31日、松本記者)

この回答は、全てのコンテストが心得ておくべきものである。ファイナル進出時点であらかじめこれらの情報を準備し、順位確定後にすぐ伝達できれば、新聞で扱ってもらえるチャンスが増え、結果的に仕事に繋がる。教育機関でも指導されることが望ましい。

次に、実際に掲載された記事について、具体的な事例を交えて解説していただいた。誰のどの入賞かについては伏せるが、以下に内容を記す。

事例1について：(当該記事の情報)ご自身で送って来てくださったんです。海外の現地から。私も(そのコンクールのことは)聞いたことがなかったのですが、うち(新聞社)にとっても、アピールしてくれる人、とりあえず言ってもらえるとありがたい。最後一言、鍵中に入れる最後のコメントが欲しいという、時差があるにもかかわらず反応がすぐにあったので、やっぱりこう出稿がどれだけスムーズにいくか、素材がどれだけ記事の体裁を保つのに集まるか(が大事)。

事例2について：この時には過去の受賞者の日本人を見たんです。(当該コンクールは)今も活躍されている方を輩出されているので、この人が出ているのか!と。審査員も見るとは、既に年配の方が多いので、よくわからないということが多いんです。それよりは今現役で活躍されている、おっ!という方が過去の入賞者におられたら、それなりに扱った方がいいのかな、となるわけです。結構プッシュしますね。それは大きいです。国際連盟に加盟しているかというのも見ますが、審査員はわかりません。外国の人を一から検索することになりますし。

事例3について：通信社が扱うか扱わないかという話も大きいですね。この記事は日本の音楽事務所によると、とあるので東京発信ですが、通信の外信の記事というのは紙面を作る上の整理部が扱います。過去に取材したことのある子だったら、さらに食いつきも良くなって、それなりの扱いで送って下さいということになると思うんですね。(いずれも2018年7月31日、松本記者)

事例1は、自己アピールが記事掲載に繋がった好例である。もちろん何でもかんでもとは

いかないが、権威ある難しいもの、それこそ WFIMC 加盟コンクールの上位入賞であれば、必要情報を用意し、記者とのやりとりが円滑に進めば、記事になる可能性は大いにあることが窺える。より多くのコンクールが認知され、結果発表後に自然と報道されることが理想ではあるが、現状は演奏家自身の売り込みも、大変重要であることがわかる。

事例 2 は、そのコンクールの過去の入賞者が、価値判断を大きく左右するファクターであることを示唆している。このことは、現代の新入賞者の信頼性を高めることに貢献する反面、日本人入賞実績が少ないコンクールで成果を出した場合の希少性や、年々変わりゆく実情をうまく反映できないリスクを伴う。そのコンクールが昔ほど絶対的な水準を維持していなくても、出身ピアニストが日本市場で活躍していれば、報道のウェイトは大きくなり、難易度が高くても新興のものであれば、小さくなってしまうことになる。この問題を解消するためには、商業的な利害関係のない団体ないし個人が、コンクール毎の特質や現状を発信し続ける必要がある。また審査員の権威によってコンクールの価値を高める試みは、日本のメディアにはあまり通用しないようである。

事例 3 の背景を説明すると、特に地方紙では、共同通信や時事通信が作成した記事を使用し、紙面を占める割合が多い。お話を伺った神戸新聞は、「自社記事を活用しよう（2018 年 7 月 31 日、松本記者）」という風潮が強く、筆者も購読する中で独自記事の多さに驚くが、やはり通信社のものも活用している。全国紙でも毎日や日経は、積極的に提携しているようである。配信された記事は、紙面を整理する部門において掲載の可否が判断されるため、同じ内容でも新聞各社によって対応が分かれることになる。加えて、記者が元々入賞者の存在を知っているかどうかも大きな要素である。機械的に情報が収集され、記事や紙面が作り上げられる訳ではなく、その一つ一つに記者の思いが込められているのである。

また地方紙は、「地元ゆかりの子のネタを大きく扱う（2018 年 7 月 31 日、松本記者）」傾向がある。神戸新聞では、兵庫県たつの市出身の作曲家、薮田翔一のジュネーヴ国際音楽コンクール優勝（2015 年）を、一面、第 1 社会面、そして地方面に掲載し、違った切り口から（例えば地方面では、住民の歓喜の声を紹介するなど）大きく扱ったという。

このようにコンクール入賞が実際に記事になるには様々な条件や因子があるが、やはり現場では、どれをどのように取り上げるべきか、判断に苦慮しているようである。

例えば考古学の古物（ふるもの）で、出てきたものの価値がわからない時ってありますよね。あとは科学的な話題の時とか・・・めっちゃ詳しいスペシャリストがその会社にいれば別だけれど、みんなその知識がよくわからない時には、わからん

3 段・決意の 4 段と言っていたんですね。他紙がどれくらいの扱いでいくのかわからん時には 3 段（記事）で扱っておこうと。他紙が仮に一面でも、うちもそれなりの扱いになっていますと。もし他紙がベタ記事だったとしても、そんなにニュースの価値判断としては違わないので恥ずかしい思いをしないで済むと。でも 4 段いくということは、会社としてこのニュースはそれなりの価値があるんですという意味表示なんですね。だからわからん 3 段、決意の 4 段という言葉があるんです。

なかなかスペシャリストがいないと、価値判断は難しいんです。あんまり他紙と離れていても恥ずかしい。共通で会見が開かれた時に、こんなものが出ましたみたいな、その時はみんな明日どれくらいの扱いでいくのかな、となるわけです。

もうちょっと判断基準があればありがたいですね。ある程度その日のニュース量に左右されるとはいえ、なんか一定の基準が欲しいですね。現状は日本人の入賞がパーンと出てきて話題になると、途端にその後の価値判断が上がると。（そこに）すごく左右されますよね。（2018 年 7 月 31 日、松本記者）

こうして見ると我々音楽家は、コンクールから利益を享受することだけに集中し、その評価を顕揚することには、あまりにも努力してこなかったのではないか。一般に浸透を図るためには、イベントの成功を目的とする運営側の宣伝だけでは不十分であり、後進ピアニストのためにも、入賞者自身が出身コンクールにより注目が集まるよう、尽力すべきである。楽壇で活躍する入賞者には社会的ステイタスがあり、彼らがアピールすれば耳目を引くことができるに違いない。またコンクールを学術的に論じ、WFIMC 加盟コンクールについて過去と現在それぞれを把握する基準となる資料を作成することも、マスメディアが入賞をより大きく扱うきっかけとなるかもしれない。

筆者も含め演奏家自身が、既存のメディアや市場の原理にただ身をまかせるのではなく、客観的な論証を行いながら、成し遂げてきた実績について確固たる価値あるものと発信することが肝要である。

3-2. 全国紙の掲載基準

最後に、いわゆる全国五大紙は、コンクール入賞をどのように扱い、報道しているのか調査するために、下表の 5 社 5 部門に照会した。

読売新聞社：広報宣伝部
朝日新聞社：広報部
毎日新聞社：学芸部
日本経済新聞社：文化グループ
産経新聞社：文化部

このうち日本経済新聞社からは、広報室より「編集に関わる部分でお答えしていない」とのご回答をいただいた。また毎日新聞社には担当者に伝言を残したが、期日までにご連絡をいただけなかった。

問い合わせに際し、記者が独自に編集方針について話すことが禁じられているため、広報部門と調整して頂いた社もあった。困難な中ご検討・ご協力して下さいました皆さまに、改めて御礼と感謝を申し上げたい。

質問事項は、松本記者へのインタビューと考察に基づいて、以下の五問に絞った。

1. 国際コンクール入賞が新聞に掲載される際、明確な基準はございますか？
2. ではどのような入賞が記事になりますか？
3. 例えば所属音楽事務所や教育機関からの情報と、個人からの情報と比べてその出どころは大切ですか？
4. 過去の入賞者にどのような演奏家がいるのかという情報は重要ですか？
5. もしそれぞれの国際コンクールがどのような特色やレベルでということがわかる資料があれば、今後の報道に参考になりますか？

ご回答頂いた三社のうち、産経新聞社は電話インタビュー形式でお話を伺い、読売新聞社は質問事項を FAX でお送りした後に、後日、電話でのご返答を頂戴した。朝日新聞社は、質問・回答とも FAX でやり取りをさせて頂いた。音声のご回答については、筆者が録音から書き起こし、まとめたものを、FAX でのご回答は頂いた原文のまま記載する。

まずは、入賞基準について尋ねた二問である。

1. 国際コンクール入賞が新聞に掲載される際、明確な基準はございますか？
2. ではどのような入賞が記事になりますか？

読売新聞社 広報宣伝部：

うちの方としましては、担当部の方に確認したんですけれども、明確な基準の明確な部分で言うと、ないんですね。ある程度のことという表現で言いますとあるんです。国際コンクールでは、いわゆる世界三大とかですね、その他のものも含めまして沢山あると思うんですけれども、それを担当部の方でリストアップしておりまして、紙面の状況もあるかと思っておりますけれども、内容によって報じるという形になっているんですね。

なので、過去の分も見たんですけれども、崎谷さん（筆者註：筆者のこと）の例えばブゾーニ国際ピアノコンクールとかですね、スペインのハエン賞国際ピアノコンクールとか、ああいったものもご紹介記事の中に載っていたかと思うんですけれども、賞そのものを取り上げることもありますし、話題の人みたいな感じで、その

方と一緒にその経歴、という形で取り上げるときもあります。その都度その都度という感じになります。(2018年9月12日)

朝日新聞社 広報部：

(問1. について) 記事掲載の目安は設けていますが、流動的なものです。

個々のコンクールに対する評価の変化や、社会情勢や話題性、他の重大ニュースの有無などその時々状況によって、掲載するかどうかは変わってきます。

(問2. について) クラシック音楽の国際コンクールでは、現在のところ、エリザベート王妃国際コンクール、ジュネーブ・コンクール、ショパン・コンクール、チャイコフスキー・コンクール、ブザンソン国際指揮者コンクール、ミュンヘン・コンクール、ロン・ティボー・コンクールなどで日本国籍を持つ人あるいは日本出身者が受賞すれば、報じることが多いです。(2018年9月20日)

産経新聞社 文化部編集委員 音楽担当：

あのね、明確なのはないんですけど、いい加減な答えで申し訳ないんですけどね、毎年紹介しているもんってやっぱりあるんですよ。過去の事例を見て紹介することが多いですね。まあうちは関西で売れてるじゃないですか。なのでね、コンクール自体っていうよりもね、関西の人が上位で入賞したら紹介するという感じなんですよ。コンクール自体のバリューより、獲らした人のね、例えば変わった人が獲ったとかね。関西だと、うちの新聞が売れている地域の人が入賞したとか、演奏者のバリューの方が大きいですね。(2018年9月11日)

三社とも、過去の事例からある程度の掲載基準は作られているものの、コンクールそのものの価値よりも、入賞者の話題性を重要視する傾向にある。新聞は読者がいて成り立つものであるから、その需要に応えることは当然であろう。ただ先述の通り、情報蓄積による価値判断には長短所両面があり、挙げられているコンクールを見ても、運営や入賞者によって20世紀に作られてきた評判に拠るところが大きい。朝日新聞社の回答が云う「個々のコンクールに対する評価の変化」を素早く広めるために、21世紀の拮抗するWFIMC加盟コンクールの状況を、実践者発信で伝達することには大きな意義がありそうである。

次は、情報源の信頼性についての質問である。

3. 例えば所属音楽事務所や教育機関からの情報と、個人からの情報と比べてその出どころは大切ですか？

読売新聞社 広報宣伝部：

別に比較ということじゃないんですけども、報道機関として正確性を期すという部分においてですね、やっぱり個人からであっても音楽事務所からであっても、主催団体とか機関とかに確認をするという作業は、必ずすると思います。例えばどこかの役所の人が、何か忘れたんですけど、優勝したんですけど記者クラブで発表し

て嘘だった⁴³。そういったこともありますので、うちに限らずダブルチェックという形で確認すると思うんです、恐らく。なので、出どころは大切というか、情報があればですね、複数のソースから確認を取ることです。(2018年9月12日)

朝日新聞社 広報部：

掲載にあたっては、主催者から直接、情報を得る必要があります。

コンクールの開催情報を、あらかじめ所属音楽事務所や教育機関、個人の方からいただくことはあります。しかし、事前情報の出どころにかかわらず、結果の掲載にあたっては、記者が主催者に取材するか、通信社から情報提供を受けるかします。

(2018年9月20日)

産経新聞社 文化部編集委員 音楽担当：

例えばね、音楽に限らずバレエなんかでもね、割と過去にいっぱい入賞者を出してはるバレエ団体とかあるじゃないですか。そういうところにね、実は事前に取材するんですよ。「もし獲らったら連絡ください」言うて。有力な賞ってチラッと聞いたら、その人が昔習ってはった音楽教室ってあるじゃないですか。そういうところに、「獲らったら連絡頂けたら」みたいだね。そういうところで一次情報もらうことが多いですね。

僕らも出どころについてははっきり言えばね、困ってるんです。行政みたいに、なんかあった時に言うてくれる組織がないのでね、基本。だから一括して言うてくれるところがあったら、一番便利なんですよ。(2018年9月11日)

これらの回答から見ると、新聞社がコンクール情報を得るために最も信頼しているのは、コンクールの主催者である。受賞の連絡があっても、真偽や内容のチェックなしに報じることとはできない。しかし時差や言葉の壁もあって、確認がスムーズに進まないことも想定される。入賞者自身も、運営者に日本の通信社や大使館・領事館への連絡をお願いするなど、積極的に働きかけるのも有効かもしれない。また有識者を集めて、コンクールの評価・結果速報を行う非営利の団体を設立することも視野に入れるべきである。

では、過去の入賞者の活動実績はどのような影響があるのであろうか。

4. 過去の入賞者にどのような演奏家がいるのかという情報は重要ですか？

読売新聞社 広報宣伝部：

新聞というのは、広く色んな方の読者がおられるので、ピアノのことでもそんなに知識のない方もおられますし、例えば広くテレビにこう出ておられるとかですね、そういう名が割に知られた方が過去に入賞していた場合にはですね、その賞を紹介するという意味において、過去にこういう方がいたということを書くと、記事としては普遍性が増すと言うかですね、そういうところはあると思いますので、それは

⁴³ 恐らく市役所勤務の臨時職員の男性がゲーム大会で優勝したと虚偽申告し、2016年9月26日に役所内で記念会見を開いた件と思われる。以下は HUFFPOST 吉野太郎の署名記事。群馬の男性、国際ゲーム大会優勝は嘘だった...朝日新聞・上毛新聞が記事削除しおわび https://www.huffingtonpost.jp/2016/09/28/air-victory_n_12228812.html, accessed on 19 October, 2018.

多分調べると思いますね。(2018年9月12日)

朝日新聞社 広報部：

受賞者のその後の活躍は、コンクールの評価にかかわる要素と考えています。
(2018年9月20日)

産経新聞社 文化部編集委員 音楽担当：

それもありますね。以前日本人が活躍したコンクールでまた日本人が獲りましたと言ったら扱いは大きくなると思いますね。ノーベル賞なんかと一緒に、世界に活躍する日本人っていうノリは日本のメディアは大好きなわけですよ。

ぼくね、特派員をやったんです、昔。海外から見た日本の報道みたいなもの、どういう特徴があるんでしょうかってね。ノーベル賞もまたそうなんですけど、扱いの見たら、日本人、海外で活躍しているっていう風な原稿になりそうでしたら、大きくなりますね。だから、繰り返しになるんですけど、コンクール自体のバリューより、入賞しはった人がどうであるかということに価値を置いて、「そういう人が獲っているコンクール」みたいに。皆さんの視点と逆なんですよね。(2018年9月12日)

これらの回答も、コンクール報道における先例主義的傾向を裏付けるものである。入賞コンクールの評価は、受賞者の活躍次第で遡及的に高まりも低まりもするため、楽壇に貢献してきた先人からのバトンを繋ぐ意味でも、我々若手入賞者の今後の頑張りが重要と言える。

最後は、コンクールの現状についてまとめられた資料が作成された場合に、新聞各紙にとって有用かどうか尋ねた。

- | |
|---|
| 5. もしそれぞれの国際コンクールがどのような特色やレベルでということがわかる資料があれば、今後の報道に参考になりますか？ |
|---|

読売新聞社 広報宣伝部：

おそらく参考にはなると思うんです、こう言う資料は。ただそれぞれの担当部で、日頃からの取材やある一定のデータは蓄積されていると思います。それ以外の部分でプラスαの資料は、役に立つと言うことにはなると思います。(2018年9月12日)

朝日新聞社 広報部：

情報は参考にさせていただきます。(2018年9月20日)

産経新聞社 文化部編集委員 音楽担当：

そう言う資料があればね、それはぼくらにとっては、各社そうやと思うんですけど、どっかから綺麗に出して頂けたら一番いいですね。それ使わせて頂くんで。そういう組織とかね、団体があつたらええなあとはやっぱり思ってます。

どこにどう聞いてええかってやっぱり苦慮するんでね。大きいコンクール、誰が有力なんやということも、どこ聞いてええかもわからへんからね。そういうところは苦労していると思います、各社。いろんなところに網張ってね。だから多分皆さん、色々疑問に思っはると思うんですけど。案外いい加減なんですよ(笑)。もの

すごい良く知ってる人間なんていないんですよ、基本的にはね。ぶっちゃけ、裏側をいうとそんな感じです。(2018年9月11日)

この質問は、情報のプロフェッショナルである新聞社の方々に失礼かもしれないと、内心はドキドキであった。彼らに経験と確かなノウハウに基づく長年の集積があるのは、コンクール報道に関しても例外ではないからである。しかし三社共、前向きなご回答をいただき、とても驚いた。やはり、コンクールに一番身近な存在のピアニスト自身の手で現況を評価し、発信できるシステムを構築するべきである。そしてそれは、見識ある複数の専門家が運営し、一定期間正しく運用することで、信頼を積み重ねなければならない。

朝日新聞から頂いた回答 FAX の末尾には、

なお、何を取材し報道するかというニュースの取捨選択の基準が固定的に存在するわけではなく、時代の動きやその時々の人々の興味関心、記者の問題意識によって変わっていくことがあります。(2018年9月20日)

という文言が添えられていた。メディアが世の中を大きく動かす力があることは紛れもない事実であるが、メディア側も世の中を敏感に窺い、動かされているのである。その影響をただ甘受するのではなく、音楽家自身が行動を起こし、より目を向けてもらえるよう、相互作用を目指す努力をしなければならない。

4. 周辺環境に関する入賞者の思い

この章の最後は、日本の音楽市場やコンクール入賞の扱われ方について、WFIMC 入賞者 4 人に見解を伺ったインタビューで締めくくりたい。質問と回答は以下の通り。

19. 日本市場においてもコンクール入賞を直結させて活動することは難しいですが、コンクール入賞が有用に業界を盛り上げるために使われるために、ピアニスト側 (指導者も含む) ができるアイデアがありますか。また、その他、コンクールをより活かすためにどのようなことが必要だと思いますか、自由にお話してください。

日本の音楽業界、コンサートもそんなによくわからないんですけど、ただ何となくイメージがあるのは、日本で演奏会をすとなったらやっぱり場所借りるのにすごいお金がかかって、そのお金を還元するためには入場料も高く設定しないとイケない。3000 円とか最低でももらわないとイケない。そういう相場みたいなものが、結果的にクラシック音楽の敷居を未だにあげてしまっている。で、よく友達とか知り合いが日本で演奏会をやってるのを Facebook で見ると、何とか一般のお客さん、音楽家じゃない人にも興味を持ってもらうようにと、誰でも聴いたことのある有名な曲のクラシック音楽を聴きにいきましょうとか。それはそれで、すごくいい働き

かけだと思うんですけど、じゃあなんで私たちはこんなに頑張ってるの？って思ってるのかなって思うのと、例えば、ベートーヴェンの（op.）111とかも私は演奏会で弾きたいと思うけど、それを出してどれくらいの一般の人が興味を持ってくれるのかというのがやっぱり難しいところで。

日本の文化じゃないからと言うけれど、日本の雅楽とか邦楽のコンサートも、私は少なくともあんまり行ったことがなくて、歌舞伎とかは敷居が高い。だいたいそういうコンサートとかってふらっと立ち寄れる感じじゃないなってイメージがあって、やっぱりチラシとかもすごく手の込んだものを作って、なんとか印象に残せるようにというか。箱代がすごいとかかかるとかいうのも、あたしたちが変えられるところじゃないじゃないですか。全体的な値段というか、価値観というか。気軽にもっと普通の人が聴きに来れる演奏会が沢山できたら、広がるのかなと思うけど。演奏を提供しているのに、自分たちがさらにお金を払って演奏しているという理不尽もありますね。（木下敦子さん、2018年8月3日）

こんだけコンクールが増えちゃって、名も知らないようなコンクールでも1位って書いてあるのが、なんか凄いなって調べてみると、マスタークラスの延長みたいなものとか。そっちで1位をとって、もっと（レベルの）高いコンクールで2位・3位とかだと、一般の人には1位の方が凄く見えちゃうっていうのがあるじゃないですか。

なかなか難しいですよ。私たちだって音楽業界のことはわかるけど、スポーツ業界のことはオリンピック以外全然わからないし。多くの人にちゃんと理解してもらおうのは本当に難しいと思うけれど、そこにランキングじゃないけど、ちょっと調べたら出てくるようなものがあったら、一定の目安のようにはなるかもな、と。なかなか普通の人は英語のサイトとか見ないですしね。（桑原志織さん、2018年8月4日）

そりゃ、いい演奏をして、それが評判になって広まっていくしかないでしょ。弾くことしかないんだから。デモCDを作るとか、ホールに送ってね。ただ聴衆に媚を売るとはよくないよね。例えば（恩師のエリソ・）ヴィルサラーゼがよく言うのは、演奏で人の生き様とかまで表現できるピアニストが最近少ないって。その人柄とかが出てくるようになれば、魅力的になって大スターのようになれるかもしれないね。共感できる、っていう意味でね。ただやりたくはないけど、ピアノ以外のところで営業するというのは必要で、今の時代でも求められているよね。YouTuberと対談したり、ミュージカルの人と共演したり。コンクールでも、セルフプレゼンテーションが求められているのもあって、面白いんじゃない。自分をどうやって売り出しているのかっていうのを見てるんじゃないかな。（佐藤彦大さん、2018年8月4日）

（コンクールを獲った人はその苦労や努力の割に、報いられてないのでは？という問いかけに）ピアニスト側が変化するというのは難しいかもしれないけど、周りがサポートしていかないと変わらないんじゃないかな。入賞しなくても（世に）出てくる人っていうのは周りが推してるから。入賞した人を盛り上げるためには、そ

つちを盛り上げようとしてくれる人がいないと、本人1人じゃどうしようもない。売れる人を売った方がもちろんお金にはなるし、そういう風になっちゃうのかもしれないけれど。(須藤梨菜さん、2018年8月6日)

ドイツ在住の木下氏は、聴く方も開催する方も費用がかかり過ぎるため、日本での演奏活動は行い辛いと訴える。また聴衆の多くは、本格的な作品への興味が薄い上、そのような価値観は演奏家の努力では変え難いと指摘している。確かに歴史的に重要である長大な作品や難曲を学習し、コンクールで良い成果を収めたとしても、聴いてくれる人がいなければ何の意味もない。企画する側の工夫も、ビジュアルの良い人を起用する、耳なじみの良いプログラムやトークを取り入れるなど涙ぐましいが、クラシック音楽を本質的に理解し、楽しむ聴衆の獲得には至らない。コンクール云々以前に、まず市場に優秀な若手が受け入れられ易い土壌を作ることが先決である。桑原氏のコメントは、コンクールの難易度や特色の理解が一般にも伝わらないと、真に実力のあるピアニストが不当な評価を受ける可能性があることを示唆している。本論文で一貫して主張してきた通り、音楽家自身の手で入賞の価値について、よりわかりやすく普遍的に定着させることが求められている。佐藤氏は、演奏には哲学が必要であり、聴衆に媚びる必要はないが、時代のニーズに合わせて営業活動や他分野との交流をクラシック音楽家も積極的に行うべきであると述べる。須藤氏は、世に出るために奏者ができることは少ないため、業界が人気よりも演奏の実力を大切にする体制にならないと、入賞者が注目不足に陥る問題は解決しようがないと訴えている。ただご本人もおっしゃっている通り、商業的な利害を考えれば難しい話でもある。

このように現代の若手ピアニストは、ただメジャーコンクールに入賞して演奏の実力を磨き続けるだけでは、評価されないことが多い。しかしコンクールが、依然として様々な形で音楽業界に影響力を持つツールであることに変わりはない。第5章では、これまで論じてきた指摘と課題をまとめた上で、リソースをより有効に活用するための方法について、いくつかの提言を行いたい。

第5章：研究結果からの提言

これまでコンクール参加・入賞そしてその後のキャリアや周辺環境について多角的に調査・分析してきた中で、日本における大きな課題が浮き彫りとなった。WFIMC 加盟コンクールでの日本人入賞者の減少と、周辺環境にコンクール入賞に対する理解が深まっていないことの二点である。この章では、その原因を整理するとともに、具体的な解決策を考察し、提言としてまとめるものとする。

1. WFIMC 加盟コンクールでの日本人入賞者減少を食い止めるために

1-1. 概要と要因

日本出身コンテストは、伝統的に WFIMC 加盟コンクールにて優秀な成績を収めてきており、それは現在でも変わらない。ただ、入賞者は 2009 年を境に減少し、入賞占有率は 2001-10 年（11.60%）と 2011-17 年（6.90%）との比較で大きく下落している。また一人で複数の WFIMC 加盟コンクールに入賞を果たすような人材も少なくなっている。

とりわけ退潮が見られるのは、女性の入賞である。日本人入賞者は女性の割合が高いことが特徴で、単純な入賞数では男性を上回っているが、日本人女性の 1 年あたりの入賞数平均は、2001-10 年は年 7.2 タイトルであったのに対し、2011-17 年は年 3 タイトルと半減以下の水準にまで落ち込んでいる。男性が 5.2 タイトルから 4.1 タイトルであるのに比べても減少幅は非常に大きいと言える。入賞者の学歴では、東京藝術大学と並んで入賞者を多数輩出してきた桐朋学園大学出身者や、日本の大学を経ずに高校卒業後に直接海外留学した者が、11 年以降激減している。

入賞占有率が減少した直接的な要因としては、WFIMC 加盟コンクールの中で最も日本人入賞者が多いものの 1 つ、ポルト市国際ピアノコンクールが 2010 年に廃止されたことや、日本人審査員の招聘数減少が挙げられる。後者についての調査では、日本人が審査に加わる場合、日本人入賞の確率は上がることが判明したが、日本人コンテストを強く後押しする審査員も少なくなっている。

外的な原因には、やはり韓国の台頭が考えられる。韓国の入賞占有率が 2001-10 年（9.94%）と 2010-17 年（17.01%）を比較して 1.71 倍の大幅増にもかかわらず、東アジア地域では 29.29%から 31.84%のわずかな伸び（1.09 倍）にとどまる。東アジア中の内訳が大きく変化

した形で、相対的に日本人ピアニストが評価されにくい環境になったと言える。以上が第2章のデータ分析に基づいた現況となる。

第3章で判明した日本出身コンテストの特質からも、入賞数減少の原因となり得るものがいくつか挙げられる。彼らの多くが自己研鑽の延長線上でコンクール受験を捉えており、勝つことを目標に、あるいは将来のキャリアの成功を目指して挑戦するという考え方は少数派であること、難しいコンクールでの入賞実績が必ずしも活躍に繋がるとは限らず、メジャーな音楽事務所に所属して演奏活動に専念するキャリアを希望するコンテストが非常に少ないことなどである。

また各コンクールがどのような特色を持つのかという知識に加え、持ち曲の活用等、入賞に有利になると思われる戦術面でのテクニックが広く浸透していないことや、音楽大学で国際コンクールについての情報を得たり、関連する授業を受けたりする制度が整っていないことなど、教育面での課題も顕在化した。

もちろん日本出身の入賞者が数多く誕生しても、日本の文化・芸術のレベルを高めることに直接繋がるとは限らない。ただ、世界的に見ても傑出した成果をあげ続けてきた国際コンクールで、このまま厳しい冬が続けば、ピアノ業界の次代を担う層が薄くなることは確実である。将来を考えて、この現状は打破しなければならない。

1-2. 提言

第一に、より長期的な計画でコンクール入賞への取り組みを行うことが重要である。日本では多くのピアノ学習者にとって、高校までと大学入学後とで学習内容の違いが大きすぎるのではないかと。

大学以前のピアノ専門教育においては、子供・学生向けのコンクールを受けるということが、毎年大きなイベントとなっているケースが多いであろう。しかし、第2章で示したように、ピティナ・ピアノコンペティションの D/E/F 級や全日本学生音楽コンクールといった、レベルが高い学生向けコンクール群のいずれかに、WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールの日本人入賞者が入賞している割合は、全体の 25.9%に過ぎず、将来の成功と因果関係にあることは少ない。つまり、この年代でのコンクール受験は、結果に一喜一憂せず、緊張にさらされることや、本番経験を積み重ねることに意義を見出すべきで、音楽専門職を目指す可能性のある才能を持った少年少女が、学生向けコンクールの入賞を目的化してピアノを

学習することは、全くもって理にかなわない。もちろんコンクール挑戦には、練習へのモチベーション向上など良い効用もあるが、汎用性の高い基礎的な技術力やソルフェージュ力を身につけることが後回しにならないよう、時間を賢く使うべきであると筆者は考える。

音楽大学に入学後は、曲数や難度を含め、求められるレベルが急激に高くなる上、教員が手取り足取り学生の面倒を見ることは難しい。基礎力のビルドアップに手間取ってはいない良い成果が出せず、また大学に入って一からやり直すのは非常に効率が悪い。

かたや近年目覚ましい飛躍を遂げる韓国では、第2章で引用したカン・チュンモのインタビューにあるように、希望する優秀な者に中学生頃から大学の予備科への入学が認められ、複数の大学教授陣が進度を詳細にチェックし、コンクール受験のタイミングやどの作品をどのように学習するか、生徒に応じた方針が合議で決められている。細かな手法の良し悪しはともかく、長期スパンで進歩に合った学習計画を立てられる利点は大きい。

下表は、2001-17年の間に、WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールにおける特別複数入賞者（1位を含む複数入賞を果たしている者、または、2位・3位を複数回受賞している者）が、各コンクールで受賞した時の年齢を日韓で比較したものである（生年でカウントし、

日韓の特別複数入賞者の受賞時年齢と割合

年齢(歳)	日本(数)	韓国(数)	日本(%)	韓国(%)
30以上	7	4	9.5%	3.2%
25-29	39	40	52.7%	32.3%
20-24	25	52	33.8%	41.9%
15-19	3	28	4.1%	22.6%

生年が判明していない者は除く)。日本は全体の62.2%が25歳以降の入賞に偏る一方、韓国は64.5%が24歳までの入賞で、年齢傾向の違いが顕著である。

また世界の男女別集計（第2章129頁下、130頁冒頭の各表参照）に広げて見ても、世界男性（特別複数入賞者）は23歳と24歳をピークに緩やかに減少していくのに対し、日本人のWFIMC男性入賞者（総入賞者）は、ピークが26-28歳と明らかにずれ込んでおり、10代の入賞も半数以下となる。女性も男性ほど極端ではないものの後ろの年齢に寄ることに変わりない。高年齢受賞の傾向は明らかで、韓国のデータと見比べても、原因の一部が高校までと大学とで分断される教育にあることは有力な説である。負担は大きくなるであろうが、やはり世界を知り、芸術活動に携わり続けているトップクラスの大学教員が、今よりも早い年齢から学習の主導権を握る必要があるのではないか。

無論入賞年齢が早ければ早いほど良い、あるいは遅ければ遅いほど悪いというものでは

ないが、より早い年齢で入賞することを目標に立てて取り組むことで、コンクールにもその他の学習にも余裕を持って臨む事ができるようになるメリットがある。コンクール挑戦に目処がつけば、20代後半の徐々に成熟する年齢では、自分の意思で芸術と向き合う時間も増えるに違いない。個人の進度を考慮しながら、大まかな目安として特別複数入賞者の入賞時年齢（世界統計）を参考に、男性は23歳前後、女性は25歳前後でのWFIMC加盟コンクール初入賞を目指し、逆算してそれまでに各種中堅国際コンクールへの参加・入賞や、コンクールレパトリーの充実など、準備を整えておくべきである。

また入賞者へのインタビューでも指摘があった通り、大学の単位制度も海外に長期間遠征しなければならない国際コンクール挑戦を難しくしており、このことも高年齢化の温床となっている。もちろん大学生が学習を本分にするという精神は大切にすべきで、全てのコンクールについて、のべつまくなしに公欠を認めるようなことは良くないが、例えば年間の上限日数を設定し、WFIMC加盟コンクールに代表される一部の難しいものに限って参加を認めるような制度が整備されれば、学部生もより積極的に挑戦を検討できるであろう。難関コンクールへの学生の出場は、学校の名声を高めることにも繋がる上、公欠の代わりに参加報告レポートの提出を義務付ければ教育的見地からも問題なく、後進の育成にも役立つのではないか。

第二に、コンクールに対する理解を深めることも肝要である。それは、どのような時期にどのようなコンクールを受けるべきであるのか、あるいはどのレパトリーを掌中に入れておくべきかといった中期的な計画と、参加にあたって具体的に想定されることは何で、どのように準備をするのが最も力を発揮できるのかという実践面に大別されよう。

後者については第3章のアンケート調査でも、入賞者と未入賞者との比較であまり違いの出なかったところで、WFIMC入賞者が必ず行っているメソッドなどは、本研究では発見できなかった。何よりもまずは自分をよく知ること、としか言いようがない。ただ練習の工夫や時間についての質問では、コンクール向けに様々なアイデアを取り入れることで、初級・中級の国際コンクールで入賞する水準には到達する可能性があるが、その上のWFIMC加盟コンクールで入賞を目指すためには、あえて工夫をしなくても曲を仕上げ切る技量が必要で、その技量を以って長時間のプログラムを練習するので、結果的に入賞歴が高くなるほど練習時間が長くなるという実情が垣間見えた。またインタビュー調査で挙げられたのは、予備選考申し込みのための音源録音においても、力を入れて準備し、本大会と同じつもりで演奏すべきということである。応募音源の作成については、殆どのコンテストがコンク

ールを受験する上で困難な点に挙げており、有望な者に対して大学や楽器会社からの積極的な支援が望まれる。

中期的計画には、第2章で判明したいくつかの結果を反映させることが可能である。世界トップレベルのコンテストが、難関コンクールを複数渡り歩いてキャリアを築くことは、2001-17年に開催されたWFIMC加盟・準WFIMCコンクール入賞者の65.0%が、他WFIMC・準WFIMCコンクールで入賞を果たしていることから明らかである。

そのような情勢の中、コンクール毎の積入賞者・既入賞者の割合の情報は、そのコンクールをキャリアの最初の方に受けるべきなのか、あるいは入賞を重ねてから受けるべきか、それともどちらでも良いのかという判断材料となり得る。また独自入賞者が多いコンクールでは、特定の作曲家や現代作品中心のより強い専門性が求められることや、ヴィルトゥオジティが排除された課題曲といった特殊な環境・価値観で評価されることが窺い知れる。

入賞者の国・地域別傾向も重要な情報で、参考にすべきであろう。しかし、現時点で日本人入賞が多いコンクールがこれからもそうであり続けるとは限らず、加えて、自分が典型的な日本人奏者の方向性やイメージと合致したピアニストなのか、ということも考慮に入れなければならない。筆者は、「良い意味でも悪い意味でも日本的でない」とパリ時代の恩師、ジャック・ルヴィエに言われ続けてきたが、事実、今回の研究で日本人入賞割合が比較的高く出たコンクールでは、全く成果を出すことができなかった。他にもシューマン国際ピアノ・声楽コンクールのように、日本人入賞者が多いが、内訳は女性が突出していることなど、勘案すべき材料はいくつもあり、情報を揃えた上で、総合的な判断が求められる。

次に、レパトリーについても述べておく。今回の調査では入賞ランクが上がるほど、持ち曲を持つ割合が高いことが判明している。特に協奏曲の持ち曲があると回答した割合は国際コンクール未入賞者層で極端に低く、WFIMC入賞者層とは大きく差が開いた。協奏曲を演奏するラウンドはファイナルが多いため（セミファイナルでも、古典派協奏曲が課される場合もある）、協奏曲を練習する負担が少なくなれば、自ずと予選のプログラムに時間をかけることができ、ファイナルに進出する可能性を高められる。要求されるピアノコンチェルトのレパトリーは、コンサートでもコンクールでもあまり変わらないため、最初は、あらかじめ汎用性の高い曲を数曲勉強しておけば良い。

これらのようなコンクールを受ける際に有益となる情報は、音楽大学などの教育機関で指導されるべきであると筆者は考える。現状は、学生自身が各々情報を集め、感覚的に選んだコンクールを、感覚的に指導者が追認するケースが殆どではないか。日本出身者は、学部

の卒業まで日本の大学に通う者が多く、その後留学して海外の国際コンクールを受けることを想定しても、日本の教育機関で予め知る環境が出来れば、強みになるはずである。演奏活動や実務に追われる音楽大学教員には、変化し続ける海外のコンクール状況を追う時間はない。したがって、大学内に情報を収集し、申し込みや受験に際して具体的な助言を与える部門を設置することや、学生に授業で学習してもらう体制を整えるといった方策が考えられる。

それに加えて、特別プレッシャーのかかる場面でより重要となる、本番に臨む際のメンタルについても、個人差がある問題とは言え、トレーニング方法などを学習する機会が持てるようになれば、理想的である。今回行ったアンケート調査の入賞歴別集計では、コンクールでより緊張すると回答した割合が、WFIMC入賞者層で最も高くなった。しかし、いつも通りに演奏できるという回答も、同層が最も高い割合を示す。勝者は緊張と上手く折り合いをつけて力を発揮することに長けており、そのための技術を学ぶことは、コンクールのみならず、将来の演奏活動にも役立つはずである。音楽や芸術そのものの学習・深化と同時に、実践への取り組みを意識してこそ、個人や全体の底上げが期待できる。

2. 周辺環境のコンクール入賞への理解を深めるために

2-1. 概要と要因

周辺環境がコンクール入賞の価値を正しく評価しているかどうかという問題は、実はコンクールという切り口から語るには難しい。先述の通り、WFIMC加盟・準WFIMCコンクールでは入賞者の65.0%が、他のWFIMC加盟・準WFIMCコンクールの入賞者であり、これらのコンクールではレベルが拮抗しているとも言えるにもかかわらず、日本において注目・報道されるものとされないものとの格差が大きいことは事実である。ただ、入賞への困難と努力が正当に報われないという表層的な事実よりも重要なのは、クラシック音楽業界における聴衆の獲得難が、根源的な元凶となっていることである。

入賞者へのインタビューにもあった通り、必死になって難関コンクールで入賞を果たしたとしても、いざピアニストとして演奏活動がスタートすると、まずどのように聴衆に会場してもらうのかという問題に直面する。ここで指すのは、コンクールエリート達が学習してきた本格的な作品を愛し、演奏の質の高さを理解した上で、その演奏家の個性を好む音楽を聴きに来る聴衆で、演奏者のアイドル性やストーリー性を重視したり、耳馴染みの良い作品

だけを求めたりする聴衆とは、別ジャンルの人々である。便宜上筆者は、前者をコア層の聴衆、後者をライト層の聴衆と呼んでいるが、業界で提唱されてきた裾野を広げる活動は、主にライト層に向けられたものであり、コア層に対しては薄い。

ここからは筆者の経験上の話となるが、コア層となり得る聴衆は、一般的に難解とされる音楽に気軽に触れてきたかどうかという環境面が大きいように思われる。また彼らは、クラシック音楽に対して見識を持ち、演奏家が最良にしてもらうための信頼を勝ち得るには時間がかかる上、一回でも良くない演奏があると足が遠のいてしまう。クラシック音楽全体のファンの中では、少数で獲得しにくい、つまり市場から見れば費用対効果が薄い層なのである。

第4章の調査結果を見れば、コンクール報道についての信頼性は、コンテスタントからは低い水準で、聴衆からも絶対的であるとはみなされていない。その体感が示す通り、メディアで取り上げられる基準に明確なものがあるわけではない。またコンクール入賞が大々的に新聞・テレビなどで報じられたとして、それをきっかけに獲得した聴衆の多くが一過性のブームに乗って来場する人々であり、市場のマーケティングもそのように勘案され、音楽を聴きに来る聴衆が満足することが難しい環境となる。コンクール入賞が聴衆獲得の一助になるといっても現状は、ライト層向けに、なんとなくすごいことという雰囲気メディアが作り出しているに過ぎないのである。

そうした世相を反映してか、多くのコンテスタントが日本の音楽事務所に専属し、演奏活動に専念することを望んでおらず、また市場はその原理から、商業的に実績のある人物をチケットが売れやすいプログラムでキャスティングせざるを得ない。これでは大望を秘めて成功のために挑戦する意欲も湧きようがなく、挙句、難関コンクールでの入賞も減少する。まさに一昔前の日本経済のような負のスパイラルが発生している。

2-2. 提言

コンクール入賞が今までより正確に、または多く取りあげられることが、市場を活性化する急速な起爆剤となることはないという前提に立ちながらも、今まで報じられてこなかったコンクールの特色や水準、過去の日本人入賞実績などを広く知らしめていく必要があると筆者は考える。

第一に、特に長く定着してもらえるコア層のファンを、少しでも多く獲得する目的からで

ある。コア層にとってもライト層と同様に、コンクール入賞が新人演奏家のコンサートに足を運び入れるきっかけとなり得ることには変わらない。著名コンクールに入賞したからと言って、将来素晴らしいピアニストになるとは限らないが、しかし、難しいコンクール群が居並ぶ WFIMC 加盟コンクールに優勝している、あるいは複数の上位入賞があるといった実績は、そのピアニストが本格的な作品を高い水準で演奏するポテンシャルを保証するもので、本来ならば音楽を聴きに来る聴衆、コア層が参考にするべき情報である。

第二に、様々なメディア媒体に、より広くコンクール入賞を取り上げてもらう環境を整える必要性があるからである。新聞記者の人たちが、調査や情報のプロであることに疑いの余地はない。確固たる報道基準がなくても、長年の慣例や取材の蓄積が紙面を決定づけるのは自然であるが、コンクールの世界は刻一刻と変わりゆく。報道機関にいくら文化専門の部署があるとは言え、コンクール入賞報道は全体のほんの一部を占めるに過ぎず、常にアンテナを張り巡らすだけの人員の確保は、各社難しいであろう。唯一の解決策は、実情を熟知している音楽家自身が、信用ある情報を信用ある利害関係のない媒体で、常々発信し続けるということである。現状、発信場所がないのであれば、今後信頼性の高い媒体を作り上げていく必要がある。ネット上であれば費用も安く済み、不可能な話ではない。

また手始めに、現在の報道基準で重視されている項目、そのコンクールで過去どのような日本人ピアニストが誕生してきたのかという点に特に着目し、2018年現在、WFIMCに加盟しているピアノ部門がある62コンクールの、3群に分類した。代表する日本人ピアニストについては1つのコンクールにつき2人を上限に、第4章で集計・分析したオーケストラ招聘の多い演奏家や、トップレベルの芸術大学・音楽大学の専任職にあるかを総合的に勘案して選定している。21世紀のWFIMC加盟コンクールのレベルが拮抗していることも加味し、そのコンクールの入賞者が他WFIMC加盟・準WFIMCコンクールで入賞を果たした割合も併記して、上位から順に並べた。太線は、率の平均ラインを表す。

今まで報じられてこなかったレベルの高いコンクールが、少しでも取り上げられるようになるきっかけとなれば、また、どのコンクールがどのようなものかわからない疑問を解消することに貢献できれば幸いである。

【A群：ヨーロッパの主要国とアメリカ合衆国でそれぞれ一番規模が大きい、かつ長い歴史のあるWFIMC加盟の10コンクール】

コンクール名	国	都市	他WFIMC入賞率	代表的日本人入賞者
エリザベト王妃国際音楽コンクール	ベルギー	ブリュッセル	(上位6位)90%	仲道郁代、若林顕

フェルッチョ・ブゾーニ国際ピアノコンクール	イタリア	ボルツァーノ	85.2%	横山幸雄、若林顕
フレデリック・ショパン国際ピアノコンクール	ポーランド	ワルシャワ	(上位6位) 83.3%	内田光子、横山幸雄
リーズ国際ピアノコンクール	イギリス	リーズ	83.3%	内田光子、小川典子
ジュネーヴ国際コンクール	スイス	ジュネーヴ	75.0%	迫昭嘉、萩原麻未
チャイコフスキー国際コンクール	ロシア	モスクワ	73.9%	上原彩子、小山実稚恵
ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール	アメリカ合衆国	フォートワース	66.7%	辻井伸行、野島稔
ロン＝ティボー＝クレスパンコンクール	フランス	パリ	66.7%	海老彰子、清水和音
ウィーン・ベートーヴェン国際ピアノコンクール	オーストリア	ウィーン	62.5%	内田光子
ARD(ミュンヘン)国際音楽コンクール	ドイツ	ミュンヘン	60.0%	伊藤恵、児玉桃

A 群には日本でもクラシック・ピアノ音楽に興味を持つ人には広く知られていると考えられるコンクールや、古豪と言われるコンクールが並んでいる。ただ、20 世紀では絶対的な存在と考えられてきたクライバーンやロン＝ティボー、ARD といったコンクール入賞者の他 WFIMC コンクール入賞率は、平均 (65.0%) を僅かに上回るかやや下回る水準であり、依然として高いレベルにあるものの、WFIMC コンクールの一つという位置付けとなったことに留意すべきである。

【B 群：楽壇を代表する日本人ピアニストが輩出されている WFIMC 加盟の 25 コンクール】

コンクール名	国	都市	他 WFIMC 入賞率	代表的日本人入賞者
クリーヴランド国際ピアノコンクール	アメリカ合衆国	クリーヴランド	90.3%	東誠三、福間洸太郎
浜松国際ピアノコンクール	日本	浜松	86.7%	上原彩子、北村朋幹
ゲザ・アンダコンクール	スイス	チューリッヒ	86.7%	河村尚子、藤原由紀乃
パロマ・オシェイ・サンタンデル国際ピアノコンクール	スペイン	サンタンデル	83.3%	福間洸太郎
アルトゥール・ルービンシュタイン国際ピアノマスターコンクール	イスラエル	テルアヴィヴ	80.6%	寺田悦子、大崎結真
ハエン賞国際ピアノコンクール	スペイン	ハエン	80.4%	青柳晋、迫昭嘉
シドニー国際ピアノコンクール	オーストラリア	シドニー	79.2%	有森博、上原彩子
ジャン・バッティスタ・ヴィオッティ国際音楽コンクール	イタリア	ヴェルチェッリ	72.7%	河村尚子、津田真理
UNISA 国際音楽コンクール	南アフリカ	プレトリア	71.4%	岡田博美
ブダペスト(リスト)国際音楽コンクール	ハンガリー	ブダペスト	68.2%	野原みどり、渡辺健二
テレコム・ボン・ベートーベン国際コンクール	ドイツ	ボン	66.7%	北村朋幹、高橋礼恵
BNDES リオデジャネイロ国際ピアノコンクール	ブラジル	リオデジャネイロ	66.7%	福間洸太郎
マリア・カナルス国際音楽コンクール	スペイン	バルセロナ	61.1%	坂井千春、三浦友理枝
仙台国際ピアノコンクール	日本	仙台	61.1%	津田裕也
ロベルト・シューマン国際ピアノ・声楽コンクール	ドイツ	ツヴィッカウ	56.5%	奈良希愛、山本亜希子

エピナル国際ピアノコンクール	フランス	エピナル	55.6%	田部京子、児玉桃
プラハの春国際音楽コンクール	チェコ	プラハ	54.5%	山本貴志
クララ・ハスキル国際ピアノコンクール	スイス	ウヴェイ	51.9%	内田光子、河村尚子
ヨハン・セバスチャン・バッハ国際コンクール	ドイツ	ライプツィヒ	50.0%	伊藤恵
フランツ・リスト国際ピアノコンクール	オランダ	ユトレヒト	50.0%	岡田将、後藤正孝
パデレフスキ国際ピアノコンクール	ポーランド	ビドゴシュチ	45.5%	山本貴志
リナ・サラ・ガッロ国際ピアノコンクール	イタリア	モンツァ	42.9%	藤井一興、花房晴美
ザルツブルク・モーツァルト国際コンクール	オーストリア	ザルツブルク	36.4%	菊池洋子
ドルトムント・シューベルト国際コンクール	ドイツ	ドルトムント	35.7%	佐藤卓史、原田英代
オルレアン国際ピアノコンクール	フランス	オルレアン	20.0%	上野真、永野英樹

B 群の 25 コンクールは、A 群よりは知名度に劣るかもしれないが、日本市場でまたは国際的に活躍する日本出身ピアニストが入賞してきた WFIMC 加盟コンクールで、まずはこれらの浸透を図ることが急務である。そのうちクリーヴランド、浜松、ゲザ・アンダ、サンタンデル、ルービンシュタイン、ハエン賞の 6 つのコンクールでは、他コンクール入賞率が 8 割を超えており、世界でもトップクラスのコンテストが行き来する高水準のコンクールである。またリオデジャネイロやボン・ベートーヴェンは、21 世紀に入って創設された新興コンクールであるが、難易度は高く、既に活躍する若手日本人ピアニストが入賞を果たしている。

他コンクールでの入賞率が低くても、第 2 章で言及した通り、現代曲中心（オルレアン）であったり、特定の作曲家作品を課題（モーツァルト、シューベルト）としていたり、ヴィルトゥオジティがレパートリーから排除（リナ・サラ・ガッロ、ハスキル）されていたりと、特化した技術や音楽性が求められる専門性の高いものが多いのは言うまでもない。

【C 群：これからの日本人入賞者の活躍によって、日本での地位が向上する可能性のある WFIMC 加盟の 27 コンクール】

コンクール名	国	都市	他 WFIMC 入賞率
トップ・オブ・ザ・ワールド国際ピアノコンクール	ノルウェー	トロムソ	93.3%
香港国際ピアノコンクール	香港	香港	82.6%
フランツ・リスト国際ピアノコンクール	ドイツ	ワイマール	80.0%
ソウル国際音楽コンクール	韓国	ソウル	79.2%
ホーンズ国際ピアノコンクール	カナダ	カルガリー	78.3%
ダブリン国際ピアノコンクール	アイルランド	ダブリン	76.9%
高松国際ピアノコンクール	日本	高松	76.5%
ジオルゴス・ティミス国際ピアノコンクール	ギリシャ	テッサロニキ	75.0%
スコットランド国際ピアノコンクール	イギリス	グラスゴー	70.8%

イサンユンコンクール	韓国	トンヨン	69.6%
ルイス・シガール博士国際音楽コンクール	チリ	ヴィニャデルマル	66.7%
モントリオール国際音楽コンクール	カナダ	モントリオール	64.5%
ジョルジュ・エネスク国際音楽コンクール	ルーマニア	ブカレスト	64.0%
ホセ・イトゥルビ国際ピアノコンクール	スペイン	ヴァレンシア	62.5%
トビリシ国際ピアノコンクール	ジョージア	トビリシ	60.0%
中国シンセン国際ピアノ協奏曲コンクール	中国	シンセン	58.3%
ケルン国際音楽コンクール	ドイツ	ケルン	56.3%
RNCM モットラム国際ピアノコンクール	イギリス	マンチェスター	53.3%
若き音楽家のための国際コンクール	セルビア	ベオグラード	52.9%
中国国際ピアノコンクール	中国	アモイ	50.0%
マイ・リン国際ピアノコンクール	フィンランド	ヘルシンキ	45.8%
M.K.チュルリョーニス国際ピアノ・オルガンコンクール	リトアニア	ヴィリニュス	37.5%
ハチャトゥリアン国際コンクール	アルメニア	イエレヴァン	35.0%
J.N.フンメル国際ピアノコンクール	スロヴァキア	ブラティスラヴァ	33.3%
イスタンブール・オーケストラシオン国際 ピアノコンクール	トルコ	イスタンブール	33.3%
若いピアニストのためのホロヴィッツ記念国際 コンクール	ウクライナ	キエフ	32.6%
エドワード・グリーグ国際ピアノコンクール	ノルウェー	ベルゲン	調査なし

C群には新しいコンクールも散見され、まだ日本人入賞がないものもいくつかある。これらが世に知られるには、日本出身入賞者の今後の活躍次第というところである。グリーグは2018年9月の高木竜馬の優勝が記憶に新しいが、その回よりWFIMCに加盟したため、本研究では調査対象としなかった。11のコンクールで他コンクール入賞率が平均を超えているが、韓国の2コンクールは、第2章で述べたように非常にホームアドバンテージが強いものである。

以上が筆者によるWFIMC加盟コンクールの分類となる。少なくともA群のコンクールでは、最終ラウンドの進出者で順位ランクがつく入賞を果たした場合に、B群は上位入賞を果たした場合に、C群でも優勝の場合には、入賞の中でも傑出した成果であると言え、広く讃えられて良いのではないか。各コンクールの詳細な特色については、第2章で記述したことや、運営組織が発行している要項や媒体を参照すれば、より理解が深まるであろう。

メディアの影響はインターネットの発達に伴って衰退したとも言われるが、やはり依然として強大である。誰もが納得できる分類はないかもしれないが、コンクール毎の特色や、歴代でどんなピアニストを輩出してきたのかといった情報が少しでもわかりやすくなることで、報道に取り上げられる機会が増せば、受賞ピアニストにも音楽業界全体にもプラスとなるに違いない。

もちろんメディアのみに頼らず、音楽家自身が叡智を結集し、コンクール入賞の価値につ

いて広めていく努力も必要である。入賞者による参加体験レポートや活躍する音楽家がコンクール演奏を聴いたものの批評を、誰もが無料で気軽に見られるインターネット媒体の整備や、日本に居住する同じコンクール入賞者の交流を深め、入賞者協会等の組織を作って会費で演奏会を企画したり、そのコンクールの新しい優勝者を日本に招聘したりといった活動が考えられる。既に市場で成功を収めているベテランの協力も仰いで、どのコンクールがどのような演奏家を育ててきたのか積極的に広めていく活動を行えば、一般にもコンクール入賞がよりわかりやすく伝わり、やがては音楽を聴きに来る聴衆の効果的な獲得へと繋がるはずである。

3. コンクールをさらに活かす

日本はコンクール大国と言われて久しいが、実際は学生コンクール大国という表現が正しいところであろう。学生向けのコンクールは、ピアノ教師の収入に直結するものであるため、盛んにセミナーやアドバイスレッスンという形で研究会が開催され、多くの資料が蓄積されてきた。ただ得てして、いかに子供を入賞させるのかという尺度で語られ、ピアニストを世の中にどう送り出すのかという話になることは稀である。幼・少年期にコンクールを受ける人たちの殆どがその方向には進まないから、ある意味では仕方のないことかもしれない。しかし現代に生きる職業ピアニストの大半にとって、演奏家人生を決めることになる難しい国際コンクールへの挑戦に関して、どのように計画・準備を行って実際に臨むのか、入賞後に何を学習し心構えする必要があるか、そして経験をいかにして生涯の演奏活動に活かすのか、研究されてこなかった事実は重い。恐らくそれは、我々音楽を実践するピアニスト自身の手で深めていくべき議論なのである。この研究に取り組んで筆者が感じたのは、老いも若きも多くのピアニストがコンクールに対して一言以上持っているにもかかわらず、それを発露する機会が殆どないということで、まずはその場を作らなければならない。

その成果は単純に日本出身ピアニストのためだけに還元されるにとどまらない。例えば教育機関でその種の研究が進められ、周知されるようになれば、特にアジア圏の学生に留学の選択肢として大きな関心を持ってもらえるようになるのではないか。第2章で見たように、21世紀初頭の現在、アジア圏のWFIMC加盟コンクール入賞は、ほとんど東アジア諸国と一部の旧ソ連系アジア地域出身者に限られる。楽器会社の先行投資が物語るように、人口の多い東南アジアや南アジアでも、経済発展に伴い自然とピアノ学習への意欲は高まり、

いずれは世界レベルのプロフェッショナルが誕生することになるであろう。日本の芸術大学・音楽大学もそうした学習者の受け皿になり得るが、現状は、韓国が理論でも実践でも、10歩以上リードしている。

もう一つ、難しいコンクールへの挑戦に、行政の支援や認定を頂くことは出来ないものであろうか。コンクールの結果が文化レベルを決定付ける訳ではない。ただ、世界の広い地域で愛される伝統音楽の最高レベルの大会で、減少しているとは言え、日本人ピアニストが非常に傑出した成果を出し続けていることは、国に目を向けて欲しい事実である。第4章で分析した聴衆へのアンケートでも、若手に対して強化指定制度のような支援を行うことには多くの賛同があった。もちろん彼らは、クラシック音楽の演奏会に来場する一般市民であることは勘案しなければならないが、スポーツの優秀な選手に対して制度化されているのであれば、音楽に対してそれが行われても不思議はないはずである。極端に言えば、実際に金銭的な支援がなくても、認定の事実があるだけでも良い。将来のために必死で努力を重ねる若手と、世界のコンクールで戦うことの価値に少しでも注目してもらえれば、その目的の大部分を果たすからである。

コンクールに関する議論について、勝つことが全てではない、音楽の本質からしてみればどうでも良い話と片付けることは簡単である。活躍する音楽家の中に、芸術の世界が競争社会とみられることや、若手がそこにばかりに目を向けることをよく思わない意見があることも理解している。しかし現状、国際コンクール受験がほとんどの若手ピアニストにとって避けられない道であるならば、それを逆手にとって、世界的にコンクールで優秀な成果を上げているという誇らしい事実を、何かと無駄だ・必要ないと厳しい目を向けられがちなクラシック音楽の一般的な存在意義を示すために、有効活用すべきではないか。若い日本出身者が国際舞台で活躍することに、眉をひそめる国民は少ないはずである。

コンクールを活かす道を進めることは、単に演奏家の仕事を増やすことにとどまらず、斜陽と言われている音楽業界各地への処方薬となり得る潜在能力を秘めていると、筆者は確信している。

結章

本研究は「21 世紀のピアノコンクールにおける、日本出身ピアニスト・コンテストについて」と題し、以下のような問いを立てて調査や分析を行ってきた。

1. WFIMC に加盟、またはそれに準ずるピアノ部門のあるコンクールにおいて、2001 年から 2017 年までの入賞を統計した時、世界的に見て日本が位置するのはどこか。
2. それらのコンクールで入賞を果たした日本人コンテストは、どのような経歴を辿ってきたのか。
3. 日本の音楽専門教育を受けたことのある現役、または引退して間もない日本出身コンテストが、コンクールやその後のキャリアについてどのように考え、実際にコンクール受験に臨んで来たのか。またコンクールでの成功者と位置付けられる WFIMC・準 WFIMC 入賞を果たした者に、特有性は見られるか。
4. 聴衆・市場・メディアに代表されるピアニストの周辺環境において、コンクール入賞の認識や反応、扱いはどのようなものであるか。
5. 1.-4.を調査する上で浮き彫りとなった、コンクールを受ける・受験をサポートする側と周辺環境側それぞれの問題点と、それを解消するための方策とは何か。

この章では、これらに対して各章で行った調査・検証の内容と、そこで判明した事実や知見をまとめると共に、結論・今後の課題を述べるものとする。

1. 各章のまとめと結果

1-1. 第 1 章のまとめ

第 1 章では、主にマコーミックの先行研究を紹介することに重点を置いた。主な功績は、コンクールを学術研究の俎上に乗せ定義した点、参加者及びメディア・聴衆についてその特質から分類した点、コンクールの演奏は特殊な環境下で行われると断じた点、そして様々な専攻の WFIMC 加盟国際コンクールを実地調査し、コンテストやコンクール運営者等に対してインタビュー調査を行い、現場の声を研究に反映させた点である。一方で、選択したコンクールが普遍的に国際コンクールを論じるには特殊な点や、インタビュー対象者の専攻が不明であり、偏りが感じられる意見も両論併記なく採用されている点を指摘した。そ

それを踏まえて本研究では、個々のコンクールについて参加者・運営・報道に至るまで仔細に観察を重ねるよりも、数々のコンクールを渡り歩くコンテストの中長期的な動向を中心に調査すべきであること、そして建設的に議論を進めるために、審査の不正さについては取り上げないことについて述べた。

1-2. 第2章のまとめと結果

第2章では、まず前提として国際音楽コンクール世界連盟（WFIMC）がどのような団体であるのかを解説し、加盟コンクールの権威やレベルの高さから、本研究で取り上げるコンクールは全て WFIMC 加盟コンクール（または加盟したことがあるコンクール）とする旨を記した。次に、各コンクール公式ホームページやアーリンク・アルゲリッチ基金が公開するコンクール結果の情報に基づき、2001年から2017年までに開催された WFIMC 加盟コンクールとその入賞者について、様々な角度から統計的な調査を行なった。

第一に地域別にコンクールの結果を並べ、国籍や他コンクールでの入賞歴の地域別傾向があるかどうかを探った。その調査結果から第二に、コンクール毎の他コンクールでの入賞率を、総計・上位の独自性・既入賞者・積入賞者別にランク付けし、それぞれについて考察を述べるとともに、特にキャリアスタートまたはエンドと位置付けられるコンクールを抽出した。第三に、全ての入賞に順位別のランクに応じたポイントを割り振り、1年ごとに国籍・地域別集計を行なった。特に入賞者輩出トップ10の国々は、年毎・5年単位・10年単位での動向を詳細に分析した。第四に、中でも特に優れた実績をあげた特別複数入賞者について、国籍や性別・コンクール受賞年齢について分析を行った。第五に、これまでに判明した情報を踏まえて、日本人の WFIMC・準 WFIMC 入賞者や特別複数入賞者について、多岐にわたる委細な調査を行なった。年毎の入賞者数変遷・21世紀に日本人が多数入賞したコンクール・入賞年齢の世界的傾向との比較・入賞者の学生及び一般向け国内コンクールでの成績、そして出身大学や留学先についてである。章の最後には日本人審査員の招聘の状況や日本人入賞との関連についても触れた。

この章で判明した主な結果には、以下のようなものが挙げられる。

- ・ 入賞ポイントの国別の占有率は、最大はロシア（全体の 19.73%）、次いで韓国（同 12.86%）となり、日本は3番手（9.65%）であった。トップ10諸国は以下、ウクライナ、中国、イタリア、アメリカ合衆国、フランス、ドイツ、ジョージアと続く。

- ・ 日本は 2001 年から 2008 年まで毎年、東アジア地域中トップを占めたが、2009 年を境に韓国にその座を譲り、入賞が大きく減少している。2001-10 年までと 2011-17 年までとの比較で占有率は 11.60%から 6.90%と下落した。辛うじて世界 3 位を維持しているものの、烏・中・伊・米にほぼ並ばれ、韓国が 9.94%から 17.01%へと大幅に増加し、2016・17 年にはロシアを抜いて世界トップに躍り出たのとは対照的である。
- ・ 日本人入賞者（ファイナリストを含む）の割合が最も高かったコンクールはシューマン国際ピアノ・声楽コンクールで、入賞者全体の 39.13%を占めた。それに加えて、シュベルト・ジュネーヴ・ケルン・ヴィオッティ・ポルト市・フンメル・浜松・ロン＝ティボー・カナルスの計 10 コンクールが、入賞者の 2 割以上を日本人が占める比較的入賞の多い WFIMC 加盟コンクールである。
- ・ 日本人入賞者は各国と比較して女性の割合が高いことが大きな特徴で、入賞数総計で女性が男性を上回り、特別複数入賞者は男女同数（世界総計は 73%：27%で男性優位）であった。また男女共、入賞年齢のピークが遅い傾向が見られた。特に男性はその差が顕著で、世界の特別複数入賞者は 23・24 歳の入賞が最も多いのに対し、日本の入賞者は 26・27・29 歳が多いことが判った。
- ・ 学生のためのコンクールであるピティナ・ピアノコンペティション（D 級・E 級・F 級）及び全日本学生音楽コンクール（小学校の部・中学校の部・高校の部）のいずれかまたは両方に入賞した経験のある日本人入賞者は全体の 25.9%で、両方共に入賞経験を持つのは僅か 2.8%にとどまった。一般向けのコンクール、ピティナ・ピアノコンペティション（G 級・特級）及び日本音楽コンクールでのいずれかまたは両方の入賞（特級・日コンは入選も含む）は 37.0%であった。国内コンクールの結果は、WFIMC 加盟コンクールでの受賞にあまり繋がらないと言える。
- ・ WFIMC 加盟・準 WFIMC コンクールでの日本人入賞者 108 名の出身学校について、2001 年から 2010 年までに受賞キャリアをスタートさせた者と 2011 年から 2017 年までにスタートさせた者とを比較したところ、東京藝術大学出身者は微減、桐朋学園大学出身者と日本の大学を経ずに海外の大学・音楽院に直接留学した者には大きな減少が見られる。また、2010 年までは非常に少なかった公立芸術大学出身者は、11 年から 17 年の集計で増加した。
- ・ 2001-10 年と 2011-17 年とを比較すると、日本人審査員の招聘は減少傾向である。

1-3. 第 3 章のまとめと結果

第 3 章では、日本で音楽の専門教育を受けた経験のある 10 代後半から 30 代前半までの

163 人のコンテストを対象にしたアンケート調査から、彼らのコンクール受験の実態や、キャリアについての意識を解明すると共に、WFIMC 加盟コンクールで入賞を果たしている若手ピアニスト 4 名にインタビュー調査を実施し、何が入賞に繋がったのか、これから入賞を目指す人たちがどのように取り組むと良いのか、そして入賞者が求められるキャリアについて等、様々な問題に対して考察を行なった。

調査項目を端的に列記すると、コンクール申し込みと学校での情報教育・レパートリー・練習時間や内容・コンクール参加の環境・本番の演奏・他者から受ける影響・子供時代のコンクール・演奏家キャリアへの意識・コンクールで勝つことと芸術性を深めることへの葛藤、となる。また章の最後には、日本人入賞者が減少している原因について、入賞者 4 人の見解を伺った。

この章で判明した主な結果には以下のようなものが挙げられる。

- ・ コンテスト全体の 95.1%が、大きなコンクールの入賞が将来のキャリアに繋がると考えているにもかかわらず、どのコンクールを受験するか選択する上では、キャリアのためという意識よりも、レパートリーが合っていることやレベルアップ・難しいことに挑戦するといった自己研鑽を重視する傾向にあることが判明した。
- ・ 入賞段階別の集計結果で特徴的だった点をいくつかあげると、まずレパートリー選択の項目では入賞歴が高くなる程、協奏曲を持ち曲にしている割合が高くなった。大きなコンクールの決勝で必要とされることの多い協奏曲を持ち曲にしておけば、その分予選や準決勝の課題に練習比重を多く割くことができるため、入賞の可能性が高まると考えられる。準備の項目においては、練習時間は入賞歴が高くなる程長くなったが、部分練習を増やす等の練習への特別な工夫は、中間層である WFIMC・準 WFIMC 以外の国際コンクールでの入賞者が、最も凝らしていると判明した。工夫された練習は、中堅レベルまでの入賞にはある程度効果的であると言えるが、WFIMC 加盟コンクール程の難易度になれば、特別な練習をしなくても完成度を高められる水準に達しなければならないと結論づけられる。
- ・ 将来のキャリアについて、全体の 63.8%が日本を活動拠点とすることを考えているものの、音楽事務所に所属して演奏活動のみを行うと希望した者は 3.7%と非常に少なかった。現代日本の若手ピアニストは、日本市場の既存の枠組みに懐疑的であると言える。

1-4. 第4章のまとめと結果

第4章は、ピアニストを取り巻く聴衆・市場・メディアが、コンクール入賞や入賞者をどのように扱っているのかをわかりやすく見るために、いくつかの手法で調査を行なった。

まず聴衆に対しては、筆者のリサイタルに来場した124人を対象に、簡単なアンケートを実施し、コンサート来場の頻度・演奏会选择にコンクール入賞歴を参考にするか・入賞者を継続的に聴いた経験があるか・コンクール挑戦に対して国や民間が支援すべきかについて質問すると共に、第3章でも活用した入賞者4人に対するインタビューを用いて、入賞でより多くの聴衆を獲得した実感や、芸術家としての自己を確立するため舞台上で心がける点について尋ねた。更に、コンクールに対する一般認識について、聴衆とコンテストとはどのような差があるのか、同じ質問をぶつけ、結果の比較を行なった。

次に市場に対しては、コンクール入賞が演奏会への起用に繋がるのかを調査するために、2012年から2017年までに在京・在関西のオーケストラが招聘したピアニストを集計（資料が足りない楽団はその期間中最大限の範囲で）し、音楽事務所の影響力についても述べた。

メディアに対しては、まずコンクール入賞の取り上げ方について入賞者4人に認識を伺った。また、聴衆や市場の注目に大きな影響を与える新聞紙面でのコンクール入賞報道について、神戸新聞・文化部の現役記者に、インタビュー調査にご協力頂いて、国際コンクール入賞をどのような基準・規模で掲載するのか基本的な条件を把握した。それを元に、全国紙の基準について五大紙へ照会し、回答を頂戴した三紙について、内容を取りまとめた。

この章で判明した主な結果には以下のようなものが挙げられる。

- ・ 聴衆が初めて聴く日本人ピアニストの演奏会への来場を考える場合、コンクール入賞の有無が選択に影響するとしたのは41.1%、継続して筆者以外の著名コンクール入賞者を聴いた経験があるのは29.8%にとどまった。入賞者4人へのインタビューでも、コンクール入賞が聴衆獲得に繋がると明確に答えたのは1人のみであった。
- ・ 聴衆とコンテスト、それぞれに対するアンケート調査で同じ設問をし、コンクールに対する認識差を調査したところ、聴衆はどのコンクールがどの特色やレベルであるのかわからないと回答した割合が50%（コンテストは33.1%）と最も高くなり、コンテストはコンクール入賞と演奏のクオリティの高さの相関について懐疑的であるとした層が46.0%（聴衆は21.0%）と最も多くなった。これらの結果から、聴衆はコンクール入賞をある程度演奏の質を担保するものと考えているものの、その内実についての理解は進んでいないことが判る。

- ・ 2012年から2017年までの在京・在関西の主要オーケストラにおける計65名の招聘ピアニストのうち、WFIMC加盟コンクール入賞者は32名にとどまったが、非常に多く招聘されている層（計10回以上）を見ると、12人中9名の割合まで高まった。ただ、オーケストラ・ソリストへの招聘は、コンクール入賞よりも音楽事務所のキャスティングが重要であり、東京の定期演奏会では86.1%が、関西の定期演奏会では81.4%が大手・中堅音楽事務所所属のアーティストによるものであった。
- ・ 国際コンクール入賞の新聞掲載における明確な基準は設けられていなかった。新聞社によっては、それまでの取材や調査の蓄積により、ある程度具体的なコンクール名を対象にした報道が行われているが、過去の入賞者の活躍や社会的な注目といった入賞者本人ではコントロールできない要素が、少なからぬ影響を与えていることが判明した。

1-5. 第5章のまとめ

第5章では、これまでの調査結果から浮き彫りになった二つの大きな課題について、その原因を考察し、改善方法を提言した。

第一の**WFIMC加盟コンクールにおける日本人入賞者の減少**では、具体的な入賞年齢を目標に定め、若年齢から長期的な計画で一元的に取り組むことや、大学在籍者がコンクールを受けやすい環境を作ること、コンクールそのものの情報や受験に関する知識、また本番でのメンタル面の制御等、大学で学習できるような体制を整えることを提案した。

第二の課題、**周辺環境のコンクール入賞への理解を深める**ことに関しては、実際にコンクール受験や入賞を経験してきた演奏家自身が、コンクールの特色や水準について自ら発信していくことが重要であると結論づけ、WFIMC加盟のピアノ部門がある62のコンクールを、ピアニストとして活躍する日本人入賞者の情報などを参考に3群に分類し、基準を提示した。また、演奏家自身が取り組むことのできる方策として、コンクールレポートに特化した媒体を立ち上げることや、あるコンクールの日本在住入賞者を集めて入賞者協会を創設し、褒賞演奏会を企画することなどを提起した。

最後にコンクールの議論をより深めることは様々な利点を産むという観点から、大学等での研究を進めることや、行政からの支援の必要性について触れ、締めくくった。

2. 結論

日本では、コンクールについて、コンテスタント・その指導者や教育機関のみならず、周辺環境側も現状の認識や理解が充分でなく、そのリソースや入賞の価値を十分に活用することができていない。今後広く議論を進めると共に、種々の課題を解消するためには、経験者・実践者であるピアニスト自身が主体となって、育成システムの見直しや情報の発信に努める必要がある。

3. 今後の課題

先例が少なく手探りの中で、本研究では特に WFIMC 加盟コンクールや、そこでの入賞者について、今後の研究につながる材料を可能な限り提供できるように努力した。しかし、入賞者データからの分析の比重が大きくなり、研究自体がやや跛行的となったことは否めない。またデータについて、分析方法の変更や、他の情報と照らし合わせることで違った見方をすることも可能であろう。活発な議論を願う。

個々の内容を見れば、レパートリーやコンクールを選択する戦術面での向上については、日本に限らず世界の入賞者からより広く統計を集めた上で、実際の定石を固めていくべきである。より歴史的な観点で入賞者・ピアニストを見るならば、20 世紀に開催されたコンクールについても、それぞれの運営者等が発行している資料を収集し、さらなる追跡調査を行う必要がある。文化や芸術と言った文脈でイベントとしてのコンクールを見るならば、社会学が専門となるであろう。コンテスタントがコンクールの大舞台で最大の力を発揮するための心理学や脳科学分野の研究も待たれる。

コンクールや音楽市場、そしてそこに生きるピアニストといった、めまぐるしく変化し続ける対象を研究し、更に実践へ結び続けることは難しい。率直に申せば、個人でできることは非常に限られていると感じた。行政や、大学の枠組みを超えた取り組みが望まれる。

筆者としては将来、立場上許されるならば、世界に羽ばたく人材を育成したいという思いを強く持っている。コンクールに送り出す立場から日々観察と研究を怠らず、成果をまた論文等で発表して参りたい。

謝辞

まずは大学院博士後期課程での学習と研究に際し、並々ならぬご指導をいただいた音楽研究科の先生方に、伏して御礼を申し上げたい。

研究に際し、筆者が師事して8年になる迫昭嘉教授は、大きな成功を収めたピアニスト・指揮者・指導者の立場から、小利にとらわれず大局を見るように、常に問いかけ続けてくださった。生意気に意見をぶつけたとしても、必ず鷹揚に耳を傾け、毎週のように原稿を丁寧にチェックしていただき、楽壇の未来や我々若手演奏家の責務についても忌憚なくお話しくださった。演奏面でも、大学院の6年間でブゾーニ、ハエン賞、サンタンデールの各WFIMC加盟コンクールで入賞に導いていただいたことに加え、成長に停滞が感じられた2016-17年は特に、様々なアプローチから叱咤激励くださり、演奏家としてどのように生きるべきか、言葉でも背中でも教えを授けていただいた。先生との出会いで人生が変わり、未来を拓くことが出来たように思う。足元には到底及ばないが、賜った一生の財産を自身と後進に還元できるよう、精進する。

先例が少ない中で、「コンクールを研究したい」という修士課程在籍時から秘めた想いの背中を押してくださったのが片山千佳子教授で、古代ギリシャの音楽競技についてのご講演資料など、貴重な研究成果を惜しみなく分け与えてくださった。

片山先生のご退官後、快く引き継いでくださった大角欣矢教授には、研究の方向性が全く見えない中、構想の根幹に関わる的確なご助言を頂戴した。もしそれをいただいでいなければ、状況分析と既存の枠組みへの批判に終始するか、受験戦術の研究にとどまり、建設的な見地を欠いた論文となってしまっていたに違いない。

調査や執筆にあたっては、山下薫子教授のきめ細やかなご教示をいただいた。筆者のてんでばらばらな着想を辛抱強くお聞きになり、その情報を整理し、筋道と骨格をお示くださったことに加え、大変ご多忙な中、原稿を繰り返し校閲して頂いたことにも、感謝の言葉が見つからない。

青柳晋准教授は、特に調査手法についてアイデアをご提示くださり、研究に多角的な視点を加えていただいた。また2017年の博士リサイタル後に、当時の筆者の迷いを敏感に察知され、演奏やこれから進むべき道について、時間を割いて真剣にアドバイスくださったことも、忘れられない。

そして有用な文献資料を紹介していただいたり、民族誌的研究の有意性について熱心に

説いてくださったりと、筆者の研究を観察し、励まし続けてくださった佐藤文香助教のお導きがなければ、学位の取得を諦めていたかもしれない。

また本研究はその性質上、たくさんの方々からのご協力なしに、成立し得ないものである。快く調査にお答えくださった124名の聴衆の皆様・163名のコンテスタントの皆様・各新聞社の担当者様、資料を提供してくださったヤマハアーティストサービス東京の一瀬忍様・全日本ピアノ指導者協会の加藤哲礼様、アンケートの作成にご助言いただいた齋藤一也さん、そして時に2時間にも及んだインタビューにお付き合いくださった、神戸新聞社の松本寿美子記者・木下敦子さん・桑原志織さん・佐藤彦大さん・須藤梨菜さんに、この場を借りて深く、深く、感謝の意を表す。

最後に研究することを許し、温かく支えてくれた妻、両親、そしてもうすぐ3歳になる息子の皆に、ありがとうと伝え、筆を擱きたい。

参考文献

1. 学位論文

McCormick, Lisa Lorraine Helen. “Playing to Win: A Cultural Sociology of the International Music Competition.” Ph. D. diss., Yale University, 2008.

崎谷明弘『国際ピアノコンクールの成り立ちと変遷、その現在』 東京藝術大学大学院音楽研究科修士論文、2015年。

本間千尋『日本におけるクラシック音楽文化の社会学的研究 —ピアノ文化を中心として—』 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士論文、2015年。

2. 和書

一般社団法人全日本ピアノ指導者協会編『第33回ピティナ・ピアノコンペティション結果特集号』 東京：一般社団法人全日本ピアノ指導者協会、2009年。

岡田暁生『ピアニストになりたい！：19世紀もうひとつの音楽史』 東京：春秋社、2008年。

音楽の友編『最新 ピアノ&ピアニスト』 東京：音楽之友社、2018年。

紙谷一衛『人を魅了する演奏』 東京：角川学芸出版、2009年。

酒井隆『図解 アンケート調査と統計解析がわかる本：アンケート調査の企画・実査・集計から統計解析の基本と多変量解析の実務まで』 東京：日本能率協会マネジメントセンター、2003年。

竹内光悦、元治恵子、山口和範『アンケート調査とデータ解析の仕込みがよ〜くわかる本：社会調査のためのデータの集め方と統計解説入門』 東京：秀和システム、2005年。

塚原利理『はじめてのピアノコンクール』 東京：ヤマハミュージックメディア、2014年。

中村紘子『コンクールでお会いしましょう：名演に飽きた時代の原点』 東京：中央公論
新社、2003年。

中村紘子『チャイコフスキー・コンクール：ピアニストが聴く現代』 東京：中央公論社、
1988年。

200CD 鍵盤の覇者たち編集委員会編『200CD：国際ピアノ・コンクール 鍵盤の覇者たち』
東京：学習研究社、2005年。

ホロウィッツ、ジョーゼフ『国際ピアノ・コンクール：その舞台裏の悲喜劇』 奥田恵二
訳、東京：早稲田出版、1995年。

吉原真里『「アジア人」はいかにしてクラシック音楽家になったのか？：人種・ジェンダー・
文化資本』 武蔵野：アルテスパブリッシング、2013年。

吉原真里『ヴァン・クライバーン国際ピアノ・コンクール：市民が育む芸術イベント』
武蔵野：アルテスパブリッシング、2010年。

参考 Web サイト

1. 引用したり、内容を論文に反映したりしたサイト

1-1. 洋文サイト

3. bis 21. September 2018: 67. Ard-musikwettbewerb. “Springboard for a Career from 1952”, accessed on 30 September 2018. <https://www.br.de/ard-musikwettbewerb/preistraeger/preistraeger-pdf124~attachment.pdf>

Alessandro Casagrande Piano Competition, “Winners of Past Editions”, accessed on 30 September 2018. <https://www.concorsocasagrande.org/en/concorso/elenco-vincitori.php>

Alink - Argerich Foundation, “Result”, accessed on 2 August 2018. <https://www.alink-argerich.org/results>⁴⁴

Arthur Roubinstein International Music Society, “Laureates”, accessed on 22 September 2018. <https://arims.org.il/past-laureates/>

Atsuko Kinoshita, “Japanese”, accessed on 24 August 2018. <https://www.atsukokinoshita.com/vita/japanese/>

Bach Competition, “Prize Winners Since 1950”, accessed on 21 June 2018. <https://www.bachwettbewerb-leipzig.de/en/bach-competition/prize-winners-1950>

Chopin Competition 2015, “Previous Editions”, accessed on 22 June 2018. <http://chopincompetition2015.com/previous-edition/2ed4d122-f187-42a6-85c9-7baf033bccd8/details>
<http://chopincompetition2015.com/previous-edition/446f4d94-9ee8-431d-a1d8-98f087aa480f/details>

Cleveland International Piano Competition: Homepage, “Past CIPC Medalists”, accessed on 20 June 2018. <https://www.clevelandpiano.org/competitions/past-medalists/>

Concours de Genève, “Search Laureates”, accessed on 21 June 2018. https://www.concoursgeneve.ch/section/laureates/search_laureates

Concours Géza Anda, “All Prizewinner Since 1979”, accessed on 22 June 2018. <http://www.geza-anda.ch/pages/view/id/21>

Concours international Long-Thibaud-Crespin, “lauréats”, accessed on 21 June 2018. <http://www.long-thibaud-crespin.org/laureats.html>

Concours musical international de Montréal, “Archives”, accessed on 21 June 2018. <https://concoursmontreal.ca/en/about/archives/2004-piano/>
<https://concoursmontreal.ca/en/about/archives/2008-piano/>
<https://concoursmontreal.ca/en/about/archives/2011-piano/>
<https://concoursmontreal.ca/en/about/archives/2014-piano/>
<https://concoursmontreal.ca/en/about/archives/piano-2017/>

Concorso internazionale pianistico Rina Sala Gallo, “il concorso”, accessed on 21 June 2018. <http://www.concorsosalagallo.it/il-concorso/>

⁴⁴ サイト内 “Search options” の検索窓にコンクール名または都市名、時期を入力するとコンクール結果のデータベースにアクセス可能になる。また、コンクール毎の審査員名も調査できる。

Concours Oliver Messiaen, “concours Olivier Messiaen contemporary piano”, accessed on 22 June 2018. <http://www.civp.com/messiaen/messiaen2007gb/palmars.htm>

Concorso pianistico internazionale Ferruccio Busoni, “Hall of Fame”, accessed on 20 June 2018. <https://www.concorsobusoni.it/it/hall-of-fame>

Concurso internacional de piano Premio Jaén, “Winners”, accessed on 21 June 2018. <http://premiopiano.dipujaen.es/home-en/bases/premiados.html>

Concurs Maria Canals, “Winners”, accessed on 20 June 2018. <https://mariacanal.org/en/quefem/premiats.html>

Dublin International piano Competition, “Winners”, accessed on 20 June 2018. <http://www.dipc.ie/competition/winners/>

Epinal International Piano Competition, “Winners”, accessed on 30 September 2018. <https://www.concours-international-piano-epinal.org/history/winners/>

Facebook, “Akihiro Sakiya”, accessed on 10 June 2018. <https://www.facebook.com/akihiro.sakiya>

Gina Bachauer | International Piano Foundation, “Laureates”, accessed on 21 June 2018. <https://www.bachauer.com/laureates>

Giorgos Thymis :: International Piano Competition, “Previous Competitions”, accessed on 22 June 2018. <http://www.thymiscompetition.gr/index.php/5th-competition>
<http://www.thymiscompetition.gr/index.php/6th-competition>
<http://www.thymiscompetition.gr/index.php/6th-competition/item/251>
<http://www.thymiscompetition.gr/index.php/component/k2/item/295>

Honens - Piano | Festival | Competition, “All Laureates”, accessed on 20 June 2018. <http://www.honens.com/laureates/all-laureates/>

Horowitzv.org, “Winners”, accessed on 21 June 2018. <http://www.horowitzv.org/eng-home-simifinal/winners-engl/v-competition/senior.html>
<http://www.horowitzv.org/eng-home-simifinal/winners-engl/c6/senior.html>
<http://www.horowitzv.org/eng-home-simifinal/winners-engl/vii-competition/senior-group-7.html>
<http://www.horowitzv.org/eng-home-simifinal/winners-engl/viii-competition/senior.html>
<http://www.horowitzv.org/eng-home-simifinal/winners-engl/IXComp/senior2012.html>
<http://www.horowitzv.org/eng-home-simifinal/winners-engl/xi-competition2016/senior2017.html>

Internationaler Schubert-Wettbewerb Dortmund, “die Preisträger”, accessed on 20 June 2018. <https://schubert-wettbewerb.de/der-wettbewerb/die-preistraeger/>

International Franz Liszt Piano Competition, “Peijswinnaars”, accessed on 22 June 2018. <http://www.liszt.nl/pages/prijswinnaars-1986-2014>
<http://www.liszt.nl/pages/prijswinnaars-2017>

International Jeunesses Musicales Competition Belgrade, “Ijmc Archive”, accessed on 20 June 2018. <https://www.muzicka-omladina.org/en/ijmc-archive>

International Mozart Competition, “Archiv”, accessed on 21 June 2018. https://www.uni-mozarteum.at/files/pdf/mowe/mowe_13_broschuere.pdf

International Robert Schumann Contest for Pianists and Singers, “Winners”, accessed on 22 June 2018. http://www.schumannzwickau.de/en/rsw_piano_singers_winner.asp

Leeds International Piano Comp, “Past Winners”, accessed on 21 June 2018. <https://www.leedspiano.com/about-the-leeds/#winners>

Liszt Ferenc International Piano Competition, “Competition Winners Since 1933”, accessed on 20 June 2018. <http://zeneiversenyek.hu/en/budapesti-nemzetkozi-zenei-verseny/a-verseny-dijazottjai-1933-tol/>

Lithuanian Music Competitions, “Winners of the Competition”, accessed on 22 June 2018. <http://www.ipmc-lt.com/piano-winners>

London International Piano Competition, “Past Competitions”, accessed on 21 June 2018. <http://www.lipc.org.uk/past-competitions/competition-2002/>
<http://www.lipc.org.uk/past-competitions/competition-2005/>
<http://www.lipc.org.uk/past-competitions/competition-2009/>

Mdw – Universität für Musik und darstellende Kunst Wien, “Prize Winners”, accessed on 22 June 2018. <http://www.mdw.ac.at/beethoven-competition/en/ruckblick/preistragerinnen/>

Mundoclasico.com, “III edition del concurso internacional Joaquín Rodrigo”, accessed on 5 June 2018. <https://www.mundoclasico.com/articulo/8689>

Notre-Dame de Sion Fransız Lisesi, “Accueil”, accessed on 21 June 2018. <https://www.nds.k12.tr/Soiree-de-gala-et-remises-des-prix?edition=2013>
<https://www.nds.k12.tr/Epreuve-finale-du-Concours-International-de-Piano-Istanbul-Orchestra-Sion-2015?edition=2015>
<https://www.nds.k12.tr/Tirage-au-sort-de-l-ordre-de-passage-des-candidats-du-premier-tour-du-Concours-8762>

Oci – piano, “les lauréats Oci”, accessed on 21 June 2018. <https://www.oci-piano.com/en/laureats/>

Paderewski Piano Competition, “Laureates”, Accessed on 20 June 2018. <http://konkurspaderewskiego.pl/en/laureats-of-5th-competition/>
<http://konkurspaderewskiego.pl/en/laureats-of-6th-competition/>
<http://konkurspaderewskiego.pl/en/competition/previous-editions/7th-competition/laureats-of-7th-competition/>
<http://konkurspaderewskiego.pl/en/laureats-of-8th-competition/>
<http://konkurspaderewskiego.pl/en/laureats-9th-competition/>
<http://konkurspaderewskiego.pl/en/2016-10th-competition/laureates-of-the-10th-competition/>

Queen Elisabeth Competition, “Queen Elisabeth Competition 1937-2013”, accessed on 20 June 2018. <http://www.cmireb.be/concours2/documents/palmares1937201319863.pdf>

Roland Krüger, “Biography”, accessed on 5 August 2018. http://www.rolandkrueger.com/index.php?option=com_content&view=article&id=2&Itemid=2&lang=en

Scottish International Piano Competition, “Competition Laureates”, accessed on 21 June 2018. <http://www.scottishinternationalpianocompetition.com/previous-competitions/competition-laureates/>

Seoul International Music Competition, “Previous Competition”, accessed on 21 June 2018. http://www.seoulcompetition.com/re/2008/en_08_01.html
http://www.seoulcompetition.com/re/2011/en_a11_01.html
http://www.seoulcompetition.com/re/2014/en_14_01_schedule.html
http://www.seoulcompetition.com/re/2017/en_01_schedule.html

Slovenská filharmónia, “Johann Nepomuk Hummel International Piano Competition”, accessed on 20 June 2018. <http://www.filharmonia.sk/en/jn-hummel-international-piano-competition/>

Spiegel Online - Aktuelle Nachrichten, "Baden-WürttembergRegierung beschließt Gebühren - aber nur für internationale Studenten", accessed on 30 September 2018. <http://www.spiegel.de/lebenundlernen/uni/baden-wuerttemberg-regierung-beschliesst-gebuehren-fuer-internationale-studenten-a-1118189.html>

Sydney International Piano Competition, “Previous Competitions”, accessed on 21 June 2018. <https://www.sydneypianocompetition.com.au/previous-competitions/>

Tbilisi International Piano Competition, “Tbilisi International Piano Competition”, accessed on 22 June 2018. <http://www.tbilisipiano.org.ge/en/competitions/details?n=1&i=6>
<http://www.tbilisipiano.org.ge/en/competitions/details?n=1&i=7>
<http://www.tbilisipiano.org.ge/en/competitions/details?n=1&i=8>
<http://www.tbilisipiano.org.ge/en/competitions/details?n=1&i=2>
<http://www.tbilisipiano.org.ge/en/competitions/details?n=1&i=17>

Telekom Beethoven Competition Bonn, “Laureates”, accessed on 20 June 2018. <https://www.telekom-beethoven-competition.de/en/laureates>

The Cliburn Competition 2017 - Medici TV, “Past Winners”, accessed on 21 June 2018. <http://cliburn2017.medici.tv/en/page/winners>

The Fourth International Maj Lind Piano Competition, “Kilpailun historia”, accessed on 21 June 2018. <http://majlindcompetition.fi/historia-maj-lind/2002-2/>
<http://majlindcompetition.fi/historia-maj-lind/2007-2/>
<http://majlindcompetition.fi/historia-maj-lind/2012-2/>
<http://majlindcompetition.fi/historia-maj-lind/2017-2/>

The Hong Kong International Piano Competition – the Chopin Society, “Past Events”, accessed on 21 2018. http://www.chopinsocietyhk.org/pastevents/piano_competition_2005/fhkipc.htm
http://www.chopinsocietyhk.org/pastevents/piano_competition_2008/index.htm
http://www.chopinsocietyhk.org/piano_competition_2011/index.htm
http://www.chopinsocietyhk.org/piano_competition_2016/index.htm

The International Maria Callas Grand Prix, “Archive”, accessed on 20 June 2018. <http://www.grandprixmariacallas.com/en/archive/?gid=&tid=2&name=&win=3>

The XV International Tchaikovsky competition, “Prizewenners”, accessed on 21 June 2018. <http://tch15.medici.tv/en/page/past-prize-winners>

The William Kapell Competition - the Knabe Institute, “List of Kapell Competition Winners”, accessed on 20 June 2018. <https://www.knabeinstitute.org/the-william-kapell-competition.html>

Top of the World – International Piano Competition, “Winners”, accessed on 22 June 2018. <http://topoftheworld.no/winners/>

University of Music Franz Liszt Weimar, “Our Prize Winners”, accessed on 22 June 2018. <https://www.hfm-weimar.de/en/international-franz-liszt-piano-competition-weimar-bayreuth/our-prize-winners/prize-winners-2015.html#HfM>
<https://www.hfm-weimar.de/en/international-franz-liszt-piano-competition-weimar-bayreuth/our-prize-winners/prize-winners-2011.html#HfM>
<https://www.hfm-weimar.de/en/international-franz-liszt-piano-competition-weimar-bayreuth/our-prize-winners/prize-winners-2009.html#HfM>
<https://www.hfm-weimar.de/en/international-franz-liszt-piano-competition-weimar-bayreuth/our-prize-winners/prize-winners-2006.html#HfM>
<https://www.hfm-weimar.de/en/international-franz-liszt-piano-competition-weimar-bayreuth/our-prize-winners/prize-winners-2003.html#HfM>

V Bndes International Piano Competition – 2016, “History”, accessed on 21 June 2018.
http://concursopianorio.com/?page_id=58&lang=en

World Federation of International Music Competitions, "Recommendation for an International Piano Competition", accessed on 2 August, 2018. <https://wfimc-fmcim.org/wp-content/uploads/2018/02/RECOMMENDATIONS-ENG.pdf>

World Federation of International Music Competitions, "WFIMC Annual Book 2018", accessed on 2 August, 2018. https://issuu.com/wfimc/docs/wfimc_ab2018/1?ff=true&e=25003934/60772697

XIX Santander International Piano Competition, “Winners, Juries, Orchestras and Guest Artists”,
http://www.santanderpianocompetition.com/C_Concursos_Premiados.aspx#XIVConcurso

XXVII Clara Haskil International Piano Competition, “Clara Haskil Prize Winners”, accessed on 22 June 2018. http://www.clara-haskil.ch/wp-content/uploads/2016/06/CH_Competition-Rules_2017_EN-1.pdf

1-2. 和文サイト

Aspen、『アーティスト – ピアノ』、2018年9月2日閲覧。<http://www.aspen.jp/artist/piano/index.html>

Cd Journal、『ピアノ・リサイタル 佐藤彦大 (P)』、2018年8月24日閲覧。
<https://artist.cdjournal.com/d/piano-recital/4117031862>

Huffpost、『群馬の男性、国際ゲーム大会優勝は嘘だった...朝日新聞・上毛新聞が記事削除しおわび』、2018年10月19日閲覧。
https://www.huffingtonpost.jp/2016/09/28/air-victory_n_12228812.html

Hyogo Pac Orchestra (兵庫芸術文化センター管弦楽団)、『2017-18 シーズンコンサート』、2018年7月4日閲覧。<http://hpac-orc.jp/concert/season2017-18.php>

Hyogo Pac Orchestra (兵庫芸術文化センター管弦楽団)、『これまでのコンサート』、2018年7月4日閲覧。

<http://hpac-orc.jp/concert/season2011-12.php>

<http://hpac-orc.jp/concert/season2012-13.php>

<http://hpac-orc.jp/concert/season2013-14.php>

<http://hpac-orc.jp/concert/season2014-15.php>

<http://hpac-orc.jp/concert/season2015-16.php>

<http://hpac-orc.jp/concert/season2016-17.php>

Imc Music Management、『須藤梨菜 Rina Sudo』、2018年8月24日閲覧。
<http://management.imc-music.net/artists/domestic/rina-sudo>

Kajimoto | コンサート、『Artists アーティスト – ピアノ』、2018年8月30日閲覧。
<http://www.kajimotomusic.com/jp/artists/sc=35/>

Kojima Concert Management コジマ・コンサートマネジメント、『アーティストリスト』、2018年9月2日閲覧。<http://www.kojimacm.com/artist/artist-list.html>

M. Hirasa Ltd. | ヒラサ・オフィス、『Instrumentalists』、2018年9月2日閲覧。
http://www.hirasaooffice06.com/artists.html?artist=Instrumentalists#artist_lists

Miyazawa & Co.、『アーティスト』、2018年9月2日閲覧。<http://miy-com.co.jp/artists/>

Ms Wendy | 分譲マンションと生活に関する情報 Wendy-Net、『261号 注目の人 ピアニスト／中村紘子さん』、2018年9月29日閲覧。<https://www.wendy-net.com/nw/person/261.html>

Nhk 交響楽団／Nhk Symphony Orchestra, Tokyo、『演奏会記録』、2018年6月29日閲覧。
https://www.nhkso.or.jp/data/document/library/archive/kiroku2011_2014.pdf

Nhk 交響楽団／Nhk Symphony Orchestra, Tokyo、『コンサート』、2018年6月29日閲覧。
http://www.nhkso.or.jp/concert/search_concert.php?part_list=0%2C1%2C94&concert_sb_list=&chiho_list=&hall_list=&composer_list=&conduct_or_list=&solist_list=&concert_year_st=2012&concert_month_st=01&concert_year_ed=2017&concert_month_ed=12&pageNo=1

江副記念財団奨学金、『桑原志織』、2018年8月24日閲覧。
<http://www.ezoe-mf.or.jp/music/kuwahara.html>

大阪交響楽団（公式ホームページ）、『公演記録』、2018年7月3日閲覧。

http://sym.jp/publics/index/215/#page215_546

http://sym.jp/publics/index/207/#page207_543

<http://sym.jp/publics/index/208/>

<http://sym.jp/publics/index/116/>

<http://sym.jp/publics/index/48/>

<http://sym.jp/publics/index/232/>

<http://sym.jp/publics/index/225/>

<http://sym.jp/publics/index/323/>

<http://sym.jp/publics/index/384/>

http://sym.jp/publics/index/274/#page274_666_722

http://sym.jp/publics/index/235/&anchor_link=page235_583#page235_583

http://sym.jp/publics/index/296/#page296_702_822

<http://sym.jp/publics/index/187/>

大阪フィルハーモニー交響楽団 – Osaka Philharmonic Orchestra、『情報公開』、2018年7月2日閲覧。

http://www.osaka-phil.com/disclose/H24_jigyouhoukoku.pdf

http://www.osaka-phil.com/disclose/H25_jigyouhoukoku.pdf

http://www.osaka-phil.com/disclose/H26_jigyouhoukoku.pdf

http://www.osaka-phil.com/disclose/H27_jigyouhoukoku.pdf

http://www.osaka-phil.com/disclose/H28_jigyouhoukoku.pdf

http://www.osaka-phil.com/disclose/H29_jigyouhoukoku.pdf

海外のオーケストラや舞台などを招聘する音楽事務所ジャパン・アーツ、『アーティスト – ピアノ』、2018年9月2日閲覧。<https://www.japanarts.co.jp/artist/?c=8>

株式会社 AMATI、『アーティスト – ピアノ』、2018年9月2日閲覧。

http://www.amati-tokyo.com/artist/#artist_piano

関西フィルハーモニー管弦楽団 – Kansai Philharmonic Orchestra、『過去の演奏会』、2018年7月3日閲覧。

<https://kansaiphil.jp/concert/archive/page/21/>

<https://kansaiphil.jp/concert/archive/page/16/>

<https://kansaiphil.jp/concert/archive/page/12/>

<https://kansaiphil.jp/concert/archive/page/11/>

関西フィルハーモニー管弦楽団 – Kansai Philharmonic Orchestra、『定期演奏会 (アーカイブ)』、2018年7月3日閲覧。

http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=422
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=425
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=429
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=554
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=555
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=556
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=686
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=692
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=693
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=794
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=832
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=840
http://kansaiphil.jp/modules/concert/index.php?content_id=846

京都市交響楽団、『コンサートスケジュール』、2018年7月4日。

<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=1>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=2>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=3>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=4>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=5>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=6>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=7>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=8>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=9>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=10>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=11>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2012&m=12>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=1>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=2>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=3>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=4>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=5>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=6>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=7>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=8>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=9>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=10>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=11>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2013&m=12>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=1>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=2>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=3>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=4>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=5>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=6>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=7>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=8>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=9>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=10>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=11>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2014&m=12>

<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=1>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=2>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=3>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=4>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=5>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=6>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=7>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=8>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=9>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=10>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=11>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2015&m=12>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=1>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=2>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=3>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=4>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=5>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=6>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=7>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=8>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=9>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=10>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=11>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2016&m=12>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=1>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=2>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=3>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=4>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=5>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=6>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=7>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=8>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=9>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=10>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=11>
<https://www.kyoto-symphony.jp/concert/index.php?y=2017&m=12>

[公式] 新日本フィルハーモニー交響楽団 – New Japan Philharmonic -, 『コンサート検索』、2018年7月1日閲覧。 https://www.njp.or.jp/concerts?search_date_from=2017-4-01

[公式] 新日本フィルハーモニー交響楽団 – New Japan Philharmonic -, 『財務情報／アニュアルレポート（年次報告書）』、2018年7月1日閲覧。

<https://www.njp.or.jp/wp-content/uploads/2018/03/2011annualreport.pdf>

<https://www.njp.or.jp/wp-content/uploads/2018/03/2012annualreport.pdf>

<https://www.njp.or.jp/wp-content/uploads/2018/03/2013annualreport.pdf>

<https://www.njp.or.jp/wp-content/uploads/2018/03/2014annualreport2.pdf>

<https://www.njp.or.jp/wp-content/uploads/2018/03/2015annualreport.pdf>

<https://www.njp.or.jp/wp-content/uploads/2018/03/2016annualreport.pdf>

<https://www.njp.or.jp/wp-content/uploads/2018/03/2017-2018seasonprogram-5-1.pdf>

サントリーホール、『公演アーカイブ』、2018年7月1日閲覧。

https://www.suntory.co.jp/suntoryhall/archive/list.html?keywords=%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E4%BA%A4%E9%9F%BF%E6%A5%BD%E5%9B%A3+2012%E5%B9%B4&kwd_and_or=and&list_type=LLA001&list_count=10&title_query=yes
https://www.suntory.co.jp/suntoryhall/archive/list.html?is_pub_mode=1&museum_sub_domain=suntoryhall&kwd_and_or=and&hlvl=1&bunrui=0&uni_museum=&keywords=%E8%AA%AD%E5%A3%B2%E6%97%A5%E6%9C%AC%E4%BA%A4%E9%9F%BF%E6%A5%BD%E5%9B%A3+2012%E5%B9%B4&kwd_and_or=and&search_type=keyword&sort_type=asc&page=1&list_type=LLA&btn_list_type=yes&list_count=10&title_query=no&list_count=50

仙台国際音楽コンクール、『アーカイブ』、2018年6月21日閲覧。

https://simc.jp/archive/1st_simc/piano/#piano-results
https://simc.jp/archive/2nd_simc/piano/#piano-results
https://simc.jp/archive/3rd_simc/piano/#piano-results
https://simc.jp/archive/4th_simc/piano/#piano-results
https://simc.jp/archive/5th_simc/piano/#piano-results
https://simc.jp/archive/6th_simc/piano/#piano-results

全日本学生音楽コンクール、『参加規定』、2018年7月7日閲覧。

<http://gaccon.mainichi-classic.jp/common/entry.shtml#entry2>

全日本学生音楽コンクール、『入賞者一覧』、2018年7月7日閲覧。

<http://gaccon.mainichi-classic.jp/prize/prize4.shtml>
<http://gaccon.mainichi-classic.jp/prize/prize5.shtml>
<http://gaccon.mainichi-classic.jp/prize/prize6.shtml>
<http://gaccon.mainichi-classic.jp/prize/prize7.shtml>

高松国際ピアノコンクール、『過去のコンクール』、2018年6月22日閲覧。

<http://www.tipc.jp/archives01.html>
<http://www.tipc.jp/archives02.html>
<http://www.tipc.jp/archives03.html>

東京オペラシティ、『コンサートカレンダー』、2018年7月1日閲覧。

<https://www.operacity.jp/concert/calendar/search.php?keyword=%E6%9D%B1%E4%BA%AC%E3%82%B7%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%BB%E3%83%95%E3%82%A3%E3%83%AB&x=27&y=12>

東京交響楽団 Tokyo Symphony Orchestra、『コンサート情報 - カレンダー・コンサート検索』⁴⁵、2018年7月1日閲覧。http://tokyosymphony.jp/pc/concerts/quick_search

東京シティ☆フィルのブログ、『練馬区中学校オーケストラ鑑賞教室2日目』、2018年7月1日閲覧。<http://tokyocityphil.blog66.fc2.com/?date=201207>

東京都交響楽団 Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra、『東京都交響楽団創立50周年記念コンサートアーカイブ』、2018年7月1日閲覧。<https://www.tmsso.or.jp/j/archive/>

東京フィルハーモニー交響楽団 Tokyo Philharmonic Orchestra 公式サイト、『財団概要』、2018年7月2日閲覧。

http://tpo.or.jp/etc/outline/pdf/H23_houkoku.pdf
http://tpo.or.jp/etc/outline/pdf/H24_houkoku.pdf
http://tpo.or.jp/etc/outline/pdf/H25_houkoku.pdf
http://tpo.or.jp/etc/outline/pdf/H26_houkoku.pdf
http://tpo.or.jp/etc/outline/pdf/H27_houkoku.pdf
http://tpo.or.jp/etc/outline/pdf/H28_houkoku.pdf
http://tpo.or.jp/etc/outline/pdf/H29_keikaku.pdf

⁴⁵ カレンダーコンサート検索 から 詳しい検索条件を指定する を選択し、公演日を設定して検索した。

日本オーケストラ連盟、『オーケストラニュース vol. 81』、2018年7月1日閲覧。
http://www.orchestra.or.jp/orchestraneews_vol81/pdf/012.pdf

日本オーケストラ連盟、『コンサート情報』、2018年7月1日閲覧。
<http://www.orchestra.or.jp/concerts/tokyo-city-philharmonic-orchestra/47/>
<http://www.orchestra.or.jp/concerts/tokyo-city-philharmonic-orchestra/48/>
<http://www.orchestra.or.jp/concerts/tokyo-city-philharmonic-orchestra/51-1/>

日本音楽コンクール、『参加規定』、2018年7月7日閲覧。
<http://oncon.mainichi-classic.jp/common/entry3.shtml>

日本音楽コンクール、『入賞者一覧』、2018年7月7日閲覧。
<http://oncon.mainichi-classic.jp/prize/prize7.shtml>
<http://oncon.mainichi-classic.jp/prize/prize8.shtml>
<http://oncon.mainichi-classic.jp/prize/prize9.shtml>

日本センチュリー交響楽団、『コンサート 過去の定期演奏会』、2018年7月4日閲覧。
<http://www.century-orchestra.jp/concert/2013.html>
<http://www.century-orchestra.jp/concert/2014.html>
<http://www.century-orchestra.jp/concert/2015/>
<http://www.century-orchestra.jp/concert/2016/>
<http://www.century-orchestra.jp/concert/2017/>

日本センチュリー交響楽団、『コンサート 過去の特別演奏会』、2018年7月4日閲覧。
http://www.century-orchestra.jp/concert/special_2011.html
http://www.century-orchestra.jp/concert/special_2012.html
http://www.century-orchestra.jp/concert/special_2013.html
http://www.century-orchestra.jp/concert/special_2014.html
<http://www.century-orchestra.jp/concert/special/2015/>
<http://www.century-orchestra.jp/concert/special/2016/>
<http://www.century-orchestra.jp/concert/special/2017/>

日本センチュリー交響楽団、『コンサートスケジュール その他の演奏会』、2018年7月4日閲覧。
http://www.century-orchestra.jp/concert/others_2011.html
http://www.century-orchestra.jp/concert/others_2012.html
http://www.century-orchestra.jp/concert/others_2013.html
http://www.century-orchestra.jp/concert/others_2014.html
<http://www.century-orchestra.jp/concert/others/2015/>
<http://www.century-orchestra.jp/concert/others/2016/>
<http://www.century-orchestra.jp/concert/others/2017/>
<http://www.century-orchestra.jp/concert/others/2018/>

日本フィルハーモニー交響楽団、『これまでの演奏会』、2018年7月2日閲覧。
<https://www.japanphil.or.jp/concert/history/2012>
<https://www.japanphil.or.jp/concert/history/2013>
<https://www.japanphil.or.jp/concert/history/2014>
<https://www.japanphil.or.jp/concert/history/2015>
<https://www.japanphil.or.jp/concert/history/2016>
<https://www.japanphil.or.jp/concert/history/2017>

浜松国際ピアノコンクール、『過去のコンクール』、2018年6月21日閲覧。

<http://www.hpic.jp/hipic/history/5th/>

<http://www.hpic.jp/hipic/history/6th/>

<http://www.hpic.jp/hipic/history/7th/>

<http://www.hpic.jp/hipic/history/8th/>

<http://www.hpic.jp/hipic/history/9th/>

パシフィック・コンサート・マネジメント、『国内アーティスト』、2018年9月2日閲覧。

<http://www.pacific-concert.co.jp/domestic.html>

ピアニスト桑原志織オフィシャルホームページ!、『Profile』、2018年8月24日閲覧。

<http://shiori-kuwahara-piano.jimdo.com/profile-1/>

ピティナ・ピアノホームページ、『開催要項』、2018年7月7日閲覧。

<https://compe.piano.or.jp/about/regulation.html>

ピティナ・ピアノホームページ、『過去の結果』、2018年7月7日閲覧。

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1997.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1998.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1999.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/2000.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/2001.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/2002.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/2003.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/2004.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/2005.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/2006.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/2007.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/2008.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/2009/>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/2010/>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/2011/>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/2012/>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/2013/>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/2014/>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/2015/>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/2016/>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/>

ピティナ・ピアノホームページ、『恒例!今年の「ピアノ男子」の割合は...?』、2018年8月14日

閲覧。http://www.piano.or.jp/step/news/2014/06/13_18112.html

ピティナ・ピアノホームページ、『全国決勝大会過去の記録』、2018年7月7日閲覧。

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1977.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1978.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1979.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1980.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1981.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1982-1.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1983.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1984.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1985.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1986.html>

<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1987.html>
<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1988.html>
<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1989.html>
<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1990.html>
<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1991.html>
<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1992.html>
<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1993.html>
<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1994.html>
<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1995.html>
<http://www.piano.or.jp/compe/result/archive/1996.html>

ピティナ・ピアノホームページ、『東京シティフィルコンサート』、2018年7月1日閲覧。
<http://www.piano.or.jp/concert/yp/tokyocityphil/>

ピティナ・ピアノホームページ、『浜コン：カン・チュンモ先生特別インタビュー、ファイナリスト3名を出した世界最高峰の教授に聞く。』、2018年8月11日閲覧。
http://www.piano.or.jp/report/04ess/ham/2009/11/21_9824.html

ミリオンコンサート協会、『アーティスト（ピアノ）』、2018年9月2日閲覧。
<http://www.millionconcert.co.jp/artist/piano.html>

ミリオンコンサート協会、『佐藤彦大』、2018年8月24日閲覧。
http://www.millionconcert.co.jp/artist/piano/profile/sato_h.html

2. 事実の確認目的に閲覧したサイト（一覧のみ）

【2018年6月23日閲覧・確認分】

<http://afia.info/%E5%B1%B1%E6%9C%AC%E4%BA%9C%E5%B8%8C%E5%AD%90-3/>
<http://akikonikami.com/html/about.php>
<http://chopinsocietyhk.com/pastevents/yonk.htm>
http://data.bnf.fr/14541294/winston_choi/
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/2987>
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/6367>
http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7351_Mamikon_Nakhapetov
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7431>
<http://eng.liszt.art.pl/?komarov-alexei,269>
<http://fracademic.com/dic.nsf/frwiki/819170>
<http://kawai-kmf.com/concert-info/2003/12.17/>
<http://kawai-kmf.com/concert-info/2009/09.05/>
<http://lilitgrigoryan.com/german/>
http://lipatti-evenings.ro/wp/?page_id=468
<http://ml.naxos.jp/artist/94384>
<http://moger.it/roberto-plano/>
<http://muk-akademie.de/klavier/106-natalia-zagalskaia>
<http://munetsuguhall.blog8.fc2.com/blog-entry-1251.html>
<http://naxos.jp/profile/fukuma>
<http://recochoku.jp/song/S1002270267/>
<http://tch15.medici.tv/en/artist/dmitry-onishchenko>
<http://topoftheworld.no/contestant-13-yun-yang-lee/>
<http://topoftheworld.no/contestant-17-evgeny-starodubtsev/>

<http://www.aglaemusica.com/web/artista/hyo-sum-lim/>
<http://www.alexanderromanovsky.com/>
http://www.arkivmusic.com/classical/album.jsp?album_id=502941
<http://www.associazioneleopardi.it/musica/CONCERTISTI/PIANOFORTE/DI%20BELLA/dibella.htm>
<http://www.bach-cantatas.com/Bio/Stadtfeld-Martin.htm>
<http://www.blechacz.net/en-home>
<http://www.bolognatoday.it/eventi/concerti/pianoro-pianista-annalisa-londero.html>
http://www.chinadaily.com.cn/cndy/2006-09/16/content_690237.htm
<http://www.chineseperformingarts.net/contents/festival/2008/calendar/20080815b.pdf>
<http://www.circuitomusica.it/associazionesilver>
<http://www.civp.com/messiaen/biographies/amirov.htm>
http://www.concert.co.jp/artist/ilya_rashkovskiy/
<http://www.concours-international-piano-epinal.org/fr/histoire.php?annee=2003&part=laur>
http://www.cypres-records.com/reine-elisabeth/fr_new/laureats.html
<http://www.dariarabotkina.com/m-biography.php>
<http://www.deborahleepianist.com/>
<http://www.domenicocodispoti.net/biography/>
<http://www.eldia.es/cultura/2005-07-02/3-joven-pianista-ruso-Alexander-Moutouzkine-actua-Santa-Cruz.htm>
<http://www.ellison-stromsholm.com/Gabor-Farkas>
<http://www.emic.ee/irina-zahharenkova>
<http://www.espritudupiano.fr/programme-2010/article/mu-ye-wu>
<http://www.exuberant-trust.org.uk/TomPosterbiog2012.pdf>
<http://www.genie.co.kr/detail/artistInfo?xxnm=80096936>
http://www.giuseppeandaloro.com/index.php?option=com_content&view=article&id=1&Itemid=9
<http://www.hamptons.com/The-Arts/Live-Music-View/10513/The-Rising-Stars-Piano-Recital-Series-Presents.html#.Wy5T8RL7Q0o>
<http://www.herbertschuch.com/en/about/>
<http://www.jacobjakobson.com/en/biography/>
<http://www.jjmmciutadella.com/2003/cn0010.html>
<http://www.kajimotomusic.com/jp/artists/k=66/>
<http://www.kimuraayako.com/profile.html>
http://www.kumon.ne.jp/kumonnow/obog/009_1/
http://www.lamediatheque.be/travers_sons/cmireb_07_arnicane.htm
<http://www.mariacanal.org/en/60concurs/tatianachernichka>
<http://www.mariamasycheva.com/>
<http://www.musicassoluta.com/site/en/artists/artists/piano/sergey-koudriakov.html>
<http://www.musicperformers.lt/Gintaras-Janu%C5%A1evi%C4%8Dius>
<http://www.nicolasstavy.com/en/bio.htm>
<http://www.ogs-imateticaronjgova-ri.skole.hr/koncerti.htm>
<http://www.olgamonakh.com/>
<http://www.pacific-concert.co.jp/foreigner/view/141/>
<http://www.pacific-concert.co.jp/foreigner/view/498/>
<http://www.piano-e-competition.com/ContestantBios2014/CHERNOVAlexey.asp>
<http://www.piano-e-competition.com/contestantbios02/albertmamriev.htm>
<http://www.piano.or.jp/artists/97>
http://www.piano.or.jp/seminar/list/smbb_t_info/112268
<http://www.proarte.co.jp/overseas/2016-2017/Levit.php>
<http://www.russianchambermusic.org/2014-competition-adjudicators/>
<http://www.satirino.fr/fr/artists/ferenc-vizi>
<http://www.sunghoonhwang.com/4.html>
<http://www.symeonidis.de/bio.htm>
http://www.toppanhall.com/concert/artist/KUZNETSOV_Sergey.html
http://www.uh.edu/kgmca/music/faculty-staff/morgulis_t/
<http://www.warnerclassics.com/dong-hyek-lim/bio>

http://www2.biglobe.ne.jp/~kumakyo/jpn/pf_mine.html
<https://en.schott-music.com/shop/autoren/lev-vinocour>
<https://enc.piano.or.jp/persons/5181>
<https://inesasinkevych.wordpress.com/>
<https://jp.yamaha.com/sp/products/musical-instruments/keyboards/pianist-lounge/now/014/>
<https://musicbrainz.org/artist/2ea3d792-6e83-4797-8d7c-210c584cfa57/recordings?standalone=1>
<https://musicbrainz.org/artist/32f04f6d-e3df-4d0d-9c59-eee7d9247cd6>
<https://psta.jp/topics/interview/index2.html>
<https://psta.jp/topics/interview/index8.html>
<https://www.andreaskoenig.es/english/>
https://www.australianpianoaward.com.au/assets/files/documents/Profiles/PROFILE_DANIEL_DE_BORAH.pdf
<https://www.bbc.co.uk/music/artists/93c75877-c152-4b49-b070-46ef20cd6f11>
<https://www.bechstein.com/die-welt-von-bechstein/pianisten/amir-tebenikhin/>
https://www.classicalconnect.com/Matei_Varga/2711
<https://www.clefdesoleil.com/en/artist/siheng-song-2/>
<https://www.curt.de/nbg/inhalt/artikel/11605/43/>
<https://www.discogs.com/artist/5221055-Serhiy-Salov>
<https://www.facebook.com/pg/lilian.akopova.pianist/about/>
<https://www.folkwang-uni.de/home/hochschule/personen/lehrende/vollanzeige/personen-detail/prof-henri-sigfridsson/>
<https://www.gillesvonsattel.com/#bio>
<https://www.hkapa.edu/event/academy-piano-masterclass-with-jinsang-lee>
<https://www.jvcmusic.co.jp/-/Profile/A014209.html>
<https://www.limdongmin.com/biography.html>
<https://www.linkedin.com/in/konstantin-soukhovetski>
https://www.mariinsky.ru/en/company/orchestra/piano/anna_vinnitskaya
<https://www.medien-campus-villa-ida.de/de/konzerte/konzertuebersicht/chenyin-li/>
https://www.naxos.com/person/Massimiliano_Motterle/148509.htm
[https://www.revolv.com/main/index.php?s=Wang%20Li%20\(pianist\)](https://www.revolv.com/main/index.php?s=Wang%20Li%20(pianist))
<https://www.tamarakordzadze.com/>
<https://www.telekom-beethoven-competition.de/en/history/2005/ingmar-schwindt>
<https://www.telekom-beethoven-competition.de/en/history/2007/ilona-timchenko>
<https://www.telekom-beethoven-competition.de/en/jacob-leuschner>
<https://www.youtube.com/watch?v=e1Nx5mW2cvQ>

【2018年6月24日閲覧・確認分】

<http://brakhman.com/english/>
<http://competition.tipc.jp/2nd/index-s=40.html>
<http://deacademic.com/dic.nsf/dewiki/2407500>
<http://deniskozhukhin.com/about/>
<http://diskunion.net/classic/ct/detail/DFN171120-015>
<http://dmitri-demiashkin.ch/ecm/ecm.cgi?c=bio.html&l=ru>
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/cat/3/page/23/id/6577>
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/6566>
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7048>
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7320>
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7336>
http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7345_Eri_Mantani
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7381>
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7575>
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7725>
<http://eng.spdm.ru/nikolay-saratovskiy>
<http://griegcompetition.com/participants/oleksandr-poliykov>
<http://louisschwizgebelpiano.com/>

<http://masa-takada.com/profile/index.html>
<http://ml.naxos.jp/artist/118145>
<http://ml.naxos.jp/artist/210681>
<http://ml.naxos.jp/artist/55424>
<http://ml.naxos.jp/artist/69444>
<http://natocheny.com/joon-kim/>
<http://takashi-yamamoto.com/profile.html>
<http://tamarberaia.com/biography/>
<http://tch15.medici.tv/en/artist/dinara-klinton>
<http://tch15.medici.tv/en/artist/miao-huang>
<http://topoftheworld.no/contestant-20-daniil-tsvetkov/>
<http://web.midc.jp/bunka/event/shousai.php?id=3327>
<http://www.acousence.de/index.php/aartists/280-chao-wang>
<http://www.classical.net/music/recs/reviews/n/nxs54839a.php>
http://www.concert.co.jp/artist/alexej_gorlatch/
<http://www.europapress.es/andalucia/mas-jaen-00988/noticia-pianista-chun-wang-convierte-ganador-59-concurso-internacional-piano-premio-jaen-20170428232041.html>
<http://www.geza-anda.ch/user/view/user/Tatiana+Kolesova/uid/10>
<http://www.klasika.hr/index.php?p=article&id=928>
<http://www.lorenzocossi.it/content/biografia>
<http://www.michaillifits.com/bio>
http://www.nipponartists.jp/artist/ad_04_08.html
http://www.piano.or.jp/report/03edc/pianostage/2007/11/30_7709.html
http://www.pianobleu.com/tristan_pfaff.html
http://www.pianotexas.org/2005/youngartists_participants.asp#Yuan
<http://www.pisarenkovitaly.com/biography.html>
<http://www.russkije.lv/lv/lib/read/a-osokin.html>
http://www.santanderpianocompetition.com/C_Concurso2005_Ganadores.aspx?id=15661
<http://www.sunwookkim.com/about/>
<http://www.takashi-sato.jp/profile.html>
<http://www.wernerheimlich.de/content/kkmk/david-kadouch/>
<http://www6.plala.or.jp/hamatomo/File200105TomomiOkumura.PDF>
<https://aicf.org/artist/yaron-kohlberg/>
https://dukesoftware.appspot.com/pianist/Sara_Daneshpour/
<https://geniusas.com/>
<https://hc.sk/hudba/osobnost-detail/283-matej-arendarik>
https://jp.yamaha.com/sp/products/musical-instruments/keyboards/pianist-lounge/column/salzburg_diary/vol11.html
<https://musicbrainz.org/artist/d9306c1c-fcfd-4383-bd91-594015b57b9f>
<https://musicbrainz.org/artist/e5d6f9e8-addf-47f9-af80-efd014760a1f>
https://performingarts.ufl.edu/wp-content/uploads/2010/05/UFGPA_Dank_program.pdf
<https://www.allmusic.com/artist/zhang-zuo-zee-zee-mn0003667798>
<https://www.bechstein.com/die-welt-von-bechstein/pianisten/mizuka-kano/>
https://www.classicalconnect.com/Stanislav_Khristenko/5554
https://www.concoursgeneve.ch/laureate/hyo_joo_lee
<https://www.discogs.com/artist/3106121-Chu-Fang-Huang>
<https://www.facebook.com/events/111673855968396>
<https://www.hellostage.com/profile/1134/biography>
<https://www.jegy.hu/program/yulianna-avdeeva-zongoraestje-51692>
<https://www.mariinsky.ru/en/company/orchestra/piano/lubyantsev>
<https://www.medici.tv/en/artists/jun-hee-kim/>
<https://www.medici.tv/en/artists/khatia-buniatishvili/>
<https://www.mundoclasico.com/articulo/13411/El-espa%C3%B1ol-Josu-De-Solaun-gana-el-Primer-Premio-del-1st-European-Union-Piano-Competition>
https://www.naxos.com/person/Mladen_Colic/139211.htm
<https://www.operamusica.com/artist/jue-wang/#biography>

<https://www.romain-descharmes.com/biographie.php>
<https://www.sarahsoyeonkim.com/en/profile/13481/biography/biography>
<https://www.telekom-beethoven-competition.de/de/preistraeger/2007/keiko-hattori>
<https://www.telekom-beethoven-competition.de/en/history/2009/esther-park>
<https://www.telekom-beethoven-competition.de/en/history/2011/li-chun-su>
<https://www.tfm.co.jp/dreamheart/index.php?catid=1745&itemid=126648>
<https://www.toutpourlesfemmes.com/archive/concours-international-de-piano-miyeon-lee>
[https://www.unog.ch/unog/website/calendar_archive.nsf/\(httpInternal-Cultural-Daily-en\)/C125763B004E59C1C12574C600560410?OpenDocument&cntxt=48388&cookielang=fr](https://www.unog.ch/unog/website/calendar_archive.nsf/(httpInternal-Cultural-Daily-en)/C125763B004E59C1C12574C600560410?OpenDocument&cntxt=48388&cookielang=fr)
<https://www.varvara-piano.com/biography/%D1%80%D1%83%D1%81%D1%81%D0%BA%D0%B8%D0%B9/>

【2018年6月25日閲覧・確認分】

<http://antoniibaryshevskiy.com/biographi/>
http://artlink.rs/index.php?option=com_k2&view=item&id=211:concert-maria-machowska-violin-zoltan-fejervari-piano-and-uki-ovaskainen-piano&lang=sr
<http://delphianrecords.co.uk/person/oxana-shevchenko/>
http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7308_Soo_Jung_Ann
http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7311_Wai_Ching_Rachel_Cheung
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7317>
http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7382_Eric_Zuber
<http://eng.spdm.ru/galina-chistyakova>
<http://mariacanal.org/mm/file/winner%20english.pdf>
http://marievermeulin.com/01_PAGES/04_Biographie_Anglais.htm
<http://ml.naxos.jp/artist/171406>
<http://music.yale.edu/2015/06/18/pianist-ronaldo-rolim-wins-third-prize-geza-anda-international-competition/>
<http://natocheny.com/stephanie-proot/>
<http://pasapas-edu.com/archives/641>
<http://pianoinforum.blogspot.com/2013/04/dmitri-levkovich.html>
http://simc.jp/en/compe/piano/contestants/p_11_e/
<http://tch15.medici.tv/en/performance/round-1-piano-june-16-1200>
<http://tower.jp/item/2605594/Mozart%EF%BC%9A-Sonates-pour-Piano-Integrale---Francois-Dumont>
<http://www.apartemusic.com/artists/giulio-biddau/>
<http://www.auroramusic.se/marko-mustonen/>
<http://www.christian-chamorel.ch/page1/page3/page3.html>
<http://www.concours-international-piano-epinal.org/en/histoire.php?annee=2009>
http://www.culturepolonaise.eu/3,2,504,en,Mateusz_Borowiak_3rd_place_at_the_Concours_Reine_Elisabeth_at_Flagey
<http://www.filharmonia.sk/wp-content/uploads/2013/12/Archi%CC%81v-6.roc%CC%8Cni%CC%81k-bulletin.pdf>
<http://www.institut-fuer-bildnerisches-denken.de/lebedev.htm>
<http://www.kanzenarts.com/agency.php?view=news&nid=9262>
<http://www.kingrecords.co.jp/cs/artist/artist.aspx?artist=42262>
<http://www.lastampa.it/2017/01/01/cultura/il-pianista-romantico-che-conquist-maazel-7z4pS9SdvU2btCsmMjIEIM/pagina.html>
<http://www.mayumisakamoto.com/press.html>
http://www.musicweb-international.com/classrev/2006/Dec06/Chopin_15th_DUX0068_DUX0066.htm
http://www.osaka-geidai.ac.jp/geidai/departments/musicpaformance/topics_05.html
<http://www.philharmonia.spb.ru/en/persons/biography/62589/>
http://www.piano-en-valois.fr/?page_id=574
http://www.piano.or.jp/report/04ess/livereport/2011/03/25_14343.html
<http://www.pianomemorial.rs/4.memorijal/engleski/gala/linzi.php>
http://www.santanderpianocompetition.com/documentosWeb/Huh_bio_EN.pdf
<http://www.talent-unlimited.org.uk/profile70.html>
<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~juna/private/File0004.PDF>
<https://enc.piano.or.jp/persons/5208>
<https://jp.yamaha.com/sp/products/musical-instruments/keyboards/pianist-lounge/interview/006/index.html>
<https://jp.yamaha.com/sp/products/musical-instruments/keyboards/pianist-lounge/hope/005/>
<https://lagazellelfa.wordpress.com/2014/10/17/concert-shinnosuke-inugai/>

<https://pavelkolesnikov.wordpress.com/biography/>
<https://rateyourmusic.com/artist/ilya-poletaev>
<https://www.bachauer.com/people/kotys-vasyl>
https://www.escuelasuperiordemusicareinasofia.es/E_Biografia_pdf.aspx?IdPersona=285&idAA=0
https://www.gsmd.ac.uk/music/news/view/article/ukrainian_pianist_sasha_grynyuk_wins_the_2008_guildhall_gold_medal/
https://www.hcf.or.jp/support/data/result/25_2h/07.pdf
<https://www.imaenharmonia.com/anna-bulkina>
<https://www.jianingkong.com/biography>
<https://www.jongdoan.com/biography>
https://www.kravag.de/ka/kravag/ueber_uns/soziales_engagement/adagio-im-auto/fabio_martino.html
<https://www.kronbergacademy.de/en/artists/person/jong-hai-park/>
<https://www.lukaokros.com/bio>
https://www.mariinsky.ru/en/company/orchestra/piano/alexander_schimpf
<https://www.mariinsky.ru/en/company/orchestra/piano/cho>
<https://www.mariinsky.ru/en/company/orchestra/piano/mndoyants>
<https://www.masimas.com/en/masimas-festival/concert/ilya-maximov>
<https://www.medici.tv/en/artists/zheeyoung-moon/>
<https://www.meesterpianisten.nl/hannes-minnaar/?lang=en>
<https://www.musikakademie.li/Person.aspx?nid=10595&group=0&lang=en&showVideo=1000&id=294>
https://www.naxos.com/person/Duanduan_Hao/130966.htm
<https://www.stepansimonian.com/biography/>
<https://www.telekom-beethoven-competition.de/de/wettbewerb/teilnehmer/georgy-tchaidze>
<https://www.universal-music.co.jp/daniil-trifonov/biography/>
<https://www.vietrisalernopianocompetition.it/15th-a-napolitano-piano-competition/prizewinners/>

【2018年6月26日閲覧・確認分】

<http://destounispiano.com/curriculum/>
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7330>
<http://majlindcompetition.fi/en/18-lasarcina-viviana-pia/>
<http://ml.naxos.jp/artist/258850>
<http://music-toronto.com/piano/seanchen.htm>
<http://tch15.medici.tv/en/artist/andrey-dubov>
<http://tch15.medici.tv/en/artist/jeung-beum-sohn>
<http://topoftheworld.no/contestant-16-akihito-okuda/>
<http://www.camimusic.com/alexander-ullman/>
http://www.chopinsocietyhk.org/piano_competition_2011/contestants.htm
http://www.concorsoviotti.it/news.php?id=081b88b46bb00e806f750d273db4a2fd&id_news=537cef8290e0192e8be5ad6e8598866f&Example_Session=dcae8432936971b2cecf4c4e22bad90
<http://www.concours-international-piano-epinal.org/en/histoire.php?annee=2013&part=laur&envoi=Valider>
<http://www.liszt.nl/pages/minsoo-hong-169>
<http://www.mariacanal.org/en/60concursergeybelyavskiy.html>
<http://www.musicalsummer.eu/tatiana-dorokhova.html>
http://www.santanderpianocompetition.com/documentosWeb/Ahn_bio_EN.pdf
<http://zakbk.hu/nicolas-namoradze>
<https://jp.yamaha.com/sp/products/musical-instruments/keyboards/pianist-lounge/hope/013/>
<https://reinicke-artists.com/florian-noack/>
<https://topoftheworld.no/team/artem-yasynskyy/>
<https://www.allmusic.com/artist/martyna-jatkauskaitė-mn0002675141/biography>
<https://www.americanpianists.org/classical/finalists/17-classical/finalists/71-henry-kramer>
<https://www.americanpianists.org/classical/finalists/17-classical/finalists/70-steven-lin>
<https://www.bachauer.com/people/gugin-andrey>
<https://www.bbc.co.uk/music/artists/7a58a476-c72c-4288-989e-cbb1377f5a3f>
<https://www.francemusique.fr/personne/remi-geniet>
<https://www.hfm-weimar.de/ueber->

uns/detailsicht.html?tx_jobase_pi2%5BjoNewsDetail%5D=1161&tx_jobase_pi2%5BjoRefererId%5D=580&tx_jobase_pi2%5Baction%5D=news&tx_jobase_pi2%5Bcontroller%5D=Elements&cHash=4f7c7f1dee06ca576cae361430e0ce7f&type=123
<https://www.japanarts.co.jp/artist/BeatriceRANA>
<https://www.mariinsky.ru/en/company/orchestra/piano/mazo>
https://www.mariinsky.ru/en/company/orchestra/piano/yekwon_sunwoo
<https://www.telekom-beethoven-competition.de/de/georgy-voylochnikov>
<https://www.telekom-beethoven-competition.de/en/joo-hyeon-park>

【2018年6月27日閲覧・確認】

<http://chopincompetition2015.com/competitor/a05238fc-8187-4a4e-a681-667483445cf5?lang=en>
<http://cultura.estepona.es/concierto-piano-michael-davidov/>
http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/7333_Airi_Katada
<http://eng.spdm.ru/alexey-sychev>
<http://enriquelapaz.com/about-enrique/>
<http://jonathanfournel.com/index.php/en/biography/>
<http://keitakumi.com/biography-jp.html>
<http://majlindcompetition.fi/en/9-in-so-hyang/>
<http://muk-akademie.de/preise/62-lehrer/klavier>
<http://tch15.medici.tv/en/artist/jiayan-sun>
<http://tch15.medici.tv/en/artist/mikhail-berestnev>
http://tetianashafran.com/?page_id=1268
<http://tomohirohatta.blog74.fc2.com/blog-28.html>
<http://victoriavassilenko.com/biography-en.html>
<http://www.brusselpianofestival.com/heejae-kim-bio/>
<http://www.deutsche-stiftung-musikleben.de/stipendiaten/solistenMaske.html?TID=20020927174147>
http://www.elfrun-gabriel.com/cms/upload/pdf/Biographie_Uikyung_Jung.pdf
<http://www.geza-anda.ch/user/view/user/Aleksandr-Shaikin/uid/91>
<http://www.instantencore.com/contributor/bio.aspx?CID=5124172>
<http://www.newsdigest.de/newsde/person/genseki/3250-sonoko-ishii.html>
<http://www.piano.or.jp/concert/yp/oji/2009/prf.html>
http://www.pro-musica.com/wa_files/palmares_piano_2012.pdf
<http://www.twopianists.com/Artists/vondracek.html>
<https://jp.yamaha.com/sp/products/musical-instruments/keyboards/pianist-lounge/hope/008/>
<https://livingroomcafe.jp/event/%E3%80%90%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%83%87%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%81%E3%83%BB%E3%82%AF%E3%83%A9%E3%82%B7%E3%83%83%E3%82%AF%E3%80%91%E9%98%AA%E7%94%B0%E7%9F%A5%E6%A8%B9>
<https://musicbrainz.org/artist/b5f8aa31-bbde-4c2a-81bf-74fdd48524ec>
<https://topoftheworld.no/team/dmitry-shishkin/>
<https://topoftheworld.no/team/hans-h-suh/>
<https://www.akihiro-sakiya.com/biography-j.html>
<https://www.aljosa-jurinic.com/press.html>
<https://www.audaud.com/luca-baratto-live-at-honens-works-of-schumann-debussy-prokofiev-ligeti-lutoslawski-mozart-hindemith-others-honens-2-cds/>
<https://www.concoursobusoni.it/en/artist?id=352>
<https://www.concoursobusoni.it/en/laureates-busoni-festival?id=468>
https://www.concoursgeneve.ch/laureate/honggi_kim
<https://www.forumclasico.es/RITMOOnLine/DiscoParalahistoria/tabid/118/ID/11755/LISZT-Musica-completa-para-piano-Vol-45-12-Grandes-estudios-S-137.aspx>
https://www.naxos.com/person/Yutong_Sun/191327.htm
<https://www.operamusica.com/artist/dmitry-mayboroda/#biography>
<https://www.operamusica.com/artist/hao-zhu/#biography>
<https://www.telekom-beethoven-competition.de/en/history/2011/alexander-bernstein>
<https://www.wcom.org.uk/yeoman/alexander-panfilov/>

【2018年6月28日閲覧・確認】

<http://amicimusicafirenze.it/events/leonardo-colafelice-pianoforte/>

<http://chopin-society-japan.com/chopin-festival2015/05.30-2/>
<http://chopin2015.medici.tv/en/candidate/kate-liu>
<http://chopincompetition2015.com/competitor/b3cc2903-94dd-478f-9c92-889e8479bc38>
<http://chopincompetition2015.com/competitor/de99f15e-3eb1-4b42-85b4-a10431d1e88f>
<http://en.chopin.nifc.pl/chopin/persons/detail/id/932>
<http://griegcompetition.com/participants/anastasia-rizikov>
<http://griegcompetition.com/participants/yoshito-numasawa>
<http://kawai-kmf.com/concert-info/2013/04.02/>
<http://ml.naxos.jp/artist/305288>
<http://onsevilla.com/2013/05/juan-carlos-fernandez-nieto-maestranza-sevilla.html>
<http://pianocompetition.kz/index.php?id=427>
<http://portlandpiano.org/yejinnoh/>
http://simc.jp/compe/piano/contestants/p_14_j/
http://simc.jp/compe/piano/contestants/p_28_j/
http://simc.jp/en/compe/piano/contestants/p_22_e/
<http://stream.filharmonia.sk/hummel2017/list-of-participants/>
<http://www.albertoferro.eu/bio.php>
<http://www.allegrovivo.org/en/piano-competition/2016/pianists-up-to-30/candidate-personal-files/chon-sae-yoon>
<http://www.apartemusic.com/artists/guillaume-bellom-ismael-margain/>
<http://www.art-center.jp/tokyo/piano-con/piano-con-kekka4.htm>
http://www.concert.co.jp/artist/daniel_hsu/
<http://www.deutsche-stiftung-musikleben.de/stipendiaten/solistenMaske.html?TID=20100908120512>
<http://www.ezoe-mf.or.jp/music/kuwahara.html>
<http://www.ezoe-mf.or.jp/music/mukawa.html>
<http://www.kanemo.co.jp/wp/wp-content/uploads/2015/12/a6893a9d4be03c7debfb7505a642a3e.pdf>
http://www.kcuu.ac.jp/profile/interview/music_11_kinoshita_1/
<http://www.knsclassical.com/artist/caterina-grewe/>
<http://www.pianotexas.org/2016/youngartistsperformers.asp>
<http://www.sydney pianocompetition.com.au/2016-competitors/park-woogil>
<http://www.tch.gr/default.aspx?lang=en-GB&page=44&id=3575>
<http://zeneiversenyek.hu/versenyzok/>
<https://concoursmontreal.ca/en/competitors/jinhyung-park/>
https://jp.yamaha.com/sp/products/musical-instruments/keyboards/pianist-lounge/column/tomoyo_umemura/
<https://topoftheworld.no/team/bolai-cao/>
<https://topoftheworld.no/team/dina-ivanova/>
<https://www.americanpianists.org/classical/finalists/17-classical/finalists/68-alex-beyer>
<https://www.amicimusicapadova.org/musicisti/giuseppe-guarrera/>
https://www.ccfj.com/hall/gala/15_ito.html
<https://www.concorsobusoni.it/en/laureates-busoni-festival?id=460>
https://www.concoursgeneve.ch/laureate/chloe_ji_yeong_mun
<https://www.facebook.com/KerikeriInternationalPianoCompetition/posts/790222394323358>
<https://www.gresham.ac.uk/professors-and-speakers/florian-mitrea/>
<https://www.hkfo.org/en/article/Aristo-Sham/12/246/>
<https://www.japanarts.co.jp/artist/MaoFUJITA>
<https://www.kawai.jp/event/detail/315/>
https://www.kyotoconcerthall.org/contents/fc_kconcert_hall/files/20160804%E3%82%A2%E3%83%A9%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%83%88%E3%83%81%E3%83%A9%E3%82%B7.pdf
<https://www.medici.tv/en/artists/daumants-liepins/>
<https://www.musikakademie.li/Person.aspx?nid=10636&group=0&lang=en&id=41>
<https://www.neampianofestival.ro/danielciobanu/>
<https://www.romanlopatsynskyi.com/about>
<https://www.schmittmusic.com/blog/2016/12/12/kenneth-broberg-in-concert-schmitt-music-edina/>
<https://www.takuyaotakipiano.com/profil/>

【2018年8月20日閲覧・確認分】

<http://akikonikami.com/html/about.php?psi=31>
<http://la-belle-saison.com/akiko-yamamoto-2/>
<http://mami-hagiwara.net/profile/>
<http://takashi-yamamoto.com/profile.html>
<http://tomomiokumura.com/profile.html>
<http://www.hirasaoffice06.com/artists/view/95>
<http://www.hirasaoffice06.com/artists/view/97>
<http://www.kajimotomusic.com/jp/artists/k=40/>
<http://www.kawai.jp/event/detail/3151/>
<http://www.kimuraayako.com/profile.html>
http://www.kotarofukuma.com/files/pdf/8_Kotaro%20Fukuma%20Bio%20EN%2017.pdf
<http://www.makookmt.com/Profile.html>
<http://www.masa-takada.com/profile/index.html>
<http://www.mayumisakamoto.com/prof.html>
http://www.millionconcert.co.jp/artist/piano/profile/sato_h.html
http://www.mizukakano.com/MizukaKano_BioDL.pdf
<http://www.motoi-kawashima.com/mprofile.html>
<http://www.nobupiano1988.com/profile/>
<http://www.takashi-sato.jp/profile.html>
http://www.tipc.jp/news/article/%E7%AC%AC%EF%BC%92%E5%9B%9ETIPC_%E7%AC%AC%EF%BC%92%E4%BD%8D_%E7%9F%B3%E6%9D%91_%E7%B4%94%E3%83%94%E3%82%A2%E3%83%8E%E3%83%BB%E3%83%AA%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%82%BF%E3%83%AB%E9%96%8B%E5%82%AC%E3%81%AE%E3%81%94%E6%A1%88%E5%86%85%E2%99%AA
<http://www.yamaha-mf.or.jp/art/official/yuriemiura/profile/>
<http://www.yokokikuchipf.com/profile/index.html>
<http://www.yumaosaki.com/profile.html>
<http://ykpianoforte.com/profile.php>
<https://enc.piano.or.jp/persons/5148>
<https://jp.yamaha.com/sp/products/musical-instruments/keyboards/pianist-lounge/hope/006/>
<https://pianoinugai.com/shinnosuke-inugai-biography/>
<https://shiori-kuwahara-piano.jimdo.com/profile-1/>
<https://www.actcity.jp/hacam/PianoAcademy/20thAnniversary/profile/goto.php>
<https://www.akihiro-sakiya.com/biography-j.html>
<https://www.japanarts.co.jp/artist/AyakoUEHARA>
<https://www.japanarts.co.jp/artist/HisakoKAWAMURA?lang=2>
<https://www.japanarts.co.jp/artist/TomokiSAKATA>
<https://www.maofujita.com/biography/>
<https://www.nakagirinozomi.com/profile-1/>
<https://www.takuyaotakipiano.com/profil/>